

# 道正遺跡 第2・3・4次調査 岡崎遺跡 第4・5次調査

－ 主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う  
道正遺跡第2・3・4次、岡崎遺跡第3・4次発掘調査報告書 －

本文編

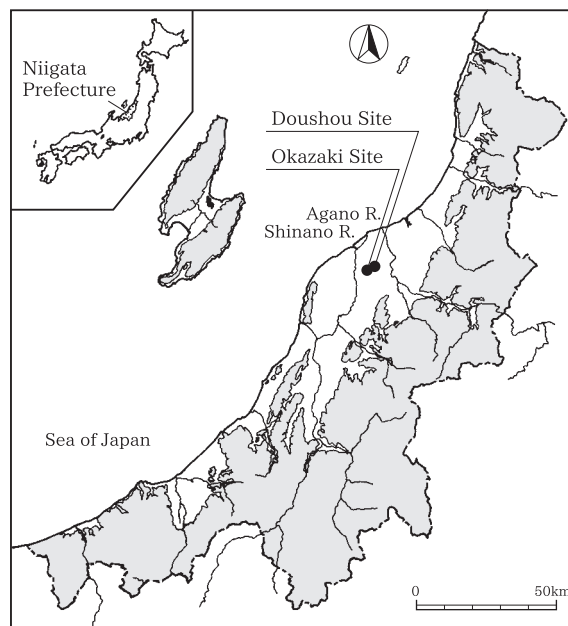
2024

新潟市教育委員会

どう しょう  
道正遺跡 第2・3・4次調査  
おか ざき  
岡崎遺跡 第4・5次調査

一 主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う  
道正遺跡第2・3・4次、岡崎遺跡第3・4次発掘調査報告書 一

本文編



2024

新潟市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は新潟県新潟市江南区割野字道正 2868 ほかに所在する道正遺跡（新潟市遺跡番号 795）の第 2・3・4 次、新潟県新潟市江南区割野字岡崎 3875 ほかに所在する岡崎遺跡（新潟市遺跡番号 794）の第 4・5 次発掘調査記録である。
- 2 調査は新潟市土木部東部地域土木事務所が実施する主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事に伴い、新潟市教育委員会（以下「市教委」という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センター）が行った。
- 3 道正遺跡は令和元（2019）・2・3 年度、岡崎遺跡は令和 2（2020）・3 年度に発掘調査と整理作業、令和 4・5 年度に整理作業、令和 5 年度に報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章に記した。なお、道正遺跡は各年度の調査区が重複または連続しているため、3 か年分をまとめて第四章で報告する。岡崎遺跡については調査地点が異なるため第 4 次調査を第 V 章、第 5 次調査を第七章で報告する。そのため図版においては第 4 次分に調査年（西暦）の下 2 桁「20」を付し、第 5 次分に「21」を付して区別した。
- 4 出土物及び調査・整理作業に係る記録類は、一括して市文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の編集は奈良佳子・高橋保雄・植田尚子（市文化財センター）が行った。道正遺跡の遺構図版及び遺構写真図版の作成は高橋が行い、遺物図版及び遺物写真図版の作成は相田泰臣・奈良・八藤後智人・山寄一貴・遠藤恭雄・高橋（市文化財センター）、金内 元・櫻井和哉（株式会社ノガミ）が行った。20 岡崎遺跡の遺構図版及び遺構写真図版の作成は櫻井が行い、遺物図版及び遺物写真図版の作成は奈良・山寄・高橋が行った。21 岡崎遺跡の遺構図版及び遺構写真図版の作成は遠藤・山寄が行い、遺物図版及び遺物写真図版の作成は遠藤・山寄・奈良が行った。

本文の執筆分担は以下のとおりである。

第 I・II 章、第三章第 2・3 節を遠藤、第三章第 1 節を山寄・奈良、第四章第 1・2・3 節、第四章第 4 節 E・F・G・H・I、第五章第 4 節 C・D・E、第六章第 1 節 A・B・C を高橋、第四章第 4 節 A、第五章第 1・2・3 節を櫻井・奈良、第四章第 4 節 B を八藤後・相田、第六章第 1 節 E を相田、第四章第 4 節 C、第六章第 1 節 F を金内、第四章第 4 節 D、第五章第 4 節 A・B、第六章第 1 節 D を奈良、第七章を遠藤・山寄である。

第四章第 5 節「C 道正遺跡出土の焼骨片について」は、筑前湊木氏（新潟脳外科病院）、矢吹周平氏（大宮中央総合病院）、澤田純明氏・佐伯史子氏・奈良貴史氏（新潟医療福祉大学）にお願いし玉稿を賜った。同じく第六章「第 2 節 墨書土器」については、相澤 央氏（帝京大学文学部）にお願いし玉稿を賜った。

第四章第 5 節 A・B の自然科学分析は株式会社古環境研究所、株式会社加速器分析研究所に分析・執筆を委託し、奈良が編集した。また第五章第 5 節 A・B・C の自然科学分析は株式会社古環境研究所に分析・執筆を委託し、櫻井・奈良が編集した。
- 6 第二章第 1～3 節については、『日水遺跡Ⅱ』〔立木・細野<sup>ほか</sup>2013〕、『筑木遺跡第 3 次調査』〔龍田<sup>ほか</sup>2018〕から一部引用・加筆して掲載した。
- 7 本書に掲載した写真の撮影者は、写真図版 1 が米軍（国土地理院発行）、写真図版 2 が新潟市、空中写真が株式会社イビソク、それ以外の遺構写真は遠藤・山寄・高橋（文化財センター）、藤本隆之・櫻井・山中悟朗・武部喜充・小村正之（株式会社ノガミ）である。遺物写真は山寄・奈良・高橋、櫻井・金内が行い、古墳時代土師器船線刻土器写真は有限会社不二出版が、これ以外の集合カラー写真は山寄が担当した。
- 8 遺構図・遺物出土微細図等の測量トレースは株式会社イビソク、遺物実測図のデジタルトレース及び DTP ソフトによる各種版下の作成は有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿した。
- 9 今回の調査成果については、これまで現地説明会資料（令和元年 10 月 19 日・令和 2 年 10 月 10 日・令和 3 年 6 月 12 日）や新潟市遺跡発掘調査速報会 2019〔立木 2020〕・同 2020〔高橋 2021a〕・同 2021〔高橋 2022〕、新潟県考古学会第 33 回大会〔高橋 2021b〕で発表している。報告書と齟齬のある場合は、本報告書をもって正とする。
- 10 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関からご指導・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げます。

相澤 央・荒川隆史・石川日出志・石黒立人・卜部厚志・小野本敦・春日真実・加藤 学・菊地芳朗・木島 勉・小林昌二・坂井秀弥・笹澤正史・佐藤 俊・柴田昌児・高橋照彦・滝沢規朗・田中祐樹・寺崎裕助・田海義正・戸根与八郎・中島栄一・奈良貴史・橋本博文・久田正弘・古澤妥史・増子正三・村上章久・森岡秀人・吉澤和幸・渡邊裕之

新潟県教育庁文化行政課（令和 4 年度から観光文化スポーツ部文化課）・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 凡 例

- 1 本書は本文編、図面図版・写真図版編の2分冊からなるうちの「本文編」である。
- 2 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図等を使用した場合は、原図の作成者・作成年を示した。
- 4 引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した。但し、第IV章第5節、第V章第5節の自然科学分析は別項目で分けて掲載した。
- 5 遺構番号は発掘調査現場で付したものをを用いた。番号は遺構の種別を問わず通し番号とした。遺構の種別記号は〔文化庁文化財部記念物課2010〕を参考に以下のように付けて表した。  
 竪穴建物（SI） 掘立柱建物（SB） 井戸（SE） 土坑（SK） 土器埋設遺構（SJ） 溝（SD） 柵（SA）  
 柱穴・ピット（P） その他の遺構（SX）
- 6 土層の土色及び遺物の色調観察は『新版 標準土色帖』（小山・竹原1967）を用い、色調名と記号を示した。
- 7 遺構の記述は、上・中・下層の順に、種別順に竪穴建物（SI）、掘立柱建物（SB）、井戸（SE）、土坑（SK）、土器埋設遺構（SJ）、溝（SD）、柵（SA）、柱穴・ピット（P）、その他の遺構（SX）の順に、番号順に記述した。
- 8 遺物の掲載番号は種別ごとに通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版に共通して用いた。
- 9 本文中の挿図に用いた地形図、遺構・遺物図の縮尺は各図に示した。
- 10 遺構計測表における（ ）付きの値は残存値を意味し、遺物観察表中における（ ）付きの値は遺存率が低く復元の信頼性が低いことを示している。
- 11 遺構計測表では、遺構の新旧関係を表現する際に「<」や「>」を用いた。例えば、SK1<SK2となる場合はSK1が古く、SK2が新しいことを示す。

# 目 次

## 第I章 序 章

第1節 遺跡概観 .....	1
A 道正遺跡 .....	1
B 岡崎遺跡 .....	1
第2節 発掘調査に至る経緯 .....	1

## 第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境 .....	4
第2節 周辺の遺跡 .....	4
第3節 歴史的環境 .....	9

## 第III章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査 .....	11
第2節 本発掘調査 .....	15
A 調査方法 .....	15
1) 調査前の現況 .....	15
2) グリッドの設定 .....	15
3) 調査の手順と方法 .....	16
B 調査経過 .....	17
1) 道正遺跡 .....	17
2) 岡崎遺跡 .....	19
C 調査体制 .....	20
1) 道正遺跡 .....	20
2) 岡崎遺跡 .....	21
第3節 整理作業 .....	21
A 整理方法 .....	21
1) 遺 物 .....	21
2) 遺 構 .....	21
B 整理作業の経過 .....	22
1) 道正遺跡 .....	22
2) 岡崎遺跡 .....	22
C 整理体制 .....	23

## 第IV章 道正遺跡

第1節 遺跡の概要 .....	24
第2節 基本層序と旧地形の復元 .....	24
A 基本層序 .....	24
B 旧地形の復元 .....	27
第3節 遺 構 .....	27
A 遺構の記述方法 .....	27
1) はじめに .....	27
2) 遺構略号 .....	28
3) 遺構観察表、掘立柱建物観察表、及び本文の記載項目 .....	28
B 遺構の概要 .....	29
1) 上層遺構の概要 .....	30
2) 中層遺構の概要 .....	39
3) 下層遺構の概要 .....	49

第4節 遺物	51
A 古代の土器	52
1) 概要	52
2) 記述の方法と分類	52
3) 遺物各説	58
B 古墳時代の土器	63
1) 概要	63
2) 土器の分類と記述	63
3) 遺物各説	70
C 縄文時代の土器	88
1) 概要	88
2) 分類	88
3) 遺物各説	92
D 土製品	96
E 石器・石製品	97
1) 資料の提示方法	97
2) 石器類	98
F 木製品	125
G 鍛冶関連遺物	126
H アスファルト	126
I 搬入礫	127
第5節 道正遺跡の自然科学分析	127
A 道正遺跡の自然科学分析（令和2年度分）	127
1) 放射性炭素年代測定	127
2) 花粉分析	129
3) 珪藻分析	133
B 道正遺跡の自然科学分析（令和3年度分）	137
1) 道正遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	137
2) 道正遺跡における樹種・種実同定	140
C 道正遺跡出土の焼骨片について	146

## 第V章 岡崎遺跡

第1節 遺跡の概要	152
第2節 基本層序と旧地形の復元	153
A 岡崎遺跡の基本層序	153
B 砂丘の埋没過程にみる堆積環境と地形の変化	155
C 自然科学分析からみる土層の堆積年代と環境変化	156
第3節 遺構	157
A 上層の遺構	157
1) 概要	157
2) 遺構各説	157
B 下層の遺構	164
1) 概要	164
2) 遺構各説	164
第4節 遺物	164
A 土器	165
1) 概要	165
2) 平安時代の土器	165
3) 奈良時代以前の土器	176
B 土製品	178
C 石器・石製品	179
1) 資料の提示方法	179
2) 石器類	179
D 鍛冶関連遺物	184
E 搬入礫	184

第5節 岡崎遺跡の自然科学分析	184
A 放射性炭素年代測定	184
B 花粉分析	186
C 珪藻分析	190

## 第VI章 総括

第1節 道正遺跡・岡崎遺跡の調査成果	195
A 道正遺跡・岡崎遺跡の上層遺構・遺物から見た遺跡の性格	195
1) 遺構について	195
2) 遺物について	197
3) 遺跡の性格	199
B 道正遺跡の中層遺構・遺物から見た遺跡の性格	199
1) 遺跡の存続した期間	199
2) 遺構について	200
3) 遺跡の性格	201
C 道正遺跡の下層遺構・遺物から見た遺跡の性格	201
1) 遺構について	201
2) 遺物について	201
3) 遺跡の性格	205
D 古代の土器・土製品	205
1) 古代土器の出土状況	205
2) 年代的位置づけ	207
3) 土器製作技法に関する知見―布目、無台杯・盤と壺瓶類の工具痕	208
4) 佐渡型甕と可搬式カマド	211
E 道正遺跡の古墳時代土器の位置付け	212
1) 道正遺跡の古墳時代土器の年代的位置づけ	212
2) 古墳時代の主な遺構出土土器の器種別構成比率について	217
3) 古墳時代の船が描かれた線刻土器について	218
4) 道正遺跡における古墳時代の主な外来系土器などについて	221
F 道正遺跡から出土した縄文晩期中葉土器の編年的位置づけ	224
第2節 墨書土器	228
A 道正遺跡	228
B 岡崎遺跡	228
C 岡崎遺跡出土「羽咋」墨書土器について	229

## 第VII章 付編 ― 2021年度岡崎遺跡調査 ―

第1節 調査に至る経緯と調査経過	233
第2節 遺構	233
第3節 遺物	234
第4節 総括	235
引用・参考文献	236
別表	246
報告書抄録・奥付	巻末

## 挿 図 目 次

<p>第 1 図 道正・岡崎遺跡周辺地形分類図…………… 5</p> <p>第 2 図 道正・岡崎遺跡周辺の遺跡分布図…………… 6</p> <p>第 3 図 道正遺跡試掘調査（第 1 次）・岡崎遺跡 試掘・確認調査（第 1～3 次）トレンチ配置図 …………… 12</p> <p>第 4 図 道正遺跡試掘調査（第 1 次）・岡崎遺跡 試掘調査（第 1 次）土層柱状図…………… 13</p> <p>第 5 図 岡崎遺跡確認調査（第 2・3 次） 土層柱状図…………… 14</p> <p>第 6 図 道正遺跡の真北図と座標データ…………… 16</p> <p>第 7 図 岡崎遺跡の真北図と座標データ…………… 16</p> <p>第 8 図 道正遺跡の地形図…………… 26</p> <p>第 9 図 遺構覆土の堆積状況の分類…………… 29</p> <p>第 10 図 遺構の平面形態と断面形態の分類…………… 29</p> <p>第 11 図 掘立柱建物の各部の名称と計測位置…………… 29</p> <p>第 12 図 道正遺跡出土須恵器・灰釉陶器分類図…………… 53</p> <p>第 13 図 須恵器無台杯と土師器無台碗の法量分布…………… 54</p> <p>第 14 図 道正遺跡出土土師器・黒色土器分類図…………… 56</p> <p>第 15 図 滝寺古窯跡群西区 9 号窯灰原出土の 凸帯付碗型鉢…………… 61</p> <p>第 16 図 道正遺跡古墳時代土器 部位名称と 器面調整の名称・表現…………… 64</p> <p>第 17 図 道正遺跡古墳時代土器 高杯・器台・鉢・ 蓋分類図…………… 66</p> <p>第 18 図 道正遺跡古墳時代土器 壺分類図…………… 68</p> <p>第 19 図 道正遺跡古墳時代土器 甕・ ミニチュア土器・皮袋形土器分類図…………… 69</p> <p>第 20 図 道正遺跡縄文土器分類図 1…………… 90</p> <p>第 21 図 道正遺跡縄文土器分類図 2…………… 91</p> <p>第 22 図 細型管状土錘の法量分布…………… 96</p> <p>第 23 図 主な石器類の並べ方及び部位の名称と 計測基準…………… 99</p> <p>第 24 図 石鏃分類図…………… 100</p> <p>第 25 図 石鏃長幅分布図…………… 101</p> <p>第 26 図 石鏃厚さ分布図…………… 101</p> <p>第 27 図 石鏃重さ分布図…………… 101</p> <p>第 28 図 石鏃未成品分類図…………… 102</p> <p>第 29 図 石鏃未成品長幅分布図…………… 102</p> <p>第 30 図 石鏃未成品厚さ分布図…………… 102</p> <p>第 31 図 石鏃未成品重さ分布図…………… 102</p> <p>第 32 図 石錐分類図…………… 103</p> <p>第 33 図 石錐長幅分布図…………… 104</p> <p>第 34 図 石錐厚さ分布図…………… 104</p> <p>第 35 図 石錐重さ分布図…………… 104</p> <p>第 36 図 削器分類図…………… 105</p> <p>第 37 図 削器長幅分布図…………… 106</p> <p>第 38 図 削器厚さ分布図…………… 106</p>	<p>第 39 図 削器重さ分布図…………… 106</p> <p>第 40 図 両極剥離痕のある石器分類図…………… 107</p> <p>第 41 図 両極剥離痕のある石器長幅分布図…………… 107</p> <p>第 42 図 両極剥離痕のある石器厚さ分布図…………… 108</p> <p>第 43 図 両極剥離痕のある石器重さ分布図…………… 108</p> <p>第 44 図 磨石類分類図…………… 110</p> <p>第 45 図 磨石類長幅分布図…………… 111</p> <p>第 46 図 磨石類厚さ分布図…………… 111</p> <p>第 47 図 磨石類重さ分布図…………… 111</p> <p>第 48 図 砥石分類図…………… 113</p> <p>第 49 図 台石類分類図…………… 115</p> <p>第 50 図 台石類長幅分布図…………… 115</p> <p>第 51 図 台石類厚さ分布図…………… 115</p> <p>第 52 図 台石類重さ分布図…………… 115</p> <p>第 53 図 剥片類（頁岩・珪質頁岩・半透明頁岩） 長幅分布図…………… 118</p> <p>第 54 図 剥片類（鉄石英（赤）・鉄石英（黄）） 長幅分布図…………… 118</p> <p>第 55 図 剥片類（メノウ）長幅分布図…………… 118</p> <p>第 56 図 剥片類（凝灰岩・流紋岩）長幅分布図…………… 118</p> <p>第 57 図 剥片類厚さ分布図…………… 119</p> <p>第 58 図 剥片類重さ分布図…………… 119</p> <p>第 59 図 石核分類図…………… 120</p> <p>第 60 図 石核長幅分布図…………… 121</p> <p>第 61 図 石核厚さ分布図…………… 121</p> <p>第 62 図 石核重さ分布図…………… 121</p> <p>第 63 図 軽石製品分類図…………… 122</p> <p>第 64 図 軽石製品長幅分布図…………… 123</p> <p>第 65 図 軽石製品厚さ分布図…………… 123</p> <p>第 66 図 軽石製品重さ分布図…………… 123</p> <p>第 67 図 暦年較正結果…………… 129</p> <p>第 68 図 道正遺跡における花粉ダイアグラム…………… 132</p> <p>第 69 図 道正遺跡の花粉…………… 132</p> <p>第 70 図 道正遺跡における主要珪藻ダイアグラム…………… 135</p> <p>第 71 図 道正遺跡の珪藻…………… 136</p> <p>第 72 図 暦年較正年代グラフ…………… 139</p> <p>第 73 図 道正遺跡の木材…………… 142</p> <p>第 74 図 道正遺跡 1C-10I22 グリッド Vd 層 （試料 29）の種実…………… 145</p> <p>第 75 図 道正遺跡出土焼骨試料…………… 146</p> <p>第 76 図 道正遺跡試料の組織像…………… 148</p> <p>第 77 図 比較資料の組織像…………… 149</p> <p>第 78 図 道正遺跡試料と各種比較標本の オステオン面積…………… 150</p> <p>第 79 図 道正遺跡試料と各種比較標本の ハバース管面積…………… 150</p> <p>第 80 図 土層の形成年代と堆積の特徴…………… 155</p>
---	--



第 81 図	埋没の進行に伴う地形傾斜の変遷	155	第 103 図	阿賀北地域における古墳時代前期の 編年基準資料	216
第 82 図	土壌サンプル採取地点	156	第 104 図	道正遺跡古墳時代土器の口縁部残存率 計測値による器種別構成比率	217
第 83 図	岡崎遺跡出土須恵器分類図	167	第 105 図	他遺跡における古墳時代土器の 器種別構成比率	217
第 84 図	岡崎遺跡出土土師器・黒色土器分類図	169	第 106 図	準構造船の分類	219
第 85 図	岡崎遺跡出土土師器分類図	170	第 107 図	道正遺跡の船が描かれた線刻土器と船の 線刻部分拡大図	220
第 86 図	須恵器無台杯ほか法量分布図	171	第 108 図	道正遺跡の船が描かれた線刻土器以外の 線刻土器	220
第 87 図	細型管状土錘の法量分布	178	第 109 図	約 1000 年前の越後平野の古地理図	221
第 88 図	ヒスイ製勾玉の製作工程	183	第 110 図	道正遺跡における主な外来系土器など	222
第 89 図	緑色凝灰岩製管玉の製作工程	183	第 111 図	県内の古墳時代前期の主な絵画土器と 穿孔のある蓋、皮袋形土器	223
第 90 図	暦年較正結果	186	第 112 図	道正遺跡中葉 2a 期の土器	226
第 91 図	岡崎遺跡における花粉ダイアグラム	189	第 113 図	道正遺跡中葉 2b 期の土器	226
第 92 図	岡崎遺跡の花粉	190	第 114 図	道正遺跡中葉 3 期の土器	227
第 93 図	岡崎遺跡における主要珪藻ダイアグラム	193	第 115 図	上野原遺跡出土土器	227
第 94 図	岡崎遺跡の珪藻	193	第 116 図	道正遺跡出土墨書土器集成	231
第 95 図	主要遺構出土土器	206	第 117 図	岡崎遺跡出土墨書土器集成 1	231
第 96 図	突帯をもつ有台碗・鉢	207	第 118 図	岡崎遺跡出土墨書土器集成 2	232
第 97 図	岡崎遺跡土師器長甕 B 類と道正遺跡の 同巧品	208			
第 98 図	小泊窯産須恵器無台杯に見る凹凸	209			
第 99 図	布目をもつ須恵器	210			
第 100 図	佐渡型甕・可搬式カマド・支脚	211			
第 101 図	道正遺跡出土の古墳時代の土器編年図-1	214			
第 102 図	道正遺跡出土の古墳時代の土器編年図-2	215			

## 表 目 次

第 1 表	調査履歴 (道正遺跡・岡崎遺跡)	3	第 22 表	両極剥離痕のある石器素材数	108
第 2 表	道正遺跡・岡崎遺跡周辺の遺跡一覧表	7	第 23 表	両極剥離痕のある石器現形状	108
第 3 表	道正遺跡 (第 1 次調査)・岡崎遺跡 (第 1～3 次調査) 遺物集計表	15	第 24 表	磨石類分類別出土数	111
第 4 表	道正遺跡 年度別の主な整理作業	22	第 25 表	磨石類石材表	112
第 5 表	岡崎遺跡 年度別の主な整理作業 (1)	22	第 26 表	磨石類素材表	112
第 6 表	岡崎遺跡 年度別の主な整理作業 (2)	23	第 27 表	砥石分類別出土数	113
第 7 表	遺構集計表	30	第 28 表	砥石石材表	114
第 8 表	石器類の図化数量と図化率	97	第 29 表	砥石石材と砥面状態	114
第 9 表	石器類の縮尺率	97	第 30 表	砥石砥面状態表	114
第 10 表	石器類出土数表	98	第 31 表	台石類石材表	116
第 11 表	石鏃分類別出土数	100	第 32 表	台石類素材表	116
第 12 表	石鏃石材表	101	第 33 表	剥片類石材表	116
第 13 表	石鏃遺存状態表	101	第 34 表	剥片類剥片形状表	117
第 14 表	石鏃未成品石材表	103	第 35 表	石核石材表	121
第 15 表	石錐石材表	104	第 36 表	石核素材表	121
第 16 表	削器分類別出土数	105	第 37 表	木製品時期別種類別出土数	125
第 17 表	削器石材表	106	第 38 表	搬入礫・被熱礫出土表	127
第 18 表	削器分類別素材表	107	第 39 表	測定試料及び処理	127
第 19 表	削器二次調整・使用痕部位表	107	第 40 表	測定結果	129
第 20 表	両極剥離痕のある石器石材表	108	第 41 表	道正遺跡における花粉分析結果	131
第 21 表	両極剥離痕のある石器礫表皮の有無	108	第 42 表	道正遺跡における珪藻分析結果	134
			第 43 表	放射性炭素年代測定結果	138

第44表	放射性炭素年代測定結果	139	第55表	岡崎遺跡における珪藻分析結果	192
第45表	道正遺跡における樹種同定結果	141	第56表	道正遺跡掘立柱建物属性表	195
第46表	道正遺跡(試料29)の種実同定結果	144	第57表	新潟県内出土の権状錘	198
第47表	道正遺跡出土焼骨試料のオステオンと ハバース管の面積	147	第58表	道正遺跡縄文時代晩期の石器・石器類出土数	202
第48表	Games-Howell法による試料の計測値 (焼成前推定値)と比較標本計測値の 平均値の差の検定結果	151	第59表	石器の用途別の区分	202
第49表	石器類出土数・掲載数・凶化率	179	第60表	道正遺跡及び周辺遺跡における 縄文時代晩期の石器類の組成	203
第50表	石器類層位別出土数	179	第61表	道正遺跡石器類石材表	204
第51表	搬入礫・被熱礫出土表	184	第62表	道正遺跡・大沢谷内遺跡(1~4区)の 縄文時代晩期の遺構数	205
第52表	測定試料及び処理	184	第63表	古墳時代の土器編年対照表	214
第53表	測定結果	186	第64表	道正遺跡・岡崎遺跡出土墨書土器一覧	230
第54表	岡崎遺跡における花粉分析結果	188			

## 別表目次

別表 1	道正遺跡遺構計測表	246	別表 10	道正遺跡アスファルト観察表	290
別表 2	道正遺跡掘立柱建物(SB)計測表	254	別表 11	20 岡崎遺跡遺構計測表	291
別表 3-1	道正遺跡古代土器観察表	257	別表 12	20 岡崎遺跡古代土器観察表	292
別表 3-2	道正遺跡古代土器出土位置詳細一覧表	264	別表 13	20 岡崎遺跡奈良時代以前土器観察表	302
別表 4	道正遺跡古墳時代土器観察表	266	別表 14	20 岡崎遺跡土製品観察表	304
別表 5	道正遺跡縄文土器観察表	282	別表 15	20 岡崎遺跡石器・石製品観察表	305
別表 6	道正遺跡土製品観察表	286	別表 16	20 岡崎遺跡鍛冶関連遺物観察表	306
別表 7	道正遺跡石器・石製品観察表	287	別表 17	21 岡崎遺跡遺構計測表	306
別表 8	道正遺跡木製品観察表	290	別表 18	21 岡崎遺跡土器観察表	306
別表 9	道正遺跡鍛冶関連遺物観察表	290	別表 19	21 岡崎遺跡石器・石製品観察表	306

# 第 I 章 序 章

## 第 1 節 遺 跡 概 観

### A 道 正 遺 跡

道正遺跡は、新潟市江南区割野字道正 2868 ほかに所在する。本遺跡は平成 30（2018）年に主要地方道新潟中央環状線（以下、新潟中央環状線）嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う試掘調査によって新たに発見された。埋没した砂丘の西側縁辺部を確認し、縄文時代晩期、古墳時代前期、平安時代の 3 時期の遺構・遺物を検出した。同所の小字名から道正遺跡（新潟市遺跡 No.795）として東西約 120m、南北約 100m の範囲が周知化された。

遺跡は、新潟県の北部から中部にかけて南北に広がる越後平野の中央部より若干南に位置する。東に阿賀野川、西に信濃川、南に小阿賀野川が流れる沖積地であり、現況は調査地を含めた周辺一帯に標高 1m 前後の水田が広がる。遺跡の立地する埋没砂丘は、その立地から北東に連なる亀田砂丘前列（新砂丘 I-2）の延長上に位置する砂丘列の一部と推定される。

### B 岡 崎 遺 跡

岡崎遺跡は、新潟市江南区割野字岡崎 3875 ほかに所在する。道正遺跡と同じく、平成 30（2018）年に新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う試掘調査によって平安時代を主体とする遺構・遺物を検出し、新たに周知化した遺跡である。道正遺跡の西約 100m に位置し、間に谷部を挟むことから、同遺跡とは別体とし、小字名から岡崎遺跡（新潟市遺跡 No.794）とした。その後、平成 31（2019）年に両川東地区土地区画整理事業に伴う確認調査により新たに弥生時代の遺物が出土し、南側に範囲を拡大した。令和 2（2020）年には新潟中央環状線法線内の農業用水路移設に伴う事前確認調査により周知範囲を変更した。本報告時において東西約 135m、南北約 70m を遺跡範囲としている。

## 第 2 節 発掘調査に至る経緯

新潟中央環状線は、北区鳥見から西蒲区角田浜に至る延長 45.4km の区間を計画している。平成 28（2016）年 3 月に新潟市文化スポーツ部歴史文化課（以下、歴史文化課）による市役所全部署への照会に対して、新潟市土木部東部地域土木事務所（以下、原因者）から新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業の回答があった。回答範囲には周知の埋蔵文化財包蔵地はないが、道路工事に伴うため試掘調査についての協議が必要と回答した。その後、継続協議を行い、平成 30（2018）年度に試掘調査を行うことで合意した。平成 30（2018）年 4 月 10 日付で原因者から市教委教育長（以下、市教育長）宛に「埋蔵文化財の事前調査（試掘・確認調査）について（依頼）」が提出された。対象範囲は、延長 1,940m、幅員 25m、対象面積は 48,500m<sup>2</sup> である。これを受けて歴史文化課では、平成 30（2018）年 7 月 17 日から 8 月 23 日に試掘調査（着手届平成 30 年 7 月 13 日付新歴 B 第 26 号の 2）を実施した（第 1 次調査）。89 か所のトレンチ調査を実施した結果（終了報告平成 30 年 10 月 10 日付新歴 B 第 26 号の 3）、割野工区において道正遺跡（新遺跡の発見平成 30 年 10 月 10 日付新歴 B 第 26 号の 8）・岡崎遺跡（新遺跡の発見平成 30 年 10 月 10 日付新歴 B 第 26 号の 7）の 2 遺跡が新たに発見された。

この調査の結果から、事業予定地内の道正遺跡に該当する 3,000m<sup>2</sup>× 上・下層 2 面、岡崎遺跡に該当する 1,203.75m<sup>2</sup>× 上・下層 2 面、合計 8,407.5m<sup>2</sup> について本調査が必要と判断された。原因者と歴史文化課で協

議を行い、平成 31（2019）年度に道正遺跡上層、翌年度に道正遺跡下層及び岡崎遺跡の本調査を行うことで合意し、新潟市長は文化財保護法（以下、法）第 94 条第 1 項の通知（平成 30 年 11 月 19 日付新東土木第 245 号）を県教委教育長に提出した。平成 30（2018）年 12 月 4 日付教文第 1214 号の 2 にて県教委から新潟市長あてに本調査の勧告が出された。

平成 31（2019）年 1 月 15 日から 2 月 22 日に新潟中央環状線道路南側隣接地において両川東地区土地区画整理事業に伴う試掘・確認調査が行われた。結果を受けて岡崎遺跡の範囲を南側に拡大し、中世の遺物包蔵地として岡崎南遺跡が新たに発見された（岡崎遺跡第 2 次調査）。

平成 31（2019）年 2 月 25 日付新東土木建第 245 号の 2 で原因者から歴史文化課あてに道正遺跡本発掘調査の依頼が提出され、市教委教育長は着手報告（令和元年 5 月 31 日付新歴 F 第 27 号）を県教委教育長に提出し、市文化財センターが道正遺跡上層を対象とした本発掘調査を実施した（道正遺跡第 2 次調査）。調査終了後、令和 2（2020）年 3 月 26 日付新歴 F 第 27 号の 4 で終了報告を市教委教育長から県教委教育長に提出している。最終的な調査面積は 2,757m<sup>2</sup> である。

また、令和元年度に原因者から道正遺跡と岡崎遺跡間の市道部分の新潟中央環状線道路新設に伴う用水路移設工事計画が歴史文化課に知らされた。市教委教育長は令和 2（2020）年 2 月 7 日付新歴 F 第 28 号の 7 で県教委教育長に着手報告を提出し、確認調査を実施した（岡崎遺跡第 3 次調査）。2 か所のトレンチ調査を実施した結果、北側では遺物包含層が残るが、南側は河川で遺跡が広がらないと考えられたため、岡崎遺跡の範囲を変更した。

翌年度は、令和 2（2020）年 2 月 3 日付新東土木建第 276 号で原因者から歴史文化課あてに道正遺跡・岡崎遺跡本発掘調査の依頼が提出され、市教委教育長は着手報告（道正遺跡：令和 2 年 4 月 1 日付新歴 F 第 17 号 岡崎遺跡：令和 2 年 6 月 1 日付新歴 F 第 46 号）を県教委教育長に提出し、市文化財センターが道正遺跡の中層（上層残存部を含む）と下層及び岡崎遺跡を対象とした本発掘調査を実施した（道正遺跡第 3 次調査・岡崎遺跡第 4 次調査）。調査終了後、令和 3（2021）年 3 月 8 日付新歴 F 第 17 号の 4 で道正遺跡、同日付新歴 F 第 46 号の 2 で岡崎遺跡の終了報告を市教委教育長から県教委教育長に提出している。最終的な調査面積は、道正遺跡が上・中層 2,139m<sup>2</sup>、下層 2,174m<sup>2</sup> の合計 4,313m<sup>2</sup>、岡崎遺跡が上層 1,108m<sup>2</sup>、下層 538m<sup>2</sup>、合計 1,646m<sup>2</sup> である。

道正遺跡第 3 次調査の結果、古墳時代の竪穴建物などの遺構が当初試掘調査成果から調査対象外としていた道路側道部に広がることを確認された。このため、歴史文化課は原因者と協議を行い、令和 3（2021）年度に新たに道正遺跡の調査範囲を南側に拡張することで合意した。令和 3（2021）年 3 月 2 日付新東土木建第 292 号で原因者から歴史文化課あてに本発掘調査の依頼が提出され、市教委教育長は着手報告（令和 3 年 4 月 1 日付新歴 F 第 1 号）を県教委教育長に提出し、市文化財センターが道正遺跡の南側拡張部を対象とした本発掘調査を実施した（道正遺跡第 4 次調査）。これまでの成果を受けて上・中・下層に分けて層位的に遺構の確認を行った。調査終了後、令和 3（2021）年 8 月 31 日付新歴 F 第 1 号の 4 で終了報告を市教委教育長から県教委教育長に提出した。最終的な調査面積は、上・中層がそれぞれ 230m<sup>2</sup>、下層が 290m<sup>2</sup> の合計 750m<sup>2</sup> である。

岡崎遺跡第 3 次調査の結果を受け、新潟中央環状線道路新設工事に伴う用水路移設予定地内の岡崎遺跡に該当する 181m<sup>2</sup> について本調査が必要と判断された。原因者と歴史文化課で協議を行い、令和 3（2021）年度に事前に原因者側で土留め工事を行ったうえで岡崎遺跡の本調査を行うことで合意した。新潟市長は法第 94 条第 1 項の通知（令和 3 年 8 月 11 日付新東土木第 303 号）を県教委教育長に提出した。令和 3（2021）年 8 月 27 日付教文第 685 号の 2 にて県教委から新潟市長あてに本調査の勧告が出された。これを受けて市教委教育長は着手報告（令和 3 年 11 月 26 日付新歴 B 第 112 号の 7）を県教委教育長に提出し、市文化財センターが本発掘調査を実施した（岡崎遺跡第 5 次調査）。調査終了後、令和 4（2022）年 2 月 15 日付新歴 B 第 112 号の 8 で終了報告を市教委教育長から県教委教育長に提出した。最終的な調査面積は 165m<sup>2</sup> である。

第1表 調査履歴  
道正遺跡

通算調査回数 (調査番号)	主要地方道新潟中央環状線整備事業に伴う発掘調査回数	調査期間	調査種別	調査原因	調査主体	担当	主な成果	調査面積	文献	備考
第1次 2018182	第1次	H30年(2018) 7.17～8.23	試掘調査	新潟中央環状線 道路改良工事	新潟市	歴史文化課 金田拓也	縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物を確認した。	1260.74㎡	〔市文化財センター2020〕	新発見
第2次 2019002	第2次	R1年(2019) 6.1～R2年 (2020)3.25	本調査	新潟中央環状線 道路改良工事	新潟市	歴史文化課 文化財センター 立木宏明	道路本体法線部の上層において、埋没砂丘上に立地する平安時代集落の一部を検出し、下層から縄文時代から古墳時代の遺物が層的に出土することを確認した。	2,757㎡	〔本書〕	
第3次 2020001	第3次	R2年(2020) 4.7～12.11	本調査	新潟中央環状線 道路改良工事	新潟市	歴史文化課 文化財センター 高橋保雄	道路本体法線部の下層を中心に調査。上層において平安時代の掘立柱建物7棟、下層において古墳時代前期の竪穴建物2棟などを確認し、縄文時代晩期・古墳時代前期・平安時代の遺物が出土した。	4,313㎡ 上層： 2,139㎡ 下層： 2,174㎡	〔本書〕	
第4次 2021001	第4次	R3年(2021) 4.1～6.25	本調査	新潟中央環状線 道路改良工事	新潟市	歴史文化課 文化財センター 高橋保雄	道路法線南側の側道部を拡張して調査し、平安時代・古墳時代前期の遺構・遺物を確認した。第3次調査で検出された竪穴建物を継続調査し、周溝・周堤を伴う一辺9.04m前後の大型竪穴建物であることを確認した。	750㎡ 上層： 230㎡ 中層： 230㎡ 下層： 290㎡	〔本書〕	
2121168		R4年(2022) 2.4～2.21	工事立会	農業用水路工事	新潟市	歴史文化課 諫山えりか	遺構・遺物なし。		〔市文化財センター2023〕	

## 岡崎遺跡

通算調査回数 (調査番号)	主要地方道新潟中央環状線整備事業に伴う発掘調査回数	調査期間	調査種別	調査原因	調査主体	担当	主な成果	調査面積	文献	備考
第1次 2018128	第1次	H30年(2018) 7.17～8.23	試掘調査	新潟中央環状線 道路改良工事	新潟市	歴史文化課 金田拓也	縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物を確認した。	1260.74㎡	〔市文化財センター2020〕	新発見
2018205		H30年(2018) 12.17～H31年 2.8	工事立会	第一種支線用水 路工事	新潟市	歴史文化課 諫山えりか	平安時代の遺構・遺物を検出した。		〔市文化財センター2020〕	
第2次 2018213		H31年(2019) 1.15～2.7	確認調査	両川東地区土地 区画整理事業	新潟市	歴史文化課 金田拓也	岡崎遺跡南側隣接地で縄文・弥生・古墳時代、古代を中心とした遺構・遺物を確認し、遺跡範囲を南側に拡大。岡崎遺跡の南側で、中世の遺構・遺物を確認し、岡崎南遺跡として新たに登録した。	764.69㎡	〔市文化財センター2020〕	
第3次 2019211	第2次	R2年(2020) 2.12～2.13	確認調査	新潟中央環状線 新設に伴う用水 路移設工事	新潟市	歴史文化課 金田拓也	古代の土器が出土。遺跡範囲を縮小した。	32㎡	〔市文化財センター2021〕	
第4次 2020002	第3次	R2年(2020) 6.2～12.11	本調査	新潟中央環状線 道路新設工事	新潟市	歴史文化課 文化財センター 奈良佳子	埋没砂丘北側の湿地・北斜面・頂部を検出した。縄文時代中期から平安時代の遺物が出土した。遺物の主体は平安時代で、墨書土器の多さや硯に転用された須恵器蓋の多さ、石製腰帯具の鉈尾、可搬式カマドなどの出土が注目される。	1,646㎡ 上層： 1,108㎡ 下層： 538㎡	〔本書〕	
2020205		R2年(2020) 11.24	工事立会	工業団地建設	新潟市	歴史文化課 諫山えりか	平安時代の遺物が出土した。		〔市文化財センター2022〕	
2021169		R3年(2021) 9.14～9.25	工事立会	用水路移設	新潟市	歴史文化課 諫山えりか	遺構・遺物なし。		〔市文化財センター2023〕	
第5次 2021002	第4次	R3年(2021) 12.6～12.28	本調査	新潟中央環状線 新設に伴う用水 路移設工事	新潟市	歴史文化課 文化財センター 遠藤恭雄	第4次調査に連続する埋没砂丘北側の湿地・斜面の一部が検出された。縄文時代後期・晩期の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器が出土した。	165㎡	〔本書〕	

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版1・2、写真図版1）

新潟市は平成17（2005）年に周辺12市町村（新津市・白根市・豊栄市・小須戸町・横越町・亀田町・西川町・巻町・味方村・潟東村・月潟村・中之口村）との合併により、東西42.5km、南北37.9km、総面積726.45km<sup>2</sup>の面積を有する市となった。平成19年度には、政令指定都市となっている。

新潟市が所在する越後平野は、日本有数の河川である信濃川・阿賀野川が運搬する土砂が堆積して形成された沖積平野である。東を朝日・飯豊連峰、南を新津丘陵、西を角田・弥彦山地に囲まれた南北約100km、東西10～25km、面積約2,070km<sup>2</sup>と、関東平野、石狩平野、十勝平野に次ぐ日本第四の平野面積を有する。海岸部には海岸線と平行して大きな弧を描くように砂丘列が並ぶ。10列に及ぶ砂丘列は内陸側から新砂丘Ⅰ～Ⅲ群に大別され、さらに内陸側からそれぞれ枝番が付されている〔田中ほか1996など〕。砂丘間低地の堆積物から形成時期は新砂丘Ⅰが約7,600～4,800年前、新砂丘Ⅱが約4,600～1,400年前、新砂丘Ⅲが1,800～約900年前であると考えられている〔鴨井2018〕。砂丘列は河川の流路を規定して内陸側からの排水を困難なものとし、砂丘列の内側には多数の潟湖が形成され、氾濫を繰り返す中で丘陵地縁辺部まで後背低地が広がる景観を形成した。

道正遺跡・岡崎遺跡の所在する新潟市江南区は、越後平野のほぼ中央に位置する。西を信濃川、東を阿賀野川、南を小阿賀野川に囲まれた低湿地帯で、かつては横越島、近年においては亀田郷と呼ばれている。近世における横越島は七割が海面以下の低湿地であったことから、自然排水が困難であり河川や潟の増水や氾濫による水害が絶えない地帯であった。河川の氾濫によってもたらされた土砂により形成された自然堤防は現河道周辺以外にも広く認められ、河川の流路が頻繁に変動していた事が窺える。このような地理的条件から、近世以降には新田開発や湛水田の乾田化、水害の回避を目的として、享保6（1721）年の阿賀野川の松ヶ崎開削事業をはじめとした放水路の開削が進められてきた。大河津分水の開削、昭和23（1948）年の栗ノ木排水機場の稼働、昭和31（1956）年の耕地整理の完了といった一連の治水事業により、低湿地は現在美田となり稲作を基幹とした都市近郊型農業の中心を担っている。また、新潟市中心市街地にほど近く、北陸道・磐越道・日東道という3本の高速道路をはじめ国道49・403号や広域幹線道路、JR信越線などが所在する交通の利便性から大型商業施設や工業団地も進出し、急速な宅地化が進む地域である。

### 第2節 周辺の遺跡（第2図、第2表）

**縄文時代の遺跡** 道正遺跡・岡崎遺跡の周辺において、遺跡が確認されるのは縄文時代前期初頭からである。前期の遺跡として、砂崩遺跡から前期初頭の土器〔酒井・廣野2002〕、笹山前遺跡〔新潟市史編さん原始・古代・中世史部会1994、廣野1997〕と城山遺跡〔亀田町史編さん委員会1990a、廣野1997〕からは前期前葉の縄文土器が出土している。また、養海山遺跡〔新潟市国際文化部歴史文化課2007〕、山ノ家遺跡〔川上ほか1993、横越町史編さん委員会2000〕でも前期の遺物の出土が確認されており、砂丘上に遺跡が分布していることが分かる。中期以降も砂丘上に多くの遺跡が分布しており、中期前葉の土器が多数出土した砂崩遺跡〔亀田町史編さん委員会1990b〕、中期の土器が出土した小丸山遺跡〔小池・本間1995〕、中期後葉から末葉の深鉢が出土し遺構として竪穴住居の立ち上がりが確認された中山遺跡〔新潟市史編さん原始・古代・中世史部会1994、本間・諫山1995〕、後期の土器が出土した小手平遺跡〔新津市史編さん委員会1989〕、後期の磨消縄文が施文された土器片が出土した西前郷遺跡〔亀



新潟県『土地分類基本調査 新潟・新津』1972・1974年より作成 [1/150,000]

第1図 道正・岡崎遺跡周辺地形分類図



第2図 道正・岡崎遺跡周辺の遺跡分布図



第2表 道正遺跡・岡崎遺跡周辺の遺跡一覧表

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	笹山A	縄	108	砂原上ノ山	古代	217	草水町1丁目遺跡	平	325	行屋崎	古墳・飛・奈・平	435	寛下	古代
2	上舟橋	平	109	三條岡	古代	218	草水町2丁目遺跡	旧・縄・奈・平	326	護摩堂城跡	室	436	村付	古代
3	笹山B	縄	110	瀧ノ山	平	219	愛宕澤	縄・平・中世	327	五社神社	縄	437	中野	古代
4	笹山D	平	111	金塚山	縄・古代	220	滝谷跡	平	328	向屋敷	縄	438	新田	縄
5	引越	弥	112	前山	古代	221	七本松笠跡群	平	329	中店	弥	439	じりノ明	縄
6	笹山C	縄	113	砂原前稲田	縄・古代・近世	222	秋葉2丁目遺跡	平	330	山田古銭出土地	鎌	440	榎表	古代・中世
7	あかしゃだん	平	114	塚ノ山	平	223	前畑	平	331	諏訪の前	平	441	榎表南	鎌～南
8	内島見B	平	115	袋津向山	縄	224	小手平	縄	332	中軒	平	442	五百地	古代
9	横山	平	116	砂岡	平	225	秋葉	縄・弥・奈・平	333	川の下	縄	443	新保北	平
10	向山	平	117	波島	古代	226	本町石仏	中世	334	塚野	縄	444	江中	古代
11	神谷内	古代	118	居附B	不明	227	菅免	古代	335	下屋敷跡	平	445	能代の家	不明
12	たやしき	縄・古墳・鎌～室	119	居附C	不明	228	程島館跡	戦	336	古屋敷	縄	446	福島	古代・中世
13	尾山A	平	120	小杉中洲	古墳	229	新津城跡	平・南～戦	337	新川	縄・平・中世	447	五泉城跡	室
14	尾山B	平	121	松浪寺	平	230	吉岡	平	338	膳吐	縄・平・中世	448	万福寺砦跡	不明
15	樋ノ入A	縄	122	居附A	平～室	231	腰廻	室・安	339	長沢	古墳	449	石ノ子	奈・平
16	樋ノ入B	縄	123	山のハサバ	平	232	諏訪神社石仏	中世	340	三波	縄・平	450	段ノ越	奈・平
17	尾山C	平	124	小杉上田	縄・古代	233	裏田郷	古代	341	土居下	古墳・平	451	新保	奈・平
18	樋ノ入C	縄	125	江尻	平	234	浄業	室	342	館外	平	452	橋田A	奈
19	寺ノ山	室	126	新田郷	平	235	小戸下組	平・鎌～室	343	田上館跡	室	453	橋田C	古代
20	法華塚	室	127	宮尻郷	古代	236	西沼	平	344	館内	奈・平	454	住吉田	奈
21	築上山	平	128	下郷	平安	237	長左門沼	平	345	二段あげ	平	455	住吉田南	古墳・平
22	新崎	古代	129	下郷経塚	平安	238	川根	縄・古代～中世	346	ガネゴウ寺	平	456	中田	平
23	正尺C	古墳	130	菅我墓所	平	239	下梅ノ木	平・鎌～南	347	上谷内	奈・平	457	南谷地西	縄・平
24	鳥屋	縄	131	下郷南	平・鎌～室・近世	240	曾根	平・鎌	348	中谷内	奈・平・中世	458	便住城跡	室
25	下前川原	平・室	132	新田郷南	古墳・平	241	浦野	古代	349	平ノ木	縄・奈・平	459	町屋六条	古代・中世
26	森下古銭出土地	室	133	横越館跡	室	242	櫻行塚	不明	350	八反田	奈・平・中世	460	下ノ坪北	平
27	高森	平	134	上郷D	平	243	杉行塚	不明	351	竹ノ花	奈・平・中世	461	下ノ坪南	平
28	縄内	平	135	上郷北	平	244	江左	縄	352	保明浦	縄・奈・平	462	下ノ坪	古代・中世
29	浦木	平	136	上郷B	古代	245	中郷	平	353	川成	奈・平・中世	463	八幡	縄
30	村下	古代	137	上郷A	古墳・平	246	古通	平	354	仲作	中世	464	輪作	縄
31	中道B	古代	138	上郷C	平	247	山崎	縄	355	大手町	平	465	宮古	縄
32	長場	平	139	川根谷内墓所	平・室・近世	248	城見山	縄・古代・中世	356	山鳥屋敷	古墳・古代・中世	466	中ノ坪	平
33	上堀田石仏A	中世	140	川根谷内	古代	249	沢海	縄	357	妻吉	不明	467	中ノ坪東	古代
34	上堀田石仏B	中世	141	下郷西	中世	250	原	縄	358	駒林要害跡	室	468	中ノ坪南III	平
35	池田B	古代	142	上沼	古代	251	大坪	古代	359	土居内製鉄	不明	469	中ノ坪南II	中世
36	上堀田	平	143	沢木	奈・平	252	平林	縄	360	土居内西	平・中世	470	中ノ坪南I	古代
37	池田A	古代	144	亀田六枚田	古墳・飛・奈	253	東島城跡	室	361	轟	平・中世	471	中名沢	平
38	山飯野神田A	古代	145	岡田	古代	254	山城	縄・弥・江	362	善四郎谷内C	平・中世	472	梨木	平・中世
39	桜曾根	古代	146	所島前	縄・古代～近世	255	東島大道下	古墳・古代・鎌	363	善四郎谷内	不明	473	夜明	平
40	大夫曾根	平	147	三上山	古墳・平・中世	256	山脇	古墳・平・中世	364	土居内	中世	474	千原	平
41	山飯野神田B	古代	148	亀田城山B	南・室・江	257	藤	古墳・平	365	羽宮場	中世	475	川端北	平
42	並柳	古代	149	齊野山	縄・弥・古代	258	山藤	古墳・平・中世	366	大曲川端	平	476	川端南	平
43	桜曾根B	古代	150	亀田城山A	縄・弥・古代	259	西島館跡	中世	367	はかばか	不明	477	中坪	平
44	上堀田石仏A	中世	151	平道	平	260	西島館跡	中世	368	善四郎谷内	平	478	浦西	古墳
45	阿賀野川河口	縄・古墳・平・中世	152	市助裏	平・鎌	261	坂大門	平	369	大湖	中世	479	笹野町A	平
46	津島屋の石仏	南	153	川西	平・鎌	262	西島中谷内	古代	370	彌	平	480	香形北Ⅰ・Ⅱ	平
47	居浦郷	平	154	狐山	古代	263	舟戸	弥・古墳・古代	371	曾郷前	中世	481	香形西Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	平
48	古屋敷	古代・室・江	155	貝塚	古代	264	塩辛	中世	372	村下	平	482	香形中Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	平
49	瀧池	平	156	荒木前	縄・平・中世	265	高矢C	古墳	373	下谷地	中世	483	三軒屋	平
50	宮浦	平	157	中の山	古墳・古代・中世	266	高矢A	縄	374	曾根	平	484	香形東	平
51	本所居館跡	中世	158	手代山北	平・中世	267	高矢B	縄	375	城館跡	中世	485	番丈東	平
52	堤内	平・中世・近世	159	手代山	縄・古墳・古代	268	二宮刈	縄・古代	376	本田裏	中世	486	新保東	平
53	石動	縄・弥・古墳・中世	160	日本南	縄・弥・古墳・古代・室	269	下谷地	縄	377	町道上	中世	487	新保中	平
54	岡山の石仏	中世	161	日本	古墳・古代・中世	270	古津八幡山古墳	古墳	378	城	不明	488	番丈西中	平
55	寺山	平	162	日本東	縄・弥・平	271	古津初越B	古代	379	村前	不明	489	新保西	平
56	牡丹山諏訪神社古墳	古墳	163	亀田道下	縄・弥・平	272	古津初越A	古代	380	村前B	不明	490	本久	平
57	山本戸居下	平	164	城所道下	平	273	古津八幡山	旧・縄・弥・古墳・平	381	山口	縄・弥・古代・鎌	491	番丈西	平
58	山本戸	古墳・古代・中世	165	武左衛門裏	縄・弥・古墳・古代	274	金津初越B	古代	382	梶目木	古代・中世	492	香形南	平
59	山本戸居付	弥・平安・中世	166	八幡前	弥・平	275	金津初越A	古代	383	清水家石仏	中世	493	坪子東	平
60	竹尾西	平	167	森海山	縄・弥・古墳・室	276	大入	古代	384	下の橋館跡	室	494	坪子西	平
61	竹尾	室	168	大蔵	古代	277	烏撃(打)場	縄・古代	385	下屋敷	不明	495	浦	平
62	猿ヶ馬場B	鎌～江	169	西郷	縄・弥・古代	278	神田	縄・古代	386	藤の木	室	496	夜明南	古代
63	猿ヶ馬場A	平・室	170	泥沼	平	279	居村A	平・古代	387	村前東A	古墳・中世	497	上ノ坪	平
64	下場	平・中世	171	下西	古墳	280	居村B	弥・弥・古代	388	家の浦	中世	498	山ノ入	平・中世
65	石山	中世	172	西野	古墳	281	居村C	弥・弥・古代	389	藤の木	室	499	山ノ入南	平・中世
66	石仏山	中世・近世	173	龜ノ子	平	282	十ヶ沢A	縄	390	藤の木	中世	500	山ノ入西	平・中世
67	近世新島岡跡	近代	174	鷲ノ子	平	283	十ヶ沢B	縄	391	掛上り	不明	501	上江	古代
68	近世新島岡跡	近代	175	鴉ノ子	平	284	津波城跡	南	392	チカクラ緑	不明	502	笹野町B	平
69	安池稲荷	平	176	早通前	古墳・平	285	津波城跡	南	393	小川原	中世	503	太田北	平
70	観心山	平・中世	177	西原郷	縄・古代	286	坪が入	縄	394	七島館跡	不明	504	城下西	平
71	愛宕の塚(三井方蓋塔)	中世・近世?	178	川原畑	中世	287	東蔵付	奈	395	中島神社の石仏	縄・弥・古代・中世・近世	505	城下北	平
72	地蔵山	鎌・室	179	門通寺石仏	室	288	西善寺跡	中世	396	中島神社の石仏	室	506	城下東	平
73	鳥屋野	中世	180	天王杉	室	289	三沢B	平	397	天神林の石仏	室	507	太田中	平
74	中沢	中世	181	新田久保	平	290	三沢A	縄	398	嘉瀬島諏訪社	中世	508	中丸北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	平・中世
75	江口館跡	中世	182	新田久保	平	291	三沢原	縄	399	村下の石仏	室	509	上ノ坪	古墳
76	西野	平・中世	183	無頭	平	292	丸ノ塚	不明	400	禅堂寺の石仏	室	510	相輪殿成寺塔	室
77	大野	平	184	下大野	平	293	五本田館跡	室	401	下江端の石仏	室	511	顯成寺経塚	室
78	細山石仏	室	185	山玉浦	平	294	東蔵付	奈	402	新明野	室	512	1町	中世
79	中山	縄・古墳・古代	186	山玉浦	平	295	大沢谷内北	縄・弥・古代・中世	403	分田館跡	室	513	八反畑	中世
80	城山	縄・弥・古墳・平	187	新久免の塚	室～江	296	大沢谷内	縄・弥・飛・古代・中世	404	内山王	室	514	門後墳墓	室
81	笹山前	縄・弥・古墳・古代	188	内野	平・中世	297	横川浜堤外地	縄・平～室	405	玉泉寺の石仏	室	515	門後北墳墓	鎌
82	神明社裏	平	189	中谷内	平・中世	298	浦ノ沢	古代	406	玉泉寺石仏	中世	516	門後南	中世
83	平山	平	190	神ノ羽	古墳・平・中世	299	浦ノ沢	古代	407	大岡家蔵石仏群	南～室	517	荒屋	中世
84	松山向山	平	191	結七島	古墳・古代	300	浦ノ沢	古代	408	高山石遺物群	平	518	荒屋墳墓	室
85	松山	縄・中世	192	中田	古墳	301	西砥屋山館跡	奈・中世	409	桑山石仏	中世	519	高内西	中世
86	直り山A	平	193	内畑	古墳・平	302	六兵衛渡瀬跡	平	410	下条館跡	不明	520	高内	中世
87	直り山B	平	194	江内甲	平・中世・江	303	鎌倉新田居村	縄	411	船越古銭出土地その1	中世	521	大畑	中世
88	小丸山東	平安	195	川口甲	平	304	天ヶ沢上谷内	古墳・古代	412	船越古銭出土地その2	中世	522	常照寺五輪塔婆	鎌
89	小丸山	縄・古墳・平・中世・近世	196	川口乙	平	305	的場	縄～中世	413	小美山	縄・弥・古代	523	馬場西Ⅰ	中世
90	東栗	縄・弥・古墳	197	上浦B	古墳・古代	306	緒立	縄～中世	414	下野山	縄	524	馬場西Ⅱ	古代・中世
91	茗荷谷墓地	縄・弥・平	198	上浦A	古墳・中世	307	釈迦堂	縄・中世	415	山崎平	不明	525	茗宮西Ⅰ	縄・平
92	茗荷谷	古代	199	長沼	古墳・奈	308	林葉寺の五輪塔	室	416	山崎平	不明	526	茗宮西Ⅱ	縄・平
93	藤山	平・鎌	200	岩沼	飛・平・鎌	309	小坂居付	中世	417	山崎平	不明	527	茗宮南	古代
94	上ノ山	縄・弥・平	201	下等別当	古代～中世	310	味方排水機場	縄	418	山崎平	不明	528	茗宮北	中世
95	駒込小丸山	縄・弥・古代	202	宅地郷	古代～中世	311	味方用水路	平	419	山崎平	不明	529	馬場館跡	室
96	丸山	平	203	山谷北	古墳	312	千日	平	420	山崎平	不明	530	馬場	中世
97	北山	平	204	埋堀	古墳	313	千日	平	421	山崎平	不明	531	馬場	中世
98	清水が丘	平	205	大野中	縄・平	314	千日	平	422	山崎平	不明	532	山崎平	中世
99	大道外	平・中世	206	下久保	平	315	千日	平	423	山崎平	不明	533	善明寺砦跡	鎌
100	彦七山	古代	207	道土	平	316	千日	平						

田町史編さん委員会 1990b)、晩期中葉から後葉の遮光器系土偶の胴下半が出土した砂崩前郷遺跡〔遠藤ほか 2020〕が確認されており、旧石器時代や縄文時代草創期に丘陵地に立地していた遺跡が縄文時代前期以降に砂丘上や沖積地に進出する傾向が見られる。

**弥生時代の遺跡** 弥生時代の西郷遺跡〔土橋ほか 2009〕では前期から中期の土器が出土し、養海山遺跡では前期の石鎌や小型の磨製石斧などの石器が出土している。弥生時代中期には、上の山遺跡〔横越町史編さん委員会 2000〕、駒込小丸山遺跡〔家田 1987、横越町史編さん委員会 2000〕、山ノ家遺跡〔川上ほか 1993〕、前郷遺跡〔横越町史編さん委員会 2000〕で玉片や管玉未成品などの玉作り関連遺物が出土しており、一つの集団として玉作りを行っていたと考えられる。また、道正・岡崎遺跡の付近でも前述した西郷遺跡において弥生時代中期の管玉を中心とした玉製品や石針や擦切具などの加工に用いる石器が出土している。後期には、日水南遺跡〔金田 2015〕と養海山遺跡で後期の土器がそれぞれ出土している。

**古墳時代の遺跡** 古墳時代前期には東冢遺跡〔朝岡・諫山 2003〕で集落跡が確認されている。また、山ノ家遺跡〔川上ほか 1993〕、上郷 A 遺跡〔春日ほか 1997〕、武左衛門裏遺跡〔土橋ほか 2007〕、居屋敷跡遺跡〔諫山 2007〕では前期の土師器が出土している。中期の砂丘上では笹山前遺跡〔廣野 1997〕で甕や多数の高杯の器台が出土しており、中期末と推定される竪穴住居跡も検出している。また、日水遺跡〔立木・細野ほか 2013〕、駒首渦遺跡〔渡邊ほか 2009〕、下西遺跡〔亀田町史編さん委員会 1990a〕では集落跡こそ検出されていないものの、それぞれの遺跡で古墳時代中期の土器が出土しており、低地の微高地上にも遺跡が進出する様子が窺える。後期には笹山前遺跡で総柱の掘立柱建物や土坑墓と考えられる遺構が検出され、土坑墓からは多数の白玉が出土している。また、中田遺跡〔笹澤〔諫山〕 2009〕では中期から後期の竪穴状遺構が検出され、山谷北遺跡からは後期の土器が出土している。三王山遺跡〔亀田町史編さん委員会 1990a〕からは少量ではあるが、末期の土師器が出土している。

**古代の遺跡** 古代では、沖積地の自然堤防上に位置する長沼遺跡〔渡邊 1991〕と砂丘上に位置する荒木前遺跡〔渡辺ほか 1991、川上ほか 1996〕から 7 世紀～ 8 世紀初頭の特徴を持つ須恵器杯蓋や 8 世紀末～ 9 世紀中頃の土師器や須恵器が出土し、荒木前遺跡では平安時代の掘立柱建物も検出している。小丸山遺跡では掘立柱建物や井戸、畝状遺構を検出しており、9 世紀半ば～ 10 世紀初頭頃の土師器や須恵器を始め、緑釉陶器や 100 点以上の墨書土器が出土している。河川の自然堤防上に位置する結七島遺跡〔立木ほか 2003、田中ほか 2004、諫山 2008、龍田ほか 2012〕では 8 世紀前半の土師器や須恵器、9 世紀後半を主体とした土師器や須恵器、多数の墨書土器が出土し、掘立柱建物、水田・畑跡の遺構を検出している。上郷 A 遺跡〔春日ほか 1997〕でも、水田跡や畝状遺構を検出しており、自然堤防などの微高地上においても生産活動を行う集落が形成されていたことが窺える。駒首渦遺跡〔渡邊ほか 2009〕では 9 世紀後半の墨書土器や木簡、祭祀具が出土し、24 棟の掘立柱建物を検出している。砂丘上や自然堤防などの微高地上に富裕層などの集落が展開されていたことが窺えるが、ほとんどの遺跡が 10 世紀中頃には途絶する。

**中世の遺跡** 中世になると、丘陵の縁辺や微高地などに城館が築かれるようになり、一般的な集落は砂丘上や自然堤防上に位置する遺跡が多くみられる。砂丘上に位置する遺跡として、三王山遺跡〔酒井 1980、朝岡ほか 2010、龍田 2015〕では鎌倉時代中期頃の珠洲焼・常滑焼・古瀬戸焼や室町時代中期頃の天目碗が出土しており、鉄滓・灰・木炭・焼けた粘土塊が出土したことから小鍛冶遺構を伴う遺跡であると考えられる。また中国宋代の青磁蓮弁文碗や明代の青銅製香炉が出土したことから、交易品が入手できるほどの集落規模と経済力を有していたと考えられる。城山遺跡や荒木前遺跡では輸入陶磁器が出土し、居屋敷跡遺跡では中国製の銭貨や青磁が出土している。自然堤防上に位置する沖ノ羽遺跡〔遠藤ほか 2016〕では中世土師器、珠洲焼、瀬戸美濃焼や輸入陶磁器として青磁・白磁・青白磁などが出土している。また、農具の鎌が出土したことから農耕を生業とする集落であったことが窺える。自家消費的な生産を中心とした鍛冶工房や戯れ歌とみられる文言が記載された木簡も検出しており、経済的に余裕のある集落であったと考えられる。また居屋敷跡遺跡では中国製の銭貨や青磁が出土し、中の山遺跡〔川上ほか 1983〕では輸入陶磁器、内野遺跡〔立木ほか 2002〕では朝鮮や中国産の輸入陶磁器が出土し

ていることから、交易を行えるだけの経済力を持つ集落が複数存在していたことが窺える。

近世の遺跡 近世では、細池寺道上遺跡〔立木ほか2018、立木ほか2019〕において掘立柱建物や井戸、土坑、区画溝、道路状遺構などの集落遺構を検出し、亀田道下遺跡〔澤野ほか2020〕では、区画溝によって区切られた掘立柱建物と畝間状遺構を検出している。また江内遺跡〔春日ほか1996〕では掘立柱建物、居屋敷跡遺跡では柱穴状ピットなどの集落遺構が見受けられる。いずれの遺跡でも肥前系を中心とする多くの陶磁器が出土している。

### 第3節 歴史的環境

律令以前、日本海側の地域は広く越国と称されていた。大化三（647）年に淳足柵、翌年に磐舟柵が相次いで設置され、漸次北方の整備が図られていたと考えられる。越後国は、当初これら二柵の位置する阿賀野川以北の沼垂郡・岩船郡より北を指していたようである。越後国の領域の確定は、大宝二（702）年に越中国4郡（頸城・古志・魚沼・蒲原）を割いて越後国に編入〔『続日本紀』〕し、和銅五（712）年にそれまで越後国に属していた出羽郡を分割して出羽国を建国したことによる。その後、天平十五（743）年に佐渡国を越後国に合併し、ほぼ現在の新潟県と同一の領域となった。しかし、天平勝宝四（752）年には、渤海朝貢使節の来島により、朝廷による直接把握を目的として佐渡国は復置されている。佐渡国3代国司穴人朝臣和麿の天平宝字五（761）年に造営が始まった佐渡国分寺には、小泊窯で製作された瓦が大量に運ばれており、古代越後国に膨大な須恵器の供給をもたらす小泊窯操業の契機としてとらえられよう。

道正遺跡・岡崎遺跡のある亀田郷は、旧阿賀野川（現在の通船川）以西を蒲原郡とする一般的な説〔小林編1996〕に従えば蒲原郡に属していたことになるが、遺跡の多い亀田砂丘周辺が沼垂郡に属していた可能性も指摘されている〔坂井ほか1989、春日ほか1997〕。

古代の蒲原郡には宝亀十一（780）年の『西大寺資財流記帳』によって、鶉橋荘・槐田荘という荘園が施入されていた事が知られており、鶉橋荘は五泉市橋田、槐田荘は三条市周辺とされている。これらの西大寺領荘園は、神護景雲三（769）年の『越後国水田并墾田地帳』などから、8世紀中葉以降には確実に成立していたと考えられる。西大寺領荘園は早くに衰退したと思われるが、その理由として、東大寺領荘園に較べ進出が遅かったため、悪条件地に寺田を設定したためと考察されている〔木村1993〕。

中世の亀田郷は、新津地域を中心とした国衙領金津保の保域に含まれると考えられている。金津保の成立時期は、明確ではないが、他の公領と同様に11世紀後半～12世紀後半に至る院政期に考察されている。金津保の文献上の初見は、建武三（1336）年11月18日の『羽黒義成軍忠状写』に、足利（北朝）方の義成が9月2日に金津保新津城に引き籠もり、新田（南朝）方の小国政光らと戦ったと記載がある。しかし、これ以前にも室町期に成立した『義経記』では承安四（1174）年に金津庄の名が見られ、また寿永年間（1182～1183）には、鎌倉幕府成立後金津保の地頭職となり承久の乱（1221年）に際し鎌倉方の北条朝時に従軍し上洛した、平賀（金津）蔵人資義が金津に居館を構えている。亀田道下遺跡に近い茅野山本慶寺「御裏書控」には、金津保という記載のある近世の裏書が4点あり、近世においてもこの地域は金津保と認識されていたと考察される。

蒲原郡における国衙領は、田畑などの生産域のみならず、河川流域や潟湖なども主要素として成立している。信濃川・阿賀野川の最下流域にあり、蒲原津という越後国を代表する港津の背後という立地や、国衙領の凌駕した頸城郡と、大規模な荘園群が在した阿賀野川以北の中間という地理的環境から、金津保の重要性が高かったことは想像できよう。現に、14世紀前半の南北朝の動乱に際しては、蒲原津を軍事的に占拠し中・下越地方を制圧しようとした南朝軍と、阿賀野川を挟んで対峙した北朝軍との蒲原津から新津丘陵周辺での攻防が前記の『羽黒義成軍忠状写』に記されている。この動乱を経て、越後国は守護上杉氏・守護代長尾氏により室町幕府の統治下に領国支配が推進されることとなる。

『温古之葉』（明治20年代刊行）には「金津荘城所手代山に古城跡あり、孤立せし小山の頂上凡二千坪平坦にし

て井壺空壕の痕幽に見ゆ、元享年中（1321～1323年）国の守護職北条家に於て蒲原沖日水手代山に柵を構ふと古書に見ゆるは此処なるべし、近辺に日水の地名もあり永禄年中（1558～1569年）より上杉家の一将荒木五郎左衛門為久の居城とす。…略」との記述がある。現在、城所や手代山に古城跡は見当たらないが、手代山は「出城山」、養海山は「要害山」とする説もあり、また城所に「荒木浦」「荒木前」、手代山に「内荒木」「外荒木」という地字があることや、荒木前遺跡が在地領主層の居住域を想定させることから、14世紀には在地領主層の拠点が亀田砂丘西側周辺にあったと考察される。

16世紀になると、守護上杉氏と守護代長尾氏の対立が激化し、越後国内での内乱が勃発するようになり、享禄・天文の乱（1530～1551年）の天文四（1535）年には、新津市周辺も戦場と化したようである。この時期の金津保の実態については不明な部分が多いが、後世の『上杉家御年譜』や『上杉史料集』の「北越軍談」には、金津伊豆守祐高や新津彦二郎など、金津や新津郷を領有した人物の名が見られる。

天文十九（1550）年には長尾景虎（上杉謙信）が越後国主となり、天正六（1578）年3月に上杉謙信が急逝すると養子である景勝・景虎の間で後継地位をめぐる「御館の乱」が起き国内領主層の分裂をもたらした。この間における亀田郷に関する直接的な史料はないが、天正年間に謙信方・景勝方として戦陣に参加した武将として亀田小三郎岳信、亀田小三郎長乗の名が見られる。しかし、史料上では彼らの越後国での活動は皆無である。

景勝の移封に伴い、慶長三（1598）年に加賀国大聖寺から新発田に溝口秀勝が入封し、亀田郷は新発田領となった。関ヶ原の戦いの際に会津国境付近より起きた「越後一揆」が画期となり、新発田藩は徳川方の支配大名としての地位を確立し、兵農分離が推進された。新発田藩は壱田治水に力を注ぎ、秀勝入封時には慶長元（1596）年に開村したとされる袋津村以外は荒野沼沢地であった亀田地域を、慶長15（1610）年の茅野山村の開発から、長瀧・丸瀧各村の開発年代とされる寛文十（1670）年までの約60年間で各集落は成立をみている。

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 第1節 試掘・確認調査（第3～5図、第3表）

第I章に記した通り、道正遺跡・岡崎遺跡に関わる試掘・確認調査は両遺跡が発見された試掘調査（両遺跡の第1次調査、以下1次と略す）と、岡崎遺跡の確認調査2回（岡崎遺跡第2・3次調査、以下2次・3次と略す）がある。

各次調査のトレンチ配置図を第3図に、土層柱状図を第4・5図に示した。第3表には各トレンチの検出遺構と出土遺物を一覧にして示している。

岡崎遺跡範囲内では、1次50Tにおいて表土（Ib層）直下標高0.6mで砂丘（XV層）が確認されている。最上部のXVa層から古代（9世紀）を主体とする土器が多量に出土し、XVb層上面で土坑2基、性格不明遺構1基、ピット3基と密に遺構が存在するが、同じ50Tでもより砂丘の標高が高い南側では遺物包含層は削平されており、やや南側の2次1Tでも同様である。より南の2次2・3Tでは標高が下がっていき、55Tが最も低くなって、53・56Tではまたやや高いという具合で、比較的狭い範囲で起伏の多い地形であったことが推定される。

また、1次50T西側の1次44・48・49Tでは北～西側ほど標高が下がる傾向がある。未分解有機物層であるVII層下のIXa層から古代の遺物が出土し、さらに下層から黒色砂丘砂（XV層）が確認されている。1次49TX層では砂丘砂とIX層が混じるような層で遺物が出土することから49Tは湿地や潟湖と隣接した砂丘の裾と考えられ、砂丘の本体はより南側に存在すると推定される。3次90Tでは古代の包含層の存在が確認された。

1次調査では遺物は古代の土器が主体で一部古墳時代前期の土器がみられる程度であったが、2次調査では縄文土器・弥生土器、玉作り遺物などが出土し、道正遺跡とは異なり時代幅が広いことが明らかになった。

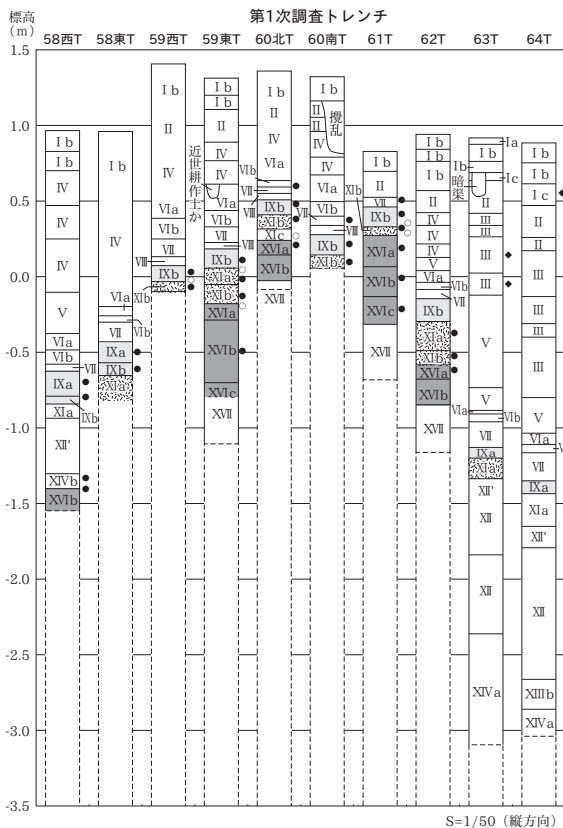
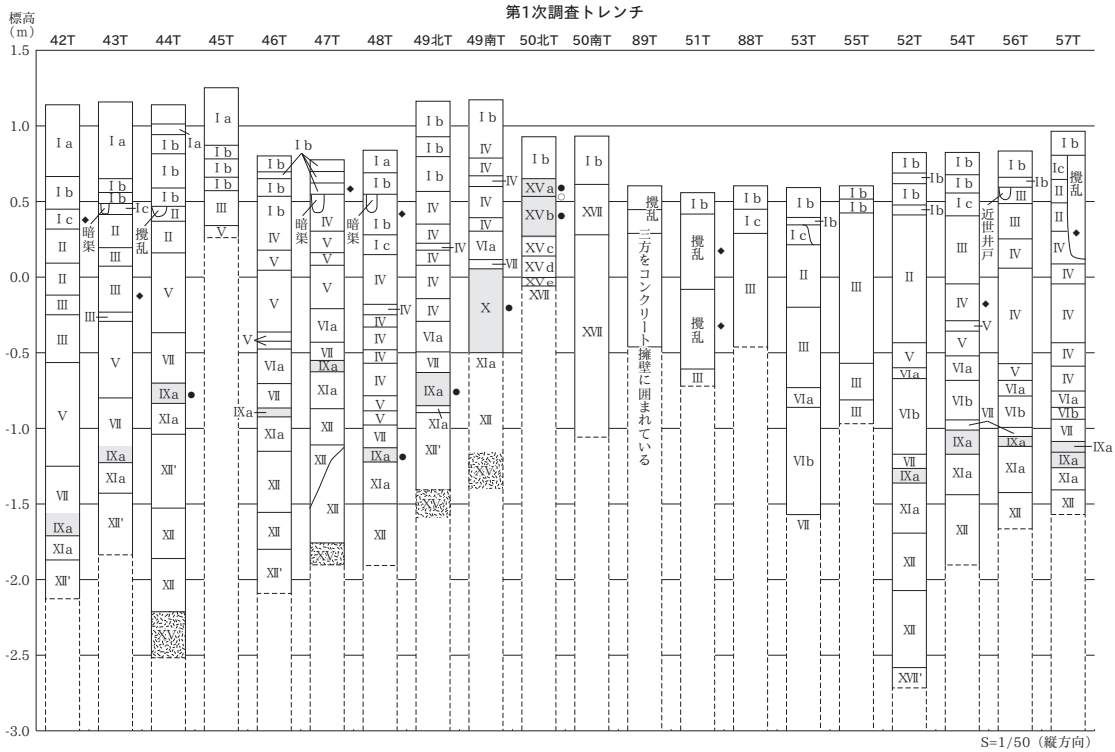
本調査の範囲は大半の遺物が出土した48～50Tを含み、砂丘本体が残る東側を現用道路際まで調査することとし、遺跡を南北に縦断する現用の用水路部分を除いた範囲とした。なお、44Tを本調査範囲に含めなかった理由は遺物が須恵器杯蓋1点のみであり、至近のトレンチでは遺構・遺物が出土しなかったからである。

道正遺跡範囲内では、1次60Tで岡崎遺跡より低い標高0m前後で埋没砂丘が認められ、1次58T、61T、62Tと低くなっていく。一方、60Tでは北側ほど標高が高くなり、現況でも畑地で周囲の水田より高い部分が北側に続くことから、砂丘の主体は岡崎遺跡とは逆の北側に存在している可能性が高い。59T～61Tでは古墳時代と平安時代の溝・土坑・ピットなどの遺構も多数検出された。出土遺物は縄文時代、古墳時代早期から前期、平安時代（9世紀）の3時期が認められる。59Tや61Tでは古墳・縄文時代の包含層は50～60cmの厚みがあり、59Tでは完形の縄文土器浅鉢が出土している。平安時代の遺構確認面は古墳時代早～前期の土器を包含するXI層上面と捉えられるものの、縄文時代晩期の遺物が主体となるXVI層でも古墳時代の土器が引き続き出土していることから古墳時代と縄文時代の生活面は分離できない状況である。

本発掘調査は遺跡を南北に縦断する現用の用水路部分を除いた範囲で実施することとなった。



第3図 道正遺跡試掘調査（第1次）・岡崎遺跡試掘・確認調査（第1～3次）トレンチ配置図（S=1/2,500）

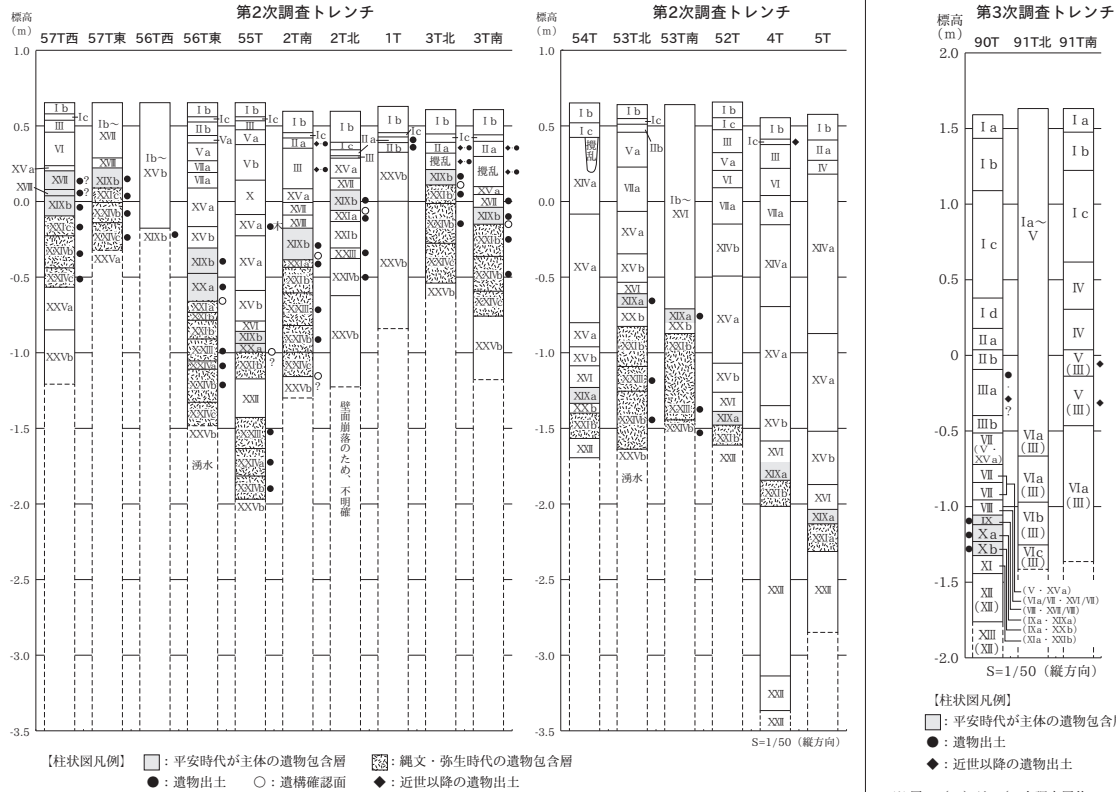


- 【土層注記】
- I a層：砂。道路用地取得後の盛砂。
  - I b層：近・現代の耕作土及び耕地整理時の盛土・盛砂。
  - I c層：黒褐色粘土及びシルト質粘土 近世・近代（耕地整理前）の耕作土。
  - I d層：灰色・青灰色粘土及びシルト 近世以降の可能性が高い。
  - II 層：暗灰色系粘土及びシルトと未分解有機物層互層 湿地の影響による堆積の可能性があるが、近世頃の水田耕作による可能性もある。
  - III 層：青灰色系細・中・粗粒砂と腐植植物及び灰色シルト互層 河川の影響による堆積の可能性がある。
  - IV 層：青灰色系粘土及びシルト・細粒砂互層 河川の影響による堆積の可能性もある。火つけ貝などの木製品が出土しており、近世の可能性が高い。
  - V 層：暗灰色・青灰色・緑灰色系粘土・シルト及び未分解有機物層互層 腐植植物多量を含む。湿地の影響による堆積の可能性がある。
  - VI a層：暗褐色未分解有機物層 未分解有機物が厚く堆積している。潟湖の影響による堆積。
  - VI b層：灰褐色粘土質シルト 未分解有機物を多量を含む。湿地の影響による堆積の可能性がある。
  - VII 層：暗褐色・黒褐色未分解有機物層 未分解有機物が厚く堆積している。潟湖の影響による堆積。60Tで遺物が出土しているが、下層の遺物包含層の遺物と考えられる。
  - VIII 層：青灰色シルト質粘土 未分解有機物層と土壌化した層の間層。遺跡範囲にのみ確認される。
  - IX a層：黒褐色未分解有機物層及び粘土質シルト VII層の土壌化した層。砂丘の標高が高い周辺では平安時代主体の遺物包含層。
  - IX b層：褐色粘土質シルト及び未分解有機物層 IX a層がさらに土壌化した層。平安時代主体の遺物包含層。
  - X 層：暗緑灰色中粒砂質粘土 腐植植物を多量を含む。岡崎遺跡では遺物包含層（平安主体）。
  - XI a層：青灰色シルト質粘土及び粘土 腐植植物を含む。砂丘の標高が高くなる範囲では遺構確認面（道正遺跡、平安主体）。遺物包含層（道正遺跡、古墳主体）。
  - XI b層：青灰色中粒砂質粘土 腐植植物を多量を含む。砂丘の標高が高くなる範囲では遺構確認面（道正遺跡平安主体）。遺物包含層（道正遺跡、古墳主体）。
  - XI c層：青灰色粘土質中粒砂 腐植植物を含む。XI b層とXVI a層の漸移層の可能性が高い。
  - XII 層：暗褐色未分解有機物層及び青灰色・緑灰色系粘土・シルト互層 腐植植物及び自然木等を多量を含む。湿地の影響による堆積の可能性がある。
  - XII' 層：XII層内でも特に未分解有機物が厚く堆積する層 潟湖の影響による堆積の可能性がある。
  - XIII a層：青灰色シルト質粘土 腐植植物含む。黒褐色未分解有機物が薄く菜理堆積する層もある。
  - XIII b層：黒褐色未分解有機物層
  - XIV a層：青灰色粘土・粘土質シルト 腐植植物含む。
  - XIV b層：緑灰色シルト 腐植植物含む。XVI d層の上位に堆積し、XVI d層中の地下水からの水圧により、湧水する。
  - XV a層：黒褐色細粒砂 岡崎遺跡遺物包含層（平安）。砂丘堆積砂。
  - XV b層：暗灰色細・中粒砂 岡崎遺跡遺構確認面（平安）。遺構外からも遺物が確認されるため、遺物包含層の可能性が高い。砂丘堆積砂。
  - XV c層：灰色シルト質細粒砂 砂丘堆積砂。
  - XV d層：黒褐色シルト質細粒砂 砂丘堆積砂。
  - XV e層：灰色中粒砂 砂丘堆積砂。
  - XV' 層：暗灰色中粒砂 XV a～b層と同じく砂丘に関する可能性はあるが、明確ではない。
  - XVI a層：黒褐色シルト質細・中粒砂 道正遺跡遺構確認面（古墳）・遺物包含層（古墳・縄文）。砂丘堆積砂。
  - XVI b層：黒色細・中粒砂 腐植植物含む。道正遺跡遺物包含層（古墳・縄文）。砂丘堆積砂。
  - XVI c層：黒色細・中粒砂 腐植植物含む。道正遺跡遺物包含層（古墳・縄文）。砂丘堆積砂。
  - XVI d層：黒色細・中粒砂 白色粒混じり。腐植植物含む。砂丘堆積砂。
  - XVII 層：暗緑灰色中粒砂 砂丘砂。
  - XVII' 層：暗緑灰色中粒砂 XVII層と同じく砂丘砂の可能性はあるが、明確ではない。

- 【柱状図凡例】
- ：平安時代が主体の遺物包含層
  - ▨：古墳・縄文の遺物包含層
  - ：遺物出土
  - ：遺構確認面
  - ◆：近世以降の遺物出土

第4図 道正遺跡試掘調査（第1次）・岡崎遺跡試掘調査（第1次）土層柱状図

第1節 試掘・確認調査



【土層注記】

- I a層: 近・現代の畑の耕作土及び盛土。
- I b層: 近・現代の水田耕作土及び床土。
- I c層: 近・現代の水田床土。
- I d層: 暗青灰色シルト及び細粒砂 近代。
- II a層: 灰色粘土質シルトまたは細粒砂 近代以降。
- II b層: 暗褐色粘土質シルトまたは細粒砂 近代以降。
- III 層: 褐色系細・中・粗粒砂 近代以降。
- IV 層: 暗灰色シルト質粘土 未分解有機物含む。近世以降の水田耕作による影響の可能性あり。
- V a層: 青灰及び灰色シルト 未分解有機物層含む。
- V b層: 青灰色シルト及び細粒砂 未分解有機物層含む。
- VI 層: 灰白色細粒砂及びシルト
- VII a層: 灰色シルト質粘土 未分解有機物層含む。
- VII b層: 灰色系シルト質粘土及び細粒砂 未分解有機物層含む。
- VIII 層: 暗灰色粘土質シルト 未分解有機物多量含む。
- IX 層: 青灰色粘土質シルト
- X 層: 青灰色中・粗粒砂及びシルト互層 河川の影響による堆積。
- XI a層: 暗灰色シルトと炭化物及び黒色腐植植物層の互層
- XI b層: 灰色シルトと炭化物及び黒色腐植植物層の互層 岡崎南(新発見) 遺跡遺物包含層(中世)。
- XI c層: 灰色シルト及び青灰色細粒砂 炭化物及び黒色腐植植物層と互層。岡崎南(新発見) 遺跡遺物包含層(中世)。
- XI a層: 灰色シルト及び青灰色細粒砂 炭化物及び黒色腐植植物層と互層。シルト強い。岡崎南(新発見) 遺跡遺構面(中世)。
- XI b層: 灰色シルト 炭化物及び黒色腐植植物層と互層。シルト強い。岡崎南(新発見) 遺跡遺構確認面(中世)。
- XIII層: 暗灰色・青灰色系粘土・シルト互層 湿地の影響による堆積の可能性あり。
- XIV a層: 暗灰色・青灰色系細・中・粗粒砂と腐植植物及び灰色シルト互層 河川の影響による堆積。岡崎遺跡第1次調査III層。
- XIV b層: 暗灰色・青灰色系粘土・シルト及び細・中・粗粒砂と腐植植物互層 河川の影響による堆積。シルトの比率が多い。XV層との漸移層。
- XV a層: 暗灰色・青灰色・緑灰色系粘土・シルト及び未分解有機物層互層 上層ほど粘土及びシルトの比率が高く、下層ほど未分解有機物層と互層になる。腐植植物多量を含む。湿地の影響による堆積の可能性あり。岡崎遺跡第1次調査V層。
- XV b層: 未分解有機物層及び暗灰色・青灰色・緑灰色系粘土・シルト互層 腐植植物多量を含む。湿地の影響による堆積の可能性あり。未分解有機物の比率が多い。

- XVI 層: 暗褐色未分解有機物層 未分解有機物が厚く堆積している。潟湖の影響による堆積。岡崎遺跡第1次調査VI a層。
- XVII 層: 灰色粘土 未分解有機物含む。炭化物混じる。岡崎遺跡遺物包含層(平安主体)の可能性あり。
- XVIII 層: 青灰色粘土 未分解有機物層と土壌化した層の間層。遺跡範囲にのみ確認される。炭化物混じる岡崎遺跡遺物包含層(平安)の可能性あり。岡崎遺跡第1次調査VII層。
- XIX a層: 暗褐色・黒褐色未分解有機物層 未分解有機物が厚く堆積している。潟湖の影響による堆積。53Tなど砂丘端では、岡崎遺跡遺物包含層(平安)。岡崎遺跡第1次調査VII - IX a層。
- XIX b層: 灰色及び黒褐色中粒砂及びシルト質粘土 下層の砂丘の影響で砂が混じる。炭化物含む。岡崎遺跡遺物包含層(平安)。岡崎遺跡第1次調査X層。
- XX a層: 暗灰色中粒砂及びシルト 下層の砂丘の影響で砂が混じる。炭化物混じる。XIX b層の漸移層。岡崎遺跡遺物包含層(平安)。
- XX b層: 暗灰色未分解有機物層 XIX a層の漸移層。
- XXI a層: 灰色及び灰白色粘土及び細粒砂 炭化物含む。岡崎遺跡遺物包含層(縄文・弥生) 及び遺構確認面(平安)。岡崎遺跡第1次調査XI a層。
- XXI b層: 青灰色粘土及びシルト質粘土 腐植植物及び自然木を含む。砂丘 周辺では岡崎遺跡遺物包含層(縄文・弥生)及び遺構確認面(平安)。岡崎遺跡第1次調査XI a層。
- XXI c層: 灰白色粘土及び細粒砂 炭化物含む。岡崎遺跡第1次調査XI b層。
- XXI 層: 暗褐色・黒褐色未分解有機物層及び青灰色・緑灰色系粘土・シルト互層 腐植植物及び埋没木等を多量に含む。湿地・潟湖の影響による堆積の可能性あり。岡崎遺跡第1次調査XI層。
- XXIII層: 灰色シルト及び中粒砂 炭化物を含む。岡崎遺跡遺物包含層(縄文・弥生)。XXIV層との漸移層。岡崎遺跡第1次調査XII c層。
- XXIV a層: 黒褐色シルト質細・中粒砂 岡崎遺跡遺物包含層(縄文・弥生)。砂丘堆積砂。岡崎遺跡第1次調査XVI b層。
- XXIV b層: 黒褐色中粒砂 岡崎遺跡遺物包含層(縄文・弥生)。砂丘堆積砂。砂丘堆積砂。岡崎遺跡第1次調査XVI b層。
- XXIV c層: 暗灰色細・中粒砂 岡崎遺跡遺物包含層(縄文・弥生)。砂丘堆積砂。岡崎遺跡第1次調査XVI c層。XXV層との漸移層。
- XXV a層: 暗オリーブ色中粒砂 砂丘砂。
- XXV b層: 暗緑灰色中粒砂 砂丘砂。岡崎遺跡遺構確認面(縄文・弥生)か。岡崎遺跡第1次調査XVII層。

【土層注記】

- I a層: 市道アスファルト舗装。
- I b層: 市道路盤碎石。
- I c層: 市道盛砂。山砂。
- I d層: 市道盛砂時の攪乱。
- II a層: 灰オリーブ色シルト質細粒砂 近代以降か。
- II b層: オリーブ黒色粘土質シルト 灰白色シルト小塊多量混じる。近代以降か。
- III a層: 灰色シルト及び青灰色細粒砂 古代土師器及び近代以降と推定されるもの出土。河川氾濫等による混入か。
- III b層: 灰色シルト及び青灰色細粒砂
- IV 層: 灰色細粒砂及びシルト
- V 層: 暗青灰色及び灰色シルト及び細・粗粒砂互層 近世陶磁器出土。川跡か。
- VI a層: 青灰色粗粒砂 川跡か。
- VI b層: 青灰色粗粒砂 黒色中粒砂及び灰色シルト混じる。川跡か。
- VI c層: 青灰色粗粒砂 川跡か。
- VII 層: 灰色粘土質シルト及び細粒砂互層 未分解有機物混じる。1次調査V層・2次調査XV a層。
- VII 層: 暗褐色シルト 未分解有機物多量に混じる。黒色酸化植粒含む。2次調査成果から遺物が混じる可能性あり。1次調査VI aまたはVII層・2次調査XV bまたはXVI層。
- IX 層: 暗褐色シルト 自然木多量に混じる。黒色酸化植粒含む。遺物包含層(古代)1次調査VII層・2次調査XVIIまたはXVIII層。
- X a層: 褐色シルト 自然木混じる。黒色酸化植粒及び炭化物含む。遺物包含層(古代)1次調査IX a層・2次調査IX a層。
- X b層: 褐色シルト 青灰色粘土混じる。自然木混じる。黒色酸化植粒及び炭化物含む。X a層とXI層の漸移層。遺物包含層(古代)1次調査IX a層・2次調査XX b層。
- XI 層: 青灰色粘土 自然木混じる。遺構面(古代)相当。1次調査XI a層・2次調査XXI b層。
- XII 層: 暗赤褐色未分解有機物層 1次調査XII層。
- XII 層: 灰色粘土 1次調査XII層。

※調査時の分層を優先し、整理時に同性質と判断した層には同一の層名を付している。

第5図 岡崎遺跡確認調査(第2・3次)土層柱状図



第3表 道正遺跡（第1次調査）・岡崎遺跡（第1～3次調査）遺物集計表

遺跡名	検出遺構				遺物出土地点	遺物（点数）																							
	トレンチ番号	縄文・弥生	古墳	古代		縄文	弥生	古墳	古代	土製品	石製品	木製品	製鉄関連遺物																
道正遺跡（第1次調査）	58T				IXa				34	3																			
					IXb				21	3																			
					XIVb	1			2																				
					XVIb	10				1																			
	59T	SD 1基	P 17基			IXb			6	266	2	12																	
						IXb～XIa			10	126	1	6																	
						XIa			166	8																			
						XIb		1	297																				
						XVIb	5			1	2																		
	60T	SK 1基				VII			5																				
						IXb			3		1																		
						XIb			44																				
						XVIa	1		14																				
	61T	SX 1基	P 12基	P 3基		VII～IXb			44	1																			
						XIb			3	12																			
XVIa						5		418		4																			
XIb～XVIa						2		12																					
XVIb						7		1																					
62T					XIa			13																					
					XIb			17																					
					XVIa	1		1																					
岡崎遺跡（第1次調査）					IXa				1																				
					IXa				1																				
					IXa				4	1																			
					X				47	2	1																		
					50T	SK 2基	SX 1基	P 3基		XVa			1	18															
SX1			10	49																									
XVb				1																									
54T												1																	
岡崎遺跡（第2次調査）	採集																												
	1T												IIa				5												
													IIb							9									
	2T	P 1基												SK 1基															
														SD 1基															
														P 3基															
														III								1							
	3T													XIXb				7	80			4							
														XXIa							5		1						
														XXIII	1						9	1							
														IIa・攪乱															
	53T													XVII				16				1							
														XIXb									113	3	6				
														XXIb												1			
														XXIVb	1	34						8		2					
55T													XIXa																
													XXIII	1															
													XXIVb	1															
													XVa													1			
56T													XXIII	1															
													XXIVa	1															
													XXIVb	3															
													XIXb																
													XXa								20	153	2	4					
													XIXb・XXa								6	150	1	3					
57T													SX2																
													XXIII	2											1				
													XXIVa	1															
													XXIVb	3															
90T													XVII～XXIVb								10	3							
													XXIVb	11											1				
													XXIVc	6															
III																													
	IX																					2							
Xa・Xb																													

## 第2節 本発掘調査

### A 調査方法

#### 1) 調査前の現況

##### a 道正遺跡

調査対象地は道路用地として取得されるまで水田（一部畑地<sup>1)</sup>）、農道として利用されていた。標高は水田面で0.6～0.8m、畑地で1.1～1.3mである。

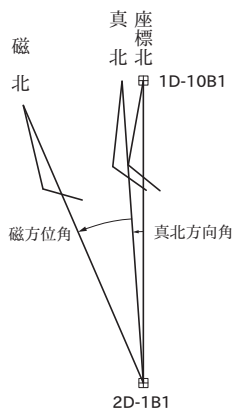
##### b 岡崎遺跡

調査対象地は道路用地として取得されるまですべて水田、2021年度調査区は市道として利用されていた。標高はおおむね0.6～0.8mである。

#### 2) グリッドの設定（図版4・5・122）

グリッドは、道正遺跡・岡崎遺跡と岡崎遺跡の南にある岡崎南遺跡を網羅する東－西・南－北各400mの広さに設定した。「大大グリッド」はX=205400、Y=51500（測地系：世界測地系（2011）、座標系：VIII系）を原点とし、100×100mグリッドで西から東にアルファベットのA～D、北から南にアラビア数字の1～4を付けた。したがって、北西隅（原点）が「1A」杭となる。大大グリッドはさらに10×10mの100等分に分け「大グリッ

1) 西調査区中央やや東寄りの1C-9J・10J、2C-1J・2J、1D-9A・10A、2D-1A・2Aグリッド周辺である。

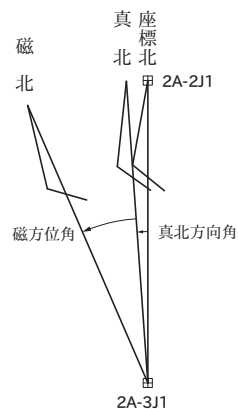


座標北（方向角） 0-00-00  
 真北方向角 -0-21-40.4  
 磁北（方位角） 西偏 8-20

\*数値は、道正遺跡調査区域の中心付近のグリッド杭の座標を用いて計算した。

座標（測地成果2011）					杭高
グリッド名	緯度	経度	X座標	Y座標	標高
2D-1B1	37-50-55.1706	139-05-19.3978	205300.000	51810.000	0.586
1D-10B1	37-50-55.4950	139-05-19.4004	205310.000	51810.000	0.824

第6図 道正遺跡の真北図と座標データ



座標北（方向角） 0-00-00  
 真北方向角 -0-21-34.9  
 磁北（方位角） 西偏 8-20

\*数値は、岡崎遺跡調査区域の中心付近のグリッド杭の座標を用いて計算した。

座標（測地成果2011）					杭高
グリッド名	緯度	経度	X座標	Y座標	標高
2A-3J1	37-50-54.5667	139-05-10.3935	205280.000	51590.000	
2A-2J1	37-50-54.8911	139-05-10.3961	205290.000	51590.000	

第7図 岡崎遺跡の真北図と座標データ

ド」とした。西から東にアルファベットのA～J、北から南にアラビア数字の1～10を付けた。さらに大グリッドは2×2mの25等分に分け「小グリッド」とした。小グリッドの名称は図版5・122に示したように北西隅を「1」とし、北東隅を「5」、南西隅を「21」、南東隅を「25」になるように配置した。大大グリッドから大グリッド・小グリッドまでの表記は、例えば「2D-1A25」のように大大グリッドと大グリッドの間には「-」を入れた。

発掘調査区の座標はグリッド設定図及び遺構全体図に表示してあり、グリッドの座標北（方向角）と真北・磁北との関係、座標データは第6・7図に示した。

### 3) 調査の手順と方法

#### a 道正遺跡

**鋼矢板打設・地下水位低下工事** 試掘・確認調査の結果から本発掘調査の掘削が深くなることや湧水が想定されたため、鋼矢板の打設と地下水位の低下工事を行った。鋼矢板の打設は調査区の南側・西側・東側の三方を長さ11mの鋼矢板で囲み打設した。さらに砂丘頂上部を除き掘削が深くなる部分には鋼矢板際の内側に約5m間隔で径3インチのウエルポイントを設置し、ウエルポンプで強制的に排水し地下水位を低下させた。この方法は従来の暗渠排水工事に比べ掘削面積が大幅に少なくなることから調査対象地内の遺構・遺物の損壊を大幅に減少する利点がある。なお、鋼矢板の圧入方法は当初サイレントパイラーで行ったが、砂層へ打設が困難であったため、ウォータージェット併用工法に変更した。この工法により鋼矢板の打設は容易になったが、鋼矢板周辺では地山の砂丘砂が攪拌され、調査面が一部損失した箇所もあった。

**表土除去** 調査区は埋没砂丘を横断するため上層遺物包含層（Vd層）より上位の層は基本的には水平堆積である。しかし砂丘の埋没は裾部と頂上部では時間差があり、砂丘の形状から砂丘頂上部から裾部やその周辺に流れ込みがあったものと推定される。したがって、上層遺物包含層近くの層では、砂丘頂上部で薄く、砂丘裾部及びその周辺で厚く堆積する傾向がある。加えて砂丘頂上部では畑作時のカクランが見られ、堆積は複雑であった。そこで、層序を確実に把握しながら表土から上層遺物包含層直上までを除去した。表土から上層遺物包含層直上に相当する層厚は浅いところで0.5m、深いところでは2.2m以上であった。表土から上層遺物包含層直上までの除去は0.7m<sup>3</sup>級バックホーで掘削し、クローラードンプ（6t級）を用いて調査区外に搬出した。

**包含層掘削・遺構確認・遺構発掘** 基本的に人力で行った。遺物包含層・遺構確認面はVd～VIIa層まで連

続<sup>1)</sup>し、上層・中層・下層のそれぞれの層で包含層掘削・遺構確認・遺構発掘を行った。なお層の把握・遺構確認が難しいため、調査区を縦断・横断するトレンチを随所に入れた。遺構確認で検出した遺構は、1/100の略測図に記録し、遺構番号を付けた。規模の大きな遺構は十字に土層観察ベルトを残し、これ以外は半截して覆土の堆積状況を観察・記録してから完掘した。掘立柱建物で柱根の遺存する可能性の高い柱穴は、面的に少しずつ段掘りし柱根・柱痕の検出に努めた。なお、排土は包含層掘削時からベルトコンベアで調査区外に搬出した。

**実測・写真撮影** 調査にかかる実測・測量は、すべて測量業者に委託した。遺構の断面図は手取り実測し、補助的にトータルステーション及びデジタルカメラを使用した。遺構平面図はトータルステーション及び電子平板を用い図化に必要なデータの取得を行った。取得したデータはCADに取り込み図化した。遺物微細図はデジタルカメラを用いて写真測量による図化を行った。

**遺物の取上げ** 包含層出土遺物については、小グリッド単位あるいはトータルステーションによる地点測量の取上げを行った。遺構出土遺物については層位ごとを基本とし、必要に応じ地点測量による取上げ、写真測量による図化後の取上げを行った。

#### b 岡崎遺跡

調査区のほぼ中央を横断する排水路を境に東側を東調査区、西側を西調査区とした。

**鋼矢板打設・地下水位低下工事** 道正遺跡と同様に試掘・確認調査の結果から本発掘調査の掘削が深くなることや湧水が想定されたため、鋼矢板の打設と地下水位の低下工事を行った。鋼矢板の打設は東調査区の北側・西側、西調査区の東側・北側に長さ7.5mの鋼矢板をウォータージェット併用法で打設した。地下水位低下工事は道正遺跡と同様に鋼矢板際の内側に約5～8m間隔で径3インチのウエルポイントを設置し、ウエルポンプで強制的に排水し地下水位を低下させた。

**表土除去** 調査区は埋没砂丘の北西斜面から裾部と周辺にあたり、砂丘頂上部に近づくにつれ近世以降の開発のため砂丘は大きく削平されている。したがって東調査区の南側1/3ほどは遺物包含層及び遺構は皆無であった。埋没砂丘の北西斜面から裾部及び周辺では、上層遺物包含層（Vc層）より上位の層は基本的に水平堆積である。しかし、砂丘の埋没は裾部と頂上部での時間差や、砂丘上位から下位への土砂の移動により、上層遺物包含層近くの層は砂丘頂上部付近で薄く、砂丘裾部やその周辺では厚く堆積する傾向がある。そこで層序の確実な把握や砂丘形状を確かめながら表土から上層遺物包含層直上までを除去した。表土から上層遺物包含層直上まで除去に相当する層厚は浅いところで0.5m、深いところでは2.0m以上であった。表土から上層遺物包含層直上まで除去は0.7m<sup>3</sup>級バックホーで掘削し、クローラードンプ（6t級）を用いて調査区外に搬出した。

**包含層掘削・遺構確認・遺構発掘、実測・写真撮影、遺物の取上げ** 道正遺跡の調査の手順・方法とほぼ同じため記述を省略する。

## B 調査経過

本発掘調査は道正遺跡が2019～2021年度に、岡崎遺跡は2020・2021年度に行った。

### 1) 道正遺跡

令和元（2019）年度 新潟中央環状線の本線部分の上層3,000m<sup>2</sup>を対象とした。なお、調査対象地の中央部やや東寄りに排水路が横断するため、排水路を境に東調査区と西調査区に分けた。令和元年6月1日から諸準備に入る。6月5日、調査担当1名・調査副担当1名（市文化財センター）・主任調査員1名・調査員1名・現場世話人2名（榎ノガミ）の調査体制が決まり現地で打ち合わせを行う。6月13日、発掘調査前の遺跡全景を写真撮影する。7月19日、鋼矢板の打設を開始する（8月28日まで）。9月3日、西調査区南西側から表土除去を

1) VIb層は砂丘裾部から砂丘周辺に広がる未分解植物層である。わずかに砂丘からの流れ込み遺物はあるものの基本的には無遺物層である。

開始する（10月3日まで）。10月3日、グリッド杭の打設を始める。10月7日、ベルトコンベアを設置し、西調査区から精査を兼ねて残土を除去する。10月19日、現地説明会を行う（参加者70名）。11月23日、西調査区から遺構確認を始める。10月28日から西・東調査区の壁面精査を行い土層堆積の写真撮影、土層注記を始める。同じく遺構確認で検出した遺構を調査する。以後、遺構確認、遺構調査を行う。11月11日、地下水位低下工事を開始する。11月15日、地下水位低下工事が完了する。11月21日、上層遺構をほぼ完掘し、空中写真撮影の準備に入る。11月27日、ラジコンヘリコプターを用いて上層空中写真撮影を行う。11月29日から中下層の状況を把握するため東西（1C・1D列）トレンチを掘削する。12月3日、工事用道路としていた西調査区北側北東部分の表土除去を行う。12月17日、東西トレンチ、西調査区拡張部分の精査が終了し、ラジコンヘリコプターによる上層空中写真撮影を再度行う。12月23日、調査区を全面シートで覆い現地調査を休止する。合わせて遺物洗浄・注記、土壌洗浄、写真・図面整理、各種台帳類の整理等の基礎整理に取り掛かる。3月2日、調査区を覆っていた土嚢及びシートを除去し、上層の調査を再開する。3月31日、2019年度の本調査を終了する。上層の実質調査面積は2,757m<sup>2</sup>である。

令和2（2020）年度 新潟中央環状線の本線部分の中・下層3,000m<sup>2</sup>×2面を対象とした。4月1日から調査準備に入る。4月7日、調査担当1名・調査副担当1名（市文化財センター）・主任調査員1名・調査員2名・現場世話人2名の調査体制が決まり打ち合わせを行う。4月14日、発掘調査現場における新型コロナウイルスの対応について協議し、5月10日まで本調査の開始を延期することにする。5月11日、本発掘調査を開始する。中層と推定した遺物包含層（VIa層・VIc1層）を掘削するが、古代の遺物・遺構が多く認められた。詳細に観察した結果、VIa層上部は古代の遺物包含層、VIa層下部・VIc1層は古墳時代の遺物包含層、VIa層下部が古代の遺構確認面、VIc2層上面が古墳時代の遺構確認面と判明する。調査期間・調査費用の制約により遺構確認面や遺構の覆土、出土遺物から古代と古墳時代の遺構がある程度判別できることから上層遺構と中層遺構を同時に調査することとした。5月26日から砂丘西の緩斜面に古墳時代の遺物が集中分布し、線刻土器が出土したSX233の調査に入る。5月27日から西調査区の北西寄りの平安時代の掘立柱建物群の柱穴調査を始める。調査の結果、4棟の掘立柱建物を検出する。5月28日、東調査区で古墳時代のSD238を確認、遺構調査に入る。後日、SI266の調査に伴い、古墳時代の竪穴建物に付帯する周溝と判明した。7月2日、縄文時代のSJ242を確認し、調査に入る。この周辺は砂丘の西斜面にあたりVIc1層とVIc2層識別が難しく、VIIa層上部まで掘り下げた。したがって、縄文時代の遺構・遺物も検出された。またSJ242周辺及びこれから東には古墳時代と縄文時代晩期の遺物がほとんど高低差なく出土する。8月4日、東調査区の南西隅部で遺構を確認し調査に入る。8月18日、床面の検出をもって古墳時代の竪穴建物（SI266）と判明する。9月8日から包含層（VIa層）掘削中に確認していた平安時代のSB330の柱穴調査に入る。柱根・柱痕の検出が予想されたため、柱穴の段下げ調査を行った。10月2日、上層・中層の遺構検出が完了し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。10月10日、調査成果の一般公開を目的に現地説明会を行った（参加者266名）。10月19日から下層の調査に入る。古墳時代と縄文時代晩期の遺物包含層（VIc1層・VIc2層）の識別が難しいことや層厚が薄いことからすでに縄文時代晩期の遺構確認面（VIIa層上部）の多くが中層までの調査で露出していた。遺物の多くはすでに出土済みであることや遺構検出が難しく、しかも少ないことが予想された。したがって、VIIa層をバックホーで徐々に削平し、VIIb層・VIII層で黒色に染み状に残る部分が遺構かどうか検討した。合わせて中層遺構の掘り残しも調査した。予想したように下層で見つかった遺構は土坑10基、土器埋設遺構5基のみであった。12月2日ラジコンヘリコプターによる下層の空中写真撮影を行う。12月10日まで補足調査を実施し、現地調査を終了した。実質調査面積は中層2,139m<sup>2</sup>、下層2,174m<sup>2</sup>、合計4,313m<sup>2</sup>である。

令和3（2021）年度 新潟中央環状線の側道部分の上層、中層、下層の各240m<sup>2</sup>を対象とした。調査対象地は前年度の調査対象地の南に隣接し、調査前は農道として使用されていた。幅4m・長さ65mであるが、排水路が横断するため幅4m・長さ5mほど調査対象から除外した。鋼矢板打設はそれぞれの調査区の東・南・西側

の3方に入れ3月中に終了した。4月1日、調査の諸準備に入る。4月5日、調査担当1名・調査副担当1名（市文化財センター）・現場世話人1名（㈱ノガミ）の調査体制が決まり現地で打ち合わせを行う。同日、地下水位低下工事を行う。4月12日、表土除去を始める。調査対象地は前年度調査区の南に隣接するため、北側は土層断面状に観察できた。したがって、表土から上層遺物包含層直上、上・中・下層、地山の観察は容易で、各層を違えることなく発掘調査ができた。4月15日、上層の層位確認トレンチを入れ、包含層掘削を始める。4月22日、上層の遺構確認を始める。5月10日、遺構調査を始める。5月13日、上層遺構をほぼ検出する。西調査区で掘立柱建物2棟（SB521・558）検出する。5月14日、ドローンを使用し空中写真撮影を行う。合わせて高所作業車で上層全景写真を撮影する。5月18日、中層の層位確認トレンチを入れ、包含層掘削を行う。5月20日、遺構確認を始める。東調査区では前年度調査で検出した古墳時代の竪穴建物（SI266）の広がりを確認する。5月24日、遺構調査を始める。6月2日、遺構調査をほぼ完了する。6月3日、ドローンや高所作業車で空中写真撮影、中層全景写真撮影を行う。6月7日、下層の層位確認トレンチ入れ、包含層の掘削を行う。6月9日、遺構の確認を始める。6月12日、調査成果の一般公開を目的に現地説明会を行う（参加者151名）。6月23日、遺構調査を終了する。6月24日、ドローンや高所作業車で空中写真撮影、下層全景写真撮影を行う。6月25日、調査機材、土嚢、シート等の後片づけを行い現地調査が終了する。実質調査面積は上層230m<sup>2</sup>、中層230m<sup>2</sup>、下層290m<sup>2</sup>、合計750m<sup>2</sup>である。

## 2) 岡崎遺跡

令和2（2020）年度 新潟中央環状線の本線・側道部分の上層・下層の1,203.75m<sup>2</sup>×2面を対象とした。なお調査対象地のほぼ中央に排水路が横断するため排水路を境に東調査区と西調査区に分けた。令和元年6月1日から諸準備に入る。同日、調査担当1名・調査副担当1名（市文化財センター）、主任調査員1名・調査員1名・現場世話人1名（㈱ノガミ）の調査体制が決まり現地で打ち合わせを行う。6月2日、鋼矢板の打設を始める（6月17日まで）。6月23日、表土除去を始める（8月1日まで）。7月28日、地下水位低下工事を始める。8月3日、平面精査・壁面精査を始め、基本層序の把握・上層の遺物包含層掘削の準備に入る。8月18日、東調査区から上層の包含層掘削に入る。8月19日、西調査区の上層包含層の掘削に入る。9月15日、東調査区で上層遺構の確認をする。ピット、土坑、性格不明な落ち込みなどを確認する。9月17日、西調査区で上層遺構の確認を始める。9月23日、西調査区で上層遺構の調査を始める。9月28日、東調査区で遺構調査を始める。10月6日、東・西調査区の上層遺構の調査がほぼ終了する。10月8日、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う。10月9日、高所作業車を使い、上層の全景写真を撮影する。10月10日、調査成果の一般公開を目的に現地説明会を行った（道正遺跡と同時開催）。10月14日、下層の状況を把握するためにトレンチ掘削をする。10月19日から中・下層の遺物包含層（Ⅵa・Ⅵb・Ⅵc・Ⅶ層）を掘削する。縄文時代中期から古墳時代前期までの遺物が出土したが、数量的に乏しく層位的な分布状況は不明であった。11月5日、西調査区でⅦ層掘削後、Ⅷ層検出時



2020年10月10日 参加者数266名



2021年6月12日 参加者数151名

現地説明会風景

## 第2節 本発掘調査

に下層遺構の土坑2基を確認する。11月6日、東調査区でⅦ層上面の地形測量をし、この面を中層遺構面とする。古墳時代の遺構は検出されなかった。11月6日、西調査区でⅦ層除去中に下層の縄文時代の土坑3基(SK39～41)を確認する。11月13日、SK39～41を完掘する。11月18日、Ⅶ層を除去し、Ⅷ層上面で下層の遺構確認を行う。11月19日、P47を完掘し下層の遺構の調査は終了した。11月26日、高所作業車による下層の遺跡全景写真撮影、11月27日、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う。12月4日、補足調査が終了し、現地調査は完了する。実質調査面積は上層1,108m<sup>2</sup>、下層538m<sup>2</sup>、合計1,646m<sup>2</sup>である。

令和3(2021)年度 新潟中央環状線の建設に伴う用水路移設のための発掘調査で、181m<sup>2</sup>を対象とした。事前協議により用水路工事の施工業者において、鋼矢板打設工事及び表土層除去がなされた状態で、調査対象地の引き渡しを受けた。令和3年12月1日、調査担当1名・調査副担当1名(市文化財センター)・現場世話人1名(㈱ノガミ)の調査体制が決まり、現地で打ち合わせを行う。併せて諸準備に入る。12月9日、排水対策、残土除去など行い調査環境を整える。12月10日、ドローンを用い調査区の調査前全景写真の撮影を行う。12月13日から遺物包含層の掘削を行う。12月17日、Ⅵa層上面でSX1を確認する。12月20日、遺構調査を始める。12月23日、すべての遺構調査が終了し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行う。12月24日、補足調査が終了し現地調査が完了する。実質調査面積は上層21.59m<sup>2</sup>、下層143.41m<sup>2</sup>、合計165m<sup>2</sup>である。



2020年10月10日 参加者数266名  
現地説明会風景

## C 調査体制

### 1) 道正遺跡

#### 令和元(2019)年度

調査期間	2019年6月1日～2020年3月31日
調査主体	新潟市教育委員会(教育長 前田秀子)
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課(課長 小沢昌己、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康) 新潟市文化スポーツ部文化財センター(所長 渡邊朋和、主幹 天野泰伸・遠藤恭雄)
調査担当	立木宏明(市文化財センター係長)
主任調査員	藤本隆之(㈱ノガミ)
調査員	奈良佳子(市文化財センター非常勤嘱託)、山中悟朗、櫻井和哉(2020年1月～3月)(㈱ノガミ)

#### 令和2(2020)年度

調査期間	2020年4月1日～2021年3月31日
調査主体	新潟市教育委員会(教育長 前田秀子)
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課(課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康) 新潟市文化スポーツ部文化財センター(所長 渡邊朋和、主幹 吉沢範久・遠藤恭雄)
調査担当	高橋保雄(市文化財センター主事)
調査副担当	遠藤恭雄(市文化財センター主幹)
主任調査員	藤本隆之(㈱ノガミ)
調査員	金内 元、山中悟朗(2020年4月～5月・10月～2021年3月)、小村正之(4月～5月)、武部喜充(6月～9月)(㈱ノガミ)

令和3(2021)年度

調査期間	2021年4月1日～2021年6月30日
調査主体	新潟市教育委員会(教育長 井崎規之)
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課(課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康) 新潟市文化スポーツ部文化財センター(所長 板垣正人、主幹 遠藤恭雄、係長 飯塚和美)
調査担当	高橋保雄(市文化財センター主事)
調査員	山寄一貴(市文化財センター会計年度任用職員)

2) 岡崎遺跡

令和2(2020)年度

調査期間	2020年4月1日～2021年3月31日
調査主体	新潟市教育委員会(教育長 前田秀子)
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課(課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康) 新潟市文化スポーツ部文化財センター(所長 渡邊朋和、主幹 吉沢範久・遠藤恭雄)
調査担当	奈良佳子(市文化財センター会計年度任用職員)
調査員	遠藤恭雄(市文化財センター主幹)、櫻井和哉、山中悟朗(2020年6月～9月)、 武部喜充(10月～2021年3月)(榎ノガミ)

令和3(2021)年度

調査期間	2021年12月1日～2021年12月28日
調査主体	新潟市教育委員会(教育長 井崎規之)
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課(課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康) 新潟市文化スポーツ部文化財センター(所長 板垣正人、主幹 遠藤恭雄、係長 飯塚和美)
調査担当	遠藤恭雄(市文化財センター主幹)
調査員	山寄一貴(市文化財センター会計年度任用職員)

## 第3節 整理作業

### A 整理方法

#### 1) 遺物

道正遺跡と岡崎遺跡の遺物の整理方法は基本的に同じで、次の手順で行った。①洗浄、②注記、③包含層出土は種別ごとに小グリッド別に重量計測、④遺構出土は遺構毎に種別ごとに重量を計測した<sup>1)</sup>。⑤接合、⑥報告書掲載遺物の抽出、⑦実測図・観察表の作成、⑧トレース図の作成、⑨仮図版作成、⑩本図版作成である。このうち⑧と⑩は編集業者に委託して、デジタルトレース、デジタル編集をした。また⑦の石器、土器の実測の一部も実測業者に委託した。

#### 2) 遺構

道正遺跡と岡崎遺跡の遺構図版の作成方法は基本的に同じである。平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した1/20の遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。これをもとに個別遺構図1/20、1/40を作成し、さらに遺跡全体図は1/20、1/40、1/100、1/200、1/1000縮尺のものを作成した。報告書に掲載した平面図1/500、1/150、1/80、1/40及び断面図1/40、1/80は測量業者が作成したデジタルデータをプリントした図面で仮図面図版を作成し、編集会社に委託して図面図版を作成した。

1) 石器・石製品・土製品などは包含層、遺構の出土別に器種・種別ごとに点数で集計した。

## B 整理作業の経過

調査年度が複数年にわたり、調査遺跡が2遺跡あり、しかも遺構数、遺物量が膨大で多時期にわたった。2021年12月の本発掘終了後から報告書刊行が2024年3月という短期間なことから、多くの職員が整理作業に関わり、一部整理報告業務を外部に委託した。整理作業は遺物の種別ごとに多数の職員に分担され、作業の経過が複雑になったことから月1回の整理班会議を行い、進捗状況の把握、調査員の認識の共有化に努めた。

以下、遺跡ごと、年度ごとに行った主な整理作業を羅列し整理作業の経過とする。

### 1) 道正遺跡

第4表 道正遺跡 年度別の主な整理作業

年度	主な遺物の種別	主な整理作業
令和元 (2019)	遺物（土器）	洗浄、注記
	遺物（石器等）	洗浄、注記
	その他の遺物	土製品、アスファルト、木製品等の抽出
	遺構	1/20平面図校正
令和2 (2020)	遺物（土器）	洗浄、注記、仕分け、重量計測
	遺物（石器等）	洗浄、注記、器種分け、点数記録、礫重量計測
	その他の遺物	土製品、アスファルト、木製品等の抽出
	遺構	1/20平面図校正
令和3 (2021)	遺物（土器）	洗浄、注記、仕分け、重量計測
	遺物（縄文土器）	接合、復元、実測個体抽出、実測（拓本含）、トレース、写真撮影、仮図版
	遺物（古代土器）	接合、復元、実測個体抽出、実測（拓本含）、トレース、写真撮影、仮図版、本図版、原稿執筆
	遺物（古墳土器）	接合、復元
	遺物（石器・石製品）	器種分類、実測個体抽出、実測、トレース、写真撮影
	遺構	1/20平面図校正、全体図作成、仮図版図版、仮写真図版
令和4 (2022)	遺物（縄文土器）	図版図版、写真図版、観察表作成、原稿執筆
	遺物（古墳土器）	接合、復元、実測個体抽出、実測、トレース、写真撮影、
	遺物（石器・石製品）	観察表、仮図版図版、仮写真図版、図版図版、写真図版、原稿執筆
	遺物（土製品・木製品ほか）	実測個体抽出、実測、トレース、観察表、写真撮影、仮図版図版、仮写真図版、図版図版、写真図版
	遺構	観察表、図版図版、写真図版、原稿執筆
令和5 (2023)	遺物（古墳土器）	観察表、仮図版図版、仮写真図版、図版図版、写真図版、原稿執筆
	遺物（石器・石製品）	観察表、原稿執筆
	遺物（土製品・木製品ほか）	観察表、原稿執筆
	その他	総括原稿執筆、図版チェック・編集、原稿チェック・編集、

### 2) 岡崎遺跡

第5表 岡崎遺跡 年度別の主な整理作業（1）

年度	主な遺物の種別	主な整理作業
令和2 (2020)	遺物（土器）	洗浄、注記、仕分け、重量計測、
	遺物（石器等）	洗浄、注記、器種分け、点数記録、礫重量計測
	その他の遺物	土製品、アスファルト、鉄滓等の抽出
	遺構	1/20平面図校正
令和3 (2021)	遺物（古代土器）	接合、復元、実測個体抽出、実測（拓本含）、トレース
	遺物（縄文土器ほか）	仕分け
	遺物（石器・石製品）	器種分類、実測個体抽出、実測、トレース、写真撮影
	遺構	全体図作成、仮図版図版、仮写真図版、図版図版、写真図版、原稿執筆



第6表 岡崎遺跡 年度別の主な整理作業（2）

年度	主な遺物の種別	主な整理作業
令和4 (2022)	遺物（古代土器）	仮図面図版、仮写真図版、図面図版、写真図版、観察表作成
	遺物（縄文土器ほか）	仮図面図版、仮写真図版、図面図版、写真図版、観察表作成
	遺物（石器・石製品）	観察表、仮図面図版、仮写真図版、図面図版、写真図版
	遺物（土製品ほか）	実測個体抽出、実測、トレース、観察表、写真撮影、仮図面図版、仮写真図版、図面図版、写真図版
令和5 (2023)	遺物（古代土器）	図面図版、写真図版、原稿執筆
	遺物（石器・石製品）	観察表、原稿執筆
	遺物（土製品ほか）	原稿執筆
	その他	総括原稿執筆、図版チェック・編集、原稿チェック・編集

## C 整理体制

令和3年度は発掘調査と並行し整理作業を行い、発掘調査が終了したのちに本格的な整理作業に入った。さらに道正遺跡（第2・3・4次調査）と岡崎遺跡（第4・5次調査）の報告書は合本とするため、整理体制を一元化した。令和3～5年度の整理体制は以下のとおりである。なお、令和3・4年度は整理作業の一部を民間調査機関に委託した。

令和元（2019）年度・令和2（2020）年度の整理作業は発掘調査と並行し現地で行った。したがって、整理体制は発掘調査体制に同じため省略した。

### 令和3（2021）年度

調査期間	2021年4月1日～2022年3月31日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康）
	新潟市文化財センター（所長 板垣正人、主幹 遠藤恭雄、係長 飯塚和美）
整理担当	市文化財センター 高橋保雄（主事）
調査員	市文化財センター 相田泰臣（主査）、奈良佳子、八藤後智人、山嵜一貴（会計年度任用職員）、 ㈸ノガミ 金内 元、櫻井和哉

### 令和4（2022）年度

調査期間	2022年4月1日～2023年3月31日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長 遠藤和典、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 朝岡政康）
	新潟市文化財センター（所長 佐藤敏弘、主幹 遠藤恭雄、係長 飯塚和美）
整理担当	市文化財センター 高橋保雄（主事）
調査員	市文化財センター 相田泰臣（主査）、奈良佳子、八藤後智人、山嵜一貴（会計年度任用職員）、 ㈸ノガミ 金内 元

### 令和5（2023）年度

調査期間	2023年4月1日～2024年3月31日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長 萬歳真紀、課長補佐 廣野耕造、埋蔵文化財担当主幹 遠藤恭雄）
	新潟市文化財センター（所長 村山 明、主幹 朝岡政康、係長 飯塚和美）
整理担当	市文化財センター 高橋保雄（主事）
調査員	市文化財センター 相田泰臣（主査）、奈良佳子（主事）、八藤後智人（会計年度任用職員）、植田尚子（10月～）（会計年度任用職員）

## 第IV章 道 正 遺 跡

### 第1節 遺跡の概要

遺跡の文化層は平安時代（上層）、古墳時代（中層）、縄文時代（下層）の3層が存在した。したがって、それぞれの層で遺構調査を試みた。帯状に延びる砂丘は、海側一頂上部一内陸側へと大きく湾曲することから、地層及び遺構確認面の把握が難しく、必ずしも文化層ごとの発掘調査ができなかった。特に第2次調査（2019年度）では上層の遺構確認面の把握が不十分で、第3次調査（2020年度）では調査期間の時間的な制約もあり、上層遺構の多くと中層遺構はほぼ同時に調査した。一方、下層（縄文時代晩期中葉）の遺構は、砂の覆土は遺構周辺の砂と同化するためか、遺構確認面のVIIa層上部では遺構検出が不可能であった。VIIa層上部で検出できた遺構は埋設土器遺構（SJ）の遺物そのものが遺構となるものである。土坑（SK）などはVIII層への漸移層となるVIIb層及びVIII層でわずかに覆土との色調の違いから検出した遺構である。第4次調査（2021年度）では第2・3次調査の状況を踏まえ、第3次調査区との境界にトレンチを設定し、上・中・下層を確認しながら掘り進めたことから、文化層ごとの発掘調査ができた。

遺構 No. は調査年次・遺構の種別にかかわらず1からの通し番号とした。遺構 No. を付した数は第2次調査で191基、第3次調査で297基、第4次調査で61基である。これらは発掘調査時や調査後の検討、さらに本格的な整理作業に入った段階で再検討を加えた。その結果、最終的に遺構と認定したものは第2次調査で122基、第3次調査で295基、第4次調査で59基である。第2次調査の遺構が大幅に減少するのは、上層の遺構確認面の把握が不十分だったために遺構でないものを遺構としたことや、遺構調査に不慣れなため底面まで掘り足りず第3次調査で検出した遺構と同一遺構となったこと、掘立柱建物の柱穴の組み合わせを間違えたことなどのためである。

発掘調査で検出した遺構で所属時期のはっきりしないものは、整理作業時に遺構検出面・覆土・出土遺物・記録写真などをもとに再検討し、所属時期を決定した。作業を進める中で上・中・下層の遺構には覆土の違いが比較的容易に識別され、検出した遺構はほぼすべて所属時期が特定できた。

遺物は第2次調査からすでに多く出土した。上層（Vd層・VIa層上部）では古代、中層（VIa層下部・VIc1層）では古墳時代前期、下層（VIc2層・VIIa層上部）では縄文時代晩期中葉の遺物が出土した。間層がないため、ほぼ連続して時期の異なる遺物が出土した。コンテナ（内寸54.5×33.6×10.0cm）に換算すると第2次調査で112箱、第3次調査で291箱、第4次調査で90箱である。遺物量が多いこともあり、発掘調査と並行して遺物の洗い・注記・時期別の仕分けを行った。

### 第2節 基本層序と旧地形の復元

#### A 基本層序（図面図版6・写真図版4）

調査対象地の盛土層～砂丘堆積土までを0～VIII層に大別した。これがさらに細別できる場合はa・b・c……を付け、さらにVIc層は第3次調査（2020年度）の途中からさらに細別し、VIc1層、VIc2層とした。以下、図版6にも基本層序の土層説明を記したが、ここではさらに詳述し補足したい。

**0層** にぶい黄色（2.5Y6/4）シルト質砂土 工事用盛土。一部碎石の敷かれている箇所もある。

調査区対象地の北側には工事用盛土（真砂土）や碎石が敷かれていたが、すべて一括して0層とした。

**I層** にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性強・しまり強。現耕作土。

調査対象地は主に水田に利用されていたが、一部畑地もあった。これらの現耕作土を一括してI層とした。

**II層** 黄灰色(2.5Y5/1)シルト～シルト質砂土 粘性普通・しまり強。旧耕作土。

現耕作土直下に認められ、昭和23～25(1948～1950)年に施工された耕地整理事業〔横山栄造1992〕による水田・畑地と推定される。現耕作土に対し床土にあたる。

**III層** 黄褐色(2.5Y5/3)～黄灰色(2.5Y4/1)シルト～砂質シルト 粘性強・しまり普通。旧耕作土以前の耕作土または床土、またはシルト質の洪水堆積層。

酸化鉄の沈着、酸化マンガン結核が認められる。色調・土質で細分されるが一括した。明治23(1890)年9月の『割野村字道正地区更生図』には、「田・畑・野」が表記されており、少なくとも近世から耕作地として利用されていたものと推定される。また大正11(1922)年大河津分水が完成するまでは、明治29(1896)年「横田切れ」、大正6(1917)年「曾川切れ」〔新潟市歴史博物館2022〕をはじめとする大洪水などで土砂が堆積したものと予想される。

**IV層** 灰色(7.5Y4/1)シルト 粘性・しまり普通。洪水堆積層。色調・粘性・しまりにより5細分されるが、層状に水平堆積する。未分解腐植物は少ない。

洪水堆積層のため5細分以上の細分は可能であるが、一括してIV層とした。IV層直下に堆積するV層とは、未分解腐植物の含有で明らかに異なり、このために色調がV層より明るい。

**V層** V層の最下層には上層(平安時代)の遺物包含層の存在が認められ、4細分される。

**Va層** 褐灰色(10YR4/1)シルト 粘性強・しまり普通。未分解腐植物が多く含まれる。砂丘の形状に合わせ層状に堆積する。

Va層からは未分解植物の堆積が明らかに多くなり、色調が暗くなる。またシルトの薄い堆積が多く見られることから、たびたび洪水を繰り返して堆積したものと推定できる。

**Vb層** 暗褐色(10YR3/3)腐植土 粘性普通・しまりなし。未分解腐植物でほぼ占められる(いわゆるガツボ層)。砂丘の形状に合わせ層状に堆積する。

堆積状況から植物が繁茂したことが推定できる。

**Vc層** 灰黄褐色(10YR4/2)シルト 粘性強・しまり普通。炭化粒が少量含まれる。砂丘の形状に合わせ層状に堆積する。

炭化粒はVd層に由来するものと推定される。

**Vd層** 黒褐色(7.5YR3/2)シルト 粘性強・しまり普通。炭化粒・未分解腐植物、古代の遺物が多く含まれる。V層最下層に位置付けられる。

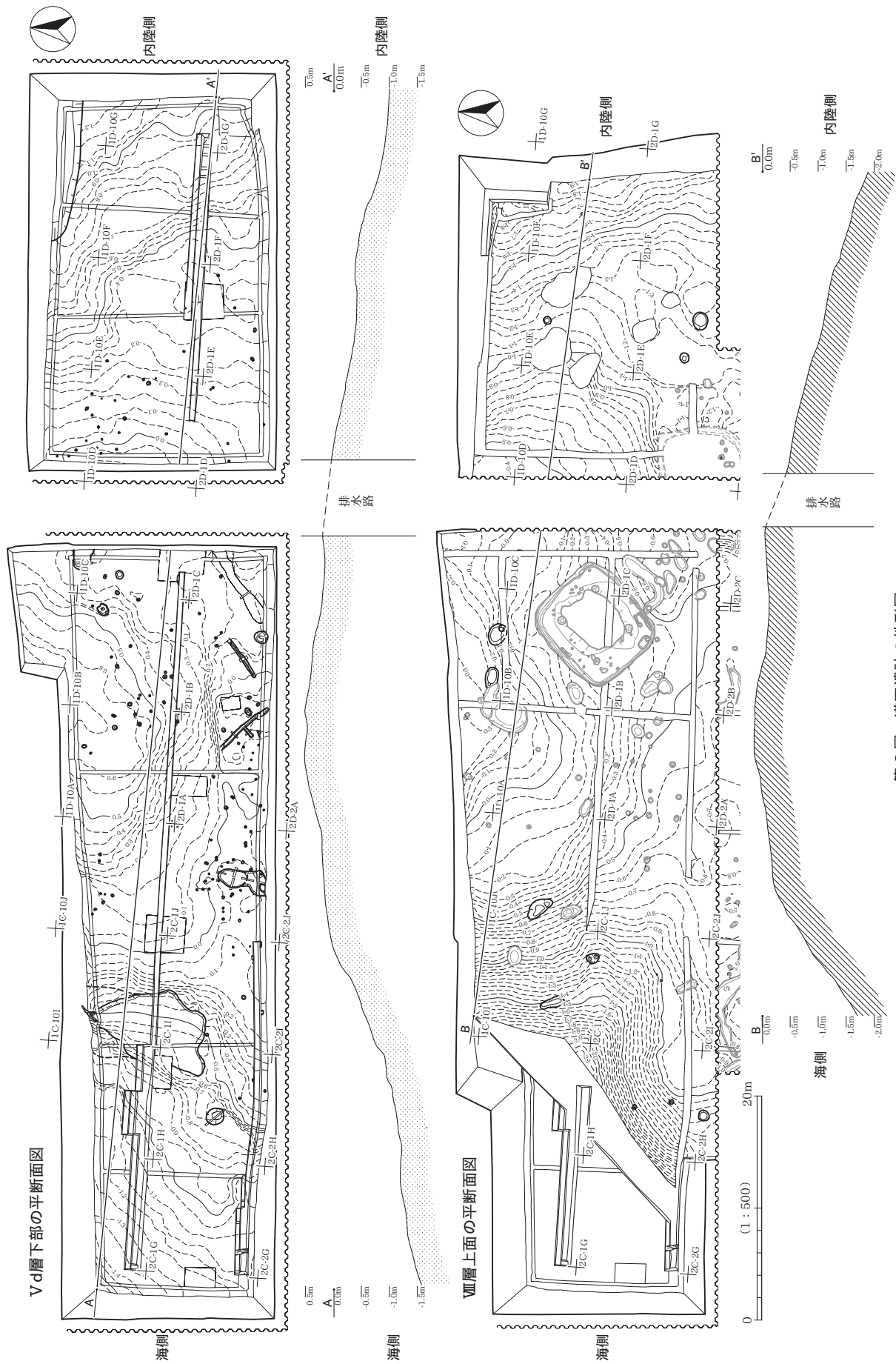
古代の遺物は平安時代(9世紀後半)に所属するものである。遺跡が廃棄されたのち、湿地性植物の繁茂と洪水層に覆われたものと推定される。

**VIa層** 灰色(7.5Y6/1)～黄灰色(2.5Y5/1)シルト 粘性強・しまり普通。未分解腐植物がごくわずかに含まれる。炭化粒が少量混入する。下部には古墳時代の遺物が含まれる。上部は古代の遺構確認面である。

古墳時代の遺物は前期に所属する。古墳時代前期～平安時代までの洪水堆積層である。西調査区北壁では標高0.32m、南壁では標高0.13m<sup>1)</sup>で消滅していることから、砂丘全体を覆うような洪水ではなかったものと推定される。標高を下げるにしたがい厚く堆積し、約40cmの堆積を測るところもある。色調が明るい灰色～黄灰色シルトで、粘性が強く、標高の高い一部を除きほぼ全体で認められることから上層と中層を区分する鍵層となる。

**VIb層** 暗褐色(10YR3/3)腐植土 粘性普通・しまりなし。薄いシルト質層を挟む未分解腐植物層(いわゆるガツボ層)が砂丘周辺の低地に堆積し、砂丘から離れるにしたがい厚く堆積する。層状に水平堆積する。

1) 標高0.13mの直上でカクラン層が見られることからもう少し上部まで堆積していたものと思われる。



第8図 道正遺跡の地形図

西調査区南西部の2C-1G21グリッドでは1m以上の堆積があり、砂丘周辺は湿地性の植物で覆われていたものと推定できる。

**VIc1層** 黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト 粘性普通・しまり普通。炭化粒、古墳時代の遺物が多く含まれる。古墳時代の遺物は、前期に所属する。

**VIc2層** 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質砂 粘性なし・しまり普通。炭化粒、縄文時代晩期の遺物が多く含まれる。古墳時代の遺構確認面である。

VIc1・VIc2層の土質の変化は漸移的である。VIc1・VIc2層の識別ができない場合はVIc層とした。

**VIa層** 黒褐色(2.5Y3/1)砂 粘性なし・しまりなし。上部は縄文時代晩期の遺構確認面である。縄文時代中期以降の遺物がわずかに含まれる。

砂丘が形成されたのち、繁茂した植物が腐食し、砂丘と混じり合った結果の層序である。

**VIb層** 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂 粘性なし・しまりなし。VIII層への漸移層である。

VIa層は縄文時代晩期の遺構確認面であるが、VIa層で検出された遺構の覆土は周囲の土壌と同化するため、土器埋設遺構の遺物そのものが遺構の輪郭を表すものだけ遺構と認識された。土坑などは覆土と周囲の土壌の識別ができず、VIb層・VIII層まで掘り下げてようやく遺構を検出した。しかし遺構の輪郭(覆土)と周囲の土壌との識別は極めて分かりにくく規模等の遺構の状況は極めて不正確と思われる。

**VIII層** 灰黄色(2.5Y6/2)砂 粘性なし・しまりなし。砂丘形成時の色調と推測される。無遺物層(地山)である。

VIII層で確認された砂丘は周辺の状況から新潟砂丘I(亀田砂丘)に所属する。さらに詳しく見れば遺跡の北東に存在する茅野山方面から延びてくる亀田砂丘前列(新砂丘I-2)に相当する。新砂丘I-2の形成年代は約6,900～6,600年前〔鴨井・田中・安井2015〕とされている。

## B 旧地形の復元

既述のように道正遺跡は埋没砂丘上に立地する。この砂丘は茅野山方面から北東-南西方向に延びてくるものであり、調査対象地を斜めに横断する。第8図は砂丘の旧地形を考えるためになるべく砂丘に直行する形のエレベーション図(断面図)と平面図を掲載した。砂丘が形成されたVIII層上面の地形図と上層遺跡が廃棄された頃のVd層下部の地形図である。

新砂丘I-2が形成された時期に近いVIII層上面の平面図を見ると、海側の等高線は密で内陸側は粗である。これは沿岸洲の砂浜が北西季節風に吹き上げられたこと(飛砂)によって急斜面になるのである。一方、内陸側は吹き上げられた飛砂がゆっくり降下することによって緩斜面になるものである〔和田・阿部ほか2018〕。ちなみに海側は約35度の急斜面、内陸側は約15度の緩斜面である。砂丘頂上部は相対的に極めて緩い弧状ないしは平坦状を示すものの、平面図を見る限り極めて緩やかな等高線の粗密が見られる。

遺跡が廃棄された頃のVd層下部の平面図の等高線は、海側が密で内陸側は粗であるものの、VIII層上面に比べると等高線の間隔は明らかに広がりを持つ。断面図を見ても砂丘の傾斜は緩くなり、海側で約14°、内陸側で約9°を示し、傾斜は格段に緩くなる。これは新砂丘I-2形成後の風雨や草木の繁茂などの自然環境の変化も想定されるものの、最も大きい要因に縄文時代晩期中葉、古墳時代前期、平安時代の人々の活発な活動が影響したものと考えている。

## 第3節 遺 構 (図版7～43、写真図版5～56、別表1・2)

### A 遺構の記述方法

#### 1) はじめに

本報告で記述する遺構は第2次～第4次(2019～2021年度)調査の3か年分を対象とする。遺構数は膨大で

多様である。

全体的な傾向は、全体図、分割図、全景写真、分割写真などで表し、本文で説明した。個々の遺構の表記や説明は、図面図版、写真図版、遺構観察表を用い、本文で記述した。

## 2) 遺 構 略 号

発掘調査時から遺構の略号を用い遺構 No. に付した。遺構の略号は『発掘調査のてびき』〔文化庁文化財部記念物課 2010〕にならった。

SI：竪穴建物。地表を掘り下げ床面をつくった建物。中層で大型竪穴建物が2棟検出されている。

SB：掘立柱建物。地面を掘った穴の中に建物の軸部となる柱の根元を入れ、その周りの空隙を埋め戻して柱を固定した基軸構造の建物。上層で9棟検出されている。

SE：井戸。水を得るために地面を掘り、地下の帯水層から湧き出る地下水を溜めて汲み取るための施設。上層で1基検出されている。

SK：土坑。人的に掘られた穴の総称とされているが、ピットに比べると大きく竪穴建物に比べると小さい穴である。径がおおむね1m前後から2m程度のものである。上・中・下層の各層で検出されている。

SJ：土器埋設遺構。ピット状の穴に単独で土器が埋設された遺構。下層で5基検出されたが、穴の形状が不明なものがある。

SD：溝。人為的に掘削された、細長くくぼんだ遺構。上・中層で検出されている。

SA：柵（塀）。掘立柱建物に含まれないピット列。上層で2基検出されている。

P：柱穴・ピット。土坑に含まれない小さな穴。径20～60cm程度の穴である。上・中層で多く検出されている。下層では遺構の覆土と周囲の土層との識別ができず、検出できなかった。

SX：その他の遺構。上記の遺構に含まれない遺構をSXとした。上・中層で4基検出した。

## 3) 遺構観察表、掘立柱建物観察表、及び本文の記載項目

調査年次 第1次（2018年度）調査の試掘調査を経て、第2次～第4次（2019～2021年度）調査の本発掘調査の年次である。

位 置 溝や竪穴建物など大規模な遺構は大グリッドで、土坑、ピットなどの小規模な遺構は小グリッドで表記した。

確認層位 遺構を見つけた層を基本層序で表した。第2次調査ではVI層の分層が不十分で、上層遺構はすべてVI層としたが、VIa層である。第3次調査ではVI層をVIa、VIb、VIc層の3分し、それぞれの層の確認層位を記入した。VII層は第2次調査ではVII層の分層が不十分で、遺構はVII層としたが、第3次調査ではVII層をVIIa、VIIb層の2分し、それぞれの層の確認層位を記入した。

重複関係 遺構の切り合い関係であり、（旧遺構<新遺構）のように「<」を用いた。同じ遺構面での切り合い関係であり、上層遺構と中層遺構のように明らかに上層遺構が新しく、中層遺構が古い場合は切り合い関係を省略した。

時 期 上層＝平安時代（9世紀後半）、中層＝古墳時代前期（4世紀）、下層＝縄文時代晩期中葉でほぼ確定していることから、それぞれに時期を記入した。

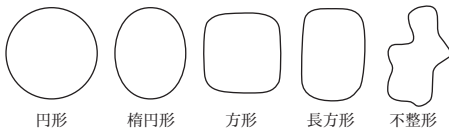
主軸方位 遺構の長軸（長径）方向である。

規 模 遺構の長軸（長径）は最大長を、短軸（短径）は長軸に直行する最大幅とした。深さは確認層位からの深さである。なお底面の標高は、底面標高として記した。遺構が何らかの理由で全体規模が不明な場合は、（括弧）付けて現存値を記入した。

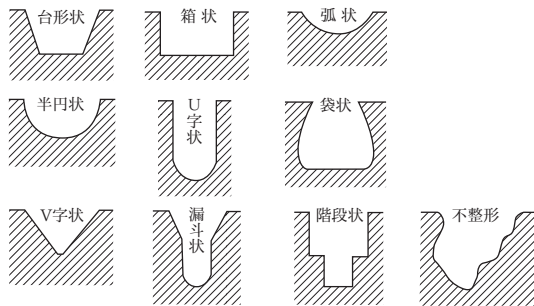
形 態 遺構の平面形態、断面形態は第10図〔加藤1999〕のように分類し、あてはまる形態を記入した。なお全形は明らかでないが、形態が推定できる場合は（括弧）付けて記入した。

覆 土 遺構の覆土は、分層された数を記入し、堆積状況は第9図〔荒川ほか2004〕のように分類し、あては

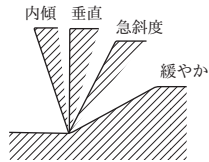
平面形態の分類



断面形態の分類

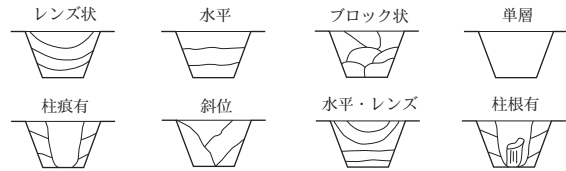


側壁の傾斜状況



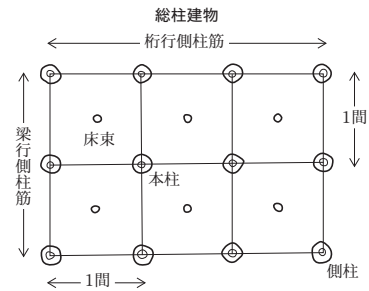
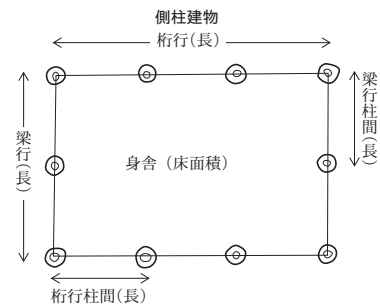
円形	長径が短径の1.2倍未満のもの。
楕円形	長径が短径の1.2倍以上のもの。
方形	長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
長方形	長軸が短軸の1.2倍以上のもの。
不整形	凸凹で一定の平面形を持たないもの。
台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面を持たない楕状で、急斜度に立ち上がるもの。
U字状	確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
袋状	確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾した後に垂直ないし外傾して立ち上がるもの。
V字状	点的な底部をもち、急斜度に立ち上がるもの。
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
階段状	階段状の立ち上がりを持つもの。
不整形	左右が大きく非対称または凸凹が激しいもの。

第10図 遺構の平面形態と断面形態の分類(加藤1999に一部加筆)



レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
水平	複数層が水平に堆積する。
ブロック状	ブロック状に堆積する。
単層	覆土が単一層のもの。
柱痕有	柱痕と思われる土層が堆積するもの。
斜位	斜めに堆積するもの。
水平・レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。
柱根有	柱根が認められるもの。

第9図 遺構覆土の堆積状況の分類 (荒川2004に一部加筆)



第11図 掘立柱建物の各部の名称と計測位置

まる堆積状況を記入した。なお、本文中で柱穴の柱根・柱痕の周りの人為的な埋土は「掘方埋土」という表記をした。

**出土遺物** 遺構出土の遺物は土器、土製品、石器、石製品、木製品、金属製品、その他を記入した。なお古墳時代の土師器は(墳)、平安時代の土師器は(平)を付し区別した。また報告書に掲載した遺物は図版No.、掲載遺物No.を付した。

**備考** 計測項目や観察項目がなく、各遺構の特徴で必要な事柄を記入した。なお掘立柱建物の各部の名称と計測位置は第11図のようにした。

B 遺構の概要

検出した遺構は第2次調査で122基、第3次調査で293基、第4次調査で59基で総数494基になる。しかし、溝のように年度をまたがって、同一遺構に別番号を付けた遺構を整理すると総数は第7表のとおり471基<sup>1)</sup>になる。時代別の内訳は上層(平安時代)341基、中層(古墳時代前期)115基、下層(縄文時代)15基である。上層に所属する遺構は全以降の72%を占め、中層の25%、下層の3%を大きく上回る。これは上層遺構の残りの

1) 遺構総数は検出遺構に遺構種別・No.を付けたものに限られる。上層(平安時代)のピット(P)のいくつかは遺構総数に含めていない。

第7表 遺構集計表

層位	所属時期	竪穴建物 (SI)	掘立柱建物 (SB)	井戸 (SE)	土坑 (SK)	土器埋設遺構 (SJ)	溝 (SD)	柵 (SA)	柱穴・ピット (P)	その他の遺構 (SX)	合計
上層	平安時代		9	1	18		12	2	298	1	341
中層	古墳時代前期	2			38		13		59	3	115
下層	縄文時代晩期				10	5					15
	合計	2	9	1	66	5	25	2	357	4	471

良さと遺構覆土などのわかりやすさによるところが大きい。逆に中・下層の遺構の少なさは、上層遺構による中・下層遺構への破壊を含め、遺構覆土と周囲の土層との識別の難しさに起因するものと考えられる。

遺構種別の内訳は竪穴建物 (SI) 2 棟、掘立柱建物 (SB) 9 棟、井戸 (SE) 1 基、土坑 (SK) 66 基、土器埋設遺構 (SJ) 5 基、溝 (SD) 25 条、柵 (SA) 2 列、その他の遺構 (SX) 4 基、柱穴・ピット (P) 357 基となる。上層では掘立柱建物 9 棟の検出、中層では大型竪穴建物 2 棟の検出が目される。

以下、検出層別、遺構種別ごとに記述する。

#### 1) 上層遺構の概要

既述のように上層では Vd 層が遺物包含層で VIa 層上部が遺構確認面である。しかし VIa 層は標高 0.1 ~ 0.3m より低い地点で堆積する層であり、これより高い標高では堆積していない。したがって、標高が 0.1 ~ 0.3m より高い地点では VIc 層が遺構確認面となる。

上層で検出された遺構は掘立柱建物 (SB) 9 棟、井戸 (SE) 1 基、土坑 (SK) 18 基、溝 (SD) 12 条、柵 (SA) 2 列、柱穴・ピット (P) 298 基、その他の遺構 (SX) 1 基である。全体的な遺構の分布は砂丘の海側 (西側) の急斜面が緩斜面に変わる 1C-10I ~ 1C-10J、2C-1J、2C-2I グリッド (以下、グリッドを省略) から東の砂丘頂上部にかけて多く分布する。砂丘頂上部から東に緩く傾斜する西調査区と東調査区境の排水路を挟んだ内陸側 (東側) では急速に遺構が減少する。

##### a 掘立柱建物 (SB)

9 棟のうち北西部の砂丘上の 1C-9I・10I、1C-9J・10J に 4 棟が、南西部の砂丘上の 2C-2I、2C-1J・2J に 3 棟が、砂丘頂上部の 2D-1A と 2D-1B・1C 境に各 1 棟が分布する。すべて 3×2 間の規模で、北西-南東方向に主軸を向ける。

9 棟のうち 6 棟が総柱建物で、3 棟が側柱建物である。

#### SB330 (図版 9・12、写真図版 7・13・14)

調査区南西部の 2C-1I・1J・2J に位置し、砂丘西側の平坦地に立地する総柱建物である。規模は桁行 3 間 (7.26m)、梁行 2 間 (4.75m) で床面積 34.67m<sup>2</sup> を測る。主軸方向は北西方向を向き N-29°-W を示す。柱間寸法は桁行柱間長が 2.33 ~ 2.59m、梁行柱間長が 2.17 ~ 2.51m で比較的均等である。桁行柱筋、梁行柱筋は通りが良く、ほぼ一直線に柱穴が並ぶ。P294、P280 は規模が側柱とほぼ同じため本柱と推定され、P279 もその可能性がある。本柱の柱間寸法は桁行方向で 2.11 ~ 2.85m、梁行方向では 2.09 ~ 2.65m とばらつきが見られる。本柱は桁行方向では柱のとおりが良く、梁行方向では P294 は通りが良く、P280 はややずれる。P298、P299、P389、P388 は側柱や本柱に比べ規模が小さく床束と推定され、おおむね側柱と本柱の対角線付近に位置する。P300、P376、P387 も床束の可能性のあるものの、断定できなかった。床束は打ち込み柱と考えられる。各柱穴では柱根の残りが非常に良く、9 基の柱穴で検出された。柱根は VIIa 層 (砂丘上部) を掘り込んで据えられ、掘方には VIa 層 (灰白色シルト) が充填されていた。SB330 内には SK281 と SK284 が存在するが、土坑より古い。遺物は主に古墳時代の土師器、平安時代の土師器の細片、柱根 (図版 120 4~8) が出土している。

遺物の自然科学分析の結果は、柱根の樹種同定で P290・P292・P293・P296・P373 がトネリコ属、P295 がケヤキ、P342 がコナラ属コナラ節、P371 がサワラである。P290 柱根の放射性炭素年代測定 (暦年較正用) で 1,249±22 (yrBP) という値が得られている。



## SB366 (図版 10・13、写真図版 14・15・16)

調査区中央部の 1D-10A、2D-1A・1B に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する側柱建物である。規模は主要な側柱で見ると桁行 3 間 (7.35m)、梁行 2 間 (4.48m) で床面積 29.81m<sup>2</sup> を測る。主軸方向は北西方向を向き N-36°-W を示す。東側の桁行柱筋には 9 基のピットが認められ、このうち北から P363、P287、P365、P364 が 1 間間隔に配置され、主要な柱穴と推定される。西側の桁行柱筋には 5 基のピットが認められ、このうち北から P310、P309、P307、P375 が 1 間間隔に配置され、主要な柱穴と推定される。なお西側の桁行柱筋の北 1.02m 延長上に P311 があり、周辺にはほかの遺構と関連するものがないことから SB366 に伴う可能性がある。また両側の桁行柱筋の間には P308 と P286 があり、対をなしている。規模が小さく浅いため、間仕切柱の可能性はある。桁行柱筋、梁行柱筋は通りがやや悪いものが見られ、直線からややずれて柱穴が並ぶ。

柱間寸法は桁行柱間長が 1.56 ~ 2.75m で、西側桁行柱筋 1 間目を除いておおむね適切な柱間長である。梁行柱間長は 2.00 ~ 2.26m でほぼ均等である。P305 は身舎の北から 1 間目にある柱穴であり、側柱と同規模であることから本柱と推定した。本柱からの柱間寸法は、梁行方向で 2.00m と 2.21m、桁行方向で 1.88m を測る。各柱穴からは柱根は認められなかったが、覆土の堆積状況から P309、P319、P363、P375 で柱痕を確認した。柱痕内には主に砂混じりの灰色シルトが堆積し、掘方埋土には暗灰黄色シルトや黒褐色細粒砂 (VIIa 層相当) が充填されている。SB366 の身舎には南東方向から延びてくる SD306 と SD304 が存在する。いずれも SB366 よりやや上位で確認されていることから、SB366 より新しい。遺物は、主に古墳時代の土師器の細片が出土している。

## SB367 (図版 10・14、写真図版 16・17・18)

西調査区中央部やや東寄りの 2D-1B・1C に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する総柱建物である。規模は主要な側柱で見ると桁行 3 間 (5.84m)、梁行 2 間 (3.16m) で床面積 16.93m<sup>2</sup> を測る。主軸方向は北西方向を向き N-51°-W を示す。西側の桁行柱筋には 6 基のピットが認められ、このうち北から P360、P347、P362、P390 が 1 間間隔に配置され、主要な側柱と推定される。桁行柱筋は通りが良く、ほぼ一直線上に並ぶ。梁行柱筋の北側はほぼ一直線上に並ぶ。南側は中間の柱穴が身舎 (内側) に 0.73m 入り込んでおり、梁行柱筋は大きくずれる。柱間寸法は桁行柱間長が 1.62 ~ 2.62m とばらつきがあるが、桁行の北から 1 間目が短く、2 間目と 3 間目が長い寸法を取るからである。梁行柱間長は 1.28 ~ 1.73m で、西側、東側でそれぞれ比較的均等である。P277、P393 は規模が側柱とほぼ同じため本柱と推定される。梁行との柱筋も通りがよく、ほぼ一直線上に並ぶ。本柱の柱間寸法は桁行方向で 1.42 ~ 2.29m とばらつきがあるものの、北から 1 間目と 3 間目が同じで、2 間目が長いことによる。梁行方向では 1.35 ~ 1.97m とばらつきがあるものの、西側、東側の梁行柱間寸法と同じくほぼ均等である。各柱穴からは柱根は認められなかったが、覆土の堆積状況から P361 で柱痕を確認した。P361 は柱痕覆土・掘方埋土はいずれも黒褐色細粒砂 (VIIa 層相当) である。砂丘頂上部では VIa 層 (黄灰色シルト) の堆積が希薄だったことに起因している。また P274 は西側梁行柱筋の北から 3 間目の P362 近くにある柱穴であるが、断面観察から打ち込み柱と推定される。SB367 の身舎には南東方向から延びてくる SD271 が存在する。P276 との重複関係を見ると、P276 に切られている。したがって、SB367 は SD271 より新しい。遺物は主に縄文土器や古墳時代の土師器の細片が出土している。

## SB482 (図版 9・15、写真図版 10・18・19・20)

調査区北西部の 1C-10I・10J に位置し、砂丘西緩斜面に立地する総柱建物である。規模は桁行 3 間 (6.50m)、梁行 2 間 (5.00m) で床面積 30.41m<sup>2</sup> を測る。主軸方向は北西方向を向き N-52°-W を示す。柱間寸法は桁行柱間長が 1.88 ~ 2.32m、梁行柱間長が 2.27 ~ 2.55m で比較的均等である。桁行柱筋、梁行柱筋は通りが良く、ほぼ一直線に柱穴が並ぶ。ただし P250 は西側桁行柱筋の P249 ~ P260 の中間の 0.40m 外側に存在する。周辺に関連する遺構がないため西側桁行柱筋を支える柱穴と推定される。身舎に存在する P257 と P323 は側柱と規模が同じため本柱とした。本柱の柱筋は桁行方向で P323 がややずれ、梁行方向では外側に大きくずれる。柱

間寸法は桁行方向では1.43～2.94m、梁間方向では2.16～2.73mと大きく異なるのはP323のずれによるものである。本柱P257と西桁行柱筋の北から1間目のP249、東桁行柱筋の北から1間目のP210のほぼ中間には柱筋からはややずれるがP256とP258が存在する。規模は本柱や側柱と比べ同規模である。本柱を支えるものや床束を推定したが断定できないものの、SB482を構成する何らかの柱穴と考えられる。なお東南隅のP209の近くにP324が存在している。規模が小さく本柱P323との中間近くにあることから床束の可能性はある。検出された柱穴のうちP258には柱根がわずかに残り、P209とP250には柱痕が認められた。柱痕の覆土は黄灰色系のシルト（Ⅵa層近似）で、掘方埋土は黒褐色細粒砂（Ⅶa層相当）である。なおSB482はSB483～485と重複するが、柱穴同士の切り合いが見られず新旧関係は不明である。またSK222と重複するが、これに切られておりSB482が古くなる。遺物は主に古墳時代の土師器、平安時代の土師器・須恵器の細片が出土している。

#### SB483（図版9・16、写真図版10・20・21・22）

調査区北西部の1C-9I・9J・10I・10Jに位置し、砂丘西緩斜面に立地する総柱建物である。調査区外の北側に延びており、全容は明らかでない。規模は桁行3間（現存値7.43m）、梁行2間（4.47m）で、床面積は現存値で28.61m<sup>2</sup>を測る。主軸方向は北西方向を向きN-37°-Wを示す。柱間寸法は桁行柱間長が遺存するもので1.87～2.52mと大きく異なり、梁行柱間長は遺存するもので2.14mを測り均等である。柱筋は検出したものを見る限り、西桁行柱筋は一直線上に並び、東桁行柱筋、南梁行柱筋は一部柱筋からずれるものが見られる。西桁行柱筋の3間目のP262とP251のほぼ中間やや外側にはP252が、西桁行柱筋上の北から1間目にはP245が存在する。規模が小さいものの西桁行柱筋と何らかの関係があるものと推定している。身舎の桁行方向のほぼ中央にはP199とP201があり、側柱と規模がほぼ同じことから本柱とした。本柱の柱間寸法は梁行方向で1.85・2.93mと大きく異なるが、P201がP199寄りに構築されているためである。梁行方向では2.13～2.30mとほぼ均等である。本柱が身舎の桁行方向のほぼ中間に立てられたからである。身舎内にはP244・P197・P202・P313～P316・P351がある。P244を除いて規模が小さく、側柱や本柱の対角線上に位置するものが多いことから床束と推定される。P244は規模が大きく柱痕も確認されることから、床束と推定したが明確でない。検出された柱穴のうちP204には柱根がわずかに残り、P206・P244・P251には柱痕が認められた。柱痕の覆土は主に黄灰色系シルト（Ⅵa層近似）が、掘方埋土は黒褐色系の細粒砂（Ⅶa層相当）である。なおSB483はSB482・SB484・SB485と重複するが、柱穴同士の切り合いが見られず新旧関係は不明である。遺物は主に縄文土器・古墳時代の土師器・平安時代の土師器の細片が出土している。

P204の柱根の樹種同定ではクマシデ属イヌシデ節という結果が得られている。

#### SB484（図版9・17、写真図版22・23）

調査区北西部の1C-9I・9J・10I・10Jに位置し、砂丘西緩斜面に立地する側柱建物である。調査区外の北側に延びており、全容は明らかでない。規模はこれまでの掘立柱建物の在り方から桁行3間（現存値5.13m）、梁行2間（4.38m）で、床面積は現存値で14.98m<sup>2</sup>を測る。主軸方向は北西方向を向きN-43°-Wを示す。柱間寸法は桁行柱間長が遺存するもので2.07・2.32m、梁行柱間長が遺存するもので2.13・2.21mを測り、各1間はほぼ均等である。柱筋は検出したものを見る限り、西桁行柱筋・南梁行柱筋は柱のとおりは良く、ほぼ一直線上に並ぶ。検出された柱穴のうちP198・P200・P207には柱痕が認められた。柱痕の覆土は主に黄灰色系の砂質シルト（Ⅵa層の砂混じり）が、掘方埋土は黒褐色系の細粒砂（Ⅶa層相当）である。なおSB484はSB482・SB483・SB485と重複するが、柱穴同士の切り合いが見られず新旧関係は不明である。遺物は主に縄文土器・平安時代の土師器・須恵器（図版45-1）が出土している。

#### SB485（図版9・17、写真図版22・23・24）

調査区北西部の1C-9I・9J・10I・10Jに位置し、砂丘西緩斜面に立地する側柱建物である。調査区外の北側に延びており、全容は明らかでない。規模はこれまでの掘立柱建物の在り方から桁行3間（現存値4.50m）、梁行2間（4.12m）で、床面積は現存値で22.77m<sup>2</sup>を測る。主軸方向は北西方向を向きN-43°-Wを示す。柱間寸

法は遺存するもので東桁行柱間長が1.18m、西桁行柱間長が2.21・2.32mで大きく異なる。ただし、東桁行は1間まで検出できていない可能性もある。梁行柱間長は遺存するもので2.05・2.10mを測り、ほぼ均等である。柱筋は検出したものを見る限り、西桁行柱筋はやや並びは悪いが、南梁行柱筋は柱のとおりは良く、ほぼ一直線上に並ぶ。検出された柱穴のうちP211・P224には柱痕が認められた。柱痕の覆土は主に黄灰色系の砂質シルト(VIa層の砂混じり)が、掘方埋土は黒褐色系の細粒砂(VIIa層相当)である。なおSB485はSB482～SB484と重複するが、柱穴同士の切り合いが見られず新旧関係は不明である。遺物は主に古墳時代の土師器・平安時代の土師器の細片が出土している。

#### SB521 (図版9・18、写真図版24・25)

調査区南西部の2C-1I・2I・2Jに位置し、砂丘西の平坦地に立地する総柱建物である。調査区外の南側に延びており、全容は明らかでない。規模はこれまでの掘立柱建物の在り方から桁行3間(6.94m)、梁行2間(4.82m)で、床面積は現存値で23.90m<sup>2</sup>を測る。主軸方向は北西方向を向きN-38°-Wを示す。柱間寸法は桁行柱間長が遺存するもので1.85～2.90mと大きく異なる。これは北から2間目の柱間長が短くなるためである。梁行柱間長は遺存する北梁行柱間長で2.22・2.23mを測り均等である。柱筋は検出したものを見る限りおおむねとおりが良く、桁行柱筋、北梁行柱筋は一部ずれが見られるもののほぼ直線状に並ぶ。身舎の桁行方向ほぼ中央にはP509とP526があり、側柱と規模がほぼ同じことから本柱とした。本柱の柱間寸法は桁行方向で2.84・1.50mと大きく異なるが、桁行柱間長の北から1間目と2間目と同じ長さである。梁行方向では2.45～2.98mと大きく異なる。P526の本柱が西側にずれるためである。検出された柱穴のうちP374・P506・P510・P513・P525には柱根が残り、P514には柱痕が認められた。柱根上及び柱痕の覆土、掘方埋土は主に灰色系砂質シルト～シルト(VIa層近似)である。なおSB521はSB558と重複するが、柱穴同士の切り合いが見られず新旧関係は不明である。遺物は主に縄文土器、古墳時代の土師器、平安時代の土師器(図版45-2・3)・須恵器、石器、器種不明木製品(図版120-10)、柱根(図版120-11～13)などが出土している。器種不明木製品はP509の底面から出土していることから埋納したものと思われる。

遺物の自然科学分析の結果は、柱根の樹種同定でP510・P525がトリネコ属、P506がクリ、P513がニレ属、P514がヤナギ属である。P513柱根の放射性炭素年代測定(暦年較正用)で1,298±22(yrBP)という値が得られている。

#### SB558 (図版9・19、写真図版26・27)

調査区南西部の2C-1I・1J・2Jに位置し、砂丘西の平坦地に立地する総柱建物である。規模は桁行3間(4.80m)、梁行2間(4.02m)で床面積19.24m<sup>2</sup>を測る。主軸方向は北西方向を向きN-38°-Wを示す。柱間長は桁行柱間長が1.38～1.93mで大きく異なるものの、両桁行の対となる桁行柱間長はほぼ同じである。梁行柱間長は1.92～2.12mで比較的均等である。桁行柱筋、梁行柱筋はとおりが比較的良く、ほぼ一直線に柱穴が並ぶ。南梁行柱筋のP541とP561のほぼ中間のP534は柱根を持つ柱穴であり、梁行柱筋を構成する柱穴と推定される。P379・P386は規模が側柱とほぼ同じため本柱と推定される。本柱の柱筋は桁行方向では通りが良いが、梁行方向では大きくずれて配置されていることから柱並びは非常に歪んでいる。本柱の柱間長は桁行方向で北から1.59・1.07・2.28mである。本柱が北西方向に寄っているためである。梁行方向では1.97～2.35mとややばらつきが見られる程度である。桁行方向では柱穴の位置は北西に大きくずれるが、桁行の両側柱からは等距離に配置されている。検出された柱穴のうちP343・P372・P534・P541で柱根が出土し、P297・P341で柱痕が認められた。これによれば覆土は上層が灰色系シルト(VIa層近似)、下層が黒褐色系細粒砂(VIIa層相当)で覆われ、底面に柱根が見られるものである。したがって、VIIa層(砂丘上部)まで掘り込んで柱根を据えたと推定される。SB558はSB330・SB521と重複するが柱穴が直接切り合うことがなく新旧関係は不明である。ただし、側柱のP341はP388と直接、SK281と間接に重複する。それによればP341(SB558)が古く→P388→SK281が新しい。遺物は主に古墳時代の土師器、平安時代の土師器、柱根(図版121-14・15)が出土している。

P372 柱根の樹種同定ではハンノキ属ハンノキ節という結果が得られている。

**b 井 戸 (SE)**

1 基検出している。

**SE268 (図版 9・20、写真図版 10・27)**

調査区北西部の 1C-10J3 に位置し、砂丘西の平坦地に立地する素掘りの井戸で、底面に割り貫き材の水溜を持つ。本遺構の北西から南にかけて 1m ほど離れて SB482 ~ SB485 の掘立柱建物群があり、これらの遺構と関係があるものと思われる。規模は径 1.55 ~ 1.53m の円形、深さ 0.80m、断面は割り抜き材の水溜を据えてあることから漏斗状を呈する。覆土の堆積状況は、レンズ状で自然堆積である。割り抜き材の水溜は径 40cm ほどの円形で、外側の材の厚さは 4.8cm ほどである。井戸底面の中央からやや北西寄りに据えられていた。井戸の北縁には P267 があり、これに切られている。遺物は縄文土器・古墳時代の土師器・平安時代の土師器・割り貫き材の水溜 (図版 121-16) が出土している。

遺物の自然科学分析は、水溜の樹種同定ではコナラ属コナラ節という結果が得られている。また放射性炭素年代測定 (暦年較正用) で  $1,216 \pm 22$  (yrBP) という値が得られている。

**c 土 坑 (SK)**

18 基検出した。すべて西調査区で見つかっており、砂丘頂部から西斜面にかけて分布する。東調査区からは検出されておらず、内陸側の砂丘緩斜面では皆無である。規模、平面形、断面形もさまざまに多様なありかたを示す。以下、個別に説明する。

**SK8 (図版 8・20、写真図版 27)**

調査区西部の 2C-1H12・13・17・18 に位置し、砂丘西斜面にあるテラス状平坦地に立地する。規模は径 1.69 ~ 1.45m、深さ 0.12m を測る。平面円形、断面緩い弧状を呈する。覆土は暗褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

**SK85 (図版 10・20、写真図版 27・28)**

調査区中央部のやや南寄りの 2D-1B19 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。規模は径 1.22 ~ 1.10m、深さ 0.34m を測る。平面円形、断面半円状を呈する。覆土は褐灰色砂質シルトの単層であるが、底面下からオリブ黒色砂の噴出が見られる。遺物は古墳時代の土師器 (図版 66-122・123)・石器が出土している。

**SK136 (図版 10・20、写真図版 28)**

調査区中央部のやや北寄りの 1D-10B5・10 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。規模は長軸 1.09m・短軸 0.96m・深さ 0.10m を測る。覆土は灰黄褐色シルト (VIa 層近似) の単層であるが、ブロック状ないしは攪乱状に入っている。したがって、平面不整形、断面不整形を呈す。遺物は古墳時代土師器、平安時代土師器、石器が出土している。

**SK140 (図版 10・20、写真図版 28)**

調査区中央部のやや北寄りの 1D-10C6・7 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。規模は径 0.77 ~ 0.67m・深さ 0.24m を測る。平面円形、断面台形状を呈する。覆土は灰黄褐色砂・黒褐色砂の 2 層に識別され、レンズ状堆積とされるが、1 層はブロック状ないしは攪乱状の堆積である。遺物は平安時代土師器・須恵器が出土している。

**SK141 (図版 10・20、写真図版 28)**

調査区中央部の北寄りの 1D-9C22・1D-10C2 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。遺構は西調査区の東側に延びるため、全容は明らかでない。規模は長軸 1.76m 以上、短軸 1.86m を測る大型土坑と推定される。平面形不明、断面浅い弧状を呈する。覆土は黒褐色砂の単層である。遺物は古墳時代土師器が出土している。

**SK194 (図版 9・20、写真図版 28・29)**

調査区西部の 2C-114・5 に位置し、砂丘西の平坦地西端に立地する。規模は長軸 1.65m・短軸 1.31m・深さ

0.35mを測る。平面(長)方形、断面箱状を呈する。覆土は灰オリーブ色系の3層に識別されレンズ状に堆積するが、いずれの層にもVIa層が混入しまだら状に堆積する。3層とも極めて近似した土層で短時間に埋め戻したものと推定した。このような土坑は「人為的埋設土坑」〔坂上2003〕と呼称されているが、本遺跡では1基のみである。周辺遺跡では沖ノ羽遺跡〔星野ほか1996〕、上浦遺跡〔坂上2003〕で多数検出され、遠隔地では柏崎市宝田遺跡〔飯坂ほか2015〕などに類例がみられる。遺物は平安時代土師器(図版45-5・10・11)・須恵器(図版45-4)、石器が出土している。

#### SK222 (図版9・20、写真図版29)

調査区西部の1C-10J17・22に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。SB482の西桁行柱筋のP261と重複し、上部を切って構築している。したがって、SB482より新しい。規模は径0.62～0.57m・深さ0.13mを測る。平面円形、断面弧状を呈する。覆土は灰色砂質シルト(Vd層近似)の単層であり、VIa層ブロック、炭化粒、遺物が多く混入していた。

遺物は主に中層から下に扁平礫・土師器・須恵器が重なった状態で見られたが、破損が著しいことから投棄されたものと推定される。遺物は平安時代土師器(図版45・46-9～11)・須恵器(図版45・46-6～8・12)、扁平被熱礫1点(735g)・礫3点(238g)が出土している。

#### SK236 (図版8・21、写真図版29)

調査区西部の2C-1H14に位置し、砂丘西の緩斜面に立地する。西側は削平により、上面は明らかでないものの、おおよその形状は推定できる。小型の土坑で、長軸0.64m・短軸(現存値)0.57m・深さ0.19mを測る。平面(推定)方形、断面台形状を呈する。覆土は褐灰色シルト(Vd層相当)の単層であり、下部にはVIa層相当が混入する。遺物は出土していない。

#### SK241 (図版8・21、写真図版29)

調査区南西部の2C-1H21・22に位置し、砂丘西の斜面の狭いテラス状平坦地に立地する。小型の土坑で、径0.86～0.77m・深さ0.11mを測る。平面やや不整な円形、断面浅い弧状を呈する。覆土は灰黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

#### SK281 (図版9・21、写真図版7・29・30)

調査区南西部の2C-1J18・23に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。SB330身舎内にあり、SB330の本柱のP280、同じく本柱の可能性のあるP279と重複し、これを切っている。またSB558の東側柱のP388及びP341に接し、これに切られている。新旧関係をまとめると(旧)SB330→SK281→SB558(新)になる。規模はやや大型で長軸1.93m、短軸1.50m、深さ0.31mを測る。平面やや不整な楕円形、断面弧状を呈する。覆土は暗灰黄色砂質シルトの単層である。遺物は古墳時代土師器(図版66-124)、平安時代土師器・須恵器(図版46-13～16)、石器、細型管状土錘(図版104-1)が出土している。

#### SK282 (図版10・21、写真図版30・31)

調査区中央部の2D-1B17・18に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。南側は土側溝で破壊され、全容は明らかでない。長軸(現存値)0.72m、深さ0.25mを測り、断面台形状を呈する。覆土は暗灰黄色シルトの単層である。遺物は古墳時代土師器(図版66-125)が出土している。

#### SK284 (図版9・21、写真図版7・30)

調査区南西部の2C-1J13・14・18・19に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。SB330身舎内にあり、SB330の床束のP488及び床束の可能性のあるP326と重複し、これを切っている。また土坑内にSB330の東桁行側柱があると予想されたが、切っているせいか検出できなかった。したがって、SB330より新しい。規模はやや大型で径2.50～2.05m・深さ0.38mを測る。平面楕円形、断面凹凸があるものの台形状を呈する。覆土は3層に識別され、1層黒褐色砂質シルト(Vd層近似)、2層暗灰黄色シルト(Vd層近似)、暗褐色シルト質砂(VIc層近似)が堆積する。堆積状況から覆土2・3層が自然堆積と推定される。1層は炭化物と平安

時代の土器、細型管状土鍾が多く出土したことから廃棄場とされたものと推定される。遺物は平安時代土師器（図版47-21～32）・黒色土器・須恵器（図版46・47-17～20）・土鍾（図版104-2～4）と古墳時代土師器（図版67-126）が多く出土し、覆土2・3層では平安時代の遺物は皆無で、古墳時代土師器が少量出土している。

**SK349**（図版10・21、写真図版30）

調査区中央部の1D-10A8・9・13・14・15・18・19に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。大型で規模は長軸2.81m・短軸2.69m・深さ0.25mを測り、主軸方向はN-47°-Wを示す。平面方形、断面台形状を呈する。覆土は4層に識別されレンズ状に堆積する。1層は暗灰黄色シルト（Vd層近似）、2層は炭化物層、3層は暗灰黄色シルト（Vd層近似）と暗褐色細粒砂（VIc層近似）の互層、4層は灰黄色シルト（VIa層近似）で2～4層は流れ込みである。1層は流れ込みか人為的埋め戻しか明確でなかった。Vd層近似の層でほかの層との混ざりがないため比較的短期間に堆積したものと推定した。したがって「人為的埋設土坑」〔坂上2003〕の可能性もある。遺物は1層から縄文土器、古墳時代土師器が出土している。

**SK370**（図版9・21、写真図版30）

調査区中央部やや南寄りの2C-1J25、2D-1A21に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。北西約1mにはSB330が、同じく北西約3mには本遺構とほぼ同規模のSK281・284がある。規模はやや大型で径1.83～1.60m・深さ0.31mを測る。平面円形、断面台形状を呈する。覆土は3層に識別され、レンズ状に堆積する。1層はVd層近似のオリープ黒色シルト、2層はVd層近似の灰色シルトに暗灰黄色細粒砂（VIc層近似）がブロック状に混じり、3層は黒褐色細粒砂（VIIa層近似）で側壁からの流れ込みと推定した。遺物は覆土1・2層から古墳時代土師器、平安時代土師器・黒色土器・須恵器が比較的多く出土している。

**SK502**（図版9・22、写真図版31）

調査区南西部の2C-2I11・12に位置し、砂丘西の緩斜面に立地する。南側調査区外に延びるため、全容は明らかでない。規模は長軸1.13m、短軸（現存値）0.74m・深さ0.12mを測る。平面形不明、底面は凹凸があり、やや不整な弧状を呈する。覆土は灰色砂質シルト（Vd層近似）の単層である。遺物は縄文土器が少量出土している。

**SK511**（図版9・22、写真図版31）

調査区南西部の2C-2J2に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。北側は2020年度の調査区と接するが、矢板打設の工事に際し破壊されている。したがって、全容は明らかでない。規模は長軸（現存値）0.51m・短軸0.49m・深さ0.15mを測る。平面不明、断面やや不整な弧状を呈する。覆土は灰色砂質シルト（Vd層近似）の単層である。遺物は古墳時代土師器、平安時代土師器が少量出土している。

**SK515**（図版9・22、写真図版31）

調査区南西部の2C-2J7・8に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。SB558の南梁行側柱のP534と重複するが切り合い関係は不明であった。規模は長軸1.33m・短軸0.92m・深さ0.28mを測る。平面やや不整な楕円形、断面弧状を呈する。覆土は2層に識別され、1層は灰色砂質シルト（Vd層近似）、2層は鈍い黄褐色砂（VIc層近似）に1層が少量混じる土で、1層と2層の境は凹凸が激しいことから攪乱ないしは埋め戻しの可能性がある。遺物は1層から縄文土器、古墳時代土師器、平安時代土師器が少量出土している。

**SK516**（図版10・22、写真図版31・32）

調査区中央部南寄りの2D-2A9・10に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。南側は一部矢板に接するが、全体の形状は推定できる。径1.01～0.83m・深さ0.19mを測る。平面楕円形、断面は底面が矢板打設に伴う噴砂の影響から大きくゆがみ不整形を呈す。覆土は灰色シルト（Vd層近似）の単層である。遺物は縄文土器（図版100-206）、古墳時代土師器（図版68-154）がやや多く出土している。

**d 溝 (SD)**

溝 (SD) No. を付した数は17条である。図版22～24に掲載した個別図面では15条にまとめ掲載した。遺構観察表はこの15条について属性を記述した。さらに全体図を検討した結果、12条にまとめた。溝の形状

はほぼ同じで、畑耕作に伴う溝で畝間溝（畝間）と推定される。北西－南東方向 9 条、北東－南西方向 2 条であり、これらの溝には掘立柱建物と重複するものがあり、溝と集落の関係では「居宅地内型の建物隣接型」（細井 2014）に分類される。以下、12 条にまとまった畝間溝（畝間）を説明する。

**SD91**（図版 10・22、写真図版 32・33）

調査区中央部の 2D-1B に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。多くの畝間溝と異なり、北東－南西方向に延びる。北西に約 3m 離れ SD283 があり、形状・方向から同様の畝間溝と推定される。長さ 4.16m・幅 0.43m・深さ 0.30m を測り、断面半円状を呈する。覆土は灰黄褐色砂（Vd 層近似）の単層である。遺物は縄文土器、古墳時代土師器（図版 69-160・161）がやや多く、剥片類 1 点、礫少量が出土している。

**SD271**（図版 10・22、写真図版 17・32）

調査区中央部の 2D-1B・1C に位置し、砂丘頂上部東寄りの平坦地に立地する。北西－南東方向に延び、東側で調査区外に出るために全容は不明である。SD271 を含め SD275・396・507・508 の 5 条の溝がほぼ等間隔で並行するが、形状・方向から同様の畝間溝と推定される。長さ（現存値）10.73m・幅 0.30～0.58m 前後・深さ 0.30m ほどであり、断面台形状ないし U 字状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層は灰黄色シルト（Vd 層近似）、2 層は暗灰黄色シルト（Vic 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は主に 1 層から縄文土器（図版 94・95-97・108）、古墳時代土師器（図版 70-175～179）、平安時代土師器がやや多く、剥片類 2 点、礫・被熱礫が少量出土している。なお、SD271 は SB367 の本柱 P393、南梁行側柱 P276 と重複するが、P276 に切られている。したがって SB367 より古くなる。

**SD275・524**（図版 10・22・23、写真図版 32・33）

調査区中央部の 1D-10B、2D-1B・1C に位置し、砂丘頂上部東寄りの平坦地に立地する。北西－南東方向に延び、東側で調査区外に出るために全容は不明である。形状・方向から畝間溝と推定される。検出された部分の長さ（現存値）17.62m・幅 0.35～0.70m 前後・深さ 0.15～0.20m ほどであり、断面弧状ないしは半円状を呈する。覆土は単層ないしは 2 層に識別され、2 層に分層された場合は 1 層暗灰黄色シルト（Vic 層近似）、2 層黄灰色砂質シルト（Vic 層近似）で斜位に堆積する。遺物は 1 層から縄文土器、古墳時代土師器（図版 70-180）がやや多く出土している。なお、SD275 は SD283 と直交する形で重複し、これに切られている。したがって SD283 より古くなる。また SA487-P394 と重複するが、切り合い関係は不明である。

**SD285・396・512**（図版 10・22・23、写真図版 33・34・35）

調査区中央部の 1D-10A、2D-1B・1C・2C に位置し、砂丘頂上部東寄りの平坦地に立地する。北西－南東方向に延び、東側で調査区外に出るために全容は不明である。形状・方向から畝間溝と推定される。検出された部分の長さ（現存値）20.57m・幅 0.40～0.70m 前後・深さ 0.20m ほどであり、半円状を呈する。覆土は単層ないしは 2 層に識別され、2 層に分層された部分は 1 層暗オリーブ色シルト（Vd 層近似）、2 層黒褐色細粒砂（Vic 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は 1 層から縄文土器少量、古墳時代土師器（図版 70-182・183）やや多く、小礫 3 点、磨石類 1 点が出土している。なお SD285 は P288 と重複するが、P288 を切っている。また SD285 の約 7m 北西には SD327 が存在し、形状・方向が似ているが、本遺構と同じかどうか判断できなかった。

**SD304・507**（図版 10・22・23、写真図版 33・34）

調査区中央部の 2D-1A・1B、2D-2B・2C に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SD304 と SD507 の間は 3.6m ほど検出されなかったが、北西－南東方向に延び、形状・方向から同一の畝間溝と推定される。検出された部分の長さ（現存値）12.95m・幅 0.35～0.60m 前後・深さ 0.20m ほどであり、半円状を呈する。覆土は単層ないしは 2 層に識別され、2 層に分層された部分は 1・2 層いずれも灰色砂質シルト（Vd 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は 1 層から縄文土器少量、古墳時代土師器（図版 70-184・185）やや多く、平安時代土師器少量、小礫少量、剥片類 2 点、軽石製品 2 点（図版 118-138）、磨石類 1 点が出土している。なお SD304 は SB366 の本柱の可能性のある P305 と重複しこれを切っている。したがって、SD304 は SB366 より新しい。

またSD283と重複新旧関係は不明であったが、SD283が同様のSD275を切っていることからするとSD283に切られている可能性が高い。

**SD306・508** (図版10・22・23、写真図版35)

調査区中央部の2D-1A、2D-2Bに位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。検出されない部分があり3分割されていた。北西－南東方向に延び、形状・方向から畝間溝と推定される。検出された部分の長さ(現存値)9.05m・幅0.35～0.50m前後・深さ0.07～0.13mであり、断面弧状ないしは箱状を呈する。覆土は単層ないしは2層に識別されるが、Vd層近似の灰色砂質シルトまたはVIc層近似の黒褐色シルト質砂が堆積する。遺物は1層から古墳時代土師器(図版70-181)、平安時代土師器が出土している。なおSD306はSB366の身舎内に延びるが、遺構同士の切り合いが見られず新旧関係は不明である。

**SD283** (図版10・23、写真図版33)

調査区中央部の2D-1Bに位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。検出されない部分があり、3.08m離れて2分されている。多くの畝間溝と異なり、北東－南西方向に延びる。南東に約3m離れSD91があり、形状・方向から同様の畝間溝と推定される。検出された部分の長さ5.16m・幅0.30～0.40m前後・深さ0.10～0.15mを測り、断面弧状ないしは浅いU字状を呈する。覆土は単層または2層に識別されるが灰黄褐色シルト(Vd層近似)や灰黄褐色砂(VIc層近似)で構成される。遺物は縄文土器、古墳時代土師器、平安時代土師器が少量、小礫1点が出土している。なおSD275と重複し、これを切っている。SD304とも重複するがSD275との関係を見れば、SD304を切っていたと推定される。

**SD518** (図版10・23、写真図版35)

調査区中央部南寄りの2D-1A24・2A4に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。2020・2021年度調査区境の矢板打設時の工事で北西側は破壊されている。検出された範囲はわずかだが、形状・方向は周辺の畝間溝と同じことから畝間溝と推定できる。長さ(現存値)1.04m・幅0.29m・深さ0.10mを測り、断面台形状を呈する。遺物は古墳時代土師器がやや多く出土している。

**SD327** (図版9・24、写真図版34)

調査区中央部北寄りの1C-9J・10J、1D-9A・10Aに位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。北西－南東方向に延び、形状・方向から畝間溝と推定している。6.80m南東には形状・方向が同様なSD285があり、関連する可能性があるものの断定できないため別遺構とした。長さ6.31m・幅0.47m・深さ0.22mを測り、断面半円状を呈す。覆土はオリーブ褐色砂質シルト(Vd層近似)の単層である。遺物は古墳時代土師器を主体に、縄文土器、平安時代土師器が少量、石棒破片1点出土している。

**SD503** (図版9・24、写真図版34)

調査区南西部の2C-2Iに位置し、砂丘西側の平坦地に立地する。2020・2021年度調査区境の矢板打設時の工事で北西側は破壊されている。北西－南東方向に延び、1条しか検出していないが形状・方向から畝間溝と思われる。0.12m東に隣接してSD504があり、形状・方向から同様の畝間溝と推定できる。長さ(現存値)3.24m・幅0.30～0.58m・深さ0.10mを測り、断面弧状を呈す。覆土は灰色シルト(Vd層近似)の単層である。遺物は平安時代土師器(図版47-33)を主体に、縄文土器が少量出土している。

**SD504** (図版9・24、写真図版34)

調査区南西部の2C-2Iに位置し、砂丘西側の平坦地に立地する。北西－南東方向に延び、1条しか検出していないが形状・方向から畝間溝と思われる。0.12m西に隣接してSD503があり、形状・方向から同様の畝間溝と推定できる。長さ1.90m・幅0.30～0.26m・深さ0.09mを測り、断面浅いU字状を呈す。覆土は灰色シルト(Vd層近似)の単層である。遺物は出土していない。

**SD519** (図版10・24、写真図版35)

調査区中央部南寄りの2D-2A7に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。南側は調査区外に延びるため全



容は明らかでない。検出された範囲はわずかで1条の検出だが、形状・方向から畝間溝と推定した。長さ(現存値)0.70m・幅0.22m・深さ0.08mを測り、断面浅いU字状を呈する。遺物は古墳時代土師器が少量出土している。

#### e 柵(SA)

2列検出した。

#### SA352(図版10・24、写真図版35)

調査区中央部やや南寄りの2D-1A12・13に位置し、砂丘頂上部南側の平坦地に立地するピット列である。5基のピットは規模が小さく径0.11～0.16m、深さ0.09～0.15mを測る。平面円形・楕円形、断面U字状を呈する。西から東に緩い弧を描いて延び、長さ2.68mを測る。主軸方向はN-86°-Wを示す。東側のP357はSB366西桁行側柱P308に接し、さらにSB366身舎に入るが新旧関係は不明である。周辺の遺構との関連も不明である。遺物は出土していない。

#### SA487(図版10・14、写真図版16)

調査区中央部の2D-1B・1Cに位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地するピット列である。北東に0.60～0.70m離れてSB367があり、方向を同じくすることから何等かの関係があるものと予想される。5基のピットは規模がやや小さく径0.18～0.33m、深さ0.10～0.15mを測る。平面円形・楕円形、断面半円状が主体である。SA487は長さ7.80m、主軸方向はN-52°-Wを示す。最も南東のP394はSD275と重複し、これを切っている。遺物はP81で古墳時代土師器・被熱礫、P359で縄文土器が少量出土している。

SA487はSB367の西桁行柱筋に寄り添うように構築され、北西-南東方向に直線状に延びる。SB367が立地する場所は砂丘の最も高い平坦地である。推測の域を出ないが、冬場の強い北西季節風からSB387を守る風除け柵または目隠し塀の用途を想定している。

#### f その他の遺構(SX)

1基検出した。

#### SX517(図版10・24、写真図版35・36)

調査区中央部東南寄りの2D-2C2・7に位置し、砂丘頂上部東側の平坦地に立地する溝状遺構である。遺構の東側は調査区外に延びるため、全容は明らかでない。長さ(現存値)1.98m、幅0.60m前後、深さ0.29mを測り、主軸方向はN-16°-Wを示す。平面不明ながら長方形の可能性がある。断面箱状を呈する。底面付近には腐食が激しいものの板を組んだ遺構がある。側壁に沿って下部に長方形に組んだものと長辺から横断する木組みが2か所確認できた。覆土は2層に識別され、1層灰白色砂質シルト、2層灰黄褐色シルトと明青灰色シルトの混合土である。いずれもVd層近似の覆土で、水平堆積する。なお覆土は側壁の木組み板の内側と外側で違いがあるものと推定したが、違いが識別できなかった。遺物は縄文土器、古墳時代土師器、平安時代土師器・須恵器が少量、このほか木組みの板(図版121-17～22)が出土している。

遺物の自然科学分析の結果では、木組み板(図版121-17～22)の樹種同定はすべて杉である。板(図版121-18)の放射性炭素年代測定(暦年較正用)では $1,248 \pm 21$ (yrBP)という値が得られている。

#### 2) 中層遺構の概要

古墳時代前期の遺物はVIa層下部・VIc層上部(VIc1層)に含まれることから遺物包含層と認識した。遺構確認面はVIc層下部(VIc2層)である。VIc1層は黄灰色砂質シルト、VIc2層は黄灰色シルト質砂で主に砂の含有量、それに伴う粘性の違いでの識別である。またVIc1層は古墳時代前期の遺物が多く、VIc2層は縄文時代晩期の遺物が多いことも識別の手掛かりとなった。しかし、砂の含有量は漸移的であり、VIc層の分層はきわめて困難であった。したがって、遺構確認面を認識できず、VIIa層・VIIb層で検出した遺構も多い。

中層で検出した遺構は竪穴建物(SI)2棟、土坑(SK)38基、溝(SD)13条、柱穴・ピット(P)59基、その他の遺構(SX)3基となる。上層に比べると極端に遺構数が少ないが、上層遺構のカクランによる破壊、砂丘の砂に近似する遺構の識別・見逃しなどが考えられる。

全体的な遺構の分布は上層の遺構分布に近似するが、これは標高の高い砂丘頂上部が利用されたからである。上層との違いは砂丘東側斜面の1D-10E、2D-1D・1E、2D-2Dに遺構の分布が広がる点である。また上層よりも南側に遺構が広がる傾向が見られる。以下、遺構の種別ごとに説明する。

a 竪穴建物 (SI)

2棟検出した。いずれも大型竪穴建物である。

SI266 (図版28・29、写真図版7・36・37・38・39)

**位 置** 調査区東部南寄り2D-1D・2Dに位置し、砂丘頂上部東側の緩斜面に立地する。この部分は砂丘の内陸側にあたる。

**検出状況** 当初東調査区の排水を兼ねて層序を把握するため、幅0.60～0.80mのトレンチを設定していたが竪穴建物に気が付かず掘削を進めていた。VIa層を除去した時点でSD238調査が行われ、遺物が多く出土する溝として調査を進めた。また2D-1D12のトレンチの断面で確認していた落ち込みは土坑と認識していた。さらにSI266内の黒色土は覆土という認識がなく削平していた。黒色土の削平が終わるころ、2mほど高い矢板の外側から見た時によく竪穴建物の床面らしいということが判明した。しかし、西側は排水路のため、矢板までしか調査ができず、南側も農道があり、同じく矢板までしか調査ができなかった。調査は第4次調査(2021年度)まで引き継がれ、農道下は農道除去後に調査を行った。西側の排水路は規模が大きく深いため、すでにSI266は破壊されていることが予想された。したがって、西側は矢板部分までの調査となった。

**規 模** 既述のように西側は調査区外に広がり、南側も規模が大きいため調査区外に広がっている。したがって、全容は明らかでない。竪穴部の長軸9.04m、短軸(現存値)5.40mを測り、主軸方向はN-7°-Wを示す。壁溝を除き、床面とした面積(現存値)は23.77m<sup>2</sup>を測る。全体形を想定した場合、約1/2の調査範囲と推定されるため、短軸は2倍の10m前後、床面積も50m<sup>2</sup>近くなるものと予想される。

**平 面 形** 全容は明らかでないが北東隅・南東隅部、各壁の状況から隅丸方形<sup>1)</sup>と推定できる。

**覆 土** 覆土は8層に識別した。覆土1層直上にはVIa層が堆積することから、それ以前の構築である。1～4層は構築面から床面までの覆土で、1・2層は褐灰色シルト質砂、3・4層は灰褐色砂でいずれも炭化粒を少量含んでいた。堆積状況はレンズ状で自然堆積と推定される。5・6層は壁溝の覆土<sup>2)</sup>で、5層が暗褐色砂、6層褐灰色砂で地山の砂丘砂(VIII層)が混入する。堆積状況はレンズ状で自然堆積と推定され、竪穴建物内ではいち早く埋没したものと思われる。7・8層は床面構築時の整地土である。

**床 面** 床面に相当する層は、砂のため、しまりがなく硬化もしていなかった。2層に識別したが、暗褐色砂に地山の砂丘砂(VIII層)の混入量の違いにより分けた。VIII層まで掘り下げたのち、平らに整地した程度の床と推定される。床面下の掘方は凹凸があるものの、壁溝に向かい緩く傾斜している。したがって、掘方の中央部分が高く壁際に向かい低くなる掘方である。標高の低い砂丘は周辺から湿気の影響があったものと思われ、湿気対策の表れと推定している。

**炉** 矢板付近を特に注意して精査したが検出できなかった。矢板の外側(調査区外)に存在する可能性もある。

**柱 穴** ピットは8基検出した。規模や形、位置関係からP395とP550を主柱穴とし、竪穴建物の4本主柱穴のうちの2本と推定した。P395は2基の掘り込みがあり、柱の立て替えまたは掘方に大きさの違いがあることから小さい柱穴は支柱穴とも推定できる。P550は柱根(図版120-2)が遺存しており、底面が砂地の地山に0.15mめり込んでいた。上屋の重みの影響と思われる。P397～399・549・551・552は主柱穴に比べると規模がやや小さいことから支柱穴と推定した。このうちP399は柱根(図版120-1)が遺存していたが、P550

1) 北東隅部の壁は直角気味になっているが掘り過ぎの結果であり、丸くカーブを描いたものと推定される。

2) 南東隅部の壁溝覆土は、3・4層と表示してある。

の柱根に比べると径 3cm ほど小さくなる。

**壁 溝** 幅 0.50～0.80m、深さ 0.30m ほどの規模を測り、検出した部分からほぼ全周するものと思われる。

**側 壁** 側壁は東壁と北・南壁の一部を検出した。床面との比高は約 0.40～0.60m を測る。壁溝からの立ち上がりは、北壁は緩やかに、東壁は急斜度に、南壁はさらに急斜度に立ち上がる。

**周 溝** 当初は溝として調査したため遺構名を SD238 とした。東壁の東側から南壁の南側にかけて検出し、東側の北部から北側にかけては認められなかった。幅約 1.00～1.50m、深さ約 0.20～0.35m を測り、断面台形状を呈する。遺物は極めて多く出土し、出土状況から投棄したものと推定した。なお周溝と重複する P253・540・555・556 は底面下で見つかっており、周溝が新しいと推定される。

**周 堤** 竪穴建物と周溝の間で認められた盛土である。上面幅 0.60～1.40m、周溝底面からの高さ約 0.20～0.30m を測る。VIc1・VIc2 層の上に竪穴建物構築時の掘削土を盛り上げている。周堤の精査時に垂木尻のピットの痕跡を探したが確認できなかった。

**遺 物** 主に覆土から大量の古墳時代土師器（図版 60～62-1～51）のほか、縄文土器（図版 96-112）・石器（図版 111・113-70・90）・礫・被熱礫少量、柱根（図版 120-1・2）が出土している。また SD238 とした周溝覆土から大量の古墳時代土師器（図版 62～65-52～108）のほか、縄文土器（図版 96-112）・石器が少量出土している。なお、床面の南東隅付近（2D-1D22）から骨片が 40×30cm の範囲で出土した。分析の結果イノシシ、シカ、ウシなどの偶蹄類と推定された（「第IV章第5節C 道正遺跡出土の焼骨片について」参照）。

**自然科学分析** 柱根の樹種同定で P399 がケヤキ、P550 が樹皮（樹種特定できず）である。P399 柱根の放射性炭素年代測定（暦年校正用）で 1,821±23yrBP という値が得られている。

SI461（図版 27・30、写真図版 8・39・40・41）

**位 置** 調査区中央部 1D-10B・10C、2D-1B・1C に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。

**検出状況** 遺構のあった砂丘頂上部付近は VIc 層・VIIa 層の識別が難しく、遺構の認識ができなかった。そこで VIc 層から徐々に削平することにした。VIIa 層を徐々に掘り下げ VIIb 層になると、溝状の方形の落ち込みが見えるようになった。当初は周溝を伴う平地建物ということで調査を進めたが、周溝状の落ち込みの外周部で壁溝が検出され、竪穴建物と認識した。

**規 模** 長軸 9.36m、短軸 8.54m を測り、主軸方向は N-45°-E を示す。壁溝を除き、床面とした面積は 61.33m<sup>2</sup> を測る。壁溝まで入れた面積では県内の大型ないしは特大型竪穴建物〔滝沢 2019d〕に属すると思われる。

**平 面 形** 各隅部の状況から隅丸方形である。

**覆 土** 遺構確認面の把握が遅くなったことから覆土の堆積はほとんど確認できていない。遺構確認面から掘方まで 6 層に識別した。1・2 層が壁溝の覆土で、自然堆積である。3～6 層が掘方の整地土である。

**床 面** 掘方整地土の 6 層が床面に相当する層で、VIIb 層と VIII 層の混合土で暗灰黄色砂である。粘性はないが、しまりがやや強かった。上面を床面と推定した。掘方は VIII 層まで掘り下げたのち、平らに整地したもので最上部を床面としている。床面下の掘方は凹凸があるものの、壁溝に向かい緩く傾斜している。したがって、掘方の中央部分が高く、壁際が低くなる構造である。砂丘周囲は湿地が広がり、周辺からの湿気があったものと思われる。湿気対策の表れと推定している。

**炉** 遺存していた床面を精査したが検出できなかった。SI266 も炉が検出できなかったが、2 棟とも大型竪穴建物であり、中・小型の竪穴建物と用途が異なると推定される。

**柱 穴** ピットは 35 基検出した。規模や形、位置関係から P473～P476 を主柱穴とした。いずれも柱痕跡が認められ、これを見る限り径 25cm 前後の柱が使用されたものと推定した。このほかのピットでは P468・P486 は壁溝を切っており、これ以外は極めて規模が小さく浅いため掘方の一部と推定した。なお本遺構の南隅部外側に P413・P435 を検出したが、関係は明らかでない。

**壁 溝** 幅 0.20 ～ 0.75m、深さ 0.35m ほどの規模を測り、全周する。また壁溝以外に SD479 ～ 481 の 3 条の小溝を検出した。性格は不明なもの、本遺構に伴う溝と推定している。

**側 壁** 確認面が低かったため、側壁はほとんど検出できなかった。壁溝からの立ち上がりは、急斜度であるため、側壁も同様に立ち上がるものと推定した。

**周 溝** 検出されていない。

**周 堤** 検出されていない。

**そ の 他** 南隅部壁際に SK470 を検出し、壁溝 SD478 を切っている。したがって本遺構に伴う可能性がある。詳細は SK470 に記述した。

**遺 物** 遺構確認面が低いため、覆土上層は残りわるく遺物がなかったが、覆土下層から大量の古墳時代土師器 (図版 65・66-109～121) のほか、縄文土器 (図版 99-175) が比較的多く、石器・礫・被熱礫が少量出土している。また P475 から古墳時代土師器が少量出土している。

#### b 土 坑 (SK)

38 基検出した。分布は砂丘西緩斜面から頂上部平坦地、東緩斜面にかけて点在するが、いずれも南寄りである。特に SI266 と SI461 の間に多く分布する。規模、平面形、断面形もさまざまに多様なありかたを示す。

以下、個別に説明する。

#### SK240 (図版 28・31、写真図版 41)

調査区東部の 2D-1D4・5 に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。径 1.20 ～ 0.96m、深さ 0.20m を測る。平面楕円形、断面弧状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層は灰色シルト (VIa 層近似)、2 層は灰色砂質シルト (VIc1 層近似) でレンズ状に堆積する。遺物は古墳時代土師器が少量出土している。

#### SK272 (図版 28・31、写真図版 42)

調査区東部の 2D-1D2・3 に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。南西方向に 0.82m 離れ、SI266 が存在する。規模は径 1.64 ～ 1.15m、深さ 0.51m を測る。平面楕円形、断面やや不整な半円状を呈する。覆土は灰色砂質シルト (VIc 層近似) である。遺物は出土していない。

#### SK302 (図版 26・31、写真図版 42)

調査区西部の 2C-1J2 に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。規模は径 0.89 ～ 0.70m、深さ 0.16m を測る。平面楕円形、断面台形状を呈する。覆土は灰黄褐色シルト質砂 (VIc 層近似) の単層である。遺物は古墳時代土師器 (図版 67-127) が比較的多く、礫 2 点が出土している。

#### SK303 (図版 26・31、写真図版 42)

調査区西部の 2C-1J3・8 に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。規模は径 0.95 ～ 0.59m、深さ 0.22m を測る。平面 (長) 楕円形、断面台形状を呈するが、長軸の北側はテラス状にやや高くなる。覆土は灰黄褐色シルト質砂 (VIc 層近似) の単層である。遺物は古墳時代土師器 (図版 67-128) が多く出土している。

#### SK312 (図版 26・31、写真図版 42)

調査区西部の南寄り 2C-1J19・20 に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。規模は径 0.51 ～ 0.45m、深さ 0.12m を測る。平面やや方形気味の円形、断面台形状を呈する。覆土は灰黄褐色シルト質砂 (VIc 層近似) の単層である。遺物は古墳時代土師器 (図版 67-129・130) が多く出土している。SD350 と重複し、これを切っている。

#### SK378 (図版 28・31、写真図版 42・43)

調査区東部南寄りの 2D-1D15・20、1E11・16 に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。西側には SI266 の周溝 SD238 が接するように存在する。南側は第 3・4 次の調査区境にある。調査区境は矢板工事による破壊があり、必ずしも十分な調査結果が得られていない。規模は長軸 2.86m、短軸 2.28m、深さ 0.57m を測る。平面不整形、断面台形状を呈する。断面を見る限り VIa 層直下から VIc 層を掘り込むように構築されている。覆土は灰黄褐色シルト質砂 (VIc 層近似) の単層であるが、下部は VIIa 層が多く混入する。遺物は完形品を含む古墳時

代土師器（図版 67-131～142）が多く出土している。なお底面で SK539 を検出し、その真上に構築されていることから、これよりも新しい。ただし SK378 の下部の覆土と SK539 の覆土が近似することから、SK378 の掘り残しの可能性もある。詳細は SK539 に記述した。

**SK400**（図版 27・31、写真図版 43）

調査区中央部東寄りの 2D-1C12・13・17・18 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。周囲には土坑が多く存在する。規模は径 1.77～1.72m、深さ 0.39m を測る。平面やや方形気味の円形、断面弧状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層は黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）、2 層は黄褐色細粒砂（VIIb 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は主に 1 層から古墳時代土師器（図版 67・68-143～146）が多く、ほかに縄文土器（図版 89-11）、石器（図版 106-1）、ヒスイ製玉（図版 119-156・158）が出土している。

**SK402**（図版 26・31、写真図版 43）

調査区西北部の 1C-10I9・10 に位置し、砂丘西の斜面と平坦地の境に立地する。径 1.76～1.30m、深さ 0.60m を測る。平面楕円形、断面半円状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層は黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）、2 層は暗オリーブ褐色細粒砂（VIIb 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は縄文土器（図版 89-10）を主体に、古墳時代土師器が少量出土している。

**SK403**（図版 26・32、写真図版 43・44）

調査区西北部の 2C-1I18・23・24 に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。長軸 1.96m、短軸 0.83m、深さ 0.19m を測る。平面（長）楕円形、断面半円状を呈する。覆土は暗オリーブ褐色細粒砂（VIc 層近似）の単層である。遺物は出土していない。

**SK407**（図版 27・32、写真図版 43・44）

調査区中央部北寄りの 1D-9A25、9B21 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。周辺遺構の SK440・406（縄文遺構）・P436 と重複し、SK406・440 を切り P436 に切られている。規模は長軸 3.25m 以上、短軸 1.16m を測る大型土坑である。平面形（長）楕円形、断面弧状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層は黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）、2 層は暗オリーブ褐色細粒砂（VIIb 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は古墳時代土師器が少量出土している。

**SK415**（図版 26・32、写真図版 44）

調査区西部の 1C-10J16・17・21・22 に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。規模は径 1.74～1.07m、深さ 0.40m を測り、平面楕円形、断面 V 字状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層は黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）、2 層は暗オリーブ褐色細粒砂（VIIb 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は縄文土器、古墳時代土師器が少量出土している。

**SK427**（図版 27・32、写真図版 44）

調査区中央部北寄りの 1D-9A17 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。小型の土坑で径 0.80～0.54m、深さ 0.48m を測る。平面楕円形、断面半円状を呈するが、北東側がテラス状になるためややいびつである。覆土は 2 層に識別され、1 層はオリーブ褐色～暗オリーブ褐色細粒砂（VIc 層近似）、2 層は暗オリーブ褐色細粒砂（VIc 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK430**（図版 27・32、写真図版 44）

調査区中央部の 2D-1A4・5・9・10 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。規模は径 1.34～1.05m、深さ 0.40m を測り、平面楕円形、断面台形状を呈する。覆土は 3 層に識別され、1・2 層は黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）、3 層はオリーブ褐色細粒砂（VIIb 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は覆土 1 層から古墳時代土師器（図版 68-147～149）が多く出土している。

**SK440**（図版 27・32、写真図版 44）

調査区中央部北寄りの 1D-9A24・25、10A4・5・9・10 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。周辺

遺構のSK407・P441と重複し、これに切られている。また排水を兼ねた土層観察用のトレンチで破壊を受け、不明な部分が多い。規模は長径（現存値）3.67m、短径（現存値）2.91mを測り大型土坑になる。平面楕円形と推定され、断面台形状を呈する。覆土は2層に識別され、1層は暗褐色細粒砂（VIc層近似）、2層は黒褐色細粒砂（VIIa層近似）で水平に堆積する。遺物は覆土1層から古墳時代土師器（図版68-150・151）が多量、縄文土器が少量出土している。

**SK444**（図版27・32、写真図版45）

調査区中央部東寄りの2D-1C16に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。周囲には土坑が多く存在する。北側は排水を兼ねた土層観察用のトレンチで破壊され、上端は明らかでない。規模は長径（現存値）1.11m、短径0.85m、深さ0.29mを測る。下端の形状から平面楕円形と推定され、断面半円状を呈する。覆土は3層に識別され、1層黒褐色細粒砂（VIIa層近似）、2層暗灰黄色細粒砂（VIIb層近似）、3層灰オリーブ色細粒砂でレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK452**（図版27・32、写真図版45）

調査区中央部の1D-10B11・16・17に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。東南方向0.75mにはSI461の南西隅部がある。規模は径2.06～1.24m、深さ0.46mを測る。平面（長）楕円形、断面台形状を呈するが、北側はテラス状に幾分高くなる。覆土は2層に識別され、1層は黒褐色細粒砂（VIIa層近似）、2層は黒褐色細粒砂（VIIb層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は覆土1層から縄文土器がやや多く、ほかに石器3点が出土している。

**SK453**（図版27・32、写真図版45）

調査区中央部東寄りの2D-1C18・23に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。周囲には土坑が多く存在する。南側は第2・3次調査区の境である。したがって、矢板打設時の工事で南側は破壊されたとみられ検出できなかった。規模は長径1.37m、短径（現存値）0.99m、深さ0.27mを測る。遺存部分の形状から平面楕円形と推定され、断面半円状を呈する。覆土は2層に識別され、1層黒褐色細粒砂（VIIa層近似）、2層暗灰黄色細粒砂（VIIb層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK455**（図版27・33、写真図版46）

調査区中央部東寄りの2D-1C18・19に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。周囲には土坑が多く存在する。東側は西調査区と東調査区の間にある排水路部分に延びるため調査ができなかった。したがって、全容は明らかでない。規模は長径（現存値）1.19m、短径0.95m、深さ0.30mを測る。遺存部分の形状から平面楕円形、断面箱状を呈するものと推定される。覆土は3層に識別され、1・2層黒色細粒砂（VIIa層近似）、3層暗オリーブ褐色細粒砂（VIIb層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK456**（図版27・33、写真図版46）

調査区中央部東寄りの2D-1C12に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SI266とSI461の間にあり、周囲には土坑が多く存在する。南側はSK400に重複するが、新旧関係は不明である。また北東側はSK457に重複した可能性もあるが、排水を兼ねた土層観察用のトレンチで破壊され新旧関係は不明である。したがって、一部欠損するもの、おおよその形状は推定できる。規模は長径（現存値）1.55m、短径0.96m、深さ0.24mを測る。遺存部分の形状から平面楕円形と推定され、断面弧状を呈する。覆土は2層に識別され、1層黒褐色細粒砂（VIIa層近似）、2層暗灰黄色細粒砂（VIIb層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK457**（図版27・33、写真図版46）

調査区中央部東寄りの2D-1C8・13に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SI266とSI461の間にあり、周囲には土坑が多く存在する。南西側はSK456に重複した可能性もあるが、排水を兼ねた土層観察用のトレンチで破壊され新旧関係は不明である。したがって、一部欠損するもののおおよその形状は推定できる。規模は長径（現存値）1.53m、短径0.82m、深さ0.17mを測る。遺存部分の形状から平面楕円形と推定され、断面弧状

を呈する。覆土は2層に識別され、1層黒褐色細粒砂（Ⅶa層近似）、2層暗灰黄色細粒砂（Ⅶb層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK458**（図版 27・33、写真図版 46）

調査区中央部東寄りの2D-1C7・12に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SI266とSI461の間にあり、周囲には土坑が多く存在する。東側は排水を兼ねた土層観察用のトレンチで破壊され大きく欠損する。しかし、おおよその形状は推定できる。規模は長径（現存値）0.72m、短径0.75m、深さ0.14mを測る小型土坑である。遺存部分の形状から平面楕円形と推定され、断面弧状を呈する。覆土は黄褐色細粒砂（Ⅶb層近似）の単層である。遺物は出土していない。

**SK459**（図版 27・33、写真図版 45）

調査区中央部東寄りの2D-1C6・11に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SI266とSI461の間にあり、周囲には土坑が多く存在する。またSD451と重複し、これを切っている。規模は長径1.09m、短径0.71m、深さ0.28mを測る小型土坑である。平面楕円形、断面半円状を呈する。覆土は2層に識別され、1層黒褐色細粒砂（Ⅶa層近似）、2層暗灰黄色細粒砂（Ⅶb層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK460**（図版 27・33、写真図版 45）

調査区中央部東寄りの2D-1C6・7・11・12に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SI266とSI461の間にあり、周囲には土坑が多く存在する。また西0.05mにはSK459が存在する。規模は長径2.10m、短径（現存値）1.04m、深さ0.26mを測る。平面やや不整な楕円形、断面半円状を呈する。覆土は2層に識別され、1層黒褐色細粒砂（Ⅶa層近似）、2層暗灰黄色細粒砂（Ⅶb層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK463**（図版 27・33、写真図版 47）

調査区中央部の2D-1A9・10に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。北0.15mにはSK430が存在する。規模は長径0.57m、短径0.50m、深さ0.18mを測る小型土坑である。平面やや不整な円形、断面弧状を呈する。覆土は暗赤褐色細粒砂の単層である。遺物は出土していない。

**SK464**（図版 27・33、写真図版 47）

調査区中央部の2D-1A10・15に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。北西0.82～1.10mにはSK430・463が存在する。東側は排水を兼ねた土層観察用のトレンチで大きく欠損するが、おおよその形状は推定できる。規模は長径（現存値）0.50m、短径0.68m、深さ0.11mを測る小型土坑である。平面円形と推定され、断面台形状を呈する。覆土は暗灰黄色細粒砂の単層である。遺物は出土していない。

**SK466**（図版 27・34、写真図版 47）

調査区中央部の2D-1B6・7・11・12に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。北側はSK467と重複し、これを切っている。規模は径1.50～1.28m、深さ0.16mを測る。平面やや不整な円形、断面弧状を呈する。覆土は黒褐色細粒砂（Ⅶa層近似）の単層である。遺物は古墳時代土師器が少量出土している。

**SK467**（図版 27・34、写真図版 47）

調査区中央部の2D-1B6・7・11・12に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。北側はSK466、東側はP562と重複する。SK466に切られ、P562とは新旧関係不明である。規模は長径（現存値）1.78m、短径1.58m、深さ0.21mを測る。平面やや不整な楕円形、断面弧状を呈する。覆土は2層に識別され、1・2層ともに黒褐色細粒砂（Ⅶa層近似）で、レンズ状に堆積する。遺物は1層から古墳時代土師器（図版 68-152・153）がやや多く、ほかに縄文土器が少量出土している。

**SK469**（図版 27・34、写真図版 47・48）

調査区中央部やや南寄りの2D-1B16・17・21・22に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。規模は径1.69～1.20m、深さ0.25mを測る。平面やや不整な楕円形、断面弧状を呈する。覆土は2層に識別され、1層は黒褐色細粒砂（Ⅶa層近似）、2層は暗黄灰色細粒砂（Ⅶb層近似）レンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

**SK470** (図版 27・30、写真図版 41)

調査区中央部に存在する SI461 の南側隅部の壁際に位置する。SI461 の壁溝 SD478、P468 と重複し、P468 に切れ、SD478 を切っている。規模は長軸 1.31m、短軸 0.77m、深さ 0.21m を測り比較的小型である。平面(長)方形、断面弧状を呈する。覆土は黒褐色細粒砂 (VIIa 層近似) の単層である。遺物は出土していない。本遺構は壁溝 SD478 の内側に沿うように構築されている。したがって、SI461 に伴う土坑の可能性が高い。

**SK471** (図版 26・34、写真図版 48)

調査区中央部の 1D-10A16・17・21・22 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。周辺には遺構が少なく遺構稀薄部分である。規模は径 1.71～0.86m、深さ 0.17m を測り、平面(長)楕円形、断面弧状を呈する。覆土は暗褐色砂質シルト (VIc 層近似) の単層である。遺物は出土していない。

**SK532** (図版 27・34、写真図版 48)

調査区東部の南寄り 2D-2C1・2 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。北西 0.63m には形状の似た SK533 が、南東 0.62m には形状が似た SK554 が存在する。規模は径 1.78～1.44m、深さ 0.18m を測り、平面楕円形、断面弧状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層はオリーブ黄色中～細砂 (VIIa 層近似)、2 層はオリーブ黄色細砂 (VIIb 層近似) で、レンズ状に堆積する。遺物は覆土 1 層から古墳時代土師器が少量出土している。

**SK533** (図版 27・34、写真図版 48)

調査区東部の南寄り 2D-1C21、2D-2C1 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。南東 0.63～2.54m には形状の似た SK532 が存在する。規模は径 1.58～1.36m、深さ 0.42m を測る小型土坑である。平面円形、断面台形状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層は黒褐色細～中砂 (VIIa 層近似)、2 層は褐灰色中～細砂 (VIIb 層近似) で、レンズ状に堆積する。遺物は覆土 1 層から古墳時代土師器がやや多く出土している。

**SK535** (図版 27・34、写真図版 48・49)

調査区中央部の南寄り 2D-1B23、2D-2B2・3 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SD545・P553 と重複し SD545 を切っているが、P553 との新旧関係は不明である。規模は径 1.26～0.96m、深さ 0.34m を測り、平面楕円形、断面半円状を呈する。覆土は黒褐色細砂 (VIIa 層近似) の単層である。遺物は古墳時代土師器(図版 68-155～158) が多く出土している。

**SK536** (図版 27・34、写真図版 49)

調査区中央部の南寄り 2D-1B21・22、2D-2B1・2 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SD545 と重複し、これを切っている。規模は径 1.80～1.42m、深さ 0.25m を測り、平面やや不整な楕円形、断面台形状を呈する。覆土は黒褐色中～細砂 (VIIa 層近似) の単層である。遺物は古墳時代土師器がやや多く、ほかに縄文土器が少量出土している。

**SK539** (図版 28・34、写真図版 49)

調査区東部の南寄り 2D-1D20 に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。上面には SK378 がある。規模は径 0.94～0.78m、深さ 0.20m を測り、平面不整な楕円形、断面台形状を呈する。覆土は黒褐色砂 (VIIa 層近似) の単層である。遺物は古墳時代土師器が少量出土している。なお本遺構は SK378 と同じ位置にあり、その底面で構築されたものである。覆土も SK378 の下部と同じ黒褐色砂 (VIIa 層近似) で、出土遺物も時期が同じである。したがって、SK378 の掘り残しの可能性が高い。

**SK544** (図版 26・34、写真図版 49)

調査区西部の南寄り 2C-2I10 に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。東側は土層観察用のサブトレンチで破壊されるが、おおむね形状は推定できる。長軸(現存値) 1.58m、短軸 0.82m、深さ 0.23m を測る。平面やや不整な(長)楕円形、断面半円状を呈する。覆土は黒褐色中粒砂 (VIIa 層近似) の単層である。遺物は縄文土器が少量出土している。



## SK546 (図版 27・35、写真図版 49・50)

調査区中央部の南寄り 2D-2B7・8 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。南側は調査区外に延びるため全容は明らかでない。規模は長軸 (現存値) 1.11m、短軸 (現存値) 0.76m、深さ 0.18m を測り、平面形不明、断面弧状を呈する。覆土は暗褐色中粒砂 (VIc 層近似) の単層である。遺物は古墳時代土師器 (図版 68-159) がやや多く出土している。

## SK554 (図版 27・35、写真図版 50)

調査区東部の南寄り 2D-2C2・3・7・8 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。北西 0.62 ~ 2.54m には形状の似た SK532・533 が存在する。南側は調査区外に延びるため全容は明らかでない。また矢板打設時の噴砂により上面は攪乱されている。規模は長軸 (現存値) 1.58m、短軸 (現存値) 1.03m、深さ 0.48m を測り、平面形不明、断面半円状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層は黒褐色中～細砂 (VIIa 層近似)、2 層は黒褐色細～中砂 (VIIa 層近似) でレンズ状に堆積する。遺物は覆土 1 層から縄文土器 (図版 89-13)、古墳時代土師器が少量出土している。

## c 溝 (SD)

溝 (SD) No. を付した数は 13 条である。このうち SI266 に伴う周溝 SD238、SI461 に伴う壁溝 SD478、及び小溝 SD479 ~ 481 はそれぞれに伴う溝として取り扱った。これらを除くと個別遺構としての溝は 8 条である。以下、個別に説明する。

## SD234 (図版 28・35、写真図版 50)

調査区東部の 1D-10E に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。中層遺構では最も東に存在し、周辺には同じような性格の溝と考えられる SD248 以外に遺構は見られない。覆土と周囲の地層との識別が難しく全容は明らかでないものの、北西方向へはさらに延びたものと予想される。長さは (現存値) 7.36m で北西-南東に延び、長軸方向は N-30°-W を示す。幅は (現存値) 0.85 ~ 1.60m ほど、深さ 0.41m で断面 V 字状や弧状を呈する。覆土は 3 層に識別され、1 層黄灰色シルト (VIa 層近似)、2 層灰色シルト (VIc 層近似)、3 層黒褐色細砂 (VIIa 層近似) でレンズ状に堆積する。遺物は覆土 1・2 層から古墳時代土師器 (図版 69-162 ~ 168) が多く出土している。

## SD248 (図版 28・35、写真図版 50・51)

調査区東部の 1D-10E、2D-1E に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。北東 1.83m には同じような性格の溝と考えられる SD234 が存在する。これより東側には SD234 を除き遺構は見られない。SD234 と同じく覆土と周囲の地層との識別が難しく全容は明らかでないものの、南西方向へはさらに延びたものと予想される。長さは (現存値) 9.00m で北東-南西に延び、長軸方向は N-20°-E を示す。幅は (現存値) 0.52 ~ 1.17m ほどで、深さ 0.19m で断面半円状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層明青灰色シルト (VIa 層近似)、2 層褐灰色砂質シルト (VIc 層近似) で、水平に堆積する。遺物は覆土 1 層から古墳時代土師器 (図版 69-169 ~ 174) が多く、覆土 2 層からは少量出土している。

SD234 と SD248 は同じような形状の溝で中層遺構の最も東側を塞ぐように存在する。遺物が多く出土することも共通点であるが、ここから東は標高が徐々に低くなり、遺物の出土も少なく、遺構も皆無となる。古墳時代の集落の内と外を区画するような溝であった可能性もある<sup>1)</sup>。

## SD350 (図版 26・36、写真図版 51)

調査区西部の 2C-1J19・20・25 に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。SK312 と重複し、これに切られている。また南東側は排水を兼ねた土層観察用のトレンチに大きく破壊され、加えて南東側は浅くなることから全容は明らかでない。長さは (現存値) 3.08m で北西-南東に延び、長軸方向は N-61°-W を示す。幅は (現存値) 1.14m ほど、深さ 0.27m で断面弧状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層暗灰黄色シルト (VIa 層近似)、2 層灰黄褐

1) 坂井秀弥氏から現地と同様の指摘を受けている。

色砂質シルト（VIc層近似）で、斜位に堆積する。遺物は覆土1層から古墳時代土師器が多く、ほかに縄文土器が少量出土している。

**SD451**（図版27・33、写真図版45）

調査区中央部の東寄り2D-1B15、2D-1C1・2・6・7に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。SK459・P446と重複し、いずれにも切られている。SI266とSI461の間にあり、周囲には土坑が多く存在する。平面L字状を呈し、延長7.13mを測る。幅は0.79～1.36mほど、深さ0.27mで断面半円状を呈する。覆土は2層に識別され、1層黒褐色細粒砂（VIIa層近似）、2層暗灰黄色細粒砂（VIIb層近似）で、レンズ状に堆積する。遺物は覆土1層から縄文土器が少量、ほかにヒスイ製勾玉（図版119-154）1点が出土している。

**SD531**（図版26・36、写真図版51）

調査区西部の南寄り2C-2H10・15に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。SD542と重複し、これの上部を切っている。西側は調査区外に延びるため、一部しか検出できなかった。長さは（現存値）1.65mで東-西に延び、長軸方向はN-86°-Eを示す。幅は（現存値）0.43mほど、深さ0.17mで断面半円状を呈する。覆土は褐灰色細粒砂（VIc層近似）の単層である。遺物は縄文土器、古墳時代土師器が少量出土している。

**SD542**（図版26・36、写真図版51）

調査区西部の南寄り2C-2H5・10・15に位置し、砂丘西の平坦地に立地する。SD531と重複し、これに切られている。北西側は調査区外に延びる。したがって、溝の一部しか検出されていない。長さは（現存値）2.35mで南東-北西に延び、長軸方向はN-32°-Wを示す。幅は0.70mほど、深さ0.20mで断面弧状を呈する。覆土は黒褐色砂（VIIa層近似）の単層である。遺物は縄文土器、古墳時代土師器が少量出土している。

**SD543**（図版26・36、写真図版51）

調査区西部の南寄り2C-2I、2C-2Hに位置し、砂丘西の平坦地に立地する。南→北→西に弧を描くよう構築され、南側は調査区外に延びている。長さは（現存値）8.90m、幅は0.60～1.53mほどで一定せず、深さ0.27mで断面弧状を呈する。覆土は黒褐色砂（VIIa層近似）の単層である。遺物は縄文土器（図版98・99-159・176）、古墳時代土師器（図版70-186～190）が多く、ほかに礫少量、アスファルト1点が出土している。

**SD545**（図版27・36、写真図版51・52）

調査区中央部の南寄り2D-1A25、2D-1B21、2D-2B1～3に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。西-東に北向きの弧を描くよう構築され、西側は第3次調査区に延びるが検出されていない。SK535・536・P553と重複し、いずれにも切られている。延長（現存値）4.45m、幅0.98mほど、深さ0.16mで断面弧状を呈する。覆土は2層に識別され、1層暗褐色中～細砂、2層暗灰黄色中砂（VIIa層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は覆土1層から古墳時代土師器が少量出土している。

**d その他の遺構（SX）**

遺構種別に分類しなかったものであり、3基検出した。

**SX233**（図版26・37、写真図版8・52）

調査区西部の1C-10I・10Jに位置し、砂丘西の緩斜面に立地する。南側の一部は試掘トレンチ59Tに破壊されている。長さ4.50m、最大幅約1.85mの範囲に土器が集中分布するものである。範囲は北西-南東方向に、緩斜面に対しておおむね平行になる。遺物はVIa層とVIc層の境界面に集中し、VIa層下部からVIc層上部に分布が収まる。遺物の下には遺構が認められず、当時の生活面上に廃棄されたものと推定できる。遺物は古墳時代土師器（図版72～75-199～234）が圧倒的に多く32.842kgを量り、ほかに縄文土器、礫・焼礫、及び石器が少量出土している。

**SX239**（図版28・36、写真図版53）

調査区東部の1D-10D4・5・9・10に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。周辺にはほとんど遺構が見られない。長さ1.22m、幅1.16mの範囲に土器が集中分布するものである。土器はVIc層上面～上部に細かく分

布することから廃棄されたものと推定される。下部には遺構は見られなかった。遺物は古墳時代土師器(図版75-235) 1.134kg 出土している。

#### SX537 (図版28・36、写真図版52)

調査区東部の南寄り2D-1D24・25、2D-2D4・5に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。西側はSI266の周溝SD238と接するが、新旧関係は不明である。南側は調査区外に延びる。極めて大型の土坑ないしは溝と思われるが、全容が明らかでないためその他の遺構とした。長軸(現存値)2.69m、短軸(現存値)2.04m、深さ0.71mを測り平面不整形、断面半円状を呈する。覆土は3層に識別され、1層褐灰色シルト(VIa層近似)、2層暗褐色砂質シルト(VIc層近似)、3層暗オリーブ褐色砂(VIIa層近似)でレンズ状に堆積する。遺物は覆土1・2層から古墳時代土師器(図版75-236～241)が多く、縄文土器が少量、石器(図版106-14)が出土している。

#### 3) 下層遺構の概要

縄文時代晩期中葉の遺物はVIc層下部(VIc2層)～VIIa層上部にかけて多く含まれ、VIIa層上部が縄文時代晩期の遺構確認面である。検出した遺構は土器埋設遺構(SJ)5基、土坑(SK)10基である。しかし、縄文時代晩期の遺構は覆土と周囲のVIIa層(黒褐色砂)との識別ができず、VIIa層上部で検出した遺構は遺物の存在そのものが遺構と認識できる土器埋設遺構だけである。土坑の多くはさらに下層まで削平し、VIIb～VIII層にかけて検出した。また砂丘砂と遺構覆土の境が漸移的でさらさら掘りやすいため、必ずしも構築時の形状を反映していない可能性がある。なお縄文時代中期以降の遺物はVIIa層から断片的に出土するが、遺構は検出されていない。

全体的な遺構の分布は土器埋設遺構が調査区西部及び東部の縁の斜面に分布する。砂丘周囲の湿地に近く、縄文時代晩期は砂丘の沈降が著しくなかったことが示唆される。土坑は上・中層の遺構分布と近似するが、遺構数が少ないため散漫な分布である。以下、遺構の種類ごとに説明する。

#### a 土 坑 (SK)

10基検出した。分布は砂丘西斜面から頂上部平坦地、東緩斜面にかけて点在する。特にSI266とSI461の間に多く分布する。形状は平面円形～楕円形、断面弧状～半円状を呈するが、前述のように必ずしも構築時の形状を反映していない可能性がある。以下、個別に説明する。

#### SK392 (図版39・42、写真図版53)

調査区西部の南寄り2C-2H2・3に位置し、砂丘西の緩斜面に立地する。径1.02～0.97m、深さ0.16mを測る。平面円形、断面弧状を呈する。覆土は暗灰黄色細粒砂(VIIb層近似)の単層である。遺物は出土していない。

#### SK404 (図版40・42、写真図版53)

調査区中央部の北寄り1D-9B23・24に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SK409と重複し、これに切られている。排水を兼ねた土層観察用のトレンチの断面で確認できたためVIIa層中で検出できた。しかし南側は同トレンチで破壊され、全容は明らかでない。長径1.96m、短径(現存値)1.41m、深さ0.26mを測る。平面楕円形と推定され、断面弧状を呈する。覆土は2層に識別され、1層黒褐色細粒砂(VIIa層近似)、2層黒褐色細粒砂(VIIb層近似)でレンズ状に堆積する。遺物は覆土1層から縄文土器中量、石器(図版109-49)2点出土している。

#### SK405 (図版39・42、写真図版53)

調査区西部の1C-10J6・7・11・12に位置し、砂丘西の斜面に立地する。長径2.59m、短径1.28m、深さ0.53mを測る。平面やや不整な(長)楕円形、断面弧状を呈する。覆土は2層に識別され、1層黒褐色細粒砂(VIIa層近似)、2層暗オリーブ褐色細粒砂(VIIb層近似)で、レンズ状に堆積する。遺物は覆土1層から縄文土器が少量、剥片類1点出土している。本遺構は平面形、断面形、覆土、内面形状から倒木痕の可能性が高い。

#### SK406 (図版40・42、写真図版53・54)

調査区中央部の北寄り1D-9B21・22に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SK407と重複し、これに切られている。全容は明らかでないが下部の形状からおおむね推定できる。長径(現存値)1.94m、短径

1.18m、深さ 0.50m を測る。平面（長）楕円形と推定され、断面弧状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）、2 層黒褐色細粒砂（VIIb 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は覆土 1 層から縄文土器が少量出土している。

**SK408**（図版 39・42、写真図版 54）

調査区西部の 1C-10I24・25、2C-1I4・5 に位置し、砂丘西の斜面に立地する。径 1.15 ～ 0.88m、深さ 0.39m を測る。底面には 2 か所の落ち込み、側壁にはテラス状の弱い凸部がある。平面やや不整な楕円形、断面不整形を呈する。覆土は黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）の単層である。遺物は出土していない。

**SK409**（図版 40・42、写真図版 53）

調査区中央部の北寄り 1D-9B24 に位置し、砂丘頂上部の平坦地に立地する。SK404 と重複し、これを切っている。排水を兼ねた土層観察用のトレンチの断面で確認できたため VIIa 層中で検出できた。しかし南側は同トレンチで大きく破壊され、全容は明らかでない。長径（現存値）0.57m、短径（現存値）0.48m、深さ 0.38m を測り、小型の土坑と推定される。平面円形と推定され、断面半円状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）、2 層灰黄色細粒砂（VIIb 層近似）でレンズ状に堆積する。遺物は覆土 1 層から骨片が多く出土している。なお、骨片の放射性炭素年代測定を依頼したが、コラーゲン抽出が得られず年代測定を断念した。

**SK412**（図版 41・42、写真図版 54）

調査区東部のやや北寄り 1D-10E2・3・7・8 に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。周辺には遺構が存在しない。規模は径 0.71 ～ 0.66m、深さ 0.27m を測る、小型の土坑である。平面円形、断面弧状を呈する。覆土は黒褐色砂（VIIa 層近似）の単層であり、炭化粒が多く混入していた。遺物は炭化粒以外出土していない。

遺物の自然科学分析の結果は、覆土からの炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正用）で 2,992 ± 24 (yrBP) という値が得られている。

**SK417**（図版 41・42、写真図版 54）

調査区東部の南寄り 2D-1E11・12 に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。周辺には遺構が少なく、2.39m 東南に SK420 があるだけである。規模は径 0.90 ～ 0.80m、深さ 0.24m を測る、小型の土坑である。平面円形、断面弧状を呈する。覆土は黒褐色砂（VIIa 層近似）の単層である。遺物は出土していない。

**SK420**（図版 41・42、写真図版 54・55）

調査区東部の南寄り 2D-1E13・18 に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。周辺には遺構が少なく、2.39m 北西に SK417 があるだけである。規模は径 1.58 ～ 1.32m、深さ 0.33m を測り平面円形、断面弧状を呈する。覆土は黒褐色砂（VIIa 層近似）の単層である。遺物は出土していない。

**SK477**（図版 39・42、写真図版 55）

調査区西部のやや北寄り 1C-10I12・17 に位置し、砂丘西の斜面に立地する。砂丘西の北寄りでは最も西に位置する土坑である。径 2.20 ～ 0.92m、深さ 0.23m を測る。平面（長）楕円形、断面弧状を呈する。覆土は 2 層に識別され、1 層暗～黒褐色細粒砂（VIIa 層近似）、2 層灰黄褐色細粒砂（VIIb 層近似）で斜位に堆積する。遺物は出土していない。

**b 土器埋設遺構 (SJ)**

5 基検出した。土器の埋設方法で 2 つに分けた。

A 類 大型の粗製土器を正位にすえたもので 3 基数える。

B 類 小型の精製土器が逆位に出土したもので 2 基数える。

A 類は掘方がわからないものの明らかに土器を埋設したものと分かるものである。B 類は A 類の埋設土器に比べ小型で、調査において完形土器が出土したという感じである。したがって B 類の掘方はわからないが土坑などからの出土、あるいは包含層からの出土と思われ、土器埋設遺構の可能性は低い。図示していないが、掲載図版 97-137（横位出土）・図版 97-138（逆位出土）、図版 102-243（横位出土）も B 類と同様な出土状況であった。

出土位置を比べるとA類は砂丘の東縁・西縁で最も端からの検出であるのに対して、B類は図示していないものも含め砂丘頂上部ないしはその周辺からの検出であり、分布に大きな違いが見られる。以下、個別に説明する。

#### SJ242 (図版 39・43、写真図版 55)

調査区西部の南寄り 2C-1H18 に位置し、砂丘西の斜面に立地する。SJ243 とともに最も西に存在する遺構である。土器が確認された面が遺構確認面 (VIIa 層上面) である。A 類に分類される。径 0.44 ~ 0.40m、深さ 0.29m 程度の粗製の深鉢が埋設されていた。土器の外側に掘方があるはずであるが掘方覆土と周囲の土層との違いは識別できなかった。土器内覆土は黒褐色細粒砂 (VIIa 層近似) の単層である。遺物は埋設土器 (図版 89-1) 以外出土していない。

#### SJ243 (図版 39・43、写真図版 55)

調査区西部のやや南寄り 2C-1H13 に位置し、砂丘西の斜面に立地する。SJ242 とともに最も西に存在する遺構である。土器が確認された面が遺構確認面 (VIIa 層上面) である。A 類に分類される。径 0.41 ~ 0.31m、深さ 0.23m 程度の粗製の深鉢土器が埋設されていた。土器の外側に掘方があるはずであるが掘方覆土と周囲の土層との違いは識別できなかった。土器内覆土は黒褐色細粒砂 (VIIa 層近似) の単層であるが、地震の影響と推定される砂脈 (VII 層) が見られた。また埋設土器も上部の一部が約 10cm ほど南西側にずれていた。遺物は埋設土器 (図版 89-2) 以外出土していない。

#### SJ264 (図版 39・43、写真図版 55・56)

調査区西部の南寄り 2C-1I13・14・18・19 に位置し、砂丘西の平坦地と斜面の境に立地する。北東約 0.50m に SJ265 が存在する。土器は VIIa 層掘削中に確認され、B 類に分類される。台石類 (図版 115-103) の下に、精製土器の下半部が逆位の状態で検出されている。台石類から土器までの深さ 0.15m 程度である。土器の周囲に掘り込みがあると思われたが識別できなかった。遺物は埋設土器 (図版 89-3) とした土器、SJ264 の直上にあつた台石類 (図版 115-103) 以外に出土していない。

#### SJ265 (図版 39・43、写真図版 56)

調査区西部の南寄り 2C-1I14 に位置し、砂丘西の平坦地と斜面の境に立地する。南西約 0.50m に SJ264 が存在する。土器は VIIa 層掘削中に確認され、B 類に分類される。精製土器の完形品が逆位の状態で検出されている。口縁部は検出面から深さ 0.16m 程度埋まっていた。土器の周囲に掘り込みがあると思われたが識別できなかった。遺物は埋設土器 (図版 89-4) 以外に出土していない。

#### SJ414 (図版 41・43、写真図版 56)

調査区東部の 1D-10F12 に位置し、砂丘東の緩斜面に立地する。上中下層すべての遺構で最も東にあり、かつ最も標高の低い位置で見つかった。土器が確認された層は VIIb 層であるが、上半部がバックホーで剥ぎ取られており、本来は VIIa 層が遺構確認面 (VIIa 層上面) と推定される。A 類に分類される。径 (現存値) 0.37 ~ 0.23m、深さ (現存値) 0.19m 程度の粗製の深鉢土器が埋設されていた。土器の外側に掘方があるはずであるが掘方覆土と周囲の土層との違いは識別できなかった。土器内覆土は黒褐色砂 (VIIa 層近似) の単層である。遺物は埋設土器 (図版 89-5) 以外出土していない。

## 第4節 遺物

3 年の本発掘調査で出土した遺物には土器・土製品、石器・石製品、金属製品、木製品、その他 (自然遺物など) がある。総量はコンテナ (内寸 54.5×33.6×10.0cm) にして 507 箱である。そのうち 454 箱が土器であり、縄文土器 88 箱、古墳時代土器 252 箱、古代土器 114 箱で約半数が古墳時代の土器である。

以下、種別ごとに報告するが、土器については古代 (上層)・古墳時代 (中層)・縄文時代 (下層) に分けて記述する。図示番号は種別ごとに通し番号とし、図面図版と写真図版に共通して用いた。

## A 古代の土器（図版44～58、写真図版60・63～78、別表3）

## 1) 概要

以下では令和元年度～3年度の第2・3・4次調査出土品と、同調査区内に位置する平成30年度試掘調査（第1次調査）の出土品を含めて報告する。道正遺跡上層の調査では、平安時代を中心とした須恵器・土師器・黒色土器が出土した。また1点のみだが、灰釉陶器の出土も認められた。

これらの出土総重量は約129.96kgを測る。内訳は須恵器28.53kg、土師器・黒色土器101.43kgで土師器・黒色土器が約8割であるが、食膳具に限ると須恵器8.98kg、土師器5.09kgで須恵器が6割を占める。

これら遺物の平面的な出土傾向を示したものが図版44の小グリッド別出土分布図となる。この分布図からは、遺物は砂丘北側縁辺部の掘立柱建物群が展開する範囲やその北側に広がる斜面地形に重なって集中して分布する傾向が読み取れる。大半が遺物包含層であるV層・VIa層からの出土で、出土層位による年代的差異は認められない。下層の遺物包含層であるVIIa層などからの出土も見受けられるが、VIa層の堆積が及ばない砂丘頂部側での出土の場合か調査時に混入してしまったものとする。遺構ではSK222やSK284から多くの遺物が出土している。

掲載遺物の選定は遺物が示す時代の器種組成の特徴が反映されるように留意した。全体的に接合率も低く、遺存状態の良好なものが少なかったため、器形復元が可能なものであればなるべく抽出した。また類似の資料に乏しい器種や墨書が認められるもの、転用や使用痕跡が認められるものは小破片であっても掲載した。

なお、遺物の年代や産地については春日真実氏のご教示をいただいた。また灰釉陶器の鑑定については高橋照彦氏のご教示を得た。

## 2) 記述の方法と分類

掲載した実測図の縮尺は原則として3分の1である。ただし、器種によってはその大きさに応じて4分の1、6分の1と縮尺を使い分けた。遺物は器種の区分、法量、胎土・焼成・製作技法の特徴、遺存率、器面の付着物や使用痕跡・転用の有無について観察し、その内容を別表3にまとめた。表記に関する凡例は観察表上に併記した。また、製作技法の観察における土器の成形・調整技法の表記については以下のとおり統一した。

回転台使用のナデをロクロナデ、そのほかのものをナデとした。

回転台使用のヘラケズリをロクロケズリ、不使用のものをケズリとした。

回転台使用のハケ調整をカキメ、不使用のものをハケメとした。

黒色土器などの器表面にみられる研磨痕をミガキとした。

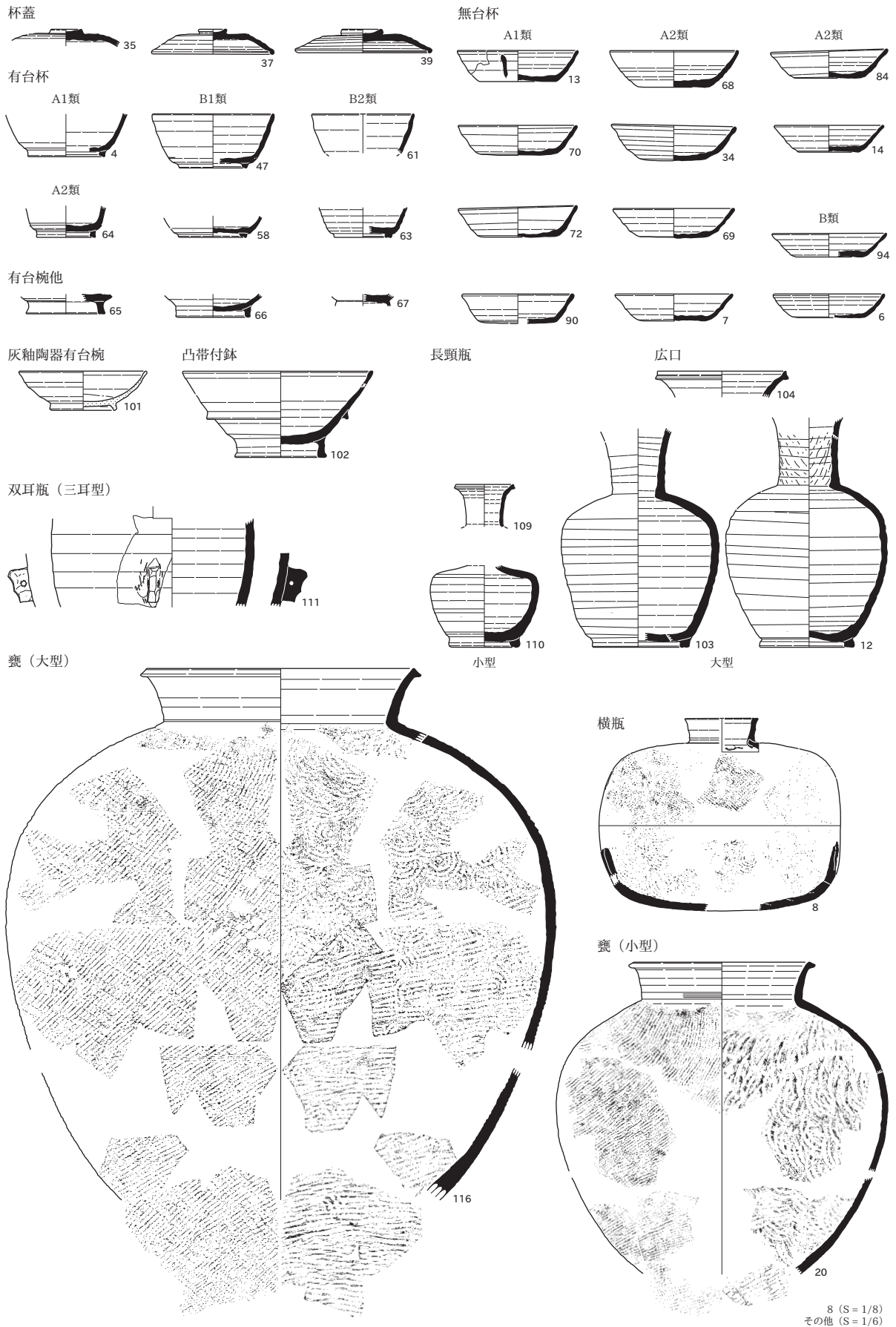
成形時の指頭の押圧痕は指頭圧痕と表記した。

須恵器甕・土師器長甕などのタタキ整形に伴い外面にみられる叩き具の痕跡を「タタキメ」、これに対応して内側に残る当て具の痕跡を「当て具痕」とした。また叩き具・当て具の工具原体の文様には、平行線文（平行）、格子文（格子）、同心円文（同心円）、その他のものが認められる。

食膳具などの外底部にみられるロクロからの切り離し痕は、回転ヘラ切りか回転糸切りがほとんどであるため、回転は省略してヘラ切り、糸切りとし、回転を用いない場合には「静止糸切り」などとした。

須恵器の胎土については、本遺跡出土の須恵器はほとんどが〔春日2019b〕に定義されているB群（軟質の白色小粒子を定量含む精良なもの）に該当し、佐渡小泊窯跡群産と考えられる。少量ながら同A群（阿賀北産）、C群（新津丘陵産）など他の産地とみられる個体もあり、それらについては各説において個別に触れることにする。

以下、種別ごとに器種分類を行う。ある程度の量が出土している器種についてはそれぞれにみられる特徴の一般的な傾向について記述し、可能なものについては更に分類を進めて細別した。なお、どの分類にも該当しないような例外的なものについては各説において個別に触れるものとする。



第12図 道正遺跡出土須恵器・灰釉陶器分類図

a 須恵器・灰釉陶器 (第12図)

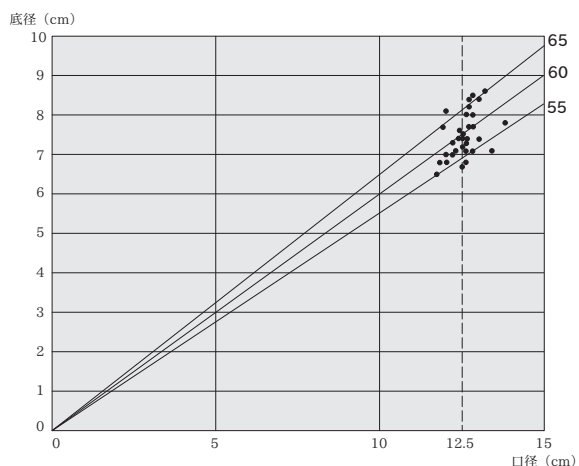
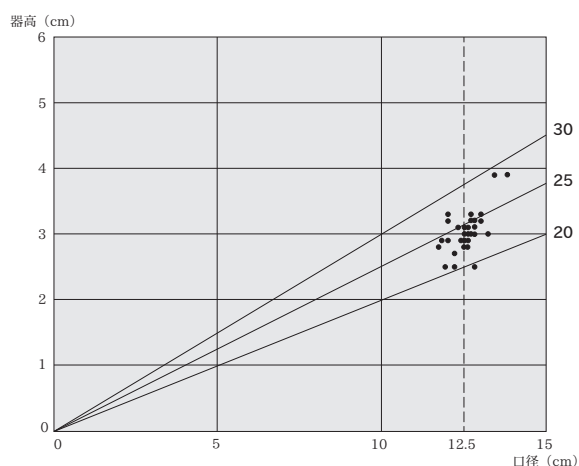
須恵器では食膳具に杯蓋、有台杯、有台椀、無台杯、凸帯付鉢、貯蔵具に長頸瓶、耳付瓶、横瓶、甕が認められる。灰釉陶器では食膳具有台椀のみが確認された。

**杯蓋** 摘みの形状がすべていわゆるボタン状のもので中央が凹み、口縁端部の屈折が弱く、口唇部が肥厚し玉縁状になるか内側に巻き込むような形状を呈するもので占められる。法量は口径14cm以上の大ぶりのものと14cm未満程度の小ぶりのものが認められる。

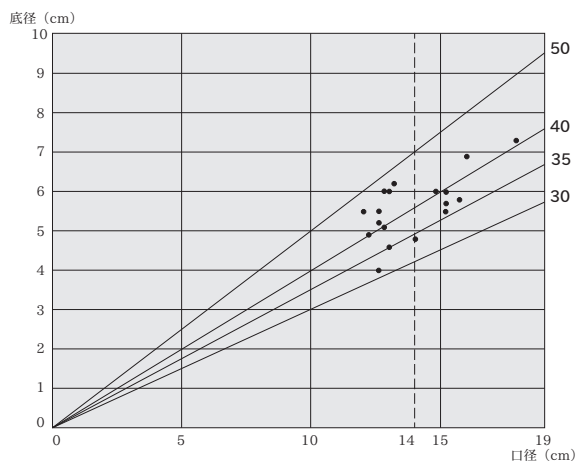
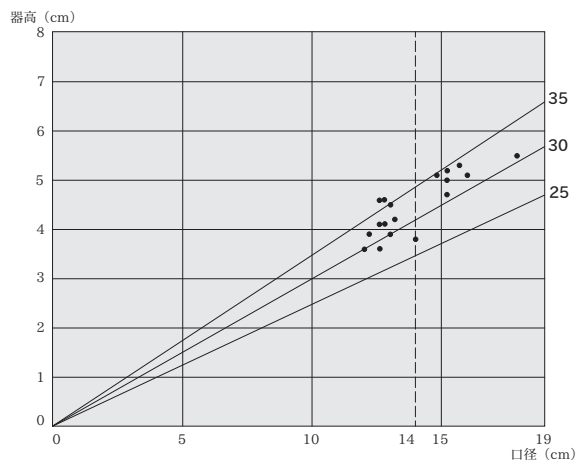
**有台杯** 高台部が内傾し外端接地のものがほとんどである。高台の断面形状の特徴から2種に分類した。断面形状が四角形で稜線が鋭く作出される傾向があるものをA類、高台が比較的低平で稜線が鈍く作出される傾向があるものをB類とした。B類としたものは断面が台形状を呈するものとそうでないもの、または端部に凹線を巡らすものなど個体差に富む。遺存状態不良で全体の器形がわかる個体を欠くが大小2種の明確な法量分化が認められる。そのため、法量が口径13cm以上の大型のものを1類、11cm程度の小型のものを2類に細分した。製作技法上の特徴では胴部下端にロクロズリを施すものが定量認められる。また、底部の切り離し方法はすべてヘラ切りによると思われるが、ナデ消されるものもありロクロの回転方向の識別が難しいものも見受けられる。ロクロの回転方向を確認できた7個体中、3個体が左回転、4個体が右回転であった。

**無台杯** 形態的な特徴から2種に分類した。径高指数22以上で箱状(盤状、杯状)の形態を志向するものをA類、径高指数21以下で浅く皿状の形態を志向するものをB類とした。A類では体部の傾きが底径指数65前後にまとまり相対的に急角度に立ち上がる一群と、底径指数55～60の間にまとまるやや緩やかな立ち上がりを見せ

須恵器無台杯



土師器無台椀



第13図 須恵器無台杯と土師器無台椀の法量分布



る一群に偏在する傾向も看取される(第13図)。このため個体数に恵まれず遺存率も不良なものが多いが、便宜上、体部の外傾が急な傾向のある前者をA類でも1類、外傾が緩やかな傾向にある後者を2類と細分した。なお、体部が直線的に開くものが大勢を占めるが、丸みをもって立ち上がるものも少量見受けられる。また、法量的におおむね口径12cm～13cmの間に収まるものが大勢であるが、12cm以下となる小口径のものや13cmを超える大口径のものも少量ながら認められる。しかし、個体数に恵まれないことから、こうした形態的特徴や法量の差異に基づく細分は行わなかった。製作技法上の特徴であるが、底部の切り離しはすべてヘラ切りによることが確認できる。また外底部のヘラ切り痕、内底部ナデ痕の回転方向、ロクロケズリに伴う砂粒の移動方向などの観察からロクロの回転方向が識別できた22点のうち、左回転のものが12点、右回転のものが10点と左回転のものがやや優勢である傾向が判明した。また中には非常に薄造りになるものもあり器厚が2mm以下まで薄くなる個体も確認される。

**長頸瓶** 法量は大型のものと小型のものが確認できる。大型のものでは口縁部が大きく開く形状のものも認められる。製作技法上の特徴であるが、出土したものの中には、胴部外面にタタキメを残すものも認められる。また、胴部下位はロクロケズリが施されるものも多く認められる。

**甕** 破片数は豊富であるものの接合率が悪く全体の形状を確認できるものが少ない。そのため詳細は不明であるが、法量的に大ぶりのものと小ぶりのものが確認できるようである。外面の叩き具原体の文様には平行線文・格子文が確認できる。内面の当て具痕には同心円文・平行線文または格子文の原体が確認され、平行線文や格子文の当て具は主として底部の叩き出しに用いられる。なお、成形に用いられる叩き具の原体は格子文のものが優勢で、胴部が確認できる8個体の内、格子文のものが5個体を数える。

#### b 土師器(第14図)

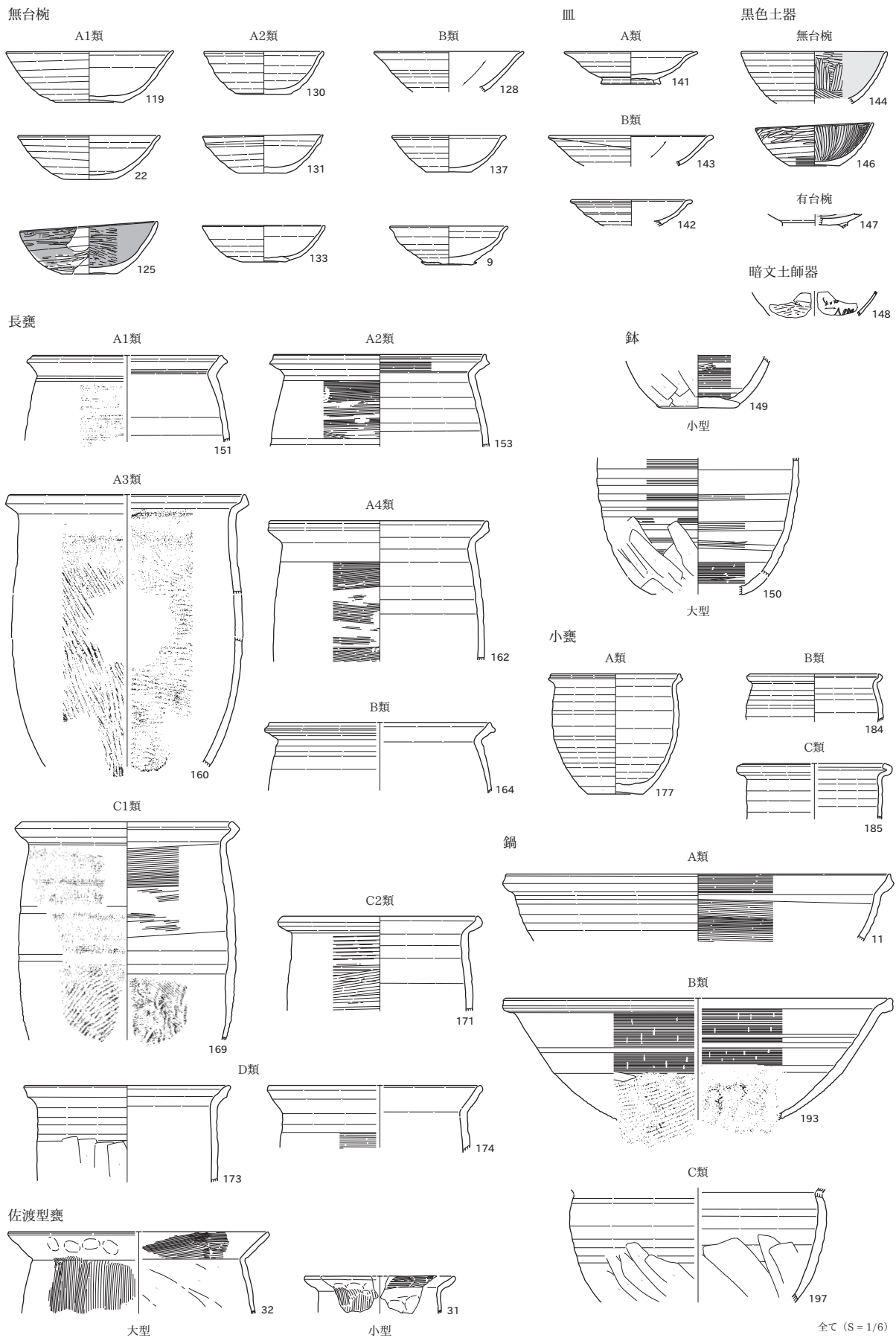
土師器は製作にロクロを使用するものが大半で、食膳具の無台椀、皿、煮炊具の長甕、小甕、鍋が認められる。そのほかにそれらと同時期ながらロクロ不使用の「佐渡型甕」、ロクロ使用が一般化する以前の可能性のあるものがごく少量存在する。後者については高杯が1点確認されたのみなので特に分類しない。

**無台椀** 形態的特徴から2種に大別した。体部が丸みをもって立ち上がるものをA類、体部が直線的に立ち上がる傾向にあるものをB類とした。A類の径高指数は27.1～36の範囲であるが、その分布に有意な傾向を見出すのは難しい。しかし、明確な法量分化が認められるため、口径14cmより大きくなる大口径のものを1類、口径14cm以下の小口径のものを2類に細分した。また、A1類は口径15～16cm程度に分布の中心があるが口径18cm近くになるものも見受けられる。A2類では底径指数に39.8～47の範囲にまとまるやや底径の大きいものと、31.7～35.4の範囲にまとまる底径の小さいものに偏在する傾向が窺われる(第13図)。見た目の形状にも相違が認められるが、定量的に分類の妥当性を裏付けるのが難しいため、特に細別は行わなかった。B類には口径に大小あり、口縁部形状にも形態的な相違が認められるが、個体数に恵まれないため細分は行わなかった。口縁部が外反・肥厚する特徴的なものも見受けられる。製作技法上の特徴であるが、底部の回転台からの切り離しはすべて回転糸切りによるものである。底部の切り離し痕やロクロケズリに伴う砂粒の移動方向などの観察からロクロの回転方向が識別できた15点のうち、左回転のものが4点、右回転のものが11点と右回転のものが優勢である。また、胴部下位にロクロケズリを伴うものや器面調整にミガキを多用するものも見受けられる。

小片で形の詳細は不明であるが、内面に暗文を施すものが1点のみ出土している。

**皿** 口縁部の形態的特徴から2種に分類した。口縁部が薄く緩やかに外反するものをA類、口縁部が強く外反し肥厚する傾向にあるものをB類とした。底部を欠損し高台の有無が不明なものが多いため、器種分類で台の有無を基準に区分は行わなかった。B類では口径16cmに及ぶ大口径のものも認められる。製作技法上の特徴として、底部まで残存するものでは、胴部外面下端から外底部にロクロケズリを施すものが確認される。

**長甕** 多量に出土したが全体的に接合率が低く全体の形状を想定できるものが少ない。口縁部形態の差異に基づき4種に大別した。



第14図 道正遺跡出土土師器・黒色土器分類図

口縁部は外反、口縁端部が上方に向けてつまみ出されるように突出するないしは屈折するものをA類とした。出土品ではこのA類に該当するものが大勢を占め、またさらに細別が可能である。口端部の上方へのつまみ出しが弱く、断面が四角状で鋭い稜を有するものを1類、口端部を外内両側から押さえ強めにつまみだされるように作出されるものを2類、口端部が外側に面をなすものを3類、端部の上方への突出が弱く稜線の鈍いものを4類とした。口縁部は外反、口端部が外側に面をなしその両端が弱くつまみ出すように作出されるものをB類とした。口縁部は外反、口縁端部が丸みを帯びた形状で屈折し、口端部を丸く収めるのみでA類のようなつまみ出しを伴わないものをC類とした。さらに口縁端部が強く屈折し内傾するものを1類、口縁端部が屈折し上方に向くものを2類とした。なお、A～C類との類似に乏しく年代もしくは系統を明確に異にすると判断されるものでも出土点数のわずかなものは、分類の煩雑さを避けるためにその特徴の差異如何にかかわらずその他のものとしてD類に一括し、各説で個別に説明することとした。

胴部の形態には膨らみを有するものと寸胴のもの両方が認められ、底部は丸底に作出されるのが一般的と思われる。製作技法の特徴であるが、すべてロクロ成形である。内外面ともに胴部上半の調整はカキメを伴うものとロクロナデのみもの両方が確認される。胴部下半はタタキ成形を伴うものがほとんどだが、胴部外面をケズリによって整形し仕上げられるものも見受けられる。タタキ成形で使用される工具圧痕は、外面の叩き具では平行線文のみで、内面は同心円文、平行線文、格子目文などが認められた。また内面はタタキ成形後に粗雑にハケメ調整が施されるものも散見される。

**小甕** 主に口縁部形態の特徴から、3種に分類した。長甕A類口縁部の製作技法及び形態と共通する特徴を備えるものをA類とした。口縁部が外反、口縁端部で短く屈折し、口端部を丸く収めるものをB類、口縁部が外反、口縁部中ほど大きく折り曲げ、口端部をつまみず丸く収めるものをC類とした。全体的な形状は胴部が上位から中位にかけて膨らむものが大半だが寸胴型を呈するものも見受けられる。製作技法の特徴であるが、すべてロクロ成形による。胴部下端にロクロケズリまたはケズリを施すものも見受けられる。底部の切り離しはほとんどが回転系切りによるものである。ロクロの回転方向が識別できた8点はすべて右回転であった。

**鍋** 接合率も低く個体数にも恵まれないため、全体的な形状がつかめるものが少ない。主に口縁部形態の差異などにに基づき3種に分類した。長甕A類口縁部の製作技法及び形態と共通する特徴を備えるものをA類、長甕B類の製作技法及び形態と共通する特徴を備えるものをB類とした。口縁部の残存するものはないが、胴部に張りを有し鉢状の形態のものをC類とした。C類は器が深く鉢状の形態を呈すると推測されるが、器面に煤が付着し煮炊具としての使用が想定されるため鍋とした。底部までの形状を確認できたものはないが、A・B類は一般的によく見られるタイプのものであり、丸底を呈すると考えられるが、C類については不明である。なお製作技法の特徴であるが、すべてロクロ成形による。A・B類は胴部から底部にかけてタタキ成形を伴い、外面の叩き具痕には平行線文、格子文のものが確認され、内面の当て具痕では平行線文のみが認められた。また、内面は叩き成形後にハケメ調整が施されるものも見受けられた。C類のものはタタキ成形を伴わず、胴部下半にヘラケズリによる整形を施すもので形態的特徴も含めてA・B類と系譜を異にする可能性が示唆される。

**佐渡型甕** 非ロクロ成形による土師器甕。形態は球胴で底部は丸底を呈していたものと思われる。頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾する。法量は口径が28～29cm程度の大口径のものとして16cm程度の小口径のもの2種が確認される。製作技法上の特徴であるが、外面は口縁部がヨコナデ、器面に指頭圧痕をよく残す。胴部は縦位のハケメ調整。内面は、口縁部が横位のハケメ、胴部はナデ調整であるがハケメが及ぶものも見受けられる。また、胎土は、夾雑物は細かく肌理が砂っぽくざらついた印象を受けるのが特徴的である。

#### c 黒色土器 (第14図)

黒色処理を施したもので、食膳具の無台碗・有台碗が認められる。外面は胴部下半(～底部)をロクロケズリのち磨かれ、内面も磨かれる。黒色処理は内面に施すもののみである。

### 3) 遺物各説

#### a 遺構出土土器

**SB484** (P208) (図版 45、写真図版 63)

1は須恵器甕。各部位の破片により図上復元したものである。P208から出土しているのは1片で、大部分は付近の包含層出土である。口縁部は外傾、口端部は上端に面をなし内側が弱くつままれる。外内面ともに自然釉がかかる。胴部上半には張りがあり、底部はややすぼまる形になると考えられる。外面のタタキメが平行線文、内面の当て具痕は胴部下位までは柾目状の木目を伴う同心円文、下位では格子文となっている。胴部外面には叩きののち一単位10条以上の粗いカキメが上部ほど密に施されている。底部近くは内面も自然釉がかかる。焼成は器表面のみが還元し、器肉は酸化し赤く発色する。胎土の夾雑物には長石と微量の石英の混入が観察され、新津丘陵産の可能性が高いと考えられる。

**SB521** (P510・513) (図版 45、写真図版 63)

2はP510出土の土師器長甕A3類で、胴部外面はカキメ、内面はロクロナデ調整である。3はP513出土の土師器長甕A2類。外内面ともにロクロナデ調整。外面に煤の付着が認められる。

**SK194** (図版 45、写真図版 63)

4は須恵器有台杯でA1類、胴部下端にロクロケズリを施し、焼成は比較的堅緻である。5は土師器長甕でA2類、胴部は寸胴形を呈し、胴部外面と口縁部内面にやや粗いカキメが施されている。

**SK222** (図版 45・46、写真図版 63・64)

6・7は須恵器無台杯。6はB類で口径12cm以下の小口径、焼成堅緻で器壁は薄く仕上げられる。7はA2類。8は須恵器横瓶で、同一個体の破片が多数確認されたが、破片相互の接点に乏しく全体の器形が分かる状態では接合しなかった。そのため、部位・形状、製作技法の特徴をよく示す破片を選別し図面上で復元した。両面閉塞である。胴部はタタキ成形で外面のタタキメは格子文である。図の左側が成形当初の底部と考えると、内面の当て具は製作開始時には同心円文のものを用いるが、胴部中位から上側面にかけてはこの当て具痕と布目が混在するようにみられるようになり、指頭圧痕も目立つようになる(写真図版78)。そして右側閉塞部では同心円文は全くみられない。大変珍しい痕跡であり、この布目の解釈については検討を要する。なお、同心円文の当て具痕には柾目状の木目が確認される。上側面は浅く絞り孔を窄めて成形したとみられ、その端部に皺が観察される。閉塞部分の粘土盤は両側ともに欠損する。胴部外面にはカキメの代わりに帯状にロクロナデを施す。口縁部は胴部に穿たれた孔の端部を巻き込むように貼り付けられ、その接合部に明瞭な接合痕を残す。また、接合部では胴部外面に口縁部との境に沿って凹線を巡らす。口縁部は外傾、口端部は上端に面をなし外側につままれる。外面は自然釉がかかる。9は土師器無台碗B類、直線的に開くが、胴部上端で内湾し口縁部が外反する。口縁部内外面に煤が付着し、被熱による変色も認められる。10は土師器小甕。胴部下端にロクロケズリを施す。被熱による変色や器面の剥落が認められる。11は土師器鍋A類で口縁部の形態は長甕のA2類に類似する。外面に黒斑、煤の付着、内面にコゲ状の付着物が確認される。12は須恵器長頸瓶。頸部が細いタイプのものと思われるが、本遺跡出土のものの中では相対的に太い。頸部は直立気味に立ち上がり口縁部へ向けて外反する。端部は欠損して不明である。球胴で胴部上位がやや張る。高台は踏ん張る形状を呈し端面で接地する。また、頸部は整形時の回転台使用による挽き絞りによるものか内外面に螺旋状の皺が確認される。胴部下端にはロクロケズリを伴う。

**SK281** (図版 46、写真図版 64)

13・14は須恵器無台杯。13はA1類で、体部外面に墨書が認められる。また内外面に煤の付着が認められる。14はA2類で、比較的器壁が薄く仕上げられ、焼成は堅緻である。器面には黒色の吹き出し状の斑点がまばらに確認される。15は須恵器甕である。法量的には小ぶりのものと思われる。上半と下半は接合せず、図示した上半と下半の上下の位置関係はよくわからない。口縁端部は欠損して不明である。頸部は直立気味に外傾し、口縁部で外反する。口縁部はロクロナデ、胴部はタタキ成形。外面のタタキメは格子文、内面の当て具痕は同心

円文で胴部下位から底部にかけては平行線文である。また当て具痕は同心円文のものでは柂目状の木目、平行線文のものでは溝に対し直交する木目が観察される。頸部外面下端には幅狭いくっきりとしたカキメが巡らされ、胴部にも単位幅の狭いカキメが間隔をあけて巡らされる。口縁部内面、胴部上位、内底部に自然釉がかかる。なお、器面には焼成時の火ぶくれが多数確認される。16は須恵器甕で胴部上位から下位までの破片がある。比較的肩の張る形で底部はすぼまらなるとみられる。胴部外面のタタキメは格子文、内面の当て具痕は上位では同心円文、下位では溝に直行する木目をともなう平行線文である。叩きののちカキメではなくナデが間隔をあけて施されている。

**SK284** (図版 46・47、写真図版 64～66)

17は須恵器有台杯 B1 類、高台は内傾し断面は台形状、比較的シャープな作りである。胴部下端にロクロケズリを伴う。ヘラ切り痕の観察からロクロは右回転である。18は須恵器無台杯 A1 類。体部外面に逆位の「木」と思われる墨書がある。19は須恵器長頸瓶。SK370 出土の資料とも接合関係にあるが、破片の大きさから判断し SK284 に帰属させた。頸部は細く直立気味に外反し口縁部へ向けて緩やかに開く。口縁部は欠損する。球胴で肩部に強い張りを有する。高台はやや踏ん張る形状を呈し内端で接地し、端面に凹線を巡らす。器面はロクロナデ調整であるが、頸部内面には粘土紐の巻き上げ痕、胴部外面には成形時のタタキメが観察される。また、胴部外面下位にロクロケズリを施す。外面頸部から胴部にかけて、内面は頸部まで自然釉がかかる。内面は煤の付着やはじけたような剥落が確認されるため、二次的に被熱した可能性が指摘される。20は須恵器甕である。SK284 からの出土は一片のみで大部分は包含層から出土した。法量的には小ぶりのものである。口縁部は外傾気味で緩やかに外反して立ち上がり、口端部は外側に面をなし外端がつまみ出される。口縁部は内外面ロクロナデ、胴部はタタキ成形。頸部外面下端に幅狭いカキメを巡らしている。外面のタタキメは平行線文、内面の当て具痕は同心円文で胴部下位から底部にかけては平行線文である。内面の当て具痕の同心円文は溝に対して平行する木目が観察される。口縁部内面に自然釉による光沢面を持つ。焼成は器表面だけが還元し、器肉は酸化し赤く発色する。21～23は土師器無台碗である。21・22が A1 類である。21は外面に煤の付着が著しい。22は二次的な被熱に伴う変色が認められる。23は A2 類。24～27は土師器長甕。いずれも A2 類、胴部は寸胴形を呈すると思われる。いずれも胴部の調整にカキメを施すが24はカキメの原体がやや粗い。24～27は外面に煤の付着が確認される。28は土師器小甕で、胴部外面下端にロクロケズリを施す。底部の切り離しは、糸を用いたと考えられるが、痕跡が湾曲はするものの完全な円にはなっておらず、回転してはいたが切り離し途上で回転が緩み静止状態に近くなったものであろうか。29は鍋 A 類の上半部で、残存部の下端にわずかにタタキメがみられる。30～32は佐渡型甕。法量的には口径が30は推定 29.4cm、32は推定 27.8cm と大型のものに該当し、31は推定 16.2cm と小型である。30の口縁部外面はヨコナデ、中位に指頭圧痕が列状に巡るのが確認される。内面は横位または斜位のハケメ調整で、器面は平坦に仕上げられる。内面のハケメは胴部上端に及ぶが、ナデ調整によって磨り消される。31の口縁部外面はヨコナデ、頸部に沿って指頭圧痕が確認される。内面は横位のハケメ、胴部はナデを施すが指頭の成形により器面の凹凸が目立つ。二次的な被熱に伴う煤の付着、器面の変色・剥落が認められる。32は口縁部の指頭圧痕はややまばらである。胴部外面は縦位のハケメ、内面は口縁部が横位のハケメ、胴部が斜位のナデであるが、比較的乾燥の進んだ段階で施されたと思われ砂粒痕が認められる。また胴部外面は平滑に仕上げられるが、内面は成形段階での押圧に伴う凹凸を残している。

**SD503** (図版 47、写真図版 66)

33は土師器小甕。外面に煤、内面にはコゲの付着が認められる。

**P339** (図版 48、写真図版 66)

34は須恵器無台杯 A2 類。口径は 13cm 以上で大ぶりである。体部は丸みをもって立ち上がり口縁部がわずかに外反する。焼成不良で軟質である。内面底部に「方」の墨書が認められる。

## (2) 包含層出土土器 (図版 48～58、写真図版 66～77)

包含層出土遺物は、須恵器・灰釉陶器を食膳具・貯蔵具の順で、土師器・黒色土器を食膳具・煮炊具の順で器種分類に従ってまとめて掲載した。以下、実測図の掲載順にしたがい詳述する。

35～45は須恵器杯蓋。遺存率不良なものが多く全体的な器形のわかるものは少ない。摘みの形状はいずれも円盤の中央をくぼめるものである。35は中央の凹みが浅くやや古い特徴を示しているように思える。39は摘み径4.2cmと相対的に大きい。法量的には39・41・42・43が口径14cmを超え大ぶりであるのに対し、37・38・44・45は口径14cm未満で小ぶりである。43は天井部にロクロケズリによる再調整が施される。37・38・39・43・44・45は口縁部外面端部が黒色化しており重ね焼きされたと考えられる。35・41は墨痕を確認できないが、内面に磨面をもつことから転用硯の可能性が考えられる。また、42のみが精良な胎土で夾雑物に微量の石英が観察されるもので新津丘陵産と考えられる。

46～64は須恵器有台杯である。遺存率不良で全体的な器形が確認できるものが少ない。53・54がA1類、64がA2類、47・51・52・55～60がB1類、63がB2類となる。欠損により高台の形態から分類できないものでは、46・48・49・50が1類、61・62が2類となる。製作技法上の特徴としては、51・53・54・56・57・58・60では胴部外面下位から下端にかけてロクロケズリを伴い、64では腰部に1条凹線を巡らす。

65・66は須恵器有台碗としたが、遺存率悪く全体の形状は不明である。ともに直立する高台を伴う。65の底部形状は平坦であるが、66はすり鉢状に丸みを帯びる。また、65の欠損部には人為的に施されたと思われる剥離痕が観察されることから二次的な転用の可能性が指摘される。

67は須恵器の有台の食膳具と思われる。有台杯とは系統が異なり碗か皿の類と推察されるが不明である。底部から高台にかけての破片である。底部は平坦で、器壁が薄く直立する高台が付されると思われるが、全体の器形は不明である。器面の調整はロクロナデで丁寧仕上げられる。外底部はヘラ切りまたはロクロケズリであるが残存範囲が狭く判断がつかない。胎土は比較的精良で夾雑物に白色粒子と微量の石英が観察されるが、産地は不明である。

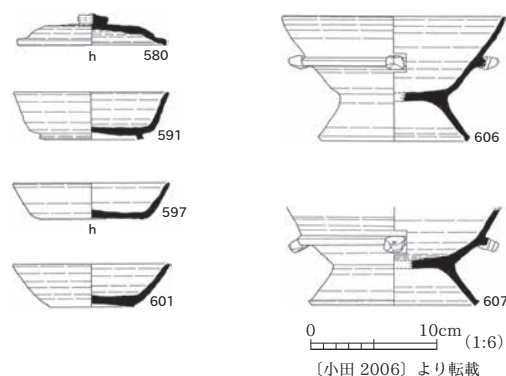
68～100は須恵器無台杯である。70～73・75・90がA1類、68・69・74・76～89・91・92・95・96がA2類に該当する。また93・94がB類となる。また90～92・95・96が12cm以下と口径が小さい傾向がある。焼成はおおむね堅緻であるが、74のようにやや軟質なものと92のように酸化焰焼成となるものも見受けられる。また、70・73・77・78・83・86・88・89などでは重ね焼き痕(口縁端部外面の黒色化)が認められる。76・77・81・82・83・85・87・88・90・95では器表面にいわゆる黒色の吹き出し状の斑点が観察される。なお、72・84・85・90・98・99・100の個体では外側面や外底部に墨書が確認され、100では「木」、84では「且」と判読できる。78は大粒の夾雑物を含み、阿賀北産の可能性はある。

101は灰釉陶器有台碗。三日月高台で、体部は丸みをもって立ち上がり口縁部はわずかに外反肥厚し端部は丸く収められる。外底部から胴部下位はロクロケズリ、施釉はハケ塗りによる。また内底部には重ねられた個体をはがした際の残りと思われる粘土塊がわずかに弧状に付着する。黒笹90号窯式期に比定され9世紀後半の所産である。

102は当初凸帯付の須恵器瓶かと考えていたが、見込みの器面の状況や器壁が薄いこと、同一個体とみられる口縁部が図示したようなものであることから須恵器凸帯付鉢とした。高台部は直立し平坦でふんばる端部で接地する。底部はややすり鉢状に丸みを帯び体部は直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに肥厚し口端部は丸く収められる。胴部中位に断面三角形の凸帯が巡る。また凸帯を巡らすのに先行しその貼り付け部分に沿ってあらかじめ条線が罫書<sup>けが</sup>されているのが剥落部分から看取される(写真図版78)。なお、形態的な相違はあるものの、同程度の法量で有台の鉢として類縁性が窺われるものに滝寺古窯跡群西区9号窯灰原出土の資料が挙げられる(第15図)。

103～110は須恵器長頸瓶。103～108が大型のものに該当する。104は口縁部が広く開口する長頸瓶の口縁部破片。103は高台が直立気味に貼り付けられ、球胴で肩部に張りを有する。頸部が細く直立気味に口縁

部へ向かって緩やかに外反し、口縁端部は欠損する。外面は頸部から胴部にかけて、内面は口縁部から頸部、胴部下半に自然釉がかかる。また、底部内面にはじけたような剥落が確認される。105は胴部が比較的大きく接合したもので、肩部にロクロケズリ、胴部下端近くのロクロナデ下に格子文のタタキメがみられる。106は胴部下半～底部の破片で、平坦でやや踏ん張る高台がよく残る。内面底部から体部へ立ち上がる部分には指で押さえたようなくぼみが巡る。107は肩の屈曲が強く、やや古い形態の胴部である。108は底部破片。高台が剥落しており、その部分には底部外周に沿って条線が巡らされている。また、底部外面はナデ調整が施されるが、下地にヘラ切り様の痕跡を観察することができる。



第15図 滝寺古窯跡群西区9号窯灰原出土の凸帯付碗型鉢

109・110は小型のものに分類される。109は口縁部破片。110は頸部から上方を欠損する。高台はやや粗雑な作りの踏ん張る形状で、胴部は球胴、肩部に強い張りを有する。底部の切り離しは回転糸切りによる。外内面ともにロクロナデ調整であるが、胴部中位から下位にかけてロクロケズリを施す。胴部上面は頸部に向かって浅く絞って整形される。胎土はやや粗く夾雑物には長石・石英が観察され、阿賀北産と考えられる。

111は耳付の須恵器瓶である。小破片であり全体の器形は不明であるが、器形の傾きから胴部下位の破片であると考えられ、耳の貼付け部位から勘案して三耳瓶と想定する。耳は器体のロクロナデ調整後に貼り付けられ、指頭により成形しケズリを施し面取りすることで整形されている。胴部に整形時のケズリ工具のアタリを確認することができる。また側面に小孔があげられる。112も須恵器瓶の一種と考えられる。胎土や色調が111に近似し分量も同程度に推定されることから同一個体の可能性も考えられるが、双耳瓶、三耳瓶に高台を有する類例を見ないことから別個体の扱いとした。

113は須恵器横瓶である。残存部は製作時の胴部上側にあたるかと考えている。平行線文タタキメ、同心円文当て具痕がみられる。閉塞部は強いロクロナデで作られ、端部を丸く整えている。閉塞円盤は欠損する。外面は全体的に自然釉がかかる。

114～118は須恵器甕である。114は甕口縁部片で、遺存率不良であるが口径は比較的小径に復元される。口頸部は緩やかに外反、口端部は外側に面をなし、その外端側がつままれる。115は胴部下位の破片である。タタキメは格子文、当て具痕は平行線文である。

116は口縁部から胴部下位までの破片があり、上半部の接合率が高かった。口径は推定28.4cmで今回報告するものでは最も大きく、分厚い器壁をもつ個体である。口頸部は緩やかに外反し、口縁端部は外側に面をなし外側につままれる。胴部のタタキメは長方形格子文、当て具痕は胴部上位から下位までが同心円文、胴部下位より下は平行線文である。残存部で最も下位にあたる場所では更に異なるより細かい長方形格子文のタタキメが観察でき、最下部では当て具に変化はないが叩き具を変えていることがわかる。また胴部外面にはタタキメの上から粗いカキメが間隔をあけて施される。口縁部内面、胴部外面上半に降灰がみられる。外面にはじけたような剥落が見られる部分もあり、焼きはぜとも考えられるが二次的な被熱の痕跡は認められない。

117は口頸部が不明だが、胴部の各部位の破片から図上復元した。胴部タタキメは格子文、当て具痕は胴部下位までが同心円文、胴部下位から底部は平行線文である。平行線文には溝に直交する木目が確認できる。また、外面胴部上位・内面底部に自然釉がかかる。

118は胴部中位から底部までの大破片である。タタキメは溝に対し右上がり斜交の木目を伴う平行線文、当て具痕は中位で同心円文、下位から底部は平行線文に変化する。外面胴部から底部にかけてと内面底部に自然釉がかかる。また、底部に焼成粘土塊の付着が見られる。焼き台など窯詰め用品の痕跡であろうか。

119～138は土師器無台碗である。119～127をA1類とした。119は口径17.9cmと突出して大きい。125は外面胴部下端に底部外周に沿ってケズリ、内外面が磨かれる。また、内外面に漆の付着が確認される。漆は内面では全面に、外面は口縁部縁辺を中心に付着するが全体には及ばない。外面の付着状況や漆表面に掻き取り状の痕跡が認められることから、塗膜処理を施したものというよりは、パレットなどの容器として使用されたものと考えられるが判断がつかない。127は内面にミガキが施され、胴部下位にロクロケズリが施される。

129～135がA2類である。この内132～134は底径が小さく器高も低い傾向がみられる。128・137・138がB類である。128は大口径のもので、内面にはミガキが施されているようにみえる。137・138は口縁部が外反肥厚するのが特徴的であり、Ⅶ期に下る可能性もある。135の外側面に「真」、136の底部外面に「上」の墨書がみられる。なお、136は底部外面に直径方向にのびる直線状のヘラガキがみられ、底部内面に認められる剥離面には糸切り状の擦過痕が観察される。

139～142は土師器皿である。139～141をA類、142・143をB類とした。140・142・143は底部欠損のため高台の有無は不明だが、140は139・141と同形であるため高台を伴った可能性が高い。143のみが口径16.5cmを測る大型品である。139・141の底部外面には高台貼り付けの前にロクロケズリで再調整が行われており、141では胴部下端にも及んでいる。

144～147は黒色土器である。黒色処理は炭素吸着によるものですべて内面のみには施される。145・146が無台碗、147が有台碗である。145・146では外面体部下位から底部まで、144は底部がなく不明だが外面体部下位にロクロケズリを施す。内外面ともにミガキが施される。特に内面は丁寧で144・145・146では規則性をもって放射状に施されている。

148は土師器碗の体部破片である。器面の磨滅が著しく詳細は不明だが、内外ともミガキ調整され内面には螺旋状暗文が施される。

149・150はロクロを使用し、法量的には長甕に近い長胴になると思われ、外面のカキメ調整も長甕に通用のものであるが、叩き成形を伴わず平底を呈し、胴部下半にケズリ調整が行われることや被熱痕がないことから煮炊具ではなく鉢と考えておきたい。内面はカキメ調整が底部近くまで施されている。

151～176は土師器長甕である。151・152がA1類、153～159がA2類である。A2類でも156・158・159は上方へのつまみ出しが弱く突出が短い。160・161がA3類で、162・163がA4類となる。164～168をB類とした。169・170がC1類、171・172がC2類、173・174がD類に該当する。173は胴部が寸胴で、口縁部は中位に稜を有し二重に外反する。ロクロ成形で胴部外面は中位以下にケズリ調整を施す。174は頸部で「く」の字状に屈折し口縁部は外傾、口端部はつままず丸く収められる。ロクロ成形で胴部外面はカキメを施す。175・176は胴部から底部にかけての残りがよいものである。175は胴部がわずかに張りやや平底ぎみの丸底を呈する。タタキメは平行線文、当て具痕は格子文である。176は175に比べると尖り気味の丸底を呈する。タタキメは平行線文、当て具痕は扇形文？でこの原体は出土品の中ではこの個体に限られる。

177～190は土師器小甕である。177～182がA類、183・184がB類、185がC類となる。186～190は胴部から底部が遺存する個体である。小甕は胴部外面下端にケズリ調整を施す場合があり、177・186・187ではロクロケズリ、188では手持ちケズリで調整されている。

191～197は土師器鍋である。191・192がA類、193～196がB類、197がC類となる。192・193・196は叩き成形後に内面にハケメを施す。196の外面ではカキメとタタキメの境界に被せるようにケズリ調整を施している。197の内面にはロクロナデ調整ののちに斜位のナデ、外面下半にはケズリが施されている。

198はロクロ不使用の土師器高杯で、杯部と脚部の接合部の破片である。脚部の内面は無調整で巻き上げ痕を残す。その方向から脚部は逆位で成形されたと判断される。また杯部との接合部で弱い絞り成形を伴うのが観察される。器面の磨滅が著しいが、内外面にはミガキ調整、杯部内面には更に黒色処理が施される。年代は古墳時代後期から古代にかけての所産であると考えられ、上層出土の他の土器とは年代が異なる。



## B 古墳時代の土器（図版 59～87、写真図版 58・59・79～96、別表 4）

### 1) 概要

今回報告する道正遺跡第2～4次調査の調査区から出土した資料で、古墳時代の土器としたものはコンテナで252箱、重量で611.940kgである。おおむね弥生時代終末（古墳時代早期）から古墳時代前期を中心として、古墳時代中期の土器も少量確認できる。ただし、古墳時代の須恵器は確認されていない。なお、編年的位置づけについては第VI章第1節Eに記載している。

### 2) 土器の分類と記述

まず、使用する用語や部位の名称について述べ、続いて器種分類について記述する。遺構出土土器については遺構種別（SI・SK・SD・Pit（以下、P）・SX）の順で記載する。ただし、古墳時代のSI266に付随するSD238についてはSI266の次に記載した。また、古墳時代以外の遺構から出土した資料もあるが、遺構の種別とNo.順で記載している。したがって、遺構の時代については第IV章第3節Bを参照していただきたい。次いで遺構外出土土器、試掘坑出土土器の順で進める。

遺物計測値は別表4に示している。また、器面調整や、スス・炭化物などの付着物等についても本文中では特徴的と考えたものに限り記述しているため、詳細は同じく別表4を参照していただきたい。

#### a 用語

器面調整の名称・表現は以下の通りとした。実測図での表現の仕方は代表的なものを第16図右下に示した。

- ・「ヘラミガキ」は幅の狭い工具で器面を磨くもの。方向のみがわかるヘラミガキは「↔」で表現した。
- ・「ハケメ」は板の木口面を使い土器の表面を調整するもので、器面には平行する条線が残される〔横山1978、土橋ほか2006〕。以下ではハケメの条線幅を「目」と記載し、目の粗い・細かいといった表現をしている。
- ・「ナデ」は指などにより器面をなでたもの。なお、指によるものと判断したものは「指ナデ」と表現した。「ヘラナデ」は板状工具の幅のみ残り、ハケメのような条線は認められないもの<sup>1)</sup>。「ヨコナデ」は回転を用いて口縁部周辺をなでたもの。
- ・「ヘラケズリ」は板状工具で器面を削るもの。
- ・「指頭圧痕」は指による圧痕で、実測図では円形の破線で表現した。

#### b 部位名称

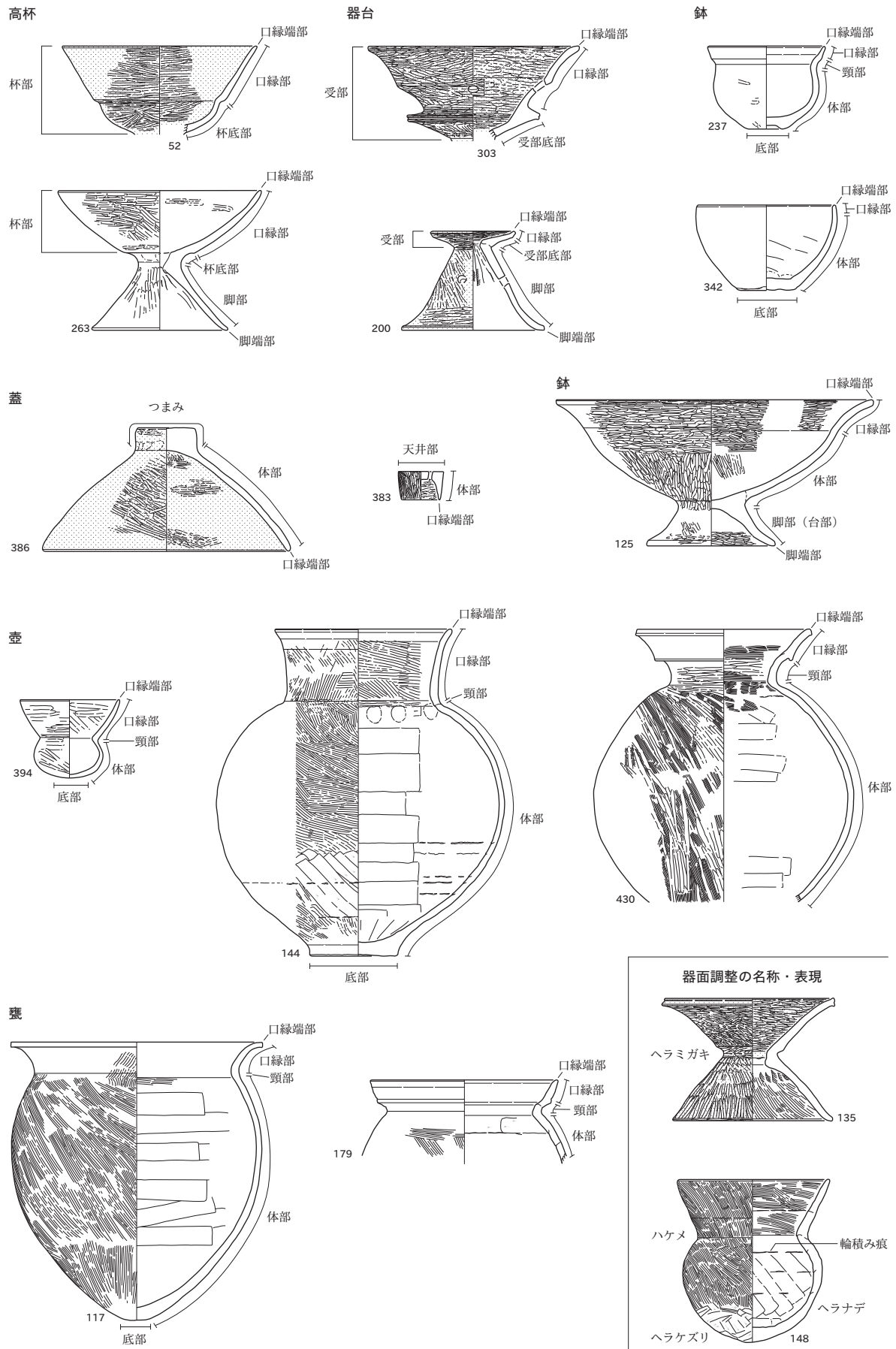
第16図に示した。なお、図にはないが壺や甕の体部で「肩」という表現を本文中で使用した。さらに部位を「上半」「下半」「上部」「中位」「下部」などで大まかな位置を本文中では示した（例：体部上半）。

#### c 器種分類

土器の分類は川村浩司氏の分類〔川村1993〕、滝沢規朗氏の分類〔滝沢2005c・2011・2012・2019b〕を参考とした。器種は高杯、器台、高杯もしくは器台の脚部資料、鉢、蓋、壺、甕、ミニチュア土器、皮袋形土器の順で記述する。また器種内での大別をA・B・C…、細別を1・2・3…、更なる細別をa・b・c…と表した（第17～19図）。なお、文中での身の深い・浅い、口径の大小、透かしや器台受部と脚部の貫通孔の大小、また小振りなどの表現は本報告書での相対的な表現であり、特に基準を設けたわけではない<sup>2)</sup>。

**高杯** 全体の形状が把握できるものが少ないため、主に杯部の形状で分類を行った。そのため脚部や脚部付近の資料については分類していない。

1) ヘラナデの工具については春日真実氏の「ハケメと同じ工具で使用頻度が少なく木目の凹凸が明瞭でないもの、または作業面を木目に平行で切ったものを想定している」〔春日1994a〕という表現を踏襲している。  
2) 例えば当該期の甕の大きさについては滝沢規朗氏が検討〔滝沢2005b〕されており、胴部最大径・器高・口径から大きく大型・中型・小型のまとまりを見出している。また、西川内南遺跡〔野水ほか2005〕、下新保高田遺跡〔青木ほか2010〕の報告書内でも甕の大きさについて検討されている。



第16図 道正遺跡古墳時代土器 部位名称 (S=1/5) と器面調整の名称・表現 (S=1/4)

高杯 A 類：杯部外面が有段、または有稜となるもので、口縁部が外反するもの。脚部の形態は不明。

高杯 B 類：杯部が有段の鉢の形態で、そこに脚部が付くもの。ただし、脚部の形態は不明。口縁部は外傾、または外反気味となる。御経塚ツカダ型式〔北野 1991〕の範疇となる資料も含んでいると考える。

高杯 C 類：東海系ないし東日本型（形）高杯〔田嶋 1994、滝沢 2011〕と考えたもの。口縁部は内湾して立ち上がる。杯部外面は稜ないし段となり、その強弱で 2 つに細別した。なお、稜の部分が欠損する資料は C 類でとどめた。

高杯 C1 類：杯部の稜が強い、ないし段となり明瞭なもの。194 は段の形態が他とは異なるが本分類に含めた。

高杯 C2 類：杯部の稜が弱い、もしくはかなり弱いもの。109 は椀形の杯部と捉え、別とすべきかもしれない。

高杯 D 類：小型の高杯で一括し、杯部外面の段ないし稜の有無で 2 つに細別した。また、D1 類は器壁の厚みで更に 2 つに細別した。なお、脚部全体が残存する資料はない。

高杯 D1 類：杯部が有段、有稜なもの。口縁部が内湾して立ち上がるものと、外傾ないしは僅かに外反するものがある。また、258 のように稜の直上部分に 1 条の沈線が巡る資料もある。なお、器壁の薄いものを D1a 類、厚みのあるものを D1b 類とした。

高杯 D2 類：杯部の稜を欠くもの、または稜を欠くと判断したもの。口縁部は内湾して立ち上がる。

高杯 E 類：大型で有稜もしくは有段となり、口縁部上半から口縁端部は残存しておらず口縁部の立ち上がりは不明であるが、身は浅くなると推測したもの。中山南型式〔北野 1991〕のものと考えた（277）。

高杯 F 類：口縁部欠損のため不明であるが、有段にはならず口縁部が緩やかに外反もしくは外傾すると推定した鉢に脚部が付くもの（274）。高杯 B 類の可能性、あるいは B 類の細別とも考えたが大別した。

器台 全体の形状が把握できたものは少ないため、主に受部の形状で分類を行った。脚部のみの資料については分類していないが、脚部の透かしが三角形で受部と脚部の貫通孔がない資料（133）や、沈線が巡るもの（312）、有段となるもの（315）などが確認できる。

器台 A 類：いわゆる装飾器台・結合器台を一括した。口縁部の透かしの形状は円形と三角形があるが細別していない。

器台 B 類：小型の器台で受部が有段となるもの。口縁部外面が無文か擬凹線文が施されるかで 2 つに細別した。

器台 B1 類：口縁部外面が無文のもの。段より上部の形態は様々あるが一括した。

器台 B2 類：口縁部外面に擬凹線文が施されるもの（301）。

器台 C 類：小型の器台で受部の身が浅く、口縁端部を積み上げることにより面が広がるもの。なお、器台 D 類との区分に課題を残す資料（288）もある。

器台 D 類：小型の器台で受部が直線的にのびるもの。身が浅いものと深いものがあるが一括した。

器台 E 類：小型の器台で受部が内湾して立ち上がるもので一括した。受部の身は浅いものとやや深いものがある。口縁端部の形態は丸く収めるものが多い。また 186 のように器壁の薄い資料もある。

器台 F 類：小型器台のなかでも「X」字形になるもの（135）。受部は有段となる。畿内地方の影響と考えた。

器台 G 類：口縁部が長く外傾すると推測したもの。全体像は不明だが受部は有段となる（300）。

高杯もしくは器台の脚部資料 脚部資料のみでどちらに帰属するか判断できなかったもの。分類はしていない。  
鉢 口縁部の形態や底部の穿孔、脚（台）の有無などを中心に分類を行った。なお、底部に穿孔が確認できない体部下半から底部付近の資料は分類していない。

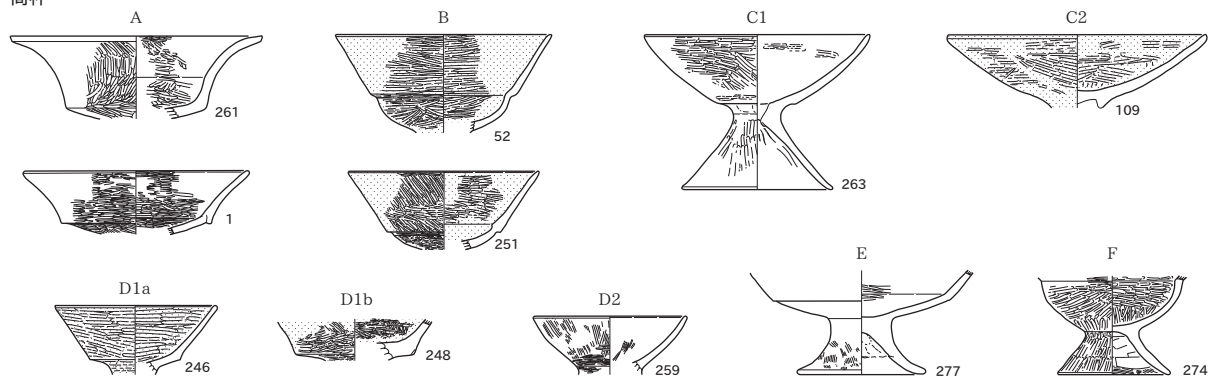
鉢 A 類：口縁部が有段となるもの。ヨコナデによって頸部が弱い段になるものも含めた。口縁部外面が無文か、擬凹線文あるいは凹線文を意識したものが施されるかで 2 つに細別した。

鉢 A1 類：口縁部外面が無文のもの。段は明瞭なものとなり丸くなり不明瞭なものがある。

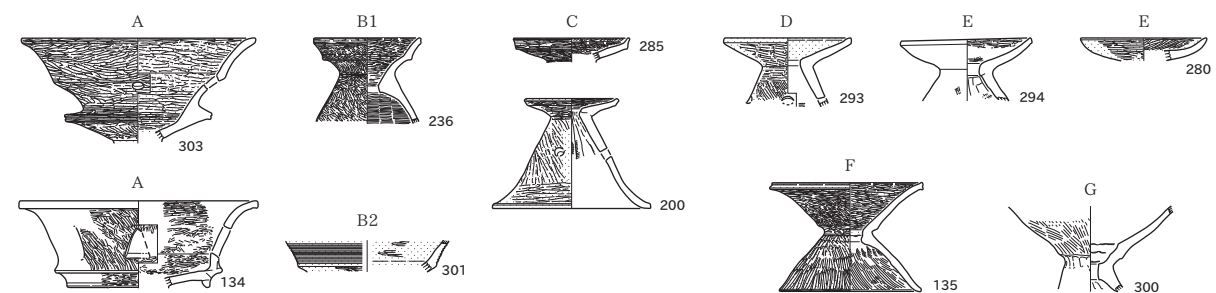
鉢 A2 類：口縁部外面に擬凹線文が施される、あるいは凹線文を意識したと考えたものをまとめた。

鉢 B 類：口縁部が短いものとして捉えたもの。口縁部の形態で 3 つに細別した。

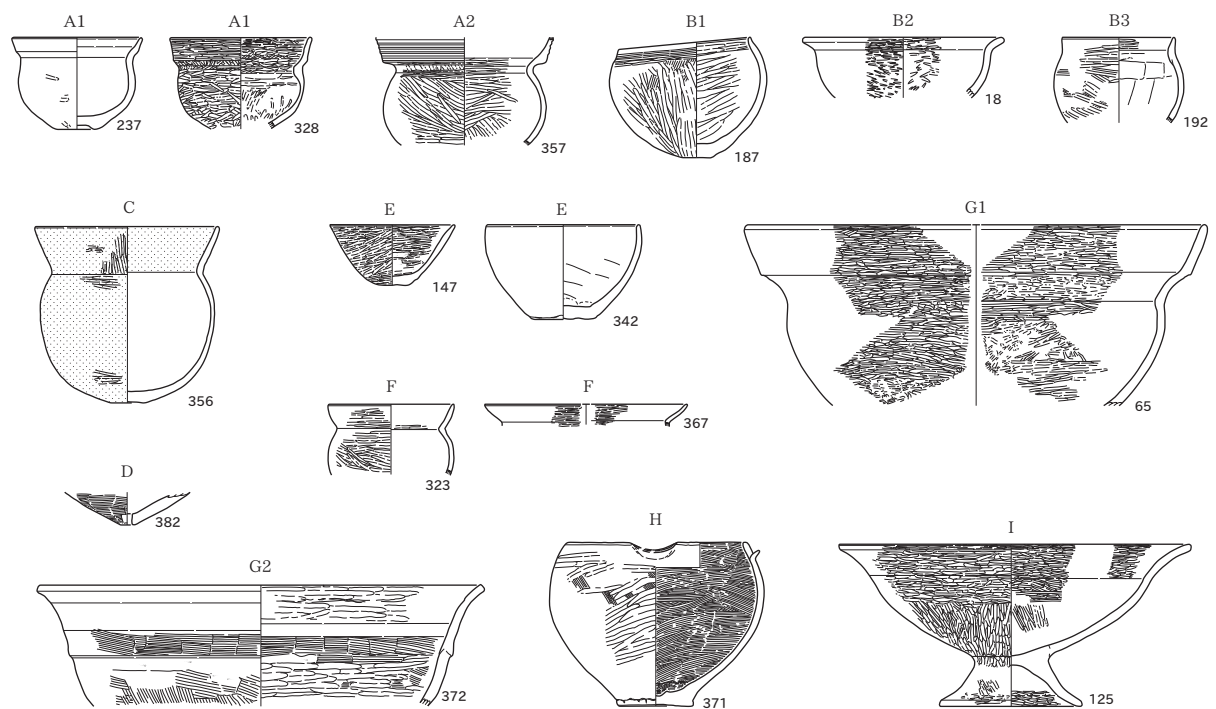
高杯



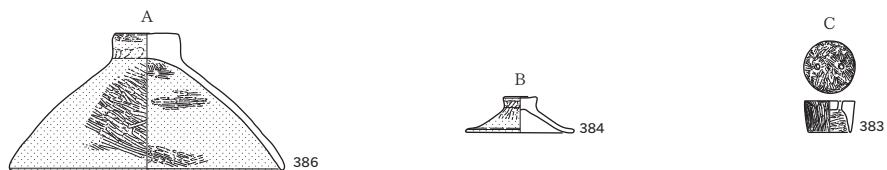
器台



鉢



蓋



第17図 道正遺跡古墳時代土器 高杯・器台・鉢・蓋分類図 (S=1/6)

鉢 B1 類：口縁部が極端に短く、外反するもの。体部の内湾の程度に差があり、口縁端部に向けて窄まるものと内湾せずに外傾し開くものがある。

鉢 B2 類：口縁部がやや短く、口縁端部にかけて外反する、ないしは外反度が弱いもの。

鉢 B3 類：口縁部がやや短く、上方にのびるもの。

鉢 C 類：口縁部が長く、上方に立ち上がるもの (356)。

鉢 D 類：有孔鉢を一括した。

鉢 E 類：椀形となるものを一括した。体部の形態は口縁端部に向けて窄まるものや、内湾せずに外傾するものがある。身も浅い・深いがあり、口縁端部形態も面をもつものと丸く収めるものなど多様となる。

鉢 F 類：口縁部が内湾するもので一括した。そのため様々な形態を含み課題を残す。

鉢 G 類：大型で有段口縁となるもの。段の形態で 2 つに細別した。

鉢 G1 類：大型でしっかりとした頸部をもつ有段口縁の鉢。

鉢 G2 類：大型で口縁部と体部の境に段をもつ鉢。大小があるものと推測する。

鉢 H 類：片口となる鉢 (371)。

鉢 I 類：脚 (台) 付の鉢を一括した。125 は口径が広く身は浅い。一方 374・375 は体部の立ち上がりに角度があり、身も深いと推測する。また、調整も異なるため、125 と 374・375 では違う形態のものに脚 (台) が付くと考える。

蓋 全体の形がわかる資料を分類した。よって、つまみ付近の部分的な破片資料は分類していない。

蓋 A 類：大型の蓋で、つまみをもち、体部が内湾気味で笠状となるもの (386)。

蓋 B 類：つまみをもち、体部が直線的ないしは「ハ」の字状に開き、扁平なもの (384・385)。

蓋 C 類：円柱状でつまみをもたないもの (383)。

壺 口縁部の形態と寸法の大小によって分類を行った。体部や底部付近のみの資料は分類していない。なお、A 類から E 類を小型として捉えた。

壺 A 類：小型で、長めの口縁部となり体部側が窄まるもの。口縁部外面の段の有無で 2 つに細別した。段が確認できない破片資料や体部資料は A 類でとどめた。なお、体部については球形を呈するものと扁平となるものがある。

壺 A1 類：口縁部外面に段を有するもの。口縁部は内湾もしくは内湾気味となり、外傾ないしは上方に立ち上がる。口縁部外面のヘラミガキは縦方向と横方向がある。

壺 A2 類：口縁部に明瞭な段がなく、内湾して上方に立ち上がるもの (502)。東海系ヒサゴ壺の影響と考えた。

壺 B 類：いわゆる小型丸底の壺 (鉢) などと呼ばれるもの。以下のように 2 つに細別した。

壺 B1 類：体部に比べ口縁部が発達し、最大径は口径となるもの。畿内地方の影響と考えた。

壺 B2 類：B1 類よりも体部が発達するが、最大径は口径となるもの。

壺 C 類：小型であるが、B 類よりもかなり体部が発達し、口径と体部最大径の値が近い、もしくは体部中位が最大径となるものをまとめた。B 類の系統で考える資料もあるが、形態差もあるため大別した。

壺 D 類：小型で球形の体部に、直立気味の口縁部が付くもの。つくりは粗雑となる (409)。

壺 E 類：小型で口縁部が短く有段となるもの (407)。全体像は不明。

壺 F 類：口縁部が無段のもの。口縁部の形態で 3 つに細別した。

壺 F1 類：口縁部が外反するもの。「く」・「コ」の字状を呈するものがあるが一括した。口縁端部は面となるものと丸く収めるものがある。なお、口径を見る限り、大きさに差があるため大小があると推測する。

壺 F2 類：口縁部が上方に立ち上がるもの。

壺 F3 類：口縁部が内湾するもの。

壺 G 類：口縁部が無段で、肩の張りが弱く、なで肩となるもの。口縁部に刺突が入る資料 (78) もある。

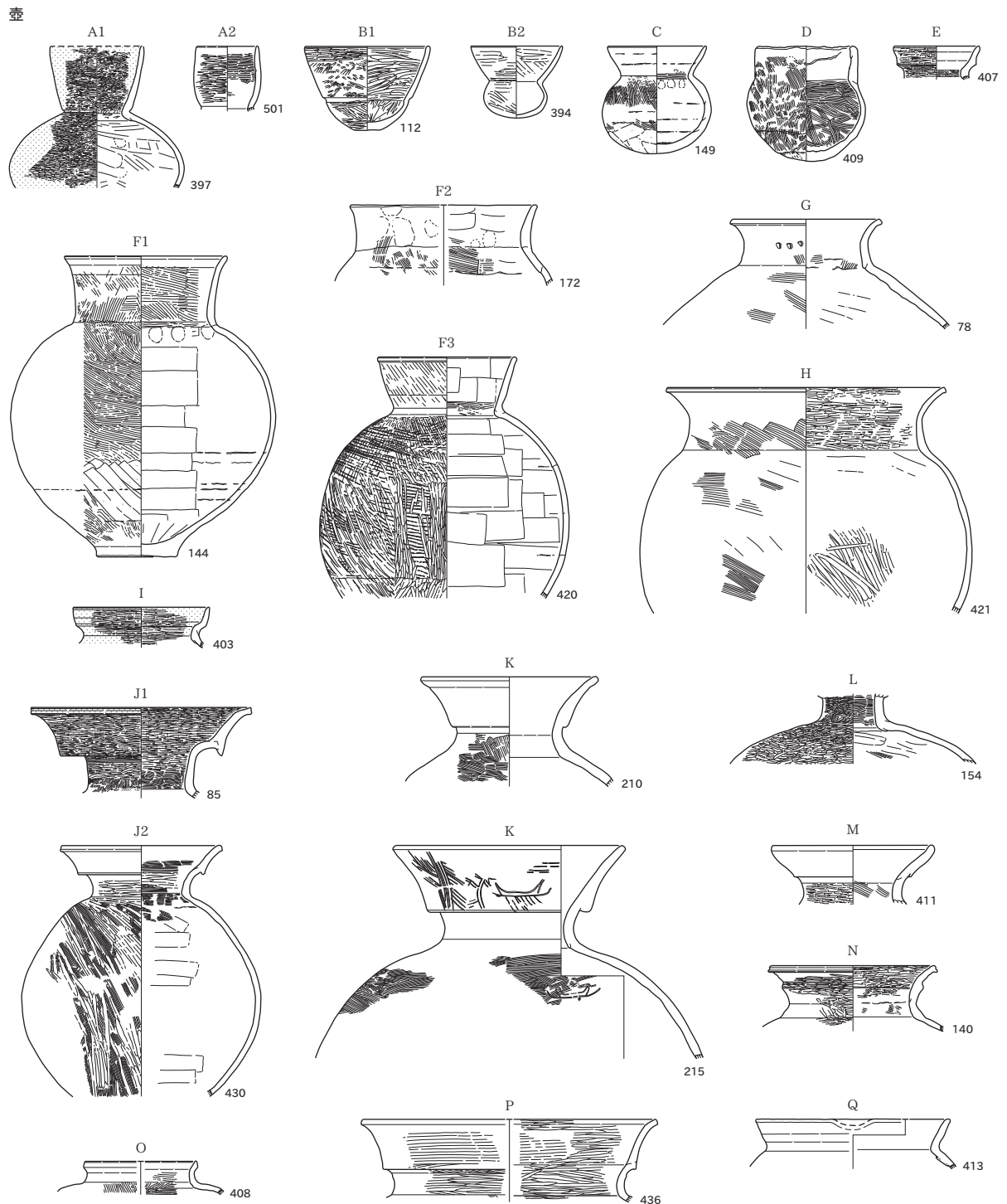
壺H類：口縁部が無段で、器高に対し口径が大きくなると推定したもの。口縁部は外反し、口縁部内面にヘラミガキが施される。

壺I類：口縁部外面に有段となり、口縁部は短めで直立気味に立ち上がるもの。

壺J類：いわゆる二重口縁壺と呼ばれるもの。以下のように2つに細別した。なお、1類と2類の区分に確証が欠けるため課題を残す。また壺J2類と壺K類との区分に曖昧なものがある点も課題を残す。

壺J1類：頸部が直線的となる畿内系二重口縁壺。

壺J2類：頸部・口縁部とともに外反する壺と考えたもの。刻み目や沈線が巡るものもある。



第18図 道正遺跡古墳時代土器 壺分類図 (S=1/6)

壺 K 類：J 類とは異なる有段口縁を呈するものを一括した。弥生時代以降定量存在するものとして考えた。頸部の長短で分類可能と考えるが細別はしていない。また大きさにも差がある。口縁部内面の段が明瞭となるものは少ない。なお、刻み目や沈線が巡るものもあるため、壺 J2 類との区分に課題を残す資料もある。

壺 L 類：口縁部が有段で、頸部がかなり細く直線的なもの (154)。口縁部形態が不明のため大別した。

壺 M 類：口縁部が有段で内湾し、しっかりとした頸部となるもの (411)。

壺 N 類：口縁部が有段で、段は横方向にやや鋭く突出するもの。口縁部は外反し、口縁端部下端を摘むことにより面となる (140)。山陰地方の影響であろうか。

壺 O 類：口縁部が無段で短く、肩の張りが強いもの (408)。

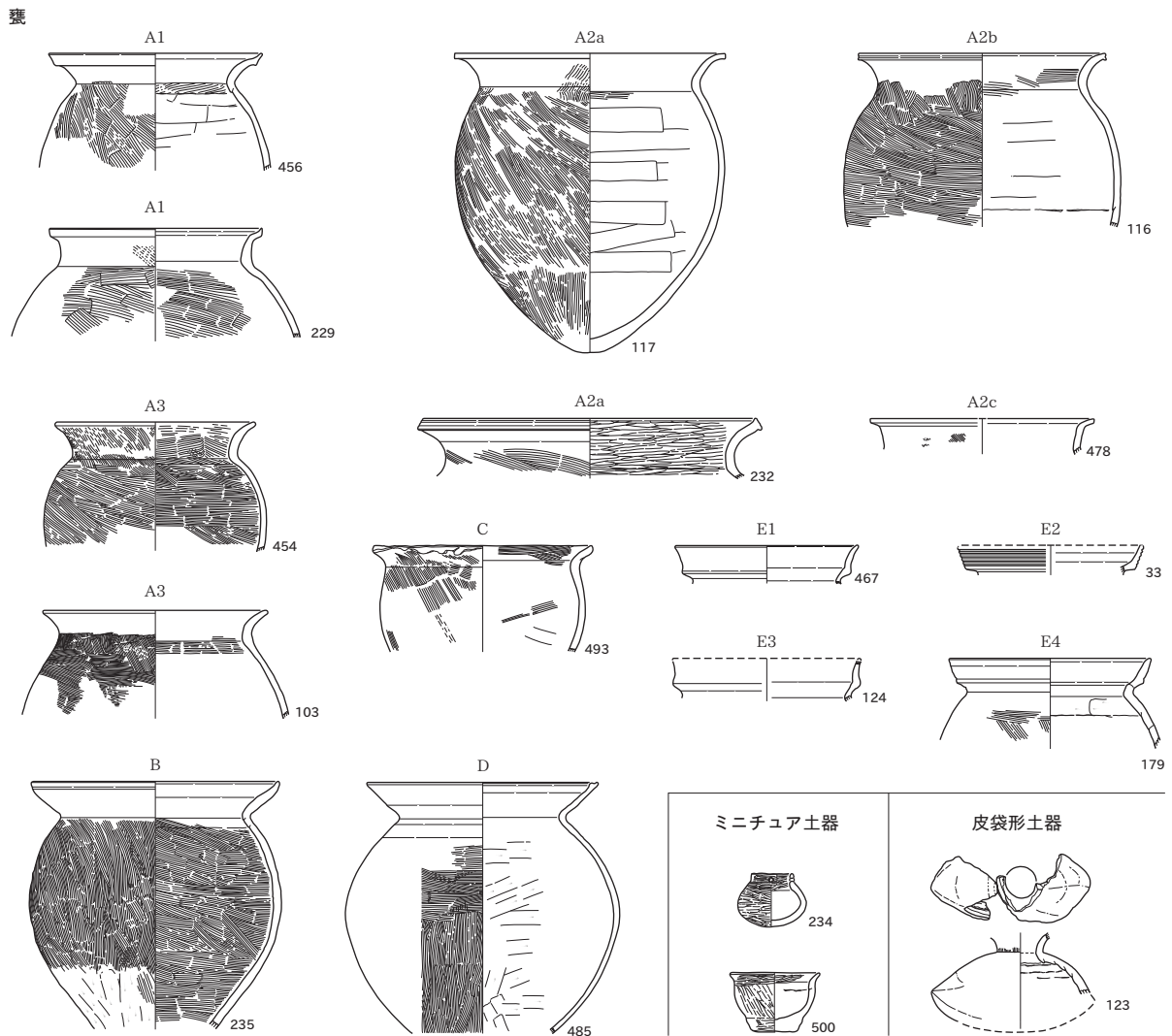
壺 P 類：口縁部が有段で、器高に対し口径が大きくなると推定したもので一括した。類似する 161・436 の 2 点で分類し、そこに 435 を強引にあてはめた。したがって、435 の分類には妥当性を欠く。

壺 Q 類：片口が付くと考えたもの (414)。

甕 主に口縁部の形態などにより分類を行った。口縁部の形態が不明な体部や底部資料は分類していない。

甕 A 類：口縁部の形態が外反し、「く」の字・「コ」の字状を呈するものをまとめた。口縁端部の形態で 3 つに細別し、A2 類については更に 3 つに細別した。なお、口縁端部の摘み上げにより若干の内湾気味の資料もある。

甕 A1 類：特に口縁端部上端を強く摘み上げる、ないしは上端部を突出させることにより端部の面を広くしているもの。なお、A2a 類との区分には課題を残す。



第 19 図 道正遺跡古墳時代土器 甕・ミニチュア土器・皮袋形土器分類図 (S=1/6)

甕 A2 類:口縁端部が 1 類ほど広くはないが、上端、下端、ないしは上・下端を摘むことにより面となるもの。数量は少ないが、上・下端とも摘みを強くすることで面としているものを A2b 類とした。次に口縁部の途中で外側に強く屈曲する 478 を A2c 類とした。これら以外のものは A2a 類とした。なお、この A2b 類は A2a 類との区分において課題を残す。また、A2a 類中には口縁端部に沈線が巡る 476 がある。この 476 については別に分類すべきかもしれない。

甕 A3 類:口縁端部を丸く収めるもの。473 のように丸みを強調するものも含めた。

甕 B 類:口縁部が全体的に内湾するもの、ないしは内湾気味になるもの。

甕 C 類:口縁部が短く外反するもので、口縁部のつくりが粗雑なもの。

甕 D 類:布留甕あるいは布留式の影響を受けたと考えたもの。口縁部形態や肥厚の程度に差はあるが一括した。

甕 E 類:口縁部が有段のものをまとめた。文様の有無と形態の差により 4 つに細別した。

甕 E1 類:口縁部が有段で無文のもの。口縁部は外反する。

甕 E2 類:口縁部が有段で擬凹線文を施すもの(33)と、凹線文を意識しているものとして捉えたもの(475)。

甕 E3 類:口縁部が有段無文であるが、上方に立ち上がるもの(124)。

甕 E4 類:口縁部の段の部分が横方向にやや鋭く突出するもの。山陰地方の影響かと考えるが別な大別とはしていない。

ミニチュア土器 図化した 3 点はいずれも形態が違うが一括した。

皮袋形土器 壺には含まずに、皮袋形土器とした(123)。

### 3) 遺物各説

#### a 遺構出土遺物

SI266 (図版 60～62、写真図版 79)

高杯(1～6)・器台(7～13)・鉢(14～19)・壺(20～30)・甕(31～51)を図化した。1～3 は高杯の破片資料。1 は杯部外面が有段で、口縁部が外反するため高杯 A 類とした。口縁部と杯底部の接合部では、杯底部側の粘土紐端部に板状工具による鋭い刻み目が入れている。この刻み目については、正尺 A 遺跡報告書内で、「接合部分の接着度を増す意味があると考えられる」(尾崎 2001)と指摘されたものと同様と考える。口縁部外面と内面上半のヘラミガキは精緻。2・3 は内湾気味に立ち上がる口縁部と杯部の大きさから、東海系ないし東日本型(形)高杯と考えた。しかし、杯部外面の稜の部分が欠損しているため高杯 C 類でとどめた。3 は内外面とも赤彩される。4 は杯部外面の稜が強く、口縁部がやや内湾気味に立ち上がるため高杯 C1 類とした。口縁端部破片資料と口縁部資料との図上復元である。ヘラミガキは丁寧で、内外面とも赤彩される。5・6 は脚部付近の資料のため分類はしていない。5 は杯底部内面と脚部外面に赤彩される。6 は「ハ」の字に脚が開くものと推測する。円形の透かしが 3 か所に入る。外面のヘラミガキは丁寧に施される。

7～9 は小型の器台の破片資料。7 は受部が直線的にのびることから器台 D 類とした。外面のヘラミガキは精緻で、内外面とも赤彩される。8 は受部の身が浅く、口縁端部を摘み上げていることから器台 C 類とした。ヘラミガキは精緻。9 は受部が有段となるもので口縁部外面が無文であることから器台 B1 類とした。ヘラミガキは精緻で、内外面とも赤彩される。10・11 は器台 A 類とした装飾器台・結合器台の破片資料。10 は受部底部付近の資料。受部下端は垂下し、その外面に 2 本の沈線が巡る。口縁部の具体的な形態は不明であるが、三角形の透かしが上下逆に交互に入る。この透かしは 3 か所確認でき、本来は口縁部を全周するように配置されていたと推測する。また、口縁部と受部の接合面には、接着度を増すために受部底部側の粘土紐端部に棒状工具による刻み目が入れている。ヘラミガキは精緻。内外面とも赤彩される。11 は口縁部付近の資料。口縁端部は欠損のため不明。受部は突出しないが段は明瞭となる。透かしは確認できないが、306・307 と同様の形態となれば透かしが存在する可能性はある。ヘラミガキは丁寧だが外面に一部ハケメが残る。12・13 は器台脚部付近の破片資料のため分類していない。ともに「ハ」の字に開く脚部と推測する。12 は円形の透かしが 2 か



所確認でき、位置からすると4か所等間隔にあったと推測する。受部と脚部の貫通孔はやや大きめ。ヘラミガキは丁寧で、受部内外面と脚部外面は赤彩される。13は脚部上部に稜を有する。受部と脚部の貫通孔は大きめ。ヘラミガキは丁寧で、外面は赤彩される。

14～19は鉢の破片資料。14・15は口縁部が有段で口縁部外面が無文となることから鉢A1類とした。14は口縁部が外反するが、15は外反しない。16は口縁部がやや短く、口縁端部にかけて上方にのびることから鉢B3類とした。なお、図では口縁部の頸部寄りに実線で稜線が表現されているが、これは粘土の盛り上がり部分が部分的に残ったものを表現した結果であり、稜とは認識していない。17は口縁部が極端に短く、口縁端部にかけて外反するため鉢B1類とした。口縁部のヨコナデを強く施したことで外面の体部寄りに稜をもつ。また口縁端部は尖る。18は口縁部がやや短く、口縁端部にかけて外反するため鉢B2類とした。口縁部外面のヨコナデ後のヘラミガキは精緻である。19は鉢B1類。口縁端部に向けて窄まり、口縁端部は丸く収める。体部外面に輪積み痕が残る。

20～30は壺の破片資料。20は小型で、口縁部の上半が欠損するが長くなるものと推定し、かつ口縁部外面に段をもつため壺A1類とした。ヘラミガキは丁寧で、外面は赤彩される。21は口縁部外面が有段となり、口縁部は上部が欠損するが短く直立気味に立ち上がると推定し、壺I類とした。体部外面には横方向のナデが僅かに残る。22は頸部が欠損しているが有段口縁で、弥生時代以降定量存在すると考えた壺K類。23・24は口縁部が無段で外反するため壺F1類とした。23は口縁端部付近で少し内湾気味となる。24は口径を見る限りでは小振りと言えよう。25～28は壺K類。25は口縁部内面の段が明瞭である。口縁端部下端には板状工具による刻み目が巡り、工具は向かって正面から押し当てられたと考える。26の口縁部外面のヨコナデは段直上部が多少強めとなる。また、ヨコナデを施す前のハケメも観察できる。27に比べ28の口縁部外面の段はやや強調されている。27・28は内外面とも赤彩される。29・30は壺底部付近の破片資料のため分類していない。29はしっかりとした平底で、底部周縁部と中央部の差は明瞭となり、ドーナツ状に中央がくぼむ。このくぼんだ所にいくつか繊維状の圧痕がある。30の体部は下膨れか扁平になると推測する。底部は平底で、ドーナツ状に中央がやくぼむ。

31～51は甕の破片資料。31は口縁部の形態が外反し、「く」の字・「コ」の字状を呈するもののうち、口縁端部の上端を摘むことで面となる甕A2a類とした。体部内面は左上がりに指ナデが施される。32は口縁部の形態が外反し、「く」の字・「コ」の字状を呈するもののうち、口縁端部を丸く収めるため甕A3類とした。口径からは小振りの甕と言えよう。口縁部と頸部のヨコナデが強めで、外面に稜を成す。33は有段口縁で口縁部外面に擬凹線文が施されるため甕E2類とした。5条の擬凹線が確認できる。34は口縁端部を上方に突出させ、端部の面を広くしていることから甕A1類とした。35は口縁部が内湾気味となることから甕B類とした。口縁端部は丸く収める。頸部のヨコナデにより、体部寄りに稜が形成される。36は甕A1類。口縁端部を上方に突出させたあと、外側に粘土紐を付け加えて成形している。37～44はいずれも口縁端部を摘むことで形態が面状になることから甕A2a類とした。37は口縁部外面にススが付着する。38は口縁部下半の器壁が厚く、やや膨らむようになる。39は外面にススが付着する。40は口縁端部がくぼむような図となっているが、沈線ではない。41の口縁端部はしっかりとした面となる。42は口縁部と体部の接合面のなで付けが多少雑となり、外面に凹凸が残る。外面にススが付着する。43は外面のハケメが強めに残る。44の口縁端部はやや丸みをもつが面を成す。口縁部外面にはヨコナデ前のハケメが残る。45は甕A3類。46～49は甕A2a類。46の口縁部は厚みがある。肩の張りが弱く、なで肩となる。内面に輪積み痕が残る。47は口縁端部上端を摘み上げるが、丸みをもつ。また、端部上端に平行する面が部分的に形成されている。48は肩の張りが弱く、なで肩で直線的となる。49の頸部内面の稜は内側横方向にやや突出する。なお、口縁部と体部の接合部付近の内面に、擦った繊維の圧痕が確認できる。1か所図化しているが別にもう1か所似たような痕が僅かに確認できる。この圧痕が意図的か偶発的かは不明である。50・51は底部付近のみの資料のため分類していない。50の底部は平底で、中央がやくぼむ。

内面に炭化物が付着する。51の底部は平底で小さい。

SD238 (SI266 周溝) (図版 62～65、写真図版 79～82)

高杯 (52～54)・器台 (55～57)・高杯もしくは器台の脚部 (58～62)・鉢 (63～67)・壺 (68～93)・甕 (94～108) を図化した。52は杯部が有段の鉢の形態となり、そこに脚部が付くとした高杯 B 類の資料。杯部内外面とも赤彩される。53は高杯 C 類の破片資料。外面の器面は剥落が多い。口縁部内外面とも赤彩される。54は小型の高杯で杯部に稜があり、器壁がそれほど厚くないことから高杯 D1a 類とした。破片資料で口縁端部は欠損しているが口縁部は内湾して立ち上がる。稜の部分が剥落した箇所には接着度を増すための鋭い刻み目が入れられており、粘土を貼り付けていることがわかる。ヘラミガキは精緻。内外面とも赤彩される。

55は小型の器台の破片資料で、受部が内湾することから器台 E 類とした。ヘラミガキは精緻。内外面とも赤彩される。56・57は脚部破片資料のため分類していない。56は脚下半が欠損するが、「ハ」の字に開くと推測する。円形の透かしが4か所に入る。受部と脚部の貫通孔はやや大きめとなる。ヘラミガキは精緻。受部内面と脚部外面は赤彩される。57は「ハ」の字に開く脚部で、中位でやや膨らみ脚端部は外反する。円形の透かしが3か所に入る。ヘラミガキは精緻であるが脚部外面下半にハケメが残る。受部内外面と脚部外面は赤彩される。

58～62は高杯もしくは器台の脚部破片資料で、いずれも透かしは確認できない。58の脚下半は欠損し、上部は杯部あるいは受部との接合面で剥離している。ヘラミガキは精緻で、外面は赤彩される。59は脚端部付近で外反し、脚端部は面となる。また、脚端部の径は小さい。外面は赤彩される。60は脚の開き具合が大きく、脚端部は丸く収める。指頭圧痕などが残りやや雑なつくりとなる。61は脚端部付近で外反し、端部は図の印象と異なるが丸く収める。ヘラミガキは精緻。62は脚端部に向けて直線的にのびるが中位がやや膨らむ。脚端部は先細となる。外面に赤彩される。

63～67は鉢。63は口縁部が内湾することから鉢 F 類とした破片資料。器面はやや摩耗するが外面に赤彩が確認できる。64は鉢 B3 類の破片資料。内面のヘラミガキは口縁部より体部が幅広となる。65は大型でしっかりとした頸部のある有段口縁の鉢で鉢 G1 類とした。ヘラミガキは丁寧。66は鉢 F 類の破片資料。口縁部は短く、器壁は厚い。67は鉢 B1 類の破片資料。口縁端部は外反し、内側に面を成す。体部は内湾気味に立ち上がる。内面調整は縦方向のヘラミガキが確認できる。口縁部外面と体部外面に指頭圧痕が残り、やや粗雑なつくりとなる。

68～93は壺。68は壺 F1 類の破片資料。内外面とも赤彩される。69は壺の体部下半の資料で分類はしていない。底部はしっかりとした平底。外面のヘラミガキが精緻で、外面の赤彩は底部にまで及ぶ。70は壺 A 類の破片資料。口縁部は内湾する。71は壺 A1 類の破片資料。外面は赤彩される。72は壺 A 類の体部から底部の資料と考えた。口縁部は欠損する。体部は中位が張り、扁平となる。底部は尖り気味の丸底。外面のヘラミガキは精緻で、外面は赤彩される。73～77は壺 F1 類。73の口縁部はヨコナデ後にハケメが施される。ハケメの目は外面が細かく、内面は粗い。74は破片資料。75の口縁端部は欠損する。外面はハケメの後、ヘラミガキが施される。また外面のハケメの目には粗細があり、内面は目が粗いハケメとなる。76は口縁部から体部上半の資料と体部中位の資料との図上復元である。調整は口縁部外面が縦方向のヘラミガキ。体部外面はやや目の粗いハケメの後、幅広のヘラミガキが体部上半は縦に、下半は横方向に施される。また、頸部外面付近のハケメは目の幅に特徴があり、77でも同様のハケメが同部位に観察できる。77は口縁部から体部にかけての資料。76と同様なハケメが同部位で観察でき、また口径や口縁部形態も似るが、77ではヘラミガキは観察できない。なお、外面にススが付着しているが、口縁部上半には付着していない。78は口縁部が無段で、肩の張りが弱く、なで肩となるため壺 G 類とした。口縁部には3つで1単位と考えた刺突が1か所確認できる。板状工具の丸くなった角部分でも使用したのか、形状は丸みをもちつつも角があるように見える。刺突を正面から見た場合、工具は向かって左側から右方向に押し当てられたと考える。なお、刺突箇所の反対側は欠損しており、刺突が複数個所存在したのかは不明。体部内面の器面は剥落する部分が多い。79は口縁端部が欠損しているが壺 F1 類とした。口縁部の外反度がやや強い。口縁部内面の器面は剥落が多く調整は不明。80は口縁部下半から体部上部にかけ

ての資料。口縁部の形態は不明であるが、なで肩となる特徴から壺 G 類とした。体部外面に写真図版 96 のような幅 3 ~ 5mm 程の直線的な痕跡が残る。特に上部で密になるように観察できる。周囲が煤けていないために土器の地色が直線的に残るものや、土器の地色部分が途中から黒色となるような直線の部分も観察できる。痕跡は一定の方向ではないが、網目のように交差する部分もあるため、いわゆる「カゴメ」の痕跡と考えた。なお、口縁部にはこの痕跡は観察できないことから、頸部付近にカゴの縁があった可能性がある。81 は壺 F1 類の破片資料。口縁部外面の上部にはススが付着していない。82 ~ 84 は口縁部・頸部ともに外反するため壺 J2 類とした口縁部から頸部付近の資料。82・83 は口縁部・頸部ともに外反し、外面の段は強調されている。82 は外面の段直上部がややくぼむ。これは段の強調に伴う、もしくは頸部との接合に伴うヨコナデが強いために生じたものとする。83 は実測図では口縁端部がくぼむような表現となっているが沈線ではない。外面の段直上には板状工具による刻み目が巡り、工具は向かって右側から左方向に押し当てられたと考える。また、その刻み目を施す前には、段部分に粘土を貼り付けた痕跡か、もしくは口縁部側の粘土を被せた際の痕跡が段差として残る。内面は丁寧なヘラミガキ。84 は段の強調が 82・83 に比べ弱い。また内面の段は緩やかとなる。口縁部と頸部の接合面には、接着度を増すために頸部側の粘土紐端部に棒状あるいは板状工具によるやや丸みのある刻み目が入れている。85 は壺の口縁部から頸部にかけての資料。頸部が直線的な二重口縁壺であることから壺 J1 類とした。外面の段は強調され明瞭で、内面も段となる。頸部は上方に立ち上がる。ヘラミガキは特に口縁部内面が丁寧。口縁部内外面は赤彩される。86 は壺 J2 類の口縁部資料。段の強調はやや弱い。87 は壺 J2 類の頸部付近の資料。口縁部はほぼ欠損するが外反すると推定した。88 は破片資料で口縁端部は欠損するが壺 K 類に含めた。外面の段はやや丸みをもつ。外面は赤彩される。89 ~ 93 は体部や底部付近の資料のため分類はしていない。89 は形態的に壺と考えた。ただし、スス・炭化物の付着があるため用途としては貯蔵用ではない可能性がある。底部はしっかりとした平底で、外面に網状葉脈圧痕がある。90 は形態的に壺と考えた。体部資料と底部資料との図上復元である。体部内面中位に輪積み痕が明瞭に残る。体部外面下部の底部付近には粘土の凹凸が残り、つくりが雑な部分もある。底部はしっかりとした平底で、底部外面に平行葉脈圧痕がある。また、体部外面には 80 のように黒色となった直線的な痕跡と、土器の地色が直線的に残るものが数本観察できる（写真図版 96）。幅は 3 ~ 5mm 程で、明瞭な部分があれば輪郭がぼやけ不明瞭な部分もある。この痕跡は正位置で正面からみた場合、右上から左下方向と、左上から右下方向があり、これらは途中で交差するように見える。このことから「カゴメ」の痕跡と考えた。91 も体部外面下部の底部付近に粘土の凹凸が少し残る。底部はやや外方に張り出すしっかりとした平底で、底部外面に平行葉脈圧痕がある。92 はしっかりとした平底。底部周縁部と中央部の差は明瞭で、ドーナツ状に中央がくぼむ。93 は体部外面にヘラミガキが施される。底部はしっかりとした平底。底部外面はヘラケズリが施される。

94 ~ 108 は甕。94 は甕 A2a 類で、全体の 1/3 程度残存する資料。同分類中では小振りとなる。ハケメ調整は内面より外面がやや目が粗い。底部は平底で、底部外面にもハケメが施される。95 は甕 A3 類で全体の 1/3 程度残存する資料。頸部付近の内面に沈線状の痕跡が巡るが、口縁部と体部の接合面の痕跡が残ったものとする。また、体部下半から底部の断面を見ると、二重となっているように観察できる。これは、一度成形から乾燥まで行ったあとに、何らかの理由で再度外側から覆うように付け加えたため、このように観察できるものと推測する。底部は平底。外面にススが付着する。96 は口縁端部の上・下端とも強く摘むことで面としているため甕 A2b 類とした資料。95 と同様、口縁部内面下寄りに沈線状の痕跡が巡る。口縁部外面の上半にはススが付着していない。97 は甕 A2a 類の破片資料。口縁部にヨコナデを施す前のハケメが薄く残る。98・99 は甕 A3 類。両者とも口縁端部は丸みがあるがやや先細となる。100 ~ 102 は甕 A2a 類の破片資料。100 の実測図では頸部外面付近が段のような表現となっているが、これはハケメ工具の押し付けが強く、またその位置で停止していることによる器面の凹凸である。外面にススが付着する。101 は口縁端部下端を摘む際に強く当たったため口縁部外面上部がくぼむ。103 は甕 A3 類の破片資料。104 は甕 A2a 類の破片資料。外面は頸部付近以外に

ススが付着し、内面は頸部より下に炭化物が付着する。105も甕A2a類。ハケメの目は図の表現よりも細かく、103・104と同程度の印象である。体部内面調整は単位などわかりにくいナデと考える。106は体部上半から底部の資料のため分類はしていない。倒卵形を呈し、体部外面下部にはハケメ前のヘラケズリが観察でき、底部外面もヘラケズリが施される。底部は平底。体部外面中ほどにススが付着し、内面下半に炭化物が付着する。107・108は体部下半や底部資料のため分類していない。107は底部付近の資料。しっかりとした平底で、底部中央付近は器壁が薄くなる。内外面とも目の粗いハケメで、底部外面はヘラケズリ後にナデが施される。108の体部外面調整は下部に目の粗いハケメを施した後、中位寄りに目の細かいハケメを横方向に施す。体部内面調整は底面付近がハケメで、それより上部はナデとなる。底部はしっかりとした平底であるが、底部中央がやや突出するため安定感は欠けよう。底部外面はヘラケズリが施される。

SI461 (図版 65・66、写真図版 82)

高杯(109・110)・鉢(111)・壺(112～114)・甕(115～121)を図化し、写真図版96に甕(506)を1点掲載した。109は高杯C2類の杯部資料。脚部は杯部との接合面で剥離し、欠損している。実測図の表現との差は否めないが、内外面とも精緻なヘラミガキが施される。内外面とも赤彩される。110は高杯C類の口縁部破片資料。内外面ともヘラミガキは精緻。内外面とも赤彩される。111は鉢A1類の破片資料。外面の段は明瞭となる。

112はいわゆる小型丸底の壺(鉢)となるもので、体部に比べ口縁部が発達するため壺B1類とした資料。全体の半分程度残存する。口縁部は内湾して立ち上がる。底部は平底。調整は内外面ともヘラミガキで、底部内面はヘラナデである。113は壺B1類の破片資料。口縁部外面の段は明瞭。ヘラミガキは精緻。114は壺A類の破片資料。外面と口縁部内面に赤彩される。115は甕A2a類の資料。口径が大きく、最大径が口縁端部となる。外面にスス、内面に炭化物が付着する。外面の器面は肩部分で剥落する箇所がある。116はA2a類との区分にあまり差がないが甕A2b類とした資料。外面にススが付着する。117は甕A2a類の資料。口縁部が大きく欠損するが、全体の形がわかる。倒卵形を呈し、底部は小さく丸底に近い。体部外面の中位より上に強くススが付着する。また内面は体部下半に炭化物が付着する。118・119は甕A2a類の破片資料。118の口縁端部は丸みをもつが、下端を掴むことで面としている。119は口縁端部下端を掴む際に強く指が当たったため口縁部外面上部にくぼみが生じている。120・121も甕A2a類。両者とも外面にススが付着する。506(写真図版96)は甕体部の破片資料。内面に粒状の炭化物痕があったため写真のみ掲載した(実測図は無し)。ちなみに外面にはススが付着する。また、上述117の体部内面にある炭化物も同様の似た痕跡に見えなくもない。

SK85 (図版 66、写真図版 82)

高杯(122)・皮袋形土器(123)を図化した。122は高杯C1類の破片資料。杯部に段をもち、口縁部は内湾して立ち上がる。丁寧なヘラミガキ調整。内外面とも赤彩される。123は皮袋形土器の破片資料。口縁部の残る資料と体部のみの資料であるが、同一個体と考え図上復元とした。口縁部の具体的な形状や形態、また底部の形状は欠損のため不明<sup>1)</sup>。左右両端が尖り気味となる球形の体部に、外反する口縁部が付くものと推測する。外面調整は頸部にハケメが観察でき、体部はハケメ・ヘラケズリの後、単位は明瞭ではないがヘラミガキが施される。また、口縁部と体部の接合面にナデが確認できる。体部内面を見ると上半には粘土紐の輪積み痕が明瞭に残り、中位には皺のような溝状の痕跡が残る。なお、実測図は体部の形状を優先したため一部の調整は表現していない。

SK281 (図版 66、写真図版 82)

甕(124)を図化した。口縁部が有段、かつ無文で上方に立ち上がるため甕E3類とした破片資料。

SK282 (図版 66、写真図版 82)

鉢(125)を図化した。脚(台)付とした鉢I類の資料。口縁部・体部が1/3程度欠損する。口縁部はやや長

1) 阿賀野市腰廻遺跡〔川上2002〕で皮袋形の瓶とされた土器が出土しており、県内ではこの1点のみが類例と考える(第111図参照)。この腰廻遺跡出土例の底部は「水平で安定している」と記載されている。

めで外反し体部は浅めとなる大型の鉢に、「ハ」の字に広がる脚（台）が付く。ヘラミガキは丁寧である。口縁部から体部上半の外面にススが付着する。また、口縁部外面の器面には剥落する箇所がある。

**SK284**（図版 67、写真図版 82）

高杯（126）を図化した。高杯 A 類の破片資料。杯部外面の段は明瞭で、丁寧なヘラミガキが残る箇所がある。

**SK302**（図版 67、写真図版 82）

鉢（127）を図化した。鉢 B1 類の資料。短い口縁部であるが、外面に粘土紐の痕跡がそのまま残り、雑なつくりとなる。体部は内湾して立ち上がる。体部内面の調整はヘラナデである。

**SK303**（図版 67、写真図版 83）

甕（128）を図化した。甕 A3 類の資料。体部外面の器面はやや摩耗しているがハケメが観察できる。

**SK312**（図版 67、写真図版 83）

壺（129）・甕（130）を図化した。129 は壺 F1 類の資料。口縁端部上端を摘み上げることで面となる。130 は甕 A2a 類の破片資料。体部外面の器面は摩耗しているが、ハケメが辛うじて観察できる。

**SK378**（図版 67、写真図版 83）

高杯（131）・器台（132～136）・鉢（137）・壺（138～140）・甕（141・142）を図化した。131 は高杯脚部の破片資料のため分類はしていない。外面は赤彩される。132 は器台 B1 類の資料。受部外面の段は明瞭。内外面とも丁寧なヘラミガキ。内外面とも赤彩される。133 は 134 と胎土が似ることから同一個体の可能性があるため器台の脚部とした。ただし、脚部のため分類はしていない。「ハ」の字に開く脚部で脚端部は面となる。脚部には三角形の透かしが 3 か所に入る。1 か所は三角形の全体がわかり、1 か所は角の 1 つが確認でき、もう 1 か所は三角形の一辺のみ確認できる。なお、受部と脚部は貫通していない。外面と受部内面のヘラミガキは丁寧。134 は器台 A 類の資料で、同一個体の破片資料と考えたものから図上復元した。口縁部は外反し、受部下端は垂下する。口縁部の透かしは、1 つの破片に最大で 2 か所確認できる。2 か所のうち 1 つ（実測図中央）は三角形の透かしで、もう 1 つ（実測図左側）の透かしの形態は一辺のみで根拠に乏しいが、おそらく三角形になると推測する。全体での透かしの数は不明だが、全周するように配置されていたと推測する。丁寧なヘラミガキが施される。135 は「X」字形となる器台 F 類の完形資料。受部が有段となる。口縁端部は上・下端を摘むことで面となる。脚端部は丸く収める。受部と脚部の貫通孔はやや大きめ。ヘラミガキは精緻で、受部内外面と脚部外面は赤彩される。また、図では表現していないが、脚部内面の一部も赤彩される。畿内地方の影響のものと考えた。136 は器台の脚部の資料で杯底部が少し残存する。分類はしていない。直線的に開く脚部で、脚端部は面となる。円形の透かしが脚部上半に 4 か所入る。受部と脚部の貫通孔はやや大きめ。ヘラミガキは精緻で、脚部内面にも施される。受部内外面と脚部外面は赤彩される。137 は鉢 E 類の資料。口縁端部は平行する面となる。口縁部には棒状工具によるやや丸みのある刺突が巡る。工具を押し当てられた方向は一定ではないと考える。

138・139 は壺 A1 類の資料。138 の外面は縦方向のヘラミガキの後、横方向にヘラミガキが施される。外面は赤彩される。139 は破片資料。外面の段は明瞭で、外面は赤彩される。140 は口縁部が有段となり、その段は横方向にやや鋭く突出するもので、壺 N 類とした資料。口縁端部は下端を摘むことにより面となる。つくりには粗さはあるが、口縁部内外面は丁寧なヘラミガキが施され、体部外面はハケメ後、ヘラミガキが施される。山陰地方の影響を受けたものと推測する。141 は甕 A2a 類。口縁部内外面にハケメが施され、特に外面はしっかりと施される。口縁部内面より外面に施されるハケメの方が目は細かい。なお、口縁端部の面には板状工具の痕跡が観察できる。外面にススが付着する。142 は甕 A2b 類とした破片資料。口縁端部上端には平行する面が形成されている。

**SK400**（図版 67・68、写真図版 83）

器台（143）・壺（144）・甕（145・146）を図化した。143 は器台 B1 類とした資料。受部外面の段は明瞭。内外面とも丁寧なヘラミガキ。内外面とも赤彩される。144 は壺 F1 類とした全体のわかる資料。口縁部は上方に

立ち上がり外反する。体部の器壁は薄い。ハケメの目は粗めで、肩の部分ではハケメが交差する箇所もある。体部外面下部にヘラケズリが施される。底部はしっかりとした平底で、底部外面の調整はヘラケズリ。145は甕A2a類の資料。口縁部外面にはヨコナデ前のハケメが薄く残る。146は甕A1類の資料。外面にススが付着する。

**SK430** (図版 68、写真図版 83)

鉢(147)・壺(148・149)を図化した。147は鉢E類の完形に近い資料。体部は外傾気味となる。底部は丸みのある平底。外面調整はハケメ後にヘラミガキが施され、底部にもヘラミガキが施される。148・149は体部が発達し、口径と体部最大径の値が近い、もしくは体部中位が最大径となるもので壺C類とした資料。148は体部の一部が欠損。口縁部は内湾し、肩が少し張る。底部は丸底となる。目の細かいハケメが施され、体部内面調整は指ナデである。149は口縁部が一部欠損する。148と比べ、口縁部はやや短く、体部は扁平となる。底部は丸底。特に底部との接合面の輪積み痕が内面にしっかりと残る。

**SK440** (図版 68、写真図版 83・84)

壺(150)・甕(151)を図化した。150は壺体部から底部の資料のため分類していない。体部外面には横方向に板状工具が触れたような跡が残る。底部は外方に張り出して平底となり、底部周縁部は接地せず少し浮く。151は甕A2a類の資料。外面はススが付着し、内面には炭化物が付着する。

**SK467** (図版 68、写真図版 84)

鉢(152)・壺(153)を図化した。152は鉢E類の破片資料。口縁端部に向けて内湾し、窄まる形態となる。体部外面調整は目が粗いハケメ。153は壺K類と考えた。器壁が厚いことと、段の直上部に摩耗のため鮮明ではないが2本の沈線が巡ると判断したことから、似た形態のあるK類に含めた。なお、段の部分での直径の値が同分類中では小さい点と、口縁部に施される縦方向のヘラミガキを踏まえると違う大別とすべきかもしれない。

**SK516** (図版 68、写真図版 84)

壺(154)を図化した。口縁部が有段で、頸部がかなり細いことから壺L類とした資料。体部の一部は図上復元である。肩の張りは強いと推測する。外面調整は丁寧なヘラミガキ。体部内面には指ナデが観察できる。図では表現していないが、体部外面は一部赤彩される。

**SK535** (図版 68、写真図版 84)

高杯(155)・鉢(156)・壺(157)・甕(158)を図化した。155は高杯C類とした破片資料。杯部内外面とも赤彩される。156は鉢A1類の破片資料。口縁部外面の段は丸みをもつ。157は壺底部の破片資料で分類はしていない。底部は平底で、底部周縁部と中央部の差は不明瞭だがドーナツ状に中央が少しくぼむ。なお、底部外面に粉圧痕が1つある。158は甕A2a類の破片資料。口縁端部付近の外反度がやや強い。

**SK546** (図版 68、写真図版 84)

甕(159)を図化した。甕A3類の資料。口縁部が短く外反し、体部中位が最大径となる。外面のハケメは目が細かい。

**SD91** (図版 69、写真図版 84)

高杯(160)・壺(161)を図化した。160は高杯A類の資料。内外面とも丁寧なヘラミガキ。161は口縁部が有段で口径の大きい壺P類とした資料。外面の段はやや突出気味となる。外面にはススが付着する。

**SD234** (図版 69、写真図版 84)

器台(162)・鉢(163)・壺(164)・甕(165～168)を図化した。162は器台脚部の資料としたため分類はしていない。受部と脚部の貫通孔はやや大きめとなる。163は底部有孔の鉢D類とした資料。底部は平底で、底部中央に穿孔されている。なお、底部外面に粉圧痕が1つある。内面は底部から体部に向かい滑らかに内湾して立ち上がる。内面調整はナデ。164は壺体部中位から底部の資料で分類はしていない。しっかりとした平底で、底部外面には粉圧痕が4つあり、それ以外にも朮かと疑わしい圧痕がいくつかある。体部外面には幅広のヘラミガキが施される。165・166は甕底部付近の資料で分類はしていない。165は平底でややくぼむ。166は底

部が小さく、平底である。体部外面にススが付着する。167は甕A1類の資料。口縁部外面にはヨコナデ前のハケメが残る。168は甕A2a類の資料。口縁部外面にススが付着する。また口縁部内面にはスス、体部内面には炭化物が付着する。

**SD248** (図版 69、写真図版 84)

高杯 (169)・器台 (170)・鉢 (171)・壺 (172・173)・甕 (174) を図化した。169は高杯D1a類の破片資料。外面調整は摩耗のため不明。170は器台脚部の資料のため分類はしていない。やや膨らみをもち、内湾気味の脚部と推測する。171は鉢D類の資料。体部外面の底部付近には上から下方向にヘラケズリが施される。このヘラケズリの影響で底部外面周縁部に粘土が集まることにより、底部中央はくぼむ形態となる。また底部中央の穿孔は同分類中ではやや大きめである。底部の内面調整は指ナデ。172は口縁部が無段で、口縁部が上方に立ち上がる壺F2類とした破片資料。全体に指頭圧痕や輪積み痕が残るため凹凸があり雑なつくりである。外面にススが付着する。173は壺の底部資料。分類はしていない。しっかりとした平底で、周縁部と中央部の差は明瞭でドーナツ状に中央がくぼむ。174は甕体部の破片資料で分類はしていない。肩の部分に板状工具による鋭利な刺突が巡り、工具は向かって右から左方向に押し当てられたと考える。

**SD271** (図版 70、写真図版 84・85)

器台 (175)・鉢 (176)・壺 (177・178)・甕 (179) を図化した。175は器台A類の資料。口縁端部と脚部下半は欠損。口縁部は「く」の字状に屈曲し外反する。受部は横には突出しないが明瞭な段となり、下端がやや垂下する。脚部上半はやや膨らむ形状となり透かしのあたりで括れ、そこから脚端部へ向けて開くものと推測する。円形の透かしが口縁部に3か所、脚部に2か所確認できる。受部と脚部の貫通孔は大きめである。ヘラミガキは精緻で、受部内外面・脚部外面は赤彩される。176は鉢A1類の破片資料。肩が張る体部となる。177は壺A1類の破片資料。図上では表現ができていないが口縁部外面下部の段は弱い。外面と口縁部内面上半は赤彩される。178は壺J2類の資料。外面の段直上に施されるハケメが特徴的で、後述する182と同一個体の可能性がある。179は口縁部の段の部分の部分が横方向にやや鋭く突出するもので甕E4類とした破片資料。体部内面にはヘラケズリが観察できる。山陰地方の影響によるものと考えた。

**SD275** (図版 70、写真図版 85)

高杯 (180) を図化した。高杯C1類の資料。外面の段は明瞭。口縁部と杯底部の接合部では、接着度を増すために杯底部側の粘土紐端部に板状工具で鋭い刻み目が入れている。内外面ともヘラミガキは丁寧。

**SD306** (図版 70、写真図版 85)

器台 (181) を図化した。器台B1類の破片資料。ヘラミガキは精緻で、内外面とも赤彩される。

**SD396** (図版 70、写真図版 85)

壺 (182)・甕 (183) を図化した。182は壺J2類の資料。SD271出土の178と同一個体の可能性がある。183は口縁部が有段で口縁部外面が無文となるため甕E1類とした破片資料。

**SD507** (図版 70、写真図版 85)

壺 (184)・甕 (185) を図化した。184は壺F1類の破片資料。口縁部外面にはヨコナデ前のハケメが薄く残る。口縁部内面の器面が一部剥落している。185は甕A2a類の破片資料。

**SD543** (図版 70、写真図版 85)

器台 (186)・鉢 (187)・壺 (188・189)・甕 (190) を図化した。186は器台E類の資料。器壁が全体的に薄い。口縁端部は立ち上がり先細となる。内外面とも丁寧なヘラミガキで、赤彩される。187は鉢B1類。全体の2/3程度が残存する資料。口縁端部は僅かに外反し、底部は平底となる。底部内面には凹凸が残る。188は壺A類の破片資料。189は壺底部付近の資料のため分類はしていない。しっかりとした平底だが、縁の部分は接地しない箇所もある。底部内面中央部には調整が及ばず、粘土の盛り上がりが飛び出したまま残る。190は甕A3類の資料。口縁部が長めとなる。外面には口縁部上半と肩のあたりにススが付着する。

P244 (図版 70、写真図版 85)

甕 (191) 底部を図化した。分類はしていない。底部は安定した平底で、体部にかけては直線的に立ち上がる。底部外面にもハケメが施される。

P277 (図版 70、写真図版 85)

鉢 (192) を図化した。鉢 B3 類の資料。体部から口縁部にかけては緩やかに立ち上がる。

P389 (図版 71、写真図版 85)

器台 (193) を図化した。器台 E 類の資料。ヘラミガキが精緻で、内外面とも赤彩される。

P506 (図版 71、写真図版 85)

高杯 (194) を図化した。高杯 C1 類とした資料。一部に直接の接合点がないため図上復元である。杯部の段は同分類の他とは違い、杯底部が張り出すような形態となる。脚部はやや膨らみを持ち、「ハ」の字に開き外反する。円形の透かしが3か所に入る。ヘラミガキは丁寧で、杯部内外面と脚部外面は赤彩される。また、図では表現していないが、脚部内面の一部も赤彩される。なお、杯部の形態が異なるため、C1 類ではなく別に独立した大別とすべきかもしれない。

P514 (図版 71、写真図版 85)

甕 (195) を図化した。甕 E1 類の破片資料。外面の段はやや丸みをもつ。

P525 (図版 71、写真図版 85)

甕 (196・197) を図化した。両者とも甕 A2a 類。196 は体部中位が大きく欠損するが、同一個体と判断し図上復元した。底部はしっかりとした平底で、外方に張り出す部分もある。なお、底部外面にはハケメが残る。また体部下部のハケメは目が粗く、上部は目が細かい。197 は完形に近い資料。倒卵形を呈する。底部は小さく平底で、底部外面にもハケメが施される。口縁部外面上半と体部外面の肩から中位あたりにススが付着する。

P538 (図版 71、写真図版 85)

甕 (198) を図化した。甕 A3 類の資料。甕としたなかで口径・器高・体部最大径が最も大きい。口縁部のヨコナデは上半にのみ施される。底部は平底となる。

SX233 (図版 72～75、写真図版 86～88)

高杯 (199)・器台 (200)・鉢 (201)・蓋 (202)・壺 (203～221)・甕 (222～233)・ミニチュア土器 (234) を図化した。199 は高杯 C1 類の破片資料。口縁端部は欠損。内外面とも赤彩される。200 は小型の器台で受部の身が浅く、口縁端部を摘み上げるもので器台 C 類とした資料。全体の半分程度残存する。脚部は「ハ」の字に開き、透かし付近でやや膨らみをもつ。脚端部は面となる。受部と脚部の貫通孔は透かしと同程度の大きさだが、いびつな楕円形である。脚部の透かしは円形で1か所確認できる。脚部下部のヘラミガキは横方向になる。受部内外面・脚部外面に赤彩される。201 は有段口縁で擬凹線文を施すため鉢 A2 類とした破片資料。摩耗するが擬凹線が3条確認できる。外面は赤彩される。202 は蓋のつまみ部分と考えた資料で分類はしていない。鉢底部に似た形態があるが、大きさが異なることから蓋と考えた。つまみ中央部がくぼむというよりは、つまみの周縁端部を上方に摘み上げている。そのため周囲に指頭圧痕が残る。

203～221 は壺。203 は壺 F1 類と考えた資料。小振りのため C 類とも考えたが、口縁部が外反するという点で形態が異なることから壺 F1 類のなかでの大小の寸法の違いと考える。内外面にススが付着する。204 は壺 K 類の破片資料。同分類のなかでは小振りとなる。205 は口縁部が無段でかなり口径が大きくなるため壺 H 類とした破片資料。口縁部内面にヘラミガキが施される。206 は壺 K 類の破片資料。頸部は短い。外面の段直上部にくぼみが巡るが、これは段の部分の粘土を貼り付ける際に強めのヨコナデになったことにより生じたものと推測する。207・208 も壺 K 類の資料。207 は外面段の直上部分に図では沈線のような表現があるが、206 と同様の理由による強めのヨコナデに伴うくぼみと考える。また図化していないが、段の部分に浅い鋭利な刻み目が数か所確認できる。摩耗のため不明な点が多いが、刻み目の工具は向かって右から左方向に押し当てたように



観察できる。208 は外面の段に板状工具による刻み目が巡り、工具は向かって正面から押し当てられたものと、左から右方向に押し当てられたものがある。外面は赤彩される。口縁部外面上半にススが付着する。209 は壺 J2 類の破片資料。口縁部と頸部の接合部では、接着度を増すために頸部側の粘土紐端部に棒状工具によるものであろうか丸みのある刻み目が入れている。210～212 は壺 K 類の資料。210 は頸部内面と体部内面にススが付着する。211 は外面の段直上部に数条のくぼみを残すようなヨコナデが巡る。この数条のくぼむようなヨコナデも段を形成する際に生じたものと考え。212 は外面の段直上部に3本の沈線が巡る。なお、沈線同士が交わるような箇所もある。213 は壺 J2 類の資料。内外面に横方向のヘラミガキが施される。214・215 は壺 K 類の資料。214 は体部最大径が中位よりやや下となり、扁平な印象となる。口縁端部と外面の段部分に板状工具による刻み目が巡る。口縁端部は摩耗のため刻み目の押し当てた方向などは不鮮明である。段部分の刻み目はハケメ調整工具による刻み目と考え、工具は向かって左から右方向へ押し当てられている。また、段の刻み目の上には強めのヨコナデによるくぼみが巡る。体部外面の肩付近はハケメが交差するように施される。215 は口縁部と体部に線刻される。口縁部と体部に各々1艘の船が線刻され、また口縁部には船以外にも綾杉紋状の図像や、曲線と直線からなる線刻が描かれる。この215の線刻については第VI章第1節Eで詳述している。なお、実測図では線刻を優先したため口縁部・頸部の調整と赤彩のスクリーントーンを省略した。調整は口縁部内外面がヘラミガキ、頸部外面にも多少ヘラミガキが確認できる。口縁部・頸部の外面は赤彩される。また、体部外面に写真図版96のような幅5～8mm程の直線的な痕跡が残る。右上から左下方向と左上から右下方向が観察できるため、これも「カゴメ」の痕跡と考えた。口縁部内面にススが付着する。216 は壺の体部から底部の資料で分類はしていない。体部上半の破片接合資料と下半の破片接合資料による図上復元である。底部はしっかりとした平底で、底部外面中央部は剥落もあるがくぼむ。体部外面のハケメ調整については上半のハケメは目が細かく、下半は目が粗く強めに押し当てられている。体部外面にはススが付着する。217 は壺の口縁部破片資料。壺 J・K 類のいずれかと考えるが口縁部に線刻を施す点から K 類の可能性が高いと推測する。外面に3本ないし4本線刻される。第108図の拓本で見ると対になるような縦方向の線刻が2本確認できる。仮に向かって左を①、右を②とする。その②の線刻の右側に、②と交差する右上から左下方向の線刻が1本確認できる(③)。また①の右側にも同様に交差するようにも見える痕跡が僅かにあり、これを線刻として数えた場合、4本目となる。線刻の切合いは③を②が切ることが確認できる。なお、胎土から217と440は同一個体の可能性がある。218～221 は体部や底部の資料のため分類していない。218 は壺体部下から底部の資料。しっかりとした平底で、ドーナツ状に中央がくぼむ。底部外面にススが付着する。219・220 は壺底部付近の資料。219 は平底で体部外面にススが付着する。220 はしっかりとした平底。底部周縁部と中央部の差は明瞭でドーナツ状に中央がくぼむ。器面調整は摩耗により不明。221 は壺体部下の資料。底部は平底で、底部周縁部と中央部の差は明瞭でドーナツ状に中央がくぼむ。なお、底部周縁部の幅は狭い。器面調整には幅広のヘラミガキが施される。内面の底部付近には炭化物が付着する。

222～233 は甕。222・223 は甕 A1 類の破片資料。222 は口縁部外面にヨコナデ前のハケメが薄く残る。223 は外面の器面が摩耗する。224 は甕 A2a 類の破片資料。体部の器壁は薄め。口縁部に輪積み痕が残る。225 は甕 A1 類の破片資料。口縁部外面にヨコナデ前のハケメが薄く残る。226 は甕 A2a 類の破片資料。外面のハケメは目に粗細がある。227 は甕 A1 類の破片資料。口縁部にヨコナデ前のハケメが残る。228 は甕 A3 類の破片資料。体部外面は目の粗いハケメで、口縁部外面や体部内面は目の細かいハケメが施される。229 は甕 A1 類の破片資料。ハケメは体部内面の目が細かく、外面は目が粗い。230 は甕 A2a 類の破片資料。体部外面の器面は摩耗している。231 は甕 A1 類の破片資料。口縁端部付近の外反度が強い。232 は甕 A2a 類の資料。同分類の中では口径が最大となる。口縁部内面にヘラミガキを施しており、図化した甕ではこの個体のみの特徴となる。233 は甕 A3 類の資料。口縁部が長く、外反度は弱い。

234 はミニチュア土器の完形品。壺のような形態で、口縁部が短く体部はやや扁平な形状となる。口縁部に

は2つ穿孔があり、対向する箇所位置している。底部は丸底。丁寧なヘラミガキが施される。外面は赤彩される。

**SX239** (図版 75、写真図版 88)

甕 (235) を図化した。口縁部が内湾する甕 B 類の資料。口縁端部は摘み上げ、面となる。外面にススが付着。

**SX537** (図版 75、写真図版 88)

器台 (236)・鉢 (237・238)・壺 (239)・甕 (240・241) を図化した。236 は器台 B1 類の資料。受部外面の段は明瞭。受部内面は中央部が逆円錐状の形態となり、受部と脚部の貫通孔の位置が下がる。受部内外面・脚部外面ともに精緻なヘラミガキで、同部分は赤彩される。237 は鉢 A1 類の口縁部破片資料と底部破片資料との図上復元である。底部は平底で中央部がくぼむ。238 は鉢と考えた体部下半資料。分類はしていない。底部は意識しているようだが底径 1cm 程度であり、安定はしないと推測する。外面は丁寧なハケメ調整である。なお、鉢で図化したものの中にこのような形状の底部は他に無い。尖底鉢〔滝沢 2019a〕の可能性が推測される。239 は壺の底部付近の資料のため分類はしていない。しっかりとした平底で、外面中央にくぼみがある。240 は甕 A2a 類の破片資料。241 も甕 A2a 類の資料。体部外面のハケメについては上半の目は細かく、下半は目が粗い。口縁部外面から体部外面上半にススが付着する。

**b 包含層出土遺物** (図版 75～87、写真図版 88～95)

高杯 (242～277)・器台 (278～317)・高杯もしくは器台の脚部 (318～321)・鉢 (322～382)・蓋 (383～393)・壺 (394～445)・甕 (446～498)・ミニチュア土器 (499・500) を図化した。

242 は高杯 D1a 類の破片資料。杯部外面の稜は弱い。内外面とも赤彩される。243～245 は高杯 D2 類。243 は歪みがある。244・245 はともに稜の部分が判然としないが高杯 D2 類とした。244 は資料下部が僅かに湾曲するため、稜をもつ可能性もある。内外面ともに精緻なヘラミガキで、内外面とも赤彩される。245 は杯底部にかけて器壁が厚くなる。ヘラミガキは丁寧で、外面は赤彩される。246・247 は高杯 D1a 類。246 は杯部のみ完形となる。外面の稜は明瞭。内外面とも丁寧なやや幅広のヘラミガキで、内外面とも赤彩される。247 も外面の稜は明瞭。内外面ともやや幅広のヘラミガキ調整。内外面とも赤彩されるが、内面の赤彩は口縁端部から 5～10mm 程度より下部で色が薄くなる。248・249 は高杯底部付近の破片資料で、高杯 D1 類の中でも器壁が厚いため高杯 D1b 類とした。248 の外面の稜は明瞭で、粘土を貼り付けて稜としている。内外面ともに細かいヘラミガキで、内外面とも赤彩される。249 は杯底部内面及び脚部との接合部が剥落、欠損している。248 と同様で外面の稜は粘土を貼り付けることで形成される。内外面とも赤彩される。250～252 は高杯 B 類の資料。250 は外面の段が明瞭。外面の器面はやや摩耗する。内外面とも赤彩される。251 も外面の段が明瞭。外面のヘラミガキは丁寧。内外面とも赤彩される。252 は破片資料。ヘラミガキが精緻で、内外面とも赤彩される。253 は高杯 C1 類の資料。脚部とは接合面で剥離し、欠損する。図では表現しきれていないが杯部内面にも緩やかな段がある。ヘラミガキは丁寧で、内面は赤彩される。254 は高杯 C1 類の破片資料。器面は摩耗。内外面ともに赤彩される。255 は高杯 B 類の破片資料。ヘラミガキが精緻で、内外面とも赤彩される。256 は高杯 A 類とした破片資料。小振りである。杯底部の粘土紐端部に対し内側には口縁部側の粘土紐が貼り付けられ、外側には粘土を貼り付けている様子が断面で観察できる。外側に粘土を貼ることで杯部の段が強調される。内外面ともにヘラミガキは精緻で、赤彩される。257 は高杯 D1a 類とした破片資料。口縁端部がくぼむ形態は、図化した中ではいずれの高杯にも見られない。外面は赤彩される。258 は高杯 D1a 類の破片資料。外面の稜の直上部分に沈線が 1 本巡る。内外面とも赤彩される。259 は高杯 D2 類の破片資料。杯部外面には縦方向のハケメが施される。260・261 は高杯 A 類の資料。260 は外面の稜が明瞭。内外面とも赤彩される。261 は外面の稜の部分が丸みをもつ。同分類の中では口縁部が長く、身が深い資料となる。やや幅広のヘラミガキが施される。262 は高杯 C2 類の破片資料。杯部の稜は弱い。内外面ともヘラミガキが精緻で、赤彩される。263・264 は高杯 C1 類の資料。263 は全体の形が判明するが残存率は低い。杯部外面の稜はやや弱めで脚部は直線的に開く。杯部と脚部の接合部における粘土の埋め込み部分は剥離し欠損している。264 は外面の稜の部分が一部剥落し

ており、その部分では粘土を貼り付けていることが観察できる。内面は僅かに段がある。外面のヘラミガキは精緻。内外面とも赤彩される。265は高杯C類の破片資料。口縁端部の方が器壁は厚くなる。内外面ともに赤彩される。266・267は高杯C1類の資料。266の外面の稜は明瞭で、内面にも段がある。内外面とも精緻なヘラミガキで、内外面とも赤彩される。267の杯部内面にも段がある。同分類の中では器壁が厚めとなる。268は高杯D1a類の資料。杯部は内湾して立ち上がるものと推測する。内外面ともヘラミガキは精緻。黒斑なのか定かではないが内面が黒く変色している。269は高杯D1a類の脚部付近の資料と考えた。ただしC1類の可能性もある。口縁部と杯底部の接合部では、接着度を増すためか杯底部側の粘土紐に指ナデによるくぼみが巡る。また外面の段の部分は粘土を貼り付けている痕跡が確認できる。杯部内面のヘラミガキは丁寧。270～273は高杯脚部資料でいずれも分類はしていない。270の脚部はやや膨らみをもち、脚端部に向けて少し外反するものと推測する。小さめの円形の透かしが4か所確認でき、配置を考えると欠損部にもう1か所存在した可能性もある。ヘラミガキは丁寧。271は短脚で「ハ」の字に開く。脚端部は丸く、また接地面と平行する面をもつ。脚部外面がハケメで、厚みがあるつくりのため脚（台）付の鉢の可能性もある。272の杯部内面の底面にはハケメが施される。273の脚部上半部は細めでやや長く、下半は開き、ラッパ状の形態となる。脚部内面から杯底部に向けて粘土を埋め込んでいる。それに対し杯底部側は接合面で剥離し欠損しているため粘土の埋め込みも欠損している。ヘラミガキは精緻で、外面は赤彩される。また、図では表現していないが脚部内面の一部も赤彩される。274は有段ではない鉢に脚部が付くものと考えた高杯F類の資料。全体の1/3程度欠損する。欠損により具体的な形状は不明だが、口縁部は外反すると推測する。ヘラミガキは丁寧。275・276は高杯脚部資料で分類はしていない。275は「ハ」の字に開く形態で、透かし付近でやや膨らむ。脚端部は面となる。小さめの円形の透かしが4か所に入る。脚部内側から杯部との接合部を見ると、上部に空間が出来ている。杯底部内面と脚部外面のヘラミガキは精緻。また、脚部内面のハケメも丁寧に施される。外面と杯底部内面に赤彩される。276は直線的に開き、脚端部付近で外反する。脚端部は面となる。ヘラミガキは精緻。外面と杯底部内面に赤彩される。また、図では表現していないが脚部内面の一部も赤彩される。277は大型で有稜・有段となり、身は浅くなると推測した高杯E類の資料。中山南型式〔北野1991〕と考えた。口縁端部は欠損する。外面の稜の部分は、残存する範囲では段状になる部分もある。器面は摩耗している。

278～317は器台。278～282は器台E類。278は完形に近い資料。受部の内湾の程度は同分類中では強い。脚部に円形の透かしが3か所に入る。受部と脚部の貫通孔は透かしと同程度の大きさである。ヘラミガキは精緻で、脚部内面のハケメも丁寧である。受部内外面と脚部外面は赤彩される。また、図では表現していないが脚部内面の一部も赤彩される。279は受部の身が浅め。精緻なヘラミガキで、内外面とも赤彩される。280～282は破片資料。280・281は精緻なヘラミガキで、内外面とも赤彩される。282の口縁端部は摘み上げられている。精緻なヘラミガキで、内外面とも赤彩される。283は器台D類。全体のわかる資料だが、脚部は半分程度欠損する。受部の身はやや浅く、口縁端部は摘み上げて面となる。脚部に円形の透かしが1か所確認でき、位置からすると3か所等間隔にあったと推測する。脚端部は丸く収める。受部と脚部の貫通孔は透かしと同程度の大きさである。受部内外面・脚部外面のヘラミガキは精緻。なお、受部内面には円形の黒斑がある。284～288は器台C類。284は破片資料。脚部との接合面で剥離し、欠損する。内外面ともに赤彩される。285は受部が半分程度残存する資料。精緻なヘラミガキで、内外面とも赤彩される。286・287は破片資料。286は精緻なヘラミガキで、内外面とも赤彩される。287は口縁端部がやや丸みをもつ。丁寧なヘラミガキで、内外面ともに赤彩される。288はD類との区分に迷うところだがC類とした。端部は摘み上げて面となる。精緻なヘラミガキ調整。なお、287・288は器壁が厚い。289は器台D類の資料。同分類中では口径が大きい。丁寧なヘラミガキ調整。290・291は器台B1類の破片資料。290は口縁端部を摘み上げて面となる。ヘラミガキは精緻で内外面とも赤彩される。291の口縁端部は丸く収める。ヘラミガキは精緻で、内外面とも赤彩される。292・293は器台D類の資料で、脚部は透かしより下部で欠損する。292は口縁端部が面となり、身は深めと

なる。円形の透かしが脚部の受部寄りに2か所に確認でき、位置からすると3か所等間隔にあったと推測する。受部と脚部の貫通孔は透かしと同程度の大きさ。丁寧なヘラミガキ調整で、受部内外面と脚部外面に赤彩される。293も口縁端部は面となり、身はやや深め。円形の透かしが脚部に4か所確認できる。配置的にはもう1か所あってもおかしくはないが確証はない。貫通孔は透かしよりも径が大きい。受部の内面調整は摩耗のため不明だが、外面は丁寧なヘラミガキ。脚部内面の調整はヘラケズリも観察できる。受部内外面と脚部外面に赤彩される。294は器台E類の資料。口縁端部は若干摘み上げ、面となる。受部と脚部の貫通孔はやや大きい。器面は摩耗するが外面にもヘラミガキが確認できる。295は器台B1類の資料。ヘラミガキは精緻で、内外面ともに赤彩される。296は器台D類の破片資料。内外面ともに赤彩される。297は器台B1類とした破片資料。口縁部は大きく外反し、口縁端部は摘み上げて面となる。受部外面の段より上部の形態が同分類中の他とは異なるがB1類に含めた。ヘラミガキは精緻で内外面ともに赤彩される。298・299も器台B1類の資料。298はヘラミガキが精緻で、内外面ともに赤彩される。299は摩耗のためもあるが、外面の段や口縁端部など全体的に丸みをもつ。貫通孔はやや大きめとなろうか。300は口縁部が長く外傾すると推測し、器台G類とした資料。受部外面には段を有する。外面には指頭圧痕が残り、受部内面には輪積み痕も残るなど雑なつくりとなる。301は小型の器台で受部が有段となり、口縁部外面に擬凹線文が施されるため器台B2類とした破片資料。擬凹線は口縁端部寄りの1条が摩耗により明瞭ではないが、8条を確認した。内外面ともに赤彩される。302～309は器台A類。302は破片資料。口縁部は有段となる。口縁部の形態は303・304と似るため、おおよそ303のような受部全体の形態と推測する。そのため実測図では剥離するところから突出するような推定線を入れている。口縁部と受部底部の接合部では口縁部側の粘土紐端部に鋭さの欠ける刻み目が確認できる。304も同部位に刻み目をもつことから接着度を増すための刻み目と考える。円形の透かしが口縁部の段の直下に2か所確認できる。ヘラミガキは精緻で、内外面とも赤彩される。303は受部全体が完全に残る。口縁端部は丸みをもつが面となり、口縁部は有段で受部は横方向に突出する。円形の透かしが口縁部の段の下に4か所入る。位置は段直下に3か所、それよりもやや下がる所に1か所である。ヘラミガキが精緻で、内外面とも赤彩される。304は破片資料の図上復元である。口縁端部は面となり、口縁部は有段となる。受部は303のように突出する形態と推測する。図では欠損の表現だが口縁部と受部底部の接合部で剥離している。この接合部では口縁部側の粘土紐端部に、接着度を増すために板状工具で鋭い刻み目が入れている。円形の透かしが口縁部の段の下に1か所確認できる。ヘラミガキは精緻で、内外面とも赤彩される。305は破片資料。受部全体の形状は11・306～308と似たものになると推測する。口縁部は途中で屈曲し、外反する。円形の透かしが1か所確認できる。器面は摩耗しているが、外面の赤彩が確認できる。306は口縁端部が面となり、口縁部は途中で屈曲し外反する。受部は突出しないが段は明瞭。円形の透かしが4か所確認でき、位置からするともう1ないし2か所あったものと推測する。ヘラミガキは精緻で、内外面とも赤彩される。307・308は破片資料。口縁部は途中で屈曲し外反すると推測する。307の受部は突出しないが段は明瞭でやや強調されている。円形の透かしが1か所確認できる。口縁部内面にはナデも施され、内外面のヘラミガキは精緻。外面と口縁部内面の上半部は赤彩される。308のヘラミガキは丁寧で内外面とも赤彩される。309は受部付近の破片資料と考えたもの。受部が突出し、その上・下端が発達する形態を想定するが定かではない。器台ではない可能性も考えられる。受部下端側の粘土紐端部には接着度を増すために丸みのある板状工具あるいは棒状工具により刻み目が入れている。310～317は器台脚部としたもので分類はしていない。310の脚部上半はやや膨らみをもち中位から外反して脚端部へ開く。ヘラミガキは精緻。外面と受部内面は赤彩される。また、図化してないが脚部内面の一部も赤彩される。311は残存する受部内面に輪積み痕が残る。貫通孔の径は大きめ。ヘラミガキは丁寧で、外面と受部内面は赤彩される。312の脚部はやや膨らみをもち、資料の下部に1本の沈線が巡る。なお、このまま杯部に向かうとすれば貫通孔の径は大きいものとなる。装飾器台の脚部であろうか。外面にはヘラミガキ前のハケメが残る。外面と内面下部は赤彩される。313は2個一対となる円形の透かしが2か所に入る。貫通孔の大きさは透かしと同程度。ヘラミ

ガキは精緻。外面と受部内面は赤彩される。314は小さめの円形の透かしが3か所に入る。貫通孔の径は大きめ。器面は摩耗している。315は破片資料。外面に段があることから装飾器台の脚部であろうか。ヘラミガキは精緻で、外面は赤彩される。316は口縁部・受部の形態が不明のため脚部として分類した。脚部はやや膨らみを有し、透かしのあたりから開くものと推測する。透かしは円形で3か所に入る。受部と脚部の貫通孔の径は大きめ。175の受部底部付近から脚部にかけての形態と若干似ることから器台A類の可能性があろう。317は短脚で厚みがあり、貫通孔の径はかなり大きい。受部の形態は不明だが、脚部に段はないことから、川村氏の分類〔川村1993〕でいうところの器台A類・B類を想定した。

318～321は高杯もしくは器台の脚部資料。いずれも分類はしていない。318は脚部下半の資料で、「ハ」の字に開く。小さな円形の透かしが2か所に確認できる。ヘラミガキは精緻で、外面は赤彩される。319は破片資料。やや膨らみがあるが直線的で、脚端部付近で外反する。小さな円形の透かしが隣接して2か所確認できる。透かし同士の間隔が狭く、また等間隔の配置にあたる部分に他の透かしが確認できないことから2個一対になると推測する。ヘラミガキは精緻。320は円形の透かしが4か所に入る。ヘラミガキは精緻で、外面は赤彩される。321は破片資料。やや膨らみがあり、「ハ」の字に開く。脚端部付近で外反するものと推測する。やや小さめの円形の透かしが2か所確認できる。

322～382は鉢。322は鉢A1類の資料。ヘラミガキは丁寧で、体部内面は指ナデ。外面と口縁部内面は赤彩される。323は鉢F類の破片資料。内面の器面は摩耗する。324～329は鉢A1類の資料で、このうち324～327・329は破片資料。324はヘラミガキが精緻。外面と口縁部内面は赤彩される。325は頸部のヨコナデが強めとなる。326の口縁部は外反する。外面と口縁部内面は赤彩される。327は口縁部外面の段が明瞭。ヘラミガキは精緻で、外面と口縁部内面は赤彩される。328は全体の半分程度残存する資料。口縁部外面の段は明瞭。329の口縁部外面の段は丸みをもつが内湾とは言い難い。ヘラミガキは精緻。外面と口縁部内面は赤彩される。330は鉢F類の破片資料。ヘラミガキは精緻。内外面とも赤彩される。331は鉢A1類の破片資料。332・333は鉢B2類の破片資料。332は同分類中では口縁部が長めで、口縁端部は面となる。333は頸部の器壁が厚い。334は鉢B3類の破片資料。口縁端部に板状工具によると推測する鋭い刻み目が施される。335～340は鉢B1類の資料で、このうち337～340は破片資料。335は全体の1/3程度残存する。口縁端部は鋭い。器面に凹凸が残り、やや雑なつくりとなる。336は全体の1/3程度残存する。口縁端部は鋭い。底部は小さい平底。体部内面調整は指ナデ。337は338と似るが、337の方が体部の張りが弱い。338の口縁端部は先細となり鋭い。339は半球形となろうか。340の口縁端部は鋭くなる。器面は摩耗している。341は鉢B2類の破片資料。図では口縁端部付近が内側に突出しているが、これはつくりの仕上げが雑なことに起因したものと考える。また、指頭圧痕も残る。342～344は鉢E類の資料。342は全体の1/3程度残存する。底部はしっかりとした平底。底部内面中央には粘土の盛り上がりが残る。343・344は破片資料。両者を比較すると343の方が器壁は薄い。344は外面にハケメが残るが丁寧なヘラミガキである。345～349は鉢A1類の資料。345は全体の1/3程度残存する。頸部のヨコナデを多少強くすることで有段としている。そのため段としてはかなり弱い。底部は平底。体部下部にはヘラミガキの前のハケメが残る。外面は赤彩される。346は破片資料。頸部のヨコナデは強め。体部外面はヘラミガキが力強く施されたため凹凸が残る。347は口縁部が長く身は浅めとなり、外面の段は明瞭。口縁部にハケメを残すがヘラミガキは丁寧。348・349は破片資料。ともに頸部内外面のヨコナデが強め内側も段となる。350・351は鉢B3類の破片資料。352は鉢A1類の破片資料。頸部のヨコナデが強い。353は鉢B3類の破片資料。354・355は鉢F類の破片資料。両者ともヘラミガキは丁寧。355は口縁端部が先細となる。356は口縁部が長く、上方に立ち上がるため鉢C類とした資料。図上復元である。底部は小さく平底で、ややくぼむ。外面と口縁部内面は赤彩される。357・358は鉢A2類の資料。357の口縁部外面の段はしっかりとしており、擬凹線は6条確認できる。丁寧なヘラミガキ調整。358も外面の段が明瞭。3条のくぼみが巡り、凹線文を意識した擬凹線と考えた。359・360は鉢A1類の破片資料。359は外面

の段に板状工具による鋭い刻み目が巡り、工具は向かって右から左方向に押し当てられたと考える。ヘラミガキは精緻。360は別な大別とすべきかもしれないがA1類に含めた。頸部に弱いヨコナデを施すことで段のある口縁となる。361は鉢B2類の破片資料。362は鉢の体部下半から底部の資料と考え、分類はしていない。凹凸が残り粗雑なつくりだが、ヘラミガキが施される。底部は平底。底部外面の周縁部はヘラケズリが施され、中央部にはナデが残る。363～366は鉢E類の資料。363・364は破片資料。363の口縁端部付近の器壁は薄めである。指頭圧痕が残るため凹凸のある雑なつくりとなる。364は外傾気味に開き、途中で内湾の度合いが強くなり口縁端部へと向かう。365は図上復元である。半球形を呈し、口縁端部は丸みをもつが平行する面となる。体部に輪積み痕を残すが内外面ともヘラミガキが施される。内外面ともに赤彩される。また底部外面は剥離したような痕跡が円形に残り、その上から赤彩されている。本来は平底の底部があったものと推定した。366は破片資料。底部は欠損するが、365のような半球形になると推測する。口縁端部は平行する面となる。内外面ともにハケメ調整。367は鉢F類の破片資料。口縁部は外側に強く開き、また口径も大きく同分類中でも他とは異なる形態となる。器壁は薄く、ヘラミガキは精緻。368～370は鉢E類の資料。368は全体の1/3程度が残存する資料。底部を欠くが身は深い。口縁部付近の内面にハケメが残る。369は破片資料。底部は欠損する。内面調整は指ナデ。370は口縁部から体部にかけての形態が364に似て外傾気味に開き、途中で内湾の度合いが強くなり口縁端部へと向かう。ヘラミガキは精緻。371は片口鉢で鉢H類としたもの。片口の部分と体部の一部を欠損するのみでほぼ完形の資料。体部は内湾して立ち上がり口縁端部は内側に窄まる形となる。底部はしっかりとした平底。372・373は大型で口縁部と体部の境界に段を有する鉢G2類とした資料。両者とも破片資料。372の口縁部は外反する。内面にヘラミガキが施される。373も内面にヘラミガキが施される。374・375は鉢I類の資料。両者とも脚部は直線的に開く。374は脚部の3/4程度残存する。外面調整は指ナデで、端部側には沈線状の痕跡が残る。沈線状の痕跡が意図的なものなのか、それとも輪積みの位置にあたるためにその痕跡かと考えるが、現状は後者と捉えている。375は口縁部から体部上半が欠損する。体部は125より開かず立ち上がるため、身は深くなるものと推測する。体部外面の器面は剥落が多い。376は鉢G2類の破片資料で、段より上の部分と判断した。ただし、372の同部位と比べると外面調整が異なり、凹凸が巡る。なお、この凹凸が意図的か否かは不明である。

377～381は鉢底部付近の資料。分類はしていない。377はしっかりとした平底で中央部がくぼむ。378・379は外に張り出すような平底となる。体部下半と底部外面に指頭圧痕と指ナデの痕跡が明瞭に残る。これらの痕跡は底部周縁部を摘んだ痕跡である。摘むことで底部周辺部が引き出され張り出し、中央部がくぼむ。380は短い脚部のような形態の底部となる。脚のような部位にはヨコナデが施されるが、底部外面中央にはハケメが残る。381は平底で指頭圧痕が残る形態としては378・379と似るが、底部外面はそれほどくぼまない。体部内面調整は横方向のヘラナデ。

382は鉢D類の底部破片資料。破片部分だけみると逆円錐形を呈する。底部中央に穿孔される。

383～393は蓋。383は円柱状でつまみをもたない蓋C類。天井部径より口径が小さく、天井部に2か所穿孔される。外面のヘラミガキは精緻で、外面は赤彩される。類似資料は新潟市緒立C遺跡〔渡辺ほか1994〕、新潟市下大口遺跡〔今井ほか2008〕<sup>1)</sup>で出土している。384・385はしっかりとしたつまみをもち、体部が直線的ないしは「ハ」の字状に開き、扁平になるものとした蓋B類の資料。両者とも完形ではないが全体像がわかる。384は「ハ」の字状に開く。内面はナデ調整で、外面は赤彩される。385は直線的に開き、内外面ともに赤彩される。386は大型の蓋で、径の大きいしっかりとしたつまみをもち、体部が内湾気味で笠状となる蓋A類の資料。つまみは完形だが、体部は1/5程度の残存である。ヘラミガキは外面が幅広で粗めであるが、内面は精

1) 下大口遺跡出土資料は、天井部径より口径が大きい。また、体部に6条の沈線が巡り、天井部外面と体部外面の境界には刻み目が巡るものである。よって、緒立C遺跡出土資料の方が道正遺跡の資料に類似すると言えよう(第111図参照)。

緻である。この内面が精緻という点で、内面を見せることを意識していたとすると天地が逆と考えることも可能となり、その場合は蓋ではない。なお、内外面ともに赤彩される。387～393は蓋の破片資料。そのため分類はしていない。387はしっかりとしたつまみを持ち、外面は赤彩される。388はつまみ部分の高さが低く、中央部は浅くくぼむ。外面は赤彩される。389のつまみは粘土紐を足すことで縁を高くしている。390は388ほどではないがつまみの高さが低い。つまみ中央部は若干くぼむ。391は径の大きいしっかりとしたつまみとなる。器面は摩耗するがつまみ外面に粉圧痕が2つある。392はしっかりとしたつまみとなる。393は径の大きいしっかりとしたつまみで、つまみ部分の角を削った工具痕が雑に残る。また、つまみ部分と体部の接合面付近に沈線状の痕跡が巡る。位置的に輪積み痕とも工具痕とも考えられるが、現状では後者と捉えている。

394～445は壺。394・395は小型丸底の壺(鉢)で、B1類より体部が発達するが最大径は口径となる壺B2類の資料。394は口縁部が内湾して立ち上がり、口縁端部は鋭くなる。底部は丸底。395は体部資料。底部は丸底で、体部内面の調整は指ナデ。396～401は壺A1類の資料。396は内湾する口縁部資料。外面の段にまで丁寧なヘラミガキが及ぶこともあり、結果として段はやや不明瞭となる。397は図上復元である。口縁端部は欠損。口縁部は内湾して立ち上がる。口縁部外面の段はヘラミガキが及ぶため少し丸みをもつ。体部は中位が最大径となり、扁平になると推測する。精緻なヘラミガキで、外面と口縁部内面は赤彩される。398～400は口縁部破片資料。398の口縁部は内湾気味に立ち上がり、外面の段は明瞭である。外面は赤彩される。399も外面の段は明瞭。精緻なヘラミガキで、外面は赤彩される。400はやや上方に立ち上がる。外面の段は明瞭。精緻なヘラミガキで、外面は赤彩される。401は口縁部下半から体部の資料。口縁部外面の段は明瞭。体部は中位が最大径となり球形を呈する。底部は丸底。ヘラミガキは丁寧で、外面は赤彩される。402は壺A1類と考えた破片資料。破片のため推定の径が大きくなっているがA1類に含めた。403は壺I類の破片資料。外面と、内面は口縁部から頸部まで赤彩される。404も壺I類の資料。口縁端部は欠損するが短いものと推定した。丁寧なヘラミガキ調整。405・406は壺C類の資料。405の口縁部は短めで内湾する。体部は肩付近が張り、縦長となる。底部は丸底。406は口縁部が欠損する。体部は中位が最大径でやや扁平となる。底部はかなり小さく丸底と言えよう。407は小型で口縁部が短く有段となるため壺E類とした資料。口縁部は外反し、外面の段は明瞭。口縁端部は丸く収まる。408は口縁部が短く、肩が大きく張りだすため壺O類とした資料。口縁端部は摘むことにより面となる。409は球形の体部に、直立気味の口縁部が付くため壺D類とした資料。口縁部の半分は欠損する。口縁部や体部には輪積み痕が残る凹凸があるため全体的に粗雑となる。特に口縁部のつくり雑なところがあり、一部では短い口縁部で外反する部分を形作って仕上げているにもかかわらず、途中から外面に括れもなく指頭圧痕も残す。段面では、仕上げたところに上から粘土を貼っているように観察できる箇所もある。底部は丸底である。410は壺F2類の破片資料。口縁部が上方に立ち上がり、口縁端部は平行する面となる。411は口縁部が有段で、内湾口縁になるため壺M類とした資料。口縁端部は丸く収め、器壁は厚みがある。体部の形態は欠損のため不明。類似資料としては市内では四十石遺跡〔渡邊ほか2012〕で出土しているものが挙げられる。違いとしては本遺跡より四十石遺跡出土資料のほうが一回り大きい。また、四十石遺跡出土資料は口縁部の器壁が先端に向けて薄くなるが、411の同部位の厚さは一定に近い。他にも外面の段部分は四十石遺跡出土資料のほうが明瞭である。412は壺J2類と考えた破片資料。口縁端部が内傾する面になる。また、口縁部には2本の沈線が巡る。K類に沈線を入れるものがあるため、K類の可能性もある。413は片口が付くと考えた壺Q類の破片資料。口縁端部に湾曲する箇所があり、片口の根元部分にあたるものと推定した。414は口縁部が無段で内湾するため壺F3類とした資料。体部が大きく欠けるが図上復元した。口縁端部は先細となり内側に湾曲する。なお、頸部のヨコナデが強いため有段を意識した可能性もある。底部は小さく平底。器壁は薄い。ヘラミガキは精緻で底部外面にも施される。415～418は壺F1類の資料。415の口縁端部は丸く収める。体部外面にヘラミガキが施される。口縁部外面上半にススが付着し、体部肩から中位にもススが付着する。416の口縁端部は丸く収める。417は口縁端部下端を摘むことで面となる。418は口縁端部の上・下端を摘むことで

面となる。口縁部内面には輪積み痕の位置で沈線状の痕跡が巡る。419は壺H類の資料。口縁端部は面となる。口縁部内面にヘラミガキが施される。420は壺F3類の資料。口縁部は丸く収める。頸部外面はヨコナデにより多少くぼむ。体部外面肩付近のハケメは交差するように施され、幅広のヘラミガキも施される。体部外面下半にススが付着する。なお、414と同分類であるが大きさ、器壁の厚さ、ヘラミガキの精緻さなど異なる点が多い。421は壺H類の資料。口縁端部は面となる。外面調整はハケメで目には粗細がある。内面調整は口縁部内面がヘラミガキで、体部内面には幅広のヘラミガキが確認できる。422・423は壺K類の資料。422は外面の段は明瞭だが、内面に段は無い。口縁端部は面となる。口縁部外面は赤彩される。423は破片資料。外面の段は明瞭。口縁端部下端を摘み、そこには板状工具による刻み目が巡る。工具は向かって右から左方向に押し当てられている。内面調整は幅広のヘラミガキ。424・425は壺J1類の資料。424の外面の段はそれほど強調されない。内面に段は無くそのまま頸部へと続く。頸部は上方に立ち上がる。425は外面の段は強調され、内側も段となる。外面の段直上に沈線のような痕跡が2本あるが部分的であり、この痕跡は段の部分に粘土を貼る際か、もしくは口縁部と接合する際のヨコナデの影響によるものと考えられる。頸部は上方に立ち上がる。内外面ともに赤彩される。426は壺J2類の資料。外面の段は強調され、内面も段となる。427・428は壺K類の資料。427の外面の段直上部には、口縁部との接合面をヨコナデしたことによるくぼみが巡る。428の体部外面のハケメ調整は交差する。また、体部外面の肩の部分に幅3mm程の直線的な痕跡が数本観察できる。その痕跡は右上から左下方向に土器の地色が残るもので、これまで「カゴメ」としたものと似る。したがって、この痕跡も「カゴメ」と考えた。429は壺K類の破片資料。頸部が外反せず内湾気味となるかもしれない。そのため、他の分類の可能性もあるが、口縁部に3本の線刻があるためここでは壺K類の範疇で捉えた。線刻の切合い(第108図参照)は上から①・②・③とした場合、②が先で、①が後である。430は壺J2類の資料。外面の段は強調されている。体部の最大径は中位にある。体部外面にヘラミガキ調整が施される。431は壺K類の資料。外面の段直上部に1本の沈線が巡る。ただし、口縁部との接合面付近であるため強めのヨコナデによる痕跡と疑わしいが、意図的な沈線と考えた。口縁部内面にススが付着するが、端部側には付着していない。432は壺J2類の破片資料。口縁部外面の中位にはヨコナデによるくぼみが巡る。器壁は厚い。433は壺K類の資料。外面の段は明瞭。同分類中では最も口径が大きい。434は壺J2類の資料。口縁部と頸部の接合部では、接着度を増すために頸部側の粘土紐端部にハケメ工具による刻み目が入れられている。調整は幅広のヘラミガキが丁寧に施され、内面の頸部と体部の境目には指ナデが確認できる。435・436は壺P類の破片資料。435は同分類としては口径が小さく頸部の外反度も弱いため、器種分類でも述べたが同じ範疇では扱えない可能性がある。外面の段がやや丸みをもち、内側の段も不明瞭。精緻なヘラミガキで、外面と口縁部から頸部付近の内面に赤彩される。436は外面の段が明瞭となるが、横方向に飛び出すような段ではない。内面の段は不明瞭。口縁部内外面とも目の粗いハケメが残る。437は壺I類と推定した破片資料。精緻なヘラミガキ調整。外面と口縁部内面に赤彩される。438は壺K類の資料としたもの。口縁部の形状が不明のためJ2類の可能性もあろう。外面の段部分に刻み目が巡り、刻み目は外縁がくぼみ中央部が飛び出すような特徴である。具体的な形状はわからないが、先端が筒状の工具による刻み目と考える。工具は向かって正面から押し当てられているものが多い。内側の段は不明瞭である。

439～445は壺の体部や底部の資料で分類はしていない。439の底部は平底。体部は丁寧なヘラミガキ調整。内外面とも赤彩され、底部外面も赤彩される。440は壺体部と考えた線刻のある破片資料。線刻の深さが浅いものもあるため定かではないが10本程度確認できる。440は胎土からSX233で出土した217と同一個体の可能性がある。441はしっかりとした平底。体部外面と底部外面に工具痕であろうか線状の痕跡が確認できる。442は破片資料。外方に張り出すしっかりとした平底。内面のヘラミガキは精緻。443はしっかりとした平底でややくぼむ。外面は赤彩される。444は破片資料。外方に張り出すしっかりとした平底でややくぼむ。また底部内面も段となりくぼむ。445は平底でややくぼむ。外面は赤彩される。

446～498は甕。446～448は甕A2a類の資料。446は口縁部から体部上半資料と底部付近の資料との図



上復元。図では口縁端部が丸く見えるが、全体的に面をもつと言える。底部は小さく、ほぼ丸底となる。447は全体の1/3程度残存する資料。器高に対し口径が大きい。体部外面は目の粗いハケメが施される。また、底部外面はヘラケズリが施される。平底で中央がややくぼむ。448は口縁部から体部上半資料と体部下部資料との図上復元。口縁部下端を摘むことで面となる。口縁部内面に輪積み痕が残る。底部は小さく平底。449は甕A3類の資料。口縁部を1/3程度欠損するが、体部はほぼ完形となる。底部は平底。口縁部から体部外面にススが付着する。450～453は甕A2a類の資料。450は全体の1/3程度欠損する。頸部外面には調整工具の角が強く当たったためであろうか、横方向に工具痕が残る。底部は平底で、底部外面にヘラケズリと指頭圧痕が残る。口縁部から体部外面上半にススが、体部内面下半に炭化物が付着する。451の口縁端部は面となるが、さらに上端に平行する面をもつ。体部外面は目の粗いハケメ調整。452は体部が所々、欠損する。底部外面は周縁部が高く、中央部が強くとくぼむ。体部外面にススが付着する。なお、底部の形態からすると壺の可能性もあるが、煮炊きで使用された可能性を踏まえ甕とした。453は底部付近が欠損する。体部外面の中位付近にススが付着する。454は甕A3類の資料。口縁部内外面にハケメが残る。なお、口縁部外面よりも体部外面のハケメのほうが目は粗い。455は甕A2a類の資料。体部外面は目の粗いハケメである。456は甕A1類の資料。457～459は甕A2a類の資料。458の口縁部は面となるが、さらに上端に平行する面をもつ部分がある。459は破片資料。同分類中の他とは違い、口縁端部が平行する面の形態になる。口縁部は内外面ともハケメ調整。460は甕B類の破片資料。461～465は甕A2a類で、うち461～463は破片資料。461の口縁部は短め。体部内面には指ナデが観察できる。462は口縁端部上端を摘むが丸みをもつ。464は頸部外面の口縁部から体部への変換点はなだらかであるが、内面は稜をもち内側にやや突出する。465の体部内面は摩耗しているが、ナデの痕が確認できる。466は甕E4類の資料。頸部と段の直上部のヨコナデを強くすることで横方向にやや鋭く突出するものとする。口縁部は内湾気味となる。内面調整はヘラナデ。山陰地方の影響を受けたものかと考えた。467は甕E1類の破片資料。口縁部の外反は強めとなり、段はやや丸みをもつ。468は甕A2a類の破片資料。内湾気味の口縁部であるが口縁端部を摘む際に湾曲したものと考えた。469は甕A1類の破片資料。口縁部は受け口状を呈する。体部の器壁は薄い。口縁部内面の中位から端部にかけてススが付着する。470～472は甕A2a類の資料。470は口縁端部の面の広さで甕A1類との区分に迷うが本分類とした。471は破片資料。口縁部の屈曲度が強い。口縁部の器壁は厚いが、体部は薄い。472は摩耗のため口縁端部が丸くなり、調整も摩耗のため不明。473は甕A3類の破片資料。口縁端部は粘土紐を貼り付けることによって丸みを出しているように見える。474は甕A2a類の破片資料。肩が張るものとする。475は甕E2類としたものの破片資料。口縁部のヨコナデは凹凸が明瞭であり、凹線文を意識しているものとして捉えた。口縁部の段の下部はヨコナデによって内側に屈曲させたような形となる。476は甕A2a類の破片資料としたもの。口縁端部上端は丸く上方に突出し、口縁端部は面となる。その面の部分に沈線が1本巡る。また、頸部付近では体部側に段を形成しているように見える。口縁端部の沈線や体部の形状をみると本分類の他の資料と異なるため別な大別とするべきかもしれない。477は甕A2a類の破片資料。体部の器壁は薄い。なお、内湾気味の口縁部であるが端部を摘む際に湾曲したものと考えた。478は口縁端部が面となり、口縁部の途中で外側に強く屈曲するA2c類とした資料。破片資料で、外面にはハケメが残る。479は甕A1類の破片資料。36と同様な口縁部のつくりである。480は甕A2a類の破片資料。481は甕A1類の資料。器面は摩耗している。482・483は甕A2a類の破片資料。484は甕B類の破片資料。内湾気味の口縁部で、端部は上方に屈曲する。口縁部は長めで、口径も大きいものと推定した。485～490は布留甕あるいは布留式の影響を受けたと考えた甕D類の資料。485は口縁部から体部上半資料と体部下半資料との図上復元である。口縁端部は肥厚し、内傾気味となる。器壁は薄い。口縁部外面と体部外面肩から中位あたりにススが付着する。486は口縁部破片資料と体部上半破片資料との図上復元である。口縁端部は肥厚し、内傾する。体部外面にハケメが薄く観察できる。487～490は破片資料。487の口縁端部は肥厚し、内傾気味となる。488の口縁端部は肥厚し、外傾する。489の口縁端部は肥厚し、内傾する。490は口縁端部の肥厚は本

分類中としては顕著ではなく、口縁端部の形態は水平に近い。491～494は口縁部が短く外反し、口縁部のつくりが粗雑な甕C類とした資料。491・492は破片資料。両者とも口縁部にヨコナデはされず、外面に凹凸が残る。491の口縁部内面はハケメ調整。493も口縁部にヨコナデが施されず、外面に凹凸が残る。口縁部は内外面ともハケメ調整。494は口縁部が強めに屈曲し、頸部の窄まりは弱く、肩も張らないことから寸胴気味となる。口縁部はヨコナデが施されているようだが凹凸が残る。体部のハケメは目が粗い。内面に炭化物、外面にススが付着する。

495～498は甕の体部ないしは底部の資料のため分類はしていない。495の底部は小さく平底で、底部外面にはハケメが施される。496は破片資料。安定する部分があることから底部が小さく丸底気味かとも考えたが、傾きや体部の立ち上がりからすると尖るような底部が考えられ、このような図とした。497の底部は平底。498は破片資料。底部そのものは欠損する。外面には縦横に比較的短い14本の線刻が確認できる。

499・500はミニチュア土器。499は完形品。底部は平底で、体部は上方に立ち上がり寸胴のような形態となる。口縁部は若干外反し、口縁端部は刻み目が施されている影響もあろうが水平ではなく波打つようになる。その刻み目を上から見ると、工具は右から左方向に押し当てられている。内面調整は指ナデで、外面にも指ナデの凹凸が残る。500は全体の1/5程度が欠損する鉢のような形態の資料。最大径は口縁端部で、口縁部は外反する。底部はしっかりとした平底で厚みがある。内面には指ナデが観察できる。

#### c 試掘坑出土遺物（図版87、写真図版95）

59T 壺（501～503）・甕（504）を図化した。501は長い口縁部をもち口縁部に明瞭な段はなく、内湾して上方に立ち上がる壺A2類の破片資料。東海系ヒサゴ壺の影響が大きいと考えた。口縁部外面のヘラミガキは精緻。502は壺K類の破片資料。段の部分にハケメの工具による刻み目が巡り、工具は向かって右から左方向に押し当てられている。503は壺J2類の資料。504は甕A2a類の資料。体部内面のハケメは外面に比べ目が粗い。

61T 鉢（505）を図化した。鉢A2類の破片資料。口縁部外面は凹線文を意識したヨコナデと考える。

### C 縄文時代の土器（図版88～103、写真図版57・97～106、別表5）

#### 1) 概要

本発掘調査で出土した縄文土器は中期～晩期に属するものが確認され、中でも晩期中葉の大洞C2式期の土器群が主体となっている。取り上げた土器片総重量は213kgを計る。遺物包含層を下るに従って縄文土器の重量比率は高くなり、包含層最下層（VIIa層）では約8割を占める。包含層別に見て出土総重量が最も大きいのはVIc層で、約139kgを計る。

縄文土器の大多数は旧砂丘上に形成された遺物包含層から出土している。出土状況を見ると、調査区南西側の旧砂丘の落ち際2C-1H・2H、2C-1I・2Iで最も多く出土しており、中央部の1D-10B、2D-1B・1Cでも一定の出土が見られる。このことから、縄文時代の集落は調査区南側の砂丘上に位置し、縄文土器は砂丘斜面部に廃棄されたものと考えられる。

本遺跡出土の縄文土器は精製土器・粗製土器が一定の割合で出土しており、器種も浅鉢・鉢・深鉢・壺・注口土器等の各種が確認できる。また時期細別が可能な精製土器を見ると、東北系の大洞C2式期の中でも中～新段階併行の資料が多くを占めており、新潟県内における当該期の有効な土器資料になるものと考えられる。接合・復元の結果、土器全体の様相がわかる資料を中心に抽出し、258点を掲載した。

#### 2) 分類

縄文土器の分類は当該期の土器が一定量出土し、系統・文様等に類似した要素が見られる新潟県新潟市大沢谷内遺跡の報告書〔伊比2012a〕及び五泉市矢津遺跡の資料報告〔荒川2009〕で示された分類案を参考にした上で作成した。時期別にI～VI群に大別し、器種ごとに分類した。さらに器形・文様等による細別をアルファベットで表した。

**I 群土器** (図版 89) 中期前葉に比定されるもの。器種はすべて深鉢である。(6～10)

**II 群土器** (図版 89) 後期に比定されるものを一括した。(11～13)

**III 群土器** (図版 89) 晩期前葉に比定されるもの。器種は浅鉢・鉢で、いずれも羊歯状文が施される。(14～18)

**IV 群土器** (図版 89～98) 晩期中葉に比定されるもの。器種は浅鉢・鉢(台付鉢)・深鉢(筒形土器)・壺・注口土器がある。

浅鉢：文様で以下のように細別した。

A：雲形文を施すもの。(19～30)

B：間延びした直線的な雲形文(連弧文)を施すもの。(31～45)

C：口縁部下に溝底の刺痕が巡るもの。(46～55)

D：口縁部下に眼鏡状隆帯文が巡るもの。(56～62)

E：体部に平行沈線文が巡るもの。(63)

鉢(台付鉢)：文様で以下のように細別した。

A：間延びした直線的な雲形文を施すもの。(64～73)

B：横位C字状文(連弧文)を施すもの。(74～79)

C：三叉状入組文・沈線文を施すもの。(80～97)

D：口縁部下に溝底の刺痕が巡るもの。(98～101)

E：底面に円文・同心円文を施すもの。(102～104)

深鉢：底部から口縁にかけて垂直に立ち上がる筒形土器も含める。文様で以下のように細別した。

A：間延びした直線的な雲形文を施すもの。(105・106)

B：横位C字状文を施すもの。(107・108)

C：三叉状入組文・沈線文を施すもの。(109・110)

D：口縁部下の二溝間に刺突文が巡るもの。(111)

壺：文様で以下のように細別した。

A：間延びした直線的な雲形文を施すもの。(112～116)

B：横位C字状文(楕円文)を施すもの。(117～127)

C：三叉状入組文・沈線文を施すもの。(4・128～140)

D：平行沈線文を施すもの。(141～146)

注口土器：器形で以下のように細別した。

A：体部が球状の器形を呈するもの。(147)

B：ソロバン玉形の器形を呈するもの。(148～151)

**V 群土器** (図版 98) 晩期中葉末～後葉に比定されるもの。不規則な上下交互凸字文を施すものが主体となり、確認できた器種は浅鉢・鉢・深鉢・壺がある。

浅鉢：三角文を施すもの。(152)

鉢(台付鉢)：文様で以下のように細別した。

A：工字文を施すもの。(153)

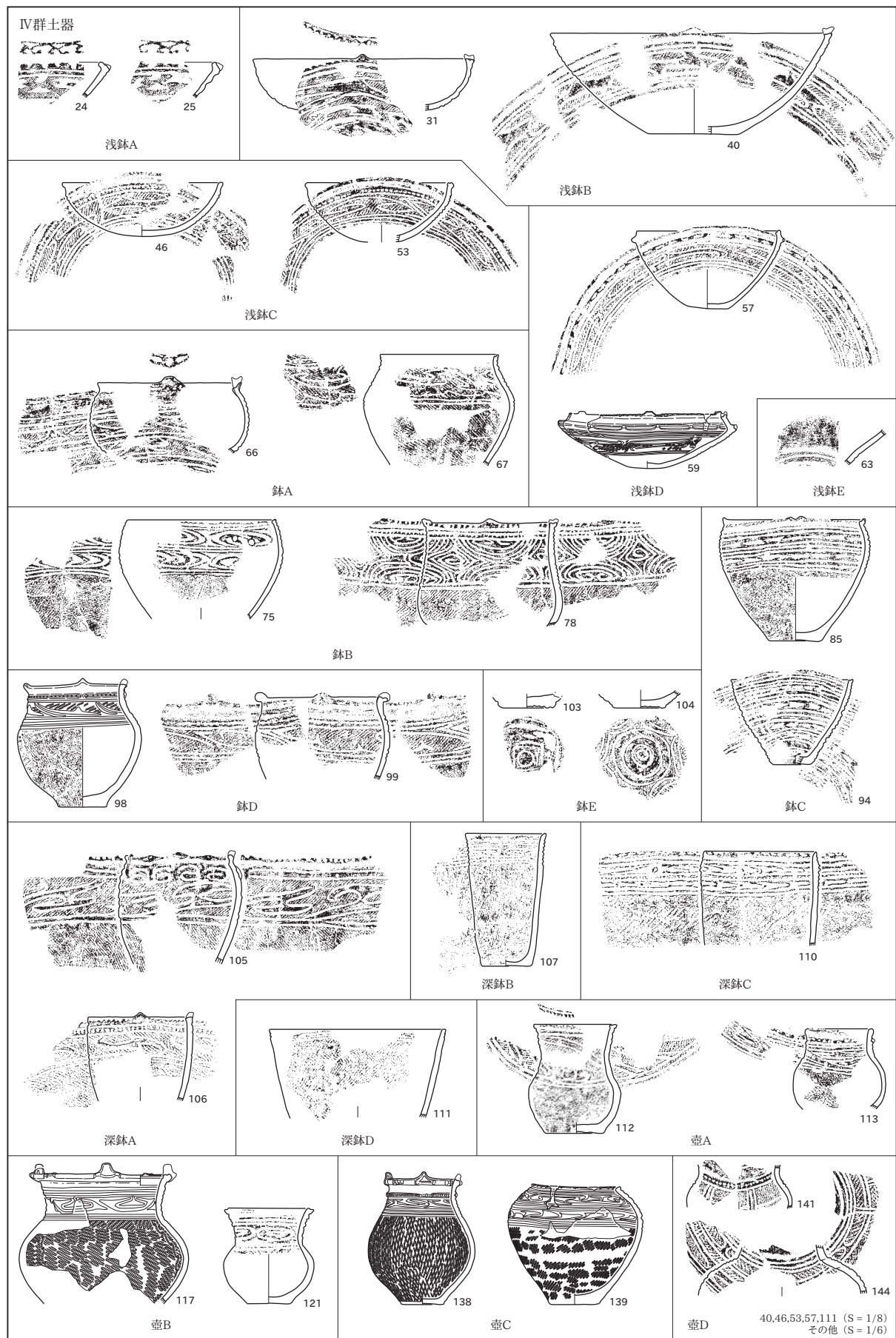
B：上下交互凸字文を施すもの。(154～162)

深鉢：上下交互凸字文を施すもの。(163・164)

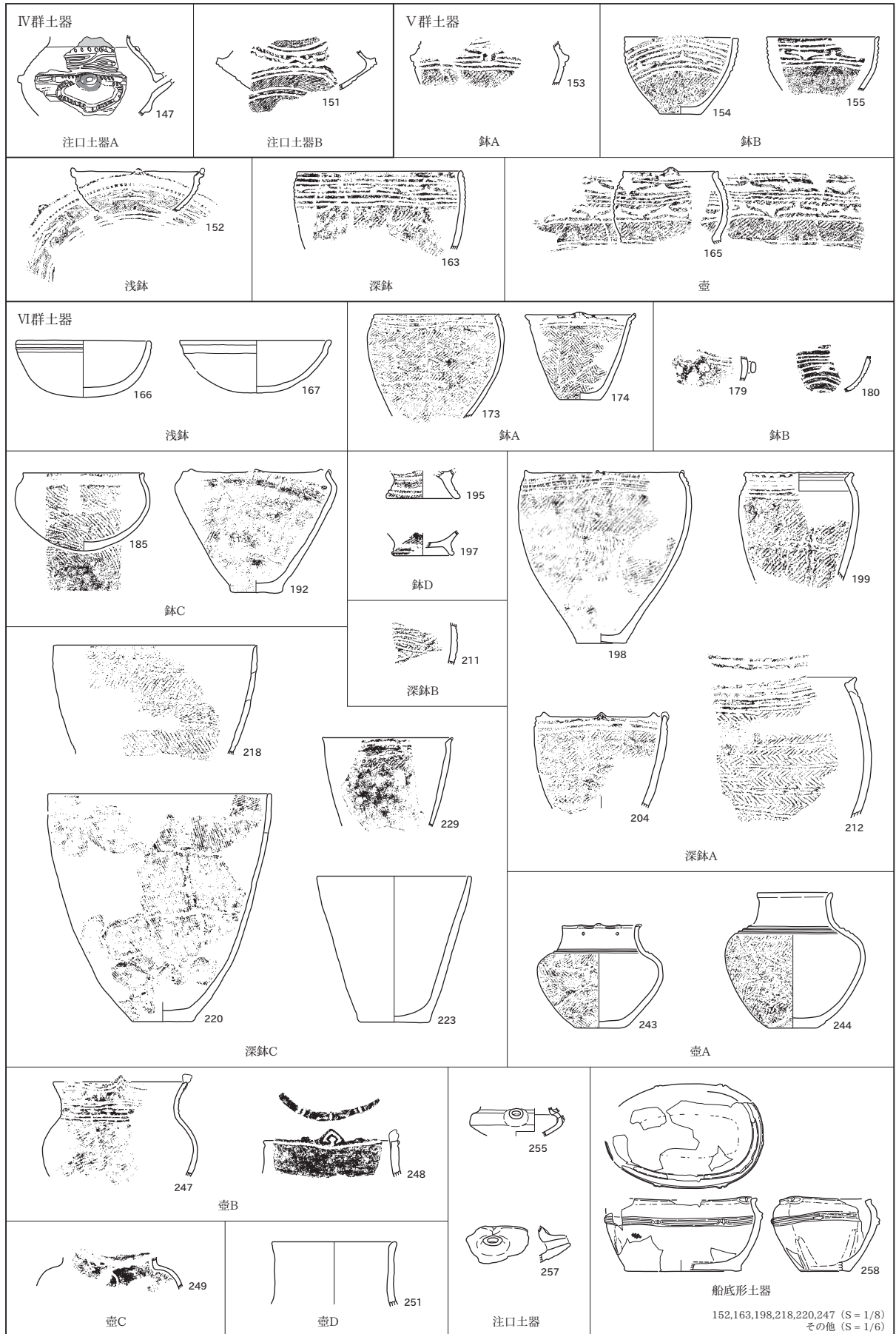
壺：上下交互凸字文を施すもの。(165)

**VI 群土器** (図版 98・103) 出土状況から晩期中葉～後葉に比定されるものの、装飾性が乏しく時期細別が困難なもの。確認できた器種は浅鉢・鉢・深鉢・壺・注口土器・船底形土器がある。

浅鉢：口縁部下に沈線文が巡り、体部は無文、ミガキを施すもの。(166・167)



第20図 道正遺跡縄文土器分類図1



第 21 図 道正遺跡縄文土器分類図 2

鉢（台付鉢）：文様で以下のように細別した。

A：口縁部下に平行沈線文が巡り、体部は無文もしくは地文を施すもの。（168～178）

B：体部に平行沈線文が巡るもの。（179・180）

C：無文もしくは地文（縄文、撚糸文、条痕文）を施すもの。（3・181～193）

D：台付鉢を一括した。脚部に平行沈線文が巡るものもある。（194～197）

深鉢：文様で以下のように細別した。

A：口縁部下に平行沈線文が巡り、体部に地文を施すもの。（198～209・212）

B：体部に沈線文を施すもの。（210・211）

C：無文もしくは地文（縄文、撚糸文、条痕文、押型文）を施すもの。異なる地文が組み合わさったものもある。（1・2・5・213～238）

壺：文様で以下のように細別した。

A：頸部に平行沈線文が巡るもの。（239～246）

B：口縁部に沈線が巡るもの。（247・248）

C：体部に沈線文を施すもの。（249）

D：外面が無文もしくは地文（縄文）を施すもの。（250～254）

注口土器：無文のものを一括した。（255～257）

船底形土器：1点確認した。（258）

### 3) 遺物各説

#### a 遺構出土土器（図版 89）

縄文時代の主要遺構として埋設土器 5 基がある。埋設土器本体はすべて図化し、本項で個別に記述した。なお古墳時代・古代の遺構から出土した縄文土器は遺構の時期に属していないため、包含層出土扱いとして次項に記載した。

#### SJ242（図版 89-1）

1 はVI群土器深鉢 C 類である。口縁部～体部が遺存しており、底部は欠損している。口縁は若干内傾しており、器面には結節縄文 LR を横方向に回転施文している。

#### SJ243（図版 89-2）

2 はVI群土器深鉢 C 類である。口縁部～体部が遺存しており、底部は欠損している。口縁は若干外傾し、内面は肥厚している。器面には縄文 LR を横方向に回転施文している。

#### SJ264（図版 89-3）

3 はVI群土器鉢 C 類と考えられる。口縁部は欠損しており、体部～底部が遺存している。器面には縄文等は施文されておらず、内外面にナデ調整が見られるのみである。

#### SJ265（図版 89-4）

4 はIV群土器壺 C 類である。完形で遺存している。口縁には四単位の突起が見られ、口縁部には沈線による三叉状入組文が横位展開する。体部には網目状撚糸文 R が縦方向に回転施文している。福島県郡山市一人子遺跡出土土器〔馬目・古川 1970〕に類例が見られる。

#### SJ414（図版 89-5）

5 はVI群土器深鉢 C 類である。口縁部は欠損しており、底面は打ち欠かれているものと考えられる。器面には網目状撚糸文 R が横方向に回転施文している。

#### b 包含層出土土器（図版 89～103）

遺物包含層から出土した縄文土器は先述した分類案に基づいて記述する。出土層位等の出土状況も考慮しながら、観察表で記されていない部分を中心に記載した。

## I 群土器 (図版 89-6 ~ 10)

6 は包含層 VIIa 層、7 ~ 10 は同 VIc 層からの出土であり、後出する II ~ VI 群土器との出土状況に明瞭な差異は認められなかった。7 は口縁に絡条体圧痕文が見られ、他の I 群土器と比べて古い様相を持つ。

8 は大型の波状口縁を呈しており、口縁下に半截竹菅による半隆起線文、爪形文が見られる。6・9・10 は体部破片で、半截竹菅による半隆起線文、爪形文が見られる。

## II 群土器 (図版 89-11 ~ 13)

11 は古墳時代の土坑 (SK400) 内に混入したもので、深鉢と考えられる。沈線による入組文内に貼瘤が付されている。後期後葉に比定される。12 は包含層 VIc 層から出土した土器の突起部である。

13 は古墳時代の土坑 (SK554) 内に混入したもので、鉢と考えられる。沈線による区画文内外に縄文 LR を様々な方向から充填している。後期中葉に位置付けられる可能性がある。

## III 群土器 (図版 89-14 ~ 18)

14・15 は包含層 VIIa 層、16 ~ 18 は同 VIc 層からの出土であり、後出する IV ~ VI 群土器との出土状況に明瞭な差異は認められなかった。

14 ~ 16 は口縁部破片で、いずれも小波状縁となる。17・18 は体部破片で、17 は外面に丁寧なミガキが施される。いずれも羊歯状文が施されており、大洞 BC 式に比定される。

## IV 群土器 (図版 89 ~ 98-19 ~ 151)

19 ~ 30 は浅鉢 A 類である。19 ~ 28 は口縁部破片で、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する器形を呈する。口縁端部には立体的な装飾が、体部には立体的な雲形文がそれぞれ施されている。いずれも大洞 C1 式に比定される。

31 ~ 45 は浅鉢 B 類である。いずれも体部から口縁部にかけて明瞭な屈曲点を持たず曲線的に立ち上がる器形を呈する。31・32 は口縁部に浅鉢 A 類に連なる 2 ~ 3 条の沈線が巡っているが、器形・雲形文の変容具合から大洞 C2 式古段階に比定される。これに対して 38・40 ~ 43 は頸部に無文帯を形成しており、体部文様帯は 31・32 と比べて狭小化している。大洞 C2 式中段階に位置付けられる。45 の体部文様帯は連弧文が上下二段、横位に展開している。後出する上野原式に類似する文様構成だが、頸部の無文帯が 38 などと共通していることから、この段階に位置づけられるものと考えられる。

46 ~ 55 は浅鉢 C 類である。いずれも体部から口縁部にかけて明瞭な屈曲点を持たず曲線的に立ち上がる器形を呈する。46 ~ 54 の体部文様帯は横位 C 字状文等の単位文様が横位に展開しており、浅鉢 B 類のそれと比べて簡素化している。55 の体部は無文で、全体にミガキが施される。天地逆にして蓋として使用された可能性もある。

56 ~ 62 は浅鉢 D 類で、口縁部下に上野原式と共通する眼鏡状隆帯文が巡る。56・57・62 は体部から口縁部にかけて明瞭な屈曲点を持たず曲線的に立ち上がる器形を、58・59 は口縁部下で屈曲し口縁が内傾する器形をそれぞれ呈する。56 ~ 61 の体部文様帯は横位 C 字状文等の単位文様が横位に展開しており、浅鉢 B 類のそれと比べて簡素化している。62 の体部は無文である。

63 は浅鉢 E 類である。内外面にミガキ、外面に赤彩が施され、体部の平行沈線間に縄文を充填し、口縁部は無文と考えられる。北陸系中屋式の可能性がある。

64 ~ 73 は鉢 A 類である。64・66・67・71 は体部が張り出して内傾し、口縁部上位が屈曲して外傾する。65・68・69 は口縁部が内傾する。70 は体部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる器形を呈する。64 は台付鉢で、口縁に一对の大型把手が付くものと考えられる。大洞 C2 式古段階に比定される。69 ~ 71 の口縁部には横位に巡る沈線に沿って刺突が並ぶ。

74 ~ 79 は鉢 B 類である。75 は口縁部が内傾する。76・77 は体部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる。78 は体部が張り出して内傾し、口縁部上位が屈曲して外傾する器形を呈する。78 の口縁部には横位に巡る沈線に沿って刺突が並ぶ。79 は台付鉢の脚部である。

80～97は鉢C類である。80・81は口縁部が内傾する。82～89は体部が張り出して内傾し、口縁部上位が屈曲して外傾する。94は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形を呈する。三叉状入組文・沈線文は数条の平行沈線間に施され、口縁部から体部上半にかけて横位に展開するものが多いが、94は口縁部から体部下半にまで広がっている。体部下半は地文のみを施すものが多いが、93は体部下半に円形の透かし彫りを施している。

98～101は鉢D類で、口縁部に巡る沈線下に刺突が並ぶ「溝底の刺痕」として69～71・78とは区別して扱った。いずれも体部が張り出して内傾し、口縁部上位が屈曲して外傾する器形を呈する。98～100の口縁部には横位C字状文等の単位文様が横位に展開しており、鉢A類のそれと比べて簡素化している。101の体部には縄文LRのみ施される。

102～104は鉢E類である。いずれも底部破片で、102・104の底面には沈線による同心円文、103は円文と方形文が描かれる。104の体部下半には沈線による弧状文が巡る。

105・106は深鉢A類である。105は体部上位から口縁部にかけて内傾した後に口縁部が緩やかに外形する。106は体部から口縁部にかけてほぼ直立する器形を呈する。

107・108は深鉢B類である。107は体部から口縁部にかけてほぼ直立する器形を呈するいわゆる「筒形土器」で、口縁部は横位C字状文を上下に連結することで不規則な工字状を呈している。

109・110は深鉢C類である。109は体部上位から口縁部にかけて内傾した後に口縁部が緩やかに外傾する。110は体部から口縁部にかけてほぼ直立する器形を呈する。

111は深鉢D類である。体部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形を呈する。口縁部の刺突列は2条の沈線間に施されていることから、いわゆる「溝底の刺痕」とは区別した。

112～116は壺A類である。112は口縁部が緩やかに外傾する。113は口縁部が直立に立ち上がる器形を呈する。113は口縁直下に無文帯を形成し、その下の微隆起線上に刺突が並ぶ。114の体部には羽状縄文が縦位に施文される。

117～127は壺B類で、口縁部に横位C字状文・楕円文等の単位文様が横位に展開しており、壺A類のそれと比べて簡素化している。117・121・122・124は口縁部が緩やかに外傾する。120・127は口縁部が直立に立ち上がる器形を呈する。117は横位C字状文の内部に三角連携文が形成される。大洞C2式新段階に比定される。119は横位C字状文を上下に連結することで不規則な工字状を呈している。

128～140は壺C類である。128・130は口縁部が直立に立ち上がる。131・134・136～138は口縁部が緩やかに外傾する。139・140は口縁が内傾し、口縁部上端でくの字に屈曲する器形をそれぞれ呈する。137・138は4と同じく一人子遺跡出土土器に類例が見られるもので、口縁部に溝底の刺痕が巡る。139は三叉状入組文が崩れ、一部不規則な上下交互凸字文を形成する箇所が見られる。大洞C2式新段階に比定される。

141～146は壺D類である。141～144は横位に巡る平行沈線文が縦位の平行沈線文で区切られているもので、東北系と考えられる。146は平行沈線文間に「ト」字状文が描かれている。北信系佐野式もしくは北陸系中屋式の可能性がある。

147は注口土器A類である。口縁部に三叉状入組文が施される。注口は欠損しており、注口跡には接着のためのアスファルトが付着している。

148～151は注口土器B類である。いずれも注口部は残存していないものの、器形等の特徴から注口土器と判断した。

#### V群土器 (図版 98-152～165)

152は浅鉢である。体部の三角文は上下二段に描かれており、規則的に横位展開する。三角文の内部は磨消されており無文となる。

153は鉢A類である。体部上位から口縁部にかけて内傾する器形を呈しており、口縁部下に位置する突起を中心に沈線による工字状文が描かれる。



154～162は鉢B類である。154～156は体部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる。157～160は体部が張り出して内傾し、口縁部上位が屈曲して外傾する器形を呈する。158の上下交互凸字文は個々の形状が不規則で、160・161は楕円文内に刺突が並ぶ。いずれも晩期中葉末～後葉に位置付けられる。

163～164は深鉢である。両者は同一個体で、口縁部の平行沈線文内に上下交互凸字文が横位展開する。体部は縄文LRを横位施文する。

165は壺である。口縁部の平行沈線文内に上下交互凸字文が二段横位展開する。上下交互凸字文は個々の形状が不規則である。晩期中葉末～後葉に位置付けられる。

#### VI群土器 (図版 98～103-166～258)

166・167は浅鉢である。口縁部に166は2条、167は1条の浅く幅広の沈線が巡る。いずれも体部は無文で、全体にミガキが施される。

168～178は鉢A類である。168～173は体部が張り出して内傾し、口縁部上位が屈曲して外傾する。174は体部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる器形を呈する。170・171は口縁端部に刻みを入れることで小波状を呈する。

179・180は鉢B類である。179は体部に橋状把手が付き、その周りを2条の平行沈線が巡る。180は体部下半に数条の平行沈線が巡る。

181～193は鉢C類である。181～185は体部が張り出して内傾し、口縁部上位が屈曲して外傾する。186・187は口縁部が内傾する。189～191・193は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。192は体部上位が屈曲して口縁部が内傾する器形を呈する。181～185・192は口縁部に無文帯を形成する。体部は縄文のみ施文するものが多いが、191は無文、193は条痕文が施される。

194～197は鉢D類である。いずれも台付鉢の脚部で194は体部下位、195・197は脚部に沈線が巡る。

198～209・212は深鉢A類である。198～201・212は体部が張り出して内傾し、口縁部上位が屈曲して外傾する。202～205は口縁部が内傾もしくは直立する。206・207は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。199・201・202・205は口縁端部に刻みを入れることで小波状を呈する。212は体部に矢羽状の押型文を横位に施す。

210・211は深鉢B類である。210は底部付近に1条の沈線が巡る。211は縄文地に沈線文を描き、文様は横位に展開する。

213～238は深鉢C類である。214～220は口縁部が内傾もしくは直立する。223～225は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。体部の地文は異なる二種類を組み合わせたものが目立ち、213が押型文と縄文、218が附加条と結節縄文、220・222・232・235が縄文と撚糸文、226が縄文と条痕文をそれぞれ施文している。219は口縁端部に刻み目が巡る。228は口縁部が肥厚する複合口縁を呈する。229・230は口縁部内側が肥厚する。

239～246は壺A類である。いずれも口縁～頸部と体部を2及び3条の平行沈線で区画している。口縁端部は若干肥厚し沈線や突起等が付され、頸部は無文である。241～244の体部は縄文を施文しているが、241・244は底部付近に沈線による連弧文が巡る。

247・248は壺B類である。口縁端部に突起が付き、口縁部に沈線が巡る。247の口縁～頸部と体部は3条の平行沈線が2列巡ることで区画されており、平行沈線間には短めの沈線が横位に並ぶ。

249は壺C類である。体部上半に沈線による曲線文が描かれており、全体にミガキが施されている。

250～254は壺D類である。250～252の口縁端部は若干肥厚し、250は突起が付され、252は沈線が巡る。口縁～頸部は無文で、250の体部には羽状縄文が施される。253・254は体部破片で、253は縄文LR、254は羽状縄文が施される。

255～257は注口土器である。いずれも注口が残存している。255はソロバン玉形の器形を呈し、体部は無文である。258は船底形土器である。上面が楕円形、底面が長方形を呈する。器形は体部が張り出して内傾し、

口縁部上位が屈曲して外傾する。体部と口縁部の間には1条の隆帯が巡る。船底形土器は新潟県五泉市矢津遺跡でも出土例が認められる〔荒川2009〕。

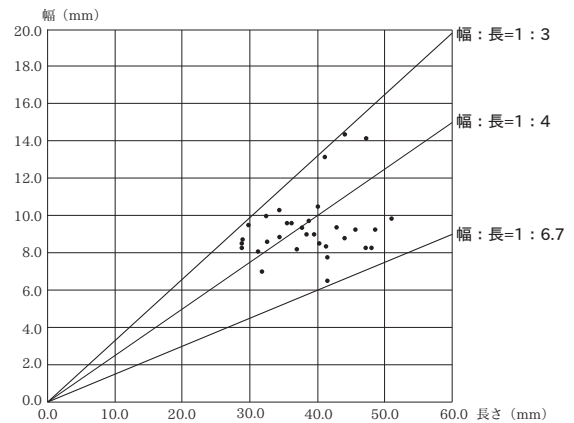
#### D 土製品 (図版104 写真図版107 別表6)

土製品には土錘、円筒形土製品、髪飾り状土製品、粘土塊、その他がある。

主体を占めるのは長さ28.9～50.9mm、幅6.5～14.4mmで長/副の値が3.1～6.4程度の管状土錘であり、これらを細型と呼ぶことにする。細型管状土錘は重量で合計292.7g、破片数で215点ある。完形に近いと判断されるものの個別の重量では1.1～7.9gの幅がある。遺構ではSK281・284・370・400、SD19から出土しているが、SK284から31.3g、36点(破片含む)出土したのが最もまとまった例で、他は4g以下である。ほぼ全体がわかるSK281の1点(1)とSK284の3点(2～4)を図示した。残り大部分はD-A列以西のV層を主とする包含層出土で、2C-1I7と周辺、SK284・281の南側の2C-2J～2D-2Aにかけてややまとまる傾向がある。5～32の28点を図示した。古代の遺構からのみ出土しており、古墳時代の遺構出土品はないことや、質感からは大部分が古代に製作されたものと推定する。

細型としたなかで長さとの幅の相関をみると、幅が11mmより小さいA(1～29)と13mmを超えるB(30～32)とに分かれる。Aが多く長さのばらつきも大きい、そのなかでも長/幅が4.3～6.4のもの(1類)は長さの変異幅が広いが、長/幅が3.1～4.0のもの(2類)は長さ28.9～40.0mmにまとまる傾向がある。Bは長/幅の値が3.1～3.3にまとまり、重量5.4～7.9g、孔径4.2～4.5mmでAより明らかに重く、孔が大きい。

細型でない管状土錘は3点のみの出土でさらに少ない。33～35の3点はそれぞれ形状・サイズも異なっている。



第22図 細型管状土錘の法量分布

36は重量感があり、下端は平坦で上端が尖る形状のもので横断面は円形になるものと推定する。尖った上端から中心にかけて穿孔のあることが割れ口で観察できるが、下端まで達していたかどうかは不明である。外面の中位には浅い沈線状の溝が巡る。使用法は不明だが錘の一種と考える。VIIa層出土であり、胎土や焼成の特徴から縄文時代のものとの可能性が高いと考える。1点のみの出土である。

円筒形土製品としたのは図示した37の1点があるのみである。分厚い作りで外面は縦～斜め方向のナデ、内面には粘土紐の継ぎ目が残る。粘土紐の積み手方向から幅広く平坦な面が下になると考えて図示したが、体部中位に段差があり、上側が内径・外径ともに大きい形になる。二次的に被熱しているとみられ、大きさからは支脚と考えられる。古代の製品であろう。類似のものとして体部に穿孔するものが知られているが、本例に穿孔があったかどうかは不明である。

38は髪飾り状土製品としたが、精緻な彫刻が施された特異なもので、東側調査区の北端近くのVIIa層から出土した。ほぼ完形品である。山なりの頂部と端部をまた小さく山なりにして頂点に刻みを入れ、細い多重沈線できりまくように文様が施される。左右の端部は2か所を突出させて足状に作る。沈線の底にわずかに赤彩が残り、片側に炭化物が広く付着している。

36と38は縄文時代の遺物と考えられ、道正遺跡で出土した縄文土器はほとんど晩期のものであることから、それらに伴うものであろう。

39は全体形が不明だが、周縁に向かって薄くなる円形か楕円形のもの的一部分であろうか。

E 石器・石製品 (図版 105～119、写真図版 60～62・108～115、別表 7)

発掘調査で得られた石器・石製品 (以下、石器類とする) は 30 箱 (内寸 54.5×33.6×10.0cm) である。このほか搬入礫が 116.019kg (2,343 点) である。遺跡は埋没した新潟砂丘 I-2 (亀田砂丘) に立地するため、発掘調査で出土した石器類はもちろんのこと、使用や加工の痕跡が認められない自然礫も何らかの意図をもって遺跡内に搬入したものである。したがって、発掘調査で得られた礫はすべて洗浄し、石器 (器種石器・剥片類・石核等)・石製品・搬入礫に選別した。搬入礫は出土点数・重量と肉眼による被熱の痕跡を記録した。

搬入礫も含め石器類は一部古墳時代以降のものを除き、多くは縄文時代に所属する。土器の所属時期からすればほぼ縄文時代晩期中葉の所産である。したがって、資料の提示や記述において石器類はすべて搬入の消費遺跡で、しかも時期が晩期中葉に限定される遺跡の石器類の様相を明らかにすることを目的に以下の記述をすすめる。

1) 資料の提示方法

資料の提示は実測図・写真・観察表で行い、本文で分析を加えた。石器類は土器と異なり、細かな時期を反映しにくい。道正遺跡の場合は既述のように一部を除きほぼ縄文時代晩期中葉に所属する。また遺構の検出がむずかしいため、包含層出土になったものがほとんどである。したがって、資料の掲載にあたっては遺構の内外を問わず、器種・分類の好資料と思われるものを中心に図化・掲載した。石器類の出土数・図化数量・図化率は第 8 表のとおり、全体の図化数量は 161 点、図化率は 14.2% である。これらの掲載遺物にはすべて観察表を付けた。個々の基本的な諸属性は、この観察表に委ねた。

第 8 表 石器類の図化数量と図化率

器種名	石器															石器小計	石製品							石器小計	合計			
	石 鎌	石 鎌 未 成 品	尖 頭 器	石 錐	石 錐 未 成 品	削 器	の 両 極 あ る 剥 離 痕 跡	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	磨 製 石 斧 未 成 品	石 錘	多 面 体 敲 石	磨 石 類	砥 石	台 石 類		剥 片 類	石 核	を 鏡 面 状 の 光 沢 を 有 す る 石 器	軽 石 製 品	玉 作 資 料	石 棒 類	石 冠			独 鈷 石	玉 類 (縄文時代)	管 玉 (古墳時代)
出土数 (点)	47	16	1	11	1	23	67	1	15	5	3	4	113	43	64	614	42	4	35	1109	1	11	1	1	6	2	22	1131
掲載数 (点)	18	6	1	6	1	11	8	1	6	3	3	3	18	10	11	12	7	4	15	144	1	6	1	1	6	2	17	161
図化率 (%)	38.3	37.5	100	55.0	100	47.8	11.9	100	40.0	60.0	100	75.0	15.9	23.3	17.2	2.0	16.7	100	42.9	13.0	100	54.5	100	100	100	100	77.3	14.2

a 実測図の図化方法

図化作業は主に剥離痕の残る剥片石器・石核石器は実測業務会社に委託した。残りの磨製石器や礫石器は写真実測と簡易実測器を用い実測した。実測方法は平面図が写真実測と手取り実測、断面実測は真弧やデバイダー等を用いた手取り実測である。トレースはすべてデジタルトレースである。さらに実測図を補助するためにスクリーントーンを貼付した。スクリーントーンの凡例は、それぞれの図版に示した。

縮尺率 第 9 表のとおり砥石以外は、器種ごとに統一した。また図面図版にはスケールバーを付け、縮尺を記入した。写真図版は縮尺を記入した。

第 9 表 石器類の縮尺率

器種名	石器															石製品										
	石 鎌	石 鎌 未 成 品	尖 頭 器	石 錐	石 錐 未 成 品	削 器	の 両 極 あ る 剥 離 痕 跡	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	磨 製 石 斧 未 成 品	石 錘	多 面 体 敲 石	磨 石 類	砥 石	台 石 類	剥 片 類	石 核	を 鏡 面 状 の 光 沢 を 有 す る 石 器	軽 石 製 品	玉 作 資 料	石 棒 類	石 冠	独 鈷 石	玉 類 (縄文時代)	管 玉 (古墳時代)	異 形 石 製 品
縮尺率	3/4	3/4	2/3	3/4	3/4	2/3	2/3	1/3	1/3	1/3	1/3	1/2	1/3	1/3	1/4	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/3	1/3	1/1	1/1	1/1

b 写 真

実測業務会社に委託した石器の写真データはそのまま写真図版のデータとして使用した。これ以外は新たにデジタルカメラで撮影したデータを編集し、写真図版とした。個々の石器は最低でも正裏面の 2 面以上の掲載に努めたが、礫石器の一部や石棒類の破片には 1 面掲載のものもある。なお写真図版の縮尺は、図面図版と同じ

である。

c 観察表の記載

石器類の属性や諸特徴は観察表に記載した。主な記載項目はNo.、出土地点（グリッド・遺構名・層位）、分類、大きさ（長さ・幅・厚さ・重さ）、石材、遺存状態、備考などである。このほか各器種固有の観察項目を設定した。

No. 掲載 No. である。図面図版、写真図版、観察表の No. は一致する。

出土地点（グリッド・遺構名・層位） 包含層出土のものはグリッドと出土基本層序を、遺構出土のものは遺構名とグリッド、出土層位を記入した。

分 類 出土数の比較的多い器種は、傾向を知るためにそれぞれの属性や諸特徴をもとに細分類した。

大きさ（長さ・幅・厚さ・重さ） それぞれの計測値である。破損品には括弧付けで現存値を記入した。

石 材 すべて他地域からの搬入品であり、石材名を記入した。なお鉄石英は石材名の後に黄色系は（黄）を、赤色系は（赤）を記入した。頁岩系の石材は産地を明らかにするため、光沢のない頁岩、珪質化し光沢のある珪質頁岩、さらに珪質化した半透明頁岩に分けた。凝灰岩のうち緑色系のものは緑色凝灰岩とした。メノウ、玉髄はメノウに統一した。

遺存状態 完形品、略完形品、破損品、破片を想定し記入したが、破損部位を記入したものもある。

備 考 観察項目にないもので、個々の石器類の諸特徴が必要と思われる事柄を記入した。

その他 主な石器類の並べ方及び部位名称と計測基準は第23図に示した。

2) 石 器 類

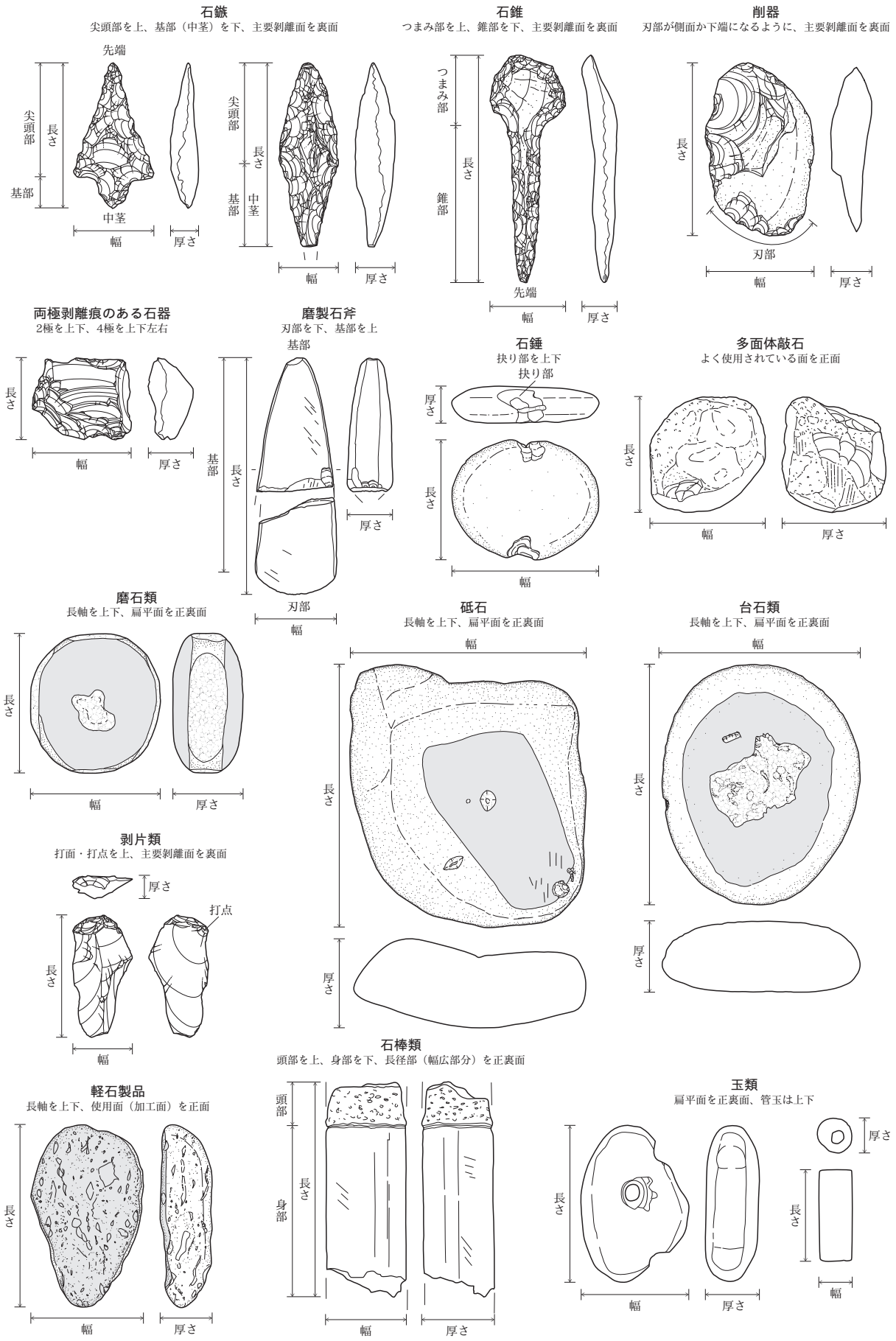
出土した石器類は第10表のとおり、1,131点である。このうち遺構内出土49点、包含層出土1,082点で圧倒的に包含層出土が多い。この要因は既述のように中層・上層遺構による下層遺構の破壊や下層遺構の認識の難しさがあげられる。したがって、遺構内出土の石器類のほとんどが、古墳時代や平安時代の遺構からの出土でほぼ占められ、縄文時代と認識した遺構からの石器類はわずかSK404で2点、SK405で1点のみである。

石器類の出土分布傾向は図版105のように1C-10H～10J、2C-1H～1J・2H～2Jに最も多く見られる。この部分は砂丘西の緩斜面から斜面に当たり土器埋設遺構もあることから墓域ないしは廃棄域と推定している。次いで比較的多く見られる区域は砂丘頂上部平坦地から東の緩斜面の1D-9B・10B、2D-1B・1C・2C、1D-9D、2D-1D・2Dである。1D-9B・10B、2D-1B・1C・2Cは遺構が少ないが砂丘頂上部平坦地で居住域の可能性も考えられる。また出土分布傾向からいずれも区域も北への遺跡の広がりが見られず、南側の調査区外に遺跡が広がるものと推測している。

第10表を見ると縄文時代の集落から出土する器種をほぼ網羅し、石材環境がまったく乏しい遺跡にもかかわらず比較的多くの石器類及び石材が出土している。この中で石鏃・削器・両極剥離痕のある石器・磨石類・台石類が多く出土し、石錐・磨製石斧が一定量認められる。砥石・軽石製品は所属時期の検討が必要であるが縄文時代に所属するものが一定量あるものと推定される。石製品は出土数こそ少ないものの、多器種の出土が見られる。以下、器種ごとに分類・出土分布状況・大きさ・石材などの諸属性を検討し、縄文時代晩期中葉に所属する石器類の特徴を明らかにしたい。

第10表 石器類出土数表

器種名	石 器																	石製品小計	石製品							合計			
	石鏃	石鏃未成品	尖頭器	石錐	石錐未成品	削器	の両極剥離痕	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	石錘	多面体敲石	磨石類	砥石	台石類	剥片類	石核		鏡面状の光沢を有する石器	軽石製品	玉作資料	石棒	石冠	独鈷石	玉類(縄文時代)		管玉(古墳時代)	異形石製品	石製品小計
遺構出土(点)	6					1	3				1	2	5		23	1		2	44		1			3	1		5	49	
包含層出土(点)	41	16	1	11	1	22	64	1	15	5	3	3	111	38	64	591	41	4	33	1068	1	10	1	1	2	1	17	1082	
出土数(点)	47	16	1	11	1	23	67	1	15	5	3	4	113	43	64	614	42	4	35	1109	1	11	1	1	5	2	22	1131	
比率(%)	4.2	1.4	0.1	1.0	0.1	2.0	5.9	0.1	1.3	0.4	0.3	0.4	10.0	3.8	5.7	54.3	3.7	0.4	3.1	98.0	0.1	1.0	0.1	0.1	0.4	0.2	0.1	2.0	100.0



第 23 図 主な石器類の並べ方及び部位の名称と計測基準（個別石器の一部で並べ方が異なるものがある）

a 石 鏃 (図版 106-1 ~ 18)

尖頭状の狩猟具の一つで尖頭部・基部(中茎)からなり、左右がほぼ対称で小型で扁平な石器を石鏃とした。後述する尖頭器は1点のみの出土であり、大きさにおいて大きく異なる。また石鏃失敗品とは二次調整の進行状況、平面形(左右の対称性)の状況、大きさなどから区別される。石鏃として抽出したものは47点で、18点を掲載した。

分類 第24図参照。分類不可を除いた40点を分類の対象とした。すべて基部(中茎)を持つものである。(鈴木1981)を参考に、基部の形状で分類した。

A類(1) 凹基有茎鏃。基部が凹状で中茎のあるもの。

B類(2~5) 平基有茎鏃。基部が平らで中茎のあるもの。

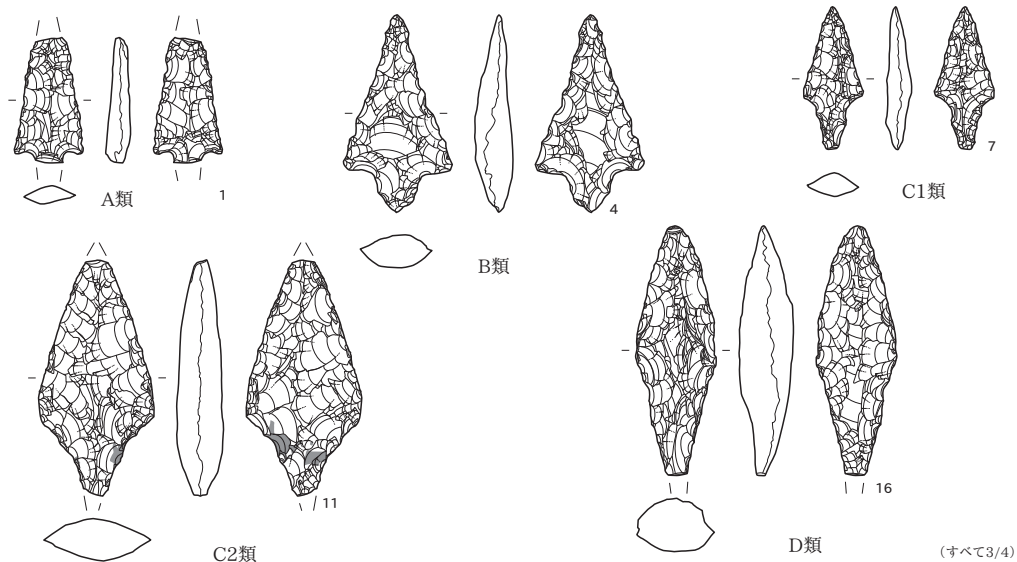
C類(6~15) 凸基有茎鏃。基部が突出し中茎のあるもの。(加藤2014)を参考にさらに2細分した。

C1類(6~10) 尖頭部と基部の境が角張るもの。

C2類(11~15) 尖頭部と基部の境が丸みを持つもの。

D類(16~18) 尖基族。基部が尖るもの。

なお、B類にはC類との区別が判然としないものが一部認められる。また、C類とD類の違いは、C類の基部は内湾状にすぼまるのに対し、D類は直線状ないしは外湾状にすぼまるところに違いが見られる。



第24図 石鏃分類図

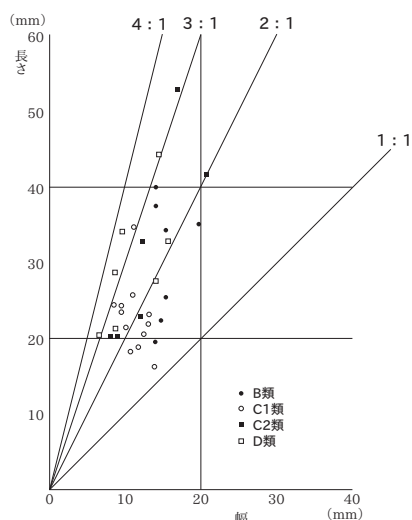
分類別出土数と出土分布 第11表のように遺構内6点、包含層41点であるが、縄文時代の遺構は皆無であり古墳時代や平安時代の遺構への流れ込みである。石器類の出土分布と同じく砂丘南西部の緩斜面から斜面の2C-1I・1J・2Iに多く出土し、次いで砂丘頂上部平坦地の2D-1A~1Cからの出土である。分類別の出土分布の片寄りは見られない。

長さ と 幅 第25図参照。ほぼ完形品に近い計測ができた32点を対象とした。長幅比1:1~4:1にすべて収まる。長さ18~35mm、幅8~16mmの範囲に多く分布する。長さ28mm以下の小型品は長幅比2:1前後に集中傾向が見られ、長さ30mm以上は長幅比2:1~4:1に収まる傾向が見られる。分類別ではC1類が18~26mm、幅8~14mmの小型品に多く見られる。ほかは小型品から大型品まで集中分布は見られず散漫に分布する。

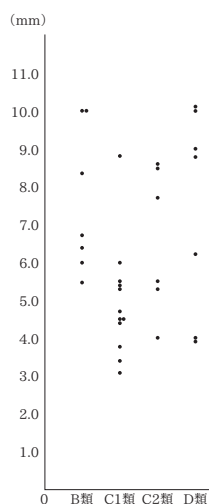
厚さ と 重さ 第26・27図参照。厚さは3.1~10.1mmの範囲に分布するが、3.1~6.7mmと7.7~10.1mmに分かれる。分類別にはC1類が長幅分布と同じように小型品を反映し薄手の傾向にある。ほかは薄手から厚

第11表 石鏃分類別出土数

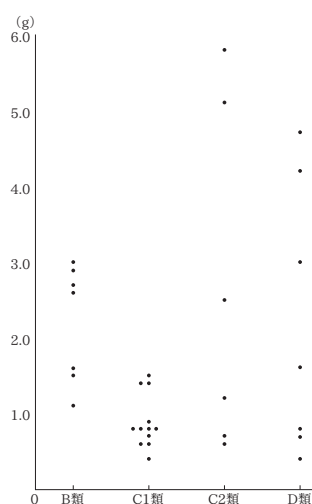
	遺構内	包含層	合計(点)
A類	1		1
B類		8	8
C1類	2	14	16
C2類	2	6	8
D類		7	7
分類不可	1	6	7
合計(点)	6	41	47



第 25 図 石鎌長幅分布図



第 26 図 石鎌厚さ分布図



第 27 図 石鎌重さ分布図

手まで散漫に分布する。重さは0.4～5.8gの範囲に収まるが、0.4～1.6gの小型品、2.5～3.0gの大型品、4.2～5.8gの特大型品に分かれる。特大型品は石鎌としての飛ばす機能でなく、尖頭器（刺突具）のように刺突の機能を想定している。

分類別ではC1類が小型品を反映し軽く、ほかは軽いものから重いものまで散漫に分布する。

石材 第12表参照。すべて搬入石材で半透明頁岩が15点（31.9%）、次いでメノウ9点（19.1%）、珪質頁岩8点（17.0%）である。いずれも硬質で小型剥片石器に用いられる石材である。半透明頁岩は関川村上関の荒川左岸の獅子舞岩で唯一露頭が見られ〔秦2001〕、同村湯沢の堂ノ前遺跡をはじめとする周辺の遺跡で小型剥片石器に多用される石材〔関2004〕である。本遺跡の半透明頁岩も獅子舞岩及び荒川方面からの搬入品と推定している。

第 12 表 石鎌石材表

	頁岩	珪質頁岩	半透明頁岩	鉄石英(赤)	鉄石英(黄)	メノウ	緑色凝灰岩	黒曜石	流紋岩	合計(点)
A類		1								1
B類		2	2		1	3				8
C1類	1	2	5	1	1	1	1	2	2	16
C2類		1	3	1		1			2	8
D類	1	2	1		1	2				7
分類不可			4		1	2				7
合計(点)	2	8	15	2	4	9	1	2	4	47

遺存状態 第13表参照。47点のうち完形品20点、破損品27点である。破損品の内訳は先端・中茎欠11点、中茎欠8点、先端欠4点、尖頭部先端破片4点である。当然のことながら尖頭部先端や基部中茎など折れやすい部分が破損している。D類(尖基鎌)は基部がしっかりしているせいかすべて完形であった。また尖頭部先端が破損している15点のうち、12を含む7点には使用の痕跡と推定できる衝撃剝離が認められている。

第 13 表 石鎌遺存状態表

	完形	尖頭部破片	先端欠	中茎欠	先端・中茎欠	合計(点)
A類					1	1
B類	2			5	1	8
C1類	8		1	1	6	16
C2類	2		2	2	2	8
D類	7					7
分類不可	1	4	1		1	7
合計(点)	20	4	4	8	11	47

その他 1・2・9～11・18を含む17点でアスファルトの付着が認められた。付着部を見ると基部の装着と推定できる。アスファルトは秋葉区鎌倉新田には湧出地点があり、近くに存在する大沢谷内遺跡（晩期中葉）ではアスファルトの精製作業を示唆する遺物が出土している〔伊比2012a〕ことから秋葉区産のアスファルトを搬入したものと推定している。

個別遺物の説明 2・3は長身で細身のB類としたが基部形状は片側が平基、片側は凸基であり、分類にそぐわないが片側の平基を優先しB類とした。5は短身で幅広のB類であり、2・3と同じように基部形状が左右異なるが平基を優先しB類とした。9・10は小型品であり、尖頭部が短く基部が長い類例の少ない形状である。11・12は大型品で、重さは5.8・5.1gで飛び道具というよりも尖頭器（刺突具）として用いられたものと推定

される。なお 11 は基部にアスファルトの付着、12 は尖頭部先端に衝撃剥離が認められることから使用が明らかである。16 は大型品で厚さも 10.1mm を測り、重さも 4.7g を量る。11・12 と同じように尖頭器（刺突具）として用いたものと推定している。18 は素材の形状を生かした粗雑な作りの石器である。尖頭部の作出とアスファルトの付着が見られることから石鏃とした。

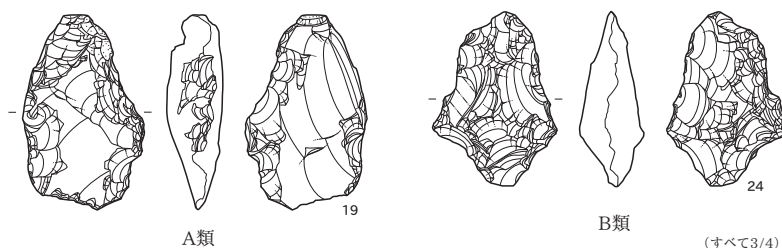
**b 石鏃未成品**（図版 106-19～24）

小型の剥片に押圧剥離の二次調整を施した定型石器以外を石鏃未成品とした。石鏃完成品と比べた場合、素材・大きさ・二次調整などから石鏃の製作を意図したが、何らかの理由により断念（失敗）した〔阿部 2000〕と考えられるものである。したがって、石鏃失敗品とすべきかもしれないが、これまで長く使用されてきた石鏃未成品とした。不定形石器・削器などとは、大きさ・厚さ・二次調整・使用痕の有無などで区別した。総数 16 点を抽出した。

**分類** 第 28 図参照。二次調整の進行程度で細分類した。

**A 類**（19～21）素材の一侧縁ないしは二側縁に二次調整が施されたもの。

**B 類**（22～24）素材のほぼ全周に粗い二次調整が施されたもの。

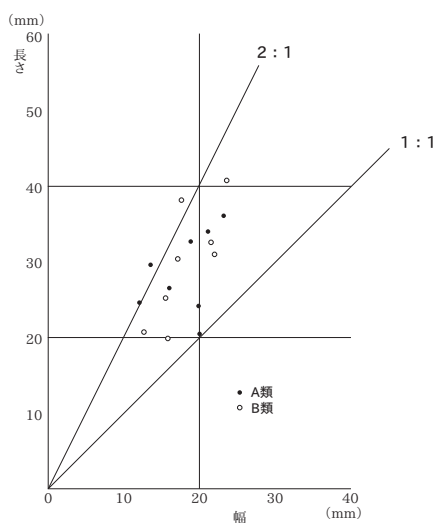


第 28 図 石鏃未成品分類図

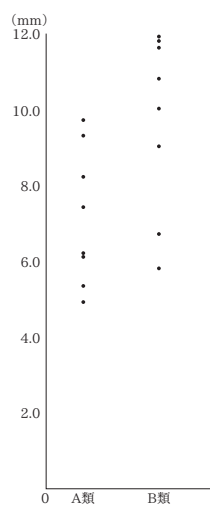
B 類は A 類に比べ二次調整が進行し、平面形は石鏃完成品に近い。しかし厚さはいずれも石鏃完成品に比べ厚い。

**分類別出土数と出土分布** 16 点のうち A 類 8 点、B 類 8 点である。すべて包含層出土であり、遺構に伴うものは皆無である。出土層位は VIa 層 4 点、VIc 層 8 点、VIIa 層 4 点で、縄文時代晩期の遺物包含層の VIc～VIIa 層からの出土が多い。出土分布は 1 点を除き、砂丘西部の緩斜面～斜面にかけての 2C-1H・1I・2I・2J に分布する。したがって、不要となった石鏃未成品はこの区域に廃棄されたものと推定できる。

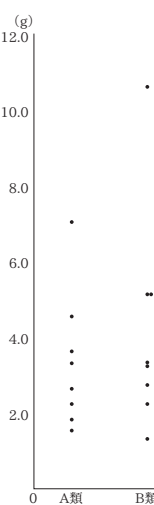
**大きさ・重さ** 第 29・30・31 図参照。長さ 20.0～40.7mm、幅 12.4～23.3mm の範囲に、長幅比 1:1～2:1 前後の範囲に収まる。分類別では大きな違いが認められないが、B 類が 1.5:1～2:1 にやや集中傾向が見られ A 類に比べ細身の傾向が見られる。第 25 図の石鏃完成品と比べると著しく幅広で、全体的に大型の傾向が見られる。厚さは A 類が 4.9～9.7mm、B 類が 5.8～11.9mm の範囲に収まる。B 類が A 類より厚い傾向



第 29 図 石鏃未成品長幅分布図



第 30 図 石鏃未成品厚さ分布図



第 31 図 石鏃未成品重さ分布図



が見られる。第26図の石鏃完成品と比べると極めて厚いことがわかる。素材の厚さの除去ができないことが石鏃製作を断念した要因の一つと推定される。重さは1.3～7.0gの範囲に分布するがA・B類に大きな違いは認められない。第27図の石鏃完成品と比べると大きさを反映し、重さに明確な違いが認められる。

**石材** 第14表参照。メノウ8点(50.0%)で最も多く、次いで頁岩系6点(37.5%)で、鉄石英(黄)、流紋岩各1点となる。石鏃の石材選択と同じ傾向であるが、メノウの比率が高い。頁岩系に比べ、メノウの加工のしにくさによるものと思われる。

第14表 石鏃未成品石材表

	頁岩	珩質頁岩	半透明頁岩	鉄石英(黄)	メノウ	流紋岩	合計(点)
A類	1	1	2	1	3		8
B類	1		1		5	1	8
合計(点)	2	1	3	1	8	1	16

**その他** 素材は横長剥片7点、縦長剥片5点、不明4点で

あり、素材選択の片寄りは見られず使える剥片を加工したものと思われる。19・20・22のように切断状の加工が施されているものが7点認められた。

**個別遺物の説明** 19・20は両側縁の一部に二次調整が見られるが、素材の厚みが減じられていない。しかも20は正面右下部分が大きく欠損している。21は小型品になるものと予想されるが尖頭部のみ作出されているだけである。22は両側縁に切断状の加工、粗い二次調整を施しているが素材の厚みを減じていない。23・24は二次調整が進行し有茎鏃の輪郭ができていますが、素材の厚みを減じていない。

**c 尖頭器** (図版107-25)

1点のみの出土である。尖頭部と基部を大きく欠き尖頭器の中央部分の破片と思われる。長さ49.6mm(現存値)、幅36.7mm、厚さ15.4mmを測る。二次調整はていねいな押圧剥離が施されている。押圧剥離の新旧関係から二次調整は正面が古く、裏面が新しい。破損面と正裏面の二次調整は風化状態がいくらか異なり、二次調整や両側縁はいくらか滑らかであるのに対し、破損面は正裏面に比べると風化の状態は進んでおらず、正裏面と破損面の割れ口は鋭くなっている。石材はあまり珩質化の進んでいない頁岩であるが良質である。破片であるが、長さ10cm程度の大型品になるものと推定され、中期以前に所属するものと思われる。本遺跡外で採集し、遺跡内に持ち込んだものと推定している。

**d 石鏃** (図版107-26～31)

剥片の一部または全面に二次調整を加え、鏃部を作出した石器である。鏃部の多くには摩耗痕が認められる。総数11点を抽出した。縄文時代晩期特有の鏃部とつまみ部の区別が明瞭な優品が多く見られた。

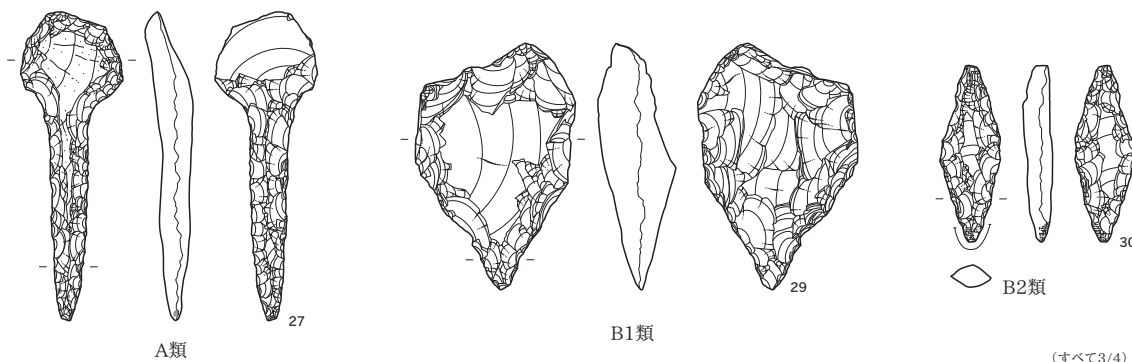
**分類** 第32図参照。鏃部とつまみ部の形状から分類した。

**A類** (26～28) 鏃部とつまみ部の区別が明瞭なもの。二次調整はほぼ全周するが、鏃部には丁寧な二次調整が施される。

**B類** (29～31) 鏃部とつまみ部の境が不明瞭なもの。

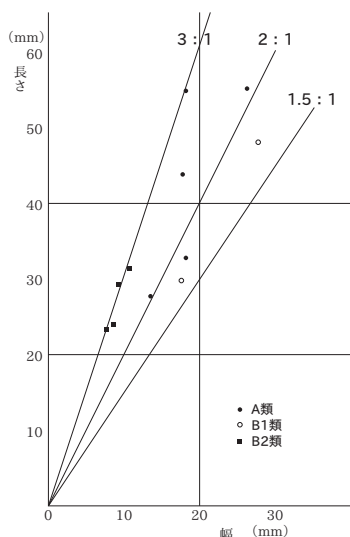
**B1類** (29) 鏃部からつまみ部にかけて大きく広がるもの。つまみ部の二次調整は少なく、粗雑である。

**B2類** (30・31) 棒状を呈するもの。二次調整はほぼ全面に施される。

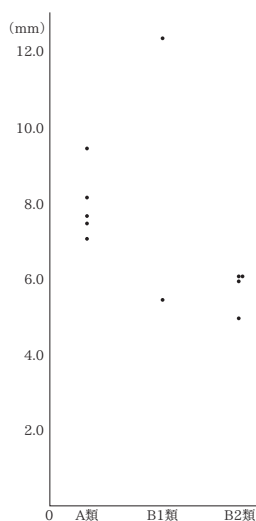


(すべて3/4)

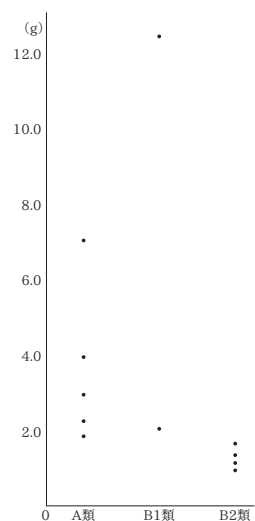
第32図 石鏃分類図



第33図 石錐長幅分布図



第34図 石錐厚さ分布図



第35図 石錐重さ分布図

**分類別出土数と出土分布** 11点のうちA類5点、B1類2点、B2類4点で、すべて包含層からの出土である。出土層位はVIc層6点、VIIa層5点で、すべて縄文時代晩期の遺物包含層からの出土である。出土分布は4点を除き、砂丘西部の緩斜面～斜面にかけての2C-1I・1J・2H・2Iに分布する。ほかの4点は砂丘西から東の範囲で散漫に出土した。

**長さ**と**幅** 第33図参照。すべて完形・ほぼ完形品であることから全点を対象とした。分析対象数は少ないが、長幅比1.5:1～3:1の範囲に収まる。分類別ではA類がほぼ2:1～3:1に、B1類が1.5:1～2:1に、B2類は3:1前後に分布が分かれる。分類基準が長幅比に反映したと思われる。

**厚さ**と**重さ** 第34・35図参照。厚さはA類が7.0～9.4mmに、B2類は4.9～6.0mmにまとまりが見られる。B1類は対象数が少なく5.4mmと12.3mmである。重さは大きさを反映し、A類は1点を除き1.8～3.9gに、B2類は0.9～1.6gにまとまりが見られる。

**石材** 第15表参照。頁岩系の石材が最も多く6点(42.9%)、次いでメノウ、流紋岩各2点(各14.3%)、凝灰岩1点である。石鏃や削器などの小型剥片石器の石材選択と同じである。

第15表 石錐石材表

	頁岩	珪質頁岩	半透明頁岩	メノウ	凝灰岩	流紋岩	合計(点)
A類		3		1		1	5
B1類					1	1	2
B2類	1	1	1	1			4
合計(点)	1	4	1	2	1	2	11

**その他** 5点の素材が明らかになり、内訳は横長剥片4点、縦長剥片1点である。対象数が少なく、分類別に有意な傾向

は認められなかった。遺存状態はつまみ部や錐部のごく一部を欠く2点(26・28)のほぼ完形を除き、完形品で占められた。石錐は錐部先端の破損以外に壊れにくい器種であるが、同じような結果が得られた。27～30のように錐部が使用により摩耗しているものが9点認められている。

**個別遺物の説明** 26はつまみ部と錐部が明確に区別される優品であるが、つまみ部にはアスファルトが多く付着している。その後、被熱のハジケによりアスファルトの一部が剥落したことが認められる。30・31はつまみ部にアスファルトが付着し、錐部には摩耗痕が認められる。柄に装着する際にアスファルトを用い固定したものと推定される。

e 石錐未成品 (図版107-32)

1点のみの出土である。砂丘頂上部やや東寄りの緩斜面、1D-9D18のVIIa層から出土した。頁岩製の横長剥片の打点側を上部にし、粗い二次調整がほぼ全周する。全体の輪郭からA類の石錐の製作を意図したと思われる。錐部は短いことから粗い二次調整で破損したため製作を断念したものと推定される。

f 削器 (図版107・108-33～43)

いわゆる不定形石器と呼称されている器種である。剥片を素材とし刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が見られる不定形な石器である。総数 23 点抽出した。

分類 第 36 図参照。刃部形状の違いにより細分した。

A 類 (33・34) 刃部に急角度で連続的な二次調整が施されるもの。

B 類 (35) 刃部に浅角度で連続的な二次調整が施されるもの。

C 類 (36・37) 刃部に不連続的な二次調整が施されるもの。

D 類 (38・39) 刃部に両面から二次調整が施されるもの。刃部の側面観はジグザグ状を呈する。

E 類 (40～43) 刃部に微細剥離や摩耗痕、刺突痕状の使用痕が認められるもの。使用痕の種類からさらに細分した。

E1 類 (40・41) 刃部に使用痕的な微細剥離があるもの。

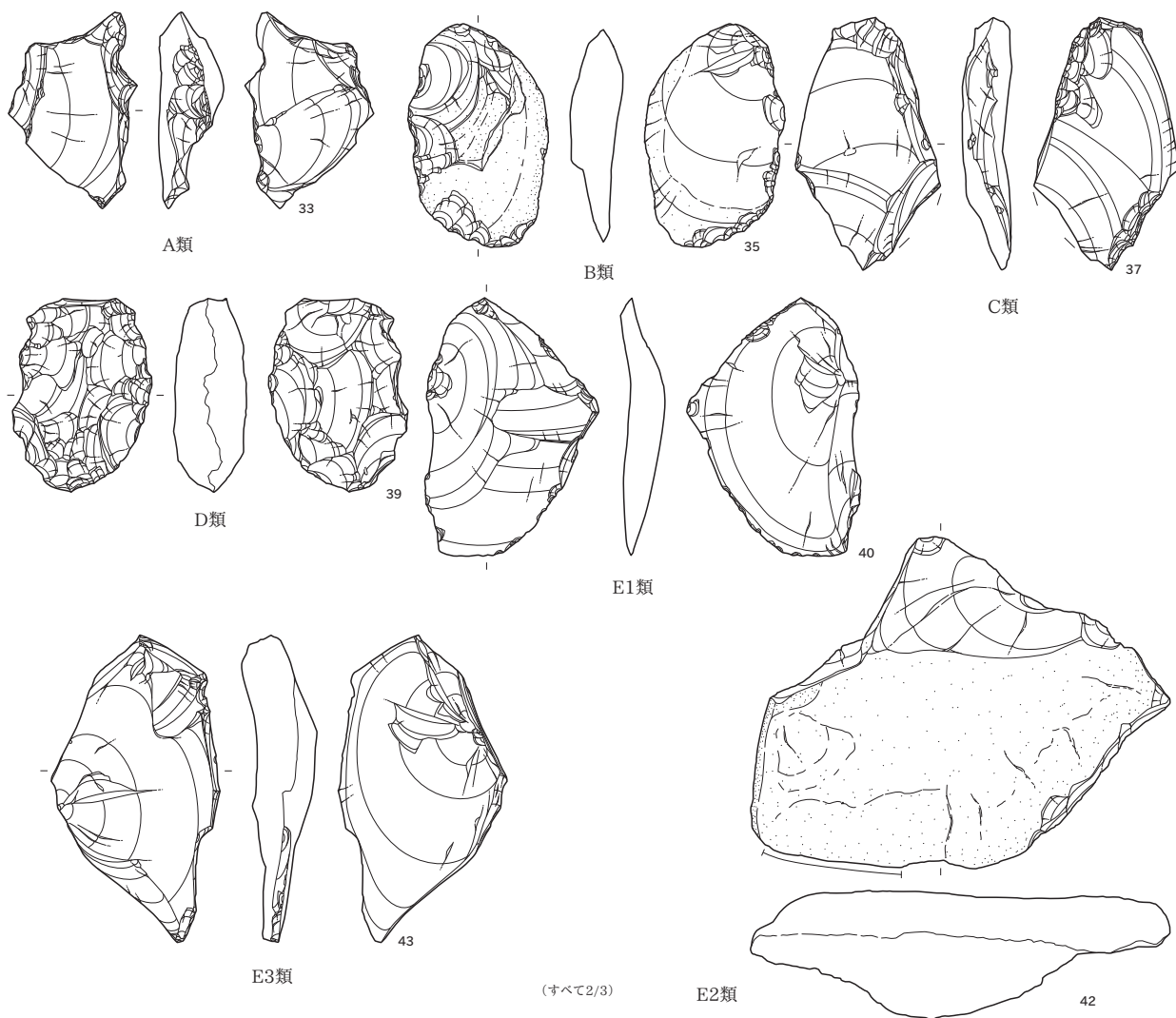
E2 類 (42) 刃部に使用痕的な摩耗痕があるもの。

E3 類 (43) 刃部に使用痕的な刺突痕があるもの。

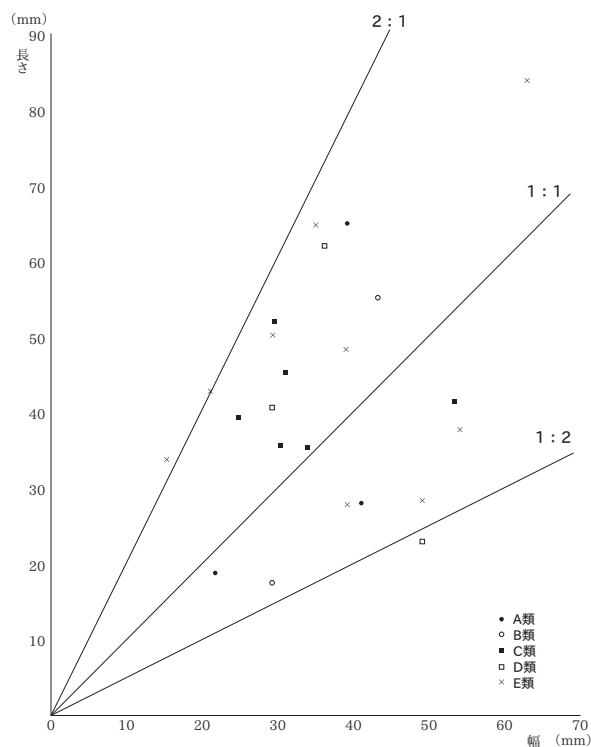
分類別出土数と出土分布 第 16 表のように遺構内 1 点、包含層 22 点である。遺構内の 1 点は平安時代の遺構への流れ込みである。分類別では E1 類 7 点 (30.4%)

第 16 表 削器分類別出土数

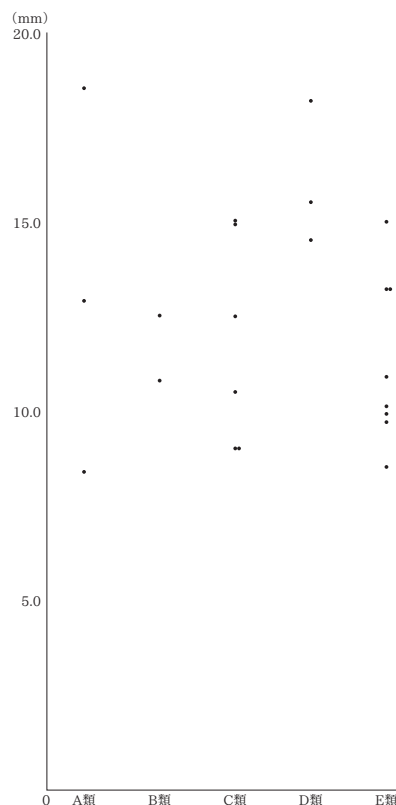
	遺構内	包含層	合計 (点)
A類		3	3
B類		2	2
C類	1	5	6
D類		3	3
E1類		7	7
E2類		1	1
E3類		1	1
合計(点)	1	22	23



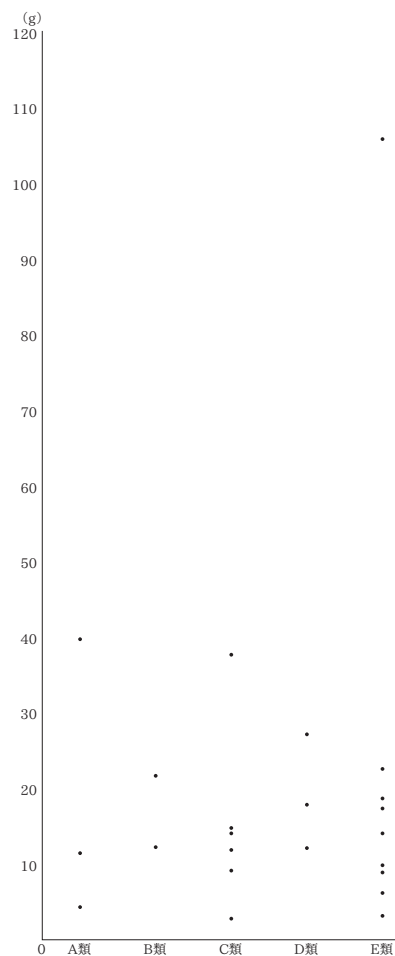
第 36 図 削器分類図



第37図 削器長幅分布図



第38図 削器厚さ分布図



第39図 削器重さ分布図

で最も多く、次いでC類6点(26.1%)、A・D類各3点(13.0%)である。E1類やC類が多くなるのは縄文時代では一般的な特徴である。

出土分布は砂丘南西部の緩斜面から斜面にかけての2C-2H・2Iに集中する。分類別では出土に片寄りは見られない。

長さ と 幅 第37図参照。1点を除き長さ17～65mm、幅15～54mmの範囲に収まり、長幅比2:1～1:2の範囲にほぼ収まる。分類別の片寄りは見られず分散する。

厚さ と 重さ 第38・39図参照。厚さは3点を除き8.4～15.5mmに分布する。E類は8.5～10.9mmにやや多く分布するが、ほかは資料数が少なく集中域は見られない。重さは3点を除き3～39gに分布し、C類は3～15g、E類は3～23gにやや集中が見られる。ほかは資料数が少なく集中域は見られない。

石材 第17表参照。23点中、頁岩系11点(47.8%)で最も多い、

第17表 削器石材表

	頁岩	珪質頁岩	半透明頁岩	鉄石英(赤)	メノウ	緑色凝灰岩	凝灰岩	流紋岩	花崗岩	合計(点)
A類					1			2		3
B類		1	1							2
C類	1	1		1	1	1		1		6
D類		2						1		3
E1類	1	2	2		1			1		7
E2類									1	1
E3類							1			1
合計(点)	2	6	3	1	3	1	1	5	1	23

次いで流紋岩 5 点 (21.7%)、メノウ 3 点 (13.0%) である。ほかは点数が少ないが、多種類の石材が使用されている。

**素材と刃部** 第 18・19 表参照。それぞれの石器の素材と刃部位置の関係を見るために観察した。素材は全体的にみると横長剥片 10 点、縦長剥片 11 点で片寄りは見られない。分類別に見ても資料

数が少なく特徴は見られない。二次調整や使用痕部位は素材の底縁 12 点 (52.2%)、片側縁 9 点 (39.1%) でほぼ占められるが、二次調整が全周するもの 1 点、先端部に使用痕が残るもの 1 点認められた。

**個別遺物の説明** 35 は縦長剥片の底縁に浅角度の二次調整が連続し滑らかな刃部を作出している。素材は半透明頁岩の礫表皮近くであり、比較的大きな円礫と推測される。39 は両面からの二次調整がほぼ全周している。石材は鉄石英 (赤) であるが、鉄石英 (黄) も見られることから赤化したものと推定される。また玉髄化も進んでいる。42 は削器の石材では類例の少ない花崗岩であり、縦長剥片の底縁に著しい摩耗痕が見られる。43 は横長剥片の尖った端部に衝撃剥離の痕跡が複数見られることから刺突具として使用されたものと推定される。

**g 両極剥離痕のある石器 (図版 109-44 ~ 51)**

「向かい合った二辺ないしは四辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対になって存在する」(岡村 1983) 石器である。従来からピエス・エスキュー、楔形石器、両極石器などと呼称されていたものである。大型品は石核に含めたが、小型品は石核と剥片の区別が困難なものもあるため、両極技法を用いた小型の石核や剥片も含めた。総数 67 点を抽出した。

**分類** 第 40 図参照。刃部形状で細分した。

A 類 (44 ~ 48) 2 極 1 対の刃部を持つもの。

B 類 (49 ~ 51) 4 極 2 対の刃部を持つもの。

**分類別出土数と出土分布** 67 点のうち、遺構内出土 3 点 (SK404、SI461、SX233 各 1 点)、包含層出土 64 点である。SK404 は唯一縄文時代の遺構であり、ほかは古墳時代の遺構で紛れ込みである。分類別では A 類 45 点 (67.2%)、B 類 22 点 (32.8%) で、A 類が B 類のほぼ 2 倍である。出土分布は砂丘南西部の緩斜面から斜面にかけての 2C-II・2I に集中するが、分類別に分布の違いは認められない。

**長さ と 幅** 第 41 図参照。2 極 1 対は刃部を上下に、4 極 2 対は長軸の刃部を上下にして計測した。A 類は長さ 15 ~ 46mm、幅 10 ~ 45mm にほぼ分布し、長幅比 2 : 1 ~ 1 : 2 にほぼ収まる。B 類は長さ 20 ~ 45mm、幅 17 ~ 35mm にほぼ分布し、長幅比 2 : 1 ~ 1 : 1 に収まる。

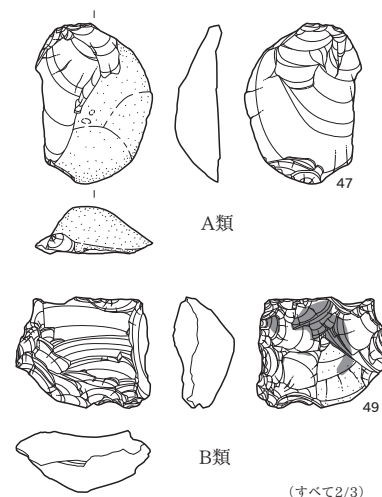
**厚さ と 重さ** 第 42・43 図参照。厚さは A 類が 3 ~ 17g、B 類が 7 ~ 17g にほぼ収まる。重さは A 類が 1 ~ 8g、B 類が 2 ~ 9g にほぼ収まる。大きさを反映し、B 類が A 類よりやや重い傾向が見られる。

第 18 表 削器分類別素材数

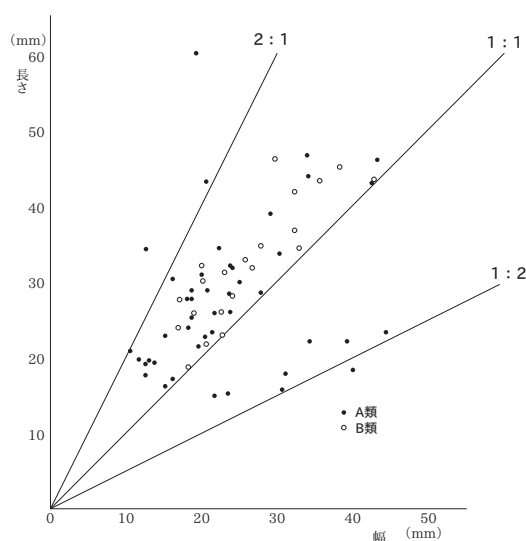
	横長剥片	縦長剥片	不明	合計(点)
A類	2	1		3
B類		2		2
C類	1	4	1	5
D類	1	1	1	2
E1類	4	3		7
E2類	1			1
E3類	1			1
合計(点)	10	11	2	23

第 19 表 削器二次調整・使用痕部位表

	底縁	片側縁	全周	先端	合計(点)
A類	3				3
B類	1	1			2
C類	1	5			6
D類	1	1	1		3
E1類	5	2			7
E2類	1				1
E3類				1	1
合計(点)	12	9	1	1	23



第 40 図 両極剥離痕のある石器分類図



第 41 図 両極剥離痕のある石器長幅分布図

第20表 両極剥離痕のある石器石材表

	頁岩	珪質頁岩	半透明頁岩	鉄石英(赤)	鉄石英(黄)	メノウ	チャート	凝灰岩	流紋岩	輝緑岩	硬砂岩	粘板岩	合計(点)
A類	8	3	9	1	2	15	1	1	3	1		1	45
B類	6	3	2	1		6			2		1	1	22
合計(点)	14	6	11	2	2	21	1	1	5	1	1	2	67

石材 第20表参照。67点中、頁岩系31点(46.3%)で最も多い、次いでメノウ21点(31.3%)、流紋岩5点(7.5%)、である。ほかは点数こそ少ないが、多種類の石材を使用している。分類別ではほぼ同様の石材選択であるが、頁岩系の石材に限るとA類は頁岩・珪質頁岩の比率が低く、半透明頁岩の比率が高い。これに対しB類は頁岩・珪質頁岩の比率が高く、半透明頁岩の比率が低い。半透明頁岩11点のうち、礫表皮のある9点はすべて表皮が灰白色でざらざらし、礫表皮のない2点もすべて褐色～黒褐色の脂肪光沢を示し、1mm以下の斑点状の白色オパール部が無数に見られるものである。したがって、半透明頁岩は関川村獅子舞岩の珪質頁岩の獅子舞岩I類〔秦2001〕に相当する<sup>1)</sup>。A類はB類に比べ相対的に小さく、厚さが薄く、軽いのは小型の半透明頁岩の円礫を用いていることも一因と考えられる。

素材 第21・22表参照。両極剥離痕のある石器を抽出する段階から礫素材が多いことが予想されたため、素材について観察した。礫表皮の有無では、有りがA類28点(62.2%)、B類16点(72.7%)であり、約2/3に礫表皮が認められた。全体の素材では礫35点(52.2%)、石核4点(6.0%)、剥片18点(26.9%)、不明10点(14.9%)である。不明の10点を除くと礫素材の比率は61.4%となる。礫素材は扁平礫、円礫、楕円礫、棒状礫、板状礫などさまざまである。いずれにせよ礫素材が多いことがわかる。

現形状 第23表参照。素材がどのように変化したか観察した。全体では石核状17点(25.4%)、剥片状49点(73.1%)、不明1点(1.5%)で、剥片形状が多い。したがって、礫や石核の素材が剥片形状になったものといえる。頁岩系やメノウなどの小円礫から小型剥片石器の剥片を生産したものと推定している。

第21表 両極剥離痕のある石器 礫表皮の有無

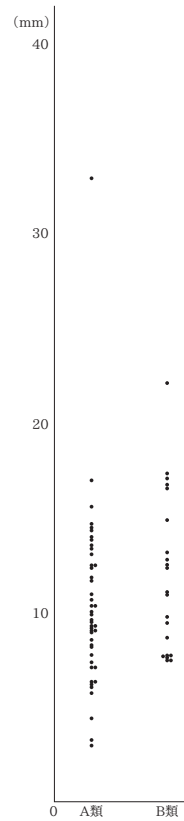
	有り	無し	合計(点)
A類	28	17	45
B類	16	6	22
合計(点)	44	23	67

第22表 両極剥離痕のある石器 素材数

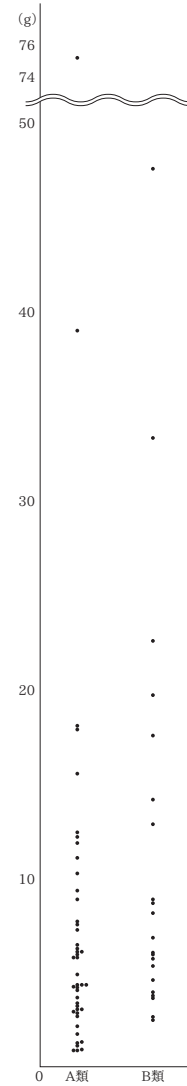
	礫	石核	剥片	不明	合計(点)
A類	23	3	11	8	45
B類	12	1	7	2	22
合計(点)	35	4	18	10	67

第23表 両極剥離痕のある石器 現形状

	石核状	剥片状	不明	合計(点)
A類	11	33	1	45
B類	6	16		22
合計(点)	17	49	1	67



第42図 両極剥離痕のある石器厚さ分布図



第43図 両極剥離痕のある石器重さ分布図

1) 〔秦2001〕による関川村獅子舞岩露頭の珪質頁岩を分析した結果、獅子舞岩の頁岩層はノジュールの状態や岩石の特徴からI～III類に分類できるとした。このうち獅子舞岩I類は「5～10cmの円形のノジュールとなって、頁岩層内にまとまりを持って含まれている。表面には灰白色のザラザラした状態を示す表皮をもつ。内部の岩質は褐色～黒褐色の脂肪光沢を示し、1mm以下の斑点状に白色オパール部が無数に認められる。……」としている。

**個別遺物の説明** 44～48はA類である。44は節理で生じた頁岩の板状礫で、現状は石核状を呈する。45は半透明頁岩の棒状礫、47は半透明頁岩の円礫で現状は剥片状である。いずれも端部はクサビとしての機能は想定できず、剥片生産を目的としたものと推定される。46は頁岩の小型石核と推定され、裏面を中心に両極剥離が見られる。48は流紋岩の剥片と推定した。両面に両極剥離が見られ、下端は刃部状になっている。

49～51はB類である。49はアスファルトが付着するが、その意図は不明である。素材は珪質頁岩の剥片と思われる。50は小型石核と推定されるが、両面からの両極剥離が見られる。石材は珪質頁岩である。51は素材が硬砂岩の扁平礫である。周縁は曲面でクサビとして機能は想定できない。ただし石材が悪いためか、小型石器の剥片も得られないように思う。

#### h 打製石斧 (図版 109-52)

1点のみの出土である。刃部の破片で基部を大きく欠損する。正面には急角度の剥離、裏面には浅角度の剥離が施される。したがって、横断面は蒲鉾状になり、刃部平面は円刃で縦断面は片刃になる。正面右側縁付近に礫面が認められ、素材は厚手の大型剥片または礫核と推定される。石材は頁岩で、砂丘頂上部北西部の1D-10A7 VIc層から出土している。しかし、打製石斧は後期中葉以降は出土が少なくなること、側縁が敲打整形でなく、剥離成形なこと、横断面が蒲鉾状で刃部が片刃の形状を考えると中期以前の所産〔倉石2019〕と思われる。他所で採集し遺跡内に搬入したものと考えている。

#### i 磨製石斧 (図版 109・110-53～58)

剥離・敲打を基本に成形され、研磨で仕上げられた斧形の石器を磨製石斧とした。小規模ながら磨製石斧の生産が行われていることから研磨痕の有無で成品・未成品を区別した。成品としたものは15点である。すべて破損品・破片資料のため分類は行っていない。刃部破片を除いた10点を見る限り、形態はすべて定角式磨製石斧である。

**出土分布** 資料数が少ないこともあるが、調査区全体に散漫分布するが、砂丘頂上部の1D-10B・10C、2D-1B・1Cにやや多く6点出土した。

**大きさ** 長さ80～85mmを大型磨製石斧と小型磨製石斧の分類基準〔高橋2018〕にするが、すべて破損品・破片のため正確な大きさは不明であるものの、遺存状況や石材からすべて大型磨製石斧と推定した。

**石材** 15点中、輝緑岩13点、結晶片岩・デイサイト各1点である。周辺地域で採集できる石材を搬入し磨製石斧を製作したか、新発田市村尻遺跡、中野遺跡、館ノ内D遺跡、阿賀野市石船戸遺跡などでは晩期に大規模な磨製石斧の生産遺跡があることから製品を搬入したかいずれかと思われる。

**その他** 遺存状態では刃部側が遺存するもの8点、基部側が遺存するもの6点、中央部が遺存するもの1点である。刃部を観察した限りでは、平面円刃、断面両刃である。また基端を観察した限りでは使用による敲打痕の痕跡は確認できなかった。

#### j 磨製石斧未成品 (図版 110-59～61)

磨製製作工程の敲打段階で製作を中止し、研磨段階に進めなかったものである。5点抽出した。図示した3点は定角式磨製石斧の形態になっており、ほぼ全面に敲打痕が見られることから敲打最終段階で欠損したものと推定している。石材は図示しないものも含めすべて輝緑岩である。

#### k 石 錘 (図版 110-62～64)

扁平礫の両端に剥離・敲打を施し挟りがつけられた石器である。いわゆる礫石錘である。3点出土し、すべて図示した。62はやや不整な扁平楕円礫の長軸の両端に剥離と敲打で挟りをつけている。大型品で重さは335gを量る。63は欠損品であるが、節理面で剥がれた扁平礫の周縁に剥離と敲打で挟りをつけている。長軸の端部、短軸の端部に挟りがあることから紐掛け部は4か所あったものと思われる。64は扁平楕円礫の短軸に剥離と敲打で挟りをつけている横長石錘である。石材は62が石英閃緑岩、63が砂岩、64がデイサイトである。

Ⅰ 多面体敲石 (図版 110-65 ~ 67)

硬質で緻密な亜角礫や球状の石材の表面に敲打痕が見られる石器である。いわゆる「多面体を呈する敲き石」〔阿部 1984〕と呼称され、磨製石斧製作遺跡から多く出土し、敲打調整に関連が強い石器〔阿部 1990〕と言う。4点出土し、3点図示した。

65は使用時に大きく欠損したと思われるものであるが、遺存部の表面のほぼ全面に敲打痕が認められる。66は使用時に1/2ほど欠損したと思われるが、遺存部の表面にはほぼ全面に敲打痕が認められる。67は長期間にわたり使用されたせいか、ピンポン玉程度の大きさになっている。全面に敲打痕が認められる。図示しなかった1点も67と同程度の大きさである。石材は65が鉄石英(黄)、66・67が輝緑岩、図示していない1点がチャートである。

m 磨石類 (図版 110 ~ 112-68 ~ 85)

片手で把持できる程度の礫の表面に使用の結果と推定される磨痕や敲打痕、磨り潰し痕が見られる石器を磨石類とした。総数113点出土した。磨痕は礫の表面が滑らかになるもので主に礫の正裏面に見られる。敲打痕は敲打により礫の表面が凹凸状に荒れるもので正裏面、側縁・端部(周縁)に見られる。磨り潰し痕は敲打痕や磨痕が混在したものと推定され、礫の表面がざらざらするもので、主に側縁・端部(周縁)に見られる<sup>1)</sup>。

分類 第44図参照。礫表面に残る痕跡の種類と痕跡が認められる部位により細分した。

A類 (68 ~ 71) 磨痕のみ認められるもの。

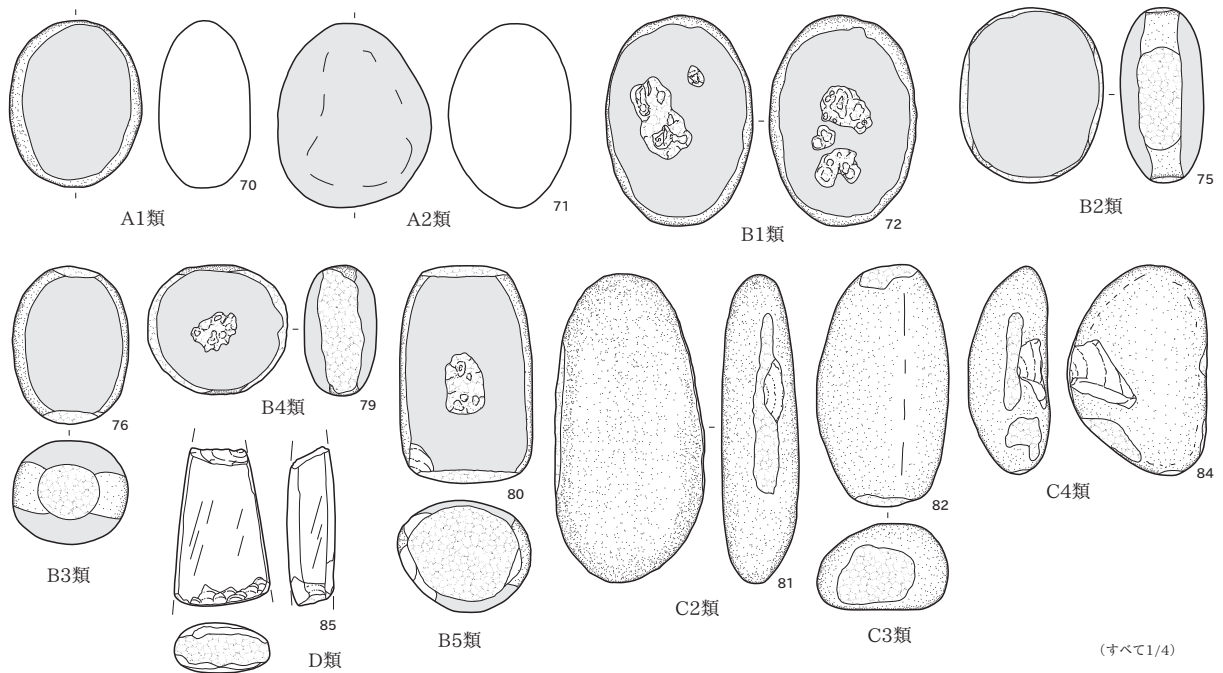
A1類 (68 ~ 70) 正裏面に磨痕が認められるもの。

A2類 (71) ほぼ全面に磨痕が認められるもの。

B類 (72 ~ 80) 磨痕と敲打痕・磨り潰し痕が認められるもの。

B1類 (72・73) 正裏面の磨痕と正裏面の敲打痕・磨り潰し痕が認められるもの。従来、凹石としたものも含む。

B2類 (74・75) 正裏面の磨痕と側縁・端部の敲打痕・磨り潰し痕が認められるもの。素材は扁平円礫・楕



第44図 磨石類分類図

1) 一般的に磨石類の正裏面の礫表面は滑らかで、側縁・端部はザラザラする傾向がある。素材である転石の石質によるものと推定している。



円礫が主体となる。

B3類 (76) 正裏面の磨痕と端部の磨り潰し痕が認められるもの。

B4類 (77～79) 正裏面の磨痕と正裏面の敲打痕・磨り潰し痕、側縁・端部の磨り潰し痕が認められるもの。

B5類 (80) 正裏面の磨痕、正裏面の敲打痕・磨り潰し痕、端部の磨り潰し痕が認められるもの。

C類 (81～84) 敲打痕・磨り潰し痕のみが認められるもの。

C1類 正裏面に認められるもの。従来、凹石と呼ばれたものであるが、1点も出土していない。

C2類 (81) 側縁に認められるもの。

C3類 (82・83) 端部に認められるもの。従来、一般的に敲石と呼ばれていたものである。

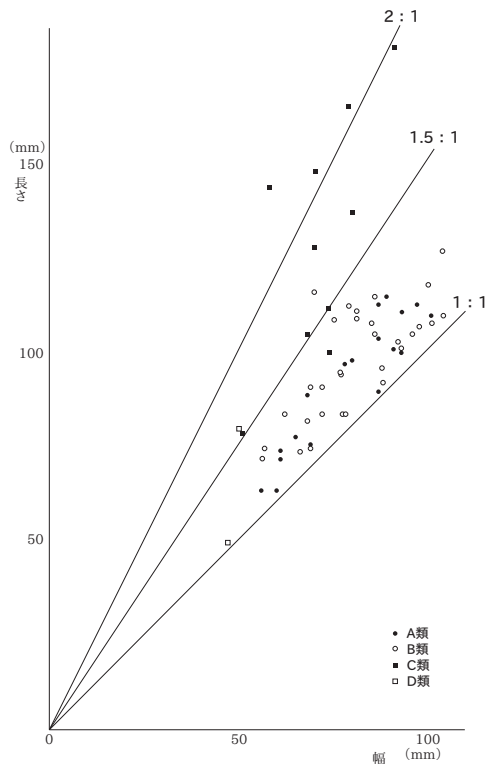
C4類 (84) C1・C2・C3類が複合的に認められるもの。

D類 (85) 磨製石斧の破損品を転用したもの。

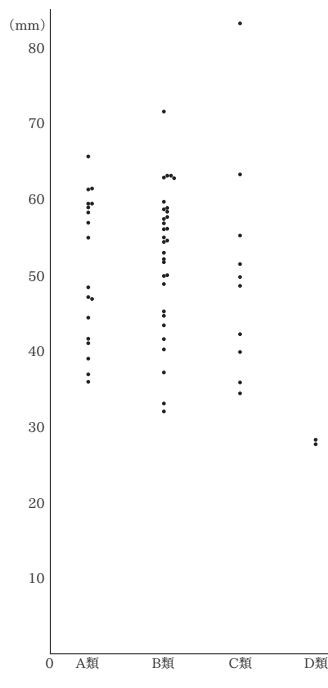
分類別出土数と出土分布 第24表のように遺構内2点 (SI266・SD396各1点)、包含層111点であるが、遺構内出土のものは後世の遺構への紛れ込みである。分類別ではB類が最も多く32点で、一つの石器に磨痕と敲打痕・磨り潰し痕など様々な痕跡が認められるものが多い。次いでA類18点、C類16点、D類2点である。なお分類不可としたものは破片や風化で分類できないものであり、45点 (39.8%) で極めて比率が高い。石材豊富地域の阿賀町北野遺跡 2.6% [高橋 2005]、南魚沼市五丁歩遺跡 21.8% [高橋 1992]、糸魚川市六反田南遺跡 10.0% [高橋 2018] と比較すると大きな開きがある。すべて石材が搬入品の道正遺跡では、比較的近隣から入手しやすい磨石類の石材さえも使用頻度の高いことが反映した

第24表 磨石類分類別出土数

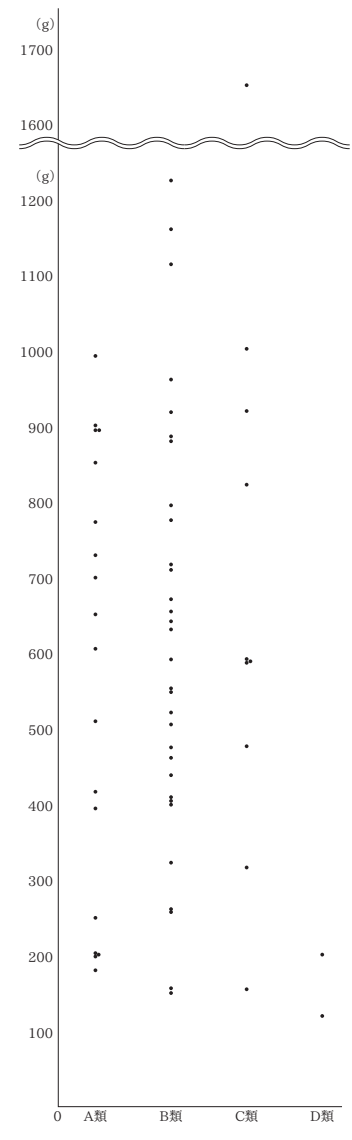
	遺構内	包含層	合計
A1類	1	16	17
A2類		1	1
B1類		7	7
B2類		8	8
B3類		1	1
B4類		13	13
B5類		3	3
C2類		2	2
C3類	1	8	9
C4類		5	5
D類		2	2
分類不可		45	45
合計 (点)	2	111	113



第45図 磨石類長幅分布図



第46図 磨石類厚さ分布図



第47図 磨石類重さ分布図

第25表 磨石類石材表

	輝緑岩	デイサイト	安山岩	閃緑岩	石英閃緑岩	花崗閃緑岩	花崗岩	花崗斑岩	流紋岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	ホルンフェルス	砂岩	頁岩	合計(点)
A1類	2	2	3	4		3	1	2							17
A2類			1												1
B1類			4			1	2								7
B2類	1	1	4			1	1								8
B3類							1								1
B4類		2	5	2			3		1						13
B5類		2					1								3
C2類	2														2
C3類		1				1			2	1		2	1	1	9
C4類	2	1							1				1		5
D類	1			1											2
分類不可		8	6	1	3	6	6	3	10		1		1		45
合計(点)	8	17	23	8	3	12	15	5	14	1	1	2	3	1	113

結果と考えられる。

細分類ではB類ではB4類の13点、A類ではA1類の17点、C類ではC3類の9点を数え、磨痕のみの場合は正裏面、敲打痕・磨り潰し痕のみの場合は端部、磨痕と敲打痕・磨り潰し痕の場合は正裏面・側縁・端部に見られるものが増える。

出土分布は石器類の分布と同じように砂丘西部の緩斜面～斜面にかけての1C-10H、2C-1H・1Iに集中分布し、砂丘頂上部の平坦地の2D-1Cにやや多く分布する。分類別での出土分布の違いは見られない。

**長さ**と**幅** 第45図参照。完形・ほぼ完形品の61点を対象とした。長軸を長さ、短軸を幅に据え計測した。多くは長さ60～120mm、幅55～105mmに収まる。長幅比はおおむね1:1～2:1前後に収まる。分類別ではA類とB類は全体とほぼ同じような分布を示す。これに対しC類は長さ50～180mm、幅45～90mmの広範囲に分布し、長幅比は1.5:1～2:1にほぼ分布する。つまり側縁や端部に敲打や磨り潰し痕を伴うC類は長さが長く、幅が短い傾向になる。

**厚さ**と**重さ** 第46・47図参照。全体的に見ると厚さ35～65mmほぼ収まり、分類別ではD類を除き大きな違いは見られない。D類は磨製石斧破損品の転用であり、厚みは30mm以下で磨石類の中では最も薄い。重さは全体的に見て150～1000gの広範囲にほぼ収まり、分類別ではD類を除き分布に大きな違いは見られない。D類は大きさを反映し2点とも200g以下で軽い。

**石材** 第25表参照。全体的に見ると安山岩23点、デイサイト17点、花崗岩15点、流紋岩14点、花崗閃緑岩12点、輝緑岩・閃緑岩各8点、火山岩系や深成岩系の岩石が多用され、堆積岩系や変成岩系の使用は少ない。分類別ではA類・B類は全体的傾向と一致する。しかし、C類は鉱物の結晶が細かい輝緑岩や流紋岩、同じく堆積粒子の細かいホルンフェルス・砂岩・頁岩を多用している。いずれも阿賀野川水系で容易に入手できる在地石材である。

**素材** 第26表参照。素材不明の35点を除いた78点を対象にすると、円礫・扁平円礫32点(41.0%)、楕円礫・扁平楕円礫31点(39.7%)を数え、合わせて8割を占める。A類・B類はこの傾向である。これに対してC類は長楕円礫・棒状礫など長さの長い礫を多用している。このように使用痕跡と使用部位の違いから素材の使い分けが行われている。

**その他** 肉眼観察であるが被熱が認められるものが35点(31.0%)数えられた。磨石類の被熱は縄文時代遺跡では一般的な傾向である。

**個別遺物の説明** 71は厚みがあり、楕円球状を呈する礫である。全面に磨痕が認められる唯一のA2類である。74・

第26表 磨石類素材表

	円礫	扁平円礫	楕円礫	扁平楕円礫	長楕円礫	扁平長楕円礫	磨製石斧破損品	棒状礫	扁平礫	不明	合計(点)
A1類	1	12		4							17
A2類			1								1
B1類	1	2		4							7
B2類		5		3							8
B3類			1								1
B4類		5	3	4						1	13
B5類				2	1						3
C2類					1	1					2
C3類			1	1	2			4		1	9
C4類				1				1	1	2	5
D類							2				2
分類不可	1	5	3	3	1				1	31	45
合計(点)	3	29	9	22	5	1	2	5	2	35	113

75は正裏面の磨痕と側縁・端部の敲打痕・磨り潰し痕が認められるものである。側縁・端部は弱い曲面状の痕跡が見られ、平面形はいわゆる「石鱗状」を呈する。80は正裏面の磨痕、正裏面の敲打痕、端部の磨り潰し痕が認められるB5類である。両端部は特によく使用されたせいか広い平面状を呈する。85は磨製石斧の破損品を転用したもので刃部側には敲打痕と敲打に伴う小剥離が見られる。硬質で緻密な石材の再利用である。

なお、磨石類は古墳時代、平安時代に所属するという積極的な根拠は見られなかった。すべて縄文時代の所産と考えられる。

n 砥石 (図版113・114-86～96)

ほぼすべて破損しており、完形になるものは極めて少ない。台石類とは石材や石質、使用面の状態などから分けたが、小破片については区別が困難なものがある。台石類の使用面の状態は平面ないしは滑らかな曲面を呈し、比較的均一な磨面ないしは中心部の磨面から縁辺にかけて徐々に滑らかさがなくなるのが一般的である。これに対し砥石の砥面は磨面に帯状の強弱の差がある。なお出土した砥石には置き砥石、手持ち砥石、玉砥石など多様なものが見られる。総数43点出土し10点掲載した。

分類 第48図参照。大型砥石と小型砥石に大きく分け、小型砥石は形状や用途により細分した。

A類(86～88) 大型の砥石で、いわゆる置き砥石と考えられるものである。素材は大型の扁平礫と推定される。使用面は正面ないしは正裏面が多い。多くは縄文時代の砥石と推定される。

B類(89～95) 小形の砥石で、形状や用途により細分した。

B1類(89) 不整形な砥石である。

B2類(90～93) 横断面が方形を呈し、全体形が直方体状のものである。古墳時代以降の砥石と推定される。

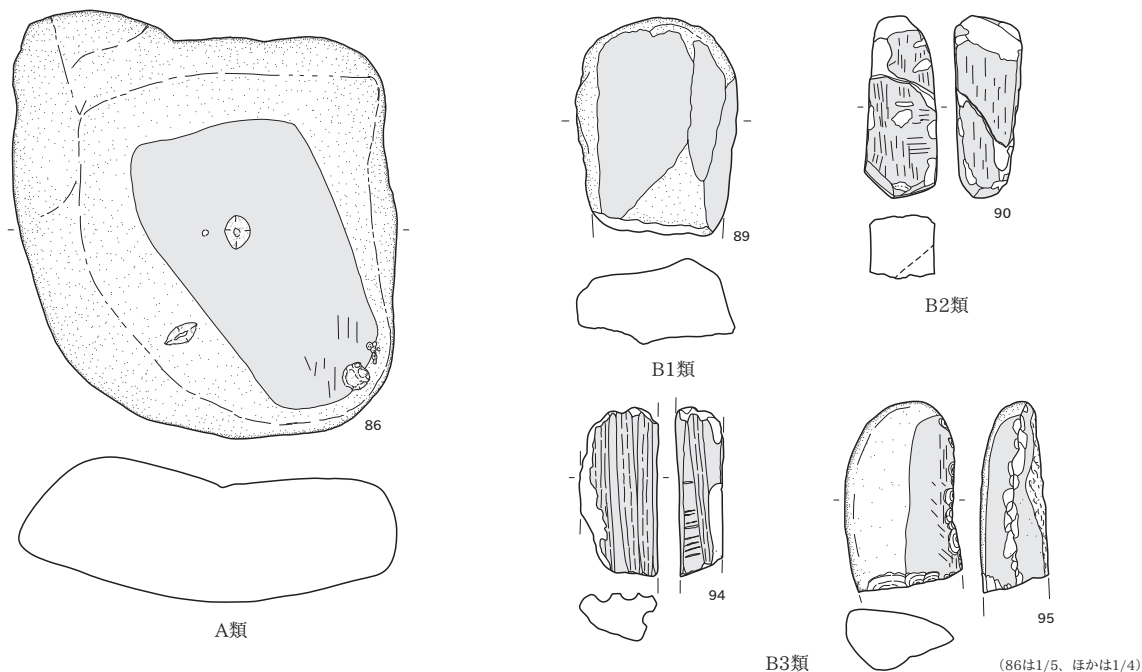
B3類(94・95) 玉製作に関連する砥石である。筋状砥石、内磨砥石が各1点出土している。弥生時代の土器が見られないことから、古墳時代に所属する可能性がある。

分類不可 主に大型砥石の破片と推定されるが、断定できないため分類不可とした。

分類別出土数と出土分布 第27表のように遺構内から5点、包含層から38点出土している。遺構内出土はSI266の3点出土が目される。破片資料を2点含

第27表 砥石分類別出土数

	遺構内	包含層	合計
A類		9	9
B1類		2	2
B2類	1	9	10
B3類		2	2
分類不可	4	16	20
合計(点)	5	38	43



第48図 砥石分類図

むが、90はSI266周堤内盛土1層からの出土で古墳時代の所産の可能性が高い。SK284・P249の出土は破片資料である。分類別ではA類9点、B2類14点となるが、破片資料の分類不可が20点を数える。出土分布は砂丘西の緩斜面～斜面の2C-1H・1Iから多く、砂丘頂上部の平坦地2D-1B～1Dにやや多く分布する。分類別に出土の片寄りは見られない。

**重さ** 前述のように完形品が極めて少なく、完形品はA類2点、B類4点を数えるだけである。A類とB類は大きさを分類基準に入れたため、A類は破損品も含め推定するに1kg以上、同じくB類は500g以下になるものと思われる。

**石材** 第28表のように凝灰岩20点(46.5%)が最も多く、次いで砂岩・花崗岩各8点(18.6%)となる。分類別ではA類(9点中)が凝灰岩・砂岩5点、石英閃緑岩・花崗岩4点で堆積岩と火成岩で分散するのに対し、B2・B3類(12点中)が凝灰岩・泥岩12点ですべて堆積岩で占められている。これは石材を構成する粒子と密接な関係があり、第29表のように礫岩・石英閃緑岩・花崗岩は粗粒、凝灰岩・砂岩・泥岩・頁岩・輝緑岩は中粒・細粒の砥面状態になる。石材選択の結果の反映と考えている。

**砥面状態** 第30表参照。肉眼観察ではあるが、分類別の砥面状態を見るために、おおよそ荒砥・中砥・細砥のように観察した。A類はほぼ荒砥・中砥で占められるのに対し、B2・B3類はすべて細砥で占められている。B2類は古墳時代以降の金属製品の研ぎ、B3類は古墳時代の玉生産を想定した場合、妥当な砥面状態の石材選択と言えるだろう。

**その他** 肉眼観察であるものの被熱している砥石が、43点のうち14点(32.6%)で見られた。磨石類、台石類がともに多い。

**個別遺物の説明** 86は重さ8,600gを量る大型の置き砥石である。正裏面の砥面には敲打状の痕跡も見られる。87は正裏面と側面が加工されている。石皿の可能性もあるが両面に帯状の弱い砥面があることから砥石とした。88は横断面が方形の砥石である。上下は欠損しているが、直方体状になるものと思われる。小型砥石ならばB2類になるが、置き砥石と推定されることからA類とした。古墳時代以降に所属するであろう。92はSI266の周堤内盛土1層からの出土であり、古墳時代前期に所属する。94は筋状砥面を持つもので、筋幅は6.5～9.0mmで断面半円状を呈する。筋内の底面や側面には筋方向と同じ方向の線状痕が顕著に認められる。勾玉の背面研磨の砥石と推定した。95は横断面が鋭く広がる素材の片側縁に砥面が見られる。縁辺には砥面再生の小剥離がみられる。勾玉の腹面研磨の内磨砥石とした。

○ **台石類** (図面図版114・115-97～106)

扁平な中型から大型の円礫や楕円礫の平坦面に、使用や調整の結果である磨痕や敲打痕が見られるものである。破損品や破片が多く、完形品は非常に少ない。総数64点出土し11点図示した。

**分類** 第49図参照。大きさや重さ、使用面の加工の有無により細分した。

**A類** (96～99) 長さが18cm以上の中型～大型品で、敲打により使用面が作出されている。いわゆる「加工石皿」と呼称されていたものに相当する。

**B類** (100～103) 長さが18cm以上の中型～大型品である。使用面が作出されず、素材獲得時の礫面を無加工のまま使用している。いわゆる「無加工石皿」または「台石」と呼称されていたものに相当する。

**C類** (104～106) 長さが18cm未満、または重さが2kg程度の小型品である。使用面が作出されず、素材

第28表 砥石石材表

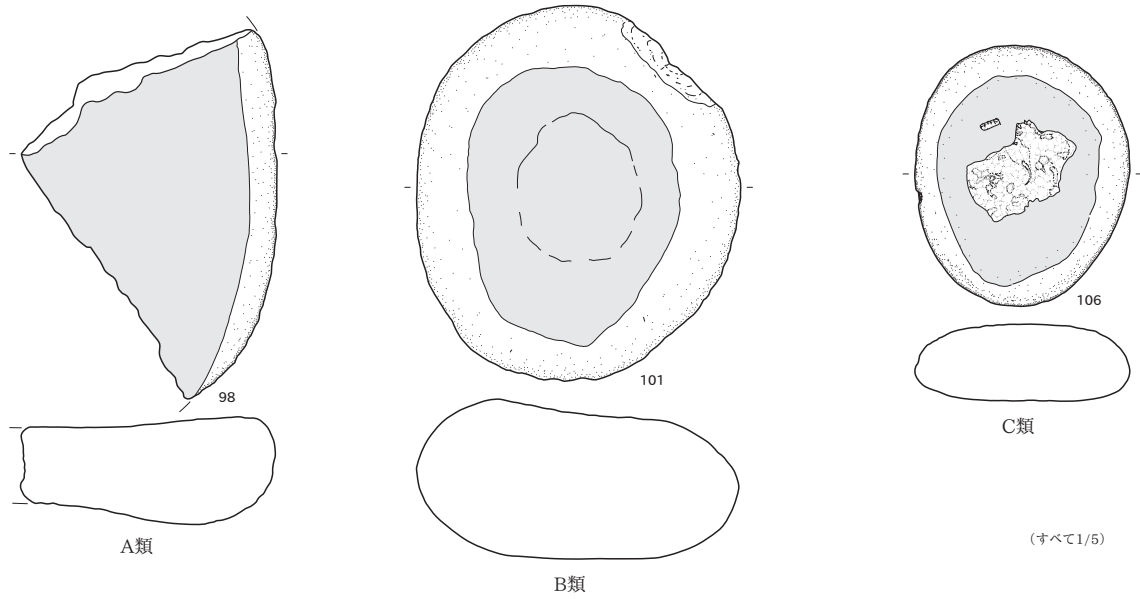
	凝灰岩	砂岩	泥岩	頁岩	礫岩	輝緑岩	石英閃緑岩	花崗岩	合計(点)
A類	4	1					1	3	9
B1類		1						1	2
B2類	9		1						10
B3類	2								2
分類不可	5	6		1	1	3		4	20
合計(点)	20	8	1	1	1	3	1	8	43

第29表 砥石石材と砥面状態

	凝灰岩	砂岩	泥岩	頁岩	礫岩	輝緑岩	石英閃緑岩	花崗岩	合計(点)
荒砥	3				1		1	8	13
中砥	5	8				2			15
細砥	12		1	1		1			15
合計(点)	20	8	1	1	1	3	1	8	43

第30表 砥石砥面状態表

	荒砥	中砥	細砥	合計(点)
A類	6	2	1	9
B1類	1	1		2
B2類			10	10
B3類			2	2
分類不可	6	12	2	20
合計(点)	13	15	15	43



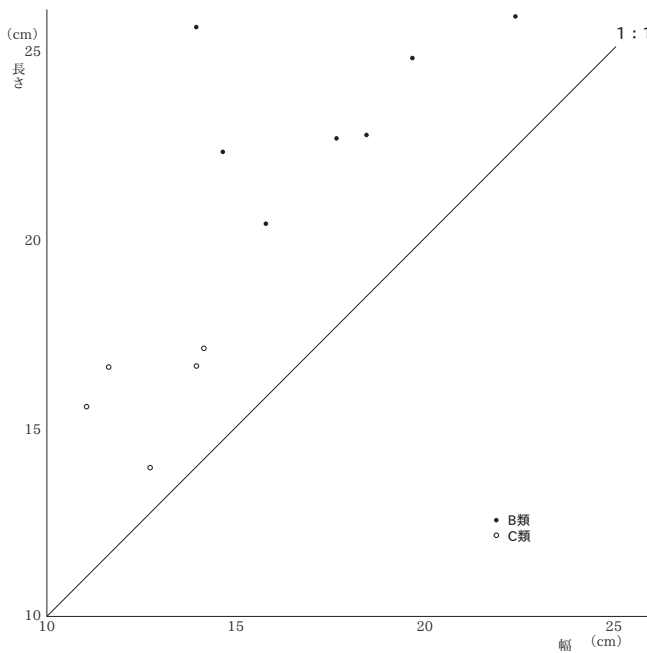
第49図 台石類分類図

獲得時の礫面を無加工のまま使用している。

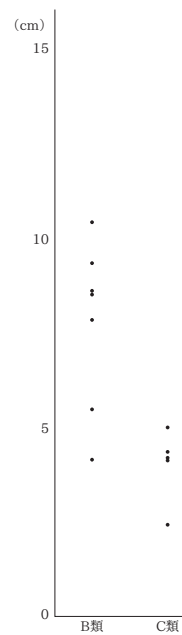
分類不可 破片資料のため分類できないものである。ほとんどがB類の破片資料と考えている。

分類別出土数と出土分布 すべて包含層出土であり、遺構に伴うものは皆無である。分類別ではB類が28点で最も多く、次いでC類5点、A類4点である。出土分布は砂丘南西部の緩斜面から斜面の2C-1H・1Iに集中傾向が見られた。分類別ではB類・A類が2C-1Iに集中出土が特筆されるのに対し、分類不可は分散出土する傾向が見られた。

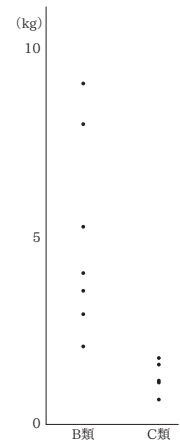
長さ と 幅 第50図参照。完形・ほぼ完形のB類7点、C類5点の12点を対象とした。長さを分類基準にしているため、B類は18cm以上、C類は18cm未満になる。幅はB類はほぼ14cm以上、C類はほぼ14cm未満に収まる。



第50図 台石類長幅分布図



第51図 台石類厚さ分布図



第52図 台石類重さ分布図

第31表 台石類石材表

	安山岩	デイサイト	流紋岩	輝緑岩	閃緑岩	花崗閃緑岩	石英閃緑岩	花崗岩	凝灰岩	砂岩	合計(点)
A類	2							1		1	4
B類	2	5	2	1		2	4	12			28
C類	2	1				1		1			5
分類不可	5	5		1	3			8	1	4	27
合計(点)	11	11	2	2	3	3	4	22	1	5	64

第32表 台石類素材表

	扁平礫	扁平円礫	扁平楕円礫	扁平長楕円礫	板状礫	合計(点)
A類	3		1			4
B類	17	2	5	1	3	28
C類		2	3			5
合計(点)	20	4	9	1	3	37

**厚さと重さ** 第51・52図参照。厚さはB類が42～104mm、C類が24～50mm範囲に収まる。長さ・幅を反映し、B類は厚く、C類は薄くなる。重さは大きさを反映し、B類は2kg以上、C類は2kg未満である。

**石材** 第31表参照。総数64点を対象とした。全体的に見ると、花崗岩22点(34.4%)で最も多く、花崗岩を含む閃緑岩・花崗閃緑岩・石英閃緑岩の深成岩系で32点(50.0%)を数え半数を占める。このほか火山岩系の安山岩・デイサイト各11点(各17.2%)が多く使用されている。粒子の粗い岩石が多用され、凝灰岩・砂岩など細かい粒子の岩石の使用は少ない。分類別ではA類・C類の対象数が少なく、比較できなかった。

**素材** 第32表参照。素材のわかるA・B・C類の37点を対象とした。破損品のため、素材の平面形が不明な礫は扁平礫とした。扁平礫20点、扁平楕円礫9点、扁平円礫4点である。礫が板状に割れている板状礫が3点使用されている。

**その他** A類とした4点は使用面を敲打で作出しているが、側面も敲打で成形している。肉眼観察ではあるが被熱の痕跡が認められるものが30点(46.9%)数えた。

**個別遺物の説明** 96～98は敲打により正裏面と側面が成形されている。比較的加工のしやすい砂岩や安山岩が用いられている。100・101・102はB類にもかかわらず、使用面が緩くくぼむことからよく使用されたものと思われる。100は磨痕のほか敲打痕も認められる。105は側縁部付近に剥離が多く見られ、縁辺はつぶれている。106は正裏面に磨痕のほかに中央部を中心に敲打痕も見られる。

**p 剥片類** (図版115・116-107～118)

剥片類に含めたものは石核からの剥離作業によって得られた目的剥片及び屑片、目的剥片や礫から石器を製作する際に生じた剥片(チップや屑片など)、また打面の不明な剥片、風化等により詳細不明な剥片などである。このように様々な剥片類の出土数は、614点で他の縄文遺跡に比べると極めて少ない。石材がすべて外部から搬入される消費遺跡の特徴の一つでもある。

剥片類の大きさは小型のものが多いため、分析は長さまたは幅のどちらかがおおむね20mm以上のもので、石材別にある程度まとまった数の剥片類を対象とした。分析対象数は270点で、剥片類全体614点の44.0%になる。これらの剥片類はごく少数出土の黒曜石、緑色凝灰岩、チャート、硬砂岩などを除き、ほぼ剥片石器の石材を網羅している。したがって、おおむね剥片石器の石材環境を反映するものと思われる。

**石材別分析対象数** 第33表のとおり、270点のうちメノウ77点(28.5%)、頁岩・珪質頁岩・半透明頁岩の頁岩系石材115点(42.6%)、鉄石英(赤・黄)42点(15.6%)、流紋岩28点(10.4%)であり、おおむね剥片石器の石材選択と一致する。これらの石材は関川村上関の獅子舞岩に露頭が見られ、荒川流域で採集される半透明頁岩を除き、新発田市以南で採集できる石材である。したがって、石材環境が悪くすべて搬入石材での消費遺跡ではあるが、剥片石器はほぼ在地石材で賄われている。

第33表 剥片類石材表

石材名	頁岩	珪質頁岩	半透明頁岩	鉄石英(赤)	鉄石英(黄)	メノウ	凝灰岩	流紋岩	合計(点)
出土数(点)	41	30	44	12	30	77	8	28	270

**剥片形状分類** 剥片は一般的に打面と主要剥離面(腹面・裏面)と背面(正面)で構成される。主要剥離面は個々の剥片同士での比較が難しいため、打面の様子と背面の様子の組み合わせから分類した[高橋・鈴木1990]。

【分類】	【背面（正面）の様子】	【打面の様子】
A1 類 (107)	すべて自然面	自然面
A2 類 (108)	すべて自然面	剥離面が1つ
A3 類	すべて自然面	剥離面が2つ以上
B1 類	一部自然面	自然面
B2 類 (109・110)	一部自然面	剥離面が1つ
B3 類 (111)	一部自然面	剥離面が2つ以上
C1 類 (112)	すべて剥離面	自然面
C2 類 (113・114)	すべて剥離面	剥離面が1つ
C3 類 (115・116)	すべて剥離面	剥離面が2つ以上

**分類別出土数** 石材別の分類別出土数は、第34表のとおりである。背面の様子を見ると、すべて剥離面が98点(36.3%)、一部自然面が61点(22.6%)で剥離作業が進行しているものが多い。打面の様子を見ると剥離面が1つは93点(34.4%)、剥離面が2つ以上は43点(15.9%)、自然面は42点(15.6%)で、打面はそれほど複雑ではない。したがって、打面が剥離面1つで背面の剥離が2つ以上のC2類、打面が剥離面1つで背面に自然面が残るB2類が多くなっている。なお分類不可が92点(34.1%)認められ、これらは打面が線状・点状のもの、打面そのものが残っていないものなどである。石材別ではメノウや半透明頁岩に自然礫面が認められるものが多いほかは、分析対象数に違いがあり、有意な比較ができていない。

第34表 剥片類剥片形状表

分類 石材名	A1 類	A2 類	A3 類	B1 類	B2 類	B3 類	C1 類	C2 類	C3 類	分類 不可	合計 (点)
頁岩		3			5	2	1	10	5	15	41
珪質頁岩				1	1	2	3	8	4	11	30
半透明頁岩		1	1	1	7	5	4	4	9	12	44
鉄石英(赤)	2			1	1	1		4	1	2	12
鉄石英(黄)				1	4	1	1	11	3	9	30
メノウ	5	4		8	10	1	10	6	2	31	77
凝灰岩	2				2			1		3	8
流紋岩	1				6	1	1	5	5	9	28
合計(点)	10	8	1	12	36	13	20	49	29	92	270

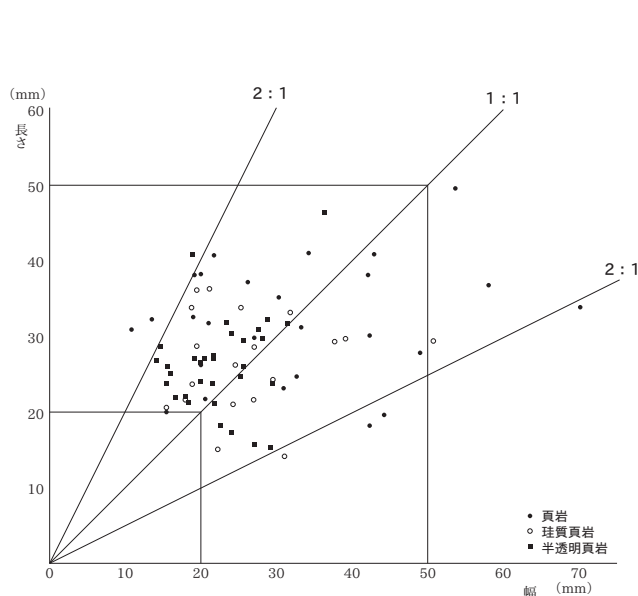
**出土分布** 分析対象の270点のうち、遺構に伴うものは9点を数えたが、縄文時代の遺構からの出土は2点(SK404・405の各1点)のみで、ほかは後世の遺構への紛れ込みである。石材別に出土分布に偏りは見られない。全体的に見ると砂丘西の緩斜面～斜面の2C-1H・1Iに集中し、地形が連続する1C-10H・10I、2C-2H・2Iにも多く分布する。また砂丘頂上部の2D-1B・1Cからの出土もやや目立つ。

**長さ**と**幅** 第53～56図参照。すべて搬入石材であり、少ない石材を有効に使用したことが予想されたため、剥片類も小型であるものと推定した。全体的に見ると15～35mm、幅15～35mmの大きが多い。石材別ではメノウ、頁岩系が小さく、鉄石英(赤・黄)、凝灰岩、流紋岩が大きい傾向にある。また第53図のように頁岩系石材では、半透明頁岩が小さく、頁岩が大きい傾向にあり、珪質頁岩は両者の中間的な大きを示す。メノウ(玉髓)は五頭山地西側に産出し、都辺田川及び支流の海老瀬川で容易に採集される〔村上2021〕。大きさは直径5cm程度の小さい岩塊の状態という<sup>1)</sup>。関川村獅子舞岩露頭の半透明頁岩は、頁岩層中に5～10cm程度のノジュール(団塊)の状態で包含される〔秦2001〕ということから剥片類が小さいことの要因と考えられる。また剥片類に自然礫面が残るものが多いことも裏付けられる。

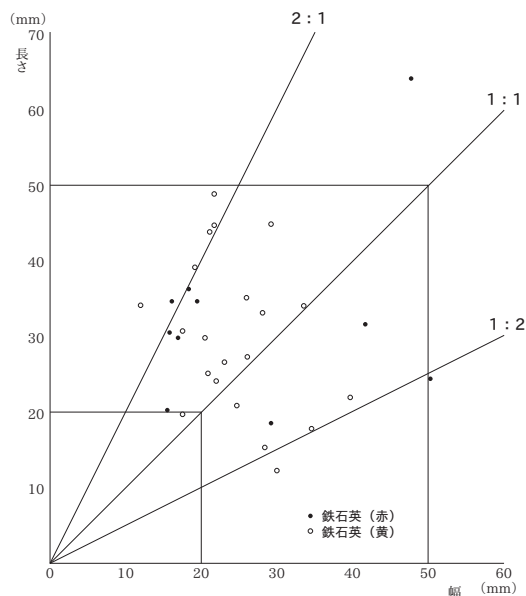
**厚さ**と**重さ** 第57・58図参照。厚さは全体的に見ると5～14mmに多く分布する。石材別では頁岩が5～12mm、珪質頁岩が5～12.5mm、半透明頁岩が6～12mm、メノウが5～14mm、流紋岩が5～13mmにやや集中する傾向が見られるが、鉄石英(赤)、鉄石英(黄)、凝灰岩は集中分布する傾向は見られない。

重さは全体的に見ると2～10gに多く分布する。石材別では頁岩が1.8～11.2g、珪質頁岩が2.0～11.2g、半透明頁岩が1.6～7.8g、鉄石英(黄)が2.0～11.4g、メノウが1.5～8.8g、流紋岩が2.2～9.4gにやや集中する傾向が見られる。鉄石英(赤)、凝灰岩は資料数が少ないため分散する。大きさを反映し半透明頁岩、メ

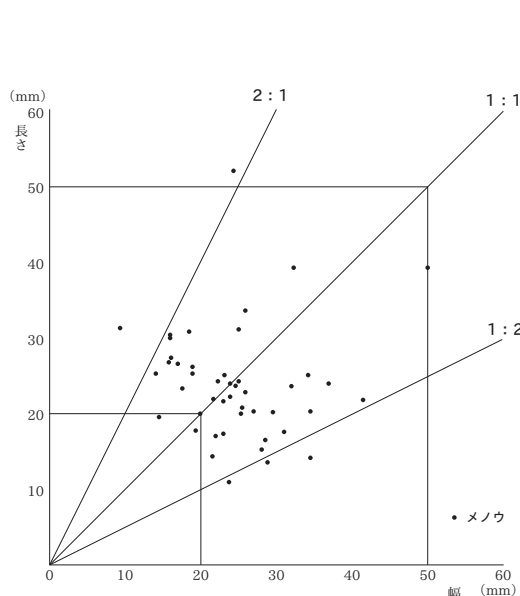
1) 村上章久氏のご教示による。



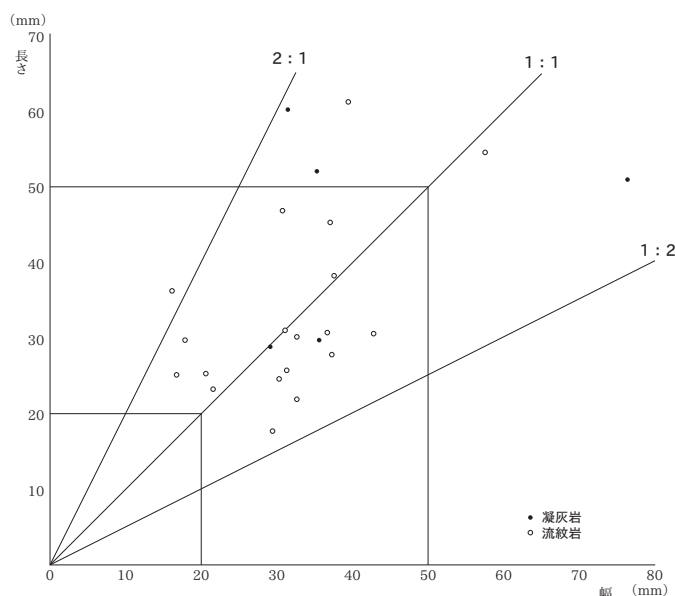
第53図 剥片類（頁岩・珪質頁岩・半透明頁岩）長幅分布図



第54図 剥片類（鉄石英（赤）・鉄石英（黄））長幅分布図



第55図 剥片類（メノウ）長幅分布図



第56図 剥片類（凝灰岩・流紋岩）長幅分布図

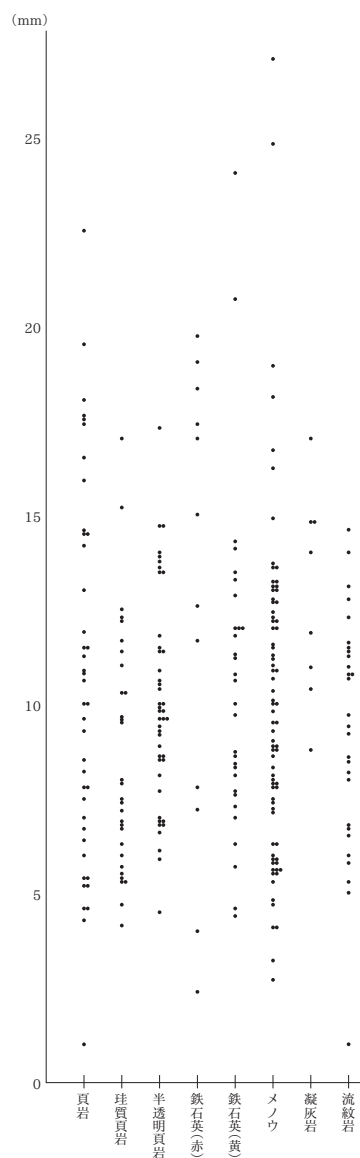
ノウが他の石材に比べ軽い。

**個別遺物の説明** 109は打面の剥離面が1つで、側面の一部に自然礫面が残るB2類の剥片である。正裏面にアスファルトが付着する。アスファルトの付着した剥片は図示した117を含め3点出土するが、意図的に付着したようには見えない。118は長さ27.7mm、幅18.5mm、厚さ16.0mmの小形で厚手の剥片である。側面を中心にベンガラ（酸化第二鉄）が付着する。

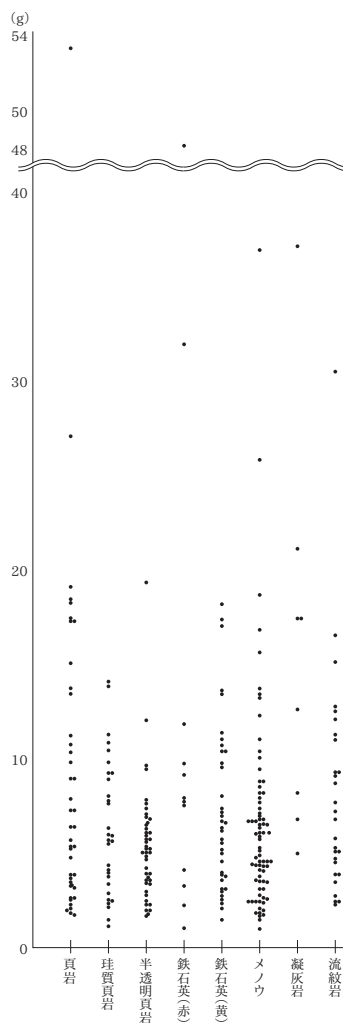
**q 石核** (図版116-119～125)

剥片剥離作業の途中に何らかの理由により剥離作業を断念した残核、または剥片剥離作業終了後の残核である。素材には自然礫、荒割礫、剥片がある。礫の採集できない砂丘地のため、出土した礫、石器類はすべて搬入石材である。したがって、出土した石核は剥離作業が進んだ小型のものが多く、打面転移が頻繁に繰り返され、剥片剥離作業に規則性が見いだせないものが多い。42点抽出し7点図示した。





第 57 図 剥片類厚さ分布図



第 58 図 剥片類重さ分布図

なお、42 点のうち荒割段階のものが 4 点認められた。石材から剥片石器の剥片剥離作業が行われるものと予想されることから石核に含めた。

**分類** 第 59 図参照。南魚沼市五丁歩遺跡〔高橋 1992〕、阿賀町北野遺跡〔高橋 2005〕の分類案を参考に、石核に残された剥離の痕跡から剥離作業に注目し分類した。剥片剥離作業は剥離作業面数、打面数、剥離方法によりさまざまであるが、11 細分し、7 分類にまとめた。これに当てはまらないものは分類不可としたが、多数見られた。

なお玉作資料で石核が出土しているが、剥片石器の石核でないことから別にした。

A 類 (119・120) (剥離作業 1) 同一打面から同一剥離作業面に同方向の剥離作業が行われる。

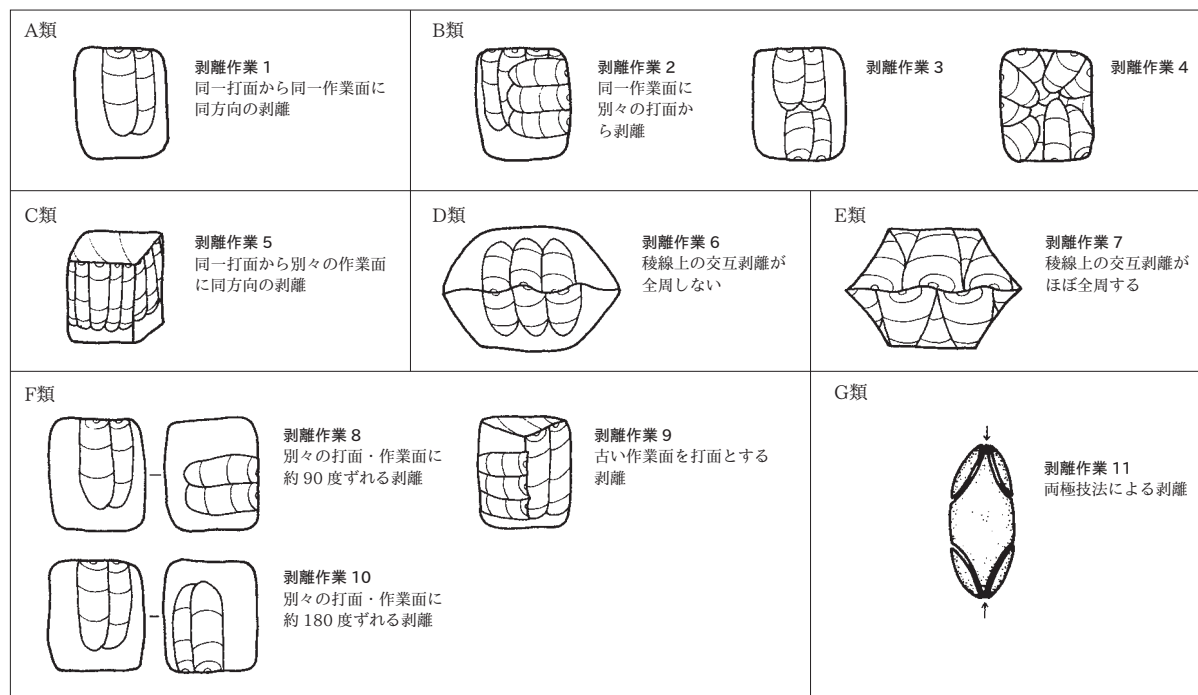
B 類 (121・122) 同一剥離作業面に別々の打面 (約 90°・180°ずれる) から剥離作業が行われる。したがって、打面は 2 面以上で剥離作業面は 1 面である。打面と剥離作業面との関係から次の剥離作業が想定される。

(剥離作業 2) 同一剥離作業面に約 90°ずれた打面からの剥離作業。

(剥離作業 3) 同一剥離作業面に約 180°ずれた打面からの剥離作業。

(剥離作業 4) 同一剥離作業面に約 90°・180°ずれた打面からの剥離作業。

C 類 (剥離作業 5) 同一打面から別々の剥離作業面に同方向の剥離作業が行われる。したがって、打面が 1 面



第 59 図 石核分類図

で剥離作業面が2面以上ある。

D類(123)(剥離作業6) 石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業、あるいは稜線上の片面を剥離後、その剥離面を打面として残りの片面に剥離作業を行う。剥離作業は全周しない。

E類(剥離作業7) 剥離作業6と同じであるが、剥離作業が全周するものである。

F類(124) 別々の打面と別々の剥離作業面で剥離作業が行われる。したがって、打面が2面以上で、剥離作業面が2面以上である。

(剥離作業8) 剥離方向が90°ずれる剥離作業のもの。

(剥離作業9) 片方の打面は古い剥離作業面を利用する。

(剥離作業10) 剥離方向が180°ずれる剥離作業のもの。

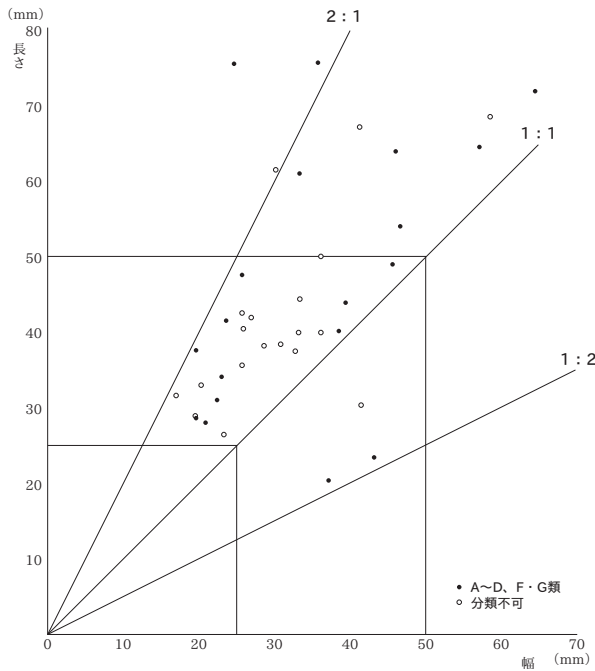
G類(125)(剥離作業11) 両極技法による剥離作業が行われる。「両極剥離痕のある石器」の項目で述べたが大型品は石核に含め、小型品は石核か両極剥離痕のある石器か区別が困難なものもあるため、すべて両極剥離痕のある石器にした。

分類不可 A～G類以外の剥片剥離作業である。そのほとんどがA～F類の剥離作業の組み合わせと推定される。

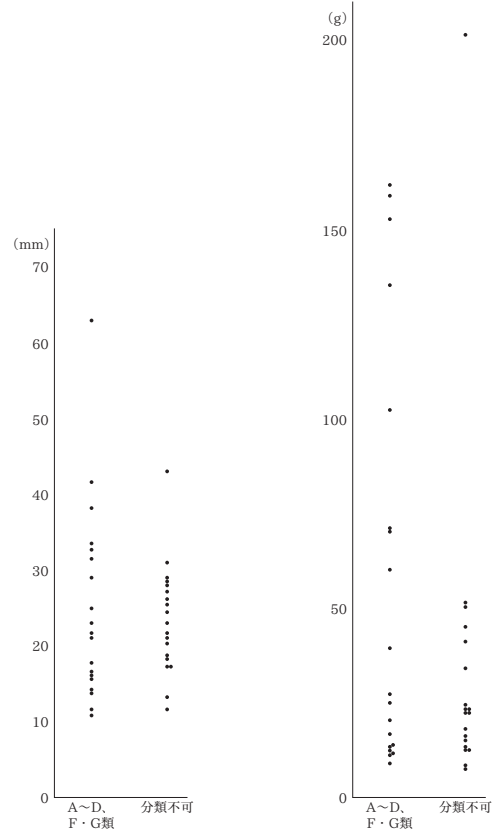
分類別出土数と出土分布 42点のうち1点を除き包含層出土である。遺構出土の1点は、古墳時代のSI266出土の紛れ込みである。分類別では荒割礫の4点を除いた38点を対象とした。E類は皆無で、各類共に2～4点の出土で分類できたものは少ない。分類不可は19点(50.0%)で半数を占める。すべての石材が搬入礫で、小型になるまで徹底的に目的剥片を剥離したことの反映と考えられる。

出土分布は砂丘西側の緩斜面～斜面にかけての1C-10H・10I、2C-1H・1I、2C-2Iに集中し、ほかは散漫に希薄に分布する。分類別の出土分布に片寄りは見られない。

長さ幅 第60図参照。荒割礫の4点を除いた38点を対象とした。全体的に見ると、長さ25～50mm、幅20～40mmに多く分布する。集中域が見られず、広く分布するのに対し、分類不可は長さ25～45mm、幅20～40mmの狭い範囲に集中分布する傾向が見られる。分類不可は徹底的に剥離作業が進み小型化したことを反映している。言い換えればこのくらいの大きさが剥片石器の目的剥片を取る石核の限界と考えることができる。



第 60 図 石核長幅分布図



第 61 図 石核厚さ分布図 第 62 図 石核重さ分布図

**厚さと重さ** 第 61・62 図参照。荒割礫の 4 点を除いた 38 点を対象とした。厚さは全体的に見ると、10～35mm に多く分布する。分類別では分類できた A～D・F・G 類は 10～40mm に広く分布し、分類不可は 15～30mm の狭い範囲に集中分布する傾向が見られる。重さは大きさを反映し、A～D・F・G 類は 10～160g まで広い範囲に分布するのに対し、分類不可は 10～50g の狭い範囲に集中分布する傾向が見られる。

**石材** 第 35 表参照。42 点のうち、頁岩系 14 点 (33.3%) が多く、次いでメノウ・鉄石英 (赤・黄) が各 8 点 (各 19.0%)、流紋岩 5 点 (11.9%) となる。チャートを除いて剥片石器の石材組成と同傾向となる。チャートは 6 点 (14.3%) で剥片石器の石材と比べ多くなるものの、荒割礫の 3 点が同一母岩であることを考慮する必要がある。半透明頁岩以外は新発田地域以南で採集できる石材であり、在地石材といえるであろう。

**素材** 第 36 表参照。石材別の素材について観察した。42 点のうち剥片素材 6 点 (14.3%)、礫素材 19 点 (45.2%)、不明 17 点 (40.5%) である。不明が多いのは剥離作業が進行し、小型の石核が多いためである。礫素材が約半数を占めるが、硬質で緻密な石材から角礫・垂角礫が多い。半透明頁岩はノジュール (団塊) で搬入されたと推定されることからすべて円礫と思われる。しかし、実際の観察では剥離作業が進行し、円礫素材の面影をとどめ

第 35 表 石核石材表

石材名 分類	頁岩	半透明 頁岩	鉄石英 (赤)	鉄石英 (黄)	チャート	メノウ	凝灰岩	流紋岩	合計 (点)
A類			1	1	2				4
B類		1				1		1	3
C類	2		1						3
D類				1			1	1	3
F類	1	1	1			1			4
G類			1			1			2
分類不可	8	1	2		1	4		3	19
荒割礫					3	1			4
合計 (点)	11	3	6	2	6	8	1	5	42

第 36 表 石核素材表

石材	素材	縦長 剥片	横長 剥片	剥片	角礫	垂角礫	円礫	礫	不明	合計 (点)
頁岩				1		3			7	11
半透明頁岩							1	1	1	3
鉄石英 (赤)	1					2			3	6
鉄石英 (黄)	1							1		2
チャート						6				6
メノウ					3	1			4	8
凝灰岩			1							1
流紋岩				2		1			2	5
合計 (点)	2	1	3	3	3	13	1	2	17	42

ていない。これ以外の石材で有意な観察結果は得られていない。

**個別遺物の説明** 119・120は縦長剥片を素材とするA類の石核である。いずれも正面に剥離面打面から縦方向の剥離が見られる。121・122は同一剥離作業面に別々の打面から剥離作業が行われるB類の石核である。121は亜角礫素材の正面に自然面打面から縦方向と右(約90°ずれる)からの剥離が見られる。122は剥離作業が進んだ半透明頁岩の石核で、正面に縦方向と右(約90°ずれる)から、下(約180°ずれる)からの剥離作業が見られる。ほぼ目的剥片を剥離するには限界の大きさと推定される。123はほぼ円盤状の形状の正裏面に稜線上から交互剥離が行われているが、全周はしていないD類である。124は上面・正面・左側面の3面で剥離作業が行われており、F類に属する。125は縦長の素材の上下に打瘤の発達しない剥離が上下に見られることから両極技法の石核でG類に属する。

**r 鏡面状の光沢を有する石器** (図版117-126～129)

長さ5cm前後のやや小ぶりの大きさの楕円球ないし扁平楕円礫の礫面に、光沢を帯びるほどの磨痕が見られる石器である。「鏡面光沢を有する加工礫」〔丹野・原川ほか1999〕とも呼称されている。磨石類の磨痕とは滑らかなさにおいて大きく異なる。類例は東京都多摩ニュータウンNo.796遺跡・同No.67遺跡〔丹野・原川ほか1999〕、阿賀町北野遺跡〔高橋2005〕などで見られる。4点出土し、すべて図示した。126はこの種の石器ではやや大ぶりの不整扁平礫を素材とし、長さ103.5mm、幅67.4mm、厚さ29.2mmを測る。正面がよく使用されており、裏面とは摩滅で大きく異なる。石材はデイサイトである。127はホルンフェルス製のやや小ぶりの扁平礫で、正裏面に弱い光沢を帯びた磨痕が見られる。128は石英閃緑岩製の小ぶりの楕円球で、両端部を除いて摩耗している。129は安山岩製の小ぶりの楕円球で、両端部を除いて摩耗している。被熱による焼きハジケが見られる。砂丘西の斜面から126・128、砂丘頂上部から127、砂丘東の緩斜面から129が出土した。形状、出土地点・層位などを勘案すると縄文時代に所属するものと考えている。

**s 軽石製品** (図版117・118-130～144)

石材が軽石製の石製品ないしは石器の総称である。軽石製石製品〔立木ほか2014〕とも呼称されている。軽石製石製品の出土遺跡を集成・考察した〔立木ほか2014〕によれば、軽石は紀元前3,400年頃に噴火した沼沢火山の噴出物の二次堆積物である。阿賀野川流域及び下流域周辺の遺跡で多く出土している。

軽石は52点出土しているが、何らかの目的をもって遺跡内に搬入したものである。しかし、歯ブラシでこする程度で擦痕が認められ、削れるほどの軟質なものが多いため、次のような分類で軽石製品を認定した。

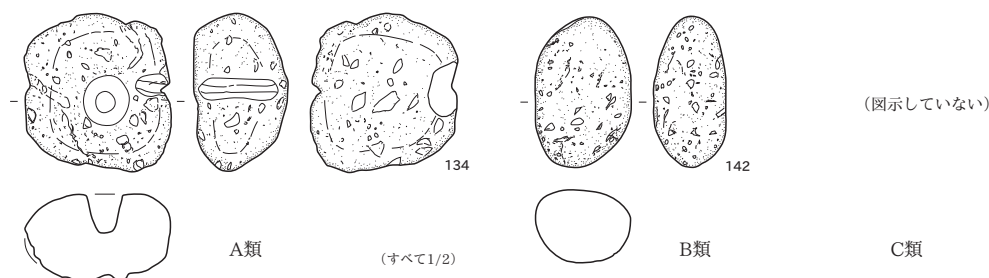
**分類** 第63図参照。軽石の礫面を観察し、加工や使用の結果と思われる痕跡から判断した。

**A類** (130～138) 穿孔や削りなどの加工痕が認められるもの。使用の結果、使用面が平坦状になったりしてほかの面とは異なる形状を示すもの。いわゆる加工や使用が明らかなものである。

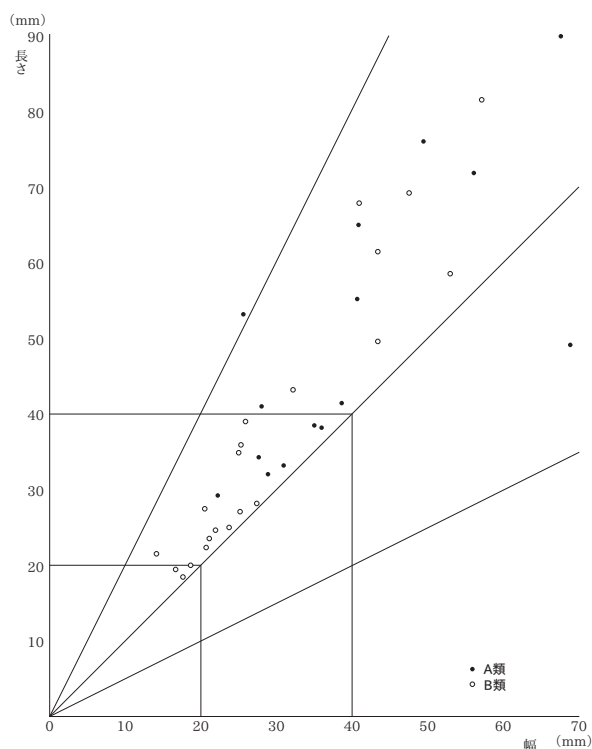
**B類** (139～144) 円球、楕円球、扁平円・楕円礫など形状が整っており、礫面が滑らかなもの。擦痕が見られず使用の痕跡は認められないが、形状や礫面の様子から使用された可能性があるもの。

**C類** (図示していない) 不整形な形で加工や使用の痕跡がまったく感じられないもの。

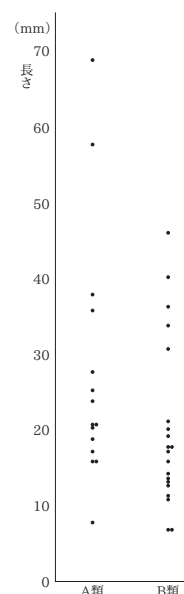
**分類別出土数と出土分布** A類(15点)・B類(20点)を軽石製品と認定し、C類(17点)は搬入礫として処理



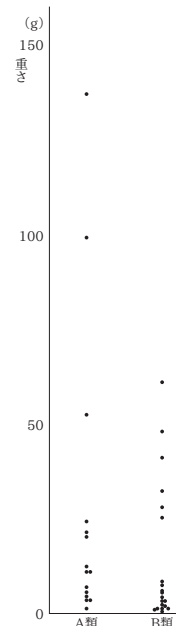
第63図 軽石製品分類図



第 64 図 軽石製品長幅分布図



第 65 図 軽石製品厚さ分布図



第 66 図 軽石製品重さ分布図

した。出土分布は調査区全体に散布する傾向が見られ、これまでの器種石器の分布と大きく異なる。分類別では B 類が砂丘頂上部から東緩斜面にかけてやや多く分布する傾向が見られ、特に東緩斜面の 1D-10E23 ~ 25 で 6 点出土している。出土分布状況から縄文時代から古墳時代、平安時代まで各時代で使用されたものと推定される。

**長さ**と**幅** 第 64 図参照。全体的に見ると長さ 20 ~ 45mm、幅 15 ~ 45mm の範囲に多く分布する。分類別では A 類が長さ 30 ~ 45mm、幅 25 ~ 45mm、B 類が長さ 15 ~ 40mm、幅 15 ~ 30mm に多く分布する。B 類が A 類に比べ小型のものが多い傾向が見られる。

**厚さ**と**重さ** 第 65・66 図参照。厚さは全体的に見ると 10 ~ 40mm の範囲に多く分布する。分類別では A 類が 15 ~ 30mm、B 類が 10 ~ 25mm に多く分布し、B 類が A 類に比べ薄い傾向が見られる。重さは大きさを反映し A 類が 0 ~ 25g、B 類が 0 ~ 10g の範囲に多く分布し、B 類は A 類に比べ軽い傾向が見られる。

**個別遺物の説明** 130 は正面、131 は正裏面及び両側面、135・138 は正裏面が使用により平面状になったものと思われる。132 は正裏面、133 は正面をあらかじめ平面状に加工した可能性が高い。134 は正面に穿孔痕、右側面に溝が刻まれ、136 は正面が凹状に削られている。137 は正裏面、右側面に細かな削れ痕が見られる、右側面の一部に擦痕が認められる。

**t 玉作資料** (図版 118-145)

1 点のみの出土で、逆四角錐状の石核である。長さ 64.7mm、幅 45.7mm、厚さ 43.3mm を測り、大きさから素材はこぶし大の礫と推定される。上面・正面・両側面の 4 面に平坦面が見られ、裏面はほぼ自然礫面である。石材は珪化度が高く極細粒で緻密な石質で、濃緑色を呈する緑色凝灰岩である。石材から玉作資料の第 1 工程品と判断した。なお、図示していないが良質な緑色凝灰岩のチップが 1 点出土している。また緑色凝灰岩の玉作資料は隣接する岡崎遺跡で少量ながらまとまって出土しており、岡崎遺跡との関連がうかがわれる。

**u 石棒類** (図版 118-146 ~ 151)

すべて破片資料であり、横断面の形状から小型石棒、石刀、石剣の破片と思われる。器種は個々の遺物説明で記述するが、石棒類としてまとめた。なお器種特定は「身の横断面形態の分類」〔後藤 1986〕を参考にした。11

点出土したが、図示した6点以外は小破片である。出土分布はほかの石器と同じように砂丘西の緩斜面～斜面にかけて多く出土し、特に2C-IIでは5点出土した。石材は150が灰色粘板岩、151が砂質粘板岩、ほかは黒色粘板岩である。

**個別遺物の説明** 146は胴部破片であり、横断面が円形と推定されることから小型石棒と思われる。147は区画部から胴部にかけての破片であり、区画部には1条の沈線と敲打痕が巡る。胴部の横断面は楕円形の2側縁に弱い稜が認められることから熊登型石剣に分類される。熊登型石剣は晩期前葉の所産〔後藤1986〕、後期末葉に出現し、晩期前葉に盛行〔池田2003〕するとされる。その終焉はこれまで不明確であったが、本例から晩期中葉まで確実に存続する。148・150は胴部の破片と推定されるが、横断面から器種の特定はできなかった。149は小破片ながら横断面の形状から刃部が1側縁になるものと推定されることから石刀と思われる。151は胴部破片であり、横断面から石刀の破片〔後藤1986〕である。

#### v その他の石製品 (図版119-152・153)

152は石冠未成品である。素材は断面三角形の棒状礫で、角張った部分を中心に剥離・敲打を施している。未成品ながら上部が尖るいわゆる「石斧形石冠」〔滝沢2002〕と推定できる。左側面の破損面は上部からの剥離痕であり、上部の成形時に破損し製作をあきらめたものと推測される。底面の敲打はほとんど見られず平坦な面を持つ。石材はホルンフェルスである。

153は独鈷状石器で、晩期中葉の時期が特定できる資料となる。中間部に全周する抉りが施され、先端部は丸味を帯びた円錐状呈する。約1/2を欠損するが、欠損部分も同様な形状で左右対称を示すものと推定される。県内の独鈷状石器を集成した〔滝沢2001〕によればIa1類に分類される。全面にていねいな敲打が施され滑らかに仕上げられている。抉り部は特に滑らかになっており、紐などを巻いた可能性もある。器面には被熱の痕跡が認められ、一部に被熱のハジケが見られる。欠損面と器面では煤の付着や被熱の痕跡が異なり、欠損面には衝撃による剥離の痕跡が見られないことから、被熱後にハジケ割れた可能性がある。石材は安山岩である。

#### w 玉類 (図版119-154～159)

ここで取り上げる玉類は縄文時代晩期中葉に所属すると推定されるものである。160・161は古墳時代前期に所属すると推定されることから後述する。154～158はヒスイ製の玉類である。154・155は勾玉で相対的に見て平面形は近似する。いずれも平面形は滑らかさにやや欠け、頭部から背部、頭部から腹部にかけて素材の形状がやや残り滑らかな曲線を描いていない。腹部の抉りは154が155に比べ浅い。したがって、尾部は154が下に伸びるのに対し、155は横に伸びる感じである。154は両側穿孔で、155は片側穿孔で裏側には穿孔による剥落が見られる。大きさは154が長さ48.0mm、幅27.0mm、厚さ18.9mm、重さ38.9g、155が長さ16.6mm、幅10.5mm、厚さ5.6mm、重さ1.6gで、大きさに著しい違いが見られる。なお、154は新潟県内出土のヒスイ製勾玉では最大の大きさとなる。また、村上市元屋敷遺跡出土の勾玉(遺物No.1277)で大きさ(長さ44.0mm、重さ20.7g)が一回り小さいものの、平面形状がほぼ同じもの〔池田2002〕が見られる。156は背部が滑らかな曲面で、腹部の膨らみの上下に刻みをもつ不定形垂玉〔池田2002〕である。片側穿孔で、裏側は穿孔による剥落が見られる。長さ27.4mm、重さ7.2gを測る。村上市元屋敷遺跡出土の不定形垂玉(遺物No.1114)に近似する。157は平面円形、断面白形を呈する丸玉である。両側穿孔であるが、穿孔にずれが見られる。風化が著しく剥落も見られるが、色調や風化したヒスイの特徴からヒスイと判断した。径16.0～16.8mm、厚さ11.2mm、重さ4.1gを測る。158は上下の両端から管状の穿孔が見られる玉である。中間部が上下の端部に比べ膨らみを持つことから棗玉<sup>1)</sup>とした。また厚さに比べ、幅が大きいことから横断面は隅丸長形状を呈する。長さ21.5mm、幅10.3mm、厚さ7.3mm、重さ3.1gを測る。村上市元屋敷遺跡で管玉(遺物No.1274・1279)としたものに近似する。なお、154がSD451、156・158はSK400からの出土であるが、後世の遺構への紛

1) 橋本博文氏のご教示による。また〔樋口1940〕でも同様の分類が見られる。

れ込みと推定される。159は滑石製のいわゆる「根付状の垂玉」〔樋口1940〕である。上下の一部を欠損するが全体の形状は推定できる。上下の端は平らで、上面には上端径11.8mm、中端径6.5mmの穿孔が見られ、口縁部外側には左右に細い溝が見られ口唇部を強調している。下面にも同様の穿孔があったものと推測できる。垂玉中央部には10～13mmほどの透かしがあり、環状の垂玉となる。左右の環状部の正裏面の上下にはへこみが見られ、その間は膨らみを持つ。根付状の垂玉は、「ほとんどが鹿角製、まれに土石製があり、宮城・秋田・岩手・青森地方に限って発見され、後期末の所産」〔樋口1940〕されている。したがって、出土地域、材質、時期において極めて注目される。管見では県内初出土と思われる。

x 管 玉 (図版119-160・161)

160・161は緑色凝灰岩製の細形管玉である。いずれも完形で、160は長さ15.7mm、太さ5.9mm、重さ0.9g、161は長さ14.1mm、太さ5.7mm、重さ0.8gを測る。160は2C-2I9のVIa層、161はSI266覆土2層から出土で、出土層位、形状から古墳時代前期に所属すると判断した。

F 木 製 品 (図版120・121、写真図版115・116、別表8)

出土した木製品は35点である。その内訳は第37表のとおりである。時期別では古墳時代前期2点、平安時代28点、中世以降5点である。古墳時代前期、平安時代の木製品はすべて遺構に伴うものであり、中世以降としたものは出土層位から判断した。なお中世以降としたものは他所から流れ着いたものと思われる。種類別では柱根が20点、井戸の水溜1点、板材11点、角材1点、椀1点、種類不明1点である。

掲載した木製品は古墳時代前期と平安時代の木製品で、残りの良いものを中心に図示した。なお木製品観察表は残りが悪くとも自然科学分析を依頼したものがあため、遺存状態にかかわらず古墳時代前期と平安時代の木製品はすべて掲載した。

以下、掲載順(遺構毎)に説明する。

第37表 木製品時期別種類別出土数

時期 \ 種類	柱根	剝物・水溜	板材	角材	椀	不明	合計(点)
古墳時代前期	2						2
平安時代	18	1	8			1	28
中世以降			3	1	1		5
合計(点)	20	1	11	1	1	1	35

SI266 (図版120-1・2)

1はP399、2がP550の主柱穴の柱根である。太さ16～18cmほどの芯持丸木を用い、底面は平らに仕上げている。樹種は1がケヤキ、2は1との比較観察の限りではケヤキである。1と2は使われ方、太さ、木取り、底面加工、樹種においてほぼ同じである。

SB330 (図版120-3～9)

9点の木製品が出土し、柱根8点、板材1点である。このうち遺存状態の良い7点を図示した。6は本柱の、このほかは側柱の柱根である。太さは13～18cmほどの太さの芯持丸木を用いている。6は腐植しているが、10cm以上の太さになるものと思われる。底面の加工状態は、平坦2点、段差2点、両刃状の尖底2点、斜め1点である。樹種は図示していないものも含め、トネリコ属5点、ケヤキ1点、コナラ属コナラ節1点である。6は不明としたが、3・4との比較観察ではトネリコ属である。トネリコ属は別名「タモの木」とも呼ばれ、強固で高い弾力性を持つと言われている。このほか6は正裏面に、8は両側面に面取りが認められた。なお3の放射性炭素年代測定結果は1250±20(yrBP)、暦年較正年代(1σ)は791-821 cal ADの範囲で示されている(第IV章第5節B1)道正遺跡における放射性炭素年代参照)。

SB521 (図版120・121-10～13)

6点の木製品が出土し、柱根が5点、不明木製品が1点出土している。10は本柱穴の底面で側面横になるように出土したものである(写真図版25右上参照)。木取りは柁目材で、長さ12.0cm、幅2.3cm、厚さ2.0cmを測る。側面観は舟形状を呈するが、正面に凹み(削り抜き)が見られないことから不明木製品とした。樹種同定は行っていない。出土状況、大きさ、形状から何らかの意図をもって埋納したものと考えられる。柱根5点は遺存状態が良いもの3点を図示した。太さは9.5～16.0cmでややむらがあるものの、いずれも芯持丸木を用いている。

底面は11・12が両刃状の尖底、13が鋭い尖底となる。樹種はトネリコ属2点、クリ1点、ニレ属1点、不明1点である。13の右側面に面取りが認められた。なお12の放射性炭素年代測定結果は1300±20 (yrBP)、暦年較正年代(1σ)は741-772 cal ADの範囲で示されている(第IV章第5節B1)道正遺跡における放射性炭素年代参照)。

**SB558** (図版121-14・15)

3点の木製品が出土し、すべて側柱の柱根である。遺存状態が良いもの2点を図示した。太さは8.0～10.0cmとやや細いものの、いずれも芯持丸木を用いている。底面は14が両刃状の尖底、15が平坦となる。樹種はヤナギ属1点、ハンノキ属ハンノキ節1点、不明1点である。

**SE268** (図版121-16)

芯持丸木の削り抜き材の水溜で、井戸の底面に据えられていた。材の厚さ6.5cm、径43cmほどの大きさと、高さ16cmほど遺存していた。樹種はコナラ属コナラ節である。なお、放射性炭素年代測定結果は1220±20 (yrBP)、暦年較正年代(1σ)は850-876 cal ADの範囲で示されている(第IV章第5節B1)道正遺跡における放射性炭素年代参照)。

**SX517** (図版121-17～22)

溝状の遺構から出土した7点の板材のうち6点を掲載した<sup>1)</sup>。いずれも底面付近から出土している。図版24-SX517平面図のように、17～21(SX517-①～⑤)は遺構の壁沿いに据えられていることから遺構内部と壁を仕切るためのものであり、土留めに使われたものと考えている。22(SX517-⑥)は遺構内部を横断して据えられており、遺構内部を仕切るかあるいは17～21が内側に倒壊するのを防ぐための支えとなったものと考えている。いずれも板材の上層部は腐植により消失しているため詳細は不明である。掲載した6点の木取りはすべて板目で、樹種もすべてスギであることから同一木材からの部材と推定される。なお18の放射性炭素年代測定結果は1250±20 (yrBP)、暦年較正年代(1σ)は791-821 cal ADの範囲で示されている(第IV章第5節B1)道正遺跡における放射性炭素年代参照)。

**G 鍛冶関連遺物** (写真図版116、別表9)

出土点数は16点で、すべて鉄滓である。実測図で図示していないが、写真図版で5点掲載した。遺構に伴うものはなく、すべて遺物包含層出土で、出土層位から平安時代の所産である。出土分布は2D-1A19～2D-1B7・9・21にかけて5点、2C-2J6～9にかけて4点出土している。出土総数が少ないにもかかわらず集中出土が見られたが、鍛冶関連遺物は検出していない。しかし、2C-2J6～9は調査区外に接する位置であり、南側の調査区外に鍛冶関連遺物が存在する可能性もある。1・2・4は多孔質で軽く、マグネット式吸着器の反応を示さない。3・5はマグネット式吸着器に反応を示すことから鉄分を含み、形状から椀形滓と思われる。なお写真掲載していないが、マグネット式吸着器に強く反応するものが1点あり、鉄塊を含む鉄滓と判断した。

本遺跡から約10km南に存在する金津丘陵製鉄遺跡群では、9世紀第2四半期～第4四半期に豎形炉による鉄生産〔渡邊1998〕が行われている。本遺跡では鉄製品は出土していないが、金津丘陵製鉄遺跡群で生産された鉄を搬入し、小規模に鉄製品を生産、修理などの野鍛冶が行われた可能性も考えられる。

**H アスファルト** (写真図版116、別表10)

10点出土している。実測図で図示していないが、写真図版で4点掲載した。遺構に伴うものは1点(SD543)あるが後世の遺構への紛れ込みと考えられる。本遺跡の縄文時代の剥片石器に多用されることや、出土層位から縄文時代晩期の所産と推定される。出土分布は砂丘南西部緩斜面の2C-2H、2C-1I・2Iに7点出土し、出土数

1) 未掲載の1点は腐植が激しく、原形をとどめないものである。



が少ないながら集中化が見られる。縄文時代晩期の石器の出土分布と一致する。形状は扁平なもの6点、塊状2点、棒状1点である。重さは1.0～23.6gまでであるが、おおむね11g前後が多い。1は扁平不整形の大型品であり、不純物の砂粒がわずかにみられる。2は不整棒状を呈する。砂粒の不純物が多く見られる。3は扁平不整形な小型品であり、不純物の砂粒がわずかに見られる。4は扁平三角形状を呈し、不純物は少ない。

本遺跡から約10km南に位置する新津丘陵は石油の産出地として知られており、新津丘陵の山裾部において現在でも原油の湧出（鎌倉新田）を見ることができている。また近くの大沢谷内遺跡（縄文時代晩期中葉）ではアスファルトの精製作業が行われた可能性を示す資料が出土している（伊比ほか2012）。時期がほぼ同じ大沢谷内遺跡の精製アスファルトが搬入された可能性が高いと考えられる。

### I 搬入礫（図版105）

第38表参照。発掘調査で出土した搬入礫は115.935kg（2340点）である。このうち肉眼観察ではあるが被熱礫62.129kg（865点）を量り、重さで53.6%を占めることになる。遺構に伴うものは9.423kgで搬入礫全体の8.1%で非常に少ない。遺物包含層の層位別にみると平安時代の遺物包含層のV層<sup>1)</sup>からVIIa層（縄文時代晩期の遺構確認面）まで各層からまんべんなく出土しており、それぞれの時代に必要な礫を搬入したものと考えられる。

図版105の搬入礫出土分布図をみると砂丘西の緩斜面～斜面にかけて多く出土し、砂丘頂上部に行くにしたがいやや少なくなり、砂丘東側の緩斜面では非常に少なくなる。搬入礫の出土分布は遺構の分布状況と砂丘の地形を反映している。図版105の石器出土分布図との比較で石器は搬入礫以上に砂丘西の緩斜面～斜面に集中する傾向が見られる。石器は縄文時代の所産が多いのに対し、搬入礫は各時代にそれぞれ所属する違いを反映したものである。

第38表 搬入礫・被熱礫出土表

層位ほか	種別	搬入礫		搬入礫の内の被熱礫	
		出土数(点)	重さ(g)	出土数(点)	重さ(g)
遺構出土		419	9,423	131	4,465
IV層		1	26	0	0
V層		846	35,721	316	23,546
VI層		122	6,912	30	959
VIa層		439	13,448	154	7,811
VIb層		18	2,132	5	1,621
VI・VII層		27	1,131	12	902
VIc1層		24	569	10	370
VIc2層		30	3,155	12	977
VIc層		235	25,203	111	11,819
VIIa層		130	16,886	70	9,496
試掘ほか		49	1,329	14	163
合計		2,340	115,935	865	62,129

## 第5節 道正遺跡の自然科学分析

### A 道正遺跡の自然科学分析（令和2年度分）

株式会社 古環境研究所

新潟市江南区に所在する道正遺跡は、亀田砂丘西端部に位置し、西は信濃川、東は阿賀野川、南は小阿賀野川に囲まれた沖積微高地上に立地する。発掘調査では、縄文時代晩期の埋設土器や土器、石器、古墳時代前期の竪穴建物や土器、平安時代の掘立柱建物、井戸、土坑などの遺構や遺物が検出されている。

本報告では、土層の堆積年代に関する資料を得る目的で放射性炭素年代測定を、各時期の周辺植生と堆積環境を検討する目的で花粉分析と珪藻分析を行う。

#### 1) 放射性炭素年代測定

##### a 試料

試料は、基本土層のVc層、Vd層、VIb層、VIIb層、Vd層から出土した炭化物、種子、木片の5点である。第39表に、測定試料の詳細と前処理・調整法及び測定法を示す。

第39表 測定試料及び処理

試料番号	グリッド	試料採取箇所・土層	試料	前処理・調整	測定法
No.1	1C-9I23	基本土層・Vc	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
No.2	1C-9I23	基本土層・Vd	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
No.3	1C-10H15	基本土層・VIb	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
No.4	1C-10H15	基本土層・VIb	種子	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
No.5	1C-10I7	基本土層・Vd	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS

\*AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

1) ほとんどがVd層からの出土で平安時代の遺物包含層である。

## b 方 法

## (1) 化学処理

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常  $1\text{mol}/\ell$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

## (2) 測 定

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 ( $\text{HOx II}$ ) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## (3) 算 出

(1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。

(2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach, 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma=68.3\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 データベース (Reimer et al., 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (BronkRamsey, 2009) を使用する。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

## c 結 果

5 試料に関する個別の  $^{14}\text{C}$  年代測定と暦年較正の結果を第 40 表と第 67 図に示す。

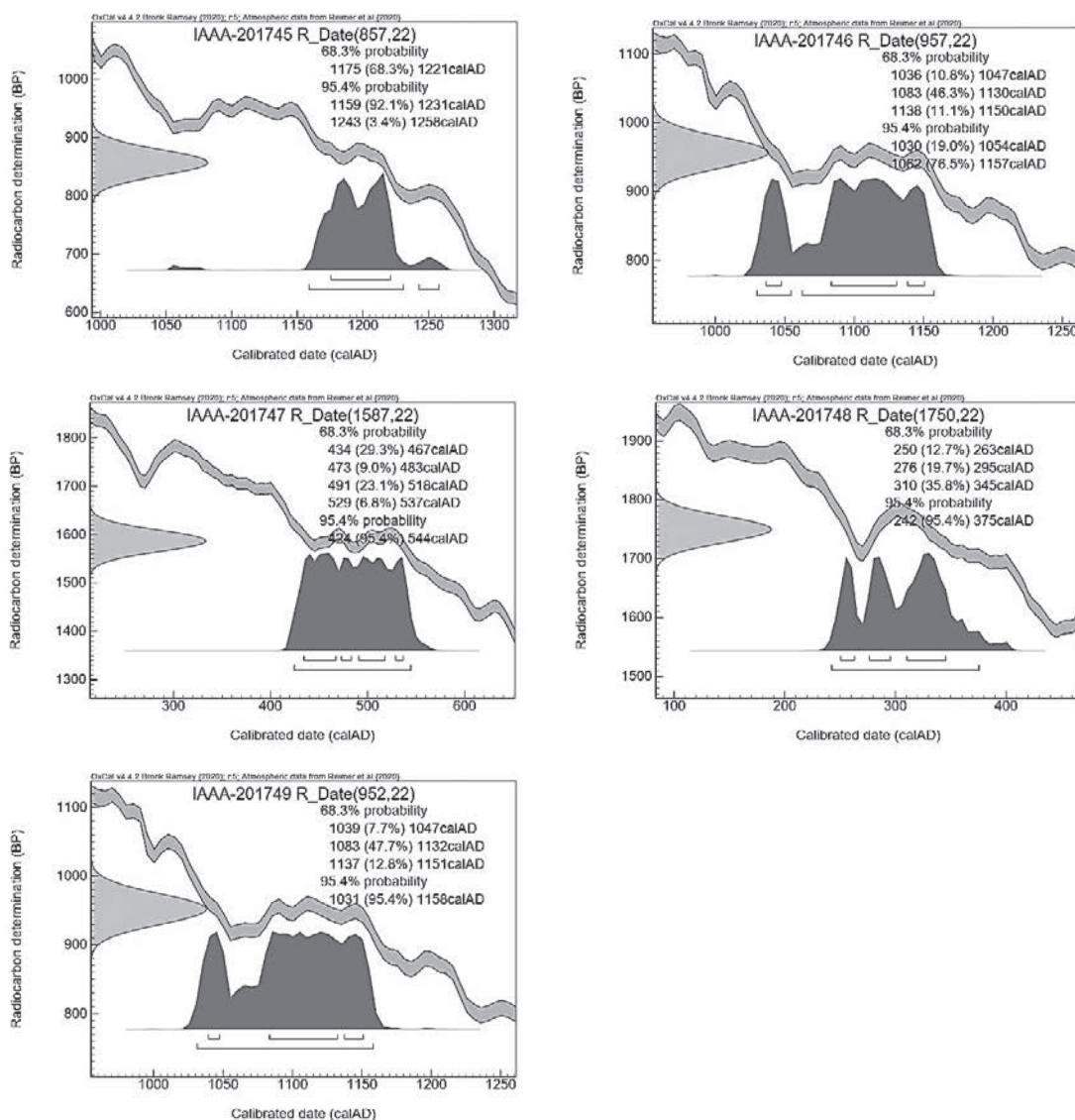
## d 所 見

道正遺跡の土層堆積年代を検討する目的で、加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、基本土層の Vc 層 (②) で出土した炭化物は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $880\pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は 1159 cal AD ~ 1231 cal AD (92.1%)、1243 cal AD ~ 1258 cal AD (3.4%)、Vd 層 (⑤) で出土した炭化物は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $960\pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は 1030 cal AD ~ 1054 cal AD (19.0%)、1062 cal AD ~ 1157 cal AD (76.5%)、Vib 層 (①) で出土した炭化物は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1590\pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は 424 cal AD ~ 544 cal AD (95.4%)、Vib 層 (⑤) で出土した種実は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1750\pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は 242 cal AD ~ 375 cal AD (95.4%)、Vd 層から出土した木片は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $950\pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は 1031 cal AD ~ 1158 cal AD (95.4%) であった。

第40表 測定結果

試料番号	測定No. (IAAA-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (年BP)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1 $\sigma$ (68.3%確率)	2 $\sigma$ (95.4%確率)
No.1	201745	-25.38 $\pm$ 0.20	857 $\pm$ 22	860 $\pm$ 20	1175 calAD - 1221 calAD (68.3%)	1159 calAD - 1231 calAD (92.1%) 1243 calAD - 1258 calAD (3.4%)
No.2	201746	-27.73 $\pm$ 0.18	957 $\pm$ 22	960 $\pm$ 20	1036 calAD - 1047 calAD (10.8%) 1083 calAD - 1130 calAD (46.3%) 1138 calAD - 1150 calAD (11.1%)	1030 calAD - 1054 calAD (19.0%) 1062 calAD - 1157 calAD (76.5%)
No.3	201747	-28.30 $\pm$ 0.21	1587 $\pm$ 22	1590 $\pm$ 20	434 calAD - 467 calAD (29.3%) 473 calAD - 483 calAD (9.0%) 491 calAD - 518 calAD (23.1%) 529 calAD - 537 calAD (6.8%)	424 calAD - 544 calAD (95.4%)
No.4	201748	-28.30 $\pm$ 0.21	1750 $\pm$ 22	1750 $\pm$ 20	250 calAD - 263 calAD (12.7%) 276 calAD - 295 calAD (19.7%) 310 calAD - 345 calAD (35.8%)	242 calAD - 375 calAD (95.4%)
No.5	201749	-24.80 $\pm$ 0.19	952 $\pm$ 22	950 $\pm$ 20	1039 calAD - 1047 calAD (7.7%) 1083 calAD - 1132 calAD (47.7%) 1137 calAD - 1151 calAD (12.8%)	1031 calAD - 1158 calAD (95.4%)

BP : Before Physics (Present), AD : 紀元



第 67 図 暦年較正結果

## 2) 花粉分析

### a 試料

分析試料は、1C-9I23 グリッド及び 1C-10H15 グリッドの Vc 層から VIIa 層より採取された 9 点である。1C-9I23 グリッドの Vc ② (試料 No.1) は平安時代以降、Vd ⑤ (試料 No.2)、VIa ① (試料 No.3) は平安時代、VIa ③ (試料 No.4)、VIc1 ② (試料 No.7) は古墳時代、VIc2 ② (試料 No.8)、VIIa ② (試料 No.9) は縄文

時代である。1C-10H15 グリッドのVIb (①) (試料 No.5)、VIb (⑤) (試料 No.6) は古墳時代である。

#### b 方 法

花粉の分離抽出は、中村 (1967) の方法をもとに、以下の手順で行った。

1. 試料から 1cm<sup>3</sup> を採量
2. 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎
3. 水洗処理の後、0.25mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
4. 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
5. 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎) を施す
6. 再び氷酢酸を加えて水洗処理
7. 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
8. 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節及び種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉 (1973)、中村 (1980) を参照して行った。イネ属については、中村 (1974・1977) を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、花粉分類では樹木花粉 (AP) 及び非樹木花粉 (NAP) となるが非樹木花粉 (NAP) は草本花粉として示した。

#### c 結 果

##### (1) 分類群

産出した分類群は、樹木花粉 35、樹木花粉と草本花粉を含むもの 5、草本花粉 21、シダ植物孢子 2 形態の計 63 分類群である。これらの学名と和名及び粒数を第 41 表に示し、花粉数が 100 個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 68 図に示す。また、主要な分類群は顕微鏡写真を第 69 図に示した。同時に、寄生虫卵についても検鏡した結果、2 分類群が検出された。以下に産出した分類群を記載する。

##### 〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ノブドウ、グミ属、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、スイカズラ属

##### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

##### 〔草本花粉〕

ドクダミ科、ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、イボクサ、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンボウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

##### 〔シダ植物孢子〕

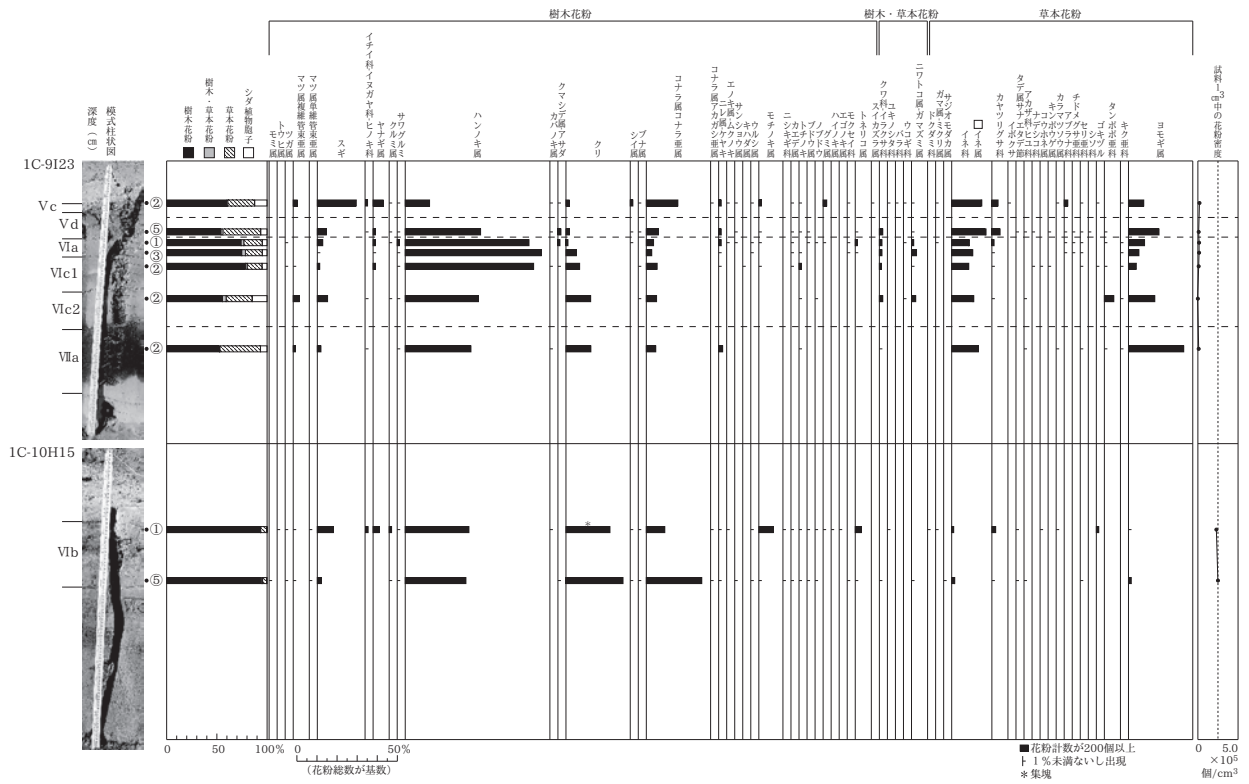
単条溝孢子、三条溝孢子

##### 〔寄生虫卵〕

毛細線虫属卵、不明虫卵

第41表 道正遺跡における花粉分析結果

分類群	学名	和名	1C-9I23グリッド				1C-10H15グリッド		1C-9I23グリッド		
			Vc (②)	Vd (⑤)	Vla (①)	Vla (③)	Vlb (①)	Vlb (⑤)	Vlc1 (②)	Vlc2 (②)	Vla (②)
			1	2	3	4	5	6	7	8	9
Arboreal pollen		樹木花粉									
<i>Abies</i>		モミ属						1			
<i>Picea</i>		トウヒ属					1				
<i>Tsuga</i>		ツガ属			1			1	1		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	8					5	5	1	7
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i>		マツ属単管束亜属						2	2		5
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	74	24	14	2	54	20	5	12	8
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4	2			9			1	1
<i>Salix</i>		ヤナギ属	19	6	6	1	20		5		
<i>Juglans</i>		クルミ属	1	1	3		8	4		1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ	1	3	5	1	6	3	1	1	2
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	46	200	324	302	213	295	262	86	145
<i>Betula</i>		カバノキ属	2	5			3		1		1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマンデ属-アサダ	3	8	5			5	2		
<i>Castanea crenata</i>		クリ	6	9	5	23	147	278	28	29	55
<i>Castanopsis</i>		シイ属	5	1	1		1	4			
<i>Fagus</i>		ブナ属	3	1			4	3	1	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	60	32	19	12	62	270	22	12	21
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガン亜属	1				1	3		1	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	5	7	7	1	6	9	2		9
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	2	1	1		1				
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属	2	1	1						
<i>Phellodendron</i>		キハダ属							1		
<i>Rhus</i>		ウルシ属	1		3	1	3	1			
<i>Ilex</i>		モチノキ属	5	1	2		48	6	1		
Celastraceae		ニシキギ科					1	1			
<i>Acer</i>		カエデ属	2	2	2	1	1	2	1		
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	1	1		3	3	4	5	2	2
<i>Vitis</i>		ブドウ属		4	3		1	1			
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>		ノブドウ			1		1	3		1	
<i>Elaeagnus</i>		グミ属	7		1		2				
<i>Symplocos</i>		ハイノキ属					1				
<i>Syrax</i>		エゴノキ属					3				
Oleaceae		モクセイ科	1		1	1		1			
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属		1	5	2	20	6			
<i>Lonicera</i>		スイカズラ属	1								
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木 · 草本花粉		9	7	6		8	4	4	2
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科									
Saxifragaceae		ユキノシタ科	1				1				
Rosaceae		バラ科	1								
Araliaceae		ウコギ科	1		1					1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニフトコ属-ガマズミ属	2	2	6	11		1	3	5	
Nonarboreal pollen		草本花粉									
Saururaceae		ドクダミ科					2				
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	3		2		5				
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属						1			
Gramineae		イネ科	56	89	44	45	7	14	35	25	59
<i>Oryza</i>		イネ属	1	2	2	2	1	1		1	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	12	22	6	4	13	7	3	2	
<i>Aneilema keisak</i>		イボクサ	1								
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節		1			1	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科		5				1		1	1
Caryophyllaceae		ナデシコ科		2					1		
<i>Nuphar</i>		コウホネ属					2		1		
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属		1					1		
<i>Thalictrum</i>		カラマツソウ属	3				1				1
Cruciferae		アブラナ科	7	1	1	1					
Hydrocotyloideae		チドメクサ亜科		2	1	1					
Apioidaeae		セリ亜科	3	5	2	2		1	2		3
Labiatae		シソ科		2							
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキツル	1				8		1		
Lactuoidaeae		タンポポ亜科		1					2	11	3
Asteroidaeae		キク亜科	1		1	1			2	1	3
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	29	81	42	23	5	14	16	31	122
Arboreal pollen		樹木花粉	259	309	410	350	628	929	339	154	249
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木 · 草本花粉	5	11	14	17	1	9	7	10	2
Nonarboreal pollen		草本花粉	117	214	102	79	42	40	64	72	192
Total pollen		花粉総数	381	534	526	446	671	978	410	236	443
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	1.9 × 10 <sup>-4</sup>	1.2 × 10 <sup>-4</sup>	1.3 × 10 <sup>-4</sup>	1.5 × 10 <sup>-4</sup>	2.3 × 10 <sup>-5</sup>	2.5 × 10 <sup>-5</sup>	1.0 × 10 <sup>-4</sup>	1.7 × 10 <sup>-3</sup>	1.2 × 10 <sup>-4</sup>
Unknown pollen		未同定花粉	13	4	13	14	6	10	6	9	4
Fern spore		シダ植物胞子									
Monolate type spore		単条溝胞子	45	31	20	20	2	5	22	15	11
Trilate type spore		三条溝胞子	9	5	7	2				26	20
Total Fern spore		シダ植物胞子総数	54	36	27	22	2	5	22	41	31
Parasite eggs		寄生虫卵									
<i>Capillaria</i> sp.		毛細線虫属卵					1				
Unknown eggs		不明虫卵					1				
Total		計	0	0	0	0	2	0	0	0	0
Parasite eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度	-	-	-	-	3.2 × 10 <sup>-5</sup>	-	-	-	-
Stone cell		石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal · woods fragments		微細炭化物 · 微細木片	(<+)	(+)	(+)	(+)	(<+)	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体 (Charcoal · woods fragments)		(× 10 <sup>5</sup> )									
未分解遺体片			1.6	0.4			2.5	0.4	0.4		0.6
分解遺体片			6.6	8.0	3.3	3.3	0.8	5.4	8.8	6.2	31.3
炭化遺体片 (微粒炭)					0.4	0.7			0.4		1.3

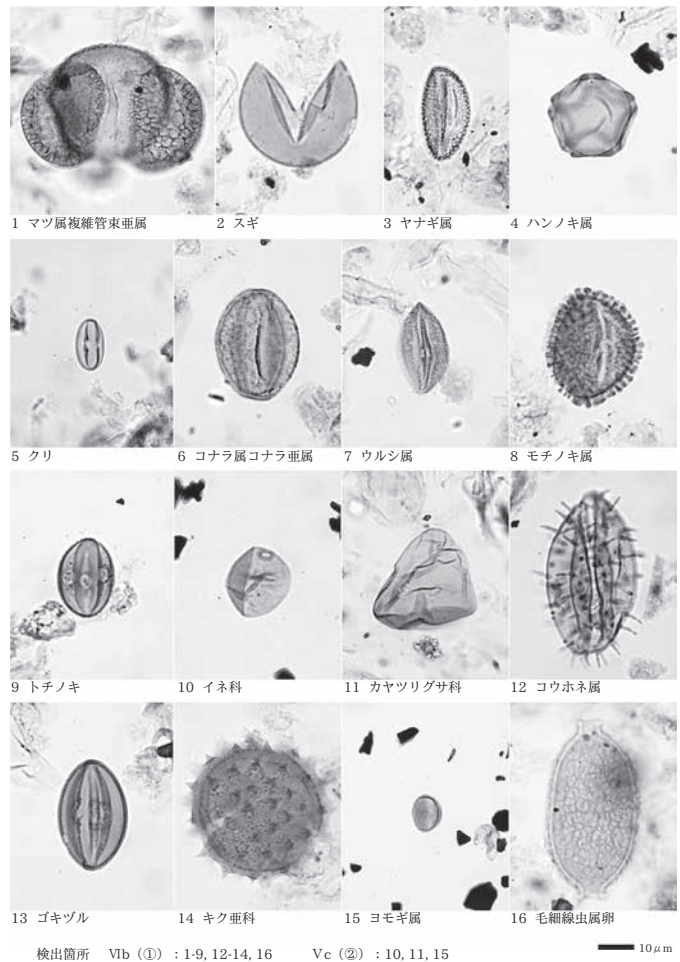


第 68 図 道正遺跡における花粉ダイアグラム

(2) 花粉群集の特徴

1. 1C-9I23 グリッド

VIIa 層 (②) (試料 No.9) と VIc2 層 (②) (試料 No.8) は類似した産出傾向であり、樹木花粉が 53~56%、草本花粉が 41~26%、シダ植物胞子が 7~15% の比率である。樹木花粉ではハンノキ属が 30% 以上を占めクリ、コナラ属コナラ亜属、スギ、マツ属複雑管束亜属が伴われる。草本花粉ではヨモギ属、イネ科の比率が高い。VIc1 層 (②) (試料 No.7) から VIa 層 (①) (試料 No.3) では、樹木花粉の占める割合が高くなり 78~74% を占め、ハンノキ属が高率である。VIc1 層 (②) (試料 No.7) では、水生植物のコウホネ属が産出する。Vd 層 (⑤) (試料 No.2) では、樹木花粉が 54%、草本花粉が 38% であり、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が増加し、下位で優勢したハンノキ属はやや減少する。Vc 層 (②) (試料 No.1) では、樹木花粉が 61%、樹木・草本花粉が 1%、草本花粉が 26%、シダ植物胞子が 12% の比率である。樹木花粉のスギが特徴的に増加し、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、ヤナギ属の産出率がや



第 69 図 道正遺跡の花粉

や高い。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属がやや多く、カヤツリグサ科、アブラナ科が産出する。

## 2. 1C-10H15 グリッド

花粉密度が高く、樹木花粉が95～93%を占める。VIb層(⑤)(試料No.6)では、樹木花粉のハンノキ属、クリ、コナラ属コナラ亜属の比率が高く、スギが低率に産出する。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が低率である。VIb層(①)(試料No.5)では、ハンノキ属、スギ、モチノキ属、ヤナギ属、トネリコ属が増加し、コナラ属コナラ亜属、クリが減少する。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科、ゴキヅル、コウホネ属が産出する。

### d 花粉分析から推定される植生と環境

#### (1) 1C-9I23 グリッド

下位のVIIa層、VIc2層の時期はハンノキ属の産出率が高い。ハンノキ属は湿地林を形成するハンノキが考えられ、当時は、ハンノキ湿地林及びイネ科(ヨシ属など)やヨモギ属の草本が生育する沼沢湿地が分布していた。また、近隣の緩やかな傾斜地や乾燥したところには、クリ林やナラ林(コナラ属コナラ亜属)が分布していた。また、地域的な森林要素としてスギ林が分布していた。VIc1層の時期はハンノキの湿地林が拡大し湿潤化する。Vd層の時期になるとイネ科やヨモギ属の草本域が拡大し、ハンノキ湿地林はやや縮小する。Vc層の時期になると、スギ林、ナラ林が拡大し、ハンノキの湿地林はより縮小する。調査地周辺にはヤナギ属やイネ科を主とする草本が生育していた。

#### (2) 1C-10H15 グリッド

樹木花粉の占める割合が極めて高く、樹木の優勢な環境が考えられる。ハンノキの湿地林が分布するが、クリ、コナラ属コナラ亜属の比較的乾燥した環境を好む落葉広葉樹の林も隣接して分布していた。草本は少ないが、産出する草本花粉は水生植物を多く含み、コウホネ属も検出されることから、浅い水域の分布が示唆される。やや遠方には地域的な森林要素としてスギ林が分布していた。

### e ま と め

VIIa層からVIc1層の時期は沼沢湿地の環境で、イネ科(ヨシ属など)等の草本とともにハンノキ湿地林が分布していた。比較的近接してクリ林やナラ林(コナラ属コナラ亜属)の相対的に乾燥した森林が分布し、周辺山地にはスギ林が分布していた。VIb層の時期は樹木が優勢で、ハンノキ湿地林とクリ林やナラ林(コナラ属アカガシ亜属)が分布していた。Vd層、Vc層では、スギ林、ナラ林が拡大して分布し、ハンノキ湿地林は縮小したと推定された。

## 3) 珪 藻 分 析

### a 試 料

分析試料は、花粉分析と同一試料である。

### b 方 法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

1. 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
2. 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
3. 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5～6回)
4. 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
5. マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
6. 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。珪藻被殻が200個体以上になるまで計数し、少ない試料についてはプレパラート全面について精査した。

### c 結 果

#### (1) 分類群

試料から産出した珪藻は、真塩性種(海水生種)3分類群、真-中塩性種(海-汽水生種)3分類群、中塩性種(汽





〔貧塩性種〕

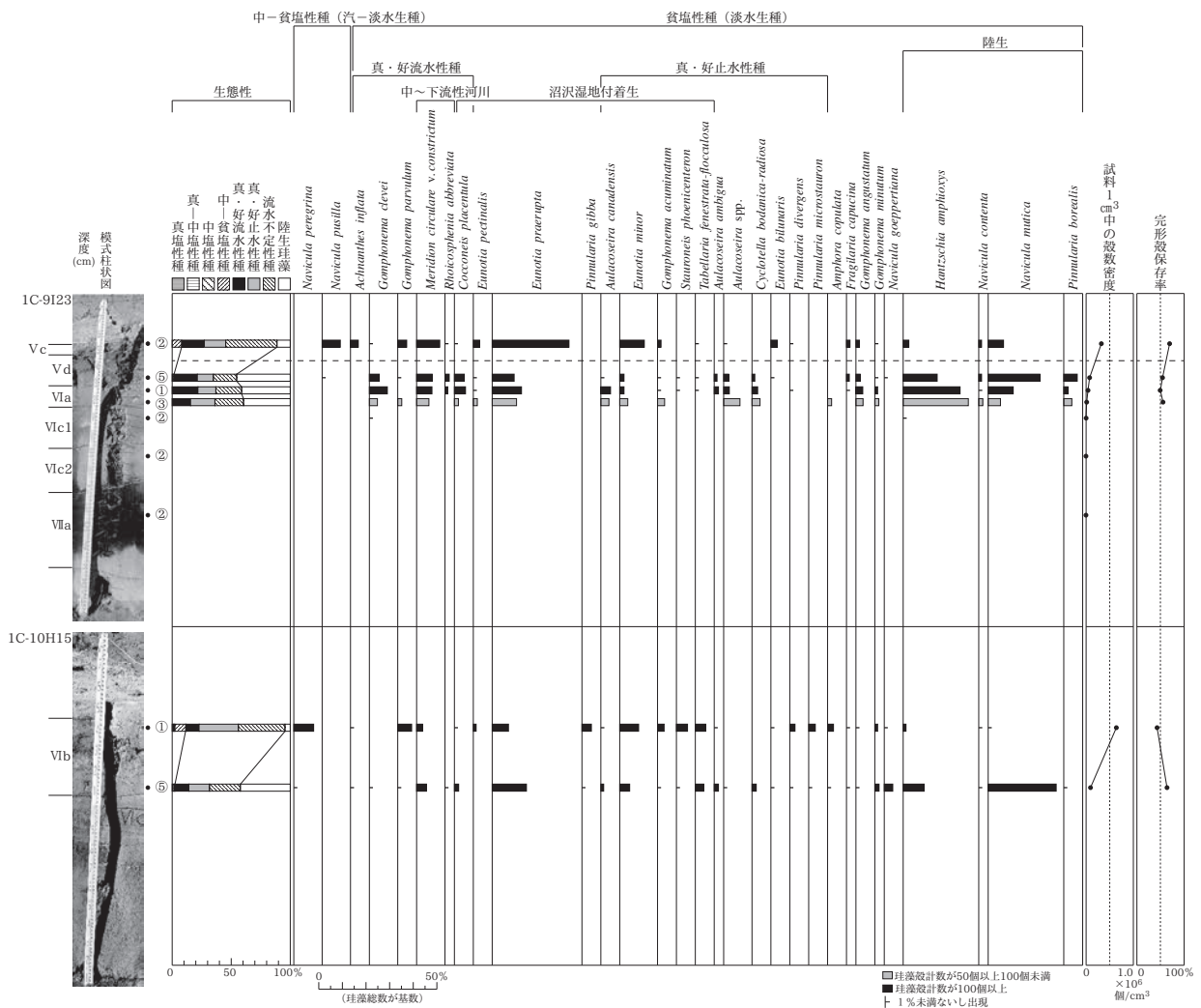
*Achnanthes inflata*, *Amphora copulata*, *Aulacoseira ambigua*, *Aulacoseira canadensis*, *Aulacoseira* spp., *Cocconeis placentula*, *Cyclotella bodanica-radiosa*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia minor*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praeurupta*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema acuminatum*, *Gomphonema angustatum*, *Gomphonema clevei*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Meridion circulare* v. *constrictum*, *Navicula contenta*, *Navicula goeppertiana*, *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia divergens*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia microstauron*, *Rhoicosphenia abbreviata*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

(2) 珪藻群集の特徴

下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。

1. 1C-9I23 グリッド

下位のVIIa層(②)(試料No.9)からVIc1層(②)(試料No.7)は、珪藻は産出しないか産出しても極くわずかであった。VIa層(③)(試料No.4)とVIa層(①)(試料No.3)では珪藻密度は低く、産出した珪藻は貧塩性種(淡水生種)で陸生珪藻が40～41%、流水不定性種が24～22%、真・好止水性種が21～15%、真・好流水性種が16～22%の比率である。陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*の産出率が高く、*Navicula mutica*, *Pinnularia borealis*が伴われる。他に流水不定性種で沼沢湿地付着生種の*Eunotia praeurupta*を主に好流水性種で沼沢湿地付



第 70 図 道正遺跡における主要珪藻ダイアグラム

着生種の *Cocconeis placentula*、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Aulacoseira canadensis*、*Eunotia minor* が産出する。真・好流水性種では、中～下流水性河川種の *Meridion circulare* v. *constrictum*、好流水性種の *Gomphonema clevei* が産出する。Vd層(⑤)(試料No.2)では、陸生珪藻の占める割合が45%になり、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis* が増加し、*Hantzschia amphioxys* は減少する。Vc層(②)(試料No.1)では、流水不定性種が44%、真・好流水性種が19%、真・好止水性種が18%、陸生珪藻が11%、中～貧塩性種(汽-淡水生種)が8%の比率である。流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia praeurpta* が優占し、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* が伴われる。真・好流水性種では、中～下流水性河川種の *Meridion circulare* v. *constrictum*、好流水性種の *Gomphonema parvulum*、*Achnanthes inflata* の出現率がやや高く、陸生珪藻では、*Navicula mutica*、低率に *Hantzschia amphioxys* が産出する。また、淡水域でもしばしばみられる中～貧塩性種(汽-淡水生種)の *Navicula pusilla* が産出する。



第71図 道正遺跡の珪藻

## 2. 1C-10H15 グリッド

Vib層(⑤)(試料No.6)では、陸生珪藻が42%、流水不定性種が26%、真・好止水性種が18%、真・好流水性種が12%の比率であり、真塩性種(海水生種)、真～中塩性種(海～汽水生種)、中～貧塩性種(汽～淡水生種)がわずかに産出する。陸生珪藻の *Navicula mutica* が高率であり、*Hantzschia amphioxys* が伴われる。他に流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia praeurpta* が比較的多く、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、好流水性種で沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula* が伴われ、中～下流水性河川種の *Meridion circulare* v. *constrictum* も産出する。Vib層(①)(試料No.5)では、流水不定性種が40%、真・好止水性種が33%、真・好流水性種が11%を占め、陸生珪藻が5%に減少する。中～貧塩性種(汽～淡水生種)が9%産出し、真塩性種(海水生種)、真～中塩性種(海～汽水生種)、中塩性種(汽水生種)がわずかに産出する。特に優占する種は認められず、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、*Stauroneis phoenicenteron*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia praeurpta*、*Pinnularia gibba*、好流水性種の *Gomphonema parvulum*、中～下流水性河川種の *Meridion circulare* v. *constrictum*、好止水性種の *Pinnularia divergens*、*Pinnularia microstauron*、流水不定性種の *Amphora copulata* などが低率に多様に産出する。また、中～貧塩性種(汽～淡水生種)の *Navicula peregrina* が産出する。下位のVib層(⑤)(試料No.6)で産出率の高かった陸生珪藻の *Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys* はほとんどみられなくなる。

### d 珪藻分析から推定される堆積環境

#### (1) 1C-9I23 グリッド

下位のVIIa層からVIc1層では、いずれも珪藻密度が極めて低い。これらの層の時期の調査地は、珪藻の生育

しにくい乾燥した堆積環境であったと推定される。VIa層からVd層では、陸生珪藻が優勢で流水性種、流水不定性種、止水性種が産出する。これらの層の時期は、湿った土壌の環境が主体となるが、部分的ないし短期に流水の影響を受ける曖昧な水域が伴われたと考えられる。Vc層では、流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia praerupta* を主に、好止水性種、流水性で沼沢湿地付着生種が優占し、中～下流水性河川種も産出する。こうしたことから、調査地は河川の縁辺の流水の影響を受ける浅い止水域の環境が分布していた。中～貧塩性種（汽-淡水生種）の *Navicula pusilla* は、蒸散などにより塩分濃度が高くなったことで生育していたと思われる。

## (2) 1C-10H15 グリッド

VIb層下部では、陸生珪藻が優勢で、次いで流水不定性種で沼沢湿地付着生種が多い。中～下流水性河川種も産出することから、調査地は湿った程度の土壌環境が主体で、緩く流れる淀んだ湿地の環境も分布する。VIb層上部では、流水不定性種、真・好止水性種が増加し、陸生珪藻は減少する。特に優占する種は認められないが、沼沢湿地付着生種が多様に産出する。調査地は、弱い流れのある浅い淀んだ止水域から湿地の環境であったと推定される。

### e ま と め

VIa層からVIc1層の時期は、珪藻の生育しにくい乾燥した堆積環境であった。VIb層の時期になると、湿った程度の土壌環境が主体で、緩く流れる淀んだ程度の湿地の環境から、弱い流れのある浅い淀んだ止水域から湿地の環境に推移した。VIa層からVd層の時期は、湿った土壌の環境が主体であり、部分的あるいは短期的に流水の影響を受ける曖昧な水域が伴われていた。Vc層の時期は、河川の縁辺の流水の影響を受ける浅い止水域の環境の分布が示唆された。

## B 道正遺跡の自然科学分析（令和3年度分）

(株) 加速器分析研究所

### 1) 道正遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

#### a 測定対象試料

道正遺跡は、新潟県新潟市江南区割野字道正 2868 番地ほか（北緯 37° 50' 55"、東経 139° 05' 18"）に所在し、埋没砂丘に立地する。測定対象試料は、遺構から出土した木製品 5 点、炭化物 1 点の合計 6 点である（第 43 表）。木製品については、年代測定と同一試料の樹種同定が実施されている（別稿樹種・種実同定報告参照）。なお、SK409 から出土した骨片（試料 28）については、コラーゲン抽出を試みたが得られず、年代測定を断念することとなった。

#### b 測定の意義

遺構の年代を特定する。

#### c 化学処理工程

1. メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
2. 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 43 表に記載する。
3. 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
4. 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
5. 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
6. グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に

装着する。

d 測定方法

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 ( $\text{HOx II}$ ) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

e 算出方法

- $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (第 43 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する [Stuiver and Polach 1977]。  $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 43 表に、補正していない値を参考値として第 44 表に示した。  $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を第 43 表に、補正していない値を参考値として第 44 表に示した。
- 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の暦年年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma=68.3\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 [Reimer et al. 2020] を用い、OxCalv4.4 較正プログラム [Bronk Ramsey 2009] を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 44 表に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

f 測定結果

測定結果を第 43・44 表に示す。

第 43 表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

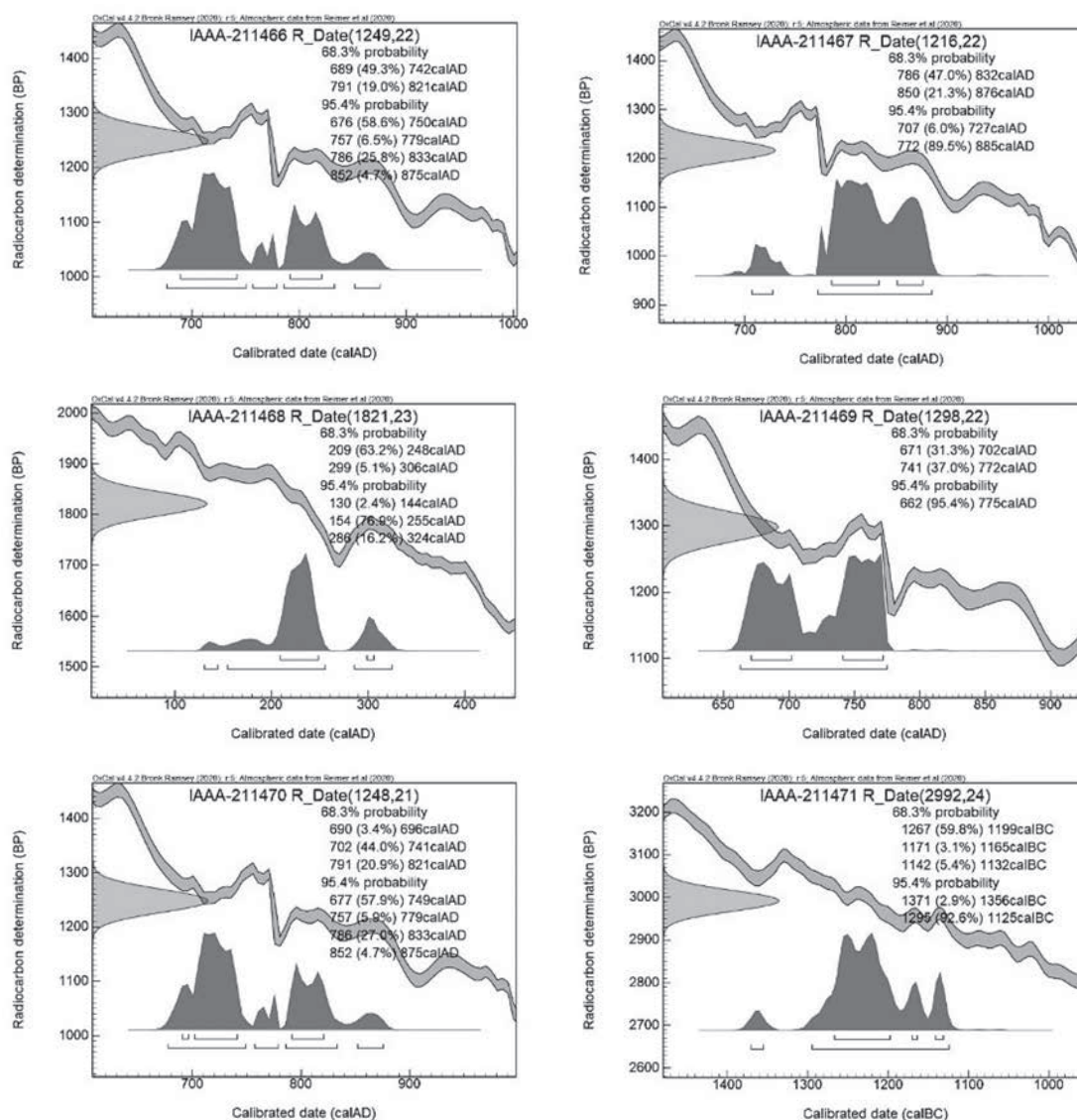
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-211466	4	グリット : 2C-1110 遺構 : SB330-P290 遺構確認面 : VIa 層位 : 覆土	柱	AAA	-27.37 ± 0.22	1,250 ± 20	85.59 ± 0.24
IAAA-211467	13	グリット : 1C-10J3 遺構 : SE268 遺構確認面 : VIa 層位 : 覆土6	井筒	AAA	-25.69 ± 0.24	1,220 ± 20	85.95 ± 0.24
IAAA-211468	14	グリット : 2D-1D12 遺構 : SI266-P399 遺構確認面 : 床面 (VII) 層位 : 覆土1	柱	AAA	-29.88 ± 0.20	1,820 ± 20	79.71 ± 0.23
IAAA-211469	19	グリット : 2C-2J12 遺構 : SB521-P513 遺構確認面 : VIa 層位 : 覆土	柱	AAA	-28.23 ± 0.21	1,300 ± 20	85.07 ± 0.24
IAAA-211470	21	グリット : 2D-2C2 遺構 : SX517-② 遺構確認面 : VIa 層位 : 覆土2	板	AAA	-23.24 ± 0.18	1,250 ± 20	85.61 ± 0.23
IAAA-211471	27	グリット : 1D-10E8 遺構 : SK412 遺構確認面 : VIIa 層位 : 覆土1	炭化物	AAA	-26.58 ± 0.20	2,990 ± 20	68.90 ± 0.21
IAAA-211472	28	グリット : 1D-9B24 遺構 : SK409 遺構確認面 : VIIa 層位 : 覆土1	骨片	CoEx			

[参考値]

第 44 表 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-211466	1,290 $\pm$ 20	85.17 $\pm$ 0.23	1,249 $\pm$ 22	689 calAD - 742 calAD (49.3%) 791 calAD - 821 calAD (19.0%)	676 calAD - 750 calAD (58.6%) 757 calAD - 779 calAD ( 6.5%) 786 calAD - 833 calAD (25.8%) 852 calAD - 875 calAD ( 4.7%)
IAAA-211467	1,230 $\pm$ 20	85.82 $\pm$ 0.23	1,216 $\pm$ 22	786 calAD - 832 calAD (47.0%) 850 calAD - 876 calAD (21.3%)	707 calAD - 727 calAD ( 6.0%) 772 calAD - 885 calAD (89.5%)
IAAA-211468	1,900 $\pm$ 20	78.92 $\pm$ 0.23	1,821 $\pm$ 23	209 calAD - 248 calAD (63.2%) 299 calAD - 306 calAD ( 5.1%)	130 calAD - 144 calAD ( 2.4%) 154 calAD - 255 calAD (76.9%) 286 calAD - 324 calAD (16.2%)
IAAA-211469	1,350 $\pm$ 20	84.51 $\pm$ 0.23	1,298 $\pm$ 22	671 calAD - 702 calAD (31.3%) 741 calAD - 772 calAD (37.0%)	662 calAD - 775 calAD (95.4%)
IAAA-211470	1,220 $\pm$ 20	85.92 $\pm$ 0.23	1,248 $\pm$ 21	690 calAD - 696 calAD ( 3.4%) 702 calAD - 741 calAD (44.0%) 791 calAD - 821 calAD (20.9%)	677 calAD - 749 calAD (57.9%) 757 calAD - 779 calAD ( 5.9%) 786 calAD - 833 calAD (27.0%) 852 calAD - 875 calAD ( 4.7%)
IAAA-211471	3,020 $\pm$ 20	68.68 $\pm$ 0.21	2,992 $\pm$ 24	1267calBC - 1199calBC (59.8%) 1171calBC - 1165calBC ( 3.1%) 1142calBC - 1132calBC ( 5.4%)	1371calBC - 1356calBC ( 2.9%) 1295calBC - 1125calBC (92.6%)
IAAA-211472					

[IAA登録番号: #B020]



第 72 図 暦年較正年代グラフ (参考)

木製品5点のうち、遺構確認面がVIa層である試料4、13、19、21の<sup>14</sup>C年代は、1300±20 yrBP（試料19）から1220±20 yrBP（試料13）の間にまとまる。暦年較正年代（1σ）は、最も古い試料19が671～772 cal ADの間に2つの範囲、最も新しい試料13が786～876 cal ADの間に2つの範囲で示される。

遺構確認面がVIII層のSI266-P399から出土した柱試料14の<sup>14</sup>C年代は1820±20 yrBP、暦年較正年代（1σ）は209～306 cal ADの間に2つの範囲で示され、弥生時代後期から古墳時代前期頃に相当する〔佐原2005、小林2009〕。

遺構確認面がVIIa層のSK412から出土した炭化物試料27の<sup>14</sup>C年代は2990±20 yrBP、暦年較正年代（1σ）は1267～1132 cal BCの間に3つの範囲で示され、縄文時代晩期初頭頃に相当する〔小林編2008、小林2017〕。

なお、試料14が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、これまで北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘があった〔尾寄2009、坂本2010など〕。2020年に更新された較正曲線IntCal20〔Reimer et al. 2020〕では、新たに日本産樹木のデータが採用された結果、この範囲の較正年代値が日本産樹木の測定値に近づいた。系統的に認められる差異の原因究明を含め、今後とも関連する研究の動向を注視する必要がある。

試料の炭素含有率はすべて50%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 2) 道正遺跡における樹種・種実同定

道正遺跡は、新潟県新潟市江南区割野字道正2868番地ほか（北緯37°50′55″、東経139°05′18″）に所在し、埋没砂丘に立地する。遺跡から出土した木製品、種実を対象に植物の種類同定を行う。

### a 樹種同定

#### (1) 試料

試料は、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、土坑から出土した柱、井筒、板、板状品などの木製品24点である。試料の詳細は結果表に示す。なお、これらのうち試料4、13、14、19、21については同一試料を対象に放射性炭素年代測定が実施されている（別稿年代測定報告参照）。

#### (2) 分析方法

試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柃目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス（Mount-Quick “Aqueous”：大道産業）で封入し、プレパラートを作製する。観察は生物顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって40～1000倍で行った。同定は、木材構造の特徴及び現生標本との対比によって行った。

#### (3) 結果

第45表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を第73図に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

・スギ *Cryptomeria japonica*

D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞及び放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。

・サワラ *Chamaecyparis pisifera*

Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞及び放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行がやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型であるが、スギ型の傾向を示すものもあり、1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面で放射組織は単列の同性放射組織型を呈する。

・ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

小型で丸く、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は単列の異性放射組織型である。

・ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus sect. Gymnothyrus* カバノキ科

小型で丸い道管が放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の集合状のものからなる。

・クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Carpinus* カバノキ科

小型で丸い道管が単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は、同性放射組織型で1～3細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

・コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

・ニレ属 *Ulmus* ニレ科

年輪のはじめに中型から大型の道管が1～3列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、1～5細胞幅ぐらいである。

・ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形及び接線状ないし斜線状に配列する。道管

の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

・トネリコ属 *Fraxinus*

モクセイ科

年輪のはじめに大型で厚壁の丸い道管がほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまると厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細

第45表 道正遺跡における樹種同定結果

試料名	グリッド	遺構名	遺構確認面	出土層位	取上げ日	器種名	部位	樹種	備考
1	1C-9I25	SB483-P204	VIa	覆土	20201013	柱	柱根	クマシデ属イヌシデ節	SB483
3	2C-1J23	SB558-P372	VIa	覆土	20201022	柱	柱根	ハンノキ属ハンノキ節	SB558
4	2C-1I10	SB330-P290	VIa	覆土	20201015	柱	柱根	トネリコ属	SB330
5	2C-1J2	SB330-P292	VIa	覆土	20201015	柱	柱根	トネリコ属	SB330
6	2C-1J8	SB330-P293	VIa	覆土	20201015	柱	柱根	トネリコ属	SB330
8	2C-1J16	SB330-P295	VIa	覆土	20201015	柱	柱根	ケヤキ	SB330
9	2C-1J22	SB330-P296	VIa	覆土	20201015	柱	柱根	トネリコ属	SB330
10	2C-1J24	SB330-P342	VIa	覆土	20201015	柱	柱根	コナラ属コナラ節	SB330
11	2C-1J23	SB330-P371	VIa	覆土3	20201022	板状品	板	サワラ	SB330
12	2C-2J2	SB330-P373	VIa	覆土	20201022	柱	柱根	トネリコ属	SB330
13	1C-10J3	SE268	VIa	覆土6	20200821	井筒	井筒	コナラ属コナラ節	SE 割り物
14	2D-1D12	SI266-P399	床面(VIII)	覆土1	20201113	柱	柱根	ケヤキ	SI266
15	2D-1D22	SI266-P550	堀方	覆土3	20210621	柱	柱根	樹皮	SI266
16	2C-2I14	SB521-P506	VIa	覆土	20210513	柱	柱根	クリ	SB521
17	2C-2J1	SB521-P510	VIa	覆土2	20210615	柱	柱根	トネリコ属	SB521
18	2C-2I3	SB521-P525	VIa	覆土2	20210601	柱	柱根	トネリコ属	SB521
19	2C-2J12	SB521-P513	VIa	覆土	20210513	柱	柱根	ニレ属	SB521
20	2C-2J7	SB521-P541	VIa	覆土2	20210609	柱	柱根	ヤナギ属	SB521
21	2D-2C2	SX517-②	VIa	覆土2	20210514	板	板	スギ	②
22	2D-2C7	SX517-③	VIa	覆土2	20210514	板	板	スギ	③
23	2D-2C2	SX517-④	VIa	覆土2	20210514	板	板	スギ	④
24	2D-2C7	SX517-⑤	VIa	覆土2	20210514	板	板	スギ	⑤
25	2D-2C7	SX517-⑥	VIa	覆土2	20210514	板	板	スギ	⑥
26	2D-2C2	SX517-①	VIa	覆土2	20210514	板	板	スギ	①

胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチロースが著しい。放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

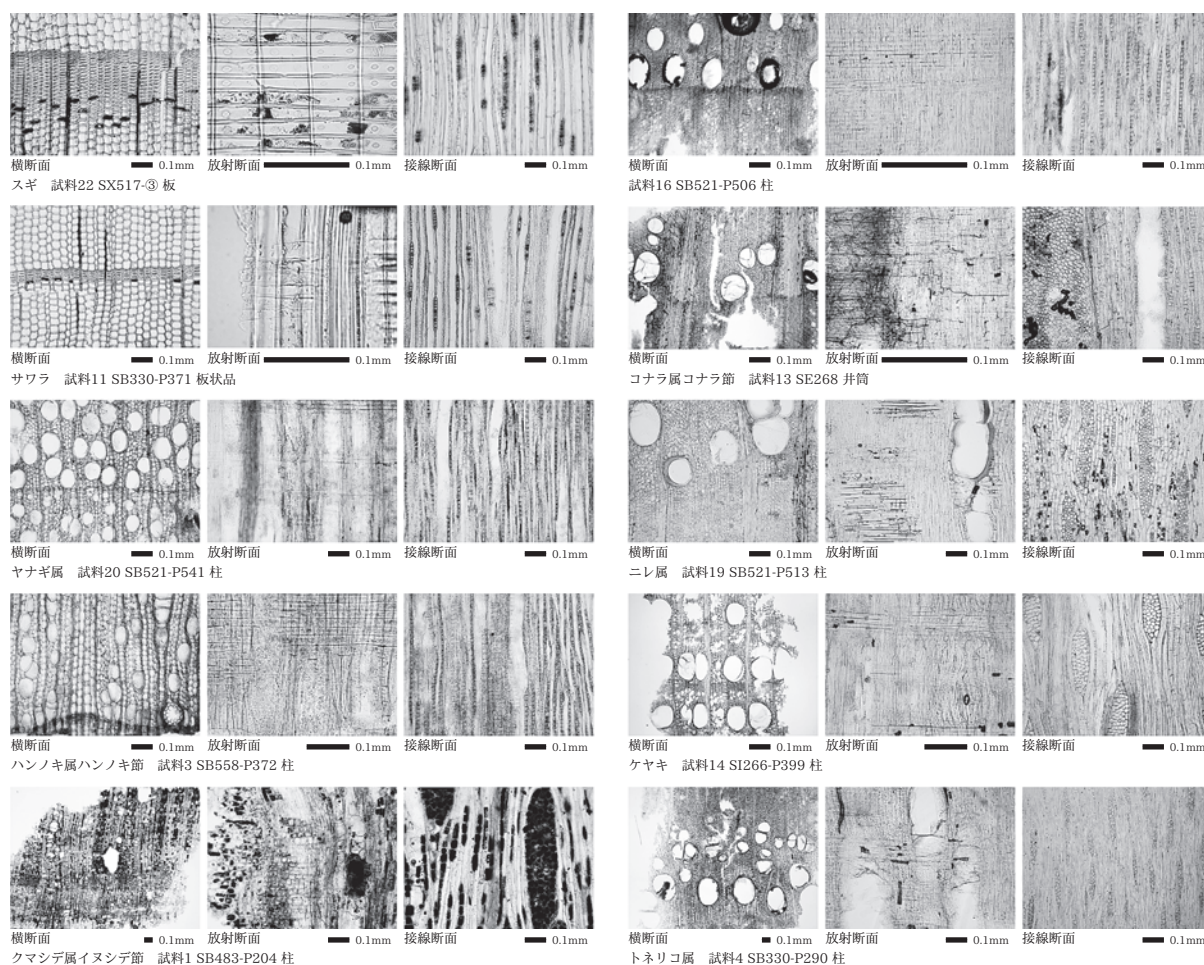
・樹皮 bark

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。

(4) 考 察

同定の結果、道正遺跡の木製品はスギ6点、サワラ1点、ヤナギ属1点、ハンノキ属ハンノキ節1点、クマシデ属イヌシデ節1点、クリ1点、コナラ属コナラ節2点、ニレ属1点、ケヤキ2点、トネリコ属7点、樹皮1点であった。

スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。サワラは岩手県以南の本州、四国、熊本県以北の九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木である。クマシデ属イヌシデ節は落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、



第73図 道正遺跡の木材



九州に分布する落葉または常緑の高木である。

これらの樹種は温帯に分布する樹木ばかりである。スギ、サワラは肥沃で湿潤な環境を好み、スギは温帯中間域の積雪地帯で純林を形成し、サワラは中部山岳地帯に多い。クリ、ナラ類（コナラ属コナラ節）、クマシデ属イヌシデ節は日当たりの良い台地や丘陵地に生育し本遺跡周辺の落葉広葉樹林の構成要素であり、比較的人里に近い地域に分布し、いずれも二次林としての性格もある。ケヤキは谷沿いや河辺周辺の肥沃な適潤地に生育する。トネリコ属、ハンノキ属ハンノキ節、ヤナギ属は沢沿いなどの湿原や水湿のある低地に生育し、本遺跡周辺には亀田郷の中でも低湿地の亀田地区があり、これらの樹木が近隣に分布していたと考えられる。

板、板状品にはスギ、サワラの針葉樹が利用されている。スギは加工・工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。なお、中部日本海側では古くからヒノキよりもスギを多用する傾向にあり、これは積雪地帯で純林を形成するスギの性質からこの地域にスギが多く生育する環境であったためと考えられる。サワラはヒノキには劣るが、木理通直で肌目緻密、水湿に良く耐える材である。ヒノキよりも成長が早く、ヒノキやアスナロのような匂いがないことから、飯櫃や柄杓、桶などによく用いられる。また、殺菌作用があることから食品の下の敷物としても利用される。

割り物の井筒にはコナラ属コナラ節が用いられている。コナラ属コナラ節は強靱で弾力に富み、また耐朽・耐水性が高く、建築部材としても用いられる材である。耐朽・耐水性があることから井筒には適材であるが、井戸に利用される側板や杭材の例は見られるものの、割り物の井筒に利用された例は極めて稀である。本遺跡の近隣地域にはミズナラ林が分布しており、大径木を選んで本遺跡にもたらされたと考えられる。

柱にはトネリコ属が7点と多く、他にケヤキ、ヤナギ属、ハンノキ属ハンノキ節、クマシデ属イヌシデ節、クリ、コナラ属コナラ節、ニレ属、樹皮が用いられており、いずれも広葉樹である。ケヤキ、クリ、コナラ属コナラ節は堅硬な材であり、耐朽性がありまた水湿に耐える保存性の高い材であり、後世でも建築部材によく用いられる材である。トネリコ属は堅硬な材で従曲性が非常に大きく、割裂が容易な材であるが耐朽・保存性が低い材であり、律令期以降には建築部材としての利用は少ない。ヤナギ属、クマシデ属イヌシデ節は耐朽・保存性が低いが弾力や従曲性に富む材で、ハンノキ属ハンノキ節は耐朽・保存性、切削・加工性ともに中庸な材で、ニレ属は耐朽・保存性が低く、また切削性や寸法安定性が不良な材である。これらの樹種は建築部材にあまり用いられない材である。柱はすべて広葉樹であり、またその種類は多様であった。これらは本遺跡周辺の低湿地や台地などの山林からもたらされたと考えられ、周囲の豊富な森林資源から樹木の性質をあまり考慮せずに用いられた。

本遺跡で同定された樹木は、当時遺跡周辺や近隣地域に分布し、比較的容易にもたらすことのできる樹種であったと考えられ、地域的な流通によってもたらされた。用材としては板材には中部地方に多いスギやサワラの針葉樹が、柱材には近隣の湿地林や山林のトネリコ属やケヤキなどの広葉樹が用いられた。なお、井筒に用いられたコナラ属コナラ節は近隣地域に分布するミズナラと考えられ、井戸に利用できるほどの大径木を選材して用いたと推測される。

## b 種実同定

### (1) 試料

試料は、1C-10I22 グリッド Vd 層から出土した種実（試料 29）である。

### (2) 分析方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

### (3) 結果

#### 1. 分類群

樹木 5、草本 8 の計 13 分類群が同定される。和名及び粒数を第 46 表に示し、主要な分類群を第 74 図に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、図版に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

・サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. 種子 (完形・破片)

ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に短いへそがある。表面には網目模様がある。サイズは長さ×幅：3.44mm×2.77mm。

・アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg.

種子 (完形・破片) トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。サイズは長さ×幅：4.18mm×4.42mm。

・ブドウ属 *Vitis* 種子 (完形・破片) ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には2つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。サイズは長さ×幅：44.14mm×2.96mm。

・ウコギ科 *Araliaceae* 炭化果実 (破片)

炭化しているため黒色、液果状で球形を呈し、だいたい5稜あり、ふつうは5つの種子をもつ。サイズは長さ×幅：7.36mm×8.15mm。

・エゴノキ *Styrax japonica* S. et Z. 核 (完形・半形・破片) エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。サイズは長さ×幅：10.62mm×6.32mm。

〔草本〕

・イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実 (完形・破片) イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。サイズは長さ×幅：5.06mm×2.65mm、4.81mm×2.92mm、5.58mm×2.97mm。

・ウキヤガラ *Scirpus fluviatilis* A. Gray 果実 カヤツリグサ科

黒灰色で倒卵形を呈す。表面は粗く、断面は三角形である。サイズは長さ×幅：2.95mm×1.62mm。

・アサ *Cannabis sativa* L. 種子 (完形・破片) クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。サイズは長さ×幅：3.28mm×3.02mm。

・カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子 クワ科

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。サイズは長さ×幅：3.80mm×3.66mm。

・タデ属 *Polygonum* 果実 (破片) タデ科

黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。サイズは長さ×幅：3.10mm×1.79mm。

・ササゲ属 *Vigna* 炭化子葉 (破片)・種子 (完形・破片) マメ科

子葉は炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

種子も炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。へそは欠落している。サイズは長さ×幅×厚さ：6.08mm×3.29mm×3.10mm。

・ヒシ *Trapa japonica* Flerov 炭化果実 (破片) ヒシ科

暗黄緑灰色で倒三角形を呈し、側面はやや扁平である。両肩に1個ずつの鋭い長刺があり、刺からは基部まで延びる翼状隆条がある。先端の中央部に低い円柱状突起があり、その中心に短い刺がある。

・ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子 (完形・破片) ウリ科

第46表 道正遺跡 (試料 29) の種実同定結果

分類群	部位	個数	備考
樹木			
サンショウ	種子	完形 2 破片 1	
アカメガシワ	種子	完形 484 破片 808	
ブドウ属	種子	完形 1 破片 3	
ウコギ科	炭化果実	破片 8	
エゴノキ	核	完形 5 半形 6 破片 66	
草本			
イネ	炭化果実	完形 27 破片 13	
ウキヤガラ	果実	完形 1	
アサ	種子	完形 1 破片 2	
カナムグラ	種子	完形 1	
タデ属	果実	破片 1	
ササゲ属	炭化子葉	破片 4	アズキタイプ
	炭化種子	完形 3 破片 1	
ヒシ	炭化果実	破片 8	
ヒョウタン類	種子	完形 1 破片 3	しいな
不明植物遺体		破片 1	
合計		1451	

他に魚類遊離菌1、棘4

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。サイズは長さ×幅：11.79mm×6.16mm。

〔その他〕

・不明植物遺体 Unknown plant remains

炭化しているため黒色を呈し、植物の種実と考えられるが破片であり同定に至らなかった。

なお、植物以外に魚類遊離歯、棘が認められた。

## 2. 種実群集の特徴

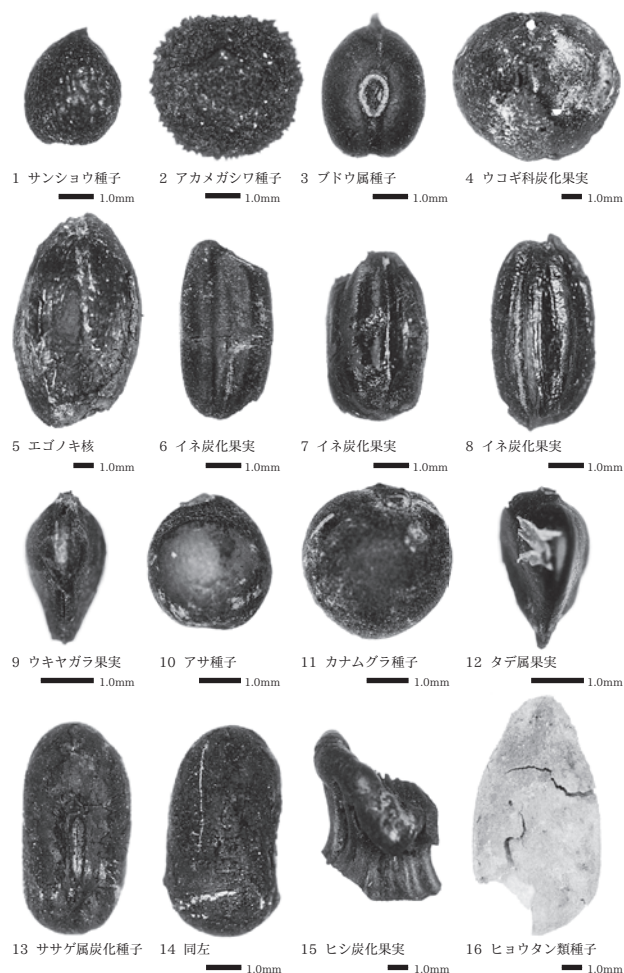
樹木種実のサンショウ種子完形2個、破片1個、アカメガシワ種子完形484個、破片808個、ブドウ属種子完形1個、破片3個、ウコギ科炭化果実破片8個、エゴノキ核完形5個、半形6個、破片66個、草本種実のイネ炭化果実完形27個、破片13個、ウキヤガラ果実完形1個、アサ種子完形1個、破片2個、カナムグラ種子完形1個、タデ属果実破片1個、ササゲ属炭化子葉破片4個、種子完形3個、破片1個、ヒシ炭化果実破片8個、ヒョウタン類種子完形1個、破片3個が同定された。他に不明植物遺体破片1個、魚類遊離歯1個、棘4個が認められた。

## (4) 考察

道正遺跡における種実同定の結果、樹木種実のサンショウ、アカメガシワ、ブドウ属、ウコギ科、エゴノキ、草本種実のイネ炭化果実、ウキヤガラ、アサ、カナムグラ、タデ属、ササゲ属、ヒシ、ヒョウタン類、不明植物遺体、魚類遊離歯、棘が同定された。

サンショウ、アカメガシワは山地、丘陵などの林内から人為環境に接する林縁に自生する落葉低木であり、二次林種でもある。また、サンショウは有用植物でもあり食用にもなる。ブドウ属はつる性の低木落葉樹で日当たりのよい場所に生育し林縁に多く、食用にもなる。ウコギ科は山野の林縁など日当たりのよい場所か半日陰の傾斜地などに生育し、山菜などの食用になる種もある。エゴノキは河川や谷沿いの湿地に生育する。ウキヤガラ、タデ属は湿地から浅い水域の水辺に生息する抽水性の植物であり、ヒシはやや深い水域に生息する浮葉植物である。ヒシの種子は食用となる。イネは水生植物であり、栽培植物でもある。また食用にもなる。ササゲ属、ヒョウタン類は人里植物ないし畑作雑草であり、日当たりの良い乾燥地に生育する。また栽培植物でもあり食用にもなる。カナムグラは人里付近に生育するつる植物で一年草である。アサは一年草であり、生育速度と環境順応性が高く、また栽培植物でもある。

本遺跡周辺にはサンショウ、アカメガシワ、ブドウ属、ウコギ科などの樹木が生育する日当たりのよい山地、丘陵及び人為環境ないし水際の林縁の環境があり、河川や谷沿いにエゴノキの樹木、湿地からやや深い水域にかけてウキヤガラ、タデ



第74図 道正遺跡1C-10I22グリッドVd層(試料29)の種実

属、ヒシの水湿地草本が生育しており、林縁に面した小規模な池状または水路状の水湿地の分布が示唆される。周辺でイネ、ササゲ属、ヒョウタン類などの栽培植物が生育していたと考えられる。サンショウ、ブドウ属、ヒシの食用になる有用植物、イネ、アサ、ササゲ属、ヒョウタン類は栽培植物であり、中でも、イネは弥生時代以降比較的良好に検出され出土例が多い。またアサは生育速度と環境順応性が高く、古い時代から植物繊維として利用され、種子は食用にもなり、実は油がとれる有用植物である。ウコギ科は山菜などの食用になる種もある。以上、林縁から湿地、池状水域と水田を主とする耕作地が接する環境が推定される。

### c ま と め

遺跡周辺の日当たりの良い山野にはクリ、コナラ属コナラ節などの落葉広葉樹が分布しウコギ科などの山菜も生育し、その林縁にはサンショウ、アカメガシワが生育していた。遺跡近隣にはエゴノキ、ウキヤガラ、タデ属、ヒシ、トネリコ属、ケヤキ、ハンノキ属ハンノキ節などが生育する湿地もしくは湿原が分布していた。湿地の分布を利用したイネ、アサ、ササゲ属、ヒョウタン類などの栽培が周辺で行われていた。なお、サンショウ、ブドウ属、ウコギ科、ヒシは果実などが食用となり、山野や湿地より採集されたと考えられる。木製品の用材としては板材にはスギ、サワラの針葉樹、柱材には近隣の湿地林や山林よりもたらされた広葉樹が用いられ、井筒にはミズナラの大径木が用いられており、地域的な流通によってもたらされた。

## C 道正遺跡出土の焼骨片について

筑前滉太（新潟脳外科病院）

矢吹周平（大宮中央総合病院）

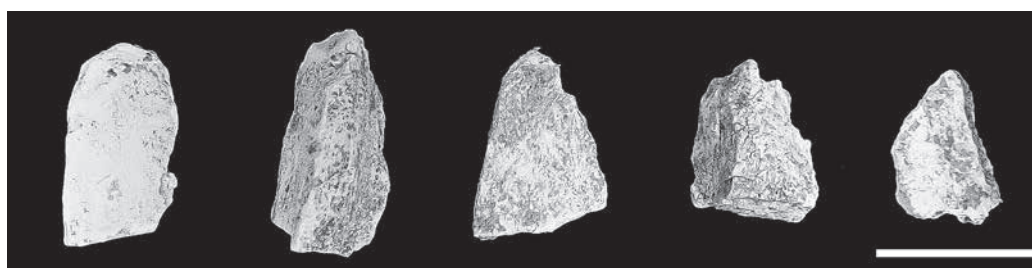
澤田純明・佐伯史子・奈良貴史（新潟医療福祉大学）

新潟市江南区に所在する道正遺跡の2020年の発掘調査において、古墳時代の遺構（SI266）から少量の白色焼骨群が出土した。いずれの焼骨も中・大型哺乳類の骨片のように見受けられたものの、断片化が著しく、最大でも2cmに満たない小片であったため、肉眼観察では人獣鑑別や種同定が不可能であった。だが、骨の保存に不適な土質環境が広がる新潟地方で遺跡から骨が出土することは少なく、出土焼骨の同定は重要であると思われる。

こうした小片の同定法として、骨組織学的方法が知られている。哺乳類の骨質は緻密骨と海綿骨に大別され、緻密骨には、微小血管が通るハバース管や、ハバース管を中心に同心円状の層板構造を形成するオステオン、あるいは、偶蹄類などヒト以外の一部の動物群に発達する葉状骨（plexiform bone / fibro-lamellar bone）などがみられる。こうした骨構造は動物種によって異なる形状を呈し、特に四肢骨の骨幹部の緻密骨については骨構造の比較解剖学的知見が蓄積されていることから、肉眼では種を識別できない小片でも、骨組織学的方法に基づく人獣鑑別や種同定が可能である〔Harsányi 1993；澤田ほか2010；Mulhern and Ubelaker 2012；Sawada et al. 2014；澤田2022〕。今回、発掘担当者の依頼を受け、出土焼骨の組織学的人獣鑑別と種同定を試みた。以下にその結果を報告する。

### 1) 資 料

骨組織学的分析の試料には、中・大型哺乳類の四肢長骨の骨幹部緻密骨と思われる出土焼骨片5点を用いた（試



第75図 道正遺跡出土焼骨試料（左から No.1～No.5、スケールは1cm）

料 No.1 ~ 5、第 75 図)。また、本州の古墳時代の遺跡から出土する可能性のある中・大型哺乳類として、イノシシ、シカ、カモシカ、ウシ、ウマ、タヌキ、キツネ、イヌ、クマ、ヒト、ニホンザルを選定し、新潟医療福祉大学自然人類学研究所が所蔵するこれらの緻密骨組織標本を比較資料とした。

2) 方 法

出土骨片試料 5 点をエタノール (99.5%) に浸して脱水した後、スチレンモノマーに 24 時間浸漬して透徹し、さらに、スチレンモノマーと樹脂 (Rigolac2004 と Rigolac70F を 7 対 3 で混合) の等量混合液に 24 時間浸漬した。その後、重合促進剤を添加した樹脂 (同上) に試料を包埋し、恒温器内に安置して、30℃で 24 時間、40℃で 24 時間、50℃で 24 時間、60℃で 48 時間の過程を経て樹脂を硬化させた。包埋が完了した後、試料周辺の不要な樹脂をモデルトリマーで削平し、四肢長骨の長軸方向に直交する横断面を得るように硬組織切断機 (SP-1600、Leica) で厚さ 60 μm の切片を作成した。

切片をプレパラートに封入した後、組織像を光学顕微鏡で検鏡して所見を得るとともに、顕微鏡に接続した CMOS カメラ (AdvanCam-CTR20) で組織像を撮影し、画像解析ソフト (ImageJ、NIH) を用いて、完形のオステオン (セメントラインが明瞭に確認できるもの)、およびそのオステオンに含まれるハバース管の面積を計測した。オステオンの計測に際し、澤田ほか [2010] の方法に従ってオステオンの長径と短径の比が 2 以下のものを計測対象とした。

焼骨試料は白色を呈していたが、Shipman et al. [1984] によれば、骨が白色となるのは 645℃以上で焼成された場合である。焼成による骨構造の収縮率を検討した Absolonova et al. [2012] は、700℃で焼成した骨のオステオンとハバース管の面積が、本来の値の約 75% まで減少していたことを報告している。本分析ではこれらの知見に鑑み、白色化した試料のオステオンとハバース管の面積 (実測値) が本来の値の 75% に縮小したものと仮定し、実測値を 0.75 で除した値を、焼成していない本来の面積の値 (焼成前推定値) とした。

3) 結 果

試料 No.1 ~ 5 の組織像を第 76 図、比較資料の代表的な組織像を第 77 図に示した。試料には焼成ないし土中での続成作用に由来すると思われる亀裂や変色が生じており、局所的に組織像が不明瞭な箇所もあったものの、すべての試料にレンガ壁状を呈する発達した葉状骨の形成が広範囲に認められた (第 76 図-1 ~ 5)。葉状骨の形状に、試料間で明らかな違いはないように思われた。

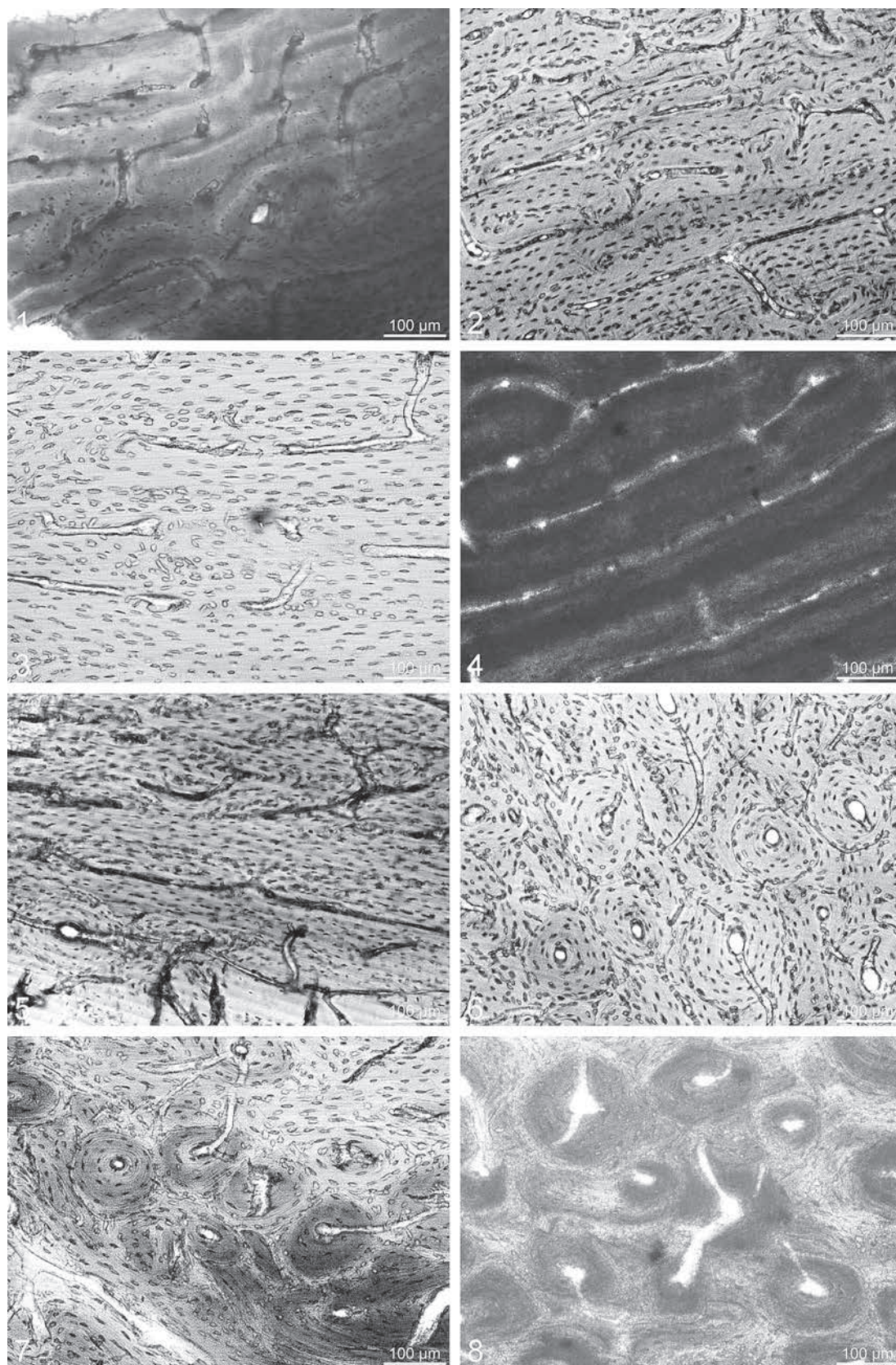
試料 No.2 ~ 4 には、オステオンとハバース管も確認できた (第 76 図-6 ~ 8)。それらの面積の計測値 (実測値と焼成前推定値) を第 47 表にまとめた。いずれの試料においても、オステオンとハバース管の面積の焼成前推定値の平均値は、他の試料の 2 標準偏差の範囲に収まっていた。試料の焼成前推定値と比較資料のオステオンの面積の箱ひげ図を第 78 図、ハバース管の面積の箱ひげ図を第 79 図に示し、さらに、試料の焼成前推定値と各比較資料の計測値の間に統計的に有意な差があるかどうかを Games-Howell 法で検定した。その結果、イノシシ、シカ、ウシ、キツネ、タヌキ、イヌについては、試料との間に 5% 水準で有意な差が一つも認められない組み合わせが存在したが、カモシカ、ウマ、クマ、ヒト、ニホンザルについては、いずれかの試料との間に 5% 水準で有意な差が一つ以上確認された (第 48 表)。

4) 考 察

試料 5 点すべての組織像に葉状骨が認められたが、本稿の冒頭で述べた通り、葉状骨はヒトには出現せず、他方、偶蹄類で顕著に発達する。オステオンとハバース管の面積の計測的検討結果からも、試料がヒトであるとは考えにくく、イノシシ、シカ、ウシ、キツネ、タヌキ、イヌのいずれかが近いように思われた。葉状骨とオステオン・

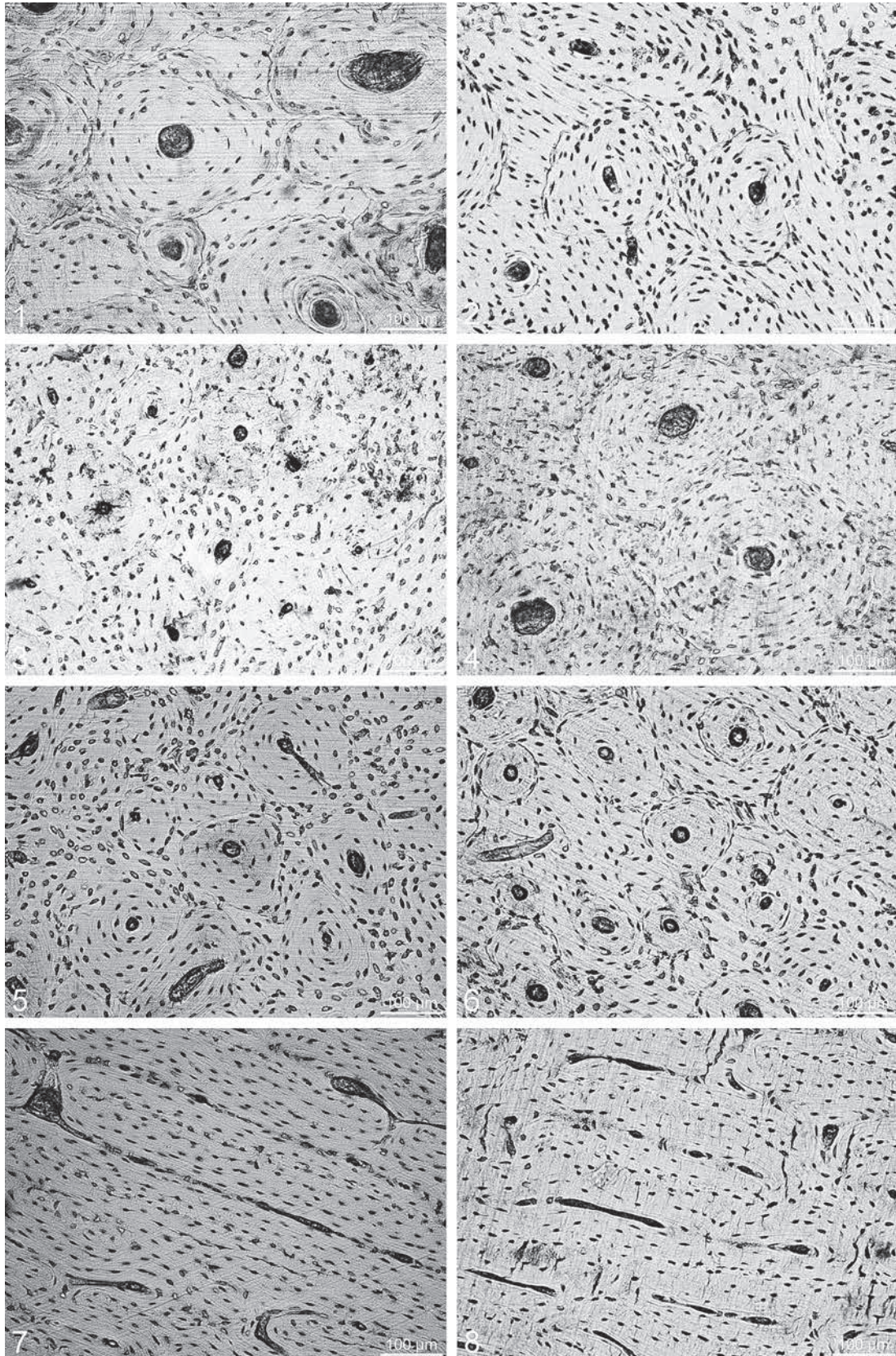
第 47 表 道正遺跡出土焼骨試料のオステオンとハバース管の面積

	オステオンの面積 (μm <sup>2</sup> )				
	N	平均値 (実測値)	標準偏差 (実測値)	平均値 (焼成前推定値)	標準偏差 (焼成前推定値)
道正No. 2	10	14868.9	6139.9	19825.1	8186.6
道正No. 3	10	14363.2	5666.8	19150.9	7555.8
道正No. 4	13	18534.3	11306.1	24712.4	15074.8
	ハバース管の面積 (μm <sup>2</sup> )				
	N	平均値 (実測値)	標準偏差 (実測値)	平均値 (焼成前推定値)	標準偏差 (焼成前推定値)
道正No. 2	10	573.0	506.2	764.0	675.0
道正No. 3	10	197.3	64.3	263.1	85.8
道正No. 4	13	789.4	477.7	1052.6	636.9



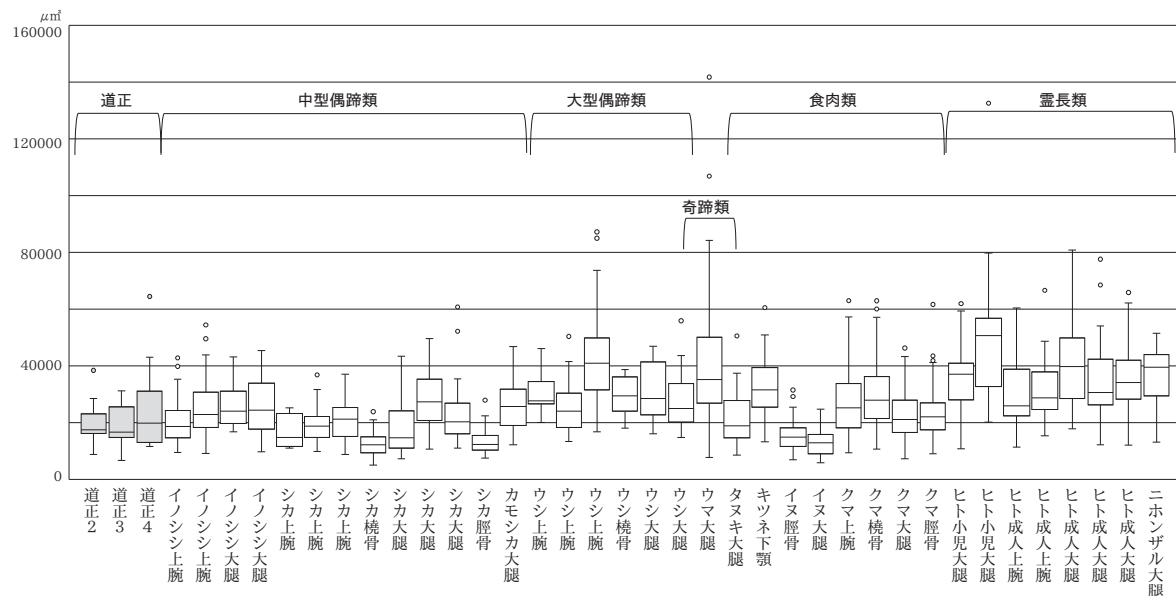
1～5：試料No.1～No.5の葉状骨、6～8：試料No.2～4のオステオン

第76図 道正遺跡試料の組織像

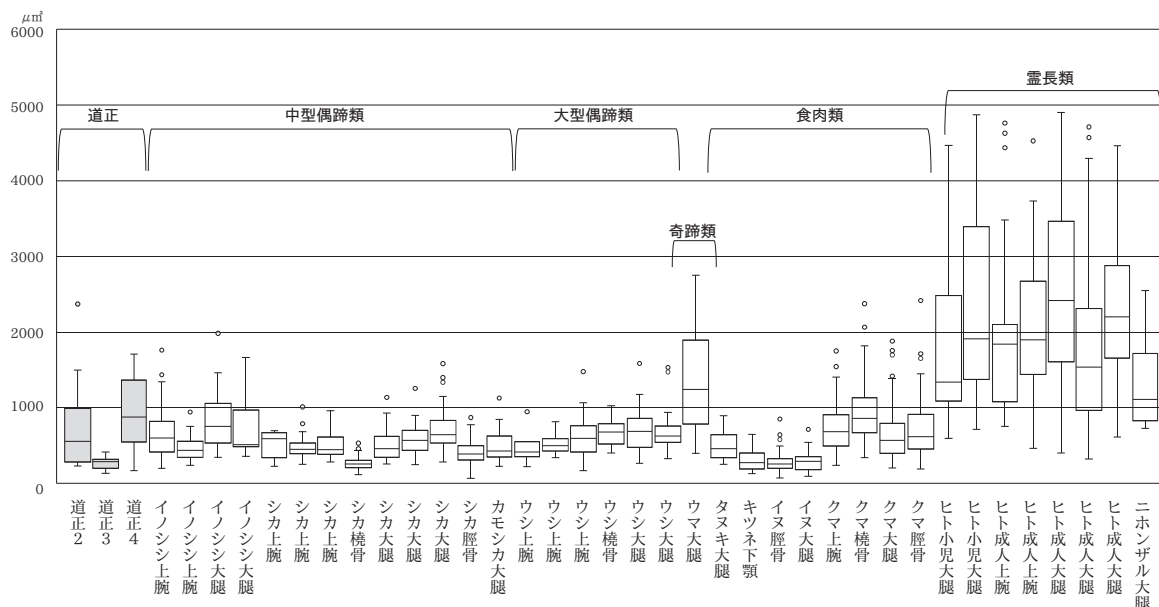


1：成人のオステオン、2：ニホンザルのオステオン、3：イヌのオステオン、4：ウマのオステオン、  
5：イノシシのオステオン、6：シカのオステオン、7：イノシシの葉状骨、8：シカの葉状骨

第 77 図 比較資料の組織像



第 78 図 道正遺跡試料と各種比較標本のオステオン面積



第 79 図 道正遺跡試料と各種比較標本のハバース管面積

ハバース管のすべての特徴が試料と類似するのは、イノシシ、シカ、ウシなどの偶蹄類であった。

より踏み込んで検討を加えるに、試料間で葉状骨の形状に明らかな違いはなく、オステオンとハバース管の面積においても試料間に顕著な相違を見出せず、また、一つの遺構から少量の焼骨が出土した状況を総合すると、出土焼骨群が同一の骨ないし個体由来する可能性が想起されよう。この仮定が正しいとして、先に挙げたイノシシ、シカ、ウシのうち、オステオンとハバース管の面積で試料との間に統計的に有意な差が認められた組み合わせの数は、イノシシが3/24例(12.5%)、シカが6/48例(12.5%)、ウシが8/36例(22.2%)であった。いささか強引な推論となるが、統計的に有意な差が認められた組み合わせの少ないイノシシないしシカといった中型偶蹄類が、試料により近いといえるかもしれない。

西本〔1991〕は、動物骨が出土した古墳時代の遺跡として愛媛県宮前川・北斎院遺跡、和歌山県目良遺跡、神奈川県なたざり遺跡、山口県吉母浜遺跡、鹿児島県手打遺跡、鹿児島県上能野遺跡、長崎県串島遺跡を挙げてい



第48表 Games-Howell 法による試料の計測値（焼成前推定値）と比較標本計測値の平均値の差の検定結果

比較標本（括弧内は標本番号）	オステオン面積			ハバース管面積		
	道正No. 2	道正No. 3	道正No. 4	道正No. 2	道正No. 3	道正No. 4
<b>中型偶蹄類</b>						
イノシシ上腕骨1 (SS9901 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.013	n.s.
イノシシ大腿骨2 (SS9901 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
イノシシ上腕骨3 (SS9601 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
イノシシ大腿骨4 (SS9601 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
シカ上腕骨1 (HK99002 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
シカ上腕骨2 (HK99006 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.002	n.s.
シカ上腕骨3 (HK99008 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.001	n.s.
シカ橈骨 (HK99002 Rad)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.035
シカ大腿骨1 (HK99002 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.001	n.s.
シカ大腿骨2 (HK99006 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
シカ大腿骨3 (HK99008 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
シカ脛骨(HK99002 Tib)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
カモシカ大腿骨 (CC99601 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.009	n.s.
<b>大型偶蹄類</b>						
ウシ上腕骨1 (BT01 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
ウシ上腕骨2 (BT06 Hum)	<0.001	0.002	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
ウシ上腕骨3 (BT07 Hum)	<0.001	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
ウシ橈骨 (BT01 Rad)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
ウシ大腿骨1 (BT03 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
ウシ大腿骨2 (BT04 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.019	n.s.
<b>大型奇蹄類</b>						
ウマ大腿骨 (Eq9901 Fem)	0.002	0.001	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
<b>食肉類</b>						
キツネ下顎骨 (Vv- Mand)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
タヌキ大腿骨 (Np- Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
イヌ大腿骨 (Clf- Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.040
イヌ脛骨 (Clf- Tib)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
クマ上腕骨 (UA9801 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
クマ橈骨 (UA9801 Rad)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
クマ大腿骨 (UA9801 Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
クマ脛骨 (UA9801 Tib)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
<b>霊長類</b>						
ヒト小児大腿骨1 (Sizu10-2 Fem)	0.031	0.020	n.s.	n.s.	<0.001	n.s.
ヒト小児大腿骨2 (170A-3 Fem)	0.001	0.001	n.s.	0.019	<0.001	0.011
ヒト成人上腕骨1 (Homo6326 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	<0.001	0.031
ヒト成人上腕骨2 (TD2 Hum)	n.s.	n.s.	n.s.	0.023	<0.001	0.001
ヒト成人大腿骨1 (Homo6326 Fem)	<0.001	<0.001	n.s.	0.001	<0.001	<0.001
ヒト成人大腿骨2 (Homo- Fem)	0.049	0.032	n.s.	n.s.	<0.001	0.034
ヒト成人大腿骨3 (TD1 Fem)	0.017	0.011	n.s.	0.003	<0.001	<0.001
ニホンザル大腿骨 (Mf- Fem)	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	0.013	n.s.

数字は0.05水準で有意差がみられた結果におけるp値を示す。n.s. は0.05水準で有意差なし。

る。これらの遺跡から出土した動物種はイノシシ、シカ、イヌ、ニホンザル、ウミガメなどであるが、中でもイノシシとシカが多く割合を占めていたという。しかしながら、新潟地方での狩猟活動を示す動物遺体の出土例はほとんど知られていなかった。今回の分析結果は、古墳時代の新潟地方でも、イノシシないしシカが多く狩猟されていた可能性を示唆している。今後、本分析のように断片的な骨片であっても研究材料として活用する例が増えることで、古墳時代の新潟地方での動物利用の様相をより明確にできるものと期待される。

## 第V章 岡崎遺跡

### 第1節 遺跡の概要

岡崎遺跡は平成30年度に新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う試掘調査によって周知化された新発見の遺跡である。地形的には亀田砂丘の延長線上にあたる埋没砂丘上に立地している。標高は現地表で0.7～1.0m、現況は水田化され平坦な地形が広がっていた。また調査区はほぼ中央を走る水路によって東西に分断されている。遺跡が立地する埋没砂丘は、東方約150mに所在する道正遺跡と同様、新砂丘Iに帰属する砂丘列の一角を構成するものと考えられるが、同一の砂丘であるものかどうかの地形・地質的な連続性については不明である。また、道正遺跡との間には試掘調査において埋没河川を挟むことが確認されていることから、少なくとも今回調査の対象となった縄文時代から古代の間では、両遺跡間は地形的には分断されており、岡崎遺跡は独立丘状の地形に存在していた可能性も考えられる。砂丘は、Ⅷ層上面で区域内では北側、北西側、西側に向かって低くなる斜面地形として検出された。北側斜面は海側に面するため急勾配である。一方で北西側から西側にかけての斜面は比較的緩やかな地形であるが、これは岡崎遺跡が砂丘の先端に近い場所に位置することを示唆するものかもしれない。砂丘は形成後の沈降と堆積作用によって地形は次第に平坦化し、下層には腐植層を主体に構成される堆積物、上層にはシルトや砂を主体とした堆積物と性質の異なる土層によって埋積されている。こうした層相の変化は一带の堆積環境が湿地性の環境から氾濫原性の環境に変遷したことを示すものであり、その変化はおおむね中世以降にもたらされたものであると推測される。また、砂丘は現地表に近い高さまで埋積が進行した段階でも完全に埋没せず、その頂部を残したと思われるが、おそらくは水田化される過程で削平されたものと考えられる。

本調査は試掘調査成果を参考に古代を対象とした上層、縄文時代から古墳時代を対象とした中層及び下層の都合3面調査で計画した。I層からVb層までを表土として扱いたバックホーで掘り下げた。Vc層上面で古代の遺物の散布を確認したところで人力での掘削作業に切り替えた。

上層調査では、古代の遺物包含層であるVc層の平面掘り下げとその直下層であるⅥa層上面で検出した遺構の調査・記録を行った。遺物はほとんどが砂丘斜面に形成されたVc層から須恵器・土師器を中心とした年代的にはおおむね9世紀後半のものに限定される。特に調査区東側、2A-2J・2B-2Aグリッド周辺で集中して出土しており遺存状態も良好なものが多い。これらは出土状況から人為的な投棄によって形成された土器溜まりであると判断される。こうした日常什器を中心に構成される多量な遺物の出土は、付近で相応の規模の集落が設営されていたことを物語っていると思われる。また、出土遺物には比較的多くの墨書土器が認められ粘板岩製の鉞尾が出土した点、搬入品の可能性の高い佐渡型甕や可搬式カマドが出土したことは遺跡の性格を考える上でも特筆される。

遺構は砂丘斜面に土坑・ピット・溝などを検出したが、用途や機能を限定できるものは少ない。しかし検出したピットの中には柵状の配列をなすものも見受けられた。これらのピット群は等高線におおむね沿って並んでおり、おそらくは集落の縁辺部を画する目的で構築されたものと考えられる。遺物の出土を伴わないものも多く年代比定の指標に欠くが、遺構の構築から廃絶までの過程がVc層形成期間内に収まると考えられることから、すべて9世紀後半の所産であると判断される。検出したほとんどの遺構が勾配の急な砂丘斜面に分布するが、ここを居住域と考えるのは難しい。現況では砂丘頂部が後世の削平によって消失しているため不明であるが、本来は砂丘頂部から南斜面側にかけての傾斜が緩く地形的条件が良好なところに集落の中心があったものと想定され

る。道正遺跡上層の調査では砂丘上に展開する総柱建物を多く含む建物群が見つかったが、岡崎遺跡でも平安時代では同様な集落景観が形成されていたものと思われる。

中層及び下層の調査は、上層調査の終了後に任意でトレンチを設定、これを掘削し下層の遺構と遺物の平面的、層位的な分布状況を確認した後に行った。トレンチ調査の結果、全体的に遺構・遺物の分布はまばらであることが確認された。低地側では標高-2mに達したあたりで排水困難な状況となり掘削限界に達してVII層上面まで掘り下げることができず、また調査の成果も見込めないと予想されることから中層及び下層の調査では低地が広がる調査区北側の区域の調査範囲を縮小して対応した。VIa層は無遺物層、VIb層では一部での遺物の出土はあったが全体的にはほとんど認められなかったため、バックホーを用いて掘り下げた。

中層の調査面であるVII層上面では遺物の散布はほとんどなく、遺構の分布も少ないことが予測された。また黒色細砂層では遺構確認も難しいことから、中層での調査は地表面の地形測量をするにとどめ、遺構検出は下層のVIII層上面の調査と兼ねることとした。下層の調査は砂丘基盤の細砂層であるVIII層上面を調査面とした。VII層の平面掘り下げの過程で、縄文時代中期から晩期、弥生時代中期、古墳時代前期の年代の異なる遺物の出土を確認したが、数量的に乏しく層位的な分布状況は不明である。VII層除去後に遺構確認を行ったが、縄文時代のものを含む土坑3基、ピット1基を検出したのみである。

中層及び下層の調査ではこのように遺構・遺物の分布が希薄であることから、遺跡の性格の把握や位置づけを行うのは難しい。しかし、縄文時代中期から古墳時代前期までの遺物が断続的であるものの出土し長期にわたって付近での生活の痕跡を確認できたことは一定の成果である。また、ヒスイ・緑色凝灰岩などの石材や玉類の未成品の出土は玉作の痕跡を示すものとして特筆される。ともあれ、上層と同様に遺跡の中心は丘陵頂部側にあることは自明であると考えられる。また区域内での遺構や遺物の分布がわずかであるのは、上層面と比較して砂丘の埋積が進んでおらず相対的に砂丘斜面の勾配が急であり、こうした地形的な条件の悪さに起因するものかもしれない。

## 第2節 基本層序と旧地形の復元

### A 岡崎遺跡の基本層序（図版123～125、写真図版120・121）

基本層序の記録は、調査区壁面や区域内に設定したベルトやトレンチを利用して行った。そのなかで埋没砂丘の地形とその埋没状況を良好に表すAからFまでの6地点を抜き出して掲載した。また地点相互の地形と土層の対応関係を示すために柱状図を作成した。

以下、岡崎遺跡の基本層序に確認された土層の特徴について詳述する。

**I層** 表土層である。Ia層が現代水田耕作土でIb層が水田基盤層及び圃場整備の整地層である。

**II層** シルト層や砂層を主体に構成される堆積物である。水田基盤層の直下層にあたり全体的に管状斑鉄の発達が著しい。その特徴によりIIa層からIIe層まで5細別した。

**III層** 未分解の有機物からなる薄い腐植層である。広範囲に安定して認められた。この腐植の堆積は、短期間に植生が繁茂した痕跡と考えられ、ある時期に堆積の停滞があったことを示すものと見受けられた。そのため、この層がII層、IV層を上下層に区分する基準となった。

**IV層** II層と同様シルトや砂層を主体に構成される堆積物である。その特徴によりIVa層からIVd層まで4細別した。なお、IVb層・IVc層では菱鉄鉱がブロック状に混入する。

II層とIV層は平行ラミナを形成する砂層、シルト層、シルトと砂の互層堆積といった特徴を有する土層の重畳により構成されており、層相からこれらは河川の洪水・氾濫によってもたらされた堆積物と判断される。IV層からII層の形成期間は付近で河川の活動が活発であり、III層のように腐植が発達し堆積が一旦止むような時期はあっても原則的には一帯は氾濫原性の低地帯が広がる環境と考えられる。

**V層** 湿地性の腐植質の堆積物を主体に構成される土層である。特徴によりVa層からVc層の3区分した。Va層は薄い腐植層と灰色シルトが細密に互層堆積する層である。Vb層は比較的植物遺体の分解の度合いが弱い泥炭質の層である。なお、下層のVc層からの変化は漸移的である。Vc層は古代の遺物包含層。比較的地形が平坦な低地側ではシルト質、砂丘斜面の範囲では細砂質と異なる基質の土層で確認される。Vc層のこうした特徴は、低地側と斜面側での土層の堆積要因の相違がもたらしたものと考えられる。低地側は水成堆積、斜面側は砂丘表層の流出土砂の上方からの供給により形成されたものである。出土遺物は年代的におおむね9世紀後半に限られ、これら異なる要因に基づく堆積がほぼ同時期に進行することでVc層が形成されたと判断される。遺物の出土傾向は上層ではまばらに、下層で多く出土する傾向がある。この特徴から上層をVc1層、下層をVc2層と区分した。また、Vc2層は特に砂丘斜面で細かい単位での分層が可能である。観察地点ごとに様相が異なりそれぞれの土層の対比が難しいため、地点ごと個別に分層及び観察・記録を行った。2A-2J・2B-2Aグリッド周辺では、多量に集中した遺物の出土が見られたが、その範囲では炭化物層の形成も認められた。なお、SK11・28では遺構の低地側が削平されて検出される状況やP50がVc2層を掘り込んで構築されるのが確認され、これは遺構の掘り込み面が遺構検出面のVIa層ではなくVc層中にあることを示唆している。そして斜面の地形的な特性上、表層では土砂の堆積と流出が絶えず繰り返され、土砂の供給が流出を上回り地表面が上昇する過程で遺構の構築も遺物包含層の形成も並行したと考えられる。なお、V層は、その形成過程から堆積環境の変化を読み取ることができる。Vc層からVb層ではほとんど洪水層の堆積が観察されないが、Va層では薄い腐植層とシルトが細密な互層堆積をなすようになる。つまり、Vc～Vb形成期では河川の活動が低調であったのに対し、Va層形成期では湿地性の環境にありながら、頻繁に洪水が生じる環境に推移した様相がうかがわれる。

**VI層** 湿地性の腐植質の堆積物とその形成過程で繰り返された洪水によるシルト層が重畳した土層群である。その特徴や性格に基づきVIa～VIc層までの3区分した。VIa層は灰白色シルト層である。この上面を遺構確認面とした。無遺物層である。VI層にみられるシルト層の中でも相対的に大規模な洪水に伴うものと考えられ、厚いところで30cm程度の層厚で観察される。遺跡周辺でも広範囲に安定した堆積が確認され、道正遺跡のVIa層と同一で本層を鍵層として位置づけが可能であり、上層のV層と区分する指標にもなった。なお、VIa層は砂丘を標高-0.1～0.3mあたりの高さまで被覆するが、これより上位へ堆積は広がらない。そのためVIa層の堆積が及ばない斜面上方ではVII層上面またはVIII層上面も古代の遺構確認面となる。VIb層は、低地側に腐植層とシルト層が細かく幾重にも折り重なって厚く堆積する土層群をまとめたものである。観察地点によって堆積の様相が異なり、腐植層は分解の程度も様々に泥炭質なものからシルト質なものまで認められる。洪水起源と考えられる灰白色シルトも単層として厚みをもって堆積するものもあれば、薄く縞状に有機物層と互層堆積をなすものもあり特徴は多様である。土層は細かい単位で重畳しその層理に基づく区分も可能だが調査的に有意味ではないため適度に簡略化して分層した。また、堆積が複雑でそれぞれの観察地点どうしの土層の対比も困難なため、地点ごと個別に分層し、観察・記録を行った。土層の観察内容も分類し簡略化して表記した。なお、VIb層からは弥生時代甕の(図版157-12)や口縁部を欠損した古墳時代壺(図版157-7)などの遺物の出土が見られた。なお、VI層の形成年代であるが、この出土遺物の年代から形成は少なくとも弥生時代には始まっており、VIa層が9世紀後半の遺構に掘り込まれることから、古代以前まで継続したことが示唆される。また、その特徴から一帯が湿地性の堆積環境下にありながらも頻繁に洪水の影響を受ける地勢にあったと推測される。

VIc層はシルト層と細砂が混交した層である。VIa層とVII層の間によく発達し、単にVII層との漸移層的な意味合いで区分したものである。調査時はVI層に含めたが、基質はVII層近似であり、本来はVII層の亜層として取り扱うべきものであったかもしれない。さらに細分も可能ではあるが、地点ごとに堆積の様相も異なるため、それぞれに分層及び観察・記録を行った。遺物の出土は少ないがVIa層直下で古墳時代の遺物の出土が認められた。なお、VIc層の形成はVIb層上層の堆積と並行すると判断される。

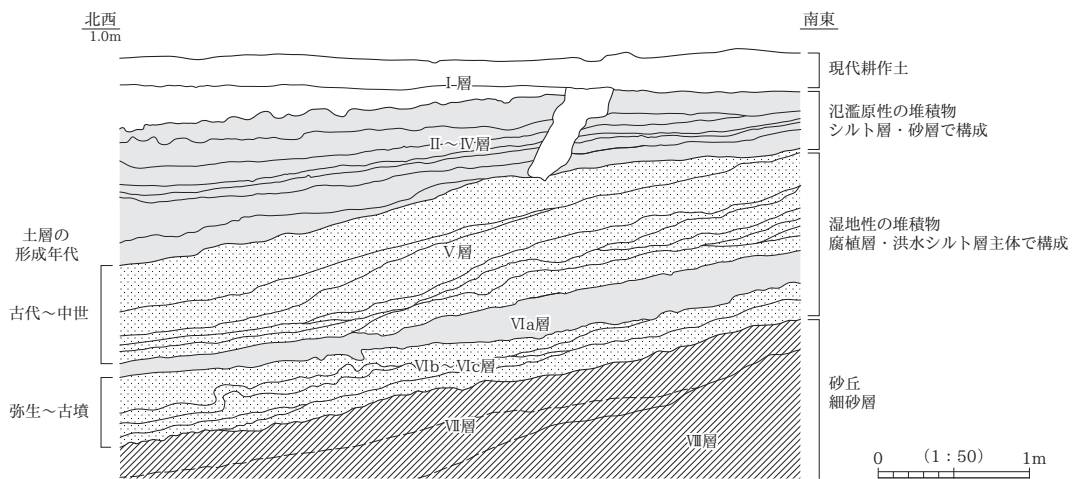
**VII層** 砂丘表層に発達した腐植層である黒色細砂層と砂丘斜面に形成されたその二次堆積層である。その上面

が中層の調査面となる。本来はプライマリーな黒色細砂層と二次堆積層とは区分すべきであるが、両者の特徴に差異がなく分類が難しいため同一の層として取り扱った。断面の観察では、VII層がVIb層を構成する一部の土層を挟んで堆積するような事例を複数地点で認めることができる。また、低地側では平面掘り下げの過程でVII層下にVIb層を検出する事例もしばしば見受けられた。こうした現象は、砂丘斜面でのVII層の二次堆積層の形成とVIb層の堆積が並行する関係性を示唆するものと考えられる。VIb層の堆積は前段で触れたとおり長期間持続したと考えられるが、その間も並行して砂丘表層土の流出は継続し斜面に連綿と黒砂層の二次堆積層を形成し続けたものと思われる。調査で確認された事例はこのように低地側と斜面側の堆積が並行する中でVIb層とVII層が交互に折り重なって堆積した状況を示したものと解釈される。なお、VII層上位では縄文時代から古墳時代までの遺物が含まれ、VIa層の堆積が及ばない砂丘上方では古代の遺物も出土する。これも本来遺物包含層として区分すべきと思われるが、遺物の出土はわずかで分層の基準を見出せないことからVII層に含めた。

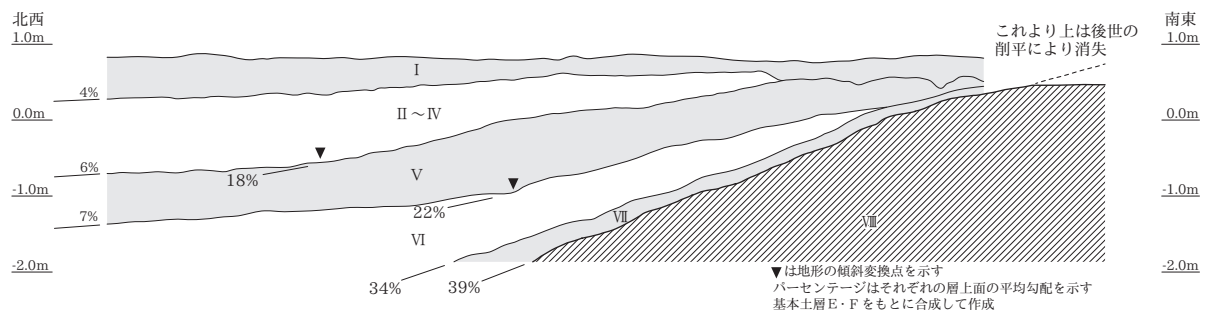
**VIII層** 浅黄色細砂で砂丘形成層で本遺跡の基盤層である。縄文時代から古墳時代までを対象とした下層調査では、このVIII層上面を遺構確認面とした。なお、VIII層上面の検出を調査の最終目標としたが、低地側では標高-2mで絶えず湧水し排水困難となり掘削が不可能となったため、これより下位の地形や堆積状況は不明である。

### B 砂丘の埋没過程にみる堆積環境と地形の変化 (第80・81図)

以上、I層からVIII層まで区分した。また、各層ごと層内における特徴の変化に応じて更に細別した。岡崎遺跡は埋没砂丘の北側斜面の一角を構成するが、基本土層の観察からはこの砂丘の斜面地形が埋積してゆく過程を読み取ることができた。さらにその過程で遺跡一帯の区域の堆積環境の変遷の様子を窺い知ることができた。なお、基本土層はそれぞれの土層の堆積要因に基づき大まかに4グループに分類することができる。下層より砂丘地形を形成する細砂層からなるVIII層・VII層、腐植や腐植質シルトなど湿地性の堆積物を主体とするVI層・V層、シルトや砂といった氾濫原性の堆積物を主体とするIV～II層、現代耕作土であるI層の順での堆積が確認される。



第80図 土層の形成年代と堆積の特徴



第81図 埋没の進行に伴う地形傾斜の変遷 (S = 1/100)

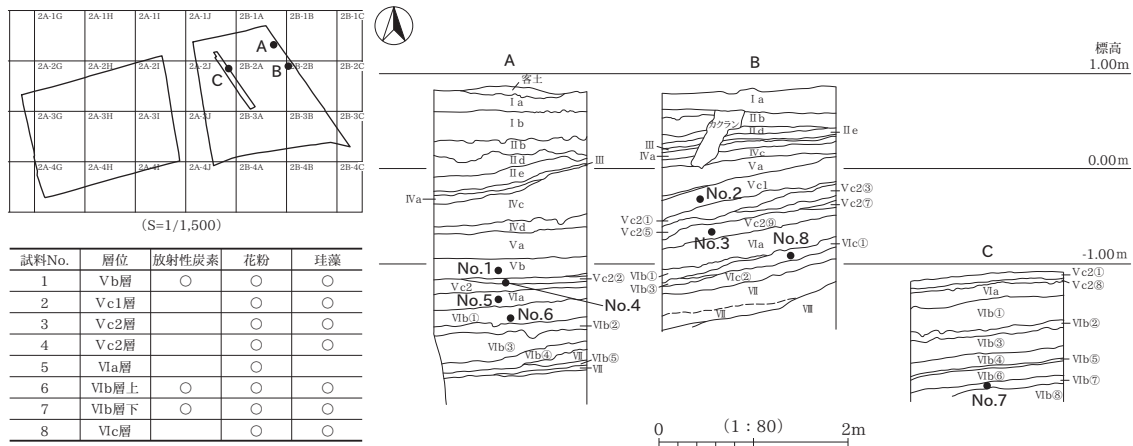
このような堆積層の断面に観察される層相の変化をたどると、砂丘形成以降、その埋没の過程でIV層形成の時期を境に遺跡周辺の堆積環境が湿原や沼沢地が広がるような湿地性の環境から氾濫原性の低地に変貌し、やがて現代に至るまでの間に水田化した様子が看取される。また一帯の水田化とともに砂丘頂部が削平されている状況も確認された。

基本土層からは、砂丘の埋積が進むにつれ丘陵と低地の比高差が徐々に解消され地形が平坦化されてゆく過程も看取される。基本土層 E-E' 及び F-F' の断面を参考に地形傾斜の変遷を辿ると、基盤層としてのVIII層上面では平均勾配が39%であるのに対し、VII層上面では34%、VIa層上面では22%と推移するのが確認できる。またVIa層上面の地形では低地側へ向かって斜面地形から平坦な地形に遷移するが、その傾斜変換点は標高-1.0m付近にあり、そこから先は勾配が7%まで緩やかになる。最終的に地形はII層上面で平均勾配4%程度まで平坦化する。

なお、今回の調査区域内で確認した砂丘地形は、北側と西側に斜面を有するが、北側は海側に面するためかVIII層上面では急勾配で検出されたのに対し、西側の傾斜は緩やかである。これは岡崎遺跡の位置が、地形的には埋没砂丘の先端部分に近いことを示すものかもしれない。

### C 自然科学分析からみる土層の堆積年代と環境変化 (第82図)

基本層序の観察から先述の通り遺跡周辺の堆積環境が、現代に至るまでの過程で大きく変遷した様子を知ることができた。V層とIV層の間にこの変遷の画期があり、湿地性の堆積環境から氾濫原性の堆積環境に変化したことが、それは同時に砂丘を取り巻く周囲の景観も湿地・潟湖・沼沢地といった風景から、河川の影響を受けやすい氾濫原性の沖積地が広がる低地帯に大きく変貌したことを示している。こうした堆積環境や景観の変遷の年代観については、放射性炭素年代測定(AMS)を用いた土層の年代比定から大まかにつかむことができる。調査では分析に要する土壌サンプルを、未分解の有機物を多量に含むVb層(試料No.1)、VIb層で採取した。なお、VIb層は堆積が厚く長期にわたって形成されたものであると考えられることから、最上層(試料No.6)と最下層(試料No.7)の2か所に分割してサンプルを採取した。分析の結果得られた土層の年代は次の通りである。Vb層では11～12世紀、VIb層最上層で6世紀、VIb層下層で紀元前2～3世紀の年代が与えられた。Vb層は9世紀後半の遺物包含層であるVc層を被覆するものであり、VIb層は弥生～古墳時代の遺物を含むものであることから、分析結果は調査で得られた所見と齟齬をきたすものではないと思われる。また、土層の形成年代を踏まえ遺跡周辺の堆積環境を概観すると、弥生時代中期以降すでに一帯は湿地性の環境で、時折洪水の被害を受けつつも中世あたりまではこの環境は維持され、その後IV層の形成にみられるように氾濫原性の低地帯に変遷した様子がうかがわれる。また、上層調査での遺構確認面となったVIa層は、おおむね古墳時代後期から平安時代の間に生じた洪水によるものであることも示唆された。今回の調査で明らかとなった遺跡周辺でのこうした堆積環境の



第82図 土壌サンプル採取地点

変遷は、縄文時代（完新世）以降の新潟平野における砂丘列の形成、これに伴う海岸線の後退、信濃川や阿賀野川など主要河川の流路変更といった地理的環境の広域で長期的な変動とも相関するものと考えられる。

なお、調査では遺跡の植生環境の復元を目的としてVb～Vc層、VIa～VIc層を対象に花粉分析も実施した。分析の結果、VI層形成期では樹木花粉が全体の約9割と卓越する状況から、V層形成期ではこれが急減し草本花粉がその半数近くを占めるようになる傾向が看取された。また、樹木花粉の組成も、VI層期ではクリやコナラなどの広葉樹が定量認められ目立っていたが、V層期ではこれらが大幅に減少するのも特徴的である。こうした層位別にみる花粉化石の組成や抽出された花粉数量の変化から、弥生時代から古墳時代にかけて砂丘上では樹木が生い茂る景観から、やがて古代に至るとその森林面積が減少し草原が広がる開けた景観へと変遷した様子が窺われた。

### 第3節 遺構 (図版 126～138、写真図版 117・118・123～130、別表 11)

#### A 上層の遺構 (図版 126～134)

##### 1) 概要

遺構確認はVIa層上面、VIa層の堆積が広がらない砂丘上方ではVII・VIII層上面で行った。その結果、土坑4基、溝2条、柵1列、ピット38基、その他の遺構1基を検出した（検出したピットのうち12基が柵を構成する）。遺構の覆土は全体的に近似しており、VIa層が被覆するVc層を基質とする細砂が主体であるが、低地側の近くに検出されたものほどシルト質で粘性が強まる。なかには人為的埋め戻しと明確に判断されるものがあるが、そうしたものにはVIa層の灰白色シルトブロックを含むのが特徴的である。上層の遺構はほとんどがVIa層上面で遺構確認したものだが、SK11・28の残存状況や、P50・SX3の土層断面の観察などから、実際の遺構の掘り込み面はVc層中にあると考えられる。第2節でも説明した通りであるが、古代の遺物包含層であるVc層の形成と遺構の構築はある程度並行すると考えられ、斜面地という地形の特性ゆえに土層の流出と供給を絶えず伴う中で遺構が構築された状況があったことが想起される。なお、Vc層と遺構出土遺物に大きな年代的差異は認められない。このため上層で検出した遺構の年代はほぼ9世紀後半に限定される。

##### 2) 遺構各説

###### a 土坑 (SK)

SK11 (図版 126・127・130・133・134、写真図版 123)

2A-2J20 グリッドに位置する。VIa層上面で確認。P9と重複するが新旧関係は把握できなかった。斜面地形のため遺構の低地側は削平により消失している。平面形状は長方形を呈していたと思われ、壁面は急傾斜に立ちあがることから、箱状の掘り込みを伴ったと推測される。主軸方位はN-6°-Wとほぼ南北軸を示す。規模は、上端で長軸は残存長0.99m、短軸0.64m、深さは0.14mを測る。底面標高は-0.43mでやや凹凸を伴うが平坦である。堆積状況は単層でVIa層のシルトブロックが目立ち、人為的な埋め戻しの可能性がある。

SK28 (図版 126・127・130・133・134、写真図版 123)

2B-2A14 グリッドに位置する。VIa層上面で確認。斜面地形のため低地側は削平により消失している。平面形状はやや不整の楕円形、断面形状は削平が底面に近いところまで及び残存不良なため明らかでない。主軸方位はN-62°-Eを示す。規模は、長軸0.54m、短軸0.42m、深さ0.06mを測る。底面標高は-0.22mで、平坦であるが南壁際中央に小ピットが一つ掘られている。床面は被熱により赤黒く焼土化し固結している。この床面の焼土化は硬化の状態からある程度継続的に高温にさらされたものと判断され、周辺からは鉄滓や羽口の小破片が出土していることを踏まえ、鍛冶炉（小鍛冶）のようなものを想定した。そのため遺構覆土や遺構周辺の表層の泥を採取、洗浄フルイがけを行いその残留物を対象に選別・抽出作業を行ったが、鍛造剥片や粒状滓など鍛冶関連の微細遺物は見つからず、遺構の性格を確定するには至らなかった。下部構造の確認のためにセクション軸に

沿ってサブトレンチを掘削したが、床下に掘方は確認できなかった。なお3層としたものは地山が焼土化したものである。遺構の残存状況からして掘り込みはVc層中にあったと考えられ、土坑状のくぼ地を利用したものと思われる。また、土坑を覆う上屋のようなものの存在も想起したが、周辺に建物跡を構成するようなピットの配列は認められなかった。

**SK45** (図版 126・127・130・133、写真図版 123・124)

調査区西壁際、2A-3J8・9・10・14・15グリッドの範囲に位置する。砂丘斜面上方のVIa層の堆積が及ばない範囲にあり、VII層上面での遺構確認となった。覆土はVII層基質で遺物が混入するほか地山と区別がつかないことから、平面的に徐々に面下げしながらプランを確定した。斜面地形のため低地側は削平により消失している。平面形状は不整形で東西に長く伸びる長楕円形を呈する。西側が区域外に広がり、下層調査後に調査区を拡張してこの延長を検出したが、西壁の立ち上がりは確認できなかった。壁面は急傾斜で立ち上がる。主軸方位はN-69°-Eを指す。規模は、上端で長軸が残存長5.40m、短軸1.85m、深さは0.15mを測る。底面標高は-0.12m。床面は平坦に広がるが、東寄りに土坑及びピットがそれぞれ1基掘り込まれる。土坑の平面形状はやや不整の楕円形。主軸方位はN-21°-Eを指す。規模は、上端で長軸1.24m、短軸0.8m、深さはSK45床面から0.36mを測り、床面標高は-0.42mである。ピットはやや不整の円形。規模は上端で長軸0.33m、短軸0.26m、深さはSK45底面から0.18mを測り、底面標高は-0.14mである。出土遺物には須恵器無台杯(図版140-1)、土師器碗(図版140-3～5)、黒色土器(図版140-6・7)、鍋(図版140-10～13)、長甕(図版140-8)等の土器片が確認されている。

**SK48** (図版 126・127・130・133、写真図版 124)

2B-2A24グリッドに位置する。VIII層上面で確認した。平面形状は円形。断面形状は半円状を呈する。規模は上端で長軸1.09m、短軸1.00m、深さ0.26mを測る。底面標高は0.23m。覆土は単層、VII層基質の細砂を主体とする。砂丘頂部側でVIa層の堆積範囲から外れ、また後世の削平を受けているため、Vc層との層序関係も不明である。覆土はVII層の黒色細砂に近似するが、上層出土の土師器片から遺構の年代はおおむね古代に想定される。

#### b 溝 (SD)

**SD23** (図版 126・128・130・133、写真図版 124)

2A-3I13・17・18グリッドに位置する。VIa層上面で確認。標高-0.5～-0.4m付近でおおむね等高線に沿った直線的な走向で、断面形状は弧状を呈する。主軸方位はN-67°-Eを指す。規模は幅0.28m、深さ0.12mである。覆土は砂が混入する灰黄褐色シルトの単層である。底面標高は最高点で-0.43m、最低点で-0.61mであるが底面の傾斜の方向は全体的には平坦である。調査区東側、延長線上に同様の主軸方位でSD24が存在し、同一遺構と考えられる。土師器長甕片が出土した。

**SD24** (図版 126・127・130・133、写真図版 124)

2A-2J24グリッドに位置する。VIa層上面で確認。標高-0.5～-0.3m付近でおおむね等高線に沿った直線的な走向で三つに途切れた状態で確認された。断面形状は弧状を呈する。主軸方位はN-59°-Eを指す。規模は幅0.31m、深さ0.14mを測る。底面標高は最高点で-0.45m、最低点で-0.49m、底面の傾斜方向はほぼ平坦である。覆土は砂が混入する黄灰色シルトの単層である。調査区西側の延長線上に同様の主軸方位でSD23が存在し同一遺構と考えられる。

#### c ピ ッ ト (P)

**P1** (図版 126・128・131)

2A-4H4グリッドに位置する。VIa層上面で確認。平面形状は楕円形、断面形状は半円状を呈する。主軸方位はN-14°-Eを指す。規模は上端で長軸0.36m、短軸0.32m、深さ0.24mを測る。底面標高は-0.36m。覆土は3層に分かれるが、断面写真から1層部分が遺構に相当、2層はVIa層、3層がVII層に対比され掘りすぎと判



断される。本来は直径 0.20m、深さ 0.14m 程度のピットであったと考えられる。

**P2** (図版 126・128・131)

2A-4H4 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状はやや不整の円形、断面形状は半円状を呈する。規模は上端で直径 0.40m、深さ 0.30m を測る。底面標高は -0.42m。覆土は 3 層に分かれる。

**P4** (図版 126・127・131・133、写真図版 124・125・128)

2B-2A12・17 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状はやや不整の隅丸方形、断面形状は U 字状を呈する。テラスを有し柱根部分がピット状に掘り込まれる。主軸方位は N-38°-W を指す。規模は上端で長軸 0.32m、短軸で 0.26m、深さ 0.22m を測る。底面標高は -0.37m。覆土は単層で、Vc 層基質のシルト混細砂。上層から須恵器無台杯 (図版 141-15) が出土した。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P5** (図版 126・127・131・133)

2B-3J4 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状はやや不整の隅丸長方形、断面形状は弧状を呈する。主軸方位は N-37°-W を指す。規模は上端で長軸 0.32m、短軸 0.22m、深さ 0.07m を測る。底面標高は -0.17m。覆土は単層、Vc 層基質のシルト混細砂で炭化物の混入が目立つ。

**P6** (図版 126・127・131・133・134、写真図版 125・128)

2A-3J3・4 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状はやや不整の円形、断面形状は漏斗状を呈する。規模は上端で直径約 0.22m、深さ 0.26m を測る。底面標高は -0.48m。覆土は Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、2 層に分かれる。VIa 層ブロックの混入がやや目立つ。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P7** (図版 126・127・131・133・134、写真図版 125・128)

2A-2J25 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は方形、断面形状は U 字状を呈する。規模は上端で長軸 0.20m、短軸 0.18m、深さ 0.22m を測る。底面標高は -0.48m。覆土は Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、2 層に分かれる。VIa 層ブロックの混入がやや目立つ。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P8** (図版 126・127・131・133・134、写真図版 128)

2A-2J24・25 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状はやや不整の円形。断面形状は U 字状を呈する。規模は上端で直径約 0.22m、深さ 0.22m を測る。底面標高は -0.38m。覆土は Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、2 層に分かれる。

**P9** (図版 126・127・131・133・134、写真図版 128)

2A-2J20 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。SK11 と重複するが新旧関係は不明である。平面形状は不整円形、断面形状は U 字状を呈する。規模は上端で直径約 0.23m、深さ 0.29m を測る。底面標高は -0.62m。覆土は Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、2 層に分かれる。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P10** (図版 126・127・131・133・134)

2A-2J25 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は楕円形、断面形状は U 字状を呈する。規模は上端で長軸 0.23m、短軸 0.16m、深さ 0.17m を測る。底面標高は -0.37m。覆土は単層、Vc 層基質のシルト混細砂を主体とする。

**P12** (図版 126・127・131・133・134、写真図版 125・128)

2B-2A16 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状はやや不整の隅丸方形、断面形状は漏斗状を呈する。主軸方位は N-65°-W を指す。規模は上端で長軸 0.28m、短軸で 0.26m、深さは 0.30m を測る。底面標高は -0.61m。覆土は単層、Vc 層を基質とするシルト混細砂を主体とし、VIa 層ブロックの混入がやや目立つ。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P13** (図版 126・127・131・133・134)

2A-2J25 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は円形、断面形状は U 字状を呈する。規模は上端で直径約 0.27m、深さは 0.30m を測る。底面標高は -0.4m。覆土は Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、

2層に分かれる。

P14 (図版 126・127・131・133・134)

2B-2A18 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は楕円形、断面形状は台形状を呈する。規模は上端で長軸 0.46m、深さは 0.26m を測る。底面標高は -0.51m。覆土は Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、炭化物の混入がやや目立つ。2層に分かれる。遺構確認時はプランが判然とせず遺構かどうかの認定が難しかったので、半截時に断ち割って調査し、断面上で遺構の掘り込みを確認した。結果、遺構の東半分を消失している。

P15 (図版 126・127・131・133・134、写真図版 126・128)

2B-2A12・13 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状はやや不整の隅丸方形、断面形状は U 字状を呈する。主軸方位は N-25°-W を指す。規模は上端で長軸 0.26m、短軸で 0.25m、深さ 0.34m を測る。底面標高は -0.57m。覆土は Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、2層に分かれる。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

P16 (図版 126・127・131・133・134、写真図版 126・128)

2B-2A10 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は方形、断面形状は弧状を呈する。主軸方位は N-46°-E を指す。規模は上端で長軸 0.24m、短軸で 0.20m、深さ 0.10m を測る。底面標高は -0.45m。覆土は単層、Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、VIa 層ブロックの混入が目立つ。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

P17 (図版 126・127・131・133)

2B-2A5 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は楕円形、断面形状は U 字状を呈する。主軸方位は N-48°-W を指す。規模は上端で長軸 0.24m、短軸 0.17m、深さ 0.18m を測る。底面標高は -0.66m である。覆土は単層、Vc 基質のシルト混細砂を主体とし、VIa 層ブロックの混入がやや目立つ。

P18 (図版 126・127・131・133、写真図版 126・128)

2B-2A10 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は隅丸方形、断面形状は U 字状を呈する。主軸方位は N-15°-W を指す。規模は上端で長軸 0.22m、短軸 0.20m、深さ 0.18m を測る。底面標高は -0.58m。覆土は単層、Vc 基質のシルト混細砂を主体とする。土師器鍋 (図版 141-14) が出土した。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

P19 (図版 126・127・131・133、写真図版 126)

2B-2A10・2B6 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は不整隅丸長方形、断面形状は台形状を呈する。主軸方位は N-12°-W を指す。規模は上端で長軸 0.48m、短軸で 0.39m、深さ 0.42m を測る。底面標高は -0.60m。覆土は 3 層に分かれ、Vc 層基質のシルト混細砂を主体とし、VIa 層ブロックの混入が目立つ。柱掘方として十分なしっかりとした掘り込みを有するが、柱痕跡は見出せない。また付近に P20 のような規模・形状が類似するものも存在するが建物跡を構成するような配列をなさない。なお、覆土中から土師器長甕、鍋の破片が少量出土している。

P20 (図版 126・127・131・133・134、写真図版 127)

2B-2A14 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は隅丸方形に近い楕円形、断面形状は漏斗状を呈する。主軸方位は N-3°-E を指す。規模は上端で長軸 0.58m、短軸で 0.46m、深さ 0.50m を測る。底面標高は -0.57m。覆土は 4 層に分かれ、最上層の 1 層は Vc 層基質のシルト混細砂を主体とするが、2 層から下層は、Vc 層と VIa 層が混交したシルト質の土層が堆積している。VIa 層ブロック・炭化物の混入が目立つ。柱掘方として十分なしっかりとした掘り込みを有するが、柱痕跡は見出せない。また付近に P19 のような規模・形状が類似するものも存在するが建物跡を構成するような配列をなさない。

P21 (図版 126・128・132・133)

2A-3I19 グリッドに位置する。VIa 層上面で確認。平面形状は楕円形、断面形状は弧状を呈する。主軸方位は

N-27°-Eを指す。規模は上端で長軸0.24m、短軸で0.19m、深さは0.10mを測る。底面標高は-0.34m。覆土は単層、Vc層基質のシルト混細砂を主体とする。

**P22** (図版126・128・132・133)

2A-3I19グリッドに位置する。VIa層上面で確認。平面形状は円形、断面形状は弧状を呈する。規模は上端で直径約0.25m、深さ0.14mを測る。底面標高は-0.40m。覆土は2層に分かれ、Vc層基質だがシルト質でVIa層ブロックの混入が目立つ。1層から須恵器有台杯(図版141-16)が出土した。

**P25** (図版126・127・132・133・134、写真図版127・128)

2B-2A9グリッドに位置する。VIa層上面で確認。平面形状はやや不整の隅丸長方形、断面形状はU字状を呈する。主軸方位はN-15°-Eを指す。規模は上端で長軸0.19m、短軸で0.15m、深さ0.22mを測る。底面標高は-0.58m。覆土は単層で、Vc層基質のシルト混細砂を主体とし、VIa層ブロックの混入がやや目立つ。柵(SA51)を構成するピットの一つである。

**P26** (図版126・127・132・133・134)

2B-2A14・15グリッドに位置する。VIa層上面で確認した。平面形状は楕円形、断面形状はU字状を呈する。主軸方位はN-76°-Eを指す。規模は上端で長軸0.26m、短軸0.22m、深さは0.18mを測る。底面標高は-0.42m。覆土は単層で、Vc層基質のシルト混細砂を主体とする。

**P27** (図版126・127・132・133・134)

2B-2A13グリッドに位置する。VIa層上面で確認。平面形状は不整円形、断面形状は台形状を呈する。規模は上端で長軸0.49m、深さ0.16mを測る。底面標高は-0.26m。覆土は単層で、Vc層を基質とするシルト混細砂を主体とし、VIa層ブロックの混入がやや目立つ。

**P29** (図版126・127・132・133・134)

2B-2A9グリッドに位置する。VIa層上面での調査時に見落とししたものである。VII層検出時のVIa層・VIc層の平面掘り下げ作業中に確認した。そのため大半が掘削に伴い消失してしまい、その一部を痕跡的に確認した。本来平面形状は楕円形、規模は上端で長軸0.30m、短軸0.25mを測り、深さはVIa層上面から50cm程度であったと考えられる。底面標高は-0.75m。一部壁面に残る覆土の特徴から、おそらく上層は灰白色シルトであるVIa層を主体とする土層によって埋め戻されていたと思われる。しっかりした掘方を伴い建物跡を構成する柱穴とも考えられるが対応するものが見当たらなかった。

**P30** (図版126・127・132・133・134、写真図版127)

2B-2A9グリッドに位置する。VIa層上面での調査時に見落とししたものである。VII層検出時のVIa層・VIc層の平面掘り下げ作業中に確認した。そのため遺構の東側約1/2程度が消失した。本来の平面形状は隅丸方形、上端で長軸0.32m、短軸0.28m程度の規模であったと考えられる。主軸方位はN-81°-Wを指す。断面形状は台形状を呈し、深さはVIa層上面より0.48mを測る。底面標高は-0.68m。覆土は6層に分けられ、VIa層ブロックが混入するVc層基質の細砂とVIa層主体とする土層によって埋め戻されている。しっかりした掘方を伴い建物跡を構成する柱穴とも考えられるが対応するものが見当たらなかった。

**P31** (図版126・127・132・133・134、写真図版127)

2B-2A14グリッドに位置する。VIa層上面でプランを確認し掘削したが、覆土2層を地山と誤認し掘り足りず、掘方が不整形な形状であったため遺構と認定しなかったものである。VII層検出時のVIa層・VIc層の平面掘り下げ作業中に断面に掘り込みを確認し、遺構として調査し直した。その結果遺構の北側約1/2程度が消失した。本来は平面形状が隅丸長方形、上端で長軸0.35m、短軸0.33m程度の規模であったと考えられる。主軸方位はN-22°-Wを指す。断面形状は漏斗状を呈し、深さはVIa層上面より0.43mを測る。底面標高は-0.55m。覆土は2層に分かれ、VIa層主体の土層で埋め戻されていた。しっかりした掘方を伴い建物を構成する柱穴とも考えられるが対応するものが見当たらなかった。

**P32** (図版 126・128・132・133、写真図版 128)

2A-3I18 グリッドに位置する。VIa 層上面での調査時に見落とししたものである。VII層検出時のVIa 層・VIc 層平面掘り下げ作業中に調査区壁際に確認した。そのため遺構の西側約 2 分の 1 程度が消失した。本来の平面形状は楕円形、上端で直径約 0.20m 程度の規模であったと考えられる。断面形状は U 字状を呈し、深さは VIa 層上面から 0.31m を測る。底面標高は -0.44m。覆土は単層、Vc 層の細砂を基質とするが、VIa 層由来のシルトとよく混交する。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P33** (図版 126・128・132・133、写真図版 128)

2A-3I23 グリッドに位置する。VIa 層上面での調査時に見落とししたものである。VII層上面で確認した。平面形状は楕円形、断面形状は U 字状を呈する。主軸方位は N-32° -W を指す。規模は上端で長軸が 0.18m、短軸が 0.12m、深さ 0.09m を測る。底面標高は -0.39m。覆土は単層、Vc 層の細砂を基質とするが、VIa 層由来のシルトとよく混交する。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P34** (図版 126・128・132・133、写真図版 128)

2A-3I23 グリッドに位置する。VIa 層上面での調査時に見落とししたものである。VII層上面で確認した。平面形状は楕円形、断面形状は U 字状を呈する。主軸方位は N-46° -E を指す。規模は上端で長軸 0.26m、短軸 0.16m、深さ 0.14m を測る。底面標高は -0.32m。覆土は単層、Vc 層の細砂を基質とするが、VIa 層由来のシルトとよく混交する。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P35** (図版 126・128・132・133、写真図版 128)

2A-3I22 グリッドに位置する。VIa 層上面での調査時に見落とししたものである。VII層検出時のVIa 層・VIc 層の平面掘り下げ作業中に確認した。そのため遺構の北側約 2 分の 1 程度が消失した。SK41 と重複しこれを切る。平面形状は楕円形で、断面形状は U 字状を呈する。主軸方位は N-19° -E。規模は上端で長軸 0.24m、短軸 0.19m、深さ 0.33m を測る。底面標高は -0.48m。覆土は単層、Vc 層を基質とするシルト混細砂で、VIa 層ブロック・炭化物の混入がやや目立つ。柵 (SA51) を構成するピットの一つである。

**P36** (図版 126・127・132・133、写真図版 128)

2B-2B6 グリッドに位置する。VIa 層上面での調査時に見落とししたものである。VII層検出時の平面掘り下げ作業中に確認した。そのため大半が掘削に伴い消失してしまい、壁面一部と底面付近が残存するのみである。平面形状は隅丸長方形、断面形状は U 字状を呈する。主軸方位は N-80° -E を指す。底面標高は -0.38m。覆土は単層で Vc 層を基質とするシルト混細砂で、VIa 層由来のシルトとよく混交する。VIa 層ブロックの混入が目立つ。しっかりした掘り込みを伴うピットで、掘立柱建物を構成する柱穴とも考えられるが、対応するものが見当たらなかった。

**P38** (図版 126・127・132・133・134)

2B-2A12 グリッドに位置する。VIa 層上面での調査時に見落とししたものである。VIc 層平面掘り下げの過程で確認した。ほとんど削平され底面付近が痕跡的に残存するのみである。

**P42** (図版 126・127・132・133・134)

2B-2A18 グリッドに位置する。VIa 層上面での調査時に見落とししたものである。VII層上面検出時の平面掘り下げ作業中に確認した。平面形状は円形、断面形状は弧状を呈する。規模は上端で長軸 0.16m、短軸 0.14m、深さ 0.07m を測る。底面標高は -0.29m。覆土は単層で Vc 層を基質とするシルト混細砂を主体とし VIa 層ブロックの混入が目立つ。

**P44** (図版 126・127・132・133)

2A-2J25・2B-2A21 グリッドに位置する。VIa 層上面での調査時に見落とししたものである。VII層平面掘り下げ時に確認。平面形状はやや不整の円形、断面形状は U 字状を呈する。規模は上端で直径約 0.19m、深さ 0.18m を測る。底面標高は -0.52m。覆土は単層、Vc 層を基質とするシルト混細砂を主体とし、VIa 層ブロック

クの混入がやや目立つ。

**P46** (図版 126・127・132・133・134、写真図版 128)

2B-2A18 グリッドに位置する。VI層上面での調査時に見落とししたものである。VIII層上面で確認。平面形状は隅丸方形、断面形状は弧状を呈する。主軸方位はN-72°-Eを指す。規模は上端で長軸0.22m、短軸0.20m、深さ0.12mを測る。底面標高は-0.70m。覆土は単層、Vc層を基質とするシルト混細砂を主体とする。

**P49** (図版 126・127・132・133)

2A-3J4 グリッドに位置する。VI層上面での調査時に見落とししたものである。VIII層上面で確認。平面形状は楕円形、断面形状はU字状を呈する。主軸方位はN-23°-Wを指す。規模は上端で長軸0.18m、短軸0.14m、深さ0.22mを測る。底面標高は-0.48m。覆土は単層、Vc層を基質とするシルト混細砂を主体とする。

**P50** (図版 126・133)

2B-2A13 グリッドに位置する。VIa層上面で確認。平面形状はやや不整の円形、断面形状はU字状を呈する。規模は上端で直径約0.13m、深さ0.22mを測る。底面標高は-0.52m。覆土は単層、Vc層を基質とするシルト混細砂を主体とする。土層断面はSX3B-B'に記録されるが、Vc2層に相当する3層を切って掘り込まれる様子が確認される。

#### d 柵 (SA)

**SA51** (図版 126・127・128・131・132・133・134、写真図版 128)

上層調査で検出されたピットは丘陵北斜面の標高-0.5mから標高0.1mの間に帯状に分布する傾向がある。丘陵頂部側は削平されており不明なものの、この範囲に分布が偏在しているように見受けられる。平面形状は隅丸方形を志向するものが多いが、柵を構成する各ピットの断面形状も踏まえるとそれほど定型的な傾向は見られない。上端の長軸で0.30m程度までの小規模なものが主体であるが、P19やP20のように上端の長軸で0.50m程度のやや規模の大きなものも存在する。土層断面や遺構底面の観察から柱痕・アタリの確認されるものは見当たらなかった。柱掘方として十分な掘り込みを持つものにP19・P20・P29・P30・P31・P36などがあり、距離的に近い位置関係でまとまって検出しているが、その配列に建物跡を構成するような対応関係を見出すことはできなかった。

建物は想定できなかったが、今回検出したピットの中で標高-0.5mから0m付近で等高線に沿うように直線的な配列をなすピットをSA51とした。東工区P4・P6・P7・P10・P12・P15・P17・P25、西工区P32・P33・P34・P35がそれに該当する。長さは東工区で18.45m、西工区で8.25mを測る。調査のできなかった東工区と西工区の間もピット列の存在がほぼ予想されることから、全長36.45mになり、さらに調査区外に延びることが予想される。SA51の主軸方位はおおむねN-58°-Eを指し、長軸0.20m～0.30m程度の小規模なピットを主体に構成される。底面標高は-0.37mから-0.62mの間で確認され、若干の比高差はあるものの、逸脱するほどの差異ではないと思われる。また柱筋の通りもやや不良である。柱間の距離にもばらつきがあり一定ではなく、規則性はあまり窺われない。

#### e その他の遺構

**SX3** (図版 126・127・133・134、写真図版 128・129)

2B-2A3・7・9・11・12・13・14グリッドの範囲に確認された。VIa層由来の灰白色シルトによる土塊状の遺構である。傾斜面の立ち上がり際、標高-0.8mから-0.5mの間に等高線に沿うように帯状に長さ約7m程度、幅0.58～1.08mで展開する。この土盛りのVIa層上面との比高差は、3～16cm程度である。SX3は土層の断面観察から、盛土とVIa層の間にVc2層を基質とする間層を挟むことから、斜面でのVc2層堆積に並行して土盛りされた状況が看取された。またセクションCでは土盛り直下から須恵器無台杯が確認された。不整形な平面形状や土層断面の観察から何かしらの構造物として意図して構築されたものとは考えづらい。VIa層は丘陵斜面から低地にかけて堆積し、その上面は斜面地形を形成しているが、標高-1.0m付近に傾斜変換点があり、

これより低地側が非常に緩やかな傾斜となる。SX3付近ではこの傾斜変換点に沿って段差上の地形をなしている部分が見受けられるが、これは人為的に作出された可能性も考えられる。SX3の土盛りはその掘削に伴う発生土によって形成されたものとも推察される。遺物は1層から須恵器蓋(図版141-17)が出土している。

## B 下層の遺構(図版136～138)

### 1) 概 要

縄文時代から古墳時代までが対象となる。本来はⅦ層上層に遺物包含層を形成し、また、Ⅶ層中に掘り込み面を有すると思われる。しかし、Ⅶ層は黒色細砂であり、遺構の認識が難しい点、事前のトレンチ調査で遺構・遺物の分布がほぼ認められないことを考慮し、遺構確認はⅧ層上面まで掘り下げて行うことにした。その結果、土坑3基、ピット1基を検出した。SK39では縄文時代中～晩期、SK40では縄文時代晩期の深鉢の破片が覆土中より出土しているが、他の遺構では遺物の出土なく遺構の年代比定は難しい。

### 2) 遺 構 各 説

#### a 土 坑 (SK)

SK39(図版136・138、写真図版130)

2A-3I17グリッドに位置する。Ⅷ層上面で確認。平面形状は楕円形、断面形状は台形状を呈する。主軸方位はN-87°-Wを指す。規模は上端で長軸1.01m、短軸0.92m、深さ0.42mを測る。底面標高は-1.25m。覆土はⅦ層やⅧ層の細砂を基質とする土層によって構成され、2層に分かれる。上層から縄文時代中期～晩期の深鉢片(図版158-23～25)が出土した。

SK40(図版136・138、写真図版130)

2A-3H16・21グリッドに位置する。Ⅷ層上面で確認。平面形状はやや不整の楕円形、断面形状は台形状を呈する。主軸方位はN-14°-Wを指す。規模は上端で長軸1.68m、短軸1.40m、深さ0.88mを測る。底面標高は-1.84m。覆土はⅦ層やⅧ層の細砂を基質とし、2層に分かれる。縄文時代晩期前葉の深鉢片が出土した。掘り込みが帯水層に達し、基盤が砂層であることから壁面の崩落が著しく本来の形状を留めることができず、特に下端の形状は土層断面図から復元した。

SK41(図版136・138、写真図版130)

2A-3I21・22グリッドに位置する。Ⅷ層上面で確認。平面形状は不整楕円形、断面形状は半円状を呈する。主軸方位はN-15°-Eを指す。規模は上端で長軸1.20m、短軸0.88m、深さ0.40mを測る。底面標高は-0.78m。重複関係はP35に切られる。覆土はⅦ層やⅧ層の細砂を基質とする土層によって構成され、2層に分かれる。遺構の年代は古墳時代以前であるが、遺物の出土に恵まれず詳細な年代は不明である。

#### b ピ ッ ト (P)

P47(図版136・137、写真図版130)

2B-2A19グリッドに位置する。Ⅷ層上面で確認した。平面形はやや不整の円形、断面形状は漏斗状を呈する。規模は上端で長軸0.36m、短軸0.34m、深さ0.71mを測る。底面標高は-1.10m。覆土はⅦ層を基質とした細砂で、2層に分かれる。遺構の年代はⅥa層に被覆されるため、古墳時代以前の所産であると考えられる。

## 第4節 遺 物

岡崎遺跡第4次調査区の遺物には土器、土製品、石器・石製品、木製品、その他がある。年代は縄文時代中期～平安時代にわたる。Ⅳ層以上からは中世の珠洲焼、近世陶磁器などもごく少量認められたが、本遺跡での活動に伴うものかは定かでない。総量は終了報告の時点でコンテナ(内寸54.5×33.6×15.0cm)にして43箱である。そのうち土器が39箱を占める。

## A 土器 (図版 139 ~ 158、写真図版 131・132・134 ~ 154、別表 12・13)

### 1) 概要

第4次調査区の土器は大部分が砂丘北側の斜面に堆積した包含層からの出土である。量的には重量で比較すると9世紀後半を主体とする平安時代の土器が約8割、奈良・古墳・弥生・縄文時代の土器をまとめて約2割で、後者は多様な時期のものが少量ずつ出土している。道正遺跡と同様奈良・平安時代の遺物は一部VII層で取り上げたものもあるが砂丘頂部でVI層以上の堆積がない部分での出土であり、基本的にはVIc層以上から出土している。

以下では量的に多数を占める平安時代の土器群について第2項でまとめ、縄文時代～奈良時代の土器について第3項で述べる。いずれも第4次調査区内に位置する平成30年度試掘調査の出土品を含めて報告する。

### 2) 平安時代の土器

須恵器、須恵器技法で作られる在地土師器・黒色土器、それに伴う須恵器技法を用いない佐渡型の土師器からなる。砂丘北側の斜面に堆積した大別V層からの出土が大部分で、特に東区の2A-2J、2B-2Aにまたがる辺りに集中していた(図版139)。全体での出土重量/点数は土師器66,564g/6,550点、須恵器22,663g/1,297点、黒色土器993g/74点で、土師器・黒色土器と須恵器の比率は重量比で約3:1、点数比で約5:1となり、いずれでも圧倒的に土師器が多いが、食膳具に限れば重量比で土師器52%、黒色土器4%、須恵器44%で、土師器が須恵器の1.2倍程度となる。

図版129に出土地点を記録してある実測土器の出土状況を示した。調査区は現用の用水路を避けたために分かれているが、図145-92の広口瓶が東区と西区で接合していることから、基本的には一体で形成された資料群であって、須恵器、土師器、食膳具、煮炊具のいずれの区分においてもA-J列とB-A列の境に集中域があり、周囲に拡散している状況と考えられる。須恵器貯蔵具に関しては重量分布の集中域は西区にあるが、これは体部の大部分が残る横瓶(図146-101)や、甕の多くが西区出土であることによる。遺構でまとまった出土がみられたのは東区西端の土坑SK45のみである。

大半が包含層出土であるとはいえ、完形近くまで復元できたものが多くあり、完形に近いものが遺棄・廃棄され、本来の位置からそれほど動いていないと考える。器面の残りの良さ、接合率の高さ、墨書土器の様相等において当該期の当地域の土器の実態を究明するうえで有益な情報をもたらす資料群であると確信されるので、その内容を詳細に把握・提示することに努めた。

#### a 記述の方法と分類

分類を行った場合には、器形・手法による分類はアルファベット大文字、細分した場合はアルファベット小文字を用い、さらに細分した場合はアラビア数字を用いる。分量で分類した場合は大きい方からローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを用いた。

製作において回転を用いたナデ、ケズリ、ミガキにはいずれも「ロクロ」を冠し、「ロクロナデ」のように表記した。回転を用いたハケメについては「カキメ」とした。ロクロからの切り離しは回転状態で行われるのが基本のため「回転」は略して「糸切り」「ヘラ切り」とし、回転を用いていない場合に「静止糸切り」などとした。須恵器貯蔵具や土師器長甕・鍋の製作にあたり胴部の成形や丸底の底部を叩き出す場合に残された叩きの痕跡については、外面に用いられた叩き具の痕跡を「タタキメ」、それに対応して内面に用いられた当て具の痕跡を「当て具痕」とする。本文中で単に「タタキメ」とした場合は外面の痕跡である。多くに木目が観察されることから、叩き具・当て具ともに文様を刻んだ木製品とみられる。刻まれた文様は叩き具では平行線文(H類)か格子文(K類:正~長方形格子a・斜格子b)で、当て具では同心円文(D類)、平行線文(H類)、その他名称をつけがたい(なんと呼んでいいかわからない)特殊な文様がある。木目が観察できた場合は、刻み目への交わり方を区別して記述した。平行線文では木目直交をHa類、右上がり斜交をHb類、左上がり斜交をHc類、同心円文では同心円状木目をDa類、同心円の直径方向に木目がみえるもの(いわゆる柎目状木目)をDb類とする。

須恵器の胎土については、道正遺跡と同様、〔春日 2019a〕に定義されている B 群（佐渡小泊窯跡群に多い胎土）と考えられるものが大半であるが、同 A 群（阿賀北の諸窯）、同 C 群（新津丘陵窯跡群）、同 D 群（信濃川左岸産）とみられるものが少量存在する。記述にあたっては〔春日 2019a〕の分類に従う。

以下では須恵器・土師器・黒色土器の順に分類を行ったのち、遺構出土品は遺構毎、包含層出土品は図版の配列に従い器種ごとに記述する。個々の土器についての詳細な観察内容は別表 12 にまとめた。

## 須 恵 器

食膳具（杯蓋、有台杯、無台杯、盤、有台碗、無台碗）と貯蔵具（壺・瓶類、横瓶、甕）、その他（鉢）がある。

**杯蓋** 口縁端部は折り返すもののみであるが、全体の形状としては、天井部～口縁部にかけての屈曲の度合いに違いがみられ、屈曲の大きい B 類は端部の形状を除けば杯をひっくり返したのと同じ形であり、杯と同様に作ったものを少し加工して杯蓋を作ったと考えられる。屈曲のない A 類は従来北陸系の形とされてきた器高の低い杯蓋と比較すると、杯状の原型をできるだけ平たくなるように加工していることが窺われるが、口縁端部に向けてくびれ気味になる点が異なる。技術系譜の違いというよりは、加工の度合いを減らしより効率的に作るようになったのではないだろうか。そのほかに全体形は不明だが外面に複数の沈線を巡らすものを C 類としておく。法量にもやや幅があり、Ⅰ：17.0cm 前後、Ⅱ：14.6～16.0cm、Ⅲ：～14.0cm とする。つまみの形状も複数認められるので、以下少々煩雑だが本体形状、法量・調整・つまみ形状の細分類を組み合わせで呼称する。

### つまみ形状

- ① 横から見ると中央部が多少なりとも外縁より高く山形に盛り上がるもの（宝珠形）【22 と 23】
- ② 円柱状で横から見ると長方形を呈するが、中央部に外縁より低い盛り上がりを作るもの（擬宝珠形）、つまみ径 3cm 前後【17・24・25・26】。
- ③ ②より高さが低く、中央部の盛り上がりがごく痕跡的かみられないもの【28・30・31・32・33】、②より径が大きく、いずれも側面はなでられて下部がすぼまる傾向があるが、特に側面下部を抉り込む顕著な調整をするものがある【31・33】（扁平な擬宝珠形）。
- ④ 横から見ると略長方形で、中央の盛り上がりを全く作らないもの（環状）。円柱を素材としてくぼめたもの（a）【27・29】、素材が円柱でなかった可能性のあるもの（b）【18】がある。

### 調整技法

- 1 天井部にロクロケズリ調整を行ってからつまみを貼り付けるもの。調整範囲に天井部を広く削るもの（a）と体部との境の狭い範囲を面取りするように削るもの（b）がある。
- 2 天井部にヘラ切り痕を残したまま（ロクロケズリ調整をしないで）、つまみを貼り付けるもの

**有台杯** 器高が判明するものはいずれも器高が口径の半分ほどある身の深いタイプである。底部と体部の境に明瞭な稜を作るものを A 類、明瞭な稜を作らないものを B 類とした。A 類は 1 点しかなく、高めで接地面積の広い高台を貼り付けている。B 類の高台の端面は傾斜し外端接地となり、あまりシャープでない作りのものが多い。口径は大きい方からⅠ（14cm 前後）、Ⅱ（12cm 前後）、Ⅲ（10cm 前後）の 3 種ある。

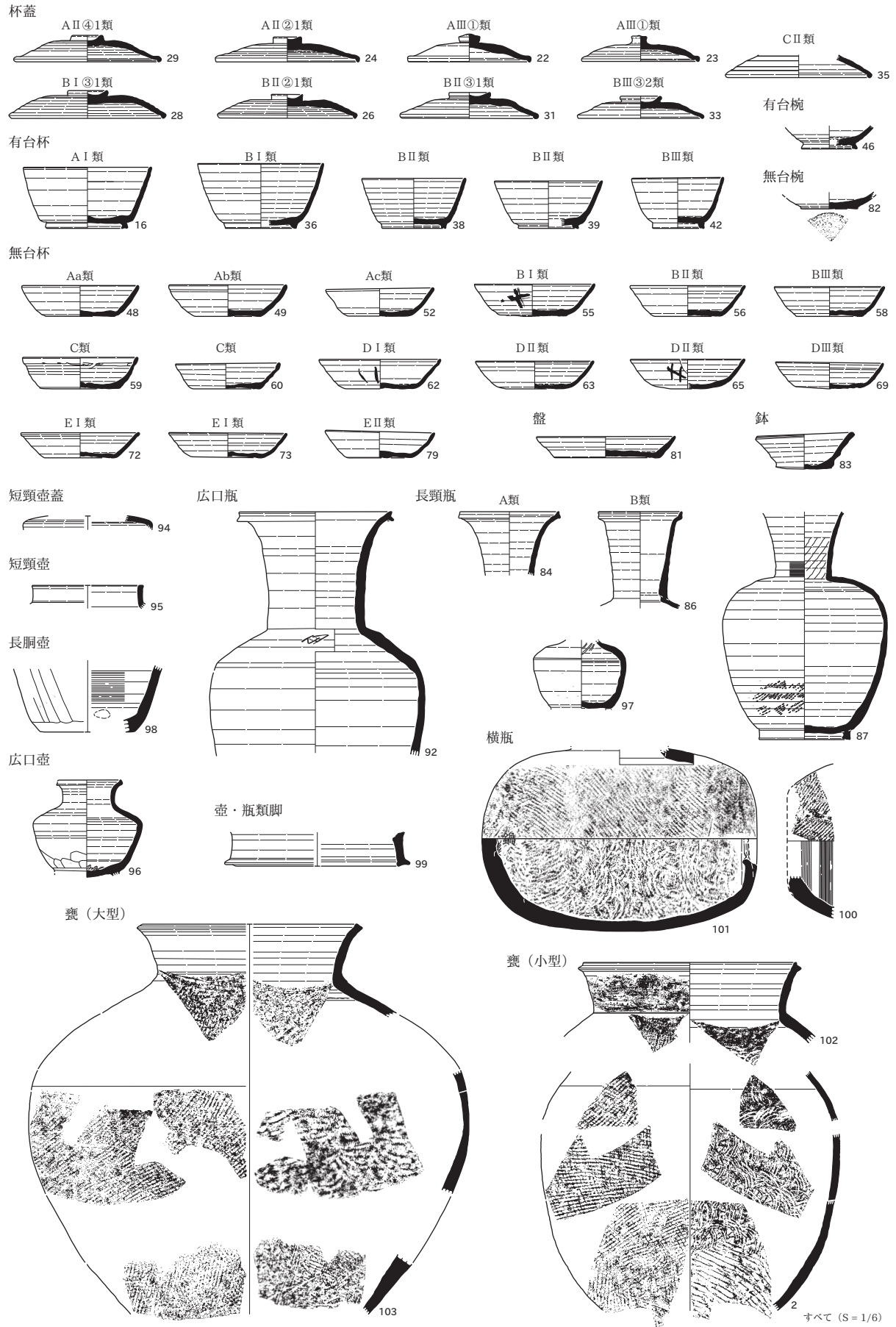
杯蓋との組み合わせを考えると、有台杯Ⅰにかぶせるには杯蓋Ⅱ以上でなければならず、杯蓋Ⅲは有台杯Ⅱ以下に組み合わせることになるが、杯蓋Ⅰと有台杯Ⅰ、杯蓋Ⅲと有台杯Ⅲの組み合わせでは蓋が大きすぎると思われるので、（かなり大きい蓋をかぶせてすませていたと考えるのであれば）杯蓋Ⅰに組み合わせる有台杯と有台杯Ⅲに組み合わせる杯蓋は、今回出土しておらず、有台杯より杯蓋のほうが相対的に古いものを含んでいると考えられる。

**有台碗** 口縁を欠く 1 点のみである。比較的シャープで踏ん張る小ぶりの高台がつけられる。

**無台杯** 口径は 11～13cm で、底部切り離し技法はヘラ切りである。少なくとも 80 個体は存在している。薄手で体部の開きが大きく低平なものとその対極にあるもの、中間的なもの及びそれらとは異なる独自性をもつものがあるようで、以下のように分類しておくことにしたい。

A 類 径高指数 26 前後の全体に厚手の作りのもので、体部形状で 3 類に細分する 小泊産でないと考えられ





第 83 図 岡崎遺跡出土須恵器分類図

るものはここに含まれる

a 体部が直線的に外傾するもの b 体部が内湾ぎみのもの c 体部が外反ぎみのもの

B類 径高指数 26 前後の全体に A 類よりやや薄手の作りのもの

C類 底径指数 66～68 と底径が大きめで、口縁端部を内側に強く屈曲させているもの

D類 器高 3.0cm 前後、径高指数 24 前後で薄手のもの

E類 器高 2.8cm 前後、ごく薄手で体部の開きが大きいもの、径高指数は 20～23 焼成の甘いものも多い  
より細かくみると、A 類は比較的単純で器面にあまり凸凹がないが、B～E 類では体部内面中位に一周するくぼみを有するもの (73・74・79)、全体に器面の凹凸が大きいもの (1・80)、口縁下くぼみが外面にあるもの (54)、口縁下くぼみではなく沈線状になるものなど多様である。

**無台碗** 口縁～体部のほとんどを欠くが、糸切りで底径の小さい碗形になると考えられるものが 1 点ある。

**盤** 無台杯より径が大きく浅いもので 1 点のみ。内面見込みに小さな平坦面をもつ工具の圧痕が多数残り、調整されているにも関わらず器面の凹凸が大きく粗雑な印象を受けるものである。

**鉢** 平底から直線的に開く小型のものである。口縁端部の作りが分厚く杯や碗とは異質であるため鉢とした。底部は中央部の厚みが薄く、外面は細かくケズリで整えられている。

**短頸壺・短頸壺蓋** それぞれ図示した 1 点しかなく、小片のため詳細は不明である。

**長頸瓶** 口径が頸部高の 2 分の 1 程度のもを長頸瓶とした。大小がある。完形品はないが、口頸部の形状を見ると 84・85 のように頸部が外反しながら開き、端部は断面三角形で上方または外方につまみ出すもの (A)、86 のように頸部があまり広がらず直線的に開き、口縁で屈曲して端部を縁帯状につまみ出すもの (B) の 2 つのタイプがある。A は一般的な長頸瓶の頸部で出土品の多くはこちらのタイプである。B はやや特殊な形で須恵器らしくない。1 点のみ確認された。体部の形状がわかるのは 87 のみで、比較的肩の張るものである。体部資料では外面の下半にロクロナデやケズリの下に格子文のタタキメが観察される。97 は体部上面を絞って狭めた痕跡があり、頸部下端の孔径から小型の長頸瓶と考えられる。高台は剥落している。

**広口瓶** 91・92 のように口径 13cm 以上あり、口径が頸部高の 3 分の 2 程度で太い頸部から緩やかに開くものを広口瓶とした。

**広口壺** 96 は 97 より頸部下端の径が大きく、頸部高も低い。高台がつく。

**長胴壺** 98 は体部下半しかないが、外面に縦方向のヘラケズリを施す長胴短頸の壺と考える。

**大型の壺瓶類の脚部** 99 しかない。突帯付き四耳壺などの脚部とみられる。

**横瓶** 叩き技法で両面閉塞するものと両面閉塞かどうかは不明だがロクロナデで閉塞部を作り出すものがある。

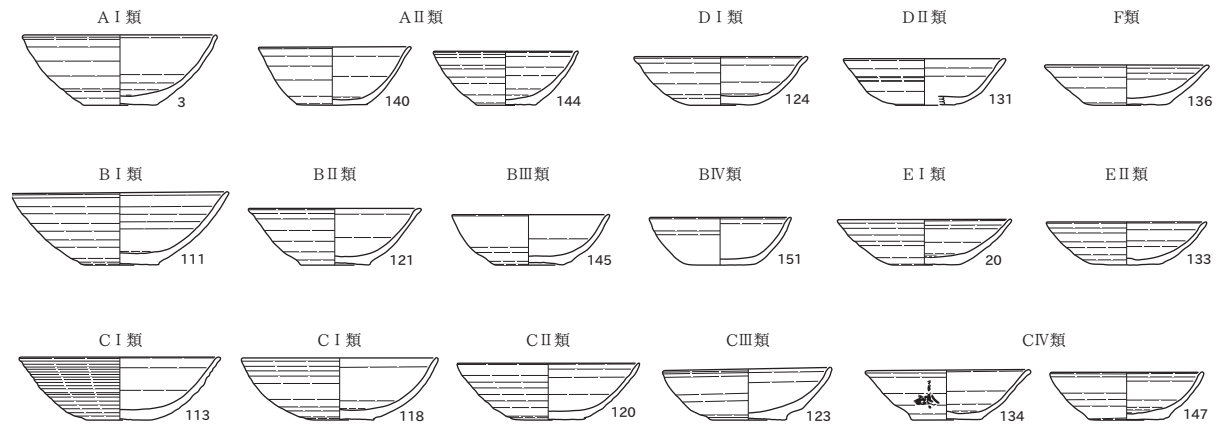
**甕** 完全な形のわかるものは出土していない。外端部で口径 24～26cm の口頸部が 2 点ある。いずれも文様や突帯などはなくあまり大きく開かないものである。特に形態の細分は行わない。体部片から中型と小型の 2 種類あると推定する。

#### 土師器

須恵器技法を用いて作られるものと用いないものがある。大半は前者で在地製品とみられ、食膳具 (無台碗) と煮炊具 (長甕、小甕、鍋)、その他 (鉢) がある。後者は煮炊具のみで佐渡型甕と呼ばれているものである。食膳具には底径の大きい杯形は認められず、相対的に底径の小さい碗形で無台のもののみである。

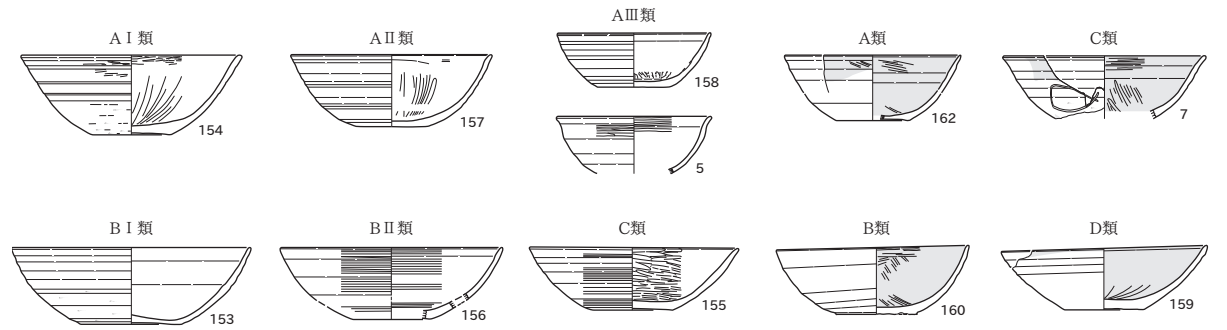
**無台碗** 底部外面は糸切り後無調整、内面と外面体部以上にロクロナデ以外の調整が行われないもの (a 手法) が大半であるが、ロクロナデ、(ロクロ) ミガキ調整 (両方もしくはケズリのみ) が加えられるもの (b 手法) が少数存在する。形状としては体部～口縁部が内湾するものがほとんどであり、直線的に外傾するものが少数みられる。口縁端部で外反するもの、玉縁状になるものなど細部の違いもあるが、今回形状は特に細分せず、径高指数をもとにした傾向の把握にとどめる。

無台碗a



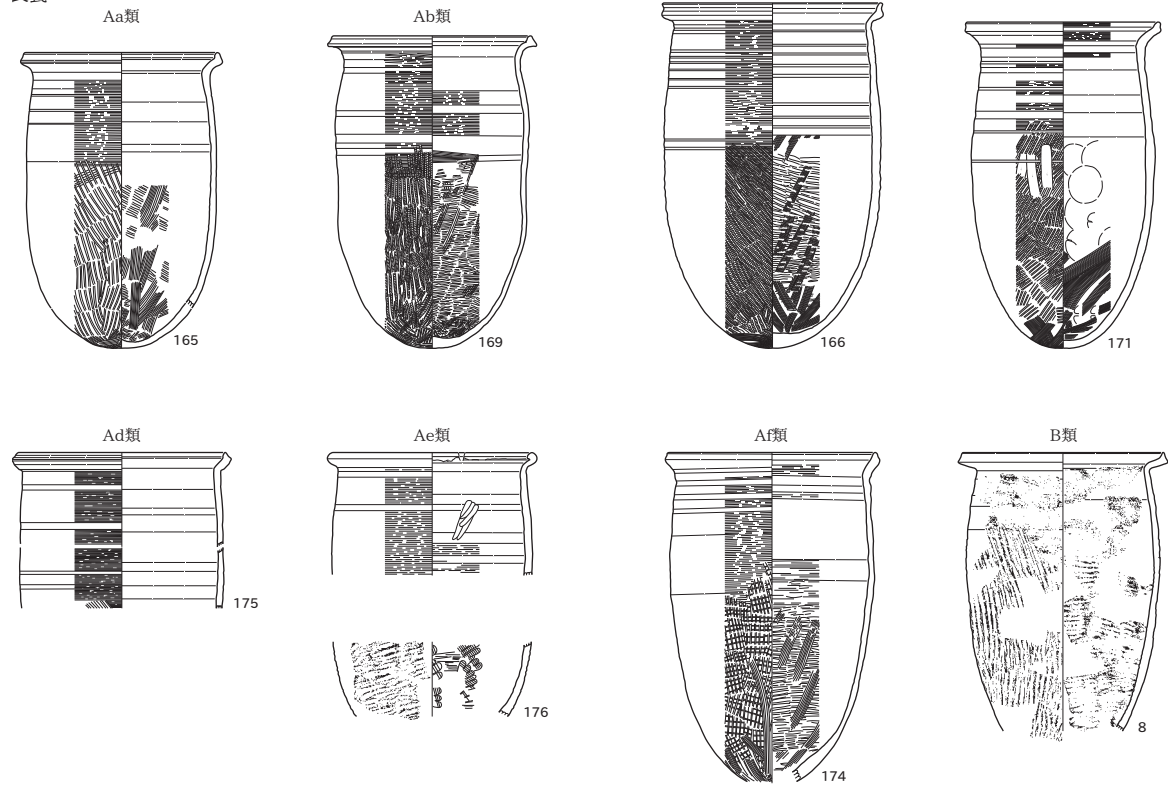
無台碗b

黒色土器  
無台碗



長甕

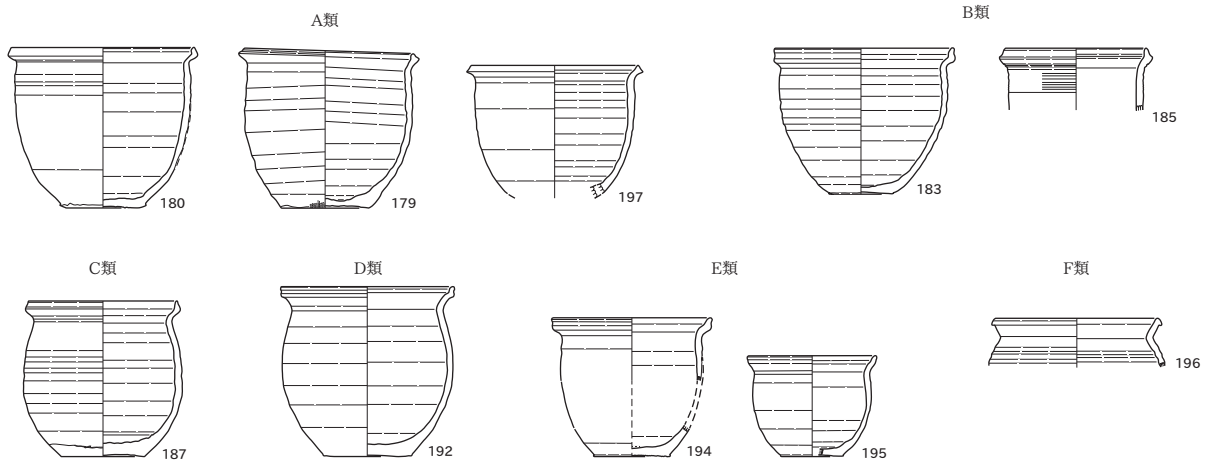
Ac類



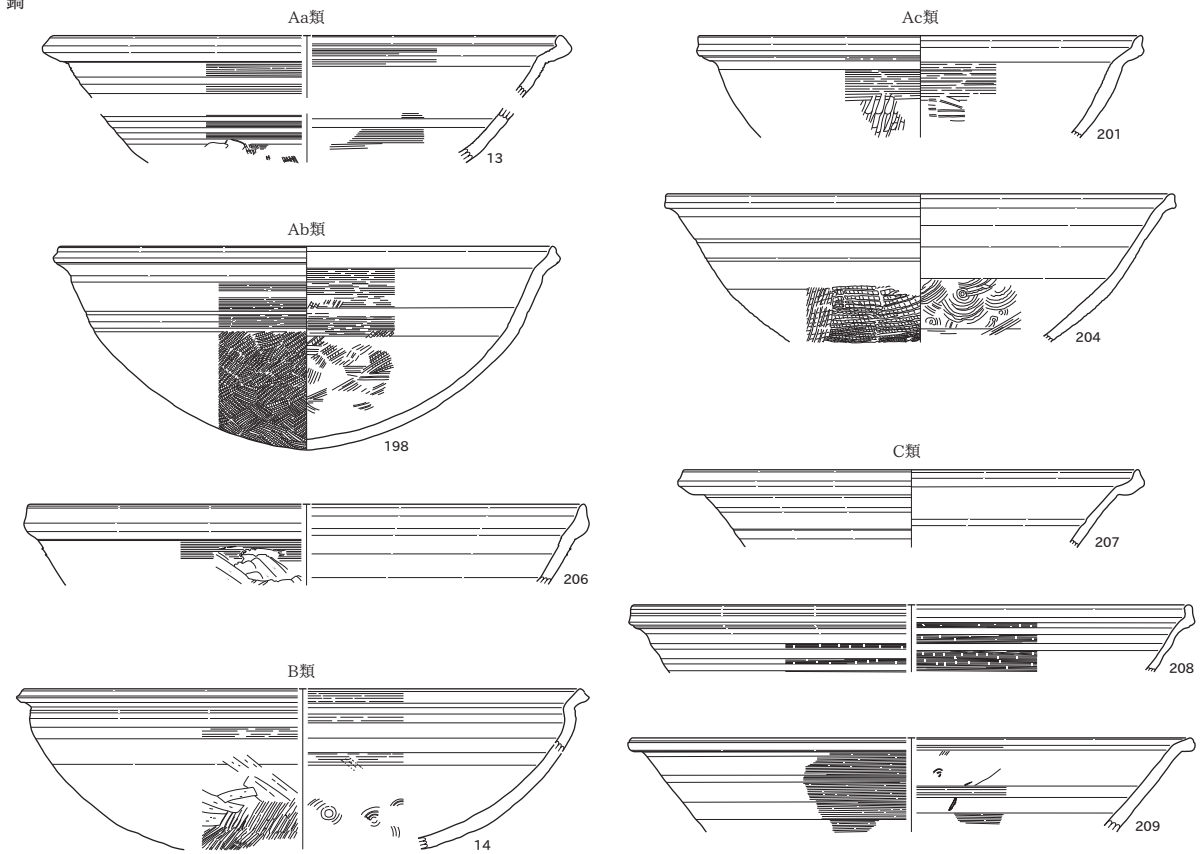
長甕 (S=1/8) その他 (S=1/6)

第84図 岡崎遺跡出土土師器・黒色土器分類図

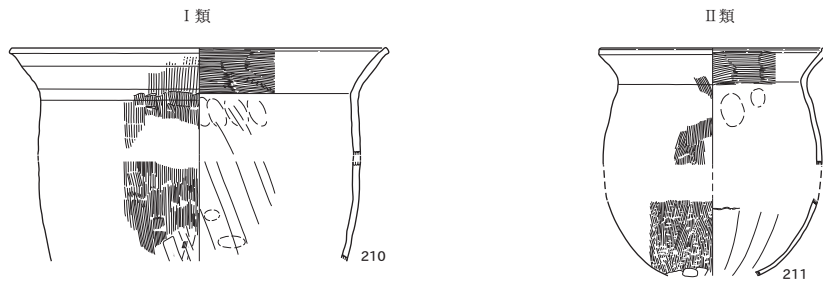
小甕



鍋



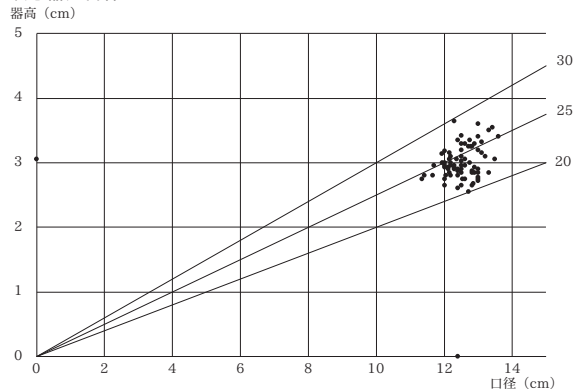
佐波型甕



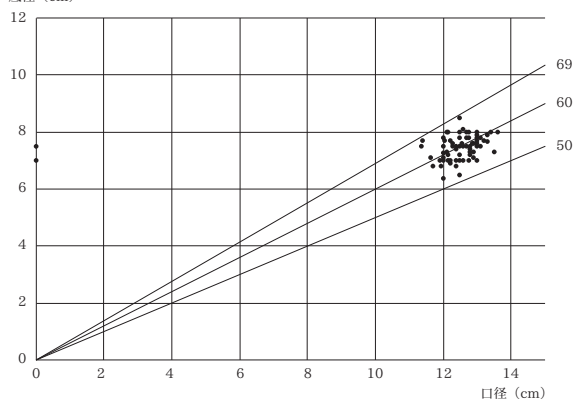
すべて (S=1/6)

第85図 岡崎遺跡出土土師器分類図

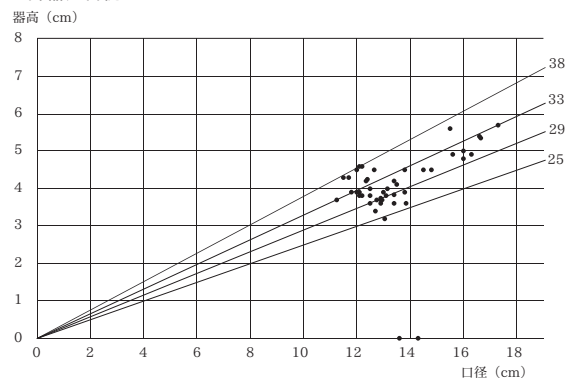
須恵器無台杯



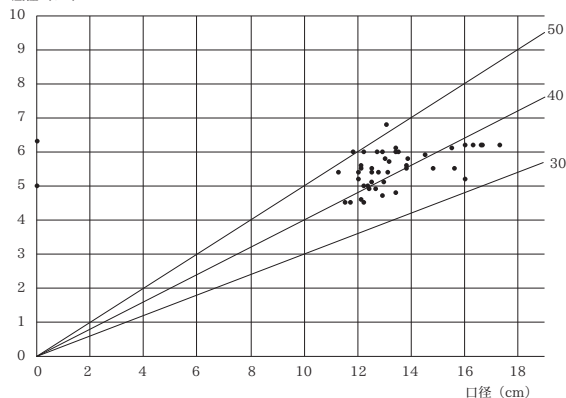
底径 (cm)



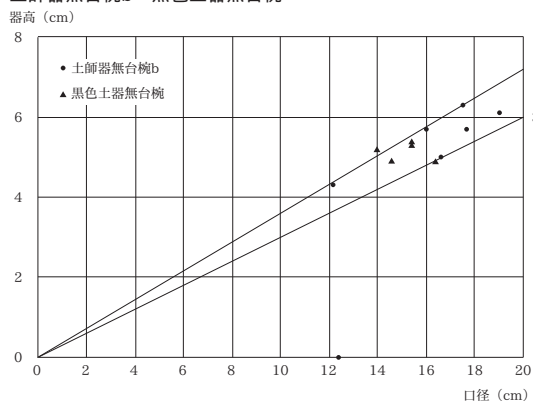
土師器無台碗a



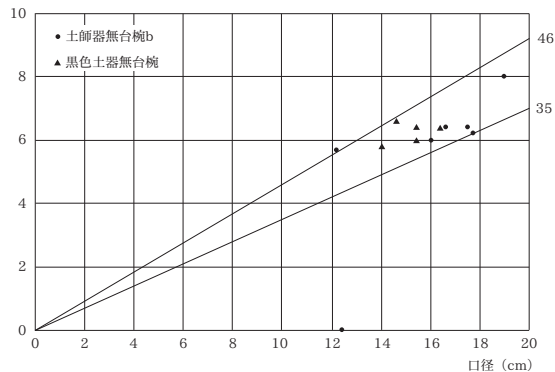
底径 (cm)



土師器無台碗b・黒色土器無台碗



底径 (cm)



直線右の数値は径高指数 (器高 ÷ 口径 × 100) または底径指数 (底径 ÷ 口径 × 100)

第 86 図 須恵器無台杯ほか法量分布図

a 手法のもの (以下、無台碗 a とする) では図示していないものも含め、口径 11.2 ~ 17.0cm の幅がある。径高指数の分布をみると 25 ~ 38 まであり、30 を超えると口径に 15cm を超えるものが存在する。30 ~ 33 前後のものは口径が小さいものから大きいものまでばらつきが大きい。特に径高指数 33 を示すものが最もばらついている。以下、径高指数 29・27 では口径 13cm 前後にまとまる傾向がみられ、最も浅い径高指数 25 のものもその幅に収まる。

径高指数で大別し、口径の違いで細分してみると、径高指数 35 ~ 38 のもの (A 類) では口径 15cm 以上 (I) と 12cm 前後 (II) の 2 種、33 (B 類) では口径 16cm 以上 (I)、13.5cm 前後 (II)、12cm 前後 (III) の 3 種、30 ~ 31 (C 類) では 15.5cm 前後 (I)、14.5cm 前後 (II)、13.5cm 前後 (III)、12.5cm 前後 (IV) の 4 種、29 (D 類)・27 (E 類) では 13.5cm 前後 (I)、12.5cm 前後 (II) の 2 種、25 (F 類) では 13.0cm 前後の 1 種という

構成になっているように見える。C I類としたうちの113～116は、薄手で灰白色を呈し、体部外面に凹凸が細かく残される点で他の個体とは異なる一群である。

b手法のもの（以下、無台碗bとする）は7点確認できた。径高指数30～36であり、無台碗aとは異なり29以下のものは存在しない。径高指数36（A類）では口径17.5cm前後（I）、16cm前後（II）、12.0cm前後（III）の3種、32～33（B類）では口径19.0cm前後（I）、17.5cm前後（II）の2種、30では口径16.5cm前後の1種がある。形態からみると体部下半の丸みは強くないものが主体であるが、5は体部下半の丸みが強く口縁を明確に外反させる点で他の個体とは異なる。底部を欠くが残存高でも径高指数38前後になるとみられるより深いタイプである。B類・C類の155・156は内外を全体的に丁寧に磨いているが、A類とした154・157・158は器表面の凹凸の低いところは磨き残されており、焼成も甘めでやや雑な印象を受ける。

**長甕** 器面の残りがよく残存率も高いものが多かったため、全体像が明らかにできる程度に復元できたものが複数存在している。形状と製作技法をみると、ロクロ上で粘土紐を巻き上げ、回転を用いた調整で仕上げた平底の原形をロクロより切り離れたのち、文様を刻んだ叩き板と当て具を用いて丸底に叩き出すという技法をすべてとっていると考えられる。ロクロ上での調整においてはカキメが多用され、丸底叩き出し後に内面にタテ～ナメのハケメを施すものが主体的である。また、多くのものは叩きのない上半部分の比率が全体高に対して1/3～1/2程度あるが、カキメを一切使用せず叩きのない部分の比率が非常に低いものがわずかに存在する。内面も当て具痕の上からの調整はみられない。また薄手で軽く焼きあがる雰囲気も他とは異質であることから、前者をA類、後者をB類に大別し、A類については口縁端部の作りから、内屈させる（a）、内屈させるとともに水平方向にもひきだす（b）、上方につまみ上げ側面をくぼませる（c）、口縁部を全体に肥厚させ端部を上方につまみ上げる（d）、内屈させ端部のみ肥厚させる（e）、上方または内屈ぎみでごく弱くつまみだす（f）に細分した。B類は1点しかなく、口縁部はA類よりも大きく外傾して開いて受け口に近くなり、端部は小さく上方につまみだしている。

**小甕** ロクロ使用で底部は糸切り痕をよく残す。口縁部は長甕のようにすべて外傾して開き、端部の形状は長甕に共通するものが多い。端部の形状と全体に占める口縁部の比率、頸部のくびれ具合、体部外面の凹凸の度合いから、A類：端部を内屈させるもの、B類：端部を上方につまみだすもの、C類：端部を小さく上方につまみ頸部くびれるもの、D類：端部を上方につまみだすが先細らず、頸部くびれるもの、E類：端部のつまみだしが外傾するもの、F類：端部をつまみださないか弱いものに分類した。A～C・E・F類は器面の凹凸が大きく、F類以外は口縁部の比率が小さい傾向にある。D類は口縁部の比率が大きくて頸部くびれ、器面の凹凸が小さくなめらかであり、体部下半にケズリ調整が施されるなど、他とは異質である。A類の179には底部近くに布目がみられたが、調整ではないようなので、基本的に器面の凹凸が大きいものはロクロ上での調整以外は行わず、切り離して終わりであり、あるいは粘土紐巻き上げでなく、水挽に近い作り方だったのかもしれない。一方、D類は器面を平滑にし、ケズリも加えて整えるなど手間をかけているといえる。標準的なサイズのものほとんど下半部が被熱によりポロポロになっているが、ごく小さいものは火にかけておらず、煮炊具ではないかもしれない。

**鍋** 大部分は長甕と同様ロクロ上で成形した平底の原型を丸底に叩き出すものとみられ、半球形の体部から屈曲して内湾ぎみの口縁部が短くのびるA類、口縁部と体部の境の屈曲部以下が張りを持ち、底部にかけて丸みの強い形を呈するB類、底部完存するものがないためすべて丸底かどうかは不明であるが、体部（上半）が直線的で立ち上がり急なC類に大別する。A類の口縁端部の作りは長甕A類に近いものが多く、内屈させるもの（a）、上方につまみ出すもの（b）、つまみだしが外傾するもの（c）があるが個体差が大きい。B類は1点しかない。C類の口縁端部の作りはA類の流れにあると思われるが、独特なものもある。

**佐渡型甕** 製作に須恵器技法を用いず、外反する口縁部にあまり長くない丸底で薄手の体部をもつと考えられるものである。口径23～30cm程度のI、12～20cm程度のIIがある。口縁部外面は最終的にはナデとみられるが、指頭押圧による凹凸が目立つものもある。口縁部内面はヨコハケである。体部外面にはシャープな条線

のタテハケが密に施され、下部にはケズリが加えられることもあるようである。内面は上部に口縁部からつながるハケメ調整が及ぶ部分もあるが、ケズリともナデともつかない調整で平滑に整えられている。薄手の器壁は強く押圧されている印象を受ける。

## 黒色土器

黒色土器の器種としては無台碗のみが確認できた。

**無台碗** 径高指数をみると30～37の間にあり、土師器無台碗bと同様29以下は存在しない。37前後(A類)では口径14cm前後、35前後では口径15cm前後、32～33では口径16cm前後、30では口径16cm前後で、無台碗bほどの口径の幅はなく14～16cmにまとまり、深いものほど口径が小さい傾向がある。

### b 遺物各説

#### (1) 遺構出土土器

**SK45** (図版140・141、写真図版134・151)

1は須恵器無台杯Aa類。口径は小さいが全体に厚みがあり、体部の器面の凹凸が大きい。底部外面の外周部は摩滅している。2は小振りの須恵器甕で、接合しない体部片から復元的に実測した。タタキメは右上がりに見える刻線が深く、それに直交する刻みが浅い正格子文で、浅い刻線に平行または重複して木目がみられる。底部では向きが変わっているが原体が違うかどうかは不明。当て具痕は上部が同心円文で中心部に放射状の線が入る車輪文風のもの、下部は平行線文Ha類で当て具の側端部の当たりが観察できる。外面には叩きの後弱いナデが帯状に施されるようである。小泊窯産と推定する。3・4は土師器無台碗で、3はAⅠ類、4は口径14cmほどで比較的浅いタイプと思われる。体部外面には墨書があるが判読不明である。5は土師器無台碗bのAⅢ類で丸みのある体部から口縁を小さく外反させる。内面は口縁の外反部分を横方向に、より下部は痕跡が明瞭でないがおそらく放射状に磨いていると思われる。外面は外反する部分を内面と同様に横方向に磨いている。6と7は黒色土器で、7は底部を欠くがともに無台碗であろう。6はB類で内面は口縁～体部中位を横方向に、下半は放射状に磨いている。外面は体部中位以下ロクロケズリ、底部もロクロケズリとみられる。黒色処理は内面だけでなく外面の口縁部にも及んでいる。7は残存部の形状からB類とD類の間ほどの径高指数と推定しC類とした。黒色処理は外面の上半部にも及んでいる。体部外面には刻みが深く明瞭な焼成前のヘラ描きがみられる。ヘラ描きは右下から書き始め、左回りで不整形形状の形を描いて戻り、クロスして右上に抜けている。8は土師器長甕B類。カキメが用いられず、高い位置から叩きが行われており、タタキメは平行線文Ha類、当て具痕も平行線文(木目不明)で、内面にハケメなどの調整はみられない。9は土師器小甕F類。10～13は土師器鍋で、10～12がAb類、13がAa類である。10はほぼ完形に復元できたものだが、当遺構から出土したのはごく一部で、大部分は包含層出土である。11・12も包含層との接合がある。12のタタキメは器面上での凹部の幅が大変広く密な木目が直交する特徴のある平行線文である。平行線が水平方向になるように叩いているのも珍しい。

**SA51** (図版141、写真図版134・135・151)

14はP18出土の土師器鍋B類で、口縁部と体部の境の屈曲部以下が張りをもち、底部にかけて丸みの強い形を呈する。タタキメは平行線文木目不明、当て具痕は同心円文である。15はP4出土の須恵器無台杯DⅡ類で、底部外面に「佛」の墨書がみられる。

**P22** (図版141、写真図版135・151)

16は須恵器有台杯AⅠ類で、底部外面高台内に墨書がみられるが判読不明である。

**SX3** (図版141、写真図版135・151)

17は須恵器杯蓋AⅡ1②類で、天井部外面に「与」の墨書と墨痕、内面は残存する全面に墨痕がみられ硯に転用されている。

**試掘50T SX2** (図版141、写真図版134・135)

18は須恵器杯蓋BⅢ1b④b類で、内面は広い範囲に墨痕があり、外面つまみ内にも認められる。19は須

恵器無台杯 E I 類。20 は土師器無台碗 E I 類。21 は土師器佐渡型甕 II 類である。

(2) 包含層出土土器 (図版 142～155、写真図版 135～151)

22～35 は須恵器杯蓋である。22・23 は A III ①類で、同類はこの 2 点のみである。22 は外面全体に顕著な降灰がみられ、天井部の調整は不明であるが、凹凸少なくならなかである。つまみの頂部は摩滅している。降灰の状況からは正位で一番上に置いて焼成されている。23 のつまみはだいぶ円柱に近くなってしまっている宝珠形で、本体の天井部には回転ヘラ切り痕に由来する凹凸を認め、つまみを中心として径 6cm 程度にロクロナデが施されるが、その周囲には切り離し後そのままの部分も見られる。前段階にケズリによる調整はしていないようであり、全体として雑な印象を受ける。内面は全体、外面にも現状で半分程度に墨痕が見られ、硯に転用されたとみられる。胎土から 22 は信濃川左岸産、23 は阿賀北産と推定される。24 は A II 1 ②類で、内面広範囲に墨痕がみられる。24 は全体的な作りと質感が SX3 出土の 17 とよく似ている。25 は B II 2 ②類、非常に低平に見えるが、天井部がつぶれぎみのためであろう。②のつまみのうち 25 は他に比べて高さが低く、本体天井部調整はこれだけが 2 であることから、このタイプつまみとしては後出の可能性はある。26 は B II 1 ②類で内面に墨痕がある。27 は B III 2? ④類で内面に墨痕がある。28 は B I ③類で、今回出土品のなかでは最も口径が大きいものである。29 は A I ④ a 類で、28 に次いで口径が大きい。④のつまみをもつタイプでは 29 が口径 16cm、18 が 13.6cm で全体の形状にも違いが大きい、ともに調整が 1b で共通する。29 の口縁端部の折り返しはごく低平であり、18・27 も折り返すというよりはつまみ出しているような端部である。30 は B II ③類で、外面端部の欠損部際に墨で書かれた平行する 2 本線、内面広範囲に墨痕がみられる。31 は B II ③類で内面広範囲に墨痕がみられる。32 は B II ③類、33 は B III ③類である。34 はつまみを欠く。天井部径 8.0cm ほどでロクロケズリが広く施される。外面には重ねた杯身の端部が貼り付き、そこを境に降灰状況が異なる。また内面には平坦部に近い径で色調の変異があり、逆位で上下に杯身が正位で重ねられたと考えられる。35 は唯一の C 類で、全体形が明らかでないが、薄手でなだらかな体部外面に間隔をあけて細沈線が 3 条刻まれるものである。仏器的な性格のものであろうか。

36～45 は須恵器有台杯である。36 は B I 類、37 は底部を欠くが I 類、38～39 は B II 類、40 は底部を欠くが II 類、41 は口縁部を欠くが B II 類と推定される。42 は唯一の B III 類で底部外面高台内中央に墨痕がみられる。43～45 は底部のみの資料で口径は不明だが、いずれも B 類である。46 は須恵器有台碗になると思われる。47～80 は須恵器無台杯である。47～48 が Aa 類、49～51 が Ab 類、52 が Ac 類、53～55 が B I 類、56～57 が B II 類、58 が B III 類、59～60 が C 類、61～62 が D I 類、63～68 が D II 類、69 が D III 類、70～76 が E I 類、77～80 が E II 類である。53・57・64 の底部外面には墨書があるが判読不明である。54・71・78 は底部外面に特徴のある字体で「羽昨」の二文字が墨書されている。底部外面に墨書がみられるものではほかに 56「真」、58「十」、63「林」、72「見」、75「林カ」がある。61 は内面見込みに墨書があるが判読不明。体部外面に墨書がみられるものでは、55「十」、67 則天文字の「日」がある。76 は欠損のため判読不明である。62 は外面の体部～底部にかけて数文字の墨書があるが、全く判読不明である。70 も外面体部と底部に「十」と「一」の一文字ずつの墨書がみられる。

81 は須恵器盤である。内面見込みに小さく平坦な面をもつ工具を押し付けたような痕跡が多数残されており、全体に粗雑な印象を受ける。82 は口縁部を欠くが底部糸切痕を残す須恵器無台碗と考える。83 は鉢としたもので、底部外面は全面手持ちヘラケズリで平坦に整えている。厚みがあり面をもつ口縁端部形状は食膳具としては違和感がある。何かの脚台部の作りかけを転用したものであろうか。形状が類似するものとしては、大きく(口径 17.0cm、底径 9.4cm、器高 10.3cm) 底部も厚いものが佐渡市下国府遺跡平成 17 年度調査 D 区 SW002 で出土している〔榎木ほか 2011 図版 20-236〕が、同様の機能のものかどうかは不明である。

84～93 は須恵器長頸瓶または広口瓶である。92 の体部上面には焼成前のヘラ描きがみられる。94 は須恵器短頸壺の蓋、95 は同身である。薬壺形とみられる。いずれも小片であるが、この器種が他にないため図化した。



96は須恵器広口壺で、高台は貼り付けられた痕跡のみが残る。外面底部付近には手持ちのヘラケズリが施され、底部内面には小さなくぼみが密集する調整が認められる。個々のくぼみの形状をみると先端がすぼまる形をした平坦な圧痕で、コテのような工具を押し当てたと推定する。97は口頸部を欠くが、体部上面が絞られて開口部が小さいことから小型の須恵器長頸瓶と考える。高台はほぼ欠損して高さや端部の形状は不明である。98は長胴の須恵器短頸壺の体部と考える。体部下半～底部にかけての破片で外面は縦方向のヘラケズリ、内面は底部との境の上までカキメが施されている。99は大型の須恵器壺・瓶類の脚部と考える。端部が左右につまみだされる形態の類例としては上越市今池遺跡 SK21A 出土の突帯付四耳壺〔坂井ほか1984 図版33-115〕がある。

100・101は須恵器横瓶である。100は体部の片側のみの残存で、外面はタタキののち側面にカキメが施される。タタキメは平行線文 Hb 類。対応する当て具痕はなく、内面はロクロナデとカキメである。101は体部の大部分が残る。両面閉塞である。外面はタタキののち帯状のナデが施され、閉塞部もなでられる。タタキメは平行線文 Ha 類、当て具痕は同心円文で木目不明である。内面は両閉塞部端まで当て具痕が残っており、終始叩き技法によって製作されている。

102～110は須恵器甕である。102は口頸部で、口縁端部は上方と外方に強くつまみ出される。頸部外面は下半分程に雑なカキメが施され、偶発的についたとみられる叩き具端部の圧痕が残っている。カキメは雑な印象だが体部～頸部の屈曲部は非常にシャープに作ってある。体部タタキメは平行線文 Ha 類、当て具痕は同心円文 Db 類（木目は間隔がごく狭い）である。頸部下半のカキメは小泊窯産によくみられることから小泊窯産と推定するが、他例に比べると幅広でシャープさに欠ける点は小泊窯の中でも後出であることを示すのかもしれない。叩き具端部の圧痕をみると平行線文の刻み目の断面は鋸歯状で、刻みの深さは不揃いである。103は口頸部と体～底部片があるが接合しない。口縁端部は断面三角形に近く、上方にごく弱くつまみ出す。外面の肩部には降灰がみられ、降灰のない部分は全体に光沢のある黒色を呈しており、タタキメなどははっきり見えない部分も多い。タタキメは平行線文 Ha 類、当て具痕は上半が同心円文（木目不明）で、底部は平行線文 Ha 類である。内面底部には叩きの後縦方向のハケメ、外面には叩きの後最低5条からなる粗いカキメが帯状に施される。胎土から阿賀北産と推定する。104は体部中位の厚手の破片で、タタキメは上部が平行線文 Ha 類、下部が平行線文 Hb 類、当て具痕は上部が同心円文 Db 類、下部が平行線文（木目不明）であり、内外ともに2種の工具が用いられていることがわかる。105は薄手の体部片2点のみである。タタキメは細かい長方形格子文で木目は短辺に平行する。当て具痕は同心円文 Db 類と平行線文 Ha 類の2種類がみられる。外面には叩きの後カキメが帯状に施される。小泊窯産であろう。106もごく薄手の体部小片で、タタキメは長方形格子文、当て具痕は同心円文（木目不明）、外面には叩きの後カキメが帯状に施される。小泊窯産であろう。107も小片だが厚みのある体部である。タタキメは平行線文 Hc 類、当て具痕は同心円文（木目不明・直径方向か）。新津丘陵産と推定する。108は1cm前後の厚みのある体部片2片である。タタキメは長方形格子文木目短辺平行、当て具痕は上部同心円文 Db 類、下部平行線文 Ha 類で、外面は叩きの後帯状にカキメではなくナデが施されている。小泊窯産と推定する。109も体部片である。タタキメは斜格子文、当て具痕は上部が同心円文 Db 類、下部が平行線文（木目不明）である。外面叩きの後帯状のナデが施される。新津丘陵産と推定する。110は比較的大きな体部片が残存する。タタキメは平行線文 Ha 類、当て具痕は2種類あるがどちらも同心円文で、上部は Da 類、下部が Db 類の可能性はある。新津丘陵産と推定する。

111～158は土師器無台椀である。111～152が無台椀 a で、111・112は最も口径の大きい部類の B I 類、112の体部外面には逆位で「大」の墨書がみられる。113・114は C I 類で、白色を呈し体部の器面に細かい凹凸を残す特徴があり、115・116も同様の特徵から C I 類と推定する。115は体部外面に墨書がみられるが判読不明である。117・118は C I 類であるが、113～116より口径がやや小さく、胎土・技法は113～116とは異なる当遺跡で一般的なものである。119・120は C II 類、121は B II 類、122・123は C III 類、124は D I 類、125は片口が作りだされたもので、灯明皿として使われている。比較的浅い E・F 類になるか

と思われる。126はEⅠ類、127・128・130・131・132・135がDⅡ類、129・134・146・147はCⅣ類で、134の体部外面には逆位で「中」の墨書がみられる。133はEⅡ類、136がF類である。137～144はAⅡ類で、137・141の体部外面には墨書がみられるがいずれも判読不明である。145・148～151はBⅢ類、152は分類不明の底部で外面に焼成前のへら描き「×」がみられる。

153～158は無台椀bで、154がAⅠ類、157がAⅡ類、158がAⅢ類、153がBⅠ類、156がBⅡ類、155がC類である。154の底部外面には中央に墨で黒塗りの丸が二つ並んで書かれている。155は底部外面に大きく太い字で「羽咋」の墨書がみられる。

159～164は黒色土器無台椀である。159はD類、160・161はB類、162はA類、163は底部を欠くが体部に丸みがあることからB類かC類であろう。164は底部外面に墨書「伊口〔継カ〕」がみられる。大きな字で墨痕ははっきりしている。

165～178は土師器長甕である。165・167はAa類、168は下半部の資料で底部は厚みがあり、167の同一個体の可能性が高い。166・170・171・172はAc類で、166・171はほぼ完形に復元できた。169はAb類で、今回出土資料のなかで体部の器壁が最も薄手のものである。173・174はAf類、175はAd類で、残存部下端近くに平行線文タタキメがみられる。176はAe類で、底部は接合しなかったが、図上復元した。177・178は体部下半の資料である。

179～197は土師器小甕である。179・180・181・182・197はA類で、179は外面体部下端にわずかだが布目が観察できる。183・184・185・186はB類で、183・184は底径が6cm未満と小さく、183の底部には糸切痕の上に片方の端部がふくらむ2本の沈線状の痕跡が平行して付いている。187・188・189・190・191はC類、192・193はD類、194・195はE類、196はF類である。

198～209は土師器鍋である。198・199・200・202・203・205・206はAb類、201・204はAc類、204のタタキメは平行線文Ha類であるが、刻みの幅が広い大振りなものである。207～209はC類である。

210～219は土師器佐渡型甕で、210・212～215がⅠ類、211・216～219がⅡ類である。

### 3) 奈良時代以前の土器

#### a 概要

奈良時代以前の土器は多様な時期のものが少量ずつ出土している。文様のない体部片では弥生土器と土師器の区別がつけがたいものも多く集計では分離できていないが、12,536g出土しており東区に多い傾向がある。弥生土器のうち櫛描き文を有するものは分けることができたのでその傾向を見ると、196gすべてが東区出土で、偏在する(図版156)。また、体部に列点文をもつものは399gの出土であるが最終的に1個体に復元できた。縄文土器は9,134gの出土で、こちらは西区に多い傾向がある。

縄文時代の遺構ではSK39に比較的まとまっていたが、中期～晩期の長期にわたる遺物が包含されていて、一括性はない。

個々の土器についての詳細な観察内容は別表13にまとめた。図はおおむね時代順に配列している。

#### b 遺物各説(図版157～159、写真図版152～154)

1は2B-2A11区Ⅵb層からの一括出土でほぼ完形に復元できた。下端部が若干欠けているかもしれないが、緩やかに開く口縁部の形状から無底の土師器甕と考える。体部外面はタテハケののち中位にケズリ、内面は粗い条線のナナメ～ヨコハケが施される。2は1と同じ場所で出土した土師器長甕で、こちらもほぼ完形に復元できた。体部外面はタテハケ、内面は粗い条線のヨコハケで平底である。1と2は同じ地点ですべての破片が出土し、調整の手法も似通っていて、実際組み合わせてみるとちょうどよいサイズであり、本来セットであろう。2の外面には煤が付着するが1にはみられないことも1が甕であることを支持する。2の体部にやや張りがある点など上越市延命寺遺跡SI006などに近いと思われ、1・2は7世紀前半のものとする。3は内面黒色処理された土師器杯または高杯である。体部は丸みを持ち、くびれて外反する口縁に至る。6世紀後半～7世紀のものとする。

4は赤彩された土師器器台の口縁部、5は有段口縁の土師器壺頸部、6は外面全体が磨かれていることから壺をみられるが、口径と体部径にあまり差がない。くびれ部に最低1か所の穿孔がみられる。7はごく小さい平底をもつ小型壺の体部で体部としては完全に残っている。外面はタテ方向に磨かれている。8は甕で長い体部が急にすぼまり小さい平底になるとみられる。口縁部は直立ぎみに立ち上がってから外反する。9は口縁部・体部とも非常に薄手のものである。4・5・8・9は古墳時代前期のものと思われるが、7は古墳時代中期か、6は古墳時代中期以降で頸部穿孔の例からは甕と考えるべきかもしれない。

10は小径の底部をもつもので、底部外面にはらせん状に巻きあげたような痕跡がみられる。11は輪状の台をもつ底部である。古墳時代のものか。

12は口縁端部を上下につまんで縁带状にする甕で体部外面タテハケののち中位より上にハケ原体の角のような工具を使った刺突文を巡らしている。内面は横方向に広く削られ、部分的にかなり薄くなることもある。13は口縁端部が方形の甕で体部の張りは弱く底部もあまりすぼまらないようである。12・13は弥生時代後期。

14～18は大きく外反する口縁の端部に刻み目を施す壺で、14は口縁端部内面にひだ状刻み、頸部外面に櫛描きによる沈線文帯が2段はあり、中位では6条確認できる。15も口縁端部内面に刻みがある。16は口縁端部上面に方向を違えて交差させて刻む。17は口縁端部内面に14～16よりは長い単位の2方向の刻みを交差させて施す。18は断面方形に肥厚する口縁端部上面に並列する刻み、外面に矢羽根状の刻みを施す。19～21は櫛描きによる文様が施された壺の体部片である。19は平行沈線文の間に波状文、列点文が施されている。20は19と同様の文様帯の下にさらに三角形の列点文が確認できる。21は押し引き文の下に半円形のモチーフが描かれる。22は甕の口縁部で口縁端部外面に刻みがみられる。14～22は弥生中期後半の小松式の範疇にあるものである。

23～25はSK39から出土した縄文土器で、23は平坦な口縁部の直下に2条の沈線がめぐる晩期の浅鉢で地文はLR縄文。24は深鉢の体部で沈線文の間にLR縄文が充填？されている。平行沈線を結ぶように懸垂文がみられる加曾利B式で後期中葉。25はSK39内から破片がまとまって出土し、口縁から底部までが判明する唯一の資料である。口縁近くがゆるやかにふくらむ形で、口縁端部には現状で3か所の突起が残っており、全体では突起は6か所と推定する。口縁直下に半隆起線文が施され、以下は大振りな節のRL縄文である。中期前葉か。

26～52は包含層出土である。26は変形工字文をもつ深鉢口縁部で弥生前期。27は変形工字文の深鉢で地文はLR縄文。弥生前期か。28は細密な羊歯状文と細密なLR縄文の浅鉢、29は28より大振りな羊歯状文とRL縄文の浅鉢、30・31も大振りな羊歯状文の浅鉢である。32は細密なLR縄文を施す体部からすぼまる頸部に小さく外反する口縁部をもつ壺、33は山形口縁をもつ筒形の深鉢で、口縁下に一条の沈線がめぐる。地文はLR縄文である。34は結節縄文と撚糸文の粗製深鉢で、延命寺ヶ原遺跡粗製深鉢2類〔渡邊2002〕に類例がある。35は結節縄文LRの粗製深鉢。36は結節縄文RLかと思われる粗製深鉢。37は内傾する口縁部は無文とし、体部は網目状撚糸文で埋める深鉢、38は口縁端部まで網目状撚糸文の深鉢で、28～38は晩期のものと考えられる。39は外反する山形口縁に細い沈線で文様が描かれLR縄文が充填？される深鉢で後期後葉、40は沈線文と刺突文、41は貼瘤がみられる深鉢で、後期前葉。42は厚みがある体部片で、沈線で方形に区画した中に鋸歯状の文様が描かれる深鉢、43は渦巻き状の突起部分、44は沈線による長楕円形区画に大振りの節のRL縄文が充填されている深鉢で中期後葉、45はゆるやかなくびれをもつ深鉢で、LR縄文の地文の上から沈線で文様が描かれる。大木8b式に類似し中期中葉。46はLR縄文地に隆起線文・半隆起線文で曲線の中を平行線で埋める文様が描かれる浅鉢で、口縁下に突起があったかもしれない。中期前葉。47は厚みのある山形の口縁部で、半隆起線文で区画した中に爪形文が施される。中期前葉。48は屈曲して小さく開く深鉢口縁部で半隆起線文と爪形文、49・50は48の体部の可能性があるもので、LR縄文地を縦方向に半隆起線文で区画し部分的に曲線が組み合うものである。中期前葉。47～50は新崎式。51はLR縄文の地文のみの深鉢。52は深鉢底部で、体部にはLR縄文が施され、底部外面には繊維を編んだ敷物の圧痕がみられる。51・52の時期は不明である。

## B 土製品 (図版 159・写真図版 154 別表 14)

土製品には土錘、可搬式カマド、焼成粘土塊、その他がある。焼成粘土塊は 312.3g が主に東区から出土した。その他としたものは製品の可能性があるが詳細不明のもので 39.9g ある。主体を占めるのは長 22.9～52.1mm、幅 6.4～15.2mm で長/幅値が 2.5～6.4 程度の管状土錘である。道正遺跡で細型としたものと同様の傾向であり、これらを細型と呼ぶ。重量で合計 294.2g、幅のわかる破片で 113 点ほど確認でき、個体数としてはこの数を超えないと考えられる。実測したものでみると個別の重量は 1.3～7.5g の幅がある。

遺構では古代の SK45 から小片が 3 点 8.6g 出土しているが、図示できるものはない。大部分は Vc1・Vc2 層出土で、2A-3H20、2B-2A6・21 といった古代土器も多く出土するグリッドに多い傾向がある。1～29 を図示した。

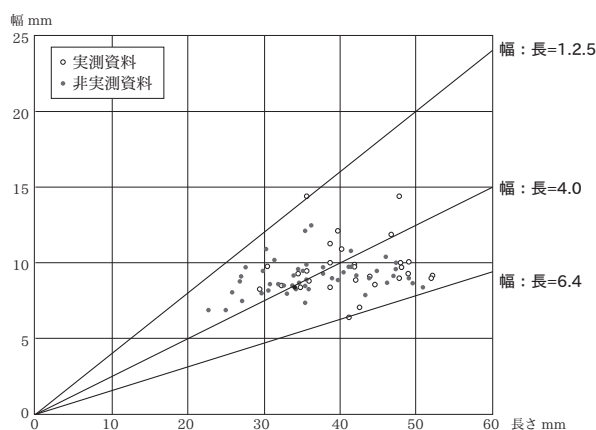
出土状況と質感からはほとんどが古代に製作されたものと推定する。

重量をみると 4g 前後のものがなく、3.6g 以下と 4.8g 以上のものに分けられる。図示していない個体も含めて長幅との相関をみると 4.8g 以上のものは幅 11.9mm 以上に分布していることから、幅 11.3mm 以下を A 類、11.9mm 以上を B 類とする。26 と 27 は長/副値では近い位置にあるが、重量に大きな差がある。これは、26 は両端が細くなる形であるのに対し、27 は端部と中央部の幅があまり変わらないという形状の違いによる。A 類では長/幅値 4.0 あたりを境に値の小さいものは長さ 41.5mm 以下、値の大きいものはより長い方を中心に分布する傾向がみられるようであり、道正遺跡と同様の傾向と言える。長/幅値 4.1 以上を 1 類、4.0 以下を 2 類とする。

細型でない管状土錘は図示した 1 点 (30) だけで、西区の細型の分布域とは少し離れた北側で出土している。

31 は可搬式カマドで、口縁約 4 分の 1～焚口上面までが判明する 1 点のほかに、口縁部片が 3 点、焚口下部にあたるもの 1 点がある。すべて同一個体と考え図上復元した。東区の東寄りのグリッドから出土している。推定される形態から佐渡に分布の主体がある焚口が前後 2 面に設けられる可搬式カマドと考えられ、この推定に従えば焚口上部と下部の対応は片方が反対側である可能性もあり、

両者の若干の色調の違いからはそう考えた方がよいかもかもしれない。大きさは口縁上端部で 29.0cm、外端部で 29.7cm、くびれ部の内径は 21.0cm、高さは不明だが、25cm ほどと推定する。口縁部は上からみて円形であるが、体部は角ばる部分があり、上からみると隅丸方形に近い形を呈する (a 断面)。口縁部端面～内外面上半は粗い条線のハケメで横方向に調整し、その後口縁内面下半は異なる原体で細かい条線のハケメが施されている。口縁部内面では右に上がるらせん状に粘土紐の継ぎ目が観察できる。外面は口縁部との境のくびれ以下に粗い条線のハケメを右下がりに施すが、焚口の周囲は凹凸の大きい粗雑な印象のなでつけで終わっている。体部内面は指頭圧痕と横または斜め方向のナデが施されるが、粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。焚口下部の横断面は浅い弧を描く (b 断面)。外面調整は上部と同じで、焚口側縁近くは凹凸の大きいなでつけ、それ以外は粗い条線のハケメを右下がりに施す。内面は焚口側縁～接地部にかけて 2 辺を幅広く面取りするが、その面は非常に平滑である。面取りされない部分は全体にナデられるが、粘土紐の痕跡が明瞭に残る。接地面は平坦にしようとしたようだが、焚口側面に比べるとやや凹凸がある。正面から見た焚口の形は上端が水平で側縁がやや曲線的な台形を呈するようである。口縁～体部上半に部分的にススの付着があるが使用に関わるものかどうかは定かでない。



第 87 図 細型管状土錘の法量分布

C 石器・石製品 (図版 160～164、写真図版 133・154～156、別表 15)

発掘調査で得られた石器・石製品 (以下、石器類とする) は 1 箱 (内寸 54.5×33.6×10.0cm) である。このほか搬入礫が 35.191kg (481 点) である。遺跡は道正遺跡と同じように埋没した新潟砂丘 I-2 (亀田砂丘) に立地するため、発掘調査で出土した石器類はもちろんのこと、使用や加工の痕跡が認められない自然礫も何らかの意図をもって遺跡内に搬入したものである。したがって、道正遺跡と同じように礫はすべて洗浄し、石器 (器種石器・剥片類・石核等)・石製品・搬入礫に選別した。搬入礫は出土点数・重量と肉眼による被熱の痕跡を記録した。

石器類は一部弥生時代以降のものを除き、多くは縄文時代に所属すると思われる。土器の所属時期からすればほぼ縄文時代中期～晩期の所産である。多時期にわたり、多器種の石器類が出土している。すべてが搬入された消費遺跡の石器類の様相を明らかにすることを目的に以下の記述をすすめる。

1) 資料の提示方法

資料の提示は実測図・写真・観察表で行い、本文で分析を加えた。提示方法は道正遺跡と同じであり、説明が重複するため、以下、「実測図の図化方法」「写真図版の提示方法」「観察表の記載方法」などは省略した。

2) 石器類

出土した石器類は第 49 表のとおり、158 点である。このうち遺構内出土 5 点、遺物包含層出土 153 点で圧倒的に包含層出土が多い。遺構内出土は剥片類の 1 点が縄文時代の遺構から出土した

第 49 表 石器類出土数・掲載数・図化率

器種名	石器											石器小計	石製品			合計	
	石 鎌 成 品	削 器	の 両 極 剥 離 痕 のある 石器	磨 製 石 斧	磨 石 類	砥 石	台 石 類	剥 片 類	石 核	石 製 品	榧 石 製 品		権 状 錘	玉 作 資 料	鉞 尾		石 製 品 小 計
出土数(点)	4	3	4	6	3	1	10	2	95	4	5	137	2	18	1	21	158
掲載数(点)	2	2	3	2	1	0	6	0	0	3	3	22	2	13	1	16	38
図化率 (%)	50.0	66.7	75.0	33.3	33.3	0.0	60.0	0.0	0.0	75.0	60.0	16.1	100.0	72.2	100.0	76.2	24.1

ものの、ほかは後世の遺構への紛れ込みである。

石器類の出土分布傾向は図版 160 のように東調査区の 2A-2J・3J～2B-2A・3A の砂丘西斜面に集中する。西調査区も東調査区から連続し、砂丘西斜面の 2A-3H・4H～2A-3I に集中するが、東調査区に比べると出土数はやや少なくなる。これらの石器類は砂丘の東・南側の標高の高いところからの廃棄や流入と考えられる。なお、東調査区の南東部からは全く出土していないが、この部分は近世以降の開発で埋没しなかった砂丘が削平されたためである。したがって、本来はこの部分から東や南側に遺跡が広がり居住域も存在したものと推定できる。

第 50 表は器種別・層位別の石器類の出土数である。平安時代の遺物包含層の Vc・Vc1・Vc2 層から 117 点 (74.1%) 出土していることから、平安時代の遺物を除き多くは流れ込みと考えている。縄文時代～古墳時代までの遺物を含む VIc 層から 14 点 (8.6%)、同じく VII 層から 18 点 (11.4%) 出土するが廃棄または流入と推定される。

第 50 表 石器類層位別出土数

出土状況	層位	石 鎌 成 品	削 器	の 両 極 剥 離 痕 のある 石器	磨 製 石 斧	磨 石 類	砥 石	台 石 類	剥 片 類	石 核	石 製 品	榧 石 製 品	権 状 錘	鉞 尾	玉 作 資 料	合計 (点)
遺構内出土	—								4						1	5
	不明								1							1
	I b						1									1
	II														1	1
遺構外出土	Vc				1				1		1					3
	Vc1	1	1		1	1		1	14	2	1	1	1	1	4	28
	Vc2	1	1	2	3			8	1	57	2	2	1		8	86
	VIa															0
	VIb														1	1
	VIc	1	1	1	1	1			1	5		1			2	14
	VII	1		1		1	1			13					1	18
	合計 (点)	—	4	3	4	6	3	1	10	2	95	4	5	2	1	18

石器は数が少ないながらも縄文時代の集落から出土する器種をほぼ網羅し、石材環境がまったく乏しい遺跡にもかかわらず比較的多くの石器類及び石材が出土している。石製品は 3 器種であるものの弥生時代以降の所産と推定され、いずれも類例の少ない貴重なものである。

以下、器種ごとに分類・出土分布状況・大きさ・石材などの諸属性を検討

し、所属時期とその特徴を明らかにしたい。

a 石 鏃 (図版 161-1・2)

4点出土し、2点図示した。1はやや凸基気味の平基有茎鏃(B類)である。尖頭部や基部の先端は尖らずやや丸味を持つ。長さ50.8mmを測る大型品である。流紋岩製。2は尖頭部と基部の境に丸みを持つ凸基有茎鏃(C2類)で、尖頭部先端は鋭く尖る。半透明頁岩製。1・2は形状から縄文時代後・晩期に所属する。このほか凹基有茎鏃(A類)の破損品、凸基有茎鏃(C2類)の破損品が各1点出土している。

b 石鏃未成品 (図版 161-3・4)

3点出土し、2点図示した。いずれも一側縁ないし二側縁に二次調整を施したA類である。3は尖頭部と予想される部分の両側縁に粗い剥離が施されている。しかし中茎部の厚さを減ずることができず、製作を断念したものと推定される。2は一側縁に両面から二次調整が加えられているが、中ほどの厚さを減ずることができず製作を断念したものと考えられる。ともに流紋岩製。

c 削 器 (図版 161-5～7)

4点出土し、3点図示した。5は正面右側縁に急角度で連続的な二次調整(A類)が加えられている。素材は厚手の縦長剥片で、切断(正面左側縁)が見られる。珪質頁岩製。6は厚手で大型の横長剥片の上下を切断し、両側縁に両面から粗い二次調整(D類)を施している。頁岩製。7は縦長剥片の正面右側縁に使用によると思われる微細剥離(E1類)が見られ、刃縁は滑らかである。流紋岩製。このほか刃部に不連続な二次調整を加えたもの(C類)が1点出土している。

d 両極剥離痕のある石器 (図版 161-8・9)

6点出土している。内訳は2極1対の刃部を持つもの(A類)5点、4極2対の刃部を持つもの(B類)1点、である。A・B類を各1点図示した。8は素材が頁岩製の剥片で、上下の両端からの剥離が見られる。9は素材が小型で薄手のメノウ製の礫と推定される。上下、左右の4辺からの剥離が見られ、小型剥片石器の素材かと思われる。正面には礫表皮が大きく残る。このほかA類の4点は、頁岩2点、流紋岩2点である。

e 磨製石斧 (図版 161-10)

3点出土し、1点図示した。10は基部の基端破片である。遺存する主面や側面を見る限りよく研磨され、主面と側面の境には稜を持ち、横断面が長方形を呈する定角式磨製石斧である。基端は敲打痕が著しく残ることから、通常の伐採具のほか、クサビまたは敲き石として使用された可能性も考えられる。透閃石岩製で、富山県東部ないし糸魚川地方からの搬入品である。このほか図示していないが基部小破片が2点出土しており、輝緑岩製であることから在地生産と推定される。

f 磨石類

1点のみの出土で、図示していない。出土したものは2/3ほど欠損するが、遺存部分に磨痕が認められる。被熱し、風化が著しい。花崗岩製。

g 砥 石 (図版 161・162-11～16)

10点出土した。内訳は大型の置き砥石(A類)1点、横断面が方形で全体形が直方体状のもの(B2類)6点、破片資料で分類できなかったもの3点である。このうち状態の良い6点を図示した。11は大型の置き砥石と思われる。砂岩製の扁平長大礫の両側縁を剥離で調整し、正面と片側柄面を使用している。北野遺跡の類例〔高橋2005〕から古代～中世の所産と推定されるが、Vc2層から出土していることから平安時代に所属する。12～16は横断面が方形、全体形が直方体状を呈すると思われるものである。すべて凝灰岩製である。12は正裏面と片側面に刃物様と思われる細くて鋭い溝が見られる。13も全面に同様の痕跡が見られるが、12ほど顕著でない。16は横断面が方形で整っているが、出土層位から近代以降に所属する。ほかは図示していないものも含めVc2層から出土していることから平安時代の所産と推定される。

## h 台石

2点出土するが、いずれも破片資料のため図示していない。石材はデイサイトと安山岩である。

## i 剥片類

剥片類としたものは95点であるが、図示していない。このうち大きさが2cm程度以上の剥片は53点、2cm程度以下のチップとしたものは42点である。出土層位は95点の内、Vc・Vc1・Vc2層から72点(75.8%)、VIc・VII層18点(18.9%)となる。Vc・Vc1・Vc2層は平安時代の遺物包含層と推定されていることから砂丘上位からの流入と考えられる。VIc・VII層は縄文～古墳時代に堆積したものと推定される。

剥片とした53点の石材は、流紋岩が20点(37.7%)で最も多く、次いで頁岩系16点(30.2%)、凝灰岩9点(17.0%)となる。道正遺跡では頁岩系42.6%、メノウ28.5%、鉄石英(赤・黄)15.6%、流紋岩10.4%となり、石材比率で大きく異なる。岡崎遺跡の剥片の出土数が少なく、単純に比較できないが、道正遺跡は縄文時代晩期中葉にほぼ限定されるのに対し、岡崎遺跡は縄文時代中期～弥生時代後期まで断片的に出土することを反映しているように思われる。

## j 石核(図版162-17～19)

4点出土し、3点図示した。17は比較的大型の剥片の上面を打面として正面に同一方向の剥離作業(A類)を行っている。裏面には礫表皮が残っていることから、礫の外側部分を石核素材としている。頁岩製。18は厚手の大型剥片を素材とし、剥離面を同一打面として周縁に剥離作業(C類)を行っている。剥離作業はほぼ全周している。流紋岩製。19は垂角礫の厚手の素材の稜線上に交互剥離様に剥離作業を行っている。剥離作業は稜線上の半周程度(D類)である。流紋岩製。17～19の剥離作業面を見る限り、小型剥片石器の素材に充分成り得る剥片が得られたものと思われる。なお、図示していない1点は、こぶし大の大きさの礫岩に1回のみ剥離を加えたものである。

## k 軽石製品(図版162・163-20～22)

5点出土し、3点図示した。20は長さ109.2・幅77.6・厚さ54.2mmを測る比較的大型品で、正裏面は使用により平面(A類)になっている。21は長さ54.5・幅35.4・厚さ12.5mmを測る小型品で、正裏面は加工または使用により平面(A類)になっている。22は長さ214.2・幅136.5・厚さ71.8mmを測り、超大型で扁平気味の楕円球である。明確な使用の痕跡は見られないが、形状が整い、正裏面が滑らかなこと(B類)から使用の可能性を認めた。図示していない2点は破片資料であるが、使用による面が認められる(A類)のものである。

## l 権状錘(図版163-23・24)

2点出土し、すべて図示した。23は東調査区の砂丘斜面部先の低地、2B-2A2の出土である。もともとは全面が研磨されていたと思われるが、裏面の一部は欠損し、正面は中央部に敲打痕が見られる。全体形は頂部がすぼまり、底部が広がる巾着形を呈する。頂部側の中央には貫通する1孔が穿たれている。現存値で長さ62.0・幅45.4・厚さ25.9mmを測り、重さ42.7gを量る。凝灰岩製。24は東調査区の砂丘斜面部、2B-2B6の出土である。底部以外は全面研磨されていたと思われるが、頂部の一部は欠損する。正裏面と両側面はよく研磨されているが、正裏面と底部にはやや目立つ擦痕がみられる。全体形は頂部が不明なものの底部が平坦気味で、頂部に向かって両側面がすぼまる截頭錐体形を呈すると思われる。頂部は一部欠損するものの1孔穿たれており、両側穿孔の痕跡が残っている。現存値で長さ52.9・幅37.2・厚さ30.8mmを測り、重さ36.2gを量る。凝灰岩製。23・24は平安時代(9世紀以降)に時期が限定される〔望月2003、高橋保2022〕が、出土層位(Vc層)が9世紀後半におおむね限られていることから裏付けられる。

新潟県内の権状錘を集成した〔相田2012〕によれば、10遺跡の内、7遺跡が越後平野に集中し、「古代に越後平野の集落が内水面を利用した交易で大きな役割を担っていたことがひとつの要因」としている。岡崎遺跡及び道正遺跡の古代を性格づける遺物の一つである。

m 鉞尾 (図版 163-25)

25 は石製腰帯具の鉞尾である。東調査区の砂丘斜面部、2B-2B6 の出土である。正面左上隅をわずかに欠損するがほぼ完形といえる。全面研磨されるが、裏面を除いた正面と側面は、特によく磨かれ光沢を帯び黒光りしている。側面は裏面から正面に急角度に仕上げられ、側面と裏面の間には幅 1 ～ 1.5mm ほどの面取りが全周する。裏面には研磨以前の剥離痕が 2 か所認められるが、これ以外の部分には研磨痕跡の横方向の線状痕が全面に認められる。また、潜り孔が 3 か所穿たれている。長さ 51.2 ・幅 34.3 ・厚さ 5.9mm を測り、重さ 22.8g を量る。粘板岩製。所属時期は奈良時代後半～平安時代前半と思われる (田中 1990・1991) が、出土層位 (Vc 層) が 9 世紀後半におおむね限られていることから裏付けられる。

鉞尾の出土は、鉞尾を持つことのできる有力者の存在を示唆するものであり、道正遺跡と共に古代を性格づける遺物の一つである。

n 玉作資料・工具

出土資料は 19 点であり、ヒスイ製勾玉未成品 6 点、同剥片 2 点、緑色凝灰岩製管玉未成品 6 点、同剥片 2 点、管玉製作に伴う工具の石鋸 3 点である。以下、種別ごとに説明する。

(1) ヒスイ製勾玉未成品 (図版 163-26 ～ 31)

前述のようにヒスイ製勾玉未成品 6 点、同剥片 2 点を抽出したうち、勾玉未成品 6 点を図示した。製作工程分類は第 88 図のように〔寺村 1966〕に拠った。なお、各工程の ( ) 内の段階は寺村氏の呼称である。

- 第 1 工程 原石・石核段階 (採石) 出土していない。
- 第 2 工程 荒割段階 (荒割未成品) (26)
- 第 3 工程 形割段階 (形割未成品) (27 ～ 30)
- 第 4 工程 微調整剥離段階 (側面打裂未成品) 出土していない。
- 第 5 工程 研磨段階 (研磨未成品) (31)
- 第 6 工程 穿孔段階 (穿孔未成品) 出土していない。
- 第 7 工程 仕上げ段階と完成品段階 (仕上げ工程と完成品) 出土していない。

工程別では第 2 工程 1 点、第 3 工程 4 点、第 5 工程 1 点の未成品、剥片 2 点出土しており、ヒスイ製勾玉を小規模ではあるが、製作していたことは明らかである。

出土分布は東調査区の 2B-2A、2B-2B6、西調査区の 2A-3I12・14 の 2 か所にややまとまる傾向が見られる。いずれも北西向きの砂丘斜面部であり、廃棄または上位面からの流入と考えられる。


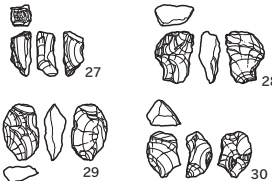

個別遺物の説明 26 は第 2 工程としたが、小型の礫の 4 面に打撃を加えサイコロ状に仕上げている。27 ～ 30 は荒割段階の素材に打撃を加え、目的剥片を得たものと思われる。剥片の大きさから小型の勾玉を意図したものと推定される。31 は正裏面及び両側面に研磨が加えられた第 5 工程の未成品である。小型の勾玉を製作しようとしていることは明らかである。なお石材のヒスイは富山県東部及び糸魚川地方からの搬入品である。

(2) 緑色凝灰岩製管玉未成品 (図版 164-32 ～ 36)

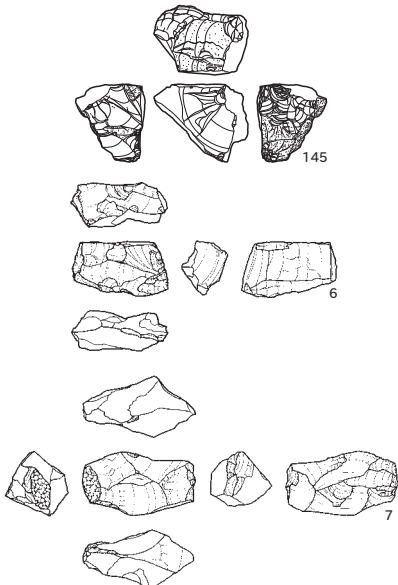
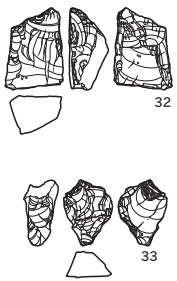


緑色凝灰岩製管玉未成品 6 点、同剥片 2 点出土したうち、管玉未成品 5 点を図示した。製作工程分類は第 89 図のように〔寺村 1966〕に拠った。なお、各工程の ( ) 内の段階は寺村氏の呼称である。

- 第 1 工程 原石・石核段階 (採石) 出土していない。
- 第 2 工程 荒割段階 (荒割未成品) (32・33)
- 第 3 工程 形割段階 (形割未成品) (34)
- 第 4 工程 側面剥離段階 (側面打裂未成品) (35・36)
- 第 5 工程 研磨段階 (研磨未成品) 出土していない。
- 第 6 工程 穿孔段階 (穿孔未成品) 出土していない。
- 第 7 工程 仕上げ段階と完成品段階 (仕上げ工程と完成品) 出土していない。



第1工程 原石・石核段階	第2工程 荒削段階	第3工程 形削段階	第4工程 微調整剥離段階	第5工程 研磨段階	第6工程 穿孔段階	第7工程 仕上げ・完成品段階
						

第88図 ヒスイ製勾玉の製作工程 (すべて1/4)

第1工程 原石・石核段階	第2工程 荒削段階	第3工程 形削段階	第4工程 側面剥離段階	第5工程 研磨段階	第6工程 穿孔段階	第7工程 仕上げ・完成品段階
						

145は道正遺跡出土、6・7は岡崎遺跡の確認調査で出土

第89図 緑色凝灰岩製管玉の製作工程 (第1工程は1/5、ほかは1/4)

工程別では第2工程3点<sup>1)</sup>、第3工程1点、第4工程2点の未成品、剥片2点出土しており、緑色凝灰岩製管玉を小規模ではあるが、製作していたことは明らかである。出土分布は東調査区の2A-2J、2B-2Aにややまとまる傾向が見られる。北西向きの砂丘斜面部であり、廃棄または上位面からの流入と考えられる。

なお隣接する道正遺跡から第1工程の石核が1点<sup>2)</sup>、同じく本調査区の南で行われた確認調査で第1工程の石核が2点<sup>3)</sup>出土している。

**個別遺物の説明** 32・33は第1工程の石核に打撃(32は正面上部、33は裏面上部)を加え、厚手の剥片を得ている。いずれも第2工程の未成品と考えられる。34は左側面と上面に施溝された施溝未成品の施溝部に打撃を加え、三角柱状の剥片を剥離している。35は四角柱状の、36は三角柱状の剥片の側面(35は左側面・正面・右側面、36は裏面)に細かな剥離を施しているが、やや粗雑である。石材の緑色凝灰岩は原産地不明であるものの、施溝具の石鋸は佐渡産の搬入品の可能性が高いことから、石材も佐渡産を搬入した可能性が考えられる。

(3) 石鋸(図版163-37・38)

管玉製作時の原石・石核段階、荒削段階の未成品に施溝を行う工具である。3点出土し、2点図示した。37・38と図示していないものも含め、いずれも破片資料である。すべて刃部に摩耗が認められる。石材は流紋岩で

1) 図示していないものを1点含めている。  
 2) 第IV章第4節C2) t 玉作資料(図版118-145)参照。  
 3) 『新潟市文化財センター年報第12号』(2025年3月刊行予定)に報告予定。

ある。県内では灰白～灰黄色を呈し、劈開が発達し薄く剥がれる性質の流紋岩は、佐渡産以外に知られていないことから佐渡からの搬入品と推定される。

### D 鍛冶関連遺物 (写真図版 156-1～6、別表 16)

鍛冶関連遺物は 22 点出土している。内訳は鉄滓 20 点、ふいごの羽口 2 点出土している。このうち比較的残りの良い鉄滓 6 点を写真図版に掲載した。遺構に伴うものは皆無で、すべて遺物包含層出土で、出土層位から平安時代の所産である。出土分布はすべて東調査区の 2A-2J、2B-2A からの出土である。砂丘斜面部の縁沿いに集中傾向が見られる。砂丘斜面部の中ほどの 2B-2A14 に床面が焼土化した SK28 が存在するが、鉄滓の出土分布とかけ離れており、関連性は認められなかった。1～3 はマグネット式吸着器の反応を示し、形状から椀形滓と判断した。4～6 は多孔質で軽く、マグネット式吸着器の反応を示さない。なお、図示していないが羽口の破片が 2 点出土しており、東調査区の 2A-2J15、2A-1J25 の砂丘斜面部の縁と縁先の湿地から出土している。

鉄滓及び羽口の出土状況を見る限り、東調査区の砂丘斜面部より上位の面で小鍛冶が行われたものと推定される。

### E 搬入礫 (図版 160)

第 51 表参照。発掘調査で出土した搬入礫は 35.191kg (481 点) である。このうち肉眼観察ではあるが被熱礫 28.229kg (382 点) を量り、搬入礫の 80.2% の高い比率を示した。遺構に伴う搬入礫は 449g で、1.3% の非常に低い比率である。遺物包含層の層位別にみると平安時代の遺物包含層の V・Vc1・Vc2 層からは 31.995kg を量り、搬入礫の 90.9% を占める。縄文時代から古墳時代までの遺物を含む VIc・VII 層からは 2.151kg でわずか 6.1% を占めるに過ぎない。遺構・遺物の少なさを反映している。

図版 160 の出土分布図を見ると搬入礫と被熱礫の分布に大きな違いは見られず、砂丘の斜面部から下縁部にかけて多く分布し、東調査区から西調査区に向かうに従い少なくなる。したがって、遺跡の中心部は東調査区の南側からさらに南の調査区外と推定される。搬入礫からも、遺跡の主体の時期及び遺跡の中心部が推定できる。

第 51 表 搬入礫・被熱礫出土表

種別 層位ほか	搬入礫		搬入礫の内の被熱礫	
	出土数 (点)	重さ (g)	出土数 (点)	重さ (g)
遺構出土	11	449	5	353
II 層	1	4	1	4
Vc 層	15	706	12	656
Vc1 層	128	7233	100	6297
Vc2 層	301	24056	246	19546
VIa 層	1	17	1	17
VIc 層	5	1434	3	186
VII 層	14	717	13	707
試掘ほか	5	575	1	463
合計	481	35191	382	28229

## 第 5 節 岡崎遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

新潟市江南区に所在する岡崎遺跡は、亀田砂丘西端部の西は信濃川、東は阿賀野川、南は小阿賀野川に囲まれた沖積微高地上に立地する。発掘調査では、平安時代を主体に古墳時代、弥生時代、縄文時代の遺物が出土している。

本報告では、土層の堆積年代に関する資料を得る目的で放射性炭素年代測定を、各時期の周辺植生と堆積環境を検討する目的で花粉分析と珪藻分析を行う。

### A 放射性炭素年代測定

#### 1) 試料

試料は、東工区東壁の Vb 層、東工区中央ベルト VIb 層の上部と下部から出土した炭化物と木片の 3 点である。

第 52 表 測定試料及び処理

試料番号	グリッド	試料採取箇所・土層	試料	前処理・調整	測定法
No.1	2B-1A18	東工区東壁・Vb 層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
No.2	2B-1A18	東工区中央ベルト VIb 層上	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
No.3	2A-2J5	東工区中央ベルト VIb 層下	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

## 2) 方 法

## a 化学処理

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常  $1\text{mol}/\ell$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

## b 測 定

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 ( $\text{HOx II}$ ) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## c 算 出

(1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。

(2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach, 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma=68.3\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 データベース (Reimer et al., 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (BronkRamsey, 2009) を使用する。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

## 3) 結 果

3 試料に関する個別の  $^{14}\text{C}$  年代測定と暦年較正の結果を第 53 表と第 90 図に示す。

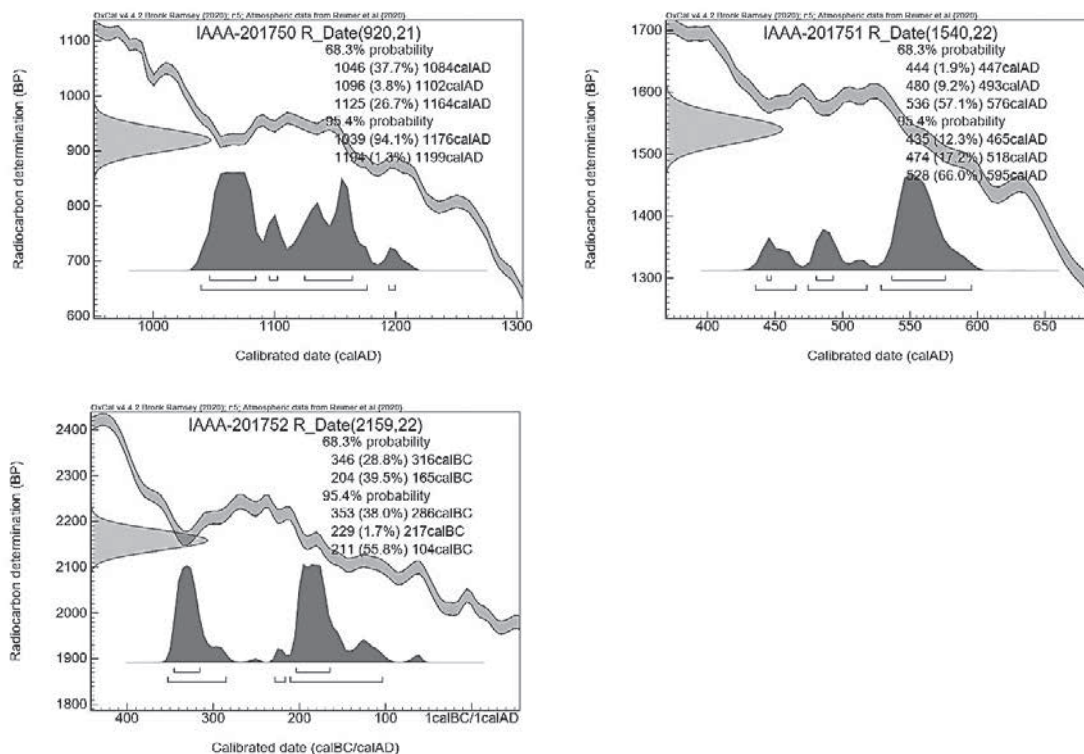
## 4) 所 見

岡崎遺跡の土層堆積年代を検討する目的で、加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、東工区東壁の Vb 層で出土した炭化物は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $920 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は 1039 cal AD ~ 1176 cal AD (94.1%)、1194 cal AD ~ 1199 cal AD (1.3%)、東工区中央ベルトの VIb 層上で出土した木片は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1540 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は 435 cal AD ~ 465 cal AD (12.3%)、474 cal AD ~ 518 cal AD (17.2%)、528 cal AD ~ 595 cal AD (66.0%)、同 VIb 層下で出土した炭化物は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $2160 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は 353 cal BC ~ 286 cal BC (38.0%)、229 cal BC ~ 217 cal BC (1.7%)、211 cal BC ~ 104 cal BC (55.8%) であった。

第53表 測定結果

試料番号	測定No. (IAAA-)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正年代 (年BP)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1 $\sigma$ (68.3%確率)	2 $\sigma$ (95.4%確率)
No.1	201750	-27.50 $\pm$ 0.16	920 $\pm$ 21	920 $\pm$ 20	1046 calAD - 1084 calAD (37.7%) 1096 calAD - 1102 calAD ( 3.8%) 1125 calAD - 1164 calAD (26.7%)	1039 calAD - 1176 calAD (94.1%) 1194 calAD - 1199 calAD ( 1.3%)
No.2	201751	-26.62 $\pm$ 0.20	1540 $\pm$ 22	1540 $\pm$ 20	444 calAD - 447 calAD ( 1.9%) 480 calAD - 493 calAD ( 9.2%) 536 calAD - 576 calAD (57.1%)	435 calAD - 465 calAD (12.3%) 474 calAD - 518 calAD (17.2%) 528 calAD - 595 calAD (66.0%)
No.3	201752	-30.30 $\pm$ 0.17	2159 $\pm$ 22	2160 $\pm$ 20	346 calBC - 316 calBC (28.8%) 204 calBC - 165 calBC (39.5%)	353 calBC - 286 calBC (38.0%) 229 calBC - 217 calBC ( 1.7%) 211 calBC - 104 calBC (55.8%)

BP : Before Physics (Present) ,BC : 紀元前,AD : 紀元



第90図 暦年較正結果

## B 花粉分析

### 1) 試料

分析試料は、東工区東壁及び東工区中央ベルトから採取された試料1～8 (Vb層～VIc層)の8点である。下部のVIc層、VIb層は古墳時代、Vc2層、Vc1層は平安時代、Vb層は平安時代以降にあたる。

### 2) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

1. 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
2. 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
3. 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
4. 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
5. 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
6. 再び氷酢酸を加えて水洗処理
7. 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

## 8. 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節及び種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(－)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、チール石炭酸フクシンで染色を施すことにより特徴がより鮮明になるため、中村(1974・1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定している。なお、花粉分類では樹木花粉(AP)及び非樹木花粉(NAP)となるが非樹木花粉(NAP)は草本花粉として示した。

### 3) 結 果

#### a 分 類 群

産出した分類群は、樹木花粉41、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉21、シダ植物孢子2形態の計69分類群である。これらの学名と和名および粒数を第54表に示し、花粉数が100個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第91図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真を第92図に示した。同時に、寄生虫卵についても検鏡した結果、1分類群が検出された。以下に産出した分類群を記載する。

#### 〔樹木花粉〕

モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、ウルシ属、キハダ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ノブドウ、シナノキ属、グミ属、ミズキ属、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、タニウツギ属、スイカズラ属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ユキノシタ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属－ガマズミ属

#### 〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、アヤメ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、キカシグサ属、セリ亜科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

#### 〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

#### 〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、不明虫卵

#### b 花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の変化から下位より5帯の花 pollen 分帯を設定し、分帯ごとに特徴を記載する。

##### (1) I 帯：試料 8 (VIc 層)

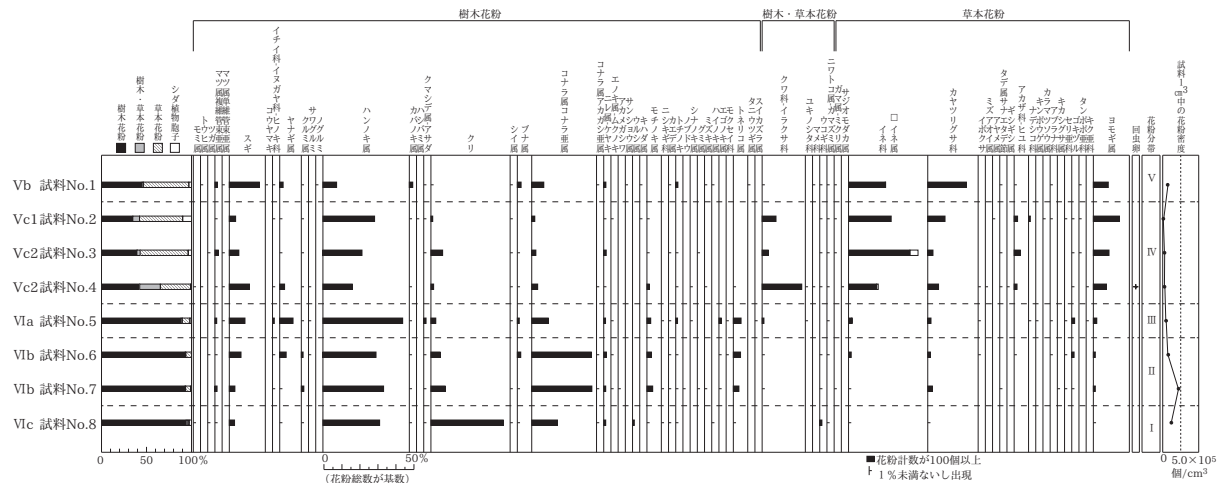
樹木花粉が94%を占め、クリ、ハンノキ属の産出率が高い。コナラ属コナラ亜属が伴われ、スギが低率に産出する。

##### (2) II 帯：試料 7・試料 6 (VIb 層)

樹木花粉が93%を占め、コナラ属コナラ亜属が倍増し、ハンノキ属は変化しないが、クリは減少する。他に、スギ、モチノキ属、トネリコ属、ヤナギ属が低率に産出する。カヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ科がわずかに産出する。

第54表 岡崎遺跡における花粉分析結果

分類群	学名	和名	2B-1A18			2B-2A5			2B-1A18			2A-2J5	2B-2A5
			Vb	Vc1	Vc2	Vc2	V1a	V1b	V1b	V1c	V1c		
			1	2	3	4	5	6	7	8			
Arboreal pollen		樹木花粉											
<i>Abies</i>		モミ属				1						1	
<i>Picea</i>		トウヒ属	1			1							
<i>Tsuga</i>		ツガ属			1			1				1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	6	3	12	5	6	2	8			1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>		マツ属単純管束亜属	1		1	1	1						
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	72	18	34	61	54	34	20			21	
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	1										
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	4	2		2	6	3	1				
<i>Salix</i>		ヤナギ属	8	1	4	15	46	19	5			5	
<i>Juglans</i>		クルミ属	3	4	1	3	4	5	9			1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ				1	2	1					
<i>Platycarya strobilacea</i>		ノグルミ	1										
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	33	149	140	89	275	155	218			227	
<i>Betula</i>		カバノキ属	8	1		5	4	2	3			1	
<i>Corylus</i>		ハシバミ属		1									
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1	1	1		8	2	3			3	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	2	5	42	8	17	27	51			290	
<i>Castanopsis</i>		シイ属	3	1	2	1	4		2			1	
<i>Fagus</i>		ブナ属	9		1	4	7	10	4			3	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	29	9	15	18	57	174	216			103	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	2			4		3	6			1	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	5	1	9	4	6	8	7			8	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		2			3	4	2				
<i>Mallotus japonicus</i>		アケメシ							1				
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属	2										
<i>Rhus</i>		ウルシ属										7	
<i>Phellodendron</i>		キハダ属	2	1									
<i>Ilex</i>		モチノキ属		1	1	7	13	13	21			5	
Celastraceae		ニシキギ科					1		1			2	
<i>Acer</i>		カエデ属	1		1		3	2	1			4	
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	5		1	1	6	1	3			1	
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>		ノブドウ							2				
<i>Tilia</i>		シナノキ属				1	1						
<i>Elaeagnus</i>		グミ属			1				1				
<i>Cornus</i>		ミズキ属	1			1			1				
<i>Symplocos</i>		ハイノキ属	1									4	
<i>Styrax</i>		エゴノキ属					8	1	1				
Oleaceae		モクセイ科					1	1					
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属				1	27	21	20			6	
<i>Weigela</i>		タニウツギ属	1										
<i>Lonicera</i>		スイカズラ属					1						
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉											
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	1	40	22	120	6	1	3				
Saxifragaceae		ユキノシタ科				1	2						
Leguminosae		マメ科	1			1							
Araliaceae		ウコギ科	1	1	1	1		1	1			9	
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	4	2	1	3	1	1				5	
Nonarboreal pollen		草本花粉											
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	1	1	1				1				
<i>Alisma</i>		サジオモダカ属				3							
Gramineae		イネ科	88	123	220	85	11	8	5			2	
<i>Oryza type</i>		イネ属型	1		29	5	1		2				
Cyperaceae		カヤツリグサ科	93	50	19	33	11	8	17			4	
<i>Anetilema keisak</i>		イボクサ				2	1	2					
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属				1							
<i>Iris</i>		アヤメ属		1									
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	1		1	2			1				
<i>Rumex</i>		ギンギシ属				2							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	2	10	22	9		1					
Caryophyllaceae		ナデシコ科		5				1					
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属						1					
<i>Thalictrum</i>		カラマツソウ属		1									
Cruciferae		アブラナ科	1	4				1	1				
<i>Rotala</i>		キカシグサ属										1	
Apioidae		セリ亜科		3				1	1			1	
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキツル		2	2	3	10	7	1				
Lactuoidae		タンポポ科	1	1	4								
Asteroidae		キク亜科				1	2						
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	36	75	56	40	12	6	7			5	
Arboreal pollen		樹木花粉	201	200	267	234	560	489	607			696	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	7	43	24	126	9	3	4			14	
Nonarboreal pollen		草本花粉	224	276	354	186	52	34	36			11	
Total pollen		花粉総数	432	519	645	546	621	526	647			721	
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	6.9×10 <sup>-4</sup>	8.9×10 <sup>-3</sup>	2.5×10 <sup>-4</sup>	4.6×10 <sup>-4</sup>	4.7×10 <sup>-4</sup>	7.7×10 <sup>-4</sup>	2.2×10 <sup>-5</sup>			1.2×10 <sup>-5</sup>	
Unknown pollen		未特定花粉	4	7	8	12	13	9	7			11	
Fern spore		シダ植物胞子											
Monolate type spore		単条溝胞子	13	55	20	6	9		7			20	
Trilate type spore		三条溝胞子		2	3		3						
Total Fern spore		シダ植物胞子総数	13	57	23	6	12	0	7			20	
Parasite eggs		寄生虫卵											
<i>Ascaris (lumbricoides)</i>		回虫卵				3							
Total		計	0	0	0	3	0	0	0			0	
Parasite eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度	-	-	-	2.4×10 <sup>-6</sup>	-	-	-			-	
Stone cell		石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)			(-)	
Digestion remains		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)			(-)	
Charcoal・woods fragments		微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)			(+)	
微細植物遺体 (Charcoal・woods fragments)		(×10 <sup>5</sup> )											
未分解遺体片			5.2	0.9	0.9	1.7	0.4	1.9	1.0			0.7	
分解遺体片			19.8	33.3	25.4	14.2	0.8	1.9	4.0			1.8	
炭化遺体片 (微粒炭)				0.5					1.0			0.7	



第91図 岡崎遺跡における花粉ダイアグラム

(3) III帯：試料5 (VIa層)

樹木花粉の占める割合が88%になり、ハンノキ属が増加し優占する。スギ、ヤナギ属が微増し、コナラ属コナラ亜属は減少する。

(4) IV帯：試料4～試料2 (Vc層)

樹木花粉が減少し42%から35%を占め、草本花粉は34%から48%を占めるようになる。草本花粉では、イネ科の産出率が高くなり、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科が伴われ、イネ属、ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属が産出する。試料4 (Vc2) では、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科の産出率が高く、その後減少する。樹木花粉では、ハンノキ属が半減するものの比較的産出率が高く、上位に向かい増加傾向を示す。スギ、クリ、コナラ属コナラ亜属が低率に産出する。

(5) V帯：試料1 (Vb層)

樹木花粉が45%、草本花粉が50%を占める。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科の産出率が高く、ヨモギ属が伴われる。樹木花粉では、スギを主にハンノキ属、コナラ属コナラ亜属がやや多く、ヤナギ属、カバノキ属、ブナ属などが低率に産出する。

4) 花粉分析から推定される植生と環境

花粉群集の特徴から、分帯に沿って植生と環境の復原を行う。

a I帯期：試料8 (VIc層)：古墳時代

ほとんどが樹木花粉で占められることから、クリ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属の樹木が周辺に分布していたと判断される。ハンノキ属は湿地林を形成するハンノキと考えられる。周辺の低い湿潤地にハンノキ湿地林が分布し、やや高く乾燥したところにクリ林が分布していた。ナラ林(コナラ属コナラ亜属)はその中間あたりに生育していたと考えられる。

b II帯期：試料7・試料6 (VIb層)：古墳時代

周辺の低いところにはハンノキ湿地林が分布するが、クリ林は衰退し、ナラ林が拡大する。湿潤化したことでクリ林が衰退したと考えられる。湿地林ではトネリコ属やヤナギ属が微増する。他にモチノキ属も増加し、地域的な森林植生として湿潤性のスギ林が増加傾向を示す。草本は林縁などにカヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ科が生育していたとみられる。

c III帯期：試料5 (VIa層)

ハンノキの湿地林が拡大し、ヤナギ属、トネリコ属を伴い、スギ林もやや拡大する。一方、ナラ林は縮小する。草本は増加して、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科、ゴキヅルが林縁に生育していたとみられる。

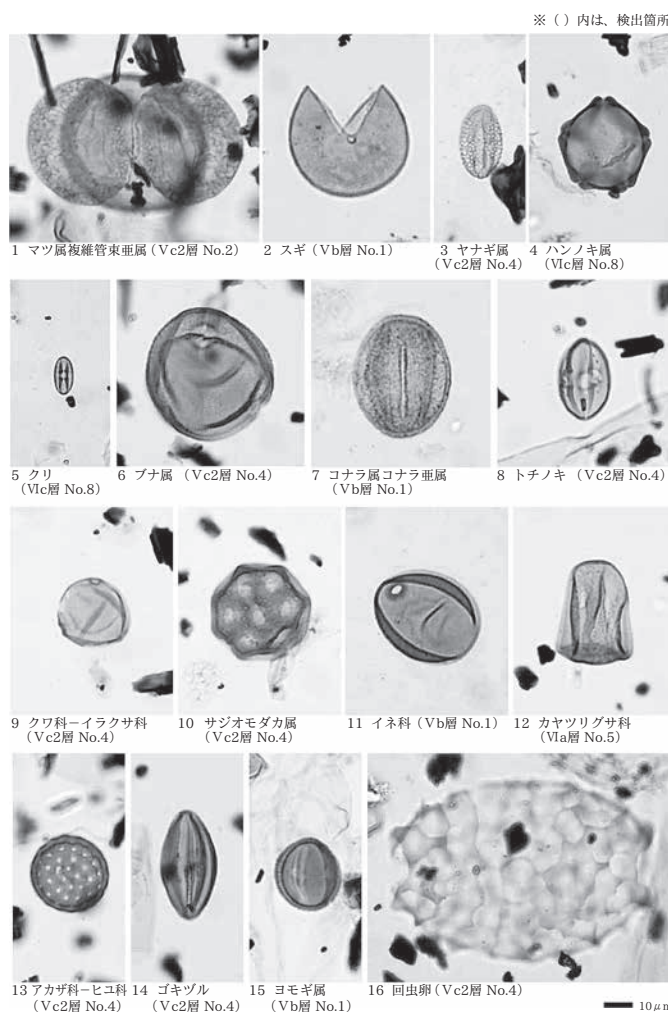
d IV帯期：試料4～試料2 (Vc層)：平安時代

草本花粉の占める割合が急激に高くなり、ハンノキ林までもが大きく縮小する。草本ではイネ属を伴うイネ科が増加し、水田雑草を含むカヤツリグサ科やサジオモダカ属、ミズアオイ属、ガマ属—ミクリ属が産出することから、調査地ないし周囲に水田が分布がするようになったと推定される。クワ科—イラクサ科は、草本のカナムグラ、カラムシなどの路傍や荒地に生育する草本が考えられ、ヨモギ属などとともに周囲に生育していた。ハンノキ湿地林の減少は開墾に伴うものと考えられる。

e V帯期：試料1 (Vb層)：平安時代以降  
樹木花粉の割合が増加し、スギ林が拡大するが、ハンノキ林は縮小する。水生植物のカヤツリグサ科、イネ科の増加から調査地はこれらの草本が生育する湿地ないし湿原の環境が分布し、やや湿潤化したと推定される。

### 5) ま と め

古墳時代 (I帯期、VIc層) は、周辺にはハンノキ湿地林、クリ林、ナラ林が分布するが、古墳時代 (II帯期、VIb層) はクリ林が減少しナラ林が増加する。VIa層の時期 (III帯期) にかけてナラ林が縮小し、ハンノキ湿地林が拡大し、スギ林もやや拡大する。森林の変遷は湿潤化に伴うものと考えられる。平安時代 (IV帯期、Vc層) になると、クワ科—イラクサ科とイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の草本が多くなり、ハンノキ湿地林が減少する。水田雑草と共にイネ属が産出することから、開墾され水田化したと考えられる。平安時代以降 (V帯期、Vb層) はカヤツリグサ科が増加し、より湿潤化したと推定された。



第92図 岡崎遺跡の花粉

## C 珪藻分析

### 1) 試 料

分析試料は、東工区東壁及び東工区中央ベルトから採取された試料1～4、6～8 (Vb層～VIc層) の7点である。下部のVIc層、VIb層は古墳時代、Vc2層、Vc1は平安時代、Vb層は平安時代以降にあたる。これらは、花粉分析に用いられたものと同一試料である。

### 2) 方 法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

1. 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
2. 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
3. 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗 (5～6回)
4. 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
5. マウントメディアによって封入し、プレパラート作製



## 6. 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ~ 1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

## 3) 結果

## a 分類群

産出した珪藻は、真-中塩性種(海-汽水生種) 2 分類群、中塩性種(汽水生種) 1 分類群、中-貧塩性種(汽-淡水生種) 1 分類群、貧塩性種(淡水生種) 130 分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端 2 個につき 1 個と数えた。分析結果を第 55 表に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第 93 図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe (1974) の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉 (1988) により、淡水生種は安藤 (1990) による。現生珪藻の CMB 仮説と呼ばれる分類体系も用いられるが、科や属によってすべてを再分類できているわけではなく、混乱を避けるため従来の分類を用いた。また、主要な分類群は顕微鏡写真を第 94 図に示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

[中-貧塩性種]

*Navicula peregrina*

[貧塩性種]

*Achnanthes hungarica*, *Achnanthes minutissima*, *Actinella brasiliensis*, *Cymbella silesiaca*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia minor*, *Eunotia paludosa-rhomboides*, *Eunotia praerupta*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema acuminatum*, *Gomphonema angustatum*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Meridion circulare* v. *constrictum*, *Navicula contenta*, *Navicula elginensis*, *Navicula laevisissima*, *Navicula mutica*, *Navicula pupula*, *Nitzschia nana*, *Nitzschia parvuloides*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia nodosa*, *Pinnularia schoenfelderi*, *Pinnularia viridis*, *Rhopalodia gibberula*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

## b 珪藻群集の特徴

珪藻構成と珪藻組成の変化から下位より 5 帯の珪藻分帯を設定し、分帯ごとに特徴を記載する。

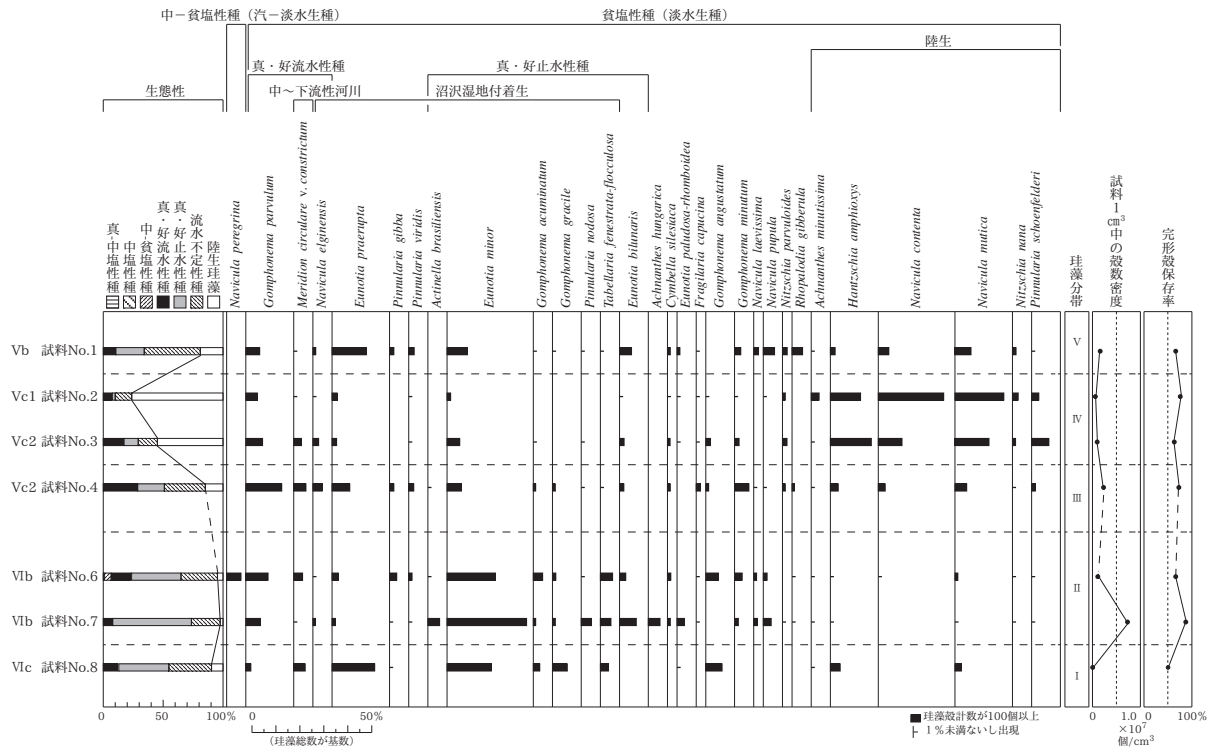
## (1) I 帯：試料 8 (VIc 層)

真・好止水性種が 42%、流水不定性種が 35%、真・好流水性種が 13%、陸生珪藻が 10% を占める。流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia praerupta*、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* の産出率が高く、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Gomphonema gracile*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、*Gomphonema acuminatum* が伴われる。他に好流水性種で中~下流水性河川種の *Meridion circulare* v. *constrictum*、流水不定性種の *Gomphonema angustatum*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が産出する。

## (2) II 帯：試料 7・試料 6 (VIb 層)

試料 7 (VIb 層) では、真・好止水性種が 66% を占めるようになる。好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* が増加し、*Actinella brasiliensis*、*Pinnularia nodosa*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa* が伴われ、好止水性種の *Eunotia bilunaris* が産出する。好流水性種の *Gomphonema parvulum*、流水不定性種の *Achnanthes hungarica*、*Eunotia paludosa-rhomboides*、*Navicula pupula* などが低率に産出する。試料 6 (VIb 層) では、真・好止水性種が 41%、流水不定性種が 30%、真・好流水性種が 17%、陸生珪藻が 5%、中-貧塩性種(汽-淡水生種)が 6% を占め、真-中塩性種(海-汽水生種)、中塩性種(汽水生種)がわずかに産出する。好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* が減少するものの優占し、*Gomphonema acuminatum*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa* を伴う。好流水性種の *Gomphonema parvulum*、中~下流水性河川種の *Meridion circulare* v. *constrictum*、流水不定性種の *Gomphonema angustatum*、*Gomphonema minutum* が低率に産出する。中-貧塩性種(汽-淡水生種)の *Navicula peregrina* の産出率がやや高い。

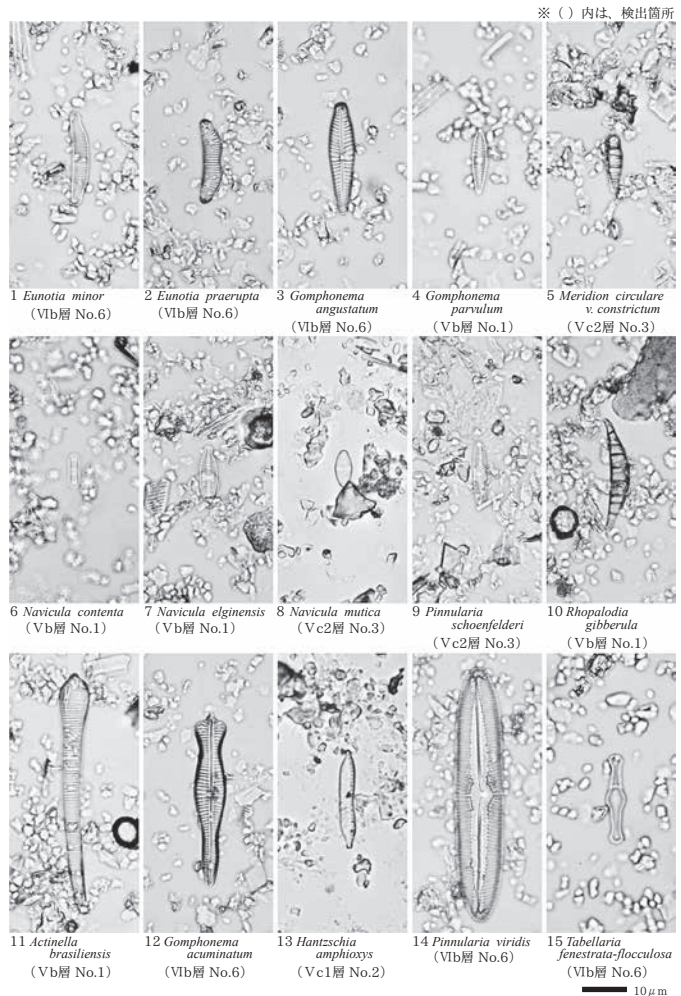




第 93 図 岡崎遺跡における主要珪藻ダイアグラム

(4) IV帯: 試料 3 (Vc2 層)・試料 2 (Vc1 層)  
 陸生珪藻の占める割合が高くなり、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Navicula mutica* の産出率が高い。好流水性種の *Gomphonema parvulum*、中～下流水性河川種の *Meridion circulare v. constrictum*、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、沼沢湿地付着生種の *Navicula elginensis*、*Eunotia praeurupta* が産出するが、試料 2 (Vc1 層) で減少する。

(5) V帯: 試料 1 (Vb 層)  
 流水不定性種が 47%、真・好止水性種が 24%、陸生珪藻が 19%、真・好流水性種が 10%、真-中塩性種 (海-汽水生種) がわずかに産出する。流水不定性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia praeurupta* の出現率がやや高く、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、好止水性種の *Eunotia bilunaris*、好流水性種の *Gomphonema parvulum*、流水不定性種の *Navicula pupula*、*Rhopalodia gibberula*、陸生珪藻の *Navicula mutica*、*Navicula contenta* などが多様に産出する。



第 94 図 岡崎遺跡の珪藻

#### 4) 珪藻分析から推定される堆積環境

珪藻分析の特徴から分帯に沿って堆積環境の復元を行う。

##### a I 帯期：VIc 層（古墳時代）

*Eunotia praerupta* や *Eunotia minor* を主とする流水不定性種ないし好止水性種の沼沢湿地付着生種の比率が高いことから、浅い止水域が推定される。

##### b II 帯期：VIb 層（古墳時代）

好止水性種で沼沢湿地付着生種が *Eunotia minor* が主に優占する。浅い水生植物が繁茂する沼沢の環境が示唆される。好流水性種も産出し、流水の影響もあったと考えられる。中-貧塩性種（汽-淡水生種）の *Navicula peregrina* の産出については、蒸散などにより塩分濃度が高くなったことで生育していたと思われる。

##### c III 帯期：Vc2 層（平安時代）

好流水性種がやや増加するが、流水不定性種、陸生珪藻が微増し多様に産出する。好止水性種の沼沢湿地付着生種が減少することから、止水域は縮小し、堆積地は流水の影響がやや強く水草の生育する浅い沼沢の環境となったと推定される。

##### d IV 帯期：Vc2 層・Vc1 層（平安時代）

*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Navicula mutica* の陸生珪藻が増加することから、湿地が拡大した。

##### e V 帯期：Vb 層（平安時代以降）

*Eunotia praerupta*、*Eunotia minor* の流水不定性種ないし好止水性種の沼沢湿地付着生種、好流水性種の *Gomphonema parvulum* がやや多くなる。水草の生育する淀みながら弱く流れる浅い水域となったと推定される。

#### 5) ま と め

各時期とも河川などの流水の影響を受ける環境で、下部の古墳時代（VIc 層、VIb 層）は水草の生育する浅い沼沢の環境であり、平安時代（Vc2 層）では流水の影響が強くなる。平安時代（Vc1 層）では湿地の環境が拡大し、平安時代以降（Vb 層）では、浅い沼沢の環境へと変遷したと推定された。

# 第Ⅵ章 総 括

## 第 1 節 道正遺跡・岡崎遺跡の調査成果

### A 道正遺跡・岡崎遺跡の上層遺構・遺物から見た遺跡の性格

#### 1) 遺構について

道正遺跡と岡崎遺跡は、東西に約 100m の近さで存在する。試掘調査によれば、その間は河川または潟湖の影響による土砂が堆積する低地とされている。両遺跡の立地する砂丘列は細かく見れば異なるものと思われるものの、亀田砂丘 I-2 の範疇に含まれる。非常に近くに存在し、上層は出土遺物の時期が全く同じで、遺跡の立地等から同一遺跡として捉えられる。したがって、ここでは同一遺跡として記述する。

道正遺跡では掘立柱建物 9 棟のほか、井戸 1 基、土坑 19 基、溝 12 条などを検出した。岡崎遺跡では土坑 4 基、溝 2 条、柵 1 列などを検出した。これらの遺構は伴出遺物から 9 世紀後半と推定され、短期間営まれた遺跡である。

〔坂井 1999〕によれば、新潟県内における古代集落の発掘調査が本格化するのには北陸・関越自動車道と上越新幹線の建設に対応した体制整備がなされた 1972 (昭和 47) 年ころである。同年、平安時代の集落である栄村半ノ木遺跡の発掘調査〔本間・関ほか 1973〕がなされた。以後、調査が増加し、合わせて調査規模も大規模化した。これに伴い〔川村 1989・坂井 1987a・春日 1995 など〕が古代集落の類型化や展開を論じた。〔坂井 1999〕はそれまでの研究成果を総括し、〔小野本 2019b〕は 2000 年以降に増加した越後平野の調査成果を整理し、集落構造の変遷を述べている。ここではこれらの研究成果等を引用し、道正遺跡・岡崎遺跡の遺構・遺物の諸特徴から遺跡の性格を考えてみたい。

#### a 掘立柱建物

道正遺跡の 9 棟の掘立柱建物は調査区北西部の 1C-9I・10I・9J・10J に 4 棟、調査区南西部の 2C-2I・1J・2J に 3 棟まとまって位置し、ほか 2 棟は調査区中央部の 2D-1A、2D-1C に分散する。遺構はほぼ同じ位置に存在するものもあるが、ピット同士の切り合いがなく新旧関係は不明である。しかし、遺構の検出状況から 3～4 回は同一地点での建て替えが行われたものと推定できる。

主軸方位、規模等が似通うことから、掘立柱建物は極めて規則性をもって作られたものと推定される。新潟県内における掘立柱建物の平面形式を集成・検討した〔川村 1989〕によれば、「8 世紀前葉の妙高市栗原遺跡から桁行 3 間・梁間 2 間の掘立柱建物が普遍的に検出されており、以後、増加傾向にある。」とされている。このように考えられるならば調査区外に延びる 4 棟についても、全容のわかる残り 5 棟が桁行 3 間・梁行 2 間であることから、桁行 3 間・梁行 2 間と思われる。調査区外に延びる 4 棟の桁行は、桁行柱筋の 1 間目を 3 間目に加え桁行推定値を求め、これに梁行を掛け床面積の推定値を求めた。これらの属性をまとめたものは第 56 表のとおりである。

第 56 表 道正遺跡掘立柱建物属性表

遺構名	構造	桁行：3間 (m)	梁行：2間 (m)	床面積(m <sup>2</sup> )	主軸方位	備考
SB330	総柱	7.26	4.75	34.67	N-29°-W	
SB366	側柱	7.35	4.48	29.81	N-36°-W	
SB367	総柱	5.84	3.16	18.93	N-51°-W	
SB482	総柱	6.50	5.00	30.41	N-52°-W	
SB483	総柱	7.37	4.47	32.94	N-37°-W	桁行、床面積は推定値
SB484	側柱	6.70	4.38	29.35	N-43°-W	桁行、床面積は推定値
SB485	側柱	6.80	4.12	28.02	N-43°-W	桁行、床面積は推定値
SB521	総柱	6.94	4.45	30.88	N-38°-W	床面積は推定値
SB558	総柱	4.80	4.02	19.24	N-38°-W	

・桁行の推定値は、桁行柱筋の1間目を3間目に加えたもので、床面積の推定値は桁行推定値と梁行を掛けたものである。

#### (1) 規 模

すべて桁行 3 間で長さ 4.80～7.37m の範囲に収まるが、6.50～7.37m に集中する。梁行は長さ 3.16～5.00m の範囲に収まるが、4.02～5.00m に集中する。床面積は 18.93～34.67m<sup>2</sup> の範囲に収まり、28.02～34.67m<sup>2</sup> に集中する。全体

的に見ると梁行2間型で床面積が小規模な建物が多いものの、古代の掘立柱建物を集成した〔山崎2019〕によれば、9世紀後半～10世紀初頭では梁行2間型と総柱型は小型が主体であると言われており、その傾向に一致する。

## (2) 主軸方位

すべて北西－南東方向を示し、N-29～51°-Wの範囲に収まり、N-36～43°-Wに集中する。北西方向に主軸を向けるのは周辺遺跡を含め一般的であり、9世紀末～10世紀初頭の江南区小丸山遺跡ではすべて、9世紀前半に成立し9世紀末に衰退した江南区駒首瀉遺跡も圧倒的に多くが北西－南東方向に主軸を向けている<sup>1)</sup>。この地域は越後平野の中心部であり、低平な氾濫原性湿地、瀉湖が広がっていたものと思われる。冬場の北西からの季節風が激しい地域である。これに対処するために北西－南東方向に主軸を向けたものと考えている。

## (3) 建物構造

9棟の掘立柱建物のうち、総柱建物6棟、側柱建物3棟である。総柱建物が総数の2/3を占め、極めて多いのがこの遺跡の特徴である。総柱建物には推定も含め床束柱が検出された建物が4棟あり、総柱建物は明らかに高床建物ということがわかる。

総柱建物はこれまで一般的に倉庫とされてきたが、道正遺跡の総柱建物の性格について考えてみたい。越後における古代の掘立柱建物を集成し、検討を加えた〔春日2009〕によれば、9世紀後半～10世紀には住居と推定される大型総柱建物が出現・定着するとしている。同じく〔山崎2019〕では、10世紀前葉以降、総柱建物が増加し居住用も出現するという。しかし、面積20～30m<sup>2</sup>の住居用の総柱建物が増加するのはⅧ期(10世紀後半以降)〔春日2009〕であることから道正遺跡の総柱建物が居住用でなく倉庫と推定できる。

一方、側柱建物の3棟の内1棟には間仕切の中柱を持つものがあるが、いずれも居住用と考えている。このように見ると同一地点での建て替えが3～4回と考えられることから、側柱建物(居住用)1棟に対し、総柱建物2棟の組み合わせが想定できる。

### b 井戸

道正遺跡で1基検出されている。掘立柱建物9棟の割に対し、井戸は非常に少ない。井戸は集落の共有とされたのであろうか。ただし、試掘調査結果や本発掘調査の結果から遺跡の立地する砂丘の周辺には河川または瀉湖が取り囲んでおり、水環境が悪いとは考えられない。

### c 土坑

道正遺跡で19基、岡崎遺跡で4基検出されている。このうち道正遺跡のSK284は径2.50～2.05m、深さ0.38mを測る大型土坑である。覆土1層から多くの遺物が出土しており、ごみ穴と推定される。近くの建物はいずれも総柱建物(倉庫)であり、側柱建物(居住用)のSB367に付随すると思われる。SB482の南隣のP261の直上で検出されたSK222では、炭化物が多く含まれる覆土から土器・被熱礫が重なるように出土している。破損が著しいため投棄されたものと判断したが、何らかの儀式を行った可能性もある。

### d 溝

道正遺跡で12条、岡崎遺跡で1条検出されている。道正遺跡の溝は形状がほぼ同じで、畑耕作に伴う畝間溝(畝間)と推定した。畝間溝は掘立柱建物と切り合いをもち、建物より古いものも新しいものもあるため、建物群が展開していた時期に畑もあったと考えられる。溝と集落の関係では「居宅地内型の建物隣接型」〔細井2014〕に分類される。9世紀後半以降の集落は上越市一ノ口遺跡や新潟市小丸山遺跡に代表されるように2～3棟の掘立柱建物と井戸、土坑、畝状小溝がセットになる単位がいくつか散在する〔坂井1986・1999、春日1993など〕。道正遺跡の溝はこの畝状小溝に相当すると思われる。しかし、道正遺跡や岡崎遺跡の立地は、新潟砂丘I-2の

1) 駒首瀉遺跡では北東方向に主軸を向けているものが数棟見られるが、これらの多くは桁行・梁行が2間で正方形に近い形状を示し、必ずしも主軸が明確でない。

先端部であり、試掘・確認調査からも周囲は河川や潟湖の広がる低地と推定されることから砂丘地での畝状小溝以外の水田等の耕作に適する土地はなかったものと思われる。

#### e 柵

道正遺跡で2列、岡崎遺跡で1列検出した。道正遺跡の柵は規模が非常に小さく、小規模な塀と予想されるものである。岡崎遺跡で検出されたSA51は調査区の砂丘北斜面の標高-0.5～0.1mのほぼ同じ高さに沿って縦断するものであり、東調査区で長さ18.45m、西調査区で8.25m検出された。調査のできなかった東調査区と西調査区の間も存在がほぼ予想されることから全長36.45mになり、さらに調査区外に延びることが予想された。ピットの大きさは長軸0.2～0.3mと小規模であるものの、砂丘北側の急斜面に構築されていることを考慮すると打込み杭（柱）と推定できる。このように考えられるならば、太さ10～20cmほどの杭が打ち込まれた延長では大規模な柵が作られていたものと思われる。柵は北に対してN-58°-Eになるように構築されているため、冬場の強烈な季節風に対して作られた可能性も考えられる<sup>1)</sup>。

#### f 遺物の出土分布

道正遺跡では掘立柱建物が存在する周辺から砂丘西側の斜面部にかけての1C-10H・10I・10J、2C-1H・1I・1J、2C-2Jで土錘、搬入礫（焼礫含む）が多く出土している。3か年の発掘調査で須恵器・土師器はコンテナ114箱（箱サイズ54×34×15cm、以下同じ）を数える。これらの須恵器・土師器は出土量が多いものの小破片が多く、復元率も低い傾向である。これに対し岡崎遺跡では砂丘北側の斜面から縁辺部周辺にかけて須恵器・土師器がまとまって出土していた。コンテナ36箱の出土であり、道正遺跡の約1/3と少ないにもかかわらず、出土状況を見る限り完形品に近いものが多く、復元率が高い傾向であった。このように両遺跡で出土状況は大きく異なる。

### 2) 遺物について

#### a 須恵器・土師器

「D 古代の土器・土製品」の項で詳述されるが、道正遺跡・岡崎遺跡で出土した須恵器はほとんど佐渡小泊窯産で占められ、また土師器も佐渡産の甕が多く出土している。小泊窯須恵器は9世紀前葉に成立し中葉以降、越後に大量に流入している〔坂井1989、春日1999ほか〕。小泊窯では佐渡国分寺瓦を生産しており、国衙との何らかの関係が想定され、佐渡から越後への須恵器の大量輸送には、両国の国衙などの権力の関与が想定するとされている。また越後平野の内水面の入口にあたる蒲原津は国衙領と推定され国司の関与が考えられている〔坂井1996〕。このように須恵器の生産と流通には佐渡と越後のネットワークが想定されている〔春日1991、坂井1996〕。

#### b 権状錘

岡崎遺跡から石製の権状錘が2点出土している。県内の権状錘の集成・検討を行った〔相田2012・高橋保2022〕の一覧表に追加したのが第57表である。岡崎遺跡の2点を加えると15遺跡・22例となる。越後平野の北端の村上市西部遺跡から南端の長岡市上条遺跡まで、実には上越市今池遺跡の2点を除く20点が越後平野からの出土である。

北陸地方の7世紀代～12世紀代までの権状錘を集成し変遷を検討した〔望月2003〕によれば、公的色彩を帯びる遺跡での出土が大半であること。また、古代前半期の権状錘の形態と古代後半期以降に普及する権状錘の形態の違いを明らかにし、9世紀以降の石製権状錘の増加・定着を指摘している<sup>2)</sup>。一方、新潟県内の権状錘を集成した〔相田2012〕によれば、10遺跡の内、7遺跡が越後平野に集中し、「古代に越後平野の集落が内水面を利用した交易で大きな役割を担っていたことがひとつの要因」としている。さらに類例を追加した〔高橋保

1) 新潟平野と気候や地形が似ていて冬の季節風が強い山形県庄内平野では、遺跡の北-北西側に柵を構築する例があるという（坂井秀弥氏ご教示）。

2) 望月氏は分類において指摘しているが、基本形状はあるものの形状にばらつきがあり、粗雑な作りの権状錘である。

第57表 新潟県内出土の権状錘

No.	遺跡名	市町村	素材	材質	重量(g)	出土地点	時期	出典
1	西部遺跡	村上市	石製	頁岩	87.1	SD2008	10C第一四半 VII期	鈴木ほか2010
2			石製	流紋岩	43.9	包含層	10C第一四半 VII期	
3	山木戸遺跡	新潟市	石製		49.8	包含層	9C中～10C初	諫山2004
4			石製		27.8	包含層	9C中～10C初	
5	駒首湯遺跡	新潟市	石製	凝灰岩	37.2	包含層	9C IV～V期	渡邊ほか2009
6	上浦A遺跡	新潟市	石製	泥岩	25.0	包含層	8・9C II3～VI2主体	川上1997
7	的場遺跡	新潟市	石製	頁岩	83.3	包含層	8C前～10C前(主体9C)	小池ほか1993
8			石製	砂岩	33.6	包含層	8C前～10C前(主体9C)	
9			石製	凝灰岩	32.3	包含層	8C前～10C前(主体9C)	
10	林付遺跡	新潟市	石製	凝灰岩	45.5	包含層	9C後 VI期	相田2012
11	三角田遺跡	燕市	石製	凝灰岩	52.0	SX2	8C前	松島2001
12	馬越遺跡	加茂市	石製	粘板岩	25.55	包含層	8C後 IV1～3期	伊藤2005
13	今池遺跡	上越市	石製	安山岩		包含層	8～10C	坂井ほか1984
14			石製	泥岩		B地区SE311	8～10C	
15	行屋崎遺跡	田上町	石製	凝灰岩	62.0	包含層	8C末～9C中	田畑ほか2015
16	上条遺跡	長岡市	石製	砂岩		包含層	9C後～10C前	山賀ほか2016
17	稲葉遺跡	燕市	石製	凝灰岩	67.7	包含層	8C中～9C末	松島ほか2022
18			土製	須恵製(20.8)	SK26	8C中～9C末		
19	草水町2丁目窯跡	新潟市	土製	須恵製	45.5	包含層	9C前	2023年11月現在新潟市文化財センター展示中
20	船戸桜田遺跡	胎内市	土製	土師質		包含層	8～10C初	水澤ほか2002
21	岡崎遺跡	新潟市	石製	凝灰岩	42.7	包含層	9C後	本書
22			石製	凝灰岩	36.2	包含層	9C後	

(相田2012・高橋保2022をもとに作成)

2022)は、新潟県内では石製が大半を占め、底面は四角形で側面は一対面が四角・一対面が三角に近い形状を基本形とするがばらつきが多い。石製は9世紀以降が多いと指摘している。岡崎遺跡の権状錘は、道正遺跡と共に遺跡を性格づける遺物の一つである。

### c 鉈 尾

岡崎遺跡では銚帯(金)具の一部である粘板岩製の鉈尾が出土している。銚帯金具については、[阿部1976]によれば腰帯は官給品であり、その大きさは位階と結びついて厳密に決められていたとする。一方、[田中1990・1991]によれば腰帯は国家の支給でなく自備であり、腰帯具の寸法は位階を反映していないとした。さらに銚帯金具の垂孔の形式変化が、大孔→小孔→細長孔→無孔へと進むとし、銚帯金具の変遷を明らかにした。それによれば奈良時代後半には石製銚帯具が出現するが、平安時代前半には銅製品が姿を消し、石製銚帯(金)具に全面的に移行したとし、また、鉈尾が長大化の方向をとるとした。

いずれにしても両者は腰帯が身分を表象するものとし、腰帯の使用規定のない「無位にも及ばない非有位層」、烏油・雑石腰帯の「直接国家の諸機能を運営し、地方にあつては有力首長層である六位以下無位までの狭義の官人層」、金銀装腰帯、白玉・玳瑁腰帯の「六位以下の官人層を管理・監督し、外交、国家的事業を掌握する各機関の長となる一位以下五位以上の通貴層」、腰帯の規定する必要のない「天皇」の4つの身分を表象したとする共通認識は同じである。

このように考えると岡崎遺跡の鉈尾は官銜との関連に関わらず、在地の有力者の存在を意味するものと思われる。

### d 土 錘

道正遺跡では細形管状土錘215点、太形管状土錘3点、岡崎遺跡では細形土錘113点、太形管状土錘1点を数える。太形管状土錘が少なく、細形管状土錘が極めて多く出土している。細形管状土錘は近年まで潟湖で行われていた網漁のものと同変らないという<sup>1)</sup>。細形管状土錘が多いのは、波穏やかな潟湖での網漁に適していたため、太形管状土錘を多く必要としなかったためであると考えられる。

いずれにしても砂丘の先端部で耕作地が少なかった中で、唯一遺物から網漁による生業が推定できる。

1) 発掘調査中に遠藤恭雄氏に御教示をいただいた。



### 3) 遺跡の性格

これまで発掘調査で検出した遺構・遺物について検討を加えてきた。それらの結果をまとめると道正遺跡・岡崎遺跡の上層（平安時代）の性格は、物流・交易の拠点ないしは中継地と推定できる。その理由はこれまで検討したことと重複する部分も多いが、つぎの事柄を記述しまとめたい。

- ① 越後平野のほぼ中央部に位置し、亀田砂丘の先端部に立地する。〔鴨井 2018〕によれば古墳時代以降、新砂丘皿が発達し、出口がふさがれた信濃川と阿賀野川の河口がそれぞれ東西に移動し、合流して日本海にそそぐようになるという。その結果、水はけが悪くなり、内陸部の水域が広がったという。道正遺跡・岡崎遺跡のすぐ西方に信濃川が迫り、周囲の潟湖も広がったものと予想される。したがって、遺跡周辺には穏やかな河川や潟湖が広がり、物資の安定的な大量輸送が可能となり、交通の要衝になったものと思われる。内水面を利用することにより、北は岩船方面まで、南は魚沼方面まで内水面交通が可能であり、また背後には開発のはじまりつつある広大な山野が控えていた。
- ② 9世紀前半には新潟平野の沖積地内の自然堤防上の微高地に新たな集落が成立し、9世紀後半には新規の集落の成立がさらに活発になり、平野の自然堤防上の微高地や山地・丘陵などに開発が進んだといわれている〔坂井 1996・1999〕。したがって、越後平野やその周辺の山野での交流・交易が盛んになるが、それを可能としたのが越後平野の縦横無尽の水路、越後平野から内陸奥深くの水路〔坂井 1996〕であった。
- ③ 道正遺跡では9棟の掘立柱建物が検出され、いずれも規模や主軸方位に規制性が見られる建物群である。このうち6棟は総柱建物（倉庫）で、倉庫群の存在が認められ、一般集落とは考えられない。
- ④ 畝間溝の存在から畑作の存在が認められるが、道正遺跡・岡崎遺跡の周辺は河川や潟湖の広がる低地と推定されることから水田等の耕作に適する土地はなかったものと思われる。
- ⑤ 岡崎遺跡では北側（日本海側）の砂丘急斜面に調査区を縦断する大規模な柵が検出された。
- ⑥ 岡崎遺跡では権状錘が2点出土しているが、権状錘は公的施設からの出土が大半〔望月 2003〕であり、また古代の越後平野の集落が内水面を利用した交易で大きな役割を果たしていたことが越後平野で多く出土する要因〔相田 2012〕とされている。
- ⑦ 岡崎遺跡では鈔帯金具の一部である石製鉈尾が出土しているが、六位以下から無位の地方官人の存在を示唆するものであり、何らかの官衙との関連に関わらず有力者の存在が推定される。
- ⑧ 道正遺跡・岡崎遺跡出土の須恵器はほぼすべてが佐渡小泊産で占められ、土師器の佐渡型甕が多数出土し、佐渡との繋がりが強く感じられる。

佐渡では9世紀前葉に小泊窯が成立し、その製品が中葉以降大量に流入したとされ、越後国と佐渡国との国衙の介在が指摘〔坂井 1989〕されている。また〔坂井 1996〕は積み荷を運搬した舟が佐渡から日本海を横断し、信濃川の河口の蒲原津を通過し、内水面に入ると水路の分岐点や陸上交通路の交差点で舟の交替、積み荷の仕分け・陸揚げを目的とした港が、河川や潟湖の要所に存在したと推測されるとした。信濃川河口の蒲原津から10km未滿の道正遺跡・岡崎遺跡は、このような役割を担った遺跡と考えられる。

## B 道正遺跡の中層遺構・遺物から見た遺跡の性格

ここでは中層で検出した遺構と後述する「E 道正遺跡の古墳時代土器の位置付け」で述べている土器の成果を参考に古墳時代の遺跡の性格について考えてみたい。

### 1) 遺跡の存続した期間

出土土器は様相1・様相1（新）・様相2・様相3・様相4に区分し、『新潟県の考古学Ⅲ』の古墳時代前期の土器編年〔滝沢 2019b〕の3～7段階、中期の土器編年〔小野本 2019a〕の1段階に比定した。このうち主体となる土器は様相1・様相1（新）・様相2である。したがって、弥生時代終末期（古墳時代早期）から古墳時代中期初頭の範囲に収まるものの、主体となる土器からはほぼ古墳時代早～前期（前期の土器編年〔滝沢 2019b〕の3～

5段階)が主な存続期間となる。

越後平野を中心とした阿賀北から柏崎平野では早期から前期にかけて遺跡数が爆発的に増加し、いずれも沖積地や扇状地などの低地に多く、本格的な低地開発〔滝沢 2019c〕と考えられている。道正遺跡の成立と立地はほぼこれに一致しており、その存続は3期程度で、短期でもなく、長期でもない継続である。

## 2) 遺構について

中層では竪穴建物2棟、土坑38基、溝13条、柱穴・ピット59基、その他の遺構3基を検出した。なお、岡崎遺跡では遺構は検出されず、遺物もコンテナ1箱と非常に少なく、道正遺跡との関係が見えないことから別遺跡として記述する。

### a 竪穴建物

砂丘頂上部の平坦地にSI461があり、そこから南東約6m先にSI266が位置する。竪穴建物はこの2棟のみであるが、図版59の土器出土分布図から類推すれば、調査対象区外の南側や南西側には竪穴建物等が数多く存在したと思われる。北東-南西方向は砂丘の延びる方向であり、南西方向に向かって古墳時代の集落が広がっていたものと推定でき、集落の最も北東に位置する竪穴建物が検出されたものと思われる。SI461は長軸9.36m、短軸8.54m、壁溝を除いた床面積61.33m<sup>2</sup>を測る。SI266は長軸9.04m、短軸(現存値)5.40m、壁溝を除いた床面積(現存値)23.77m<sup>2</sup>を測るものの、調査範囲が約1/2と推定されることから短軸は約10m、壁溝を除いた床面積も約50m<sup>2</sup>を測るものと思われる。古墳時代の建物を集成した〔滝沢 2019a〕によれば大型の竪穴建物の部類に入る。これらの竪穴建物は伴出土器からSI266が古墳時代土器編年の早~前期の3~4段階〔滝沢 2019b〕、SI461が同じく古墳時代土器編年の前期の5段階に比定され、若干の時期差をもって単独で存在していたものと思われる。

### b 土坑

38基の土坑はSI266とSI461の間に多く分布するが、竪穴建物が時期差をもって単独に存在したことを考えると、建物の南寄りの西-南-東に沿って構築されたものと推定され、北側には存在していない。平面円形、楕円形を主体に規模は1m前後から2m未満のサイズが多い。土坑に伴う遺物は土器以外に特徴的な遺物は皆無であり、土坑の性格は明確でない。時期的には伴出土器からSK430が古墳時代土器編年の中期1段階〔小野本 2019a〕で中期初頭に位置付けられ、中層遺構では最も新しい遺構となる。またSK378は古墳時代前期の5段階に位置付けられ、ほかは土器の主体となる古墳時代早~前期(3~5段階)に所属するであろう。

### c 溝

事実記載でも述べたが溝13条のうち、5条はSI266・461に伴う周溝、壁溝、小溝であり、個別遺構としての溝は8条である。比較的大きな溝としてはSD234・248・543がある。SD234とSD248は覆土と周囲の土の識別が難しく、全容は明らかにできなかったが、遺構のある砂丘頂上部と東側の湿地部の間にある。SD234・248より東側には遺構が全く見られず、集落と外を区画する溝の可能性が高い。規模こそ違うものの新潟市四十石遺跡でも集落と湿地部の間に同様な溝が検出されている〔渡邊ほか 2012〕。なお、SD543は平面形から建物に伴う周溝の可能性もあるが、調査区外に延びるため明らかにできなかった。

### d その他の遺構

SX233は砂丘西の緩斜面に存在する土器集中分布範囲である。長さ4.50m、最大幅1.85mの範囲で、砂丘の緩斜面に平行していた。「西方へ下がる砂丘の落ち際の立地や、2艘の準構造船などが線刻され外面にカゴメの痕跡を残す壺、口縁部に穿孔のある壺形のミニチュア土器などの特殊な遺物の存在から水辺の祭祀の可能性」が指摘されている(第VI章第1節E参照)。時期は早~前期(3・4段階)とされている。

### 3) 遺跡の性格

すでに詳述されているが道正遺跡では2艘の準構造船が描かれた土器が出土しており、竪板型準構造船に分類〔柴田 2021a〕される。準構造船は弥生時代にその発生が求められ、日本海に面した鳥取県青谷上寺地遺跡（弥生時代中期）や兵庫県袴狭遺跡（弥生時代後期～古墳時代前期）で出土した板に複数の船が描かれている〔大阪府立弥生文化博物館 2013〕。また石川県西念・南新保遺跡の出土土器には荒海を越える1艘の船が描かれ、石川県八日市地方遺跡出土の琴の天板には船に6本の櫂が描かれている〔久田 2006〕。このように日本海側では本遺跡出土の船を含め、数例の船の絵が見られる。

〔柴田 2021a〕によれば準構造船の航行能力により、船団での長距離海上航行は困難であるとし、鳥取県青谷上寺地遺跡と兵庫県袴狭遺跡で出土した船団の絵は、ラグーン（潟湖）等で行われた一種のデモンストレーションを板絵として残したと推定している。さらに鳥取県青谷上寺地遺跡や兵庫県袴狭遺跡を日本海沿岸のラグーン（潟湖）に形成された港湾性集落とし、交易の目的地や寄港地として、互酬交換連鎖の場、あるいは中心地市場の場を形成し、活発な経済活動を行ったとした。

このように考えられるならば、道正遺跡の2艘の準構造船は周辺のラグーン（潟湖）で行われたデモンストレーションの強烈な印象を土器に描いたものと推定される。そして遺跡は砂丘地の先端に立地し、ラグーン（潟湖）に営まれた港湾性集落と思われ、交易や交流など活発な経済活動が行われたものと推定される。その結果として大型竪穴建物の存在、土器のまとめで詳述されている多様で多くの外来系土器の出土等に反映したものとみられる。

## C 道正遺跡の下層遺構・遺物から見た遺跡の性格

### 1) 遺構について

下層遺構は土器埋設遺構5基、土坑10基を検出したに過ぎない。しかも下層の遺構は覆土と周辺のVIIa層とまったく識別できず、VIIa層上部で検出した遺構は遺物の存在そのもので遺構と判断できる土器埋設遺構だけであった。土器埋設遺構のうち、大型粗製土器を正位に据えたA類のみがVIIa層上部で検出され、小型の精製土器が逆位で出土したB類は、VIIa層を掘削中に完形土器が見つかったというものであり、土器埋設遺構が疑問があり、土坑等に伴った可能性が高い。ただし、土坑の掘方は検出できなかった。

土坑と認定した10基は砂丘西側の緩斜面、砂丘中央部の平坦地、砂丘東側の緩斜面に散漫に分布していた。ほぼすべてVIIa層上部で検出できず、本来の砂丘砂のVIIb～VIII層まで削平して検出したものである。遺構の覆土はVIIb～VIII層に比べやや黒色の砂が認識できる程度のものであり、不明確な掘方を検出し土坑としたものである。遺構覆土の黒色砂が周囲のVIIa・VIIb・VIII層と同化した結果、遺構が見えにくくなった（見えなくなった）ものと思われる。

### 2) 遺物について

遺物出土状況を見ると縄文土器・石器類・搬入礫とも砂丘西側の緩斜面～斜面、砂丘中央部の平坦地に集中する傾向が見られ、特に多く出土した砂丘西側の緩斜面～斜面は廃棄域と推定される。

#### a 縄文土器について

道正遺跡で出土した縄文土器はコンテナで88箱（箱サイズ54×34×15cm）、重さにして213kgである。膨大な量とはいえなくても多量の縄文土器が出土している。しかし、「第VI章第1節F 道正遺跡から出土した縄文晩期中葉土器の編年的位置づけ」で詳述されているが、その主体となる時期は大洞C2式中段階から新段階に併行する短期間であることを考えると出土量は逆に極めて多い<sup>1)</sup>といえる。

1) 本遺跡よりやや古い大洞C2前半期の集落である大沢谷内遺跡では、7684.4m<sup>2</sup>の発掘調査で101.5kgの縄文土器の出土であり〔伊比 2012〕、本遺跡の縄文土器の出土量は約2倍である。

第58表 道正遺跡縄文時代晩期の石器・石器類出土数

器種名	石器																	石器小計	石製品				合計	
	石 鎌	石 鎌 未 成 品	石 錐	石 錐 未 成 品	削 器	の 両 極 あ る 剥 片 痕	磨 製 石 斧	未 磨 製 石 斧	石 錘	多 面 体 敲 石	磨 石 類	砥 石	台 石 類	剥 片 類	石 核	鏡 面 状 の 光 沢 を 有 す る 石 器	軽 石 製 品		石 棒 類	石 冠	独 鈷 石	玉 ( 縄 文 時 代 ) 類		石 製 品 小 計
出土数(点)	47	16	11	1	23	67	15	5	3	4	113	30	64	614	42	4	35?	1059	11	1	1	6	19	1113
比率①(%)	4.2	1.4	1.0	0.1	2.1	6.0	1.4	0.5	0.3	0.4	10.2	2.7	5.8	55.2	3.8	0.4	3.1	98.3	1.0	0.1	0.1	0.5	1.7	100.0
比率②(%)	10.3	3.5	2.4	0.2	5.0	14.7	3.3	1.1	0.7	0.9	24.7	6.6	14.0	—	—	0.9	7.7	96.0	2.4	0.2	0.2	1.3	4.1	100.1

※ 比率①は尖頭器1点、打製石斧1点、砥石13点、玉作資料1点、管玉2点を除いた場合の比率、比率②はさらに剥片類及び石核を除いた場合の比率である。

土器の特徴として三叉状沈線文が巡る鉢や三叉状の入組文を施す壺は下越地方の当該期の遺跡に多く見られ、類例は福島県郡山市一人子遺跡の出土土器に多く見られることから南東北系が主体となる下越地方の様相に当てはまるとしている。

b 石器・石製品について

道正遺跡では縄文時代の石器・石製品がまとまって出土している。伴出した土器の主体となる時期が晩期中葉の大洞 C2 式中段階から新段階であることからこれらの石器・石製品も同時期と考えられる。一方、岡崎遺跡では該期の時期の土器が見られないことから道正遺跡との関係は極めて希薄と考えられる。

(1) 石器類組成

石器・石製品としたものは1,131点である。このうち尖頭器1点、打製石斧1点は晩期より古くなるものと思われ、砥石は直方体状の砥石11点、玉作用の砥石2点、玉作用の石核1点、古墳時代の管玉2点は晩期より新しくなるものと予想されることから、合わせて18点を除いた。なお軽石製品は縄文時代前期末葉～近世まで使用された可能性があるため〔立木2014〕、時期の特定はできずすべて出土数に入れた。

一部明確でない時期のものも存在するが、晩期に所属すると思われる石器・石製品の出土数は、第58表のように1,113点とした。石器類の組成比率①は出土数のうち、各器種の比率を記入した。さらに石器類組成から遺跡の性格をより明らかにするために、直接生業に結びつかない剥片類及び石核を除いた各器種の比率を比率②とした。

なお石器類の組成を検討するにあたり、県内の石器組成を用途別、地域別に明らかにした〔鈴木1999〕の方法に準拠した。具体的に用途別では基本的に第59表のように各器種を区分し、地域別では越後平野と佐渡を中心としたブロック1地域を念頭に置いた。

第59表 石器の用途別の区分

用途別	石器			
	石鎌	尖頭器	石錐	
狩猟・漁労具	石鎌	尖頭器	石錐	
採取・加工具	石錐	打製石斧	磨製石斧	篋状石器
調理具	磨石類	石皿	石匙	

※〔鈴木1999〕を一部改変。

石器類の器種組成比率②を見ると調理具に分けられる磨石類、台石類が合わせて38.7%と最も高く、次いで狩猟・漁労具の石鎌、石錐が合わせて11.0%、採取・加工具に分けられる石錐・磨製石斧が合わせて5.7%となる。

ブロック1地域では、前期末ないし中期中頭以降、石鎌を中心とする狩猟・漁労具>調理具>採取・加工具型を一般的な形とし、その後、狩猟具優位は晩期まで継続する〔鈴木1999〕としている。道正遺跡は石鎌が多いものの、周囲が潟湖や河川などの低湿地に囲まれていると予想される割には漁労具の石錐が極めて少ない。また磨石類が多いものの、さらに台石類が多いためにブロック1地域の傾向といくらか異なってくる。台石類としたものは、従来、石皿及び台石と呼称していたものをまとめたものであり、整理担当者の選別に大きく左右される器種である。この辺が石器類の組成に影響を与えていると考えられる。いずれにしても石鎌と磨石類が多いことはブロック1地域と共通する傾向である。

次に晩期に営まれた周辺遺跡との比較をしてみたい。第60表は周辺の遺跡の石器類組成及び組成比率である。比較した遺跡はいずれも越後平野またその周辺の遺跡である。

全体的に見ると調理具>狩猟・漁労具>採取・加工具型は道正遺跡・大沢谷内遺跡・館ノ内遺跡の3遺跡、狩猟・漁労具>調理具>採取・加工具型は野地遺跡・青田遺跡・上野原遺跡の3遺跡、狩猟・漁労具>採取・加工具>調理具型は御井戸A遺跡・村尻遺跡、調理具>採取・加工具>狩猟・漁労具型は鳥屋遺跡、採取・加工具>

第 60 表 道正遺跡及び周辺遺跡における縄文時代晩期の石器類の組成

遺跡名(所在地)	時期	立地	石器								石器小計	石製品				合計		
			狩猟・漁労具		採取・加工具			調理具				非実用具						
			石	石	石	打製石斧	磨製石斧	篋状石器	磨石・敲石類	台石・石皿類		石	石	独	玉			
鎌	錘	錐							棒類	冠	鈷石	類						
道正(新潟市)	中葉中段階	砂丘(沖積地)	47	3	11		15			113	63		252	11	1	1	5	270
用途別比率(%)			18.5		9.6			65.2			93.3	6.7				100.0		
大沢谷内・1～4区(新潟市)	中葉古段階	沖積地	31		10		8			127	68		244	5				249
用途別比率(%)			12.5		7.2			78.3			98.0	2.0				100.0		
御井戸A(新潟市)	前葉～後葉	台地・沖積地	105		15		20			24	4	2	170	2	1		1	174
用途別比率(%)			60.0		20.1			17.0			97.7	2.3				100.0		
野地(胎内市)	前葉	沖積地	86		15		5	1		63	5	7	182	2		1		185
用途別比率(%)			46.0		11.4			40.5			97.9	1.6				99.9		
青田(新発田市)	後葉	沖積地	549		264	20	44	3		345	34	3	1262	3	2	4	18	1289
用途別比率(%)			42.6		25.7			29.6			97.9	2.1				100.0		
村尻(新発田市)	前葉～後葉	段丘	700		180	20	280	3		342	8	85	1618	114	4	1	7	1744
用途別比率(%)			40.1		27.7			24.9			92.7	7.2				99.9		
館ノ内(新発田市)	中葉～後葉	段丘	86	1	9	1	39			120	45	6	307	4	2	1	1	315
用途別比率(%)			27.6		15.6			54.3			97.5	2.5				100.0		
鳥屋(新潟市)	後葉	砂丘(沖積地)	13		11		15	1		65	3	1	109	1	4		1	115
用途別比率(%)			11.3		23.5			60.0			94.8	5.2				100.0		
六野瀬(阿賀野市)	後葉	段丘	84		95		18			49	6	8	260					260
用途別比率(%)			32.3		43.5			24.2			100.0					100.0		
上野原遺跡	中葉新段階	台地	131		1	2	18			23	1		176	3	5	15		199
用途別比率(%)			60.8		10.6			12.1			88.4	11.6				100.0		

※〔前山2010〕、〔伊比2012b〕を改変・加筆。

狩猟・漁労具>調理具型は六野瀬遺跡となる。調理具ないし狩猟・漁労具の多い遺跡が多く見られる。

用途別にみると狩猟・漁労具では石鎌はいずれの遺跡でも多いものの、本遺跡で3点出土する石錘がほかの遺跡ではほぼ皆無であり、狩猟具に偏った傾向が見られる。採取・加工具では石錐が一定量の出土がみられる遺跡から青田遺跡・村尻遺跡・六野瀬遺跡のように多数出土する遺跡が見られる。磨製石斧も一定量の出土がみられる遺跡から村尻遺跡のように多数出土する遺跡が見られる。村尻遺跡は磨製石斧の大規模生産遺跡〔石川・田中1982〕であり、本遺跡を含め館ノ内遺跡・鳥屋遺跡・青田遺跡・野地遺跡などでは規模の大小はあるものの磨製石斧を製作しており、新潟平野から北の下越地方の遺跡は他地域に比べ磨製石斧は多く出土している。調理具では磨石・敲石が多く出土しており、台石・石皿類も一定量の出土が見られる。

非実用的な石製品は後期までと異なり晩期に多く出土することから、各遺跡で小数～一定量の出土が認められるが、村尻遺跡・青田遺跡・上野原遺跡では特に多く見られ、拠点的な遺跡では石製品が多く認められる〔伊比2012〕と指摘されている。道正遺跡の石棒類は破片資料のため点数が不明確であるものの、これらの遺跡に続く出土量である。

石器類の出土数からみると本遺跡と大沢谷内遺跡・館ノ内遺跡・六野瀬遺跡が250～350点程度の出土であり、調査地点や調査面積にもよるが比較的同じような規模の遺跡と思われる。中でも大沢谷内遺跡とは距離的に近く、時期や存続期間の近似する遺跡で、石器類の出土数や器種構成がほぼ同じである。

(2) 石器類と石材流通

砂丘の先端部に位置する道正遺跡では、遺跡で採集できる石材は軽石程度であり、多くの石器・石製品及び石材は、他地域からの搬入である。第61表は各器種の石材を表にしたものである。近年、早出川水系、阿賀野川水系、加治川水系及び、五頭山地、笹神丘陵の石材調査がされており、これらの成果〔村上・佐藤2023〕をもとに記述する。

これによれば剥片石器に多く使用されているメノウ(玉髓)、頁岩、珪質頁岩、鉄石英(赤・黄)、流紋岩は早出川水系、阿賀野川水系、加治川水系及び、五頭山地、笹神丘陵のいずれでも求められることから、これらの地域で採集し、本遺跡に搬入したものと推定される。一方、比較的遠隔地からの搬入石材として半透明頁岩があげられる。新潟県地質図によれば七谷層は暗灰色泥岩・硬質頁岩で構成され、新発田-小出構造線の東側に分布す

第61表 道正遺跡石器類石材表

種別・器種名 石材名	剥片石器ほか							礫核石器		礫石器					石製品ほか					合計							
	石 鎌	石 鎌 未 成 品	尖 頭 器	石 錐 未 成 品	削 器	両 極 剥 離 痕	剥 片 類	石 核	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	未 磨 製 石 斧	石 錘	多 面 体 敲 き 石	磨 石 類	砥 石	台 石 類	鏡 面 状 の 光 沢 を 有 す る 石 器	軽 石 製 品	玉 作 資 料		石 棒 類	石 冠 未 成 品	独 鈎 状 石 器	玉 ( 縄 文 時 代)	玉 ( 古 墳 時 代)		
堆積岩系																											
泥岩																1											1
砂岩												1		3	8	5											17
礫岩															1												1
頁岩	2	2	1	1	1	2	14	41	11	1			1	1												78	
珪質頁岩	8	1		4		6	6	30																		55	
半透明頁岩	15	3		1		3	11	44	3																	80	
硬砂岩							1																			1	
凝灰岩				1		1	1	8	1				1	20	1											34	
緑色凝灰岩	1					1							1						1						2	6	
軽石																		35								35	
鉄石英(赤)	2					1	2	12	6																	23	
鉄石英(黄)	4	1					2	30	2			1														40	
メノウ(玉髓)	9	8		2		3	21	77	8																	128	
チャート							1		6			1														8	
火成岩系																											
黒曜石	2																									2	
安山岩														23		11	1					1				36	
流紋岩	4	1		2		5	5	28	5				14		2											66	
デイサイト										1		1	17		11	1										31	
輝緑岩							1						13	5	2	8	3	2								34	
花崗岩						1								15	8	22										46	
花崗閃緑岩														12		3										15	
花崗斑岩														5												5	
閃緑岩														8		3										11	
石英閃緑岩											1		3	1	4	1										10	
変成岩系																											
粘板岩							2																			2	
灰色粘板岩																					1					1	
黒色粘板岩																				9						9	
砂質粘板岩																				1						1	
ホルンフェルス													2			1						1				4	
結晶片岩																										1	
ヒスイ																								5		5	
滑石																								1		1	
合計	47	16	1	11	1	23	67	270	42	1	15	5	3	4	113	43	64	4	35	1	11	1	1	6	2	787	

る〔新潟県地質図改訂委員会 2000〕。半透明頁岩は現在のところ関川村下関の荒川左岸の獅子舞岩で唯一確認されている。獅子舞岩は七谷層に相当する層として捉えられている下関層の露頭であり、主体の頁岩層中にノジュール(団塊)として含まれ〔秦 2001〕、獅子舞岩近くの堂ノ前遺跡(後期後葉~晩期末葉)では小型剥片石器に大量に使用されている〔関 2004〕。新潟県北部地域の石器石材を集成・検討した〔阿部 1997〕によれば、半透明頁岩は新発田市扉山遺跡(早・前期)、小戸 A 遺跡(早・前期)から使用されているが、後期後葉からは関川村堂ノ前遺跡、新発田市中野遺跡、同市東城遺跡などで多く用いられはじめ、それまで使用された石材に依存しなくなる〔阿部 1997〕という。このように半透明頁岩は後期後葉以降の流通の増加に伴い、晩期の本遺跡にもたらされたものと推定される。なお、小型剥片石器によく使用される黒曜石は石鎌の 2 点のみである。肉眼観察ではあるが、新津エリア・金津産と推定<sup>1)</sup>される。

礫石器によく使われている安山岩、デイサイト、花崗岩、花崗閃緑岩、閃緑岩、石英閃緑岩、凝灰岩、砂岩等は五頭山地や飯豊山地、越後山脈を構成する地質に見られる〔新潟県地質図改訂委員会 2000、村上・佐藤 2023〕。したがって、阿賀野川水系や早出川水系で容易に採取されたものと推定できる。

礫核石器の輝緑岩系の石材は、加治川流域で転石を大量に採集できるとされており、流域の遺跡では中期初頭~晩期まですべての遺跡で磨製石斧の生産を続けている特徴的な地域となっている〔田中・鈴木 2014〕。また、阿賀野市石船戸遺跡、土橋遺跡では輝緑岩・閃緑岩・砂岩などの在り地石材を使って大規模に磨製石斧の生産〔石橋 2018、村上・佐藤 2023〕が行われており、土橋遺跡では磨製石斧の石材の一部が、加治川流域から搬入された可能性を指摘している〔村上・佐藤 2023〕。このように見えてくると本遺跡の輝緑岩系の石材は、新発田市加治川水系または阿賀野市の諸河川から搬入されたものと推定できる。

1) 程島館跡出土の黒曜石産地同定品と比較し、道正遺跡の黒曜石の産地を推定した。

石製品の石材は圧倒的に変成岩系の石材で占められている。ヒスイ製の玉類は富山県東部から糸魚川地域で製作された完成品が、石棒類は石材の産地と製作地を推定した〔池田 2001〕によれば、宮城県北部の東北地方から完成品の状態で、根付状の垂玉は事実記載で説明したように東北地方に限って出土する垂玉〔樋口 1940〕であることから完成品の状態で搬入されたものと推定している。いずれも遠隔地からの搬入品である。石冠未成品は阿賀野川流域や阿賀野市・新発田市方面から石材を持ち込み、自家消費的に製作された未成品と思われる。独鈷石も同じように周辺から安山岩を持ち込み自家消費的に製作した〔長田 2019〕ものであろうか。

### 3) 遺跡の性格

これまでの検討から大沢谷内遺跡とは遺跡の存続時期が近く、営まれた期間の長さ、石器類の組成、主要石器の出土数が非常に近似することが明らかになった。さらに遺跡の性格を明らかにするた

第 62 表 道正遺跡・大沢谷内遺跡（1～4区）の縄文時代晩期の遺構数

	竪穴建物	掘立柱建物	土坑	溝状遺構	ピット群	土器埋設遺構	性格不明遺構	合計(基)
道正遺跡			10			5		15
大沢谷内遺跡(1～4区)	15	6	318	3	2(多数)		73	417

めに両遺跡の遺構の種類数を第 62 表にまとめてみた。これによれば種別ごとの遺構数に大きな差が認められる。大沢谷内遺跡では竪穴建物 15 棟、掘立柱建物 6 棟を検出し、また土坑も 318 基を数え、「縄文時代晩期中葉前半の短期間に営まれた集落跡」とされ「接着剤としてのアスファルト精製作業（生産）の可能性」が指摘されている〔伊比 2012b〕。一方、本遺跡はこれらの建物は皆無で、土坑 10 基、土器埋設遺構 5 基を数えるばかりである。

土器量が沢谷内遺跡の 2 倍以上、石器類も多いことを考えると、極めて不自然な遺構数といえる。これについては遺構が見つかりやすい、見つかりにくいという遺跡の差と考えている。つまり大沢谷内遺跡の遺物包含層が灰色シルト層、遺構確認面が灰色砂質シルト層であるのに対して、本遺跡は前述のように遺構覆土の黒色砂が周囲の砂層と同化した結果、遺構が見えにくくなった（見えなくなった）土の違いによるものと考えられる。

このように考えられるならば廃棄域と考えられる地点、砂丘の縁に見られた土器埋設遺構の存在などから晩期中葉の大洞 C2 式中段階から新段階の短期間ではあるが、集落が営まれた可能性が高い。

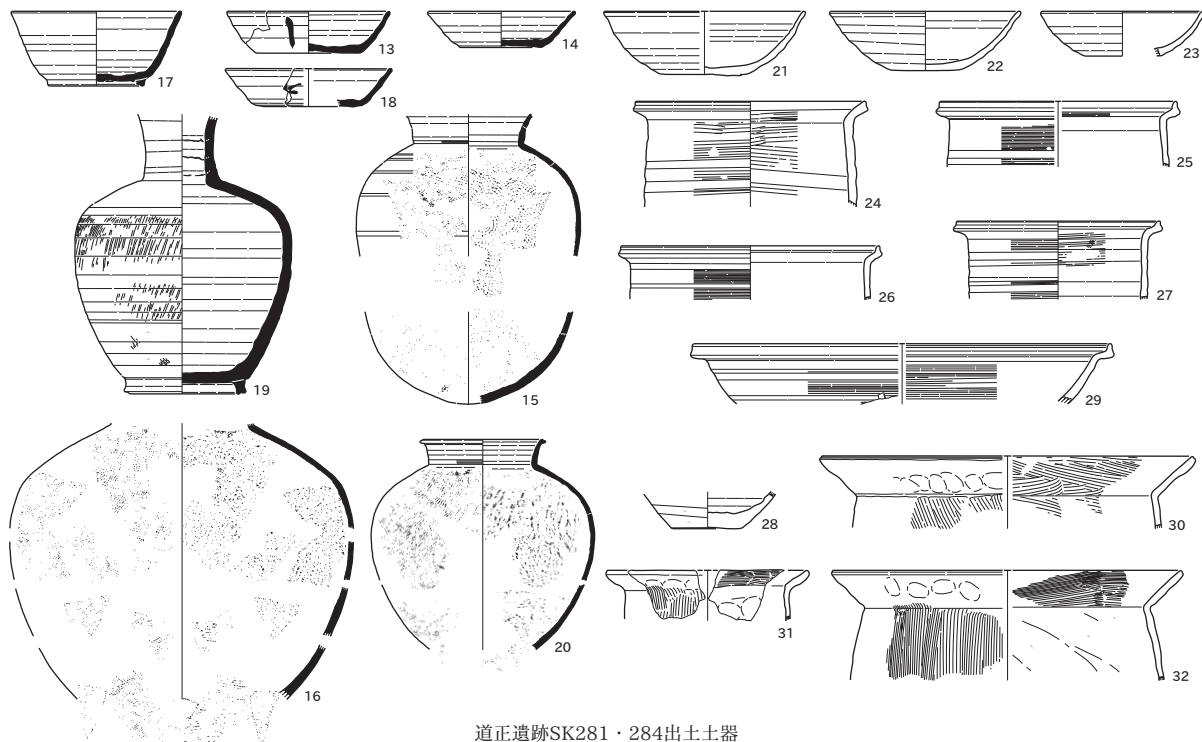
石器類の組成からは狩猟具の石鏃、調理具の磨石類が多く見られたが、石器類の石材に見られるように周辺地域の石材のすべてを内水面を使って搬入したものであり、ヒスイ製の玉類は富山県東部ないし糸魚川地域から、石棒・石剣類や根付状の垂玉は東北地方から搬入されたものである。亀田砂丘の先端に立地した縄文時代の道正遺跡は交流・交易に最適な地に位置した集落と思われる。

## D 古代の土器・土製品

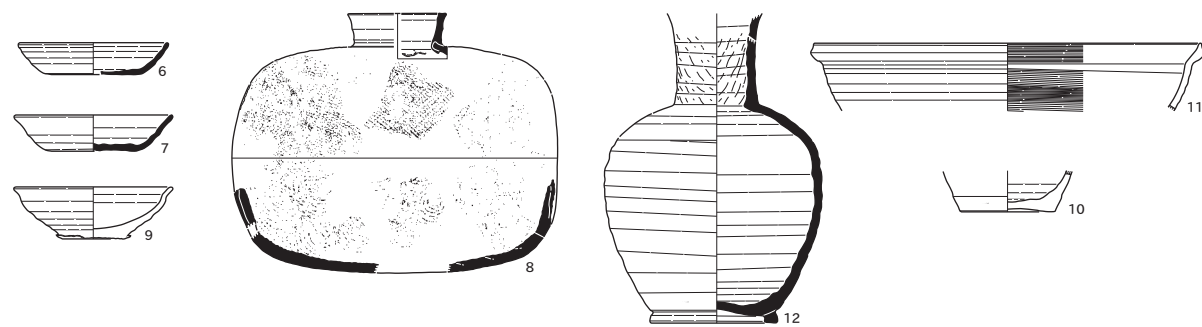
### 1) 古代土器の出土状況

平安時代における道正遺跡と岡崎遺跡は基本的に一体で推移した遺跡であると考え、土器の出土量では道正 129.96kg、岡崎 90.27kg であり、上層の調査面積の割合からみると岡崎遺跡が多い。道正遺跡には岡崎遺跡にない灰釉陶器、暗文土師器、土師器有台皿があるという違いもあり、住居や倉庫群が展開する場と砂丘のはずれの廃棄の場という今回調査された場の性格の違いはあると思われる。

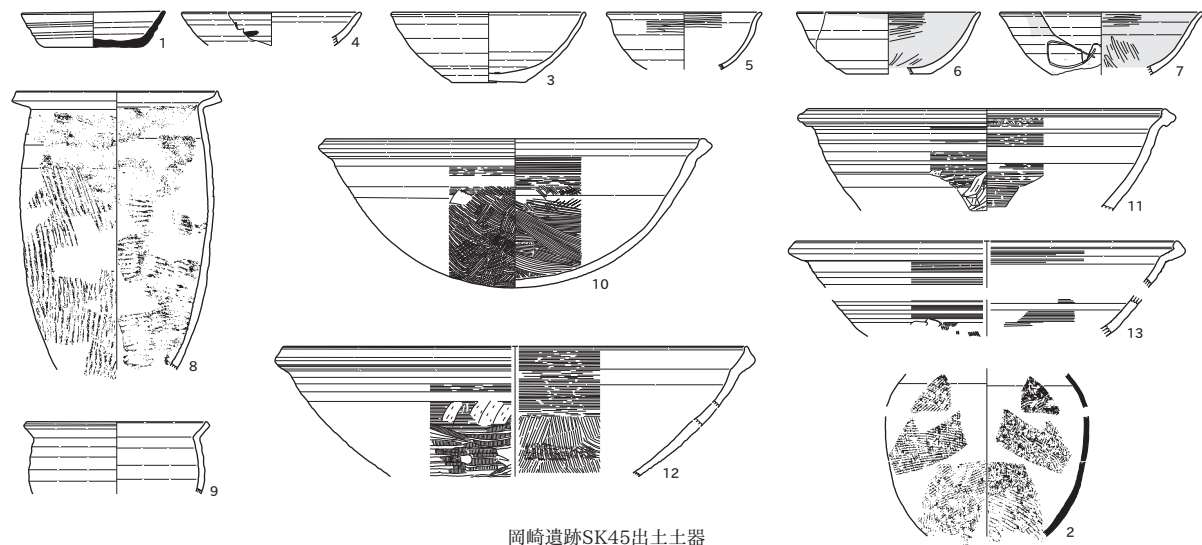
道正遺跡では SK222 と SK284 から比較的まとまって出土した。SK222 では異なる個体の破片が互い違いに折り重なり、横瓶 8 のように大半が周辺の包含層出土の個体もあることから、すでに破片状態のものを集めて片付けたものとする。図示できなかった破片には土師器長甕もあり、須恵器甕を除く食膳具・貯蔵具・煮炊具が揃っていて、食膳具には土師器と須恵器があり、須恵器がやや多い。この土坑が埋められた直近の周辺での土器組成を反映しているであろう。SK222 は北側に展開する掘立柱建物群のうちの SB482 の柱穴を壊しているため、この建物の廃絶に伴う片付けかもしれない。SK284 は SK281 と接合する個体も含まれ、やはり破片状態のものを片付けたものとみられる。SK281 と 284 を合わせてみると、SK222 と同様食膳具・貯蔵具・煮炊具が揃っていて、食膳具には土師器と須恵器があり、須恵器がやや多い。須恵器甕を含み土師器長甕に残りのよ



道正遺跡SK281・284出土土器



道正遺跡SK222出土土器



岡崎遺跡SK45出土土器

第95図 主要遺構出土土器 (S=1/6 長甕・鍋・横瓶 S=1/8 須恵器甕 S=1/12)



いものが多く、佐渡型甕の大破片が含まれる点が注目される。こちらはSB330に重なる位置にあり、これを切ることで南側に展開する建物群に伴う片付けであろうか。

包含層での出土はどちらかといえば遺構の多い地点、また2021年度調査区よりに多い傾向がある。須恵器・横瓶の各個体の散らばり方をみると、遺構のある地域を中心に拡散した状況がみられる。

岡崎遺跡ではSK45での出土状況が比較的まとまっている。道正遺跡のSK222やSK281・284と同様に包含層との接合もありその形成過程や食膳具・貯蔵具・煮炊具が揃う様相も共通する。東区東端の砂丘斜面落ち際に相当する試掘調査50Tで検出されたSX2では須恵器・土師器食膳具と佐渡型甕が出土している。

北斜面の包含層から出土したものは、須恵器杯蓋はほとんどが硯に転用され、須恵器無台杯では底部外面の摩滅や、灯芯痕を残すものがあり、また土師器煮炊具の小甕には内容物の焦げ付きが顕著に残ることなどから、使用済の不要品が廃棄されたものとする。

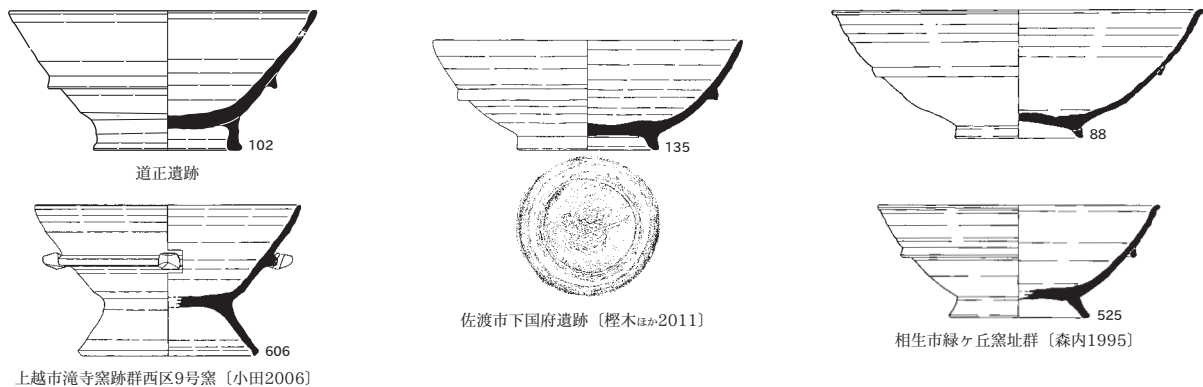
2) 年代的な位置づけ

両遺跡とも須恵器は大部分が佐渡小泊窯跡群産とみられるもので、わずかにその他の産地かと思われるものがある。小泊産のものも細かく見ると無台杯の器壁に厚みがあり体部の開きがあまり大きくないもの、器壁が薄く低平で体部の開きが大きいものがあり、ある程度の時間幅がある。小泊窯跡群の資料と比較するなら、下口沢窯跡～江ノ下窯跡までのものが含まれる。有台杯は深いタイプのものであり、杯蓋は出土した有台杯の口径と比べると大きいものがあり、硯として長く使用された結果、やや古手のものがある。

道正遺跡の突帯付き有台鉢（図版51-102）は大変珍しいものである。類例としては上越市滝寺9号窯灰原の例がまず挙げられる（第15・96図）が、滝寺例は脚部が高く大きく開く点や、突帯の上にさらに穿孔のある四耳をつける点など違いも大きい。突帯のみをつける例は佐渡市下国府遺跡で出土しており、こちらは瓷器系の碗に突帯をつけた形のもので、突帯の形状は道正例に近い（第96図）〔榎木ほか2011〕。瓷器系の碗に突帯をつける例は、播磨の相生窯跡群に「突帯碗」があり、9世紀半ば～10世紀前半ころの製品とされている。同窯跡群ではまた突帯付き双耳瓶も作られている〔森内1995〕。須恵器調納国である播磨の須恵器は平安京にもたらされていて、「突帯碗」も平安京右京二条二坊などで出土している〔上村1994〕。佐渡市下国府遺跡例は播磨のものに近い形で、口径20.4cmと大振りである。播磨では口径が大きいものは10世紀前半代にあるようで、近い年代が想定できる。

壺に突帯+耳をつけるのは類例から考えると東海地方から波及したスタイルで、滝寺例はそれが鉢にも取り入れられたものであろう。小泊窯跡群のカメ畑窯跡でも短頸の突帯付き三耳壺はあることから、小泊窯産とみられる道正例もその流れのなかにあるとみておきたい。今のところ突帯と耳付きの壺で短頸の例は小泊窯跡にしかないようで、道正の突帯付き鉢もともに、独自の用途を背景に生みだされたものなのであろう。一方、下国府遺跡例がどこの製品か実見していないので不明だが、小泊窯産であるとすれば、播磨でも特殊とされるこの形態の存在をどのように説明できるか今後の課題である。

また、道正遺跡の三耳型双耳瓶（図版51-111）も小泊窯産とみられ、小泊窯ではこのタイプも生産していたこ

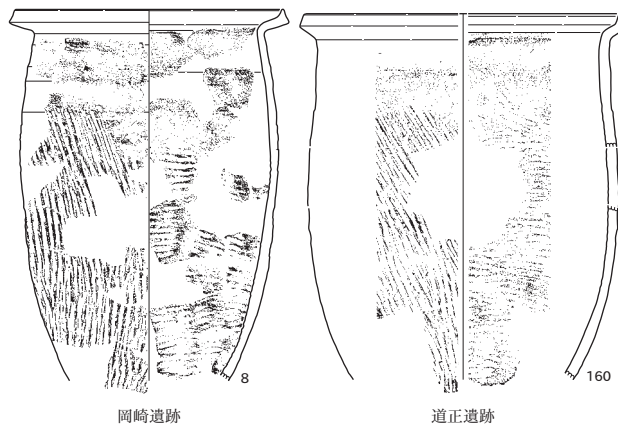


第96図 突帯をもつ有台碗・鉢 (S=1/5)

とになる。

土師器食膳具では、無台碗が多数あり、道正遺跡では少量の有台皿が認められる。黒色土器無台碗・有台碗も一定量存在している。無台碗の径高指数では25～38までの幅がある。〔春日1997〕では9世紀後半とされる今池遺跡SD3に径高（器高）指数25・29・32・38の4タイプが確認でき、38前後のタイプは当期に出現した可能性が高いとされ、〔春日ほか1997〕では35以上のものは9世紀第4四半期から10世紀のごく初頭にかけて存在する可能性が高いとされている。

須恵器技法で作られる土師器長甕・鍋の口縁端部は上方につまみ出される形が主体で、岡崎遺跡A類では外面調整にはカキメ、内面には当て具痕の上からハケメが施されるものが多いが、岡崎遺跡でB類としたものはカキメやハケメという調整がみられない点は後出的であるといえる。道正遺跡の図版55-160も同じタイプで、使用された叩き原体や色調・焼成の雰囲気も非常によく似ており、両遺跡に少量存在していることに注意しておきたい。



第97図 岡崎遺跡土師器長甕B類と道正遺跡の同巧品 (S=1/6)

須恵器は佐渡小泊産が主体で一部越後のもの

がみられる、土師器無台碗・有台皿、黒色土器無台碗・有台碗が存在、土師器煮炊具が一定量存在し、須恵器技法の在地製品に佐渡型甕が伴う、1点だけ出土した灰釉陶器有台碗が黒笹90号窯式であるという特徴を周辺遺跡の資料や春日氏の編年案などと比較すると、春日編年〔春日2019a〕の9～10期(VI期)に相当し、9世紀後半～10世紀初頭に位置付けられ、須恵器無台杯に低平で開きの大きいものが主体であること、径高指数の大きい土師器無台碗が多いことから、その後半のものが主体を占めるとみられよう。ある程度まとまって出土した遺構でのあり方はその段階での組成を反映しているであろう。

1点のみ出土した道正遺跡の暗文土師器が畿内のものだとすると、平安京I期(8世紀半ば～9世紀半ば)には土師器杯・皿・碗に暗文を施すことはなくなっているとのことであり〔小森1994〕、8世紀半ばまでのものと考えられ、岡崎遺跡では7世紀の土師器煮炊具セットが出土していることから、今回調査区での活動の主体が9世紀後半であるとしても、別地点では7世紀～8世紀半ばころにも活動が行われていた可能性を示している。当遺跡の北東、駒首瀉遺跡との間に位置する江南区土居内遺跡では令和5年度の発掘調査で奈良時代を主体とする土器群とカエリをもつ須恵器杯蓋が出土しており〔新潟市文化財センター2023〕、今後奈良時代以前の当地域の様相が明らかになっていくことを期待したい。

### 3) 土器製作技法に関する知見 - 布目、無台杯・盤と壺瓶類の工具痕

#### a 須恵器にみられる凸凹から

小泊窯産とみられる須恵器無台杯には、口縁内側または外側にくぼみがめぐるものが少なからず存在している。内側がくぼむものがあることは、これまでも認識されているところであり、長岡市浦反甫東遺跡の報告では第98図のようにわかりやすい図解がなされている〔丸山ほか2016〕。小泊窯製品に特徴的ではあるが、小泊窯製品のすべてにあるのではなく、くぼむ位置にも高低あり、くぼむ程度も様々である。浦反甫東遺跡ではこの形状の成因として、口縁端部を整形する際に指の腹で強く押さえたことにより有段状となる、または特に口縁端部がやや肥厚するものは口縁端部を内側へ折り返し気味に丸める、あるいはロクロナデにおける指の押さえ方によるものという考えが示されている。

今回出土資料でこの部分をさらに詳細に見ると、内側のくぼみの中と外面の同じ高さに斜めに走る細い筋があり、傾きには左右があって、ロクロの回転方向とも相関するという特徴をもつものが一定数存在する。またそれ

とは別に第98図の写真のような斜め方向の段差や、くぼみの上端に波打つようにつけられた段差をもつものが認められる。

後者のような段差は口縁部を強くたただけでできるとは考えにくいので、何等かの工具痕と考えられる。実際どのような形状の工具なのか、何がたくて用いているのかは理解しがたいが、これを残さないものとは異なる技術系譜の存在を示し、多数の工人が存在したであろう小泊窯においては基本的な工程は共有されていても細部の技法に多様性があったことが想定できよう。

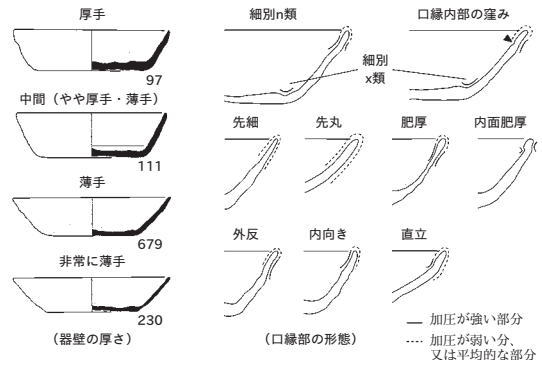
杯以外では、阿賀北産とみられる須恵器盤（図版144-81）・広口壺（図版145-96）の見込みに密集する細かいくぼみが残っている（写真図版151）。くぼみの一つ一つをみると同じ形が繰り返されており、平らで先端がすぼまる形の工具を押し付けたとみられる。広口壺は深い形のため、あらかじめ成形が終わってからの見込みの調整に、柄付きの工具を差し込んだと考えられるとしても、盤は浅く見込みの調整が難しいものではないため、これは最終的にきれいになでつけるのを省略している、省力化の表れとみるべきであろう。

図版143-59 須恵器無台杯の外面には大きな瘤状の部分がある。このような例はこれまで見たことがない。普通に粘土紐を積み上げて成形する過程でこのような瘤ができるとは考えにくく、あえて瘤状にする理由があったということになる。確実なことはこのような瘤があっても機能的に問題なく、出荷には影響なかったということである。

**b 土器製作における布の使用**

道正遺跡の須恵器横瓶（図版45-8）の内面と、岡崎遺跡の土師器小甕（図版151-179）外面の底部近くに布目が確認できた。横瓶のものは俵形の胴部の片側に広くみられるが、小甕のものはごく狭い範囲である。

道正遺跡の横瓶の痕跡を詳細にみると、布目がある側は粘土紐の継ぎ目残り、器面はいかにもベタついていたことがうかがえる。例えば体部半分を叩き技法で作って閉塞し、乾燥を挟んで残り半分を作り始めたが、予想以上に乾燥が進んでいて接着がうまくいかないことから湿らせた布を当てて湿気を与えながら積み上げていった後、布をはずして乱雑になでつけたということが考えられる。しかし一方外面はふつうにタタキメがみられ、内面にも写真（写真図版78）にあるように円形のくぼみに沿って布目が見られるような部分があり、これに関しては当て具に布をかぶせていた可能性を想定すべきかもしれない。須恵器横瓶で布目をもつ例としては、他に2例を知ることができた。1つは東区山木戸遺跡SX6出土〔諫山2004 第40図96〕で、報告書では布目について特に記載はないが、報告者の諫山えりか氏の教示により実物を確認することができた。口頸部の作りなど道正例によく似たものである。山木戸例は道正例のように器面がべたついた感じではなく、同心円文当て具痕の下に布目がついているように見えるが、連続的に残ることの多い当て具痕がない部分もあり、粗密がある点、全体とし



長岡市浦反甫東遺跡での無台杯形態〔丸山ほか2016〕



無台杯内面のくぼみと工具痕？（図版143-59）



無台杯内面のくぼみと工具痕？（図版140-1）



無台杯外面のこぶ（図版143-59）

第98図 小泊窯産須恵器無台杯に見る凹凸

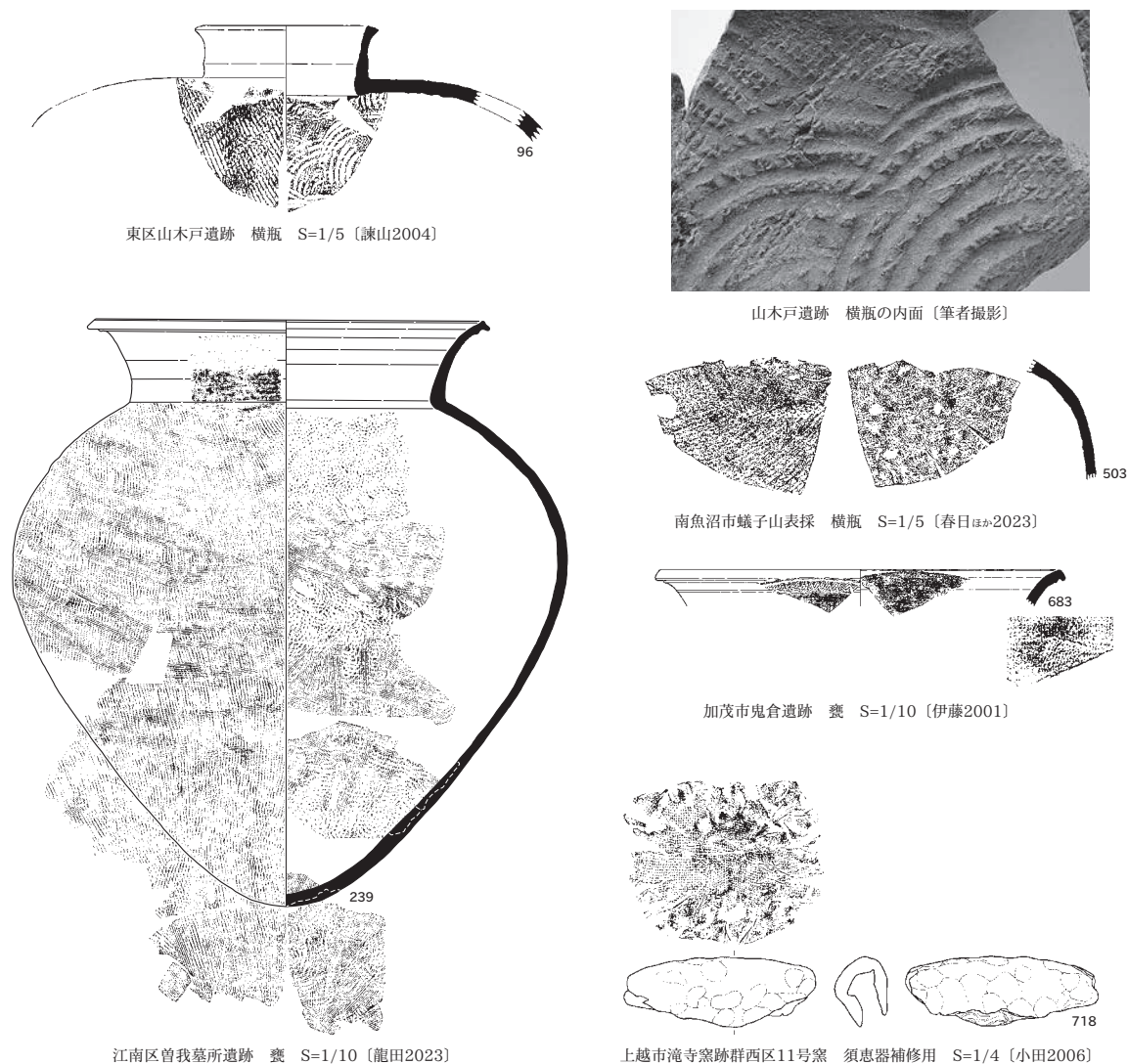
て文様のない当て具に布が巻かれたものが使われた可能性がある。もう一例は南魚沼市金屋遺跡（第4・5次調査）報告書に掲載された蟻子山表採品の胎土B類の横瓶体部片である〔春日ほか2023 図版61-503〕。写真で見ると、器面に凹凸があり布目が切れ切れのようで道正例に近いようである。

今回、道正遺跡も含め3例の横瓶を知ることができたが、これらはいずれも体部の叩き目が格子文であり、小泊窯跡群の製品の可能性が高い。横瓶製作は工程が多く須恵器の中では難易度が高いものであると思われるので、想定より乾きすぎてしまった場合の応急処置として布による保湿が行われた、あるいはそもそも布を使う方法（当て具をくるむ？）で作られていたことも考えられる。

須恵器甕で布目をもつ例としては、上越市の滝寺古窯跡群〔小田2006〕、江南区曾我墓所遺跡〔龍田2023〕、加茂市鬼倉遺跡（〔伊藤2001 P122の683番〕：龍田優子氏教示）にあり、いずれも口頸部である。

滝寺例は成形中に割れた口縁部を補修した粘土の外面に布目がみられる。阿賀北産の可能性が高い曾我墓所例は口頸部と体部の接合部外面に両者にまたがって布が貼られていた痕跡が接合部の粘土の剥落した部分で確認できる。鬼倉例は産地を確認できていないが頸部内面にみられる。甕の場合は補強・保湿に使っていると考えられる。

布目といえば古代瓦にはよくみられるもので、瓦の場合は型はなれをよくするのが最大の目的であろう。横瓶で想定したように当て具をくるんだとすれば同様の効果があったかもしれない。それとは別に製作に時間がかかり切ったり貼ったりが多い須恵器貯蔵具では補強や保湿を目的としても使われているようである。



第99図 布目をもつ須恵器

以上の例からは、須恵器甕では越後の複数の産地で布を使っていること、9世紀の小泊窯製品には布を何等かの形で製作に使ってその痕跡を残す横瓶が一定数あることがうかがえる。

岡崎遺跡の小甕のものは、保湿や補強には関係なさそうであり、ロクロから切り離して持ち上げる際に指に布を巻いていたとか、布を巻いた道具が触ったなどが考えられるが、いずれにせよ製作現場で布が使われていたことは確かである。

#### 4) 佐渡型甕と可搬式カマド

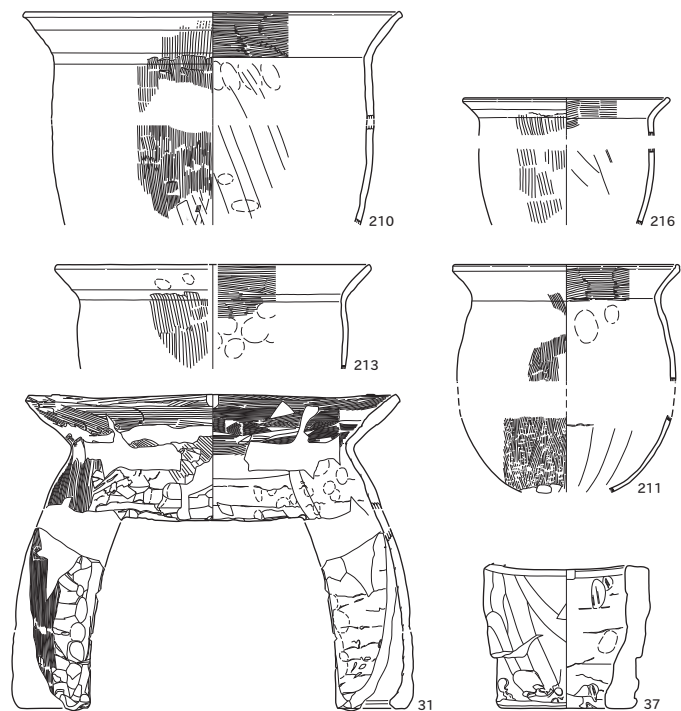
佐渡型甕は口縁部の個体識別を行ったところ両遺跡合わせて29個体は存在している。佐渡型甕は出雲崎町番場遺跡の報告〔坂井1987b〕で平安時代の佐渡のものという認識が示されて以降、越後平野の多くの遺跡で客体的に存在することがわかってきている。

〔立木2015〕の集成では越後側で19遺跡を数え、その後報告された長岡市浦反甫東遺跡〔丸山ほか2016〕や当遺跡を加えると20を超える。立木の集成に挙げられたもののうち、秋葉区細池寺道上遺跡（当時の細池遺跡）第2・4次調査D区SX410出土のもの（原報告：〔小池ほか1994 図版55-63〕）は、実物を見ると佐渡型甕ではなく、西古志型甕と考えた方がよい。その出土位置についても原報告の土器事実記載ではSX410出土とされているが、遺物観察表・注記からはH区SK809で、上面で出土したと記述されている土師器甕1個体にあたると思われる。西区釈迦堂遺跡SD166出土のもの（原報告：〔江口2000 図版45-169〕）は、器形からは佐渡型としたいところだが、口縁部の調整、体部内面が全体にヨコハケである点、胎土・焼成の雰囲気などは当遺跡の佐渡型甕とは異なるもので、報告者の見解のとおり西古志型とするか、あるいは越後で作られた佐渡型的な甕とする位置づけもあり得るかもしれない。

それぞれで図示されているものを見ていると少量しかない印象だが、実測図を提示できる個体が少ないだけで、道正・岡崎遺跡での今回の個体数がとびぬけて多いということではないだろう。

佐渡型甕の体部は器壁が薄いことが特徴とされてきたが、当遺跡の例では、器壁が強く圧縮されている印象を受ける。表面が薄皮を剥ぐように壊れていくことから圧延されていると考えられる。現在観察できる調整痕は、外面は縦方向を基調とした条線が細く密なハケメと部分的なケズリ、内面は口縁部からの流れでハケメが体部上半に及ぶものはあるが、基本的に平滑に仕上げられている。その調整はナデというべきものと思われるが、斜め方向の単位はわかるものの擦痕をあまり残さない独特のものである。加圧は内面のこの独特なナデによって行われたのだろうか。

実用品であるからには使用目的が形を規定する大きな要素であると思われる。単体で出土する例が多いこともあって甕だけに注目しがちであったが、最近小野本敦氏は、佐渡では他に煮炊きの鍋釜に相当するものがないことから、これらが主食調理用と考えられ、さらに四日町上遺跡出土品の使用痕の観察から大型の佐渡型甕は移動式竈とセットで「炊き干し法」炊飯に用いられたとし、佐渡型甕以前の6世紀後半には「茹で蒸し法」が移動式竈で行われていて、米の品種が粘り強いものに変化するのにつ



第100図 佐渡型甕・可搬式カマド・支脚 (S=1/6)

れ「炊き干し法」になっていったのではないかとされた。佐渡に特徴的な移動式カマドの成立過程の検討から6世紀後半以降における海民の活動を想定し、そのうえで越後における佐渡型甕とカマドは小泊窯産須恵器などを運ぶことに従事した航海術に長けた海民の道具であって、彼らの活動の痕跡であるという考えを示した〔小野本2022〕。

様々な論点を含む大変興味深い説である。ひとまず越後の佐渡型甕がすべて佐渡産であるかどうかはおいておくとしても、両者が出土した遺跡は的場遺跡、緒立C遺跡、山木戸遺跡、岡崎遺跡の4か所あり、甕もカマドも佐渡が分布の中心であることからするとセットで使われたとみるのが自然である。

ただし知られている可搬式カマドには径の小さい佐渡型甕はかけられない。カマドの方に対応するサイズ展開がなく、掛け口の径を調節する部品もないのだとしたら、小さいタイプは別な方法、例えば石などで組んだ簡易なカマドに掛けて使うことなどを想定しなければならない。道正遺跡には低い円筒形の支脚（図版104-37）があり、また側面に穿孔をもつ低い円筒形の支脚が佐渡、越後の佐渡型甕または可搬式カマドが出土している遺跡でも多く認められており、そのようなものが小径の甕と組み合っていた可能性も考えておきたい。

海民の持ち物であったとして、越後のこれらは壊れて捨てられたから出土するのであって、旅の途中で壊れてしまったらかれらはその後佐渡に帰るまでどう炊事をしたのかという点も気になる。越後側にどこか拠点があり、そこで補充できるシステムが必要と思われる。

小野本氏は祭祀用での使用を否定するものではないが、北陸型煮炊き具を使う人々があえて可搬式カマドを使う必然性はないとされたが、越後の人々が、作り付けカマドでの調理のほかに必要なあって佐渡の煮炊き具セットを入手して使った可能性、越後に佐渡出身者が一定程度定住していた可能性なども、それを証明できるかどうかはともかく検討されるべきと思われる。

越後で一般的な長甕は湯釜として一貫して蒸し料理用であって、米は蒸されていたと考えられるのに対し、佐渡では炊き干しだとすると、主食の調理方法が彼我で異なっていたことになる。そして、これらが佐渡にいたすべての人々の日常の炊事道具であったと言えるのかについては、両津市北松ヶ崎蟹穴窯跡採集品として須恵器技法の土師器鍋として紹介されているものがあり〔坂井ほか1991〕、佐渡型甕以外が全くないわけではないようである。また、6世紀後半にはよく淵遺跡にみられるように佐渡型ではない土師器煮炊き具だったのであり、佐渡型がどのように成立してくるのかも追及されなければならない。

## E 道正遺跡の古墳時代土器の位置づけ

### 1) 道正遺跡の古墳時代土器の年代的位置づけ

以下では、道正遺跡出土の古墳時代の土器について、その年代的な位置づけについて記す。

#### a 研究略史

道正遺跡出土の古墳時代の土器は、いずれもいわゆる弥生時代終末期（古墳時代早期）から古墳時代中期初頭の中に収まるものとする。県内における当該期の土器編年については、坂井秀弥氏らによる内越遺跡での編年〔坂井・横山ほか1983〕、品田高志氏の編年〔品田1992〕、坂井秀弥・川村浩司両氏による編年〔坂井・川村1993〕、川村浩司氏の上越地域を中心とした編年〔川村2000〕などを経て、新潟県考古学会によるシンポジウム「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」〔新潟県考古学会2005〕での滝沢規朗氏による編年〔滝沢2005c〕が提示された。

その後、阿賀北地域や佐渡地域をはじめ全県的に該期の資料が増加するとともに、滝沢氏によって精力的に編年案などが提示されており〔滝沢2011・2012・2018など〕（第103図など）、新潟県考古学会30周年記念事業として刊行された『新潟県の考古学Ⅲ』においても、古墳時代前期、中期の土器編年が示されている〔滝沢2019b、小野本2019a〕。本項では道正遺跡から出土した古墳時代の土器について、これら既存の土器編年を参考に年代的な位置づけを行う。

### b 道正遺跡における古墳時代の土器の年代的位置づけ

道正遺跡から出土した古墳時代の土器について、遺構出土資料を中心として形態的特徴や細別器種の消長、前項で記した既存の研究成果などを参考に、様相 1・様相 1（新）・様相 2・様相 3・様相 4 に区分した（第 101・102 図）。各様相の主要遺構や既存編年との対応関係はおおむね第 63 表のとおりと考える。なお、第 101・102 図において各様相内を区切る破線は遺構の違いを示しており、様相内の前後関係を示してはいない。以下、各様相における器種などの特徴について記す。

#### 【様相 1】

主に SK400、SI266、SX233 出土土器を様相 1 の資料に位置づけた。

弥生時代以来の有段口縁の高杯（1）や有段口縁の小型器台（143）、有段口縁の鉢（14・15）、段のある小型の直口壺（20）のほか、東海系高杯（2～4）や装飾器台（10・11）、短い口縁部が外反する鉢（17・18）が定量存在する。蓋も確認できる（202）。壺は弥生時代以来の大型の広口壺（22・23・144）のほか、有段口縁壺（26・206・208・212・214・215）や二重口縁壺（209・213）が定量存在する。甕では擬凹線をもつ有段口縁甕（33）が少量確認できるが、主体はくの字もしくはコの字状口縁の甕である。口縁端部の形状は大きく分けて、上方に摘み上げるもの、面をもつもの、丸く収めるものの 3 種類あるが、様相 1 では上方に摘み上げるものが比較的多く、一定量認められる。

滝沢氏の阿賀北地域の編年〔滝沢 2011・2012〕の様相 2・様相 3（第 103 図など、以下省略）、新潟シンポジウム編年〔滝沢 2005c〕の 6 期・7 期、『新潟県の考古学Ⅲ』の古墳時代前期土器編年〔滝沢 2019b〕の 3 段階・4 段階期におおむね並行すると考える（第 63 表、以下省略）。なお、SI266 の柱穴（P399）出土の柱について放射性炭素年代測定を行っており、209～248calAD（63.2%）、299-306calAD（5.1%）の数値が示されている（第 IV 章第 5 節）。土器編年の年代観と矛盾しない値といえよう。

#### 【様相 1（新）】

SI266 の周溝（SD238）出土土器を様相 1 の中でも新しい様相として捉えた。

様相 1 と比較して、様相 1 で定量確認できる装飾器台や有段口縁壺、口縁端部を上方に摘み上げる甕が少なくなる点、擬凹線文の甕が認められない点、口縁端部を丸く収める甕が多くなる点など、様相 1 とは異なる点が多い。そのため、様相 1 の中でも新しい傾向の土器様相として捉えた。

滝沢氏の阿賀北地域の編年〔滝沢 2011・2012〕の様相 3、新潟シンポジウム編年〔滝沢 2005c〕の 7 期、『新潟県の考古学Ⅲ』の古墳時代前期土器編年〔滝沢 2019b〕の 4 段階におおむね並行すると考える。

#### 【様相 2】

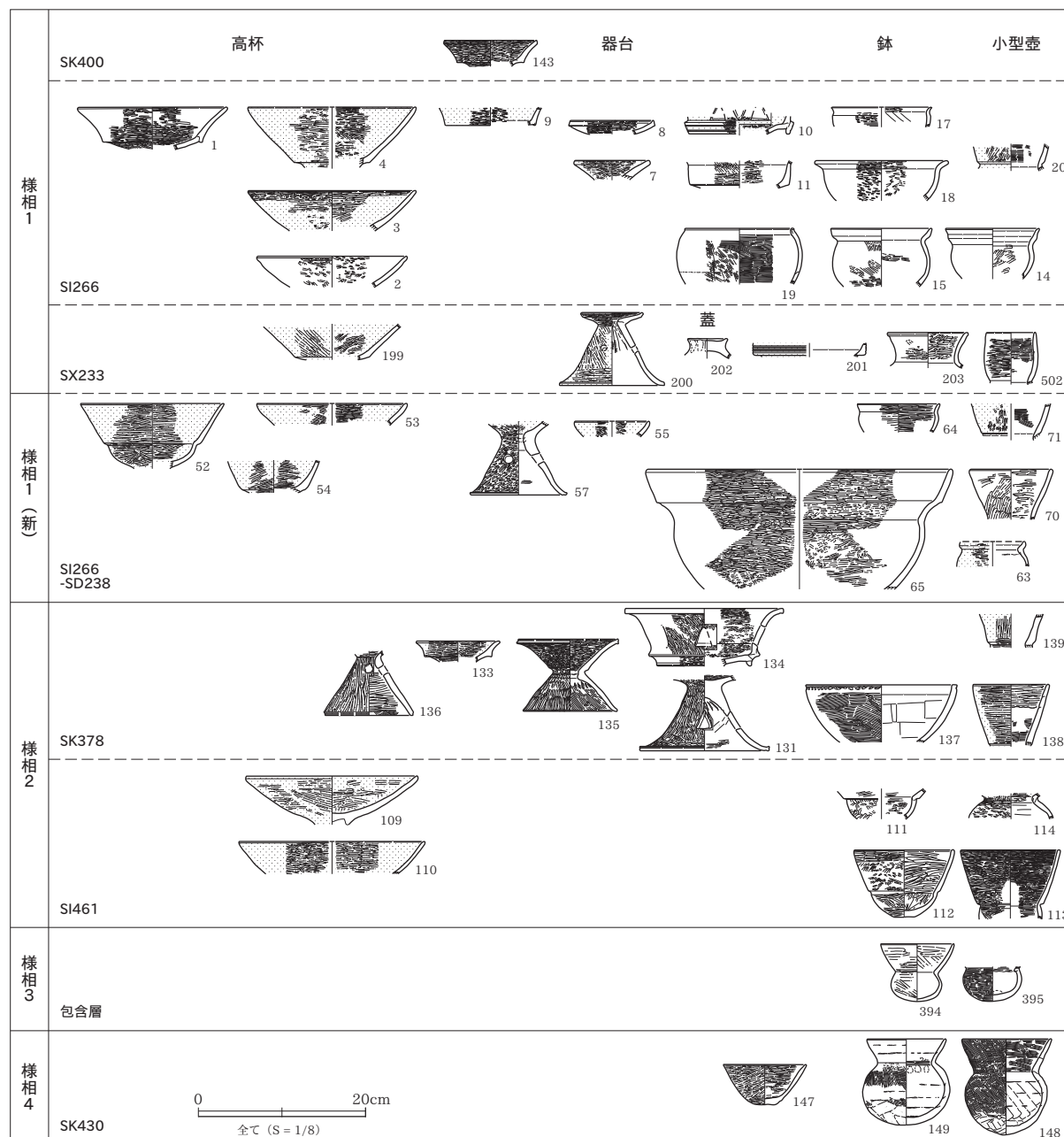
SK378、SI461 出土土器などが該当すると考える。なお、SI461 は床面整地土出土のものが多い（第 IV 章第 3 節）。

高杯は東海系高杯が一定量確認できる。様相 1 に比べて杯部が浅く、段が弱い傾向にある。有段口縁の小型器台（133）は様相 1 のもの（143）に比べて段部の屈曲が弱い。装飾器台は少ないものの確認できる（131・134）。畿内系のいわゆる X 字形器台（135）やいわゆる小型丸底壺の祖型となる可能性のある小型の壺（鉢）が確認できる（111～113）。甕では口縁端部を上方へ摘み上げるものが明瞭でなくなる。

滝沢氏の阿賀北地域の編年〔滝沢 2011・2012〕の様相 4、新潟シンポジウム編年〔滝沢 2005c〕の 8 期、『新潟県の考古学Ⅲ』の古墳時代前期土器編年〔滝沢 2019b〕の 5 段階におおむね並行すると考える。

#### 【様相 3】

様相 3 については遺構出土土器の中で明確なものを抽出できなかったが、包含層出土資料の中で当該期と推測される資料を確認できる（394・395）。定型化した小型丸底壺が定量出土する段階といえ、滝沢氏の阿賀北地域の編年〔滝沢 2011・2012〕の様相 5・様相 6、新潟シンポジウム編年〔滝沢 2005c〕の 9 期・10 期、『新潟県の考古学Ⅲ』の古墳時代前期土器編年〔滝沢 2019b〕の 6 段階・7 段階におおむね並行すると考える。

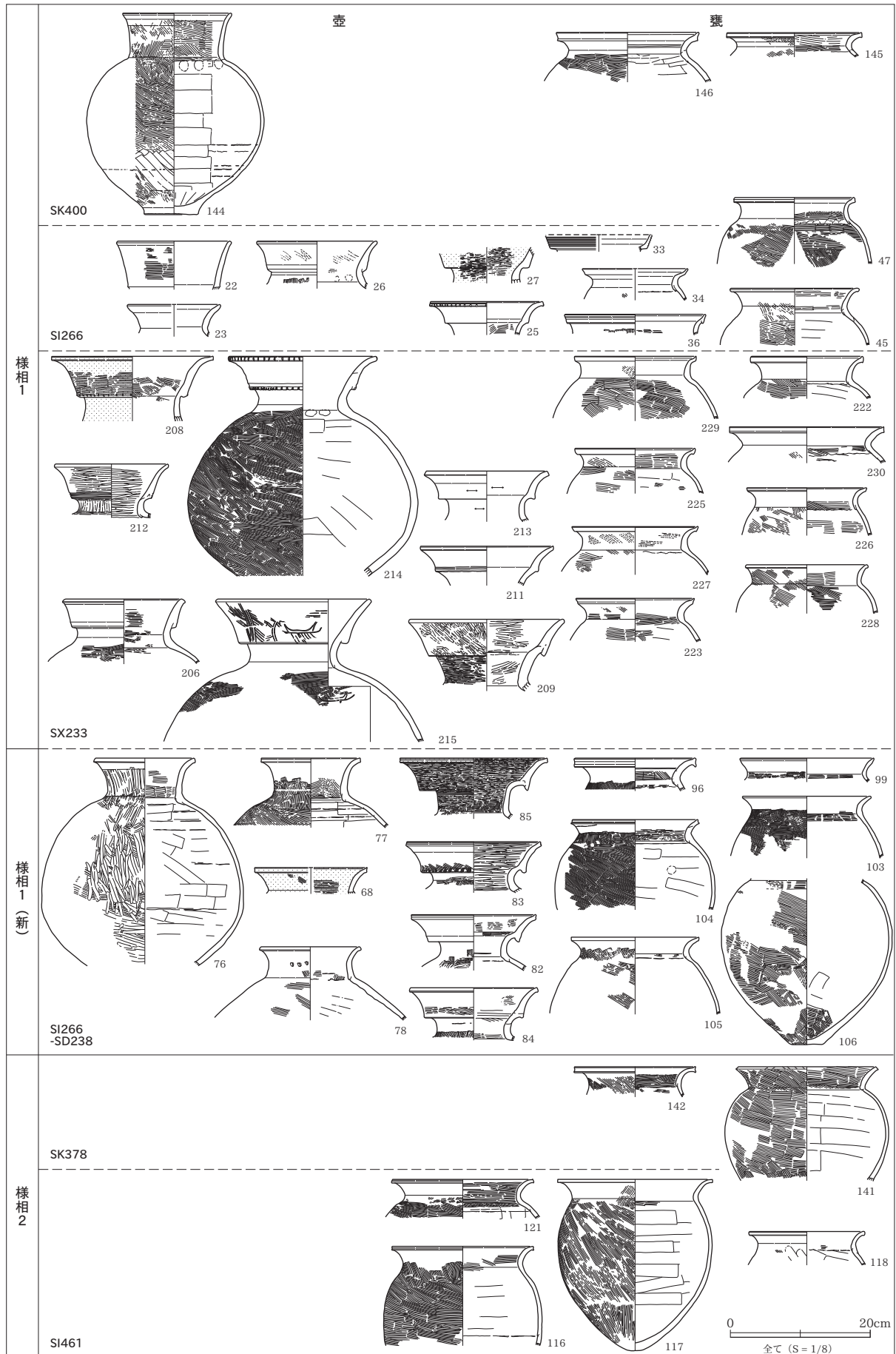


第101図 道正遺跡出土の古墳時代の土器編年図-1

第63表 古墳時代の土器編年対照表

道正遺跡出土土器	様相1	様相1(新)	様相2	様相3	様相4	
道正遺跡主要遺構	SK400					
	SI266					
	SX233					
	SI266 - SD238		SK378			
			SI461			
					SK430	
新潟シンボ編年 (滝沢 2005c)	6	7	8	9	10	
滝沢編年 (2011・2012)	様相2	様相3	様相4	様相5	様相6	様相7
新潟県の考古学Ⅲ (新潟県考古学会 2019)	古墳前期 (滝沢 2019b)	3段階	4段階	5段階	6段階	7段階
	古墳中期 (小野本 2019a)					





第 102 図 道正遺跡出土の古墳時代の土器編年図 -2

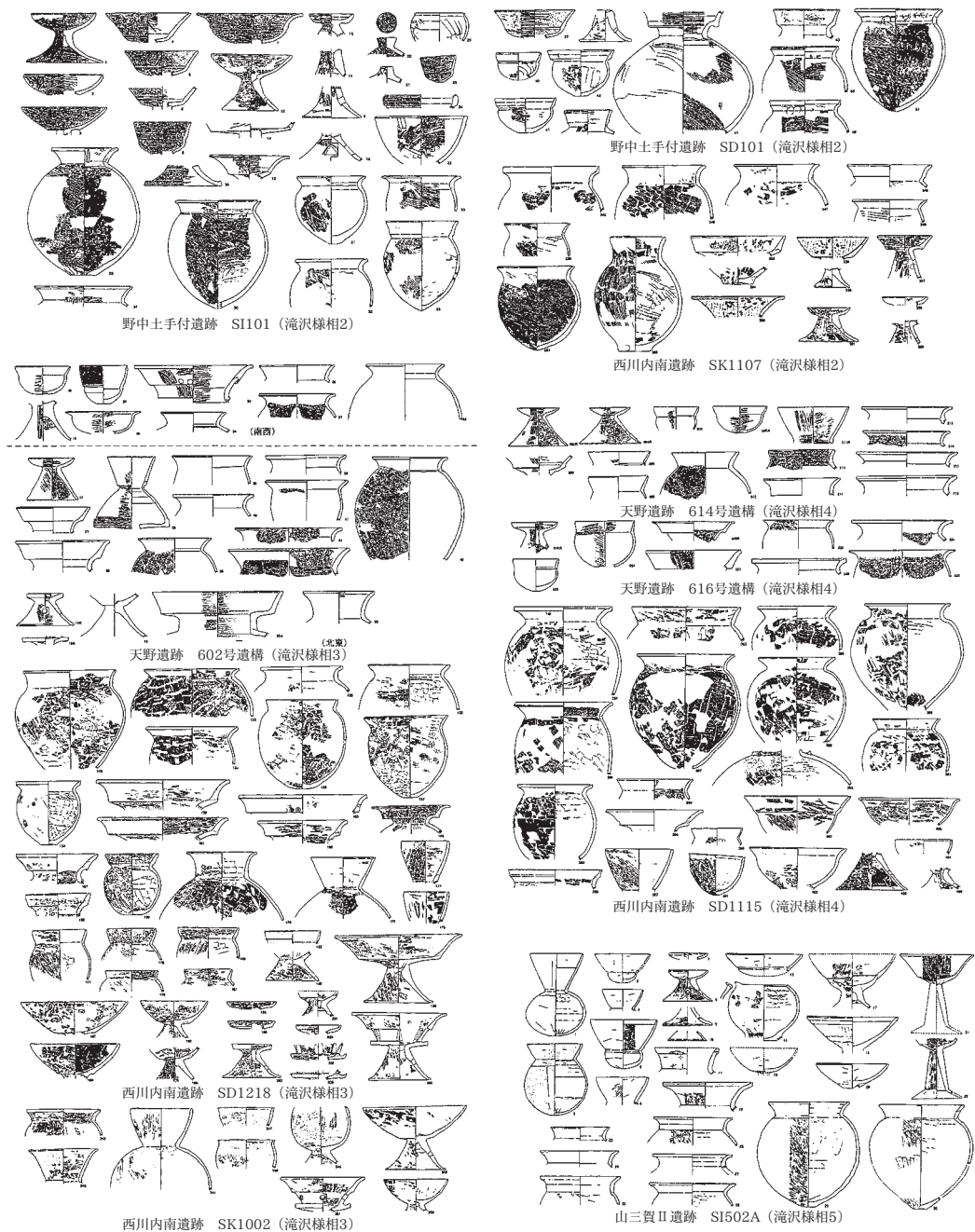
【様相4】

SK430 出土土器が該当すると考える。

小型の丸底壺 (148・149) は口縁部が短くなるとともに体部の膨らみが増し、体部中位付近が最大径となる。調整は比較的粗く、外面はハケメ調整を主体とする。また、平底で口縁部が直線的に外方へのびてそのまま収まる小型の鉢 (147) が確認される。

これらの土器の特徴から、『新潟県の考古学Ⅲ』の古墳時代中期土器編年〔小野本 2019a〕の1段階におおむね並行すると考える。

以上、道正遺跡出土の古墳時代の土器を対象に区分した各様相について概観したが、遺物の出土量や遺構において主体をなすのは様相1と様相2の時期であり、新潟シンポジウム編年〔滝沢 2005c〕の6～8期にあたる。その後の様相3・様相4の時期は遺構・遺物量ともに少なく、集落の状況が不明瞭となる。活動域の中心が調査

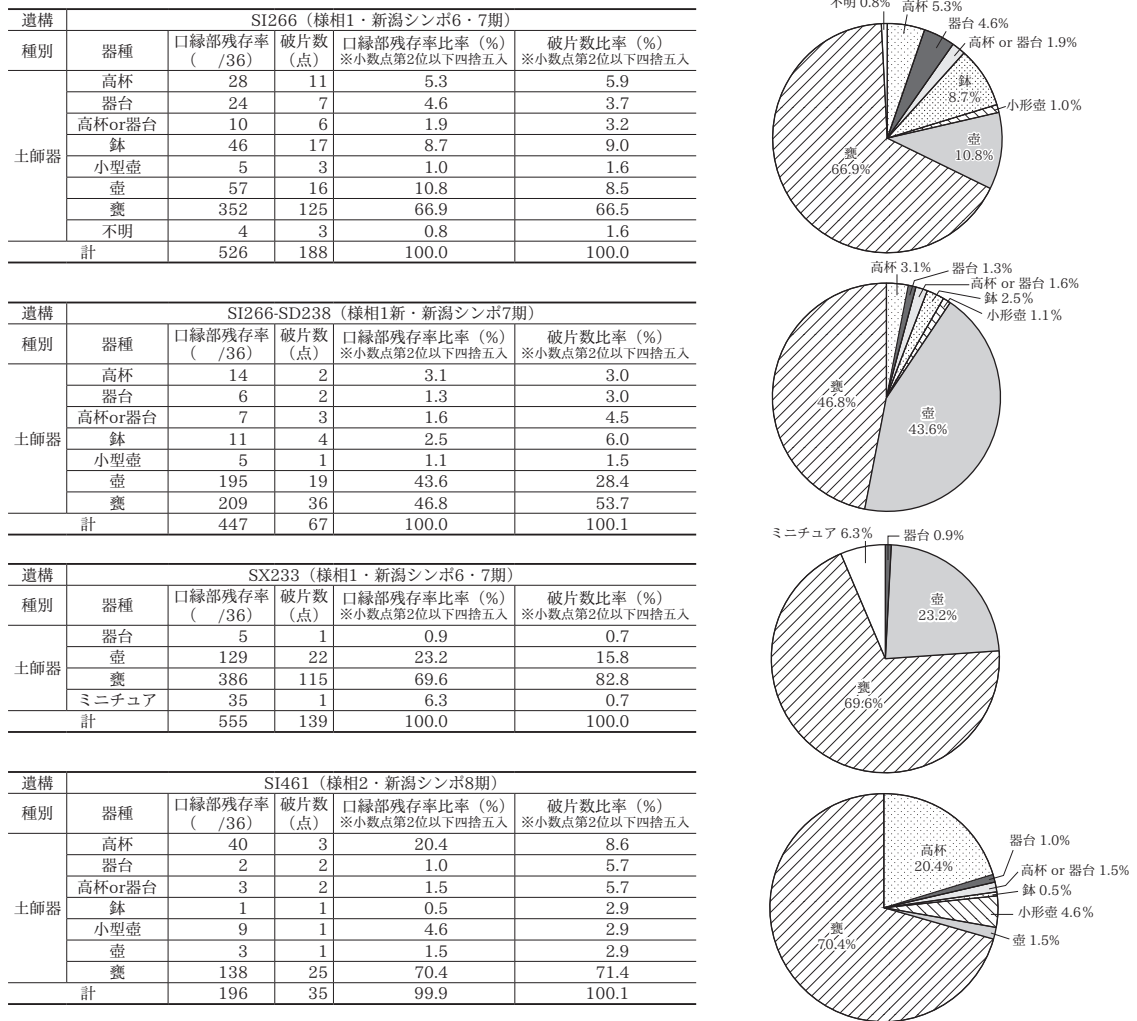


第103図 阿賀北地域における古墳時代前期の編年基準資料 (滝沢 2011 より一部抜粋・改変 S=1/15)

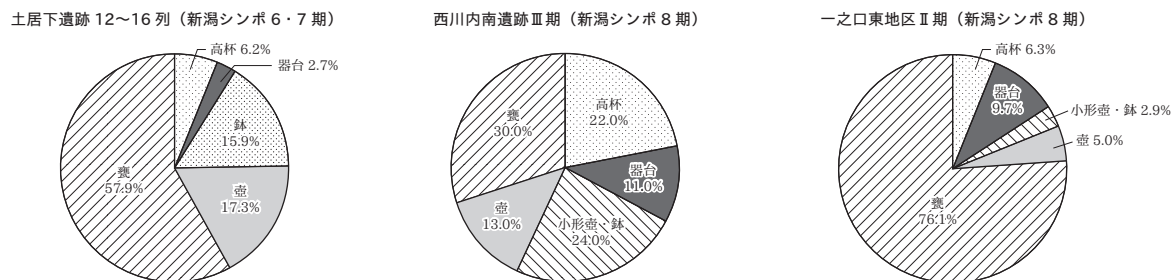
区外へ移動したことが推測される。

2) 古墳時代の主な遺構出土土器の器種別構成比率について

以下では道正遺跡の竪穴建物2棟(SI266・SI461)および土器集中遺構(SX233)における器種別構成比率について検討する。器種別構成比率の計測については口縁部残存率計測法を用いた。具体的な方法としては春日〔1994b〕に従った。以上の方法で算出したSI266(様相1・新潟シンボ編年〔滝沢2005c〕以下省略)6・7期)、SI266-SD238(様相1新・新潟シンボ編年7期)、SX233(様相1・新潟シンボ編年6・7期)およびSI461(様相2・新潟シンボ編年8期)の器種別構成比率は第104図のとおりである。



第104図 道正遺跡古墳時代土器の口縁部残存率計測値による器種別構成比率



第105図 他遺跡における古墳時代土器の器種別構成比率

SI266 (様相1・新潟シンボ編年6・7期)

甕が約67%と主体をなし、壺・小型壺(約12%)、鉢(約9%)、高杯(約5%)、器台(約5%)と続く。当該期に位置づけられる土居下遺跡12～16列の器種構成比率〔細井ほか2006〕と類似した構成比率をなす(第105図)。

SI266-SD238 (様相1新・新潟シンボ編年7期)

SI266の周溝であるSD238では、壺の比率が約40%と高い点で特異な様相をなす。壺の中にはカゴメ痕や被熱痕を残すなど、一部SX233出土の壺と類似したものも存在する。後述のとおり、SX233は甕や壺を主体とする祭祀遺構の可能性が高いと推測するが、それに関連した土器などを竪穴建物SI266の周溝であるSD238に廃棄した可能性もあろう。

SX233 (様相1・新潟シンボ編年6・7期)

甕が約70%と主体を占める点はSI266と類似するが、壺が約23%と高い比率をなす一方、高杯・器台の比率が低い点などはSI266と異なる。またミニチュア土器も存在する。

SX233は砂丘落ち際の緩斜面に位置し、長さ4.50m、最大幅約1.85mの範囲において、当時の生活面上に土器が集中して廃棄されたいわゆる土器集中遺構と考えられる(第IV章第3節)。西方へ下がる砂丘落ち際の立地や、2隻の準構造船などが線刻され、外面にカゴメの痕跡を残す壺(215)、口縁部に穿孔のある壺形のミニチュア土器(234)などの特殊な遺物の存在から、水辺の祭祀に関連した遺構である可能性が推測される。器種構成比率などからは、甕を主体とし、壺も多く廃棄された状況を復元し得る。

なお、時期は若干新しいが、西川内南遺跡Ⅲ期(新潟シンボ編年8期)の土器の構成比率〔野水ほか2005〕(第105図)を見ると、甕が30%と少ないのに対して高杯(22%)や器台(11%)の比率が高い。これについて、西川内南遺跡は祭祀的な遺構や遺物が目立つ遺跡で、そのような遺跡の性格が器種構成比率の上で影響を及ぼしている可能性が指摘されている〔山本2006〕。西川内南遺跡Ⅲ期とSX233の器種構成比率の違いは留意される。

ちなみに、前記のとおり2隻の船を描いた壺215の外面にはカゴメの痕跡を確認できるが、同様のカゴメの痕跡はSI266の周溝SD238から出土した壺(80・90)でも認められ(第IV章第4節A2)、巻末写真)、その背景が注目される。

SI461 (様相2・新潟シンボ編年8期)

甕が約70%と主体をなし、高杯(約20%)、小型壺(約5%)、壺(約2%)、器台(約1%)と続く。当該期に位置づけられる一之口遺跡東地区Ⅱ期の器種構成比率〔鈴木ほか1994〕(第5図)と比べ、甕が主体をなす点は共通するが、高杯の構成比率が約20%と高い点は異なる。

3) 古墳時代の船が描かれた線刻土器について

道正遺跡の古墳時代の土器において線刻土器は5点(215・217・429・440・498)確認できる(第107・108図)。船が描かれた壺(215)以外の4点では、直線または曲線の線刻を確認できる。胎土から、217と440は同一個体の可能性がある。形態や出土状況などからは、いずれも古墳時代前期に位置づけられると推測する。

県内における弥生時代終末期(古墳時代早期)から古墳時代の線刻土器は、道正遺跡の5点を含めると、管見の限り10遺跡、36点確認できる。このうち、弥生時代終末期(古墳時代早期)と古墳時代前期の線刻土器に限れば6遺跡30点で、内訳は釜蓋遺跡(上越市)13点、天野遺跡(胎内市)7点、土居下遺跡(胎内市)1点、緒立遺跡(新潟市西区)3点、葛塚遺跡(新潟市北区)1点、道正遺跡(新潟市江南区)5点である。県内において線刻土器を出土する遺跡は非常に限られるとともに、内水面交通の要衝に位置する遺跡から出土する傾向が窺える。また、直線や曲線など具体的な対象物が不明なものが多いが、葛塚遺跡の人物画や緒立遺跡の人物面を描いたとされる土器(第111図)、道正遺跡の船など、描写の具体的な対象を認識できるものもある。

以下では、2隻の船などが描かれた道正遺跡の壺(215)の線刻について記載する。なお、上下左右、縦横などの記載は、土器を正位に置いた状態を見た場合の方向を示す。また、便宜上、壺(215)の口縁部を破片のまとまりごとに破片A・破片B・破片Cの3つに分けて説明することとする(第107図上の展開図参照)。

a 線刻土器 (215) の概要

土器が集中して出土した SX233 から出土した有段口縁の壺で、外面は赤彩され、体部にはカゴメの痕跡も確認できる。胎土から在地でつくられた土器と推測する。

口縁部外面には、大きく分けて 2 か所において船などの線刻が施されている (第 107 図上の展開図)。また、体部にも 1 隻の船が線刻されている。線刻土器 215 において、確実に船の描写と考えられるのは計 2 隻である。

なお、破片④の左部分から⑤を経て破片⑥の右部分にかけては、一部器面が磨滅しているものの線刻は痕跡も含めて確認できず、線刻の空白域であった可能性が高い。また、破片④右端と破片⑥左端との間は幅約 7cm 欠損しており、船の右側の欠損部分における線刻の有無については不明である (第 107 図上の展開図・写真図版 59)。

口縁部と体部に描かれた船は、どちらも刳船の上に縦板と舷側板が表現されていると考えられ、柴田昌児氏による準構造船の分類のⅢ型 (縦板型) [柴田 2021a] に該当する (第 106 図)。なお、船にはオールとみられる櫂 (橈) が 8 本の線刻で表現されており、大型の準構造船とみられる (柴田氏ご教示)。

b 船 2 隻の線刻方法について

口縁部に描かれた船 (第 107 図下左) 線刻の切りあい関係から、最初に縦板と舷側板部分 (第 107 図下左の①) を、次にその下の刳船部分 (同②)、最後に櫂 (橈) と推定される斜め方向の 8 本の線 (同③) を描いていると判断し得る。このうち櫂と推定する 8 本の線は、比較的幅が狭い (細い) 線刻で表現されている。

刳船部分の線刻 (同②) を見ると、左端は緩やかに上がりながらも水平気味に収束しているのに対し、右端は上方へ屈曲してのびた後に収束している。進行方向と水面に対する刳船の船首・船尾の位置関係を考えると、右側が船首で、進行方向である可能性が高いと推測する。なお、大型船でオール (橈) を使用している場合、右下がりの櫂であれば右側が船首で進行方向と考えられ (柴田氏ご教示)、上記推測方向と一致する。また、右側の縦板表現の上に 2 本の線刻が認められる。これについては、縦板の上方に突出する 2 本の飾り艀装、もしくは舷側板の反りを表現したもの、のいずれかの可能性が推測される。前者であれば、右側が船首の可能性が高い (柴田氏ご教示)。

体部に描かれた船 (第 107 図下右) 線刻の切りあい関係から、最初に縦板と舷側板部分 (第 107 図下右の①)、次にその下の刳船部分 (同②) を描いていることが分かる。船の下方は磨滅や欠損が激しいが、口縁部の船のように櫂と推定される斜線の痕跡は認められず、表現されていない可能性が高い。

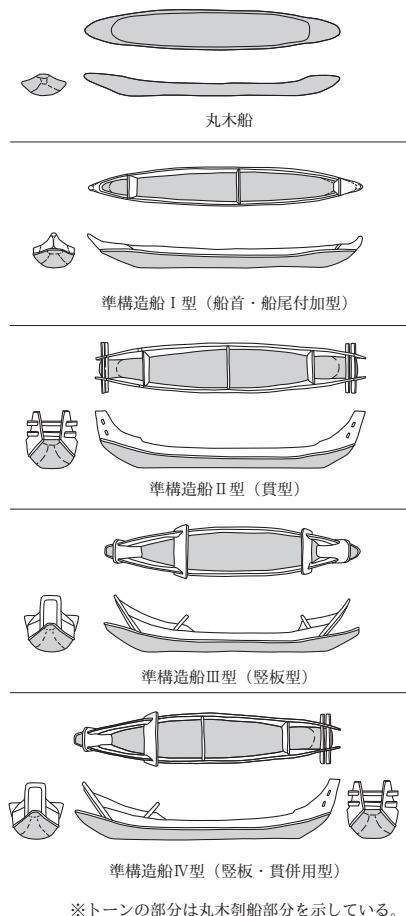
c 船以外の線刻について (第 107 図上の展開図)

船以外の線刻については具体的な表現対象物が判然としないが、以下では口縁部の線刻について概観する。

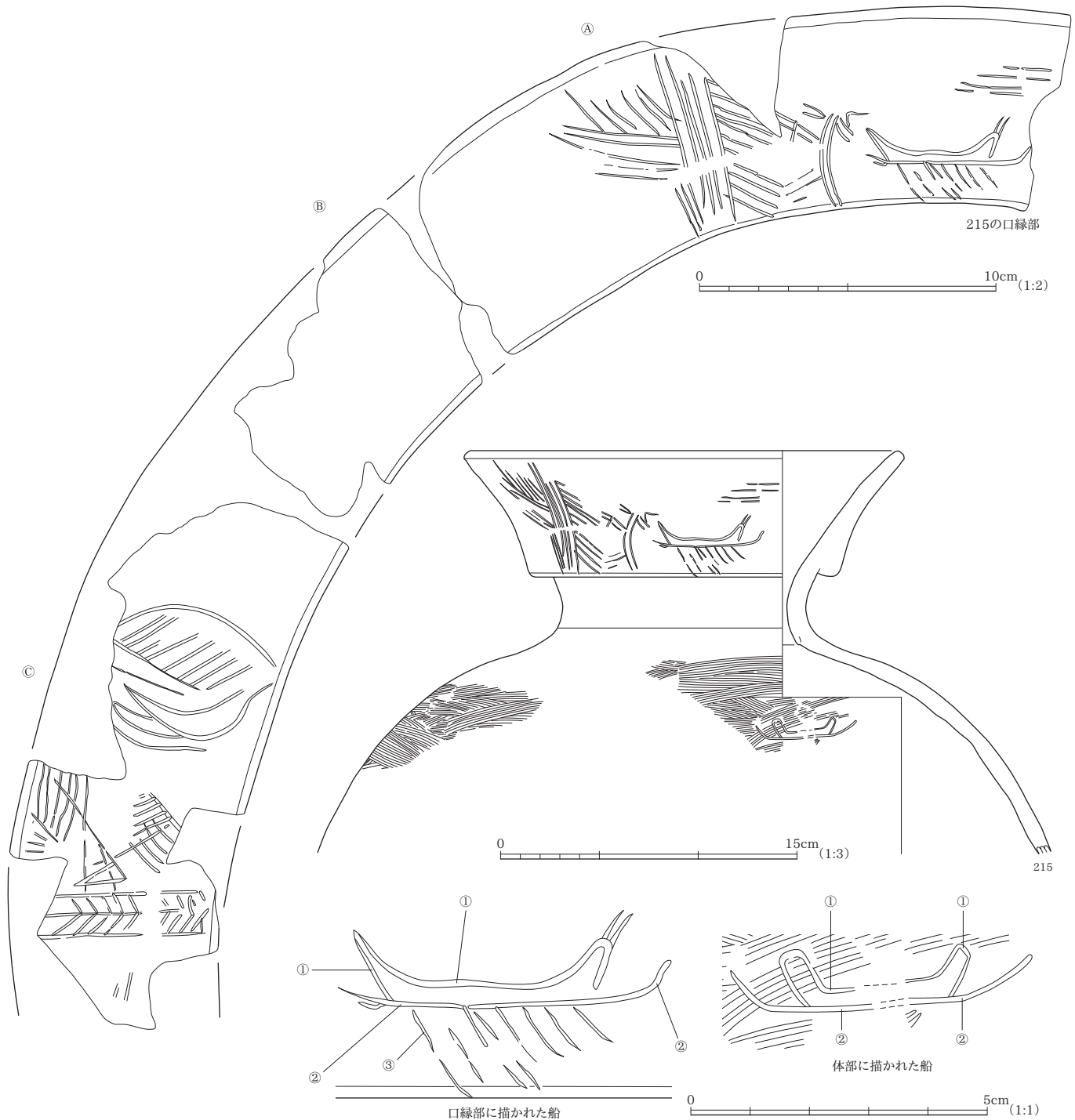
口縁部破片④ 破片④の右側では、船の右上に横方向の 4 条の線刻が並行して描かれているほか、船の左側には各種線刻が認められる。右上の横方向の線刻は、丸木船もしくは水面を表現している可能性が推測される。丸木船であるとすれば船団となる。線刻の幅は櫂と推定する線と同様、比較的狭い (細い)。

また、船のすぐ左側の線刻は、反時計方向に 90° 回転すると鹿の描写に類似している (石黒立人氏ご教示)。

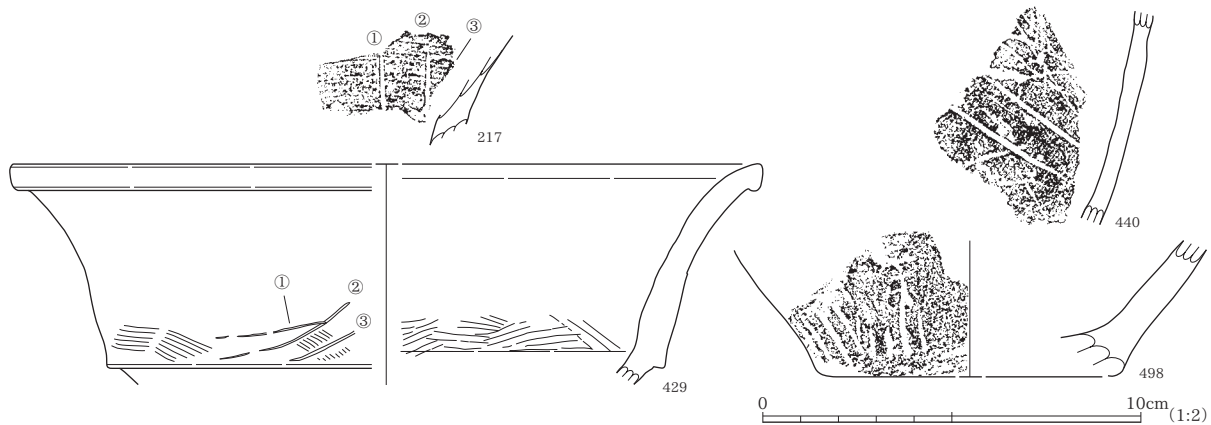
破片④の左側では、縦方向の並行する 5 条の線刻があり、その左右には斜め方向の並行する線刻が切り合い



第 106 図 準構造船の分類 [柴田 2021a]



第107図 道正遺跡の船が描かれた線刻土器(215) (S=1/3、口縁部帯はS=1/2)と船の線刻部分拡大図 (S=1/1)



第108図 道正遺跡の船が描かれた線刻土器(215)以外の線刻土器 (S=1/2)

をもちながら複数描かれている。

口縁部破片㉔ 破片㉔の左部分には縦方向に綾杉紋状の図像が描かれている。線刻の切りあい関係から、縦方向の線を3本並行に引いた後、その中央の縦線を中心に二又状に線が描かれている。

また、その図像のすぐ右隣には一部格子目状の線刻などが確認され、右上には横方向の並行する5条の線刻がある。なお、後者の線刻の幅は比較的狭く、口縁部破片㉔右上の横方向の線刻と類似する。

破片㉔の右部分には、縦方向の弧状や直線の線刻、斜め方向の直線状の並行する線刻などが確認できる。春成秀爾氏の論考〔春成1991〕を参考にすれば、鳥もしくは竜を記号化したものと一部類似する。

以上、線刻土器の215を中心に見てきたが、現時点で弥生・古墳時代における日本海側最北の船を描いた線刻土器の事例といえる。道正遺跡において2隻の準構造船が描かれた線刻土器が出土したことは、当時の社会や地域史を考えるうえで重要である。すなわち、古墳時代前期の日本海側における古墳分布圏の北限域にあたる越後平野において、大型の準構造船による海上交通がすでに行われていたことが考古資料によって明らかとなったといえる。

道正遺跡の中層（古墳時代前期）の地形をみると、調査区の西側で地形の急激な落ち込みが確認されている（第8図、図版6・25など）。花粉や珪藻分析、樹種・種実同定などの自然科学分析結果から、古墳時代前期において遺跡周辺は沼沢湿地環境にあったと推定された（第IV章第5節）。また、地質学の面からボーリングデータを用いた越後平野の古地理が復元されている〔鴨井2002、鴨井・安井2004など〕。古墳時代前期の古地理については復元されていないが、前後の平安時代（第109図 約1000年前）や弥生時代後期（約2000年前）の古地理図が復元されている。前述の「B道正遺跡の中層遺構・遺物から見た遺跡の性格」にあるとおり、道正遺跡周辺は広い範囲で湿原、湿地が広がるのに加え、海側では広い範囲で潟湖、沼沢が存在する古環境であったと推測される。

さて、柴田昌児氏は青谷上寺地遺跡と袴狭遺跡の船画について詳細な分析を行い、港湾性集落付近のラグーン（潟湖）における海上儀礼に伴うパレードの実景を描いたものと解した〔柴田2021a〕。道正遺跡の線刻土器（215）の口縁部に描かれた大型の準構造船も、日本海から信濃川・阿賀野川の河口などを経て、道正遺跡近辺のラグーン（潟湖）へと入ってきた船、船団を描いた可能性があろう。

#### 4) 道正遺跡における古墳時代の主な外来系土器などについて

本項では道正遺跡における古墳時代の主な外来系土器のほか、県内において出土例が少ない形態や特徴的な土器などについて器種別に記す（第110図）。

**高杯** 東海系高杯（第110図（以下省略）4・263）は高杯の中で主体を占める細別器種となっている。

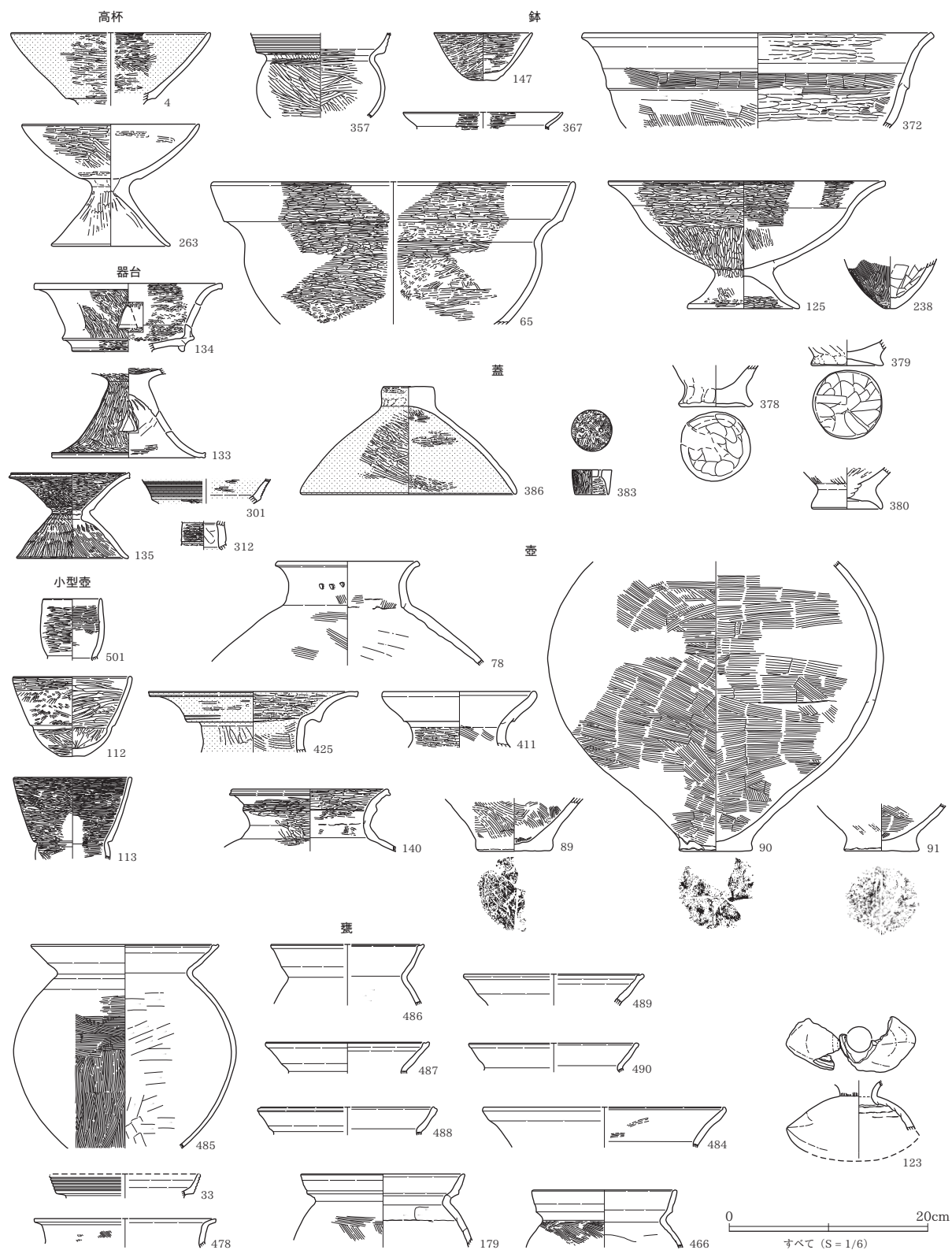
**器台** 脚部に三角形の透かし孔を穿つ器台が1点出土している（133）。県内では古墳時代前期において脚部に三角形の透かしを穿孔する事例は少ないが、比較的、阿賀野川以北に多い傾向がある（正尺C遺跡、野中土手付遺跡（第103図））。なお、同じ土坑から出土している受部に三角形の透かしを有する装飾器台（134）とは、海綿骨針や細かな長石・石英を定量含む点など胎土が類似しており、同一個体である可能性が高い。

受部の口縁に擬凹線を施す器台が1点出土している（301）。また、畿内系のいわゆるX字形器台が1点存在する（135）。ほかには筒状で短い脚柱部が1点出土している（312）。外面は横方向の細かいヘラミガキが施される。

**鉢** 有段の口縁部に擬凹線文を有する鉢が少量出土している（357など）。道正遺跡では、北陸南西部系の口縁



第109図 約1000年前の越後平野の古地理図  
〔鴨井・安井2004から〕



第110図 道正遺跡における主な外来系土器など

部に擬凹線文を施した土器、あるいは擬凹線を意識して作られている土器は、器台や鉢、甕などで確認できるが出土量は少ない。

147や367は、管見の限り県内での出土例が少ない形態と考える。なお、367は器壁が非常に薄い精製品であり、細かい粒子の(金)雲母を多く含むなど異質な胎土といえる。



有段口縁の大型の鉢（65・372）は県内での類例は多くはない。また、口縁部が有段にならない大型の鉢（125）も県内での事例は少ない。

238 は尖り底状の特異な形状で、別の器種となる可能性もあるが、内面調整はヘラを回転させるなど底部の整形・調整と共通しており、「尖底鉢」（滝沢 2019a）の可能性が推測される。

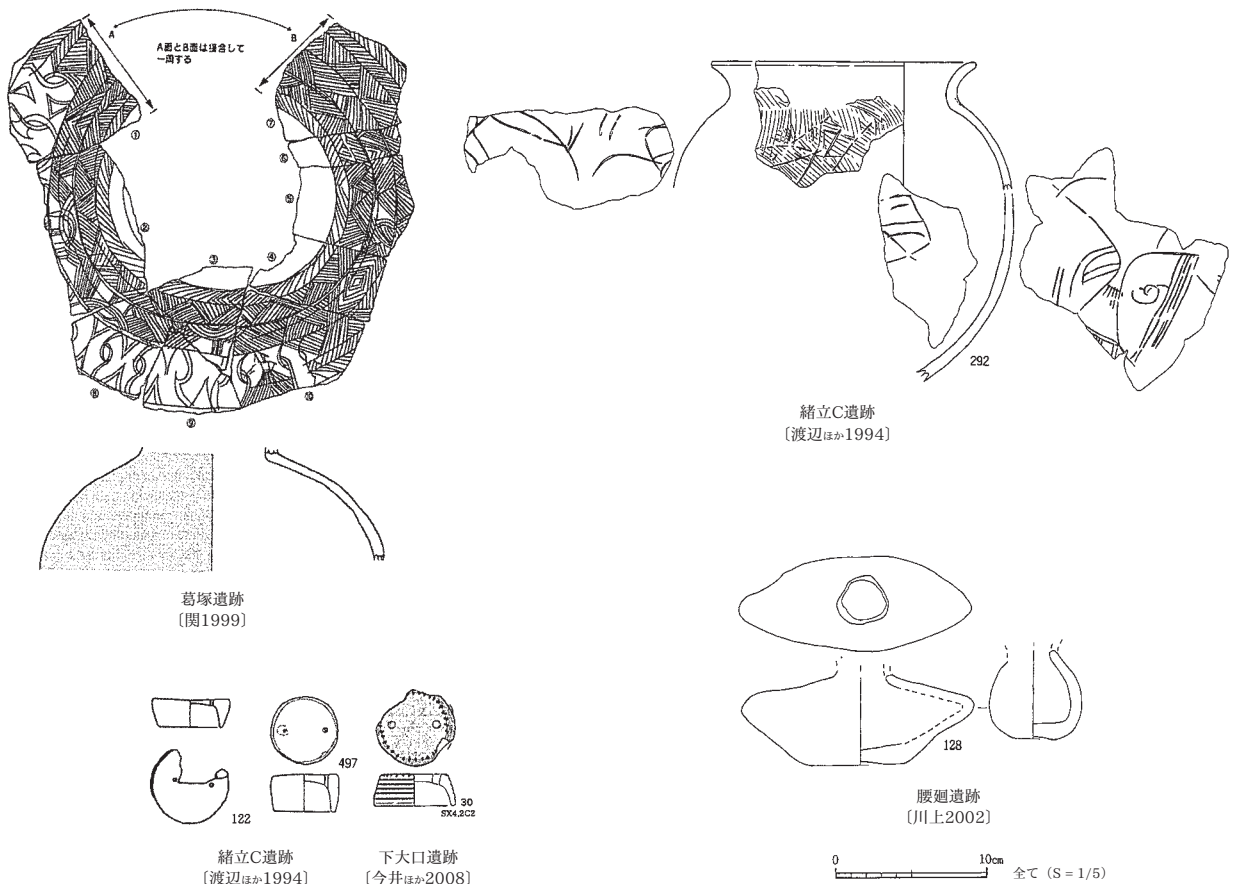
ほかでは、上げ底もしくは低台付きの鉢（378～380）がある。378・379 は底部外面にナデの痕跡を明瞭に残すなど特徴的なつくりである。県内では阿賀野川周辺や阿賀北（阿賀野川以北）地域に比較的多い可能性がある。

**蓋** 大型の蓋（386）が1点出土している。県内での事例は少ない。また、天井部2か所に穿孔のある蓋（383）が1点出土している。赤彩された精製品である。県内においてこの種の蓋は、道正遺跡（1点）のほかに緒立遺跡（2点 新潟市西区）と下大口遺跡（1点 新潟市北区）で計4点出土している（第111図）。

**壺** 小型のものでは東海系のヒサゴ壺（501）が1点確認できる。県内での事例は多くない。また、畿内系の有段で口縁部が比較的長く、体部が浅い小型の壺（鉢）（112・113）も県内での出土例は多くはない。器壁が薄い精製土器であり、小型丸底壺の古相あるいは祖型の形態と考えられる。

大型の壺では、肩部から体部にかけて直線気味に外方へ広がる壺が2点出土している（78・80）。肩部が丸味をもって体部へと伸びる一般的な壺と比べ特異な形態である。頸部が直立する畿内系の二重口縁壺（425）は道正遺跡で3点出土している。また、頸部と口縁部との間に段を有し、内湾する口縁部の壺が1点出土している（411）。四十石遺跡や曾根遺跡（新発田市）で出土しているものの県内での類例は少ない。有段口縁の壺140は山陰系と推測する。なお、底部外面に木葉痕をもつ土器が3点出土している（89～91）。網状葉脈圧痕1点（89）、平行葉脈圧痕2点（90・91）である。

**甕** 畿内系のいわゆる布留系甕が6点出土している（485～490）。県内における遺跡別の布留系甕の出土数



第111図 県内の古墳時代前期の主な絵画土器（上）と穿孔のある蓋（左下）、皮袋形土器（右下）

としては、新潟市四十石遺跡、上越市下割遺跡、同津倉田遺跡に次いで4番目の多さである。なお、体部が遺存する布留系甕(485)の調整を見ると、体部外面上位は横方向のハケメ、体部外面中位～下位は縦位のハケメ、体部内面はヘラケズリであるなど、布留甕と同様の調整技法が観察される。なお、土器の胎土は、細かい長石や石英、(金)雲母を一定量含むなど、異質な胎土といえる。

比較的長い口縁部が直線的あるいは内湾気味にのび、口縁端部を上方へ少し摘み上げる大型の甕(484)が1点出土している。県内での類例は少ないと推測する。

有段口縁で口縁部に擬凹線をもつ甕(33)は1点と出土量は少ない。なお、擬凹線を有する土器は、前述のとおりほかに器台や鉢、壺でも確認できるが数は少ない。478の口縁部は、端部を外方へ直角気味に屈曲させるなど特異な形態である。ほかには、いわゆる山陰系の有段口縁甕が2点出土している(179・466)。このうち179の胎土は、海綿骨針を多く含み、黒色粒子が定量含まれるほか、微細な長石・石英、(金)雲母が確認できるなど、在地の土器とは異質である。

その他 皮袋形土器(土製品)が1点出土している(123)。県内では、管見の限り腰廻遺跡(阿賀野市)出土の1点(第111図)に限られる希少品である。

以上、おもな外来系土器や県内での出土例が少ない土器を中心に道正遺跡の古墳時代の土器について概観した。布留系甕のまとまった出土や皮袋形土器などは、日本海ルートによる西方との関連を示すものといえよう。なお、道正遺跡と四十石遺跡は河川や潟湖の近くの砂丘に位置し、古代には港のような機能をもつ点など類似点が多い。日本海から内陸への玄関口、結節点としての役割が、両遺跡で比較的多くの布留系甕が出土する背景のひとつと考えられる。また、天井部に2孔穿つ蓋、皮袋形土器(土製品)などの分布に加え、装飾器台の特徴、線刻による絵画土器の分布(道正:2隻の船画、緒立C遺跡:人面画か、葛塚遺跡:人物画)など(第111図)から、道正遺跡の古墳時代の土器は信濃川の河口付近や阿賀北地域の土器と類似点が多いといえる。日本海や潟湖(ラグーン)、信濃川・阿賀野川の2大川、そしてそれらをつなぐ支流河川、あるいは砂丘間低地などの内水面交通を背景に、それらの地域、遺跡間で活発な往来が行われていたことが示唆される。

## F 道正遺跡から出土した縄文晩期中葉土器の編年的位置づけ

道正遺跡から出土した中期前葉、後期、晩期前葉に属する縄文土器はごくわずかである。また晩期後葉に属する可能性があるものは少量確認できた。だが資料の出土状況等から、その位置付けを明確にすることは困難と判断した。

そのため主体的に出土した晩期中葉の土器(分類ではIV群土器)を対象に、従来の研究成果を考慮した上での編年的位置づけを示すこととした。『新潟県の考古学Ⅲ』で示された縄文晩期中葉の編年〔渡邊2019〕を基に中葉を1～3期に区分し、2期は前後に細分できる可能性があることから2a期、2b期とした。そして近接する新潟市大沢谷内遺跡や五泉市矢津遺跡等から出土した資料と比較して、本遺跡出土土器の様相を検討することにした。

### 1) 中葉1期

大洞C1式に併行する時期である。本遺跡ではIV群土器(以下略)浅鉢Aに相当する破片資料が少量確認できるだけである。浅鉢以外の器種は確認できなかった。

新潟市内における同段階の資料として、大沢谷内遺跡Vc層(SD192Ⅲ層)から出土し、「1段階」に位置付けられている浅鉢・深鉢が挙げられる。彫去手法により雲形文が施され、ネガ部分に入念なミガキが施されている〔伊比2012〕。

### 2) 中葉2a期(第112図)

大洞C2式古段階に併行する時期である。本遺跡では浅鉢B(31・32)、鉢A(64～66)が相当すると考えられる。雲形文は横に間延びして直線的な傾向を示している。浅鉢は31のように体部が丸みを持ち始めるものや、

32のように口縁部文様帯が沈線化するものが認められる。これらは下越地方における当該期の土器群と共通した傾向である。この段階の深鉢・壺は特定できなかった。後述する中葉 2b 期の土器群の中に含まれている可能性もある。

新潟市内における同段階の資料として、大沢谷内遺跡 Vc 層 (SD192 II～I 層) から出土し、「2 段階」「3 段階」に位置付けられている浅鉢・鉢が挙げられる。浅鉢は底径が大きく、口縁部に装飾を施すものがある〔伊比前掲〕。また五泉市矢津遺跡で浅鉢 B6 類に分類されているものは、口縁部文様帯が沈線化し横に間延びして直線的な雲形文が施されている〔荒川 2009〕。いずれも本遺跡の当該期資料に共通した特徴が見られる。

### 3) 中葉 2b 期 (第 113 図)

大洞 C2 式中段階に併行する時期である。本遺跡では浅鉢 B (38・40・41)・C (46・49)、鉢 A (68・70)・B (75・77・78)、深鉢 A (105・106)、壺 A (112・113) が相当すると考えられ、前段階と比べて資料数は大幅に増加する。

浅鉢は口縁部下に無文帯を形成する。前段階と比べて体部文様帯は狭小化しており、雲形文は前段階のそれと比べて簡素化する。また 46・49 のように無文帯下に溝底の刺痕が巡るものも見られる。これらは前段階と同様に下越地方における当該期の土器群と共通した傾向と言える。

鉢・深鉢に関しては狭小化した体部文様帯内に、68・70・105・106 のように簡素化した雲形文を施すものと、75・77・78 のように横位 C 字状文が巡るものが見られる。後者に類似した文様が巡るものとして矢津遺跡浅鉢 A6・B7・B8 類〔荒川前掲〕があるが出土数は少ない。本遺跡のように一定数の出土が見られる遺跡は周辺で確認できていない。

新潟市内における同段階の資料として、大沢谷内遺跡 Vb 層から出土し、「4 段階」「5 段階」に位置付けられている浅鉢等が挙げられる〔伊比前掲〕。その中には雲形文が簡素化することで無文部が鈎針状のモチーフとなるものが見られ、類似したモチーフは本遺跡 106 等でも確認できる。

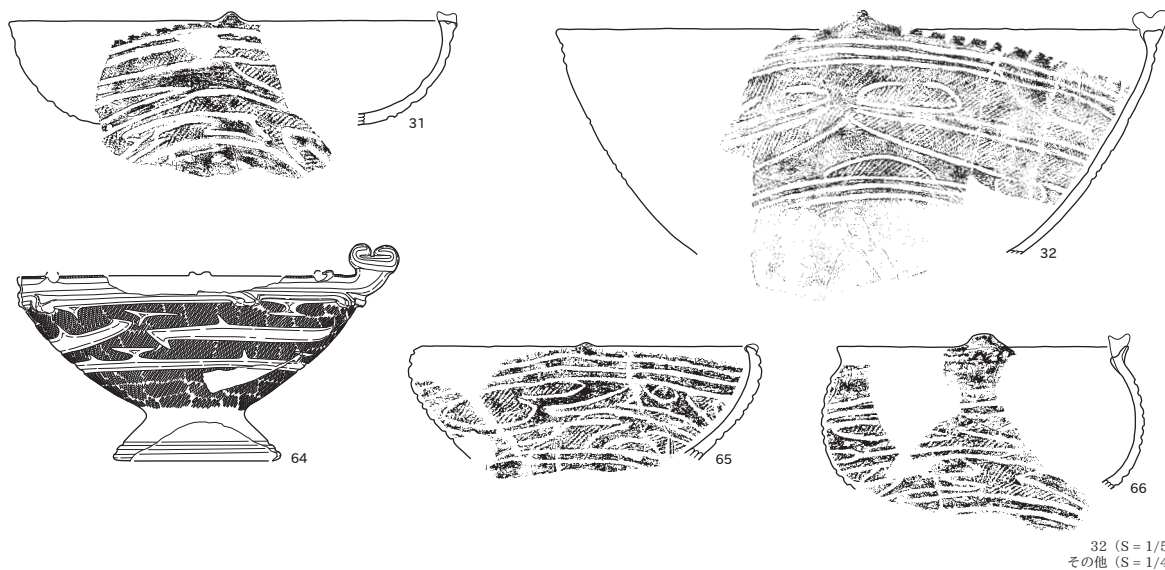
### 4) 中葉 3 期 (第 114 図)

大洞 C2 式新段階に併行する時期で、新潟県では三条市上野原遺跡を標式とする上野原式が設定されている。本遺跡では浅鉢 C (52・53)・D (56・57・59)、鉢 C (81・84・85)、深鉢 B (107)・C (110)、壺 B (117)・C (137～139) が相当すると考えられ、前段階と同様に資料数は多い。

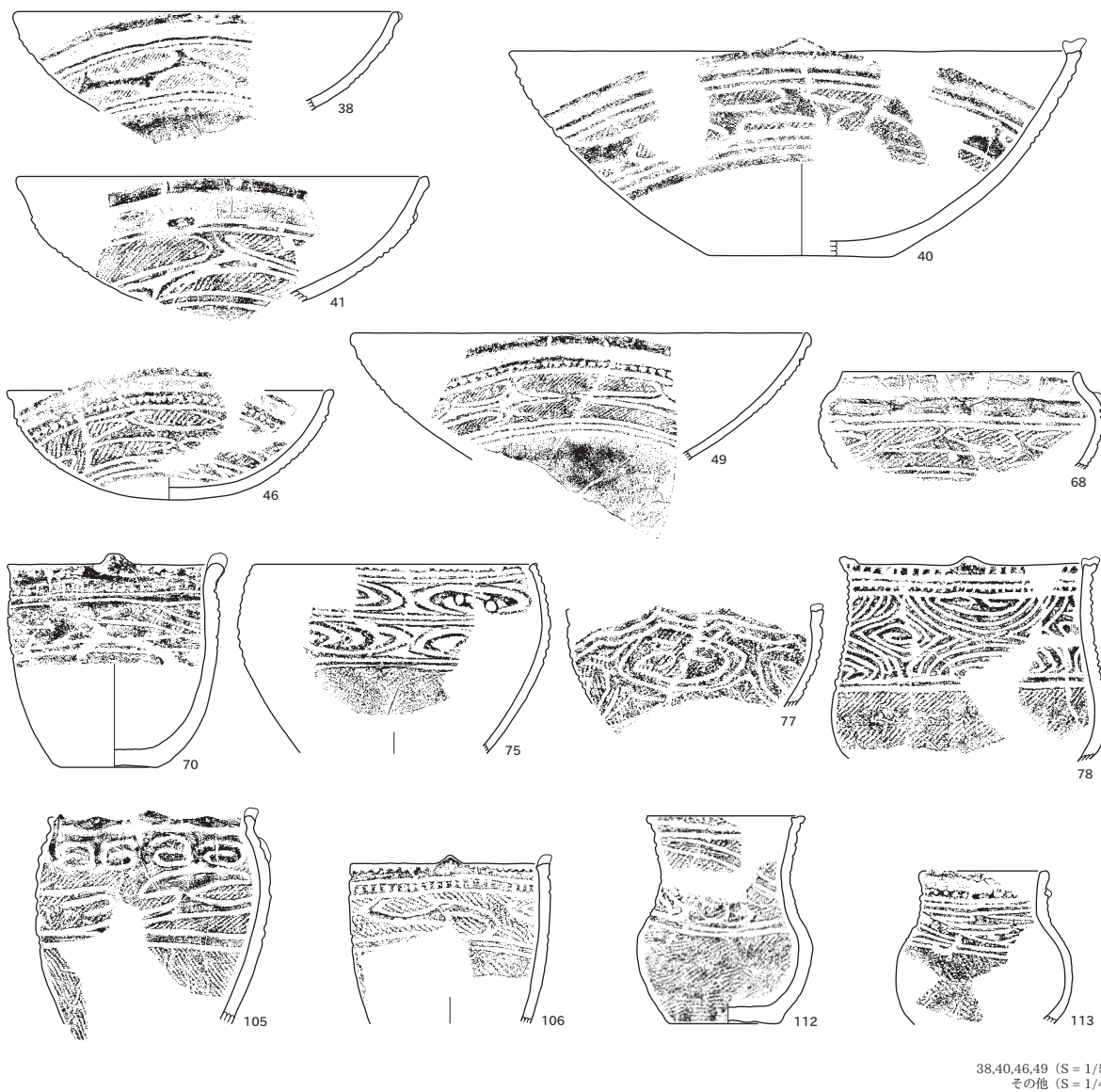
浅鉢は前段階にもある溝底の刺痕が巡るもの (52・53) に加えて口縁部の無文帯下に眼鏡状隆帯文が巡るもの (56・57・59) が見られる。前者の体部文様帯内には横位 C 字状文が上下に連結するなどして、工字状のモチーフを形成している。後者の特徴である眼鏡状隆帯文は上野原式の標式遺跡である三条市上野原遺跡出土土器〔中島 1981〕に見られる (第 115 図)。上野原遺跡出土土器の体部文様帯内には弧状文・楕円文・三角形文等の単位文が描かれている。一方本遺跡出土土器の体部文様帯内には間延びした雲形文の要素が残っており、単位文様化までには至っていない。そのため溝底の刺痕が巡る土器と共に、上野原式よりは一段階古い直前段階として位置付けられるものと考えられる。

鉢は体部上半に三叉状沈線文が巡る (81・84・85)。本遺跡では出土数が多く、器形・文様構成等に様々なバリエーションが見られる。同様のモチーフは深鉢 (110)、壺 (139) でも確認できる。他には横位 C 字状文が上下に連結して工字状のモチーフを形成する深鉢 (107)、壺 (117) がある。体部上半に三叉状入組文を施す壺 (137・138) は福島県郡山市一人子遺跡出土土器〔馬目・古川 1970〕に類例が見られるもので、南東北地方の影響が本遺跡に及んでいることが考えられる。

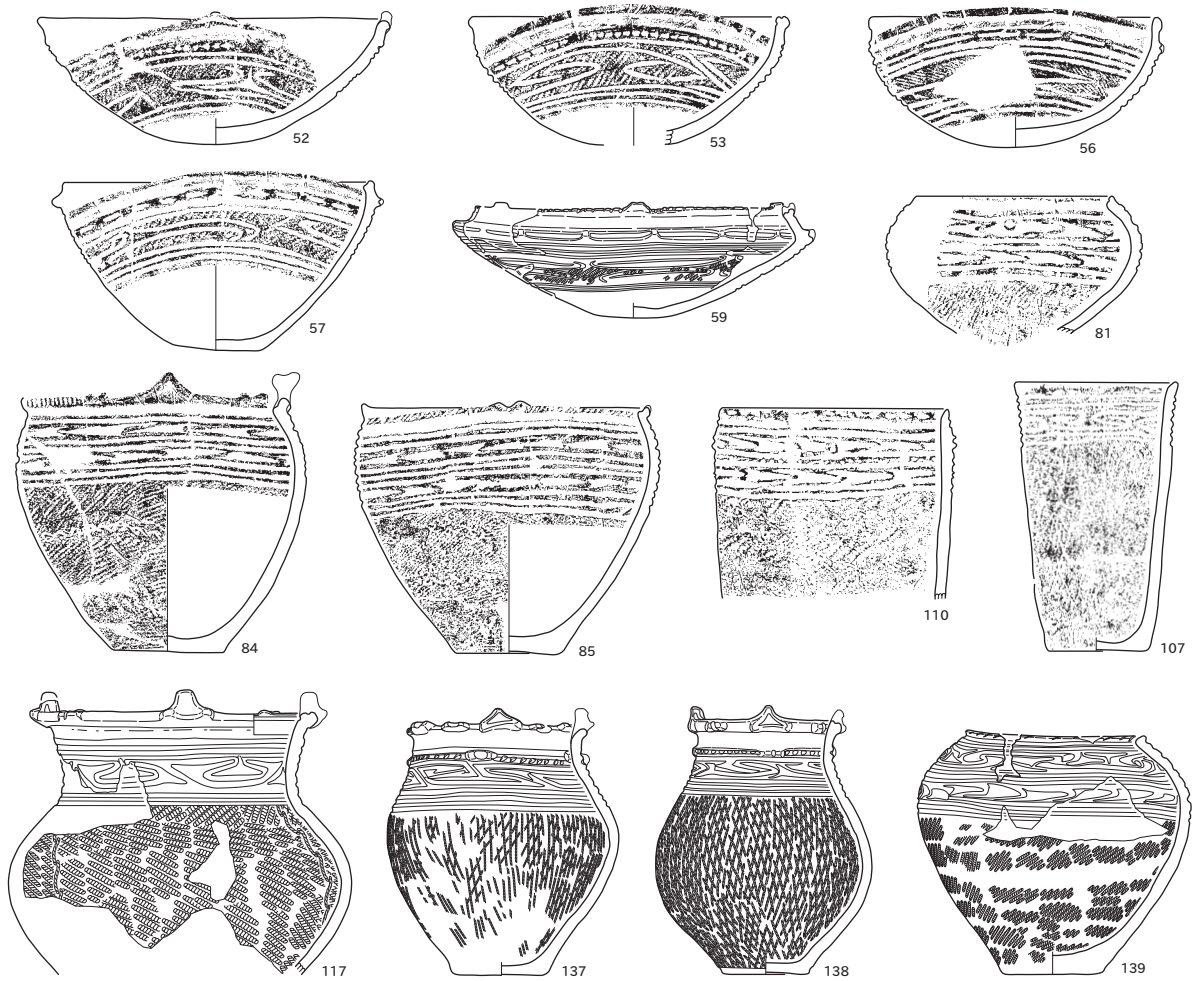
新潟市内における同段階の資料として、大沢谷内北遺跡出土土器〔伊比 2010〕の一部が該当すると考えられる。矢津遺跡では横位 C 字状文が単位文となる浅鉢 B8・D1 類が指標となる「IV c 期」の土器群〔荒川前掲〕が挙げられる。



第112図 道正遺跡中葉2a期の土器

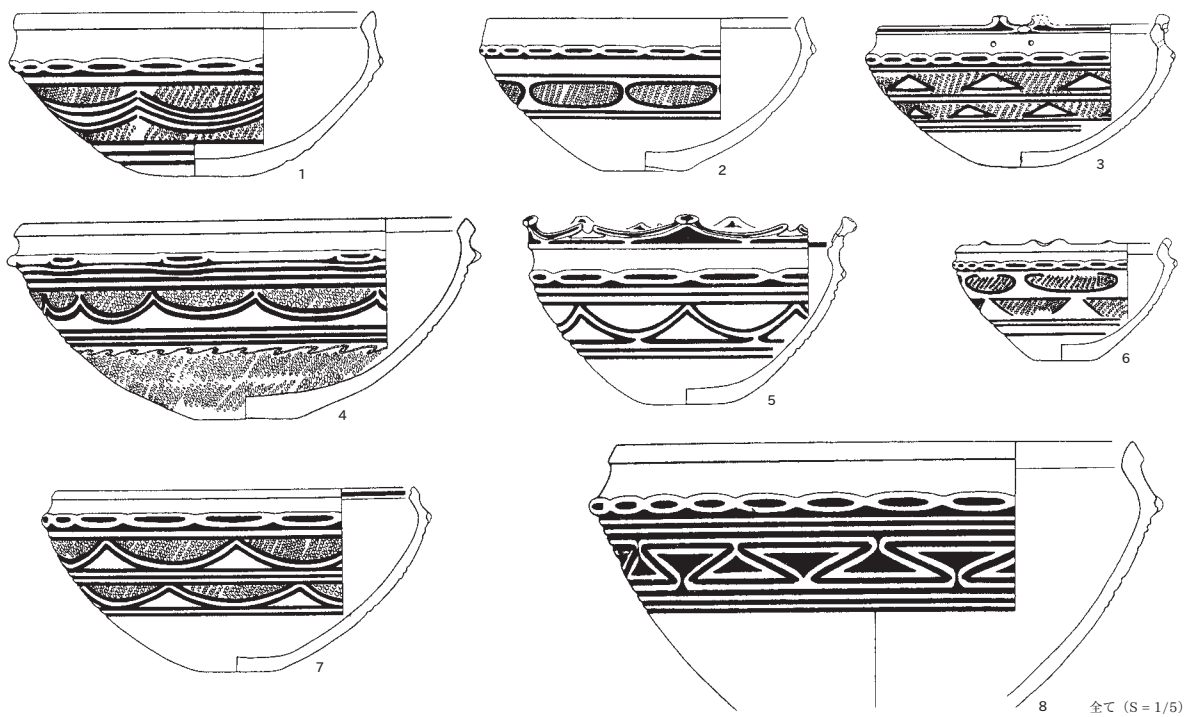


第113図 道正遺跡中葉2b期の土器



第114図 道正遺跡中葉3期の土器

52,53,56,57 (S=1/5)  
その他 (S=1/4)



第115図 上野原遺跡出土土器（〔荒川2009〕第4図の一部を転載）

全て (S=1/5)

### 5) 小 結

道正遺跡から出土した縄文土器の中で主体となる時期は、晩期中葉 2b～3 期（大洞 C2 式中～新段階併行期）となり、その前後の時期の土器はわずかに見られるだけである。また 3 期の土器も上野原式直前段階に限定されると考えられ、大洞 C2 式新段階併行期の中でも古い段階で収束するものと想定できる。本遺跡で多く出土した三叉状沈線文が巡る鉢や三叉状入組文を施す壺は、矢津遺跡や村上市元屋敷遺跡〔野田 2002〕等、下越地方に位置する当該期遺跡で確認できる。一方中越地方に位置する上野原遺跡では、これらの土器は確認できていない。こうしたことを考慮すれば、本遺跡Ⅳ群土器は北陸系・北信系がわずかに見られるものの、南東北系が主体となる下越地方の様相にほぼ当てはまっている。

周辺の遺跡との比較では、大沢谷内遺跡の主体となる時期は晩期中葉 1～2b 期であり、本遺跡が後出していることが分かる。大沢谷内遺跡に後続すると考えられる大沢谷内北遺跡は、主体となる時期が本遺跡と重なるものの出土量は少ない。また隣接する岡崎遺跡では縄文中期～晩期の土器が散発的に出土している。しかし本遺跡で主体となる晩期中葉 2b～3 期の土器は確認できなかった。本遺跡の集落は岡崎遺跡の範囲には広がっておらず、遺跡の性格も異なっていることが想定できる。

## 第2節 墨書土器

### A 道正遺跡

道正遺跡の発掘調査では 12 点の墨書土器が出土した。須恵器無台坏が 10 点、土師器無台碗が 2 点である。墨書部位は、須恵器無台坏では底部外面 5 点、底部内面 1 点、体部外面 3 点、底部外面と体部外面の両方に記すもの 1 点である。土師器無台碗では、底部外面 1 点、体部外面 1 点である。

文字を判読できたものは 9 点である（可能性のあるものも含む）。以下、主な文字について記す。なお、墨書土器の検索には、『青森県史資料編 古代 2 出土文字資料』（青森県史編さん古代部会 2008 年）、明治大学古代学研究所墨書・刻書土器データベース（[https://www.isc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj\\_bokusho.html](https://www.isc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bokusho.html)）を用いた。

墨 1（図版 50-100）は「木」である。墨 2（図版 46-18）も「木」の可能性が高い。どちらも須恵器無台坏の体部外面に倒位で記しており、墨書部位と文字の方向をあわせる意識がうかがえる。「木」の墨書土器は新潟市東区山木戸遺跡や加茂市馬越遺跡、柏崎市井ノ町遺跡などで出土している。

墨 4（図版 48-34）は須恵器無台坏の底部内面に「方」と記す。底部内面に文字を記す事例は、新潟市内では後述の岡崎遺跡に加えて、秋葉区上浦 B 遺跡や西区的場遺跡などでも確認される。「方」の墨書土器は阿賀野市発久遺跡や新発田市曾根遺跡などで出土している。

墨 6（図版 53-135）は土師器無台碗の体部外面に横位で「真」と記す。「真」の墨書土器は、後述の岡崎遺跡のほかに、新潟市内では西区釈迦堂遺跡や秋葉区中谷内遺跡で出土している。

墨 8（図版 53-136）は土師器無台碗の底部外面に「上」と記す。「上」の墨書土器は新潟市内では東区山木戸遺跡や江南区日水遺跡などで出土している。

墨 9（図版 50-84）は須恵器無台坏の底部外面に「且」と記す。「且」の墨書土器は新潟県内では初出とみられるが、字形が類似する「旦」の可能性のある墨書土器は新潟市秋葉区沖ノ羽遺跡で出土している。

### B 岡崎遺跡

岡崎遺跡の発掘調査では 34 点の墨書土器が出土した。須恵器が 24 点（無台坏 20 点、有台坏 2 点、坏蓋 2 点）、土師器が 9 点（すべて無台碗）、黒色土器が 1 点（無台碗）である。墨書部位は、須恵器無台坏では底部外面 13 点、底部内面 1 点、体部外面 4 点、底部外面と体部外面の両方に記すもの 1 点、底部外面から体部外面にかけて記すもの 1 点である。須恵器有台坏はすべて底部外面、須恵器坏蓋はすべて外面である。土師器無台碗では、底

部外面3点、体部外面6点である。黒色土器は底部外面である。須恵器無台坏20点のうち体部外面に記すものが4点(20%)であるのに対して、土師器無台椀9点のうち体部外面に記すものが6点(約66.7%)であり、器種によって墨書部位を異にする傾向がうかがえる〔小林・相澤2004〕。

文字を判読できたものは20点である(可能性のあるものを含む)。以下、主な文字について記す。なお、5点出土した「羽咋」については後述する。

墨13(図版141-17)は須恵器坏蓋の外面、つまみの右側に「与」と記されている。新潟市西区釈迦堂遺跡では「与止」と記された墨書土器が複数出土している。

墨19(図版144-67)は須恵器無台坏の体部外面に「θ」と記されている。「θ」は則天文字の「日」である。新潟市西区的場遺跡でも則天文字の「日」とみられる墨書土器が出土している。新潟県内出土の墨書土器における則天文字の事例は、新潟市江南区牛道遺跡(「天」の則天文字)や村上市鴨侍遺跡(「人」の則天文字)などで確認される。

墨29(図版148-164)は黒色土器無台椀の底部外面に「伊□」と記されている。2文字目は墨痕が明確で「継」の可能性はあるが、読み切ることができない。「伊継」とすれば、人名の可能性があろう。

墨31(図版141-15)は須恵器無台坏の底部外面に「佛」と記す。「佛」の文字は、新潟市江南区駒首湯遺跡出土第1号木簡の習書にみられるが、墨書土器では佐渡市竹田沖条里遺跡で出土している。

墨32(図版143-63)は「林」である。墨33(図版144-75)も「林」の可能性はある。どちらも須恵器無台坏の底部外面に記しており、墨書部位をあわせる意識がうかがえる。「林」の墨書土器は新発田市曾根遺跡で出土している。

墨34(図版144-72)は須恵器無台坏の底部外面に「見」と記す。「見」の墨書土器は、阿賀野市腰廻遺跡や柏崎市箕輪遺跡で出土している。

墨35(図版143-56)は須恵器無台坏の底部外面に「真」と記す。「真」は、前述の道正遺跡出土墨書土器(墨6)にみられるが、器種や墨書部位が異なり、また字形も異なる。

### C 岡崎遺跡出土「羽咋」墨書土器について

岡崎遺跡からは「羽咋」と記された墨書土器が4点(墨42(図版148-145)、墨43(図版148-155)、墨44(図版143-54)、墨46(図版144-71))、「羽咋」と推測される「□咋」と記された墨書土器が1点(墨45(図版144-78))出土した。墨44、墨45、墨46は須恵器無台坏、墨42、墨43は土師器無台椀だが、いずれも底部外面に記しており、器種に関わらず墨書部位をあわせる意識がうかがえる。

「羽咋」は能登国の郡・郷名である。能登国羽咋郡は能登半島の南西部に位置する。また、「羽咋」は同地を本拠地とする氏族のウジ名(氏族名)でもある。羽咋氏は、大化前代の能登国造の後裔氏族であり〔佐伯有清編2021〕、藤原京跡出土木簡(『飛鳥藤原京木簡二』3475)や平城宮跡出土木簡(『平城宮木簡七』11641)、平城京跡出土木簡(『平城京木簡一』77など)に氏族名の「羽咋」がみられる〔奈良国立文化財研究所1995、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所2009、同2010〕。岡崎遺跡出土の「羽咋」墨書土器は、郡・郷名を記したものか、氏族名を記したものか判別できないが、古代の越後と能登との関係を示す貴重な資料である。

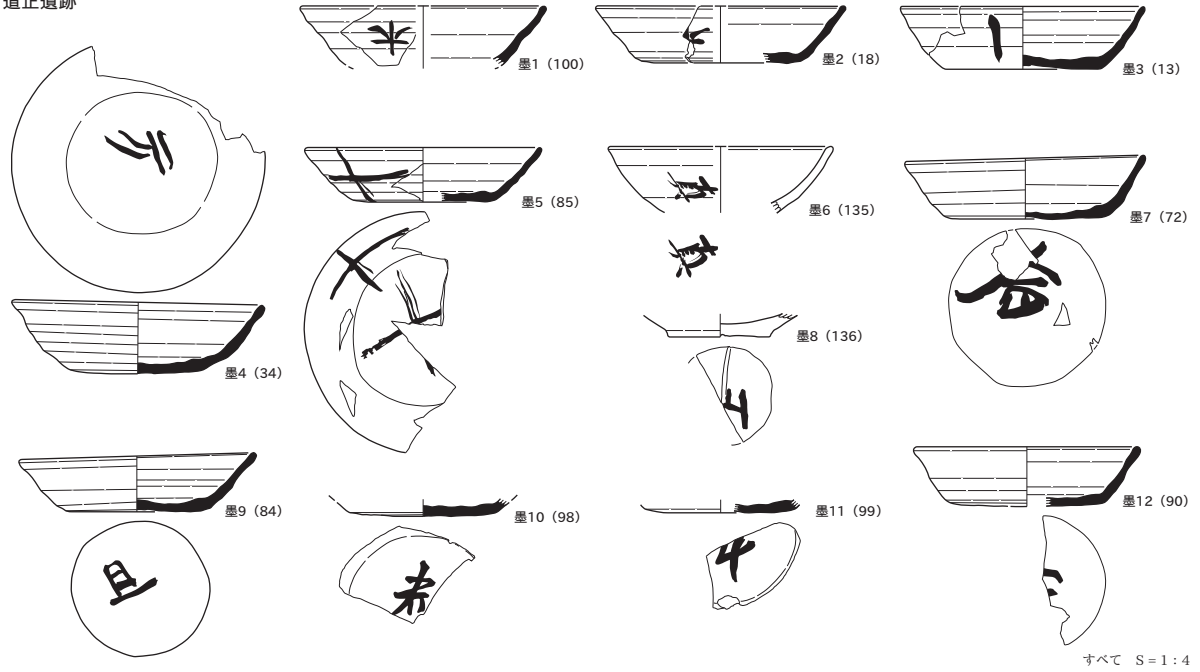
これまでにも、長岡市八幡林遺跡出土の第23号木簡に記された人名「能等豊万呂」(能等=能登)〔田中ほか1994〕から、古代における人々の移動のような、越後と能登とのつながりがあることが知られていたが、岡崎遺跡出土の「羽咋」墨書土器もそのことを示している。また、能登以外の北陸道諸国と越後との関係についても、新潟市江南区駒首湯遺跡出土の第1号木簡の氏族名「足羽臣」(越前国足羽郡を本拠地とする氏族名)〔渡邊ほか2009〕や、長岡市下ノ西遺跡出土の第19号木簡の氏族名「道君」(加賀国加賀郡を本拠地とする氏族名)〔田中ほか2003〕、長岡市八幡林遺跡出土の第4号木簡の氏族名「射水臣」(越中国射水郡を本拠地とする氏族名)〔高橋ほか1993〕などから知られる。

第64表 道正遺跡・岡崎遺跡出土墨書土器一覧

出土遺跡	墨書No.	図版No.	報告No.	出土位置			種別	器種	墨書位置	釈文	備考
				遺構	グリッド	層位					
道正遺跡	1	50	100		1D-10A16	V1a	須恵器	無台杯	体部外面、倒位	木	
道正遺跡	2	46	18	SK284	2C-1J18 2C-1J18	1・2 V1a	須恵器	無台杯	体部外面、倒位	□〔木カ〕	
道正遺跡	3	46	13	SK281	2C-1J23 2C-1J23	1 V1a	須恵器	無台杯	体部外面	—	
道正遺跡	4	48	34	P339	1D-10A3	1	須恵器	無台杯	底部内面	方	
道正遺跡	5	50	85		1C-10H25 1C-10I17・21	V	須恵器	無台杯	底部外面・体部外面	十(底外)/十(体外)	
道正遺跡	6	53	135		2C-2J8	V	土師器	無台碗	体部外面、横位	真	
道正遺跡	7	49	72		1C-10J19	V1a	須恵器	無台杯	底部外面	□〔益カ〕	
道正遺跡	8	53	136		2C-1H15	V	土師器	無台碗	底部外面	上	
道正遺跡	9	50	84		1C-10H25 2C-1I1	V	須恵器	無台杯	底部外面	且	
道正遺跡	10	50	98		1C-10J12	V1a	須恵器	無台杯	底部外面	□	
道正遺跡	11	50	99		2C-2J6	V1a	須恵器	無台杯	底部外面	□	
道正遺跡	12	50	90		2C-2I9	V	須恵器	無台杯	底部外面	□	
岡崎遺跡	13	141	17	SX3	2B-2A8 2B-2A3	1 Vc2	須恵器	杯蓋	外面	与	転用硯
岡崎遺跡	14	142	30		2B-2A11 2B-2A5・6・11・12	V Vc2	須恵器	杯蓋	外面	□	転用硯
岡崎遺跡	15	142	42		2B-2A9・4・11 2B-2A12	Vc2 Vc1	須恵器	有台杯	底部外面	□	
岡崎遺跡	16	141	16	Pit22	2A-3I19 2A-3I12・13・18 2A-3I14 2A-4H2 2B-2A18	1 Vc2 Vc Vc1 Vc2	須恵器	有台杯	底部外面	□	
岡崎遺跡	17	143	61		2A-3I7・1 2A-3I17 2A-3H23	Vc2 Vc1 Vc1・Vc2	須恵器	無台杯	底部内面	□	
岡崎遺跡	18	143	55		2B-1A21 2B-2A2・3	Vc2 Vc2	須恵器	無台杯	体部外面	十	
岡崎遺跡	19	144	67		2B-2A9	Vc2	須恵器	無台杯	体部外面	⊖(則天文字の「日」)	
岡崎遺跡	20	143	62		2A-3G10	Vc2	須恵器	無台杯	体～底部外面	[ ]	
岡崎遺跡	21	144	70		2A-3H19・22 2A-3H14・25	Vc2 Vc1	須恵器	無台杯	底部外面・体部外面	十(底外)/一(体外)	
岡崎遺跡	22	143	65		試掘49T 2A-2J19 2B-2A7	X Vc1 Vc2	須恵器	無台杯	体部外面	井	
岡崎遺跡	23	147	134		2A-2J20	Vc2	土師器	無台碗	体部外面、倒位	中	
岡崎遺跡	24	148	141		2B-2A16	Vc2	土師器	無台碗	体部外面	□	
岡崎遺跡	25	147	115		2A-2J23	Vc2	土師器	無台碗	体部外面	□	
岡崎遺跡	26	148	137		2B-2A8 2B-2A8	Vc1 Vc2	土師器	無台碗	体部外面	□	
岡崎遺跡	27	140	4	SK45	2A-3J8 2A-3J9 2A-2J15・10 2B-2A6	1 VII Vc2 Vc2	土師器	無台碗	体部外面	□	
岡崎遺跡	28	147	112		2A-3H17 2A-3H23	Vc1 Vc2	土師器	無台碗	体部外面	大	
岡崎遺跡	29	148	164		試掘49T 2B-2A11	X Vc2	黒色土器	無台碗	底部外面	伊□〔継カ〕	
岡崎遺跡	30	148	154		2B-1A17	Vc2	土師器	無台碗	底部外面	・・(墨点)	
岡崎遺跡	31	141	15	Pit4	2B-2A12 2A-2J20 2B-2A7	1 Vc2 Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	佛	
岡崎遺跡	32	143	63		2A-3H20・18 2A-3I16 2A-3H19・20	Vc2 Vc2 Vc1	須恵器	無台杯	底部外面	林	
岡崎遺跡	33	144	75		試掘49T	X	須恵器	無台杯	底部外面	□〔林カ〕	
岡崎遺跡	34	144	72		試掘49T 2A-2J14・19 2B-2A6・7・11	X Vc2 Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	見	
岡崎遺跡	35	143	56		2A-3H20 2A-3H15・20	Vc2 Vc1	須恵器	無台杯	底部外面	真	
岡崎遺跡	36	143	58		2B-2A7	Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	十	
岡崎遺跡	37	143	57		2A-2J15	Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	□	
岡崎遺跡	38	143	64		2B-2A16 2A-2J15	Vc2 Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	□	
岡崎遺跡	39	143	53		2B-2A7・12・16 2B-2A5・11	Vc1 Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	□	
岡崎遺跡	40	144	66		2B-2A11 2A-2J15	Vc2 Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	□	口縁灯芯痕
岡崎遺跡	41	144	76		2B-2A12	Vc1	須恵器	無台杯	体部外面	□	
岡崎遺跡	42	148	145		2B-2A4 2B-2A14	Vc2 Vc1	土師器	無台碗	底部外面	羽咋	
岡崎遺跡	43	148	155		2A-2J15	Vc2	土師器	無台碗	底部外面	羽咋	
岡崎遺跡	44	143	54		2A-2J15 2A-2J20	Vc2 Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	羽咋	
岡崎遺跡	45	144	78		2B-2A11・17 2B-2A12	Vc2 Vc1	須恵器	無台杯	底部外面	□咋	
岡崎遺跡	46	144	71		2A-2J23	Vc2	須恵器	無台杯	底部外面	羽咋	

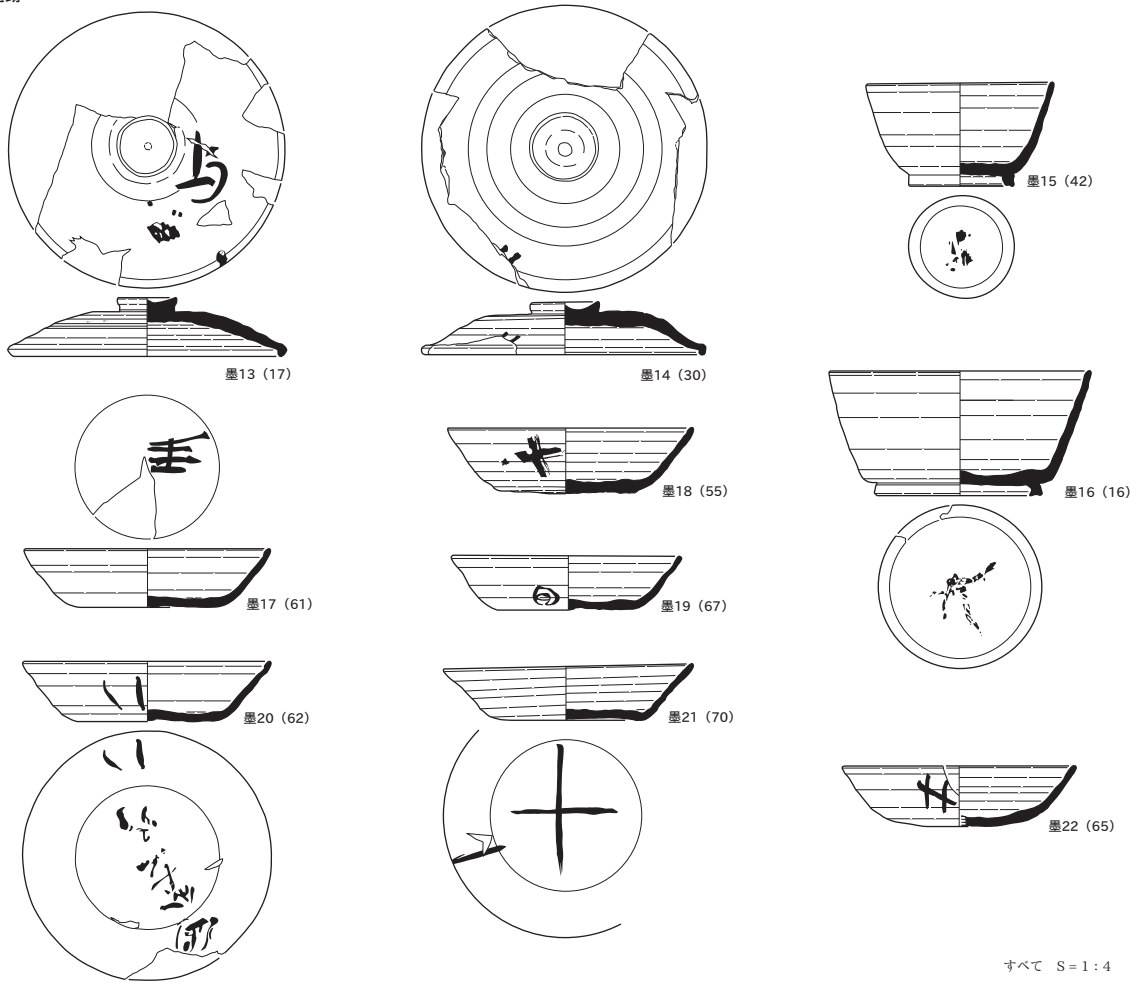


道正遺跡



第116図 道正遺跡出土墨書土器集成

岡崎遺跡



第117図 岡崎遺跡出土墨書土器集成1



## 第Ⅶ章 付 編 — 2021年度岡崎遺跡調査 —

### 第1節 調査に至る経緯と調査経過

岡崎遺跡は、平成30年主要地方道新潟中央環状線（嘉瀬・割野地区）道路改良工事に伴う試掘調査（2018128・新歴B第26号）で新たに発見され、地下に埋没した砂丘上に立地する古墳時代・平安時代の複合遺跡とされた。令和2年2月12・13日にかけて行われた主要地方道新潟中央環状線（割野地区）に伴う現道部内への用水路切り直し工事に伴う確認調査（2019211）により調査地北半に遺物包含層が残存することが確認された。事業者側との協議の結果、用水路工事の掘削深度が遺跡に影響を及ぼすため、令和3年11月26日付け新歴B第112号の7で着手報告を提出し本発掘調査を実施した（2021002 第5次調査）。

令和3年12月8日から諸準備を開始し、市調査担当・調査員の計2名で調査を開始した。12月9日は調査区内の湧水に対処するため、排水ポンプを設置した。12月10日は着手前写真と空中写真の撮影、測量基準点の設置を行った。12月13日は掘削中に2B-2D14・15・19・20の範囲においてⅦ層の黒砂が確認され、弥生土器が出土した。12月15日にはⅤ層から土師器・須恵器片が出土した。12月16日から調査区中央部のⅤ・Ⅵ層を掘り下げた。北に向かって緩やかに下る傾斜を確認すると共に、土師器や須恵器が複数と石鏃が1点出土した。12月17日には基本層序の撮影のため壁面を整備した。壁面の整備中にSX1を検出し、遺構底部より古代の土師器小甕など複数の遺物が出土した。12月20日には、調査区全体でⅦ層の黒褐色砂内で規定の掘削深度に達し、2B-1D18において縄文土器の底部が出土した。12月21日には2B-2D14のⅧ層上面においてSK2を検出した。12月23日には調査区全体の完掘写真の撮影、空撮、測量を行った。また、P3が検出され、古代の土師器が出土した。調査区内北部の旧河道（NR4）範囲内においてトレンチを掘り、確認を試みたが旧水路のカクランが深く、範囲の確認には至らなかった。12月24日は引き続き旧河道（NR4）確認のため更にトレンチを4か所設けて確認を行い、最終的に範囲の想定に至った。遺跡範囲の北端及び東端を確認したため、12月24日をもって調査を終了し、12月28日に現場事務所から撤収した。

### 第2節 遺 構（図版165、写真図版158、別表17）

岡崎遺跡（第5次調査）ではⅣ層以下で遺構が検出され、Ⅵa層上面で平安時代の性格不明遺構1基とピット1基、Ⅷ層上面で時期不明の土坑1基を検出した。遺構の計測値等は別表17に示した。

#### 1) 土 坑 (SK)

SK2（図版165、写真図版158）

2B-2D14に位置する遺構で、平面形は楕円形、断面形は皿状である。埋土は単層である。規模は遺構上端の長軸は1.48m、短軸は推定値であるが0.66mであり、深度は0.48mである。主軸方向はN-30°-Wを示す。遺物は確認されていない。

#### 2) ピ ッ ト (P)

P3（図版165、写真図版158）

2B-1D17・22に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円状である。埋土は単層である。規模は長軸0.48m、短軸0.36mを測り、深度は0.12mである。主軸方向はN-30°-Wを示す。古代の土師器無台碗かと思われる小片が出土した。

### 3) 性格不明遺構 (SX)

SX1 (図版 165、写真図版 158)

2B-1D22・23、2D2・3 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿状である。埋土は2層に分層され、レンズ状堆積である。規模は長軸 1.80m、短軸は残存値で 1.44m であり、深度は 0.47m である。主軸方向は N-30°-W を指す。土師器鍋や無台碗、須恵器無台杯を中心に多くの遺物が出土しており、SX1 から出土した遺物は出土土器全体の 28.7% (58 点) となっている (図版 166)。

## 第3節 遺 物 (図版 166、写真図版 159、別表 18・19)

岡崎遺跡第5次調査では縄文時代、古墳時代、古代の遺物が出土した。遺物総量はコンテナ (内寸 54.5×33.6×10.0cm) 換算で3箱である。内訳は古代の土器2箱、縄文～古墳時代土器0.5箱、石器0.5箱である。

掲載資料の提示は実測図・写真で行い、縮尺は図面図版を1/3、写真図版を1/2で掲載した。各種土器・石器の分類・記述、観察方法は岡崎遺跡 (第4次調査) に準ずるものとする。

### A 古 代 土 器

#### 1) 概 要

出土した古代の土器の総点数は157点、総重量は2,147gである。土師器・須恵器・黒色土器が出土しており、各種別の割合は土師器が点数比で81.5% (128点)、須恵器が16.6% (26点)、黒色土器が1.9% (3点) と土師器が主体である。遺構出土土器は全てSX1からの出土であり、点数は58点で重量は477gである。点数比にして古代土器の22.2%がSX1から出土している。遺跡の主体となる砂丘頂上部からの廃棄や流れ込みと考えられ、須恵器の多くは佐渡小泊窯跡産と推定される。主体となる時期は9世紀後半である。

#### 2) 遺 構 出 土 土 器

SX1 (図版 166、写真図版 159)

須恵器無台杯 (1) と土師器鍋 (2) を図化した。1 は須恵器無台杯の口縁部から体部にかけての破片であり、口径は 12.7cm を測る。ロクロ整形されており、胎土は精良で白色小粒子を多く含み、器面には黒色の斑点が確認され、ごく少量の黒雲母も確認されている。産地は佐渡小泊窯跡群と推定される。2 は土師器鍋の口縁部から体部にかけての破片で、口径は推定で 43.4cm を測る。ロクロ整形されており、内外面ともにカキ目とハケ目が確認できる。胎土には黒雲母を多く含み、長石や白色凝灰岩、赤色粒子も含む。

#### 3) 包含層出土土器 (図版 166、写真図版 159)

須恵器杯蓋 (3)、土師器無台杯 (4)、土師器長甕 (5) を図化した。3 は須恵器杯蓋の口縁部から体部にかけての破片であり、口径は 14.0cm を測る。胎土は精良で白色小粒子を多く含み、器面には黒色の吹き出しが確認される。産地は佐渡小泊窯跡群と推定される。4 は土師器無台碗の口縁部から体部にかけての破片で、口径は 17.1cm を測る。胎土は普通で長石や石英、白色凝灰岩、黒雲母なども含まれる。また、体部内面にはススが付着する。5 は土師器長甕の口縁部から体部にかけての破片であり、口径は 19.6cm を測る。ロクロ整形である。胎土はやや粗く、長石を多く含み、石英や雲母、白色凝灰岩、赤色粒子なども確認される。また、内面の口縁部から体部にかけてのくびれ部分にコゲの付着がみられる。

### B 古 墳 時 代 土 器

出土した古墳時代土器の総点数は19点で、総重量は174gである。点数比にして出土遺物全体の9.4%である。2B-2D3及び周辺グリッドで78.9% (15点) が出土している。

## C 縄文・弥生土器

### 1) 概 要

出土した縄文・弥生土器の総点数は26点で、点数比にして出土遺物全体の12.9%である。縄文土器の分布に関しては、73.1% (19点) の遺物が2B-2D3・8から出土しており、それ以外の遺物は周辺グリッドから出土している。接合や復元ができる個体は存在しなかった。

### 2) 包含層出土土器 (図版166、写真図版159)

甕(6)と壺(7・8)と浅鉢(9)を図化した。6は弥生土器の甕と思われる口縁部の破片である。法量は口径が推定値で20.0cmを測る。胎土に石英を含み、内外面ともに炭化物が付着している。口縁端部には刻みが施され、外面はハケメが確認される。7は壺と思われる土器の底部である。出土位置は2B-2D3である。底部径は5.5cmを測る。胎土には石英や白色凝灰岩を含む。外面には条痕文が施文されている。8は壺の体部の破片である。出土位置は2B-2D3である。法量は体部最大径で10.9cmと推定される。胎土には石英と白色凝灰岩を含む。外面には炭化物が付着しており、RL縄文が施文されている。9は浅鉢の体部の破片である。出土位置は2B-2D8である。小片であるため、各法量の推定は困難である。胎土には白色凝灰岩を含み、内面に樹脂状のものが付着している。また、外面には磨消縄文が施文されている。

## D 石 器 (図版166、写真図版159)

出土した石器は石鎌1点、両極剥離痕のある石器1点、チップ1点を含む剥片3点である。このほか搬入礫の軽石1点が認められる。

1は尖頭部先端及び基部の中茎の一部を欠損する凹基有茎鎌である。遺存部分を見る限りていねいな押圧剥離が施されており、基部の挟りもしっかり作出されている。石材は赤色系の流紋岩である。形状から縄文時代晩期の所産と思われる。2は2個1対の刃部を持つ両極剥離痕のある石器である。正面は大きく礫面を残すことから、小型の礫から剥ぎ取られたものと思われる。長さ26.2mm、幅18.1mm、厚さ7.1mmを測り、小型剥片石器の素材に成り得るものである。石材は黒色頁岩である。3は長さ16.2mm、幅21.2mm、厚さ6.4mmを、4は長さ18.2mm、幅21.0mm、厚さ4.0mmを測る小型の横長剥片である。大きさから小型剥片石器に加工するには難しいと思われる。石材は3が珪質頁岩、4が半透明頁岩である。

## 第4節 総 括

本報告で述べてきたように岡崎遺跡は亀田砂丘の西端部の先の沖積地に立地する遺跡である。第5次調査範囲では、土坑・小土坑が1基ずつ、性格不明遺構が1基のみの検出であった。しかしながら、出土した土器の大半がSX1やその周辺グリッドからの出土であることや調査区北東部にて旧河道が検出されたことから、集落の端に位置する土器廃棄場、または廃棄された土器が流れ着いて溜まるような、落込み部であったと推測できる。

今回の調査では、第4次調査に連続する埋没砂丘北側の湿地・斜面の一部が検出された。これまでの試掘・確認調査及び第4次調査の所見と合わせ、当該地点が岡崎遺跡の遺跡範囲北端及び東端であると推測できる。

## 引用・参考文献

- ア 相田泰臣 2012 『林付遺跡 第2次調査 一新潟市立潟東南小学校体育館建設工事に伴う林付遺跡第2次発掘調査報告書ー』新潟市教育委員会
- 青木 学ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第218集 下新保高田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青森県史編さん古代部会 2008 『青森県史 資料編 古代 2 出土文字資料』
- 朝岡政康・諫山えりか 2003 『東圃遺跡 卸売市場建設に伴う市道東8-273建設事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 朝岡政康ほか 2010 『三王山遺跡Ⅱ 第4次・7次調査 一新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 阿部朝衛 1984 「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究 第2号』新潟県豊栄市
- 阿部朝衛 1990 「多面体を呈する敲石 再論」『帝京史学 第5号』帝京大学文学部史学科
- 阿部朝衛 1997 「新潟県北部地域における縄文時代の石材利用とその背景」『帝京史学』第12号 帝京史学会
- 阿部朝衛 2000 「先史時代の失敗と練習 ー石鎌と磨製石斧の分析からー」『考古学雑誌第86巻 第1号』日本考古学会
- 阿部義平 1976 「銚帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社
- 荒川隆史 2004 「E. 遺構の分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ 青田遺跡』新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2009 「新潟県矢津遺跡出土土器の再検討」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第10号 新潟県立歴史博物館
- イ 飯坂盛泰 2015 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第252集 一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅷ 宝田遺跡』新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 家田順一郎 1987 『小丸山遺跡 小丸山遺跡緊急発掘調査報告書』横越村教育委員会
- 池田淳子 2001 「粘板岩製石棒の製作地 ー製作実験と地質状況からの推定ー」『新潟考古学談話会会報 第23号』新潟考古学談話会
- 池田淳子 2002 「(23) 玉類」『朝日村文化財報告書 第22集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 元屋敷遺跡Ⅱ』新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 池田淳子 2003 「熊登型石剣について」『三面川流域の考古学 第2号』奥三面を考える会
- 諫山えりか 2004 『新潟市山木戸遺跡 マンション等予定地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 諫山えりか 2007 『居屋敷遺跡第3次調査 ー県営地盤沈下対策事業新潟南部5期地区沢海揚水機場建設事業に伴う居屋敷遺跡第3次調査報告書ー』新潟市教育委員会
- 諫山えりか 2008 『結七島遺跡 第19次調査 ー市営下興野中野線道路改良工事事業に伴う結七島遺跡第3次発掘調査報告書ー』新潟市教育委員会
- 石川日出志・田中耕作 1982 「Ⅵ まとめと今後の課題」『新発田市埋蔵文化財調査報告第4 村尻遺跡Ⅰ』新発田市教育委員会
- 石川日出志・渡邊裕之 1992 「1. 縄文時代の遺構と遺物」『新潟県安田町文化財調査報告12 六野瀬遺跡1990年調査報告書』安田町教育委員会
- 石橋夏樹 2018 「C 石器」『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集 県営湛水防除事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 石船戸遺跡(本文編)』新潟県阿賀野市教育委員会
- 伊藤秀和 2001 『鬼倉遺跡 ー国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書ー』加茂市文化財調査報告(13) 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2005 『馬越遺跡発掘調査報告書』加茂市文化財調査報告(14) 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2005 『馬越遺跡発掘調査報告書Ⅱ』加茂市文化財調査報告(18) 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2010 『馬越遺跡発掘調査報告書Ⅲ』加茂市文化財調査報告(19) 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2019 「第5章 第2節 第8項 越後平野信濃川右岸」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 伊比博和 2010 「縄文土器について」『大沢谷内北遺跡 第3次調査』新潟市教育委員会
- 伊比博和 2012a 「第Ⅴ章 遺物 第1節 下層出土の遺物」『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査』新潟市教育委員会

- 伊比博和 2012b 「第七章 まとめ 第1節 下層（縄文時代）の遺跡」『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査』新潟市教育委員会
- 今井さやかほか 2008 『下大口遺跡 第2次調査』新潟市教育委員会
- 岩瀬由美 2004 『珠洲市柏原ミツハン遺跡 柏原ジツチン遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- エ 江口友子 2000 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第100集 北陸自動車道黒崎パーキングエリア改良工事関係発掘調査報告書 釈迦堂遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 遠藤恭雄ほか 2016 『沖ノ羽遺跡Ⅵ 第19・22・24次調査 一県営ほ場整備事業（担い手育成型）満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第12・15・17次調査報告書一』新潟市教育委員会
- 遠藤恭雄ほか 2020 『砂崩前郷遺跡 第3次調査 一市道砂崩南線建設事業に伴う砂崩前郷遺跡第2次発掘調査報告書一』新潟市教育委員会
- オ 大阪府立弥生文化博物館 2013 『弥生人の船 一モンゴロイドの海洋世界一』大阪府立弥生文化博物館
- 岡村道雄 1983 「ピエス・エスキーユ、楔形石器」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣出版
- 尾崎高宏 2001 「第V章 まとめ 1古墳時代 C高杯形土器製作（成・整形）技法について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第107集 正尺A遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第107集 正尺A遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長田友也 2019 「4）石棒と石剣・石刀」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 小田由美子 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野本敦 2019a 「第4章 古墳時代 第2節 土器 第2項 中期」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 小野本敦 2019b 「第5章 古代 第3節 集落 第1項 集落構造」『新潟県考古学会30周年記念誌 新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 小野本敦 2022 「古代佐渡島の調理文化と海民の動態」『物質文化』102 物質文化研究会
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修
- カ 春日真実 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟県考古学談話会会報 第8号』新潟県考古学談話会
- 春日真実 1993 「王朝国家期の越後 一上越市一ノ口遺跡（西地区）・新潟市小丸山遺跡を事例として一」『新潟考古』第4号 新潟県考古学会
- 春日真実 1994a 「第IV章 一之口遺跡東地区 4. 遺物各説 B. 古墳時代後期の遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 北陸自動車道上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1994b 「第VI章 まとめ 3. 古墳時代前期の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 北陸自動車道上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1995 「古代集落の展開 一越後を事例として一」『研究紀要 第1号』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1999 「第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2000 「第5章 まとめ」『吉田町史』資料編1 考古・古代・中世 吉田町
- 春日真実 2001 「横瓶の製作方法」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 2003 「下層（古代）」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第123集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅲ（C地区）』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2004 「荒川右岸」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について 一「今池編年」・「下ノ西編年」・山三賀編年」の検討を中心に一」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2006 「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 春日真実 2009 「越後における古代掘立柱建物」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 春日真実 2015 「古代西蒲原地域の土師器煮炊具」『郷土史燕』第8号 燕市教育委員会 燕市郷土史研究会連合会

- 春日真実 2015 「土器・陶磁器の機能別比率 ―古墳時代～古代を中心に―」『研究紀要』第8号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2016 「越後の官衙・集落と土器様相」『官衙・集落と土器2 ―宮都・官衙・集落と土器―』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 春日真実 2019a 「第5章 古代 第1節 土師器・須恵器の器種分類」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 春日真実 2019b 「第5章 第2節 第8項 佐渡」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 春日真実ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第76集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 江内遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実ほか 1997 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第87集 横雲バイパス関係発掘調査報告書 上郷Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実ほか 2023 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第296集 一般国道253号八箇峠道路関係発掘調査報告書 金屋遺跡Ⅳ 第4・5次調査』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 榎木宜弘ほか 2011 『檀風城跡・下国府遺跡（市道竹田1号線改良工事関係発掘調査報告書）』佐渡市教育委員会
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1980 「Ⅲ 石器の分類方法と製作工程」『図録石器の基礎知識 I 先土器（上）』柏書房
- 加藤 学 1999 「C. 遺構の形態分類」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第93集 上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ 和泉A遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2014 「第Ⅴ章 遺物 3 石器・石製品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第249集 一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ 大武遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第106集 松影A遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金田拓也 2015 「(7)日水南遺跡 第6次調査」『新潟市文化財センター一年報 第2号 ―平成25(2013)年度版―』新潟市文化財センター
- 上村憲章 1994 「第4部 第2章 3 須恵器」『平安京提要』角川書店
- 亀田町史編さん委員会 1990a 『亀田の歴史 資料編』亀田町
- 亀田町史編さん委員会 1990b 『亀田の歴史 通史編 上巻』亀田町
- 鴨井幸彦 2002 『新潟県下における沖積層の層序および平野の形成過程に関する地質学的研究』新潟大学大学院自然科学研究所
- 鴨井幸彦 2018 「越後平野の変遷」『新潟平野における新たな地域学 みんなの潟学』新潟市潟環境研究所
- 鴨井幸彦・田中里志・安井 賢 2015 「暦年較正年代による新潟砂丘列の形成年代の見直し」『第四紀研究 第54巻第3号』日本第四紀学会
- 鴨井幸彦・安井 賢 2004 「古地理図でたどる越後平野の生いたち」『土と基礎』52-11 地盤工学会
- 川上貞雄 1997 『上浦A遺跡 新津市工業団地第2期工事地内発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川上貞雄 2002 『腰廻遺跡』笹神村教育委員会
- 川上貞雄ほか 1983 『中の山遺跡』亀田町教育委員会
- 川上貞雄ほか 1993 『山ノ家遺跡緊急発掘調査報告書』横越村教育委員会
- 川上貞雄ほか 1996 『亀田町文化財調査報告書 第4集 荒木前遺跡第2次調査』亀田町教育委員会
- 川村浩司 1989 「越後古代集落の素描 ―遺跡の類型とその展開―」『新潟考古学談話会会報 第3号』新潟考古学談話会
- 川村浩司 1993 「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相 ―関川右岸下流域を中心に―」『上越市史研究』第5号 上越市
- キ 北野博司 1991 「大型土坑について」『押水町冬野遺跡群』石川県埋蔵文化財センター
- 木村宗文 1993 「初期荘園の成立」『新津市史 通史編 上巻』新津市史編さん委員会
- ク 倉石広太 2019 「3 打製石斧の変遷と技術」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 桑原 健 2008 「4 玉作関連資料と内磨砥石」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第188集 一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 横マクリ遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- コ 小池義人ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第59集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 細池遺跡 寺道上遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団



- 小池邦明ほか 1993 『新潟市場遺跡 的場土地区画整理事業用地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 小池邦明・本間圭吉 1995 『新潟市小丸山遺跡 直り山団地建設事業用地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- 後藤信祐 1986 「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（上）」『考古学研究第33巻 第3号（通巻131号）』 考古学研究会
- 小林昌二・相澤 央 2004 「新潟県内出土墨書土器の基礎的考察」『資料学研究』第1号 新潟大学大学院現代社会文化研究科
- 小林昌二編 1996 『越と古代の北陸』 名著出版
- 小森俊寛 1994 「第4部 第2章 1 平安京の土器・陶磁器の概要」『平安京提要』 角川書店
- サ 佐伯有清編 2021 『日本古代氏族事典【第三版】』 雄山閣
- 酒井和男 1980 『三王山遺跡発掘調査報告書』 亀田町教育委員会
- 酒井和男・廣野耕造 2002 「新潟砂丘における居住の初源」『新潟考古』第13号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1986 「第V章 まとめ 2. 平安時代中期の遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第40集 北陸自動車道 上越市春日木田地区発掘調査報告書Ⅱ 一之口遺跡西地区』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1987a 「(研究発表要旨) 古代・中世における開発史の諸問題 -考古資料から見た9・10世紀の画期-」『新潟史学』第20号
- 坂井秀弥 1987b 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第48集 国道116号埋蔵文化財調査報告書 三島郡出雲崎町番場遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 「4 越後・佐渡における古代手工業生産の展開」『北陸の古代手工業生産』 北陸古代手工業生産史研究会
- 坂井秀弥 1996 「水辺の古代官衙遺跡 -越後平野の内水面・舟運・漁業-」『越と古代の北陸 古代王権と交流3』 (株) 名著出版
- 坂井秀弥 1999 「第IV章 古代 第1節 総論」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相 -越後・会津・能登-」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ(研究代表甘粕健)
- 坂井秀弥・横山勝栄ほか 1983 「内越遺跡出土土器の越後における編年的位置」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第33集 内越遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第53集 新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省北陸建設局新潟国道工事事務所
- 坂井秀弥ほか 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂上有紀 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第118集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 上浦遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笹澤(諫山) えりか 2009 『中田遺跡 第2次調査 -市道荻川新津線道路改良事業に伴う中田遺跡第2次発掘調査報告書-』 新潟市教育委員会
- 笹澤正史 2003 「時代概説」『上越市史』資料編2 考古 上越市
- 笹澤正史 2004 「須恵器生産の概要」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 佐渡市教育委員会 2008 『佐渡国分寺遺跡発掘調査報告書』
- 佐渡市教育委員会 2010 『佐渡市内遺跡発掘調査報告Ⅱ 平成19・20年度の調査 佐渡金山遺跡の調査 小泊窯跡群の調査』
- 佐渡市教育委員会 2013 『佐渡市内遺跡発掘調査報告Ⅳ 平成22・23年度の調査 小泊窯跡群の調査 佐渡金山遺跡の調査』
- 佐渡市教育委員会 2018 『佐渡市内遺跡発掘調査報告書』
- 佐渡市教育委員会 2005a 『小泊窯跡群Ⅰ』
- 佐渡市教育委員会 2005b 『国分寺遺跡群』
- 沢田 敦・高橋保雄ほか 2017 『県営圃場整備事業関連発掘調査報告書 蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』 新潟県佐渡市・佐渡市教育委員会

- 澤野慶子ほか 2020 『亀田道下遺跡第2次調査 -市道亀田南線建設事業に伴う亀田道下遺跡第2次発掘調査報告書-』  
新潟市教育委員会
- シ 品田高志 1992 「越後における古墳時代土器の変遷」『柏崎市立博物館館報』第6号 柏崎市立博物館
- 柴田昌児 2021a 「準構造船と描かれた船団」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2020』鳥取県地域づくり推進部文化財局
- 柴田昌児 2021b 「西日本の古代木造船と海上における人間活動 -瀬戸内海と日本海-」『新潟県考古学会 2021年度秋季シンポジウム 発表要旨「遺跡から読み取る新潟県の内水面交通」』新潟県考古学会
- ス 鈴木俊成 1999 「第2項 早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 鈴木俊成ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 北陸自動車道上越春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第206集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXⅢ 西部遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識Ⅲ縄文』柏書房
- セ 関 雅之 1999 『葛塚遺跡』豊栄市教育委員会・豊栄市博物館
- 関 雅之 2004 『新潟県関川村渡辺忠利氏寄贈資料の整理・収納報告書 -縄文時代後期・堂ノ前遺跡の珪質頁岩と石器の製作-』関川村教育委員会・せきかわ歴史とみちの館
- 関 雅之 2011 「古墳時代前期の土器に描かれた人物画像について -旧豊栄市・葛塚遺跡出土の鳥装人物画の再検討-」『新潟考古』第22号 新潟県考古学会
- タ 高橋 保 2022 「B 権状錘」『燕市埋蔵文化財調査報告書 第10集 新潟県燕市稲場遺跡 県営経営体育成基盤整備事業(米納津・佐渡山地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』燕市教育委員会
- 高橋 保ほか 1993 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書 第2集 新潟県和島村教育委員会
- 高橋保雄 1992 「B 石器類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集 関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋保雄 2005 「3 石器・石製品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第141集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 北野遺跡Ⅱ(上層)』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2018 「3 石器類について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第271集 糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅻ 六反田南遺跡Ⅵ』新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2021a 「道正遺跡・岡崎遺跡」『新潟市遺跡発掘調査速報会2020』新潟市文化財センター
- 高橋保雄 2021b 「道正遺跡・岡崎遺跡の調査成果」『新潟県考古学会第33回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 高橋保雄 2022 「道正遺跡」『新潟市遺跡発掘調査速報会2021』新潟市文化財センター
- 高橋保雄・鈴木俊成 1990 「B 出土石器の分類と分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第55集 関越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡』新潟県教育委員会
- 瀧音 一 2019 『原始・古代日本における勾玉の研究』株式会社雄山閣
- 滝沢規朗 2001 「新潟県の独鈷状石器」『新潟考古 第12号』新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2002 「(26) 石冠」『朝日村文化財報告書 第22集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ 元屋敷遺跡Ⅱ』新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 滝沢規朗 2005a 「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005b 「越後・佐渡における弥生後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2005c 「土器の分類と変遷 -いわゆる北陸系を中心に-」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第一分冊 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2011 「阿賀北における古墳時代前期の土器について(上) -器種分類と基準資料の提示-」『三面川流域の考古学』第9号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2012 「阿賀北における古墳時代前期の土器について(下) -細別器種毎の変遷について-」『三面川流域の考古学』第10号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2013 「越後・佐渡の古墳出現前後における中国・四国地方の土器」『新潟考古学談話会会報』第35号 新潟考古学談話会

- 滝沢規朗 2018 「佐渡における弥生時代後期後半～古墳時代中期の様相について ―出土土器の年代観を中心に―」『東生』第7号 東日本古墳確立期土器検討会
- 滝沢規朗 2019a 「北陸における弥生時代後期～古墳時代前期の土器について ―東の越と西の越―」『東生』第8号 東日本古墳確立期土器検討会
- 滝沢規朗 2019b 「第4章 古墳時代 第2節 土器 第1項 前期」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2019c 「第3節 集落と建物 第1項 遺跡の立地と集落の消長」『新潟県の考古学Ⅲ』 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2019d 「第3節 集落と建物 第2項 建物」『新潟県の考古学Ⅲ』 新潟県考古学会
- 滝沢規朗ほか 1992 『刈羽村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 西谷遺跡』 刈羽村教育委員会
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川県考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1994 「北陸南西部の古墳確立期の様相」『東日本の古墳の出現』（株）山川出版社
- 龍田優子 2015 「(3) 三王山遺跡Ⅱ 第14次調査」『新潟市文化財センター年報 第2号 ―平成25(2013)年度版―』 新潟市文化財センター
- 龍田優子 2023 『曾我墓所遺跡 第2・3次調査 ―横越排水区雨水調整池築造工事に伴う曾我墓所遺跡第2・3次発掘調査報告書―』 新潟市教育委員会
- 龍田優子・高橋保雄 2023 「B 石器・石製品について」『程島館跡 第7・9次調査』 新潟市教育委員会
- 龍田優子ほか 2012 『結七島遺跡Ⅵ 第24次調査 ―宅地造成に伴う結七島遺跡第2次発掘調査報告書―』 新潟市教育委員会
- 龍田優子ほか 2018 『筑木遺跡 第3次調査 ―主要地方道路新潟中央環状線道路整備事業に伴う第3次発掘調査報告書―』 新潟市教育委員会
- 田中一廣ほか 2004 『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 新潟市教育委員会
- 田中耕作 2004 「考古学の用語と文章ことば」『新潟考古学談話会会報』第28号 新潟考古学談話会
- 田中耕作・鈴木 暁 2014 「2 周辺の遺跡」『新発田市埋蔵文化財調査報告 第51 中野遺跡・庄道田遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
- 田中久男ほか 1996 「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』第35巻3号 日本第四紀学会
- 田中広明 1990 「律令時代の身分表象（Ⅰ）―帯飾具の生産と変遷―」『土曜考古』第15号 土曜考古学研究会
- 田中広明 1991 「律令時代の身分表象（Ⅱ）―腰帯をめぐる人々の奈良・平安時代―」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 田中 靖ほか 1994 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第3集
- 田中 靖ほか 2003 『下ノ西遺跡Ⅳ』和島村教育委員会
- 田畑 弘ほか 2015 『田上町埋蔵文化財調査報告書 第22集 行屋崎遺跡 一般国道403号（小須戸田上バイパス）道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』新潟県南蒲原郡田上町教育委員会
- 丹野雅人・原川雄二ほか 1999 『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡 ―No.72・795・790 遺跡―（8）』東京都埋蔵文化財センター
- ツ 立木宏明 2014 「第3節 細池寺道上遺跡の軽石製石製品について」『細池寺道上遺跡Ⅲ 第26次調査』新潟市教育委員会
- 立木宏明 2015 「第Ⅶ章 第2節 B 平安時代の佐渡型甕について」『細池寺道上遺跡Ⅴ 第32・38・41次調査 西江浦遺跡 第6次調査 ―県営ほ場整備事業（担い手育成型）両新地区に伴う 細池寺道上遺跡15・17・18次 西江浦遺跡第4次発掘調査報告書―』
- 立木宏明 2020 「道正遺跡」『新潟市遺跡発掘調査速報会2019』新潟市文化財センター
- 立木宏明・細野高伯ほか 2013 『日水遺跡Ⅱ』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2002 『内野遺跡発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2003 『結七島遺跡発掘調査報告書Ⅰ』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2018 『細池寺道上遺跡Ⅶ 第46次調査 ―県営ほ場整備事業（担い手育成型）両新地区に伴う細池寺道上遺跡第21次発掘調査報告書―』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2019 『細池寺道上遺跡Ⅷ 第48次調査 ―県営ほ場整備事業（担い手育成型）両新地区に伴う細池寺道上遺跡第24次発掘調査報告書―』新潟市教育委員会
- テ 寺村光晴 1966 『国学院大学考古学研究報告第三冊 古代玉作の研究』株式会社吉川弘文館
- 田海義正ほか 2000 「2 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第98集 県営圃場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- ト 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2009 『飛鳥藤原京木簡二』  
 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2010 『平城宮木簡七』 八木書店  
 鳥取県埋蔵文化財センター 2015 『第6回青谷上寺地遺跡フォーラム 人・もの・心を運ぶ船 ～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～』  
 土橋由理子ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第165集 馬見坂遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 土橋由理子ほか 2007 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第177集 一般国道49号線亀田バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ 武左衛門裏遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 土橋由理子ほか 2009 『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第200集 一般国道49号線亀田バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 西郷遺跡・大蔵遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 中島栄一 1981 「上野原遺跡」『三条市史 資料編 第1巻 考古・文化』 新潟県三条市  
 奈良国立文化財研究所 1995 『平城京木簡一』
- ニ 新潟県考古学会 2005 『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』  
 新潟県考古学会 2019 『新潟県の考古学』Ⅲ  
 新潟県地質図改定委員会 2000 『新潟県地質図(1:200,000)』  
 新潟市文化財センター 2020 「Ⅱ 開発事前審査」『新潟市文化財センター第7号 -平成30(2018)年度版-』  
 新潟市文化財センター 2021 「Ⅱ 開発事前審査」『新潟市文化財センター第8号 -令和元(2019)年度版-』  
 新潟市文化財センター 2022 「Ⅱ 開発事前審査」『新潟市文化財センター第9号 -令和2(2020)年度版-』  
 新潟市文化財センター 2023 「Ⅱ 開発事前審査」『新潟市文化財センター第10号 -令和3(2021)年度版-』  
 新潟市文化財センター 2023 『令和5年度 土居内遺跡現地説明会資料』  
 新潟市歴史博物館 2022 『大河津分水・関屋分水と新潟市』  
 新潟市国際文化庁歴史文化課 2007 『新潟市歴史双書2 新潟市の遺跡』  
 新潟市史編さん原始・古代・中世史部会 1994 『新潟市史 資料編Ⅰ 原始 古代 中世』  
 新潟市史編さん委員会 1989 『新潟市史 資料編 第一巻 原始・古代・中世』
- ノ 野田豊文 2002 「縄文土器 晩期中葉」『元屋敷遺跡Ⅱ(上段)』 新潟県朝日村教育委員会  
 野水晃子ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第146集 西川内北遺跡・西川内南遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ハ 秦 昭繁 2001 「新潟県北部地域の石器石材環境(2) -関川村獅子舞岩の珪質頁岩分析と石材流通構造-」『北越考古学 第12号』 北越考古学研究会  
 春成秀爾 1991 「絵画から記号へ -弥生時代における農耕儀礼の盛衰-」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第35集 国立歴史民俗博物館
- ヒ 樋口清之 1940 「垂玉考」『考古学雑誌 第30巻第六号』 日本考古学会  
 久田正弘 1997 「石川県内の絵画記号文集成」『石川県埋蔵文化財保存協会年報』8 石川県埋蔵文化財保存協会  
 久田正弘 2006 「北陸地方の絵画資料」『原始絵画の研究 論考編』 六一書房  
 廣野耕造 1997 『笹山前遺跡・神明社裏遺跡・城山遺跡』 新潟市教育委員会
- フ 深澤芳樹 2005 「船の出現と弥生船団」『考古学ジャーナル』536 ニュー・サイエンス社  
 深澤芳樹 2015 「弥生・古墳時代の船、川を下り、海を渡り、空を翔る」『第6回青谷上寺地遺跡フォーラム 人・もの・心を運ぶ船 ～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～』 鳥取県埋蔵文化財センター  
 文化庁文化財部記念物課 2010 『発掘調査のてびき -集落遺跡発掘編-』(株)同成社
- ホ 星野信明ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第80集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅱ(B地区)』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 細井佳浩 2011 「新潟県における弥生～古墳時代の土器、有孔鉢について」『三面川流域の考古学』第9号 奥三面を考える会  
 細井佳浩 2014 「新潟県における古代の「畝状小溝」(畠)について -越後の国域の検出事例から-」『三面川流域の考古学第12号』 奥三面を考える会  
 細井佳浩ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第166集 土居下遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 本間嘉晴・関 雅之ほか 1973 「南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査報告」『埋蔵文化財緊急調査報告書第1 北陸高速自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書1』 新潟県教育委員会

- 本間圭吉・諫山えりか 1995 『平成6年度新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
- マ 前山精明 1994 「御井戸遺跡」『巻町史 資料編1 考古』 新潟県巻町
- 前山精明 2010 「A 石器組成」『大沢谷内北遺跡 第3次調査』 新潟市教育委員会
- 松島悦子 2001 『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 三角田遺跡 国営新荒井川排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 燕市教育委員会・吉田町教育委員会
- 松島悦子ほか 2022 『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集 稲葉遺跡 県営経営体育成基盤事業（米納津・佐渡山地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 燕市教育委員会・吉田町教育委員会
- 馬目順一・古川 猛 1970 『福島県郡山市一人子遺跡の研究 一所謂亀ヶ岡式土器終末期の吟味一』
- 丸山一昭ほか 2016 『浦反甫東遺跡 一二級河川郷本川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』 新潟県長岡市教育委員会
- ミ 水澤幸一ほか 2002 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第25集 船戸桜田遺跡4・5次 県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書IV』 中条町教育委員会
- ム 村上章久 2021 「阿賀野市土橋遺跡の調査成果」『新潟県考古学会 第33回大会 研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
- 村上章久・佐藤直美 2023 「C 石器・石製品」『阿賀野市埋蔵文化財発掘調査報告書 第19集 土橋遺跡』 新潟県阿賀野市教育委員会
- モ 望月精司 2003 「古代権杖錘に関する一考察 一北陸出土権杖資料の検討を中心として一」『北陸古代土器研究 第10号』 北陸古代土器研究会
- 森内秀造 1995 『相生市・緑ヶ丘窯址群II』 兵庫県教育委員会
- 森内秀造・永井信弘 1993 「播磨とその周辺の須恵器」『古代の土器研究会第2回シンポジウム 古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東2 須恵器一』 古代の土器研究会
- ヤ 山賀和也ほか 2016 『上条遺跡 一上条高畑土地地区画整理事業及び医療法人立川メディカルセンター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 長岡市教育委員会
- 山崎忠良 2019 「第3節 集落 第2項 建物跡」『新潟県の考古学III』 新潟県考古学会
- 山中敏史 2003 「II 古代官衙建築の基本構造」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 山本友紀 2006 「第VII章 まとめ 2 遺物 A2) 計測結果と比率」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第166集 土居下遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ヨ 横越町史編さん委員会 2000 『横越町史 資料編』 横越町
- 横山栄造 1992 「第2節 芦沼水田の土地改良」『芦沼水田の克服 一亀田郷を事例として一』 日本土壤肥料学会 1992年度新潟大会運営委員会
- 横山浩一 1978 「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』 第23号 九州文化史研究所
- ワ 和田一良・阿部和志ほか 2018 『砂丘は語る。亀田砂丘ガイドブック』 新潟市江南区地域総務課
- 渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1998 「B 製鉄炉について」『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書III（分析・考察編）』 新津市教育委員会
- 渡邊裕之 2002 「「朝日式土器」の再検討 一延命寺ヶ原遺跡出土土器の検討をとおして一」『新潟県立歴史博物館研究紀要』 第3号
- 渡邊裕之 2019 「縄文時代 土器 晩期」『新潟県の考古学III』 新潟県考古学会
- 渡邊ますみほか 1991 『荒木前遺跡 新潟県中蒲原郡亀田町・荒木前遺跡発掘調査報告書』 亀田町教育委員会
- 渡辺ますみほか 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』 黒埼町教育委員会
- 渡邊ますみほか 2009 『駒首渦遺跡 第3次・4次調査 一大型小売店舗建設に伴う駒首渦遺跡第3次・4次調査報告書一』 新潟市教育委員会
- 渡邊ますみほか 2012 『四十石遺跡 第2次調査』 新潟市教育委員会

#### 自然科学分析

- ア 安藤一男 1990 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- イ 伊東隆夫・山田昌久 2012 木の考古学, 雄山閣, 449p.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- オ 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

- カ 笠原安夫 1985 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.  
 笠原安夫 1988 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻 生業, 雄山閣出版, p.131-139.  
 金子清俊・谷口博一 1987 線形動物・扁形動物. 医動物学 付 実験用動物学 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-134.  
 金原正明 1993 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻, 古代資料研究の方法, 木下正史編. 角川書店, p.248-262.  
 金原正明 1999 寄生虫. 西田豊弘・松井 章編「考古学と動物学」, 同成社, p.151-158.  
 金原正明・金原正子 1992 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構 -藤原京7条1坊-, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.  
 金原正明・金原正子 2013 植生と農耕における土壌層分析の実証的研究, 日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集, 日本文化財科学会, p.112-113.  
 金原正明・金原正子 2015 堆積物と植物遺体の総合的研究. 日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会, p.146-147.
- コ 小杉正人 1986 陸生珪藻による古環境解析とその意義 -わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.  
 小杉正人 1988 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.  
 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82  
 小林謙一 2017 縄文時代の実年代 -土器型式編年と炭素14年代-, 同成社  
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- サ 佐伯 浩・原田 浩 1985 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.  
 佐伯 浩・原田 浩 1985 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.  
 坂本 稔 2010 較正曲線と日本産樹木 -弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90  
 佐原 眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19  
 澤田純明 2022 六日町藤塚遺跡出土焼骨の鑑定結果(2018年度). 六日町藤塚遺跡I 第1~3次調査・坂之上遺跡I 第1・2次調査, 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団, pp.86-89.  
 澤田純明・奈良貴史・中嶋友文・斉藤慶史・百々幸雄・平田和明 2010 骨組織形態学的方法による骨小片の人獣鑑別: 東北北部の平安時代遺跡から出土した焼骨の分析. Anthropological Science (Japanese Series), 118: 23-36.
- シ 島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 大阪市立自然史博物館, 60p.  
 島地 謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織, 地球社, 176p.  
 島地 謙・伊東隆夫 1988 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.
- ス 鈴木秀和・南雲 保 2013 珪藻類の分類体系(総説)~現生珪藻の属ランクのチェックリスト. 日本プランクトン学会報 60(2).
- ト 土質工学会編 1979 土質試験法, p.2-5-1~2-5-23, 4-2-1~4-3-11.
- ナ 中村 純 1967 花粉分析. 古今書院, 232p.  
 中村 純 1974 イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として. 第四紀研究, 13, 日本第四紀学会, p.187-193.  
 中村 純 1977 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, no.10, 日本文化財科学会, p.21-30.  
 中村 純 1980 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 大阪市立自然史博物館, 91p.  
 中村俊夫 2000 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」. 日本第四紀学会, p.3-20.  
 中村俊夫 2003 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p.301-322.  
 西本豊弘 1991 狩猟. 古墳時代の研究 第4巻 生産と流通I, 雄山閣, pp.121-128.
- ハ バリノ・サーヴェイ 1994 針原東遺跡から出土した木製品の材同定, 小杉町針原東遺跡発掘調査報告, 富山県小杉町教育委員会, p.141-154.
- ミ 南木睦彦 1991 栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通I, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.

- 南木睦彦 1993 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
- ㊦ 吉崎昌一 1992 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p.2-14.
- ㊧ 渡辺仁治 2005 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo, pH 耐性. 内田老鶴圃, 666p.
- 渡辺 誠 1975 縄文時代の植物食. 雄山閣, 187p.
- A Absolonova K, Dobisikova M, Beran M, Zocova J, Veleminsky P 2012 The temperature of cremation and its effect on the micro-structure of the human rib compact bone. *Anthropologischer Anzeiger* 69: 439-460.
- Asai,K.&Watanabe,T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10,p.35-47.
- B Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- H Harsányi L 1993 Differential diagnosis of human and animal bone. In: Grupe G and Garland AN. (eds.) *Histology of Ancient Human Bone: Methods and Diagnosis*. Springer, pp.79-94.
- Hustedt,F. 1937-1938 Systematische und ologische Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. *Arch. Hydrobiol,Suppl.*15,p.131-506.
- K K. Krammer · H.Lange-Bertalot 1986-1991 *Bacillariophyceae*,vol.2,no.1-no.4
- L Lowe,R.L. 1974 Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.
- M Mulhern DM and Ubelaker DH 2012 Differentiating human from nonhuman bone microstructure. In: Crowder CM and Stout SD. (eds.), *Bone Histology*, CRC Press, Boca Raton, pp. 109-134.
- R Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013 IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.
- S Sawada J, Nara T, Fukui J, Dodo Y, Hirata K 2014 Histomorphological species identification of tiny bone fragments from a Paleolithic site in the Northern Japanese Archipelago. *Journal of Archaeological Science*, 46: 270-280.
- Shipman P, Foster G, Schoeninger M 1984 Burnt bones and teeth: an experimental study of colour, morphology, crystal structure and shrinkage. *Journal of Archaeological Science*, 11: 307-325.
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- T Theriot, E. C.,J. J. Cannone, R. R. Gutell & A. J. Alverson 2009 The limits of nuclear-encoded SSU rDNA for resolving the diatom ohylogeny. *Eur. J. Phycol.* 44, p.277-290.
- W Warnock, P. J. and Reinhard, K. J. 1992 Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Jounal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.

別 表

別表 1 道正遺跡遺構計測表

上層

図版No.	写真図版No.	確認層位	調査年次	遺構名		グリッド	重複関係(旧<新)	時期	主軸方向	規模 (m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	遺物図版No.		出土遺物 種別	備考
				種別	No.					長軸	短軸	深さ		平面	断面			図版	写真		
9・12	7-13	Via	3次	SB	330	2C-II・1J・2J		平安	N-29°-W	7.26	4.75	-	-	長方形	-	-	-				
9・12	7	Via	3次	P	279	2C-1J18	P279 <P280 <SK281	平安	N-10°-W	(0.45)	(0.13)	0.18	-0.48	-	不整形	1	単層			土師器 (墳)	
9・12	7	Via	3次	P	280	2C-1J18	P279 <P280 <SK281	平安	N-15°-E	0.40	(0.26)	0.15	-0.55	-	(U字状)	1	単層				
9・12	13	Via	3次	P	290	2C-1I10・15, 2C-1J11		平安	N-68°-W	0.61	0.52	0.17	-0.58	楕円形	弧状	2	柱根有	120	115	柱根 (3)	
9・12	13	Via	3次	P	291	2C-1J6・7		平安	N-6°-W	0.45	0.40	0.30	-0.55	方形	U字状	2	柱根有			土師器 (墳)、柱根	
9・12	13	Via	3次	P	292	2C-1J2・3・7・8		平安	N-23°-E	0.51	0.49	0.27	-0.54	円形	台形状	3	柱根有	120	115	縄文土器、土師器 (墳)、柱根 (8)	
9・12	13	Via	3次	P	293	2C-1J8・13		平安	N-71°-W	0.47	0.43	0.33	-0.63	方形	漏斗状	2	柱根有	120	115	土師器 (墳)、柱根 (4)	
9・12	13	Via	3次	P	294	2C-1J12		平安	N-77°-W	0.43	0.42	0.25	-0.55	方形	箱状	3	柱根有	120	115	土師器 (墳)、柱根 (6)	
9・12	13	Via	3次	P	295	2C-1J11・16		平安	N-12°-E	0.52	0.49	0.23	-0.56	方形	漏斗状	2	柱根有	120	115	土師器 (平)、柱根 (5)	
9・12	13	Via	3次	P	296	2C-1J17・22		平安	N-20°-E	0.52	0.42	0.32	-0.47	円形	漏斗状	3	柱根有	120	115	縄文土器、土師器 (墳)、柱根 (7)	
9・12	14	Via	3次	P	298	2C-1J11		平安	N-7°-W	0.22	0.20	0.10	-0.45	円形	弧状	1	単層				
9・12	14	Via	3次	P	299	2C-1J7		平安	N-36°-E	0.29	0.25	0.12	-0.44	楕円形	台形状	1	単層			土師器 (墳)	
9・12	14	Via	3次	P	300	2C-1J8		平安	N-74°-E	0.22	0.20	0.12	-0.42	円形	U字状	1	単層				
9・12	-	-	3次	P	326	2C-1J13	P326 <SK284	平安	N-24°-E	0.22	0.20	0.17	-0.66	円形	U字状	1	単層				SK284底面で確認
9・12	14	Via	3次	P	342	2C-1J19・24		平安	N-30°-W	(0.52)	0.45	0.45	-0.56	円形	漏斗状	3	柱根有	120	115	土師器 (墳・平)、柱根 (9)	
9・12	14	Via	3次	P	371	2C-1J23		平安	N-2°-W	0.59	0.47	0.36	-0.74	不整形	V字状	3	レンズ状			土師器 (平)、板	
9・12	14	Via	3次	P	373	2C-2J2		平安	N-21°-W	(0.48)	(0.47)	0.34	-0.66	(方形)	漏斗状	3	柱根有			土師器 (墳・平)、柱根	
9・12	29	Via	3次	P	387	2C-1J23	SK281 <P387	平安	N-86°-W	(0.64)	(0.24)	(0.16)	-0.50	(楕円形)	弧状	3	斜位			土師器 (墳・平)	
9・12	-	Via	3次	P	389	2C-1J22・23	P388 <P389	平安	N-26°-W	0.24	0.20	0.14	-0.48	楕円形	U字状	1	単層	71	86	縄文土器、土師器 (墳 (193)・平)	
9・12	-	-	3次	P	488	2C-1J13	P488 <SK284	平安	N-25°-E	0.24	0.14	0.14	-0.64	楕円形	弧状	1	単層				SK284壁面で確認
10・13	14	Via	3次	SB	366	1D-10A, 2D-1A・1B		平安	N-36°-W	7.35	4.48	-	-	長方形	-	-	-				
10・13	15	Via	3次	P	286	2D-1A9・10		平安	N-15°-E	0.25	0.22	0.16	-0.01	円形	台形状	1	単層				
10・13	14	Via	3次	P	287	2D-1A4・9		平安	N-8°-W	0.39	0.32	0.27	-0.30	楕円形	U字状	1	単層			土師器 (墳)	
10・13	16	Via	3次	P	289	2D-1A4・9		平安	N-25°-E	0.47	0.30	0.37	-0.30	楕円形	漏斗状	1	単層			土師器 (墳)	
10・13	16	Via	3次	P	305	2D-1A8	P305 <SD304	平安	N-17°-E	0.69	0.52	0.59	-0.41	楕円形	U字状	4	ブロック状			土師器 (墳)	
10・13	15	Via	3次	P	307	2D-1A13・18		平安	N-29°-E	0.77	0.62	0.28	-0.48	楕円形	V字状	1	単層			土師器 (墳)	
10・13	15	Via	3次	P	308	2D-1A13		平安	N-58°-W	0.47	0.33	0.19	-0.27	楕円形	弧状	2	レンズ状			土師器 (墳)	
10・13	15	Via	3次	P	309	2D-1A7・12		平安	N-22°-W	0.46	0.35	0.53	-0.58	楕円形	U字状	3	柱根有			土師器 (墳)	
10・13	15	Via	3次	P	310	2D-1A7		平安	N-79°-E	0.45	0.37	0.35	-0.16	楕円形	U字状	3	レンズ状			土師器 (墳)	
10・13	16	Via	3次	P	311	2D-1A2・6・7		平安	N-79°-E	0.41	0.34	0.14	-0.23	楕円形	台形状	1	単層			土師器 (墳)	
10・13	15	Via	3次	P	317	2D-1A3		平安	N-14°-W	0.40	0.30	0.24	-0.28	楕円形	U字状	2	水平				
10・13	16	Via	3次	P	318	2D-1A3		平安	N-78°-W	0.48	0.37	0.22	-0.20	不整形	台形状	1	単層				
10・13	16	Via	3次	P	319	2D-1A4		平安	N-58°-W	0.46	0.32	0.31	-0.22	楕円形	U字状	3	柱根有				
10・13	-	Via	3次	P	320	2D-1A4		平安	N-87°-E	0.25	0.24	0.26	-0.16	円形	U字状	1	単層				
10・13	-	Via	3次	P	328	2D-1A4		平安	N-19°-W	0.55	0.34	0.37	-0.23	楕円形	U字状	-	-				
10・13	16	Via	3次	P	329	2D-1A20		平安	N-22°-W	(0.34)	(0.28)	0.37	-0.55	(楕円形)	U字状	1	単層			土師器 (墳)	
10・13	15	Via	3次	P	363	1D-10A23・24, 2D-1A3・4		平安	N-26°-W	0.47	0.42	0.40	-0.31	円形	U字状	2	柱根有			土師器 (墳)	
10・13	-	Via	3次	P	364	2D-1B11・16		平安	N-49°-E	0.74	0.42	0.35	-0.56	楕円形	漏斗状	-	-				
10・13	-	Via	3次	P	365	2D-1A10・15		平安	N-62°-E	0.44	0.43	0.27	-0.37	円形	U字状	-	-				
10・13	15	Via	3次	P	375	2D-1A24		平安	N-76°-W	0.35	0.27	0.25	-0.54	楕円形	U字状	2	柱根有			縄文土器、土師器 (墳)	
10・14	16	Via	3次	SB	367	2D-1B・1C		平安	N-51°-W	5.84	3.16	-	-	長方形	-	-	-				
10・14	17	Via	3次	P	273	2D-1C13		平安	N-52°-E	0.68	0.57	0.23	-0.19	(楕円形)	V字状	1	単層			土師器 (墳)	
10・14	16	Via	3次	P	274	2D-1C16		平安	N-45°-W	0.34	0.31	0.74	-0.60	(円形)	U字状	2	レンズ状			縄文土器、土師器 (墳)	
10・14	17	Via	3次	P	276	2D-1C12	SD271 <P276	平安	N-61°-E	0.46	0.40	0.39	-0.29	円形	U字状	4	ブロック状			土師器 (墳)	
10・14	17	Via	3次	P	277	2D-1C6		平安	N-38°-E	0.56	0.45	0.50	-0.75	楕円形	不整形	2	水平	70	86	縄文土器、土師器 (墳 (192))	
10・14	17	Via	3次	P	278	2D-1C1		平安	N-34°-W	0.50	0.44	0.42	-0.44	円形	不整形	2	レンズ状			縄文土器、土師器 (墳)	
10・14	17	Via	3次	P	344	2D-1B10		平安	N-75°-W	0.36	0.27	0.26	-0.37	楕円形	U字状	1	単層			土師器 (墳)	
10・14	18	Via	3次	P	345	2D-1C6		平安	N-65°-E	0.30	0.25	0.27	-0.28	楕円形	U字状	1	単層			縄文土器、土師器 (墳)	
10・14	17	Via	3次	P	346	2D-1C7		平安	N-88°-W	0.32	0.27	0.20	-0.39	円形	箱状	1	単層			縄文土器、土師器 (墳)	
10・14	18	Via	3次	P	347	2D-1B15		平安	N-42°-W	0.28	0.25	0.32	-0.40	円形	U字状	1	単層				
10・14	17	Via	3次	P	348	2D-1C6		平安	N-37°-W	0.41	0.34	0.34	-0.35	楕円形	台形状	1	単層			縄文土器、土師器 (墳)	
10・14	18	Via	3次	P	360	2D-1B10		平安	N-64°-W	0.41	0.40	0.26	-0.33	円形	U字状	1	単層			縄文土器、土師器 (墳)	
10・14	18	Via	3次	P	361	2D-1C11		平安	N-46°-W	0.31	0.28	0.12	-0.23	円形	半円状	2	柱根有			縄文土器、土師器 (墳)	
10・14	18	Via	3次	P	362	2D-1C11・16		平安	N-26°-E	0.34	0.32	0.25	-0.33	円形	U字状	1	単層				
10・14	17	Via	3次	P	390	2D-1C17	SK400 <P390	平安	N-8°-E	0.50	0.41	0.26	-0.52	円形	U字状	2	レンズ状			土師器 (墳)	
10・14	18	Via	3次	P	393	2D-1C11・12		平安	N-51°-E	0.18	0.18	0.05	-0.53	円形	弧状	1	単層				
10・14	16	Via	3次	SA	487	2D-1B・1C		平安	N-52°-W	7.80	-	-	-	直線状	-	-	-				
10・14	-	Via	2次	P	81	2D-1B8・9		平安	N-10°-W	0.30	0.21	0.15	-0.04	楕円形	半円状	1	単層			土師器 (墳)	
10・14	-	Via	3次	P	359	2D-1B9		平安	N-58°-W	0.32	0.27	0.15	-0.18	円形	台形状	2	レンズ状			縄文土器	
10・14	-	Via	3次	P	368	2D-1B15		平安	N-73°-W	0.27	0.22	0.11	-0.28	楕円形	半円状	-	-				
10・14	-	Via	3次	P	369	2D-1C16		平安	N-82°-W	0.20	0.18	0.11	-0.32	円形	半円状	-	-				
10・14	-	Via	3次	P	394	2D-1C16・17	SD275 <P394	平安	N-80°-W	0.33											



図版No.	写真 図版 No.	確認 層位	調査 年次	遺構名 種別 No.	グリッド	重複関係 (旧<新)	時期	主軸方向	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		覆土 分層	堆積状況	遺物図版No.		出土遺物 種別	備考			
									長軸	短軸	深さ		平面	断面			図版	写真					
9・15・	10・	Via	3次	SB	482	1C-10I・10J		平安	N-52°-W	6.50	5.00	-	-	長方形	-	-	-						
9・15	18	Via	3次	P	209	1C-10J1・2		平安	N-54°-E	0.46	0.43	0.25	-0.35	円形	V字状	2	柱痕有						
9・15	19	Via	3次	P	210	1C-10J2		平安	N-8°-E	0.50	0.45	0.33	-0.23	円形	U字状	3	レンズ状			土師器 (墳・平)			
9・15		Via	3次	P	219	1C-10J23		平安	N-29°-E	0.29	0.25	0.13	-0.05	円形	弧状	1	単層						
9・15	19	Via	3次	P	220	1C-10J1・6		平安	N-68°-E	0.47	0.37	0.48	-0.48	楕円形	台形状	4	ブロック状			縄文土器			
9・15	20	Via	3次	P	249	1C-10J11		平安	N-49°-E	0.39	0.35	0.12	-0.42	楕円形	台形状	1	単層			石器			
9・15		Via	3次	P	250	1C-10J16		平安	N-86°-W	0.42	0.39	0.28	-0.41	円形	V字状	2	柱痕有			土師器 (墳)			
9・15	19	Via	3次	P	254	1C-10I10・15		平安	N-9°-W	0.36	0.35	0.13	-0.39	円形	弧状	1	単層						
9・15	20	Via	3次	P	256	1C-10J6・11		平安	N-62°-W	0.41	0.35	0.42	-0.54	楕円形	弧状	2	レンズ状						
9・15	19	Via	3次	P	257	1C-10J6・7		平安	N-83°-E	0.45	0.43	0.32	-0.38	円形	箱状	2	水平						
9・15	20	Via	3次	P	258	1C-10J7		平安	N-2°-E (0.46)	(0.46)	(0.35)	0.35	-0.35	(楕円形)	V字状	1	柱根有			土師器 (墳)、柱根			
9・15	20	Via	3次	P	260	1C-10J16・17		平安	N-3°-E	0.35	0.31	0.26	-0.39	円形	U字状	2	水平						
9・15	20	Via	3次	P	261	1C-10J17・22	SK222 <P261	平安	N-80°-W	0.49	0.40	0.25	-0.36	楕円形	半円状	4	ブロック状			土師器 (墳・平)、須恵器			
9・15	19	Via	3次	P	263	1C-10J18		平安	N-76°-E	0.45	0.45	0.30	-0.36	円形	U字状	2	水平			土師器 (墳)			
9・15	19	Via	3次	P	269	1C-10J9・14	P269 <P270	平安	N-85°-E (0.62)	0.52	0.21	-0.21	(楕円形)	半円状	2	斜位			土師器 (墳)				
9・15	19	Via	3次	P	270	1C-10J9・14	P269 <P270	平安	N-20°-W	0.37	0.29	0.17	0.15	楕円形	台形状	2	斜位						
9・15	19	Via	3次	P	322	1C-10J8		平安	N-59°-E	0.42	0.38	0.24	-0.22	円形	V字状	2	水平						
9・15	19	Via	3次	P	323	1C-10J12・13		平安	N-43°-E	0.42	0.33	0.29	-0.40	楕円形	U字状	2	水平			土師器 (墳)			
9・15		Via	3次	P	324	1C-10J13		平安	N-61°-E	0.33	0.29	0.11	-0.18	円形	弧状	1	単層						
9・15		Via	3次	P	325	1C-10J9		平安	N-50°-E	0.37	0.36	0.09	0.00	円形	弧状	1	単層						
9・16	10・	Via	3次	SB	483	1C-9I・9J・10I・10J		平安	N-37°-W (7.43)	4.47	-	-	-	長方形	-	-	-				桁行3間×梁行2間と推定		
9・16	22	Via	3次	P	197	1C-9I24		平安	N-44°-W	0.33	0.29	0.12	-0.25	円形	弧状	1	単層						
9・16	21	Via	3次	P	199	1C-9I24・10I4		平安	N-32°-E	0.44	0.29	0.39	-0.52	楕円形	U字状	3	斜位			縄文土器			
9・16	21	Via	3次	P	201	1C-10I5		平安	N-65°-W	0.50	0.44	0.62	-0.65	円形	U字状	3	レンズ状			縄文土器、土師器 (墳)			
9・16	21	Via	3次	P	202	1C-10I4・9		平安	N-33°-W	0.31	0.28	0.14	-0.34	円形	弧状	1	単層			土師器 (平)			
9・16	20	Via	3次	P	204	1C-9I25		平安	N-57°-E	0.44	0.44	0.44	-0.65	円形	U字状	4	柱根有			土師器 (平)、柱根			
9・16	20	Via	3次	P	206	1C-10J1		平安	N-24°-E	0.57	0.42	0.47	-0.64	楕円形	台形状	4	柱痕有						
9・16	20	Via	3次	P	237	1C-10I15		平安	N-35°-W	0.24	0.20	0.12	-0.29	楕円形	半円状	1	単層						
9・16	22	Via	3次	P	244	1C-10I3・4		平安	N-52°-E	0.45	0.37	0.44	-0.68	円形	V字状	3	柱痕有	70	86	土師器 (墳(191)・平)			
9・16	22	Via	3次	P	245	1C-10I3		平安	N-90°	0.40	0.32	0.19	-0.42	楕円形	台形状	1	単層			土師器 (墳)			
9・16	21・	Via	3次	P	246	1C-10I3・4		平安	N-76°-W	0.52	0.52	0.49	-0.74	方形	U字状	3	ブロック状			縄文土器、土師器 (墳)			
9・16	21	Via	3次	P	251	1C-10I15		平安	N-24°-W	0.42	0.34	0.41	-0.72	楕円形	V字状	3	柱痕有						
9・16		Via	3次	P	252	1C-10I14・15		平安	N-42°-E	0.37	0.24	0.18	-0.49	楕円形	U字状	1	単層						
9・16	21	Via	3次	P	255	1C-10J6		平安	N-15°-E	0.53	0.49	0.34	-0.47	方形	台形状	4	ブロック状			土師器 (墳)			
9・16	21	Via	3次	P	259	1C-10J7		平安	N-68°-W	0.43	0.41	0.52	-0.58	円形	U字状	2	レンズ状			土師器 (墳・平)			
9・16	21	Via	3次	P	262	1C-10I9		平安	N-59°-W	0.49	0.47	0.44	-0.70	円形	U字状	2	水平			縄文土器			
9・16	22	Via	3次	P	313	1C-10J1・6		平安	N-82°-W	0.32	0.31	0.18	-0.22	円形	V字状	1	単層			土師器 (平)			
9・16	22	Via	3次	P	314	1C-10J6		平安	N-85°-W	0.32	0.29	0.18	-0.25	円形	V字状	1	単層						
9・16	22	Via	3次	P	315	1C-10I10		平安	N-87°-E	0.44	0.30	0.14	-0.28	楕円形	半円状	1	単層			土師器 (平)			
9・16	22	Via	3次	P	316	1C-10I10		平安	N-42°-E	0.43	(0.30)	0.15	-0.47	楕円形	半円状	1	単層			土師器 (平)			
9・16		Via	3次	P	351	1C-10J6		平安	N-28°-E	0.27	0.25	0.21	-0.35	楕円形	-	-	-						
9・17	10・	Via	3次	SB	484	1C-9I・9J・10I・10J		平安	N-43°-W (5.13)	4.38	-	-	-	長方形	-	-	-				桁行3間×梁行2間と推定		
9・17	22	Via	3次	P	198	1C-9I24		平安	N-36°-E	0.77	0.66	0.53	-0.71	不整形	漏斗状	4	柱痕有			縄文土器、土師器 (平)、須恵器			
9・17	23	Via	3次	P	200	1C-10I5		平安	N-77°-E	0.49	0.46	0.59	-0.74	円形	U字状	3	柱痕有			縄文土器、土師器 (平)、須恵器、石器			
9・17	23	Via	3次	P	207	1C-10J1		平安	N-35°-W	0.70	0.59	0.68	-0.67	楕円形	漏斗状	4	柱痕有			土師器 (墳)、須恵器			
9・17	23	Via	3次	P	208	1C-9J22		平安	N-34°-E	0.42	0.41	0.39	-0.31	円形	台形状	4	ブロック状	45	63	土師器 (平)、須恵器 (1)			
9・17	23	Via	3次	P	221	1C-10I10、1C-10J6		平安	N-53°-W	0.56	0.52	0.55	-0.58	円形	U字状	4	ブロック状			土師器 (平)			
9・17	23	Via	3次	P	231	1C-9J21・22		平安	N-85°-E (0.67)	(0.14)	0.25	-0.36	-	台形状	1	単層							
9・17	10・	Via	3次	SB	485	1C-9I・9J・10I・10J		平安	N-43°-W (4.50)	4.12	-	-	-	長方形	-	-	-				桁行3間×梁行2間と推定		
9・17	23	Via	3次	P	203	1C-9I25		平安	N-82°-E (0.86)	(0.27)	0.60	-0.52	(楕円形)	V字状	3	ブロック状			土師器 (墳)				
9・17	23	Via	3次	P	205	1C-10I5、1C-10J1		平安	N-45°-W	0.29	0.29	0.22	-0.26	円形	U字状	3	ブロック状						
9・17	24	Via	3次	P	211	1C-10J2		平安	N-48°-W	0.57	0.45	0.43	-0.36	楕円形	V字状	4	柱痕有			土師器 (平)			
9・17		Via	3次	P	212	1C-9J22、1C-10J2		平安	N-48°-W	0.27	0.25	0.07	-0.09	円形	弧状	1	単層						
9・17	24	Via	3次	P	223	1C-10J1・2・6・7		平安	N-48°-E	0.46	0.45	0.45	-0.41	円形	U字状	3	レンズ状			土師器 (墳)			
9・17	24	Via	3次	P	224	1C-9J23		平安	N-9°-E	0.42	0.32	0.22	-0.13	楕円形	V字状	2	柱痕有			縄文土器			
9・17	24	Via	3次	P	225	1C-9J23		平安	N-86°-W	0.40	0.34	0.28	-0.25	楕円形	台形状	2	レンズ状			土師器 (平)			
9・17	24	Via	3次	P	232	1C-9J22		平安	N-89°-E (0.51)	(0.18)	0.32	-0.26	-	V字状	2	水平							
9・18	24	Via	4次	SB	521	2C-1I・2I・2J		平安	N-38°-W	6.94	4.82	-	-	(長方形)	-	-	-				桁行3間×梁行2間と推定		
9・18	24	Via	3次	P	374	2C-1I25		平安	N-5°-E	0.69	0.48	0.41	-0.82	楕円形	漏斗状	4	柱根有			縄文土器、土師器 (平)、須恵器、柱根			
9・18	25	Vic	3次	P	380	2C-1J21、2C-2J1		平安	N-84°-W	0.23	0.19	0.22	-0.53	円形	U字状	1	単層						
9・18	24	Via	3次	P	382	2C-2I4		平安	N-2°-E	0.24	0.23	0.16	-0.47	円形	V字状	1	単層						
9・18	25	Via	4次	P	506	2C-2I9・14	SD543 <P506	平安	N-58°-W	0.71	0.54	0.72	-0.75	楕円形	V字状	2	柱根有	71	120	86	115	縄文土器、土師器 (墳(194)・平)、柱根 (11)	

別 表

図版No.	写真 図版 No.	確認 層位	調査 年次	遺構名 種別 No.	グリッド	重複関係 (旧<新)	時期	主軸方向	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		覆土 分層	堆積状況	遺物図版No.		出土遺物 種別	備考
									長軸	短軸	深さ		平面	断面			図版	写真		
9・18	25	Ⅵa	4次	P 509	2C-2I10	SK544 <P509	平安	N-63°-W	0.80	0.47	0.32	-0.68	楕円形	U字状	2	レンズ状	120	115	縄文土器、土師器 (墳・平)、須恵器、 木製品 (10)	
9・18	25	Ⅵa	4次	P 510	2C-2J1		平安	N-64°-E	0.38	0.37	0.56	-0.74	円形	U字状	1	柱根有	45	63	土師器 (墳・平 (2))、須恵器、 柱根	
9・18	25	Ⅵa	4次	P 513	2C-2J12・13		平安	N-86°-E	(0.70)	(0.54)	0.30	-0.73	(楕円形)	V字状	2	柱根有	45 121	63 116	縄文土器、土師器 (墳・平(3))、須恵器、 石器、柱根 (12)	
9・18	25	Ⅵa	4次	P 514	2C-2J7		平安	N-71°-E	0.50	0.42	0.49	-0.70	楕円形	漏斗状	2	柱根有	71	85	土師器(墳(195)・ 平)、須恵器	
9・18	25	Ⅵa	4次	P 525	2C-2I3		平安	N-54°-E	0.37	0.34	0.30	-0.77	円形	漏斗状	2	柱根有	71 121	86 116	縄文土器、土師器 (墳(196・ 197))、柱根 (13)	
9・18	25	Ⅵa	4次	P 526	2C-2I10・15		平安	N-9°-W	0.29	0.27	0.38	-0.57	(円形)	U字状	1	単層			土師器(墳)、須 恵器	
9・18		Ⅵa	4次	P 528	2C-2I10		平安	N-28°-E	0.40	0.29	0.28	-0.48	楕円形	U字状	1	単層				
9・19	26	Ⅵa	4次	SB 558	2C-II・1J・2J		平安	N-38°-W	4.80	4.02	-	-	長方形	-	-	-	-	-	-	
9・19	26	Ⅵa	3次	P 297	2C-1J12		平安	N-46°-E	0.35	0.34	0.28	-0.56	円形	台形状	3	柱根有			土師器(墳)	
9・19	26	Ⅵa	3次	P 341	2C-1J17・18	P388 <P341	平安	N-50°-E	0.40	0.30	0.16	-0.52	楕円形	台形状	2	柱根有			縄文土器、土師器 (墳)	
9・19	26	Ⅵa	4次	P 343	2C-1J11・16		平安	N-52°-E	0.28	0.27	0.15	-0.51	円形	U字状	2	柱根有				
9・19	26	Ⅵa	5次	P 372	2C-1J18		平安	N-15°-E	0.36	0.35	0.39	-0.75	円形	漏斗状	2	柱根有			土師器(墳・平)、 柱根	
9・19	26	Ⅵa	6次	P 379	2C-1J16・17		平安	N-11°-W	0.64	0.41	0.34	-0.65	楕円形	階段状	3	レンズ状			土師器(墳)	
9・19	27	Ⅵa	7次	P 381	2C-1I20		平安	N-87°-W	0.27	0.24	0.18	-0.28	円形	V字状	2	レンズ状				
9・19	26	Ⅵa	3次	P 386	2C-1J17・22		平安	N-87°-E	0.30	0.27	0.18	-0.41	円形	U字状	1	単層			土師器(墳)	
9・19	29	Ⅵa	3次	P 388	2C-1J17・18	SK281 <P388、 P388 <P341、 P388 <P389	平安	N-87°-W	(0.59)	(0.25)	(0.23)	-0.38	(楕円形)	弧状	2	斜位			土師器(平)	
9・19	26	Ⅵa	4次	P 520	2C-2J23		平安	N-80°-E	(0.38)	(0.15)	0.46	-0.73	(円形)	漏斗状	2	レンズ状			土師器(墳)	
9・19		Ⅵa	4次	P 534	2C-2J2		平安	N-30°-E	0.26	0.25	0.44	-0.74	円形	U字状	-	柱根有	121	116	柱根 (14)	
9・19	27	Ⅵa	4次	P 541	2C-2J7		平安	N-36°-E	0.40	0.34	0.44	-0.60	円形	U字状	-	柱根有	121	116	柱根 (15)	
9・19		Ⅵa	4次	P 559	2C-1J21		平安	-	(0.29)	0.27	0.28	-0.51	-	台形状	-	-	-	-		
9・19		Ⅵa	4次	P 560	2C-1J21・2J1		平安	N-24°-E	0.42	0.29	0.29	-0.50	不整形	台形状	-	-	-	-		
9・19		Ⅵa	4次	P 561	2C-1J22・23		平安	N-23°-W	0.63	0.39	0.30	-0.50	楕円形	半円状	1	単層				
9・20	10・ 27	Ⅵa	3次	SE 268	1C-10J3	SE268 <P267	平安	N-15°-E	1.55	1.53	0.80	-0.77	円形	漏斗状	6	レンズ状	121	116	縄文土器、土師器 (墳・平)、制物(水 溜) (16)	
9・20		Ⅵa	3次	P 267	1C-9J23、 1C-10J3	SE268 <P267	平安	N-68°-W	0.35	0.29	0.24	-0.23	楕円形	台形状	3	ブロック状				
8・20	27	Ⅵ	2次	SK 8	2C-1H12・ 13・17・18		平安	N-43°-W	1.69	1.45	0.12	-0.83	円形	弧状	1	単層				
10・20	27・ 28	Ⅶ	2次	SK 85	2D-1B19		平安	N-0°-W	1.22	1.10	0.34	-0.34	円形	半円状	2	単層	66	82	土師器(墳(122・ 123))、石器	
10・20	28	Ⅶ	3次	SK 136	1D-10B5・10		平安	N-33°-E	1.09	0.96	0.10	0.31	不整形	不整形	1	単層			土師器(墳・平)、 石器	
10・20	28	Ⅶ	4次	SK 140	1D-10C6・7		平安	N-30°-E	0.77	0.67	0.24	0.02	円形	台形状	2	レンズ状			土師器(平)、須 恵器	
10・20	28	Ⅶ	5次	SK 141	1D-9C22、 1D-10C2		平安	N-86°-E	(1.76)	1.86	0.09	0.36	-	弧状	1	単層			土師器(墳)	
9・20	28・ 29	Ⅵa	3次	SK 194	2C-1I4・5		平安	N-17°-E	1.65	1.31	0.35	-0.64	方形	箱状	3	レンズ状	45	63	土師器(平(5)、 須恵器(4)、石器	
9・20	29	Ⅵa	3次	SK 222	1C-10J17・22	SK222 <P261	平安	N-3°-E	0.62	0.57	0.13	-0.13	円形	弧状	1	単層	45・ 46	63・ 64	土師器(墳・平(9 ~11))、須恵器(6 ~8・12)	
8・21	29	Ⅵa	3次	SK 236	2C-1H14		平安	N-31°-E	0.64	(0.57)	0.19	-0.73	(方形)	台形状	1	単層				
8・21	29	Ⅵa	3次	SK 241	2C-1H21・22		平安	N-77°-W	0.86	0.77	0.11	-1.32	円形	弧状	1	単層				
9・21	29・ 30	Ⅵa	3次	SK 281	2C-1J18・23	P279 <P280 <SK281、SK281 <P387、SK281 <P388	平安	N-16°-E	1.93	1.50	0.31	-0.65	楕円形	弧状	1	単層	46・ 66・ 104	64・ 82・ 107	土師器(墳(124)・ 平)、須恵器(13 ~16)、石器、土 製品 (1)	
10・21	30・ 31	Ⅵa	3次	SK 282	2D-1B17・18		平安	N-82°-E	(0.72)	-	0.25	-0.21	(楕円形)	台形状	1	単層	66	82	土師器(墳(125))	
9・21	30	Ⅵa	3次	SK 284	2C-1J13・14・ 18・19	SB330-P326・ 488 <SK284	平安	N-11°-W	2.50	2.05	0.38	-0.72	-	台形状	3	レンズ状	46・ 47・ 67・ 104	64・ 65・ 82・ 107	縄文土器、土師器 (墳(126)・平(21 ~32))、須恵器 (17~20)、土鏝 (2~4)、石器	
10・21	30	Ⅵa	3次	SK 349	1D-10A8・9・ 13~15・18・ 19		平安	N-47°-W	2.81	2.69	0.25	0.18	方形	台形状	4	レンズ状			縄文土器、土師器 (墳)	
9・21	30	Ⅵa	3次	SK 370	2C-1J25、 2D-1A21		平安	N-83°-W	1.83	1.60	0.31	-0.61	円形	台形状	3	レンズ状			土師器(墳・平)、 須恵器	
9・22	31	Ⅵa	4次	SK 502	2C-2I11・12		平安	N-68°-W	1.13	(0.74)	0.12	-0.59	-	弧状	1	単層			縄文土器	
9・22	31	Ⅵa	4次	SK 511	2C-2J2		平安	N-4°-W	(0.51)	0.49	0.15	-0.44	(楕円形)	弧状	1	単層			土師器(墳・平)	
9・22	31	Ⅵa	4次	SK 515	2C-2J7・8		平安	N-39°-W	1.33	0.92	0.28	-0.48	楕円形	弧状	2	-			縄文土器、土師器 (墳・平)	
10・22	31・ 32	Ⅵa	4次	SK 516	2D-2A9・10		平安	N-54°-W	1.01	0.83	0.19	-0.46	楕円形	不整形	1	単層	68・ 100	84 104	縄文土器(206)、 土師器(墳(154))	
10・22	32	Ⅶ	2次	SD 91	2D-1B		平安	N-53°-E	4.16	0.43	0.30	-0.29	-	半円状	1	単層	69	84	縄文土器、土師器 (墳(160・ 161))、石器	
10・22	17・ 32	Ⅵa	3次	SD 271	2D-1B、2D-1C	SD271 <P276、 P391 <SD271	平安	N-70°-W	(10.73)	0.60	0.30	-0.33	-	台形状	2	レンズ状	70 94・ 95	84・ 85・ 100・ 101	縄文土器(97・ 108)、土師器(墳 (175~179)・ 平)、石器	
10・22	32・ 23	Ⅵa	3・ 4次	SD 275	1D-10B、 2D-1B、2D-1C	SD275 <SD283	平安	N-36~ 59°-W	(17.62)	0.72	0.17	-0.33	-	半円状	2	斜位	70	85	縄文土器、土師器 (墳(180)・平)	
10・22	34	Ⅵa	3・ 4次	SD 396・ 512	2D-1B、 2D-1C、2D-2C		平安	N-76°-W	(11.10)	0.43	0.24	-0.37	-	半円状	2	レンズ状	70	85	縄文土器、土師器 (墳(182・ 183))、石器	
10・22	34・ 35	Ⅵa	4次	SD 507	2D-1B、 2D-2B、2D-2C		平安	N-72°-W	8.53	0.56	0.32	-0.67	-	半円状	2	レンズ状	70	85	土師器(墳(184・ 185))、石器	

別 表

図版No.	写真図版No.	確認層位	調査年次	遺構名		グリッド	重複関係(旧<新)	時期	主軸方向	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	遺物図版No.		出土遺物種別	備考
				種別	No.					長軸	短軸	深さ		平面	断面			図版	写真		
10・22	35	Via	4次	SD	508	2D-2B2・3・8		平安	N-69°-W	2.08	0.36	0.08	-0.17	—	弧状	1	単層			土師器(墳)	
10・22		Via	3次	P	391	2D-1C18	P391 <SD271	平安	N-50°-E	0.29	0.25	0.22	-0.51	円形	U字状	3	斜位				
10・22・23	33	Via	3・4次	SD	275	1D-10B・1B		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			—	図版22の観察表に掲載
10・23	33	Via	3次	SD	283	2D-1B3・6~8	SD275 <SD283	平安	N-59°-E	5.18	0.69	0.17	-0.28	—	(半円状)	2	水平			縄文土器、土師器(墳)	
10・23	33	Via	3次	SD	285	1D-10A24、2D-1A4・5・10	P288 <SD285	平安	N-35°-W	2.95	0.62	0.21	-0.01	—	台形状	1	単層			土師器(墳)	
10・23	33	Via	3次	SD	304	2D-1A・1B	SD304 <P305	平安	N-46°-W	4.42	0.50	0.13	-0.27	—	半円状	1	単層	118	114	土師器(墳)、石器(138)	
10・23	33	Via	3次	SD	306	2D-1A13・14・19・20・24・25		平安	N-40°-W	(6.97)	0.51	0.15	-0.35	—	箱状	2	レンズ状	70	85	土師器(墳(181))	
10・23	35	Via	4次	SD	518	2D-1A24、2D-2A4		平安	N-35°-W	(1.04)	0.29	0.10	-0.35	—	台形状	1	単層			土師器(墳)	
10・23		Via	3次	P	288	2D-1A5	P288 <SD285	平安	N-59°-W	0.37	0.31	0.34	-0.34	円形	U字状	2	水平				
9・24	34	Via	3次	SD	327	1C-9J・10J、1D-9A・10A		平安	N-30°-W	6.31	0.47	0.22	0.19	—	半円状	1	単層			土師器(墳)、石器製品	
9・24	34	Via	4次	SD	503	2C-2I3・8・9・13・14		平安	N-25°-W	(3.24)	0.58	0.10	-0.57	—	弧状	1	単層	47	66	縄文土器、土師器(平(33))	
9・24	34	Via	4次	SD	504	2C-2I8・9・14		平安	N-41°-W	1.90	0.26	0.09	-0.46	—	U字状	1	単層				
10・24	35	Via	4次	SD	519	2D-2A7		平安	N-34°-W	(0.70)	0.22	0.08	-0.41	—	U字状	1	単層			土師器(墳)	
10・24	35	Via	3次	SA	352	2D-1A12・13		平安	N-86°-W	2.68	—	—	—	—	—	—	—				
10・24	15	Via	3次	P	308	—		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			—	SB366柱穴
10・24	35	Via	3次	P	353	2D-1A12		平安	N-30°-W	0.12	0.12	0.15	-0.43	円形	U字状	—	—				
10・24	35	Via	3次	P	354	2D-1A12		平安	N-69°-E	0.14	0.12	0.09	-0.29	円形	U字状	—	—				
10・24	35	Via	3次	P	355	2D-1A12		平安	N-78°-W	0.16	0.11	0.13	-0.37	楕円形	U字状	—	—				
10・24	35	Via	3次	P	356	2D-1A12・13		平安	N-80°-W	0.13	0.11	0.10	-0.30	円形	U字状	—	—				
10・24	35	Via	3次	P	357	2D-1A13		平安	N-72°-W	0.12	0.11	0.07	-0.29	円形	U字状	—	—				
10・24	35・36	Via	4次	SX	517	2D-2C2・7		平安	N-16°-W	1.98	0.63	0.29	-0.57	—	箱状	2	水平	121	116	縄文土器、土師器(墳・平)、須恵器、板(17~22)	

中層

28・29	7・36・37・38・39	Vic	3・4次	SI	266	2D-1D・2D		古墳	N-7°-W	9.04	(5.40)	0.90	-1.21	(隅丸)方形	(台形状)	8	レンズ状	60~62・96・111・113・119	79・101・110・111・113・114	縄文土器(112)、土師器(墳(1・~51))、石器(70・90)、石器製品(161)	床面積(23.77㎡)
28・29	37	Vic	3・4次	SD	238	2D-1D・2D		古墳	—	13.46	1.42	0.31	-0.56	—	台形状	1	単層	62~65・96	79~82・101	縄文土器(112)、土師器(墳(52~108))、石器	周溝
28・29		Vic	3次	P	253	2D-1D9・14		古墳	N-55°-W	0.49	0.43	0.16	-0.72	円形	弧状	1	単層			土師器(墳)	
28・29	38	Vic	3次	P	395	2D-1D12		古墳	N-26°-W	(0.92)	(0.65)	0.52	-1.39	(楕円形)	漏斗状	2	柱痕有			土師器(墳)	主柱穴
28・29	38	Vic	3次	P	397	2D-1D17・18		古墳	N-47°-E	0.47	0.40	0.37	-1.15	楕円形	V字状	1	単層				支柱穴
28・29	38	Vic	3次	P	398	2D-1D17		古墳	N-20°-W	0.35	0.34	0.43	-1.15	円形	U字状	1	単層			土師器(墳)	支柱穴
28・29	38	Vic	3次	P	399	2D-1D16		古墳	N-31°-E	0.41	0.35	0.44	-1.11	方形	V字状	1	柱痕有	120	115	柱根(1)	支柱穴
28・29		Via	4次	P	540	2D-1D15		古墳	N-10°-E	0.40	0.33	0.22	-1.30	楕円形	半円状	1	単層			土師器(墳)	
28・29		Via	4次	P	549	2D-1D22		古墳	N-83°-W	0.36	0.29	0.42	-1.14	楕円形	U字状	1	単層				支柱穴
28・29	38	Via	4次	P	550	2D-1D22		古墳	N-17°-W	0.50	0.43	0.28	-1.18	楕円形	台形状	2	柱痕有	120	115	柱根(2)	主柱穴
28・29	39	Via	4次	P	551	2D-1D22		古墳	N-80°-E	0.48	0.43	0.27	-0.93	円形	半円状	1	単層			土師器(墳)	支柱穴
28・29	39	Via	4次	P	552	2D-1D23		古墳	N-68°-W	0.44	0.36	0.42	-1.28	楕円形	U字状	1	単層			土師器(墳)	支柱穴
28・29		Via	4次	P	555	2D-1D24	新旧不明	古墳	N-0°	0.28	0.28	0.16	-1.22	円形	半円状	1	単層			土師器(墳)	
28・29		Via	4次	P	556	2D-1D19・20		古墳	N-0°	0.27	0.27	0.12	-1.22	円形	半円状	1	単層				
27・30	8・39・40	Vic	3次	SI	461	1D-10B・10C、2D-1B・1C		古墳	N-45°-E	9.36	8.54	—	-0.66	(隅丸)方形	弧状	6	—	65・66・99	82・103	縄文土器(175)、土師器(墳(109~121)・平)、石器	底面標高は床面下方。床面積61.33㎡
27・30	41	Via	3次	P	413	2D-1B8		古墳	N-3°-E	0.37	0.35	0.18	-0.61	円形	U字状	2	レンズ状				
27・30	41	Via	3次	P	435	2D-1B9		古墳	N-2°-W	0.39	0.38	0.39	-0.82	円形	U字状	2	レンズ状				
27・30	41	Vic	3次	P	468	2D-1B9	SD478 <P468、SK470 <P468	古墳	N-2°-W	0.48	(0.45)	0.17	-0.64	円形	半円状	1	単層				
27・30	41	Vic	3次	SK	470	2D-1B8・9	SK470 <P468、SD478 <SK470	古墳	N-57°-W	1.31	0.77	0.21	-0.60	(長)方形	弧状	1	単層				
27・30	40	Vic	3次	P	473	1D-10C16・21		古墳	N-28°-E	0.67	0.60	0.66	-1.03	円形	U字状	4	柱痕有				主柱穴
27・30	40	Vic	3次	P	474	2D-1B4		古墳	N-77°-E	0.77	0.60	0.73	-0.98	楕円形	U字状	3	柱痕有				主柱穴
27・30	40	Vic	3次	P	475	1D-10B22・23		古墳	N-51°-W	0.60	0.52	0.41	-1.05	円形	台形状	2	柱痕有			土師器(墳)	主柱穴
27・30	40	Vic	3次	P	476	1D-10B14		古墳	N-14°-W	0.74	0.71	0.59	-0.92	円形	U字状	3	柱痕有				主柱穴
27・30	41	Vic	3次	SD	478	1D-10B・10C、2D-1B・1C	SD478 <P468、SD480 <SD478、SD478 <P486	古墳	—	—	—	—	—	—	—	—	—				壁溝
27・30	41	Vic	3次	SD	479	2D-1B4・5・9		古墳	N-56°-E	1.19	0.32	0.05	-0.62	—	弧状	1	単層				
27・30	41	Vic	3次	SD	480	2D-1B5・9・10	SD480 <SD478	古墳	N-51°-E	2.00	0.41	0.11	-0.62	—	半円状	1	単層				
27・30		Vic	3次	SD	481	1D-10B13・18		古墳	N-37°-E	1.14	0.30	—	—	—	—	—	—				
27・30	41	Vic	3次	P	486	2D-1B5	SD478 <P486	古墳	N-27°-E	0.39	0.33	0.08	-0.62	円形	弧状	2	レンズ状				
28・31	41	Via	3次	SK	240	2D-1D4・5		古墳	N-58°-W	1.20	0.96	0.20	-0.72	楕円形	弧状	2	レンズ状			土師器(墳)	
28・31	42	Vic	3次	SK	272	2D-1D2・3		古墳	N-86°-W	1.64	1.15	0.51	-0.94	楕円形	半円状	—	—				
26・31	42	Via	3次	SK	302	2C-1J2		古墳	N-63°-E	0.89	0.70	0.16	-0.43	楕円形	台形状	1	単層	67	82	土師器(墳(127))	
26・31	42	Via	3次	SK	303	2C-1J3・8		古墳	N-20°-E	0.95	0.59	0.22	-0.59	(長)楕円形	台形状	1	単層	67	83	土師器(墳(128))	
26・31	42	Via	3次	SK	312	2C-1J19・20	SD350 <SK312	古墳	N-70°-W	0.51	0.45	0.12	-0.37	円形	台形状	1	単層	67	83	土師器(墳(129・130))	
28・31	42・43	Vic	3次	SK	378	2D-1D15・20、2D-1E11・16	SK539 <SK378	古墳	N-87°-E	2.86	2.28	0.57	-1.02	不整形	台形状	1	単層	67	83	土師器(墳(131~142))	

別 表

図版No.	写真 図版 No.	確認 層位	調査 年次	遺構名 種別	No.	グリッド	重複関係 (旧<新)	時期	主軸方向	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		覆土 分層	堆積状況	遺物図版No.		出土遺物 種別	備考
										長軸	短軸	深さ		平面	断面			図版	写真		
27・31	43	Vlc	3次	SK	400	2D-1C12・ 13・17・18	SK400 <P390, SK400 <SD271	古墳	N-13°-E	1.77	1.72	0.39	-0.88	円形	弧状	2	レンズ状	67・ 68・ 89・ 106・ 119	83・ 97・ 108・ 114	縄文土器 (11)、 土師器 (墳 (143 ~146))、石器 (1)、石製品 (156・ 158)	
26・31	43	VIIa	3次	SK	402	1C-10I9・10		古墳	N-77°-W	1.76	1.30	0.60	-1.43	楕円形	半円状	2	レンズ状	89	97	縄文土器 (10)、 土師器 (墳)	
26・32	43	VIIa	3次	SK	403	2C-1I18・23・ 24		古墳	N-31°-W	1.96	0.83	0.19	-1.13	(長) 楕円形	半円状	1	単層				
27・32	43・ 44	Vlc	3次	SK	407	1D-9A25、 1D-9B21	SK407 <P436、 SK440 <SK407、 SK406 <SK407	古墳	N-75°-W	3.25	1.16	0.35	0.10	(長) 楕円形	弧状	2	レンズ状			土師器 (墳)	
26・32	44	VIIa	3次	SK	415	1C-10J16・ 17・21・22		古墳	N-25°-W	1.74	1.07	0.40	-1.02	楕円形	V字状	2	レンズ状			縄文土器、土師器 (墳)	
27・32	44	Vlc	3次	SK	427	1D-9A17		古墳?	N-30°-E	0.80	0.54	0.48	-0.30	楕円形	半円状	2	レンズ状				
27・32	44	Vlc	3次	SK	430	2D-1A4・5・9・ 10		古墳	N-40°-E	1.34	1.05	0.40	-0.82	楕円形	台形状	3	レンズ状	68	83	土師器 (墳 (147 ~149))	
27・32	44	Vlc	3次	SK	440	1D-9A24・25、 1D-10A4・5・9・ 10	SK440 <P441、 SK440 <SK407	古墳	N-40°-E	(3.67)	(2.91)	0.38	-0.15	(楕円形)	台形状	2	水平	68	83・ 84	縄文土器、土師器 (墳 (150・ 151))	
27・32	45	Vlc	3次	SK	444	2D-1C16		古墳	N-48°-W	(1.11)	0.85	0.29	-0.77	(楕円形)	半円状	3	レンズ状				
27・32	45	VIIa	3次	SK	452	1D-10B11・ 16・17		古墳	N-65°-E	2.06	1.24	0.46	-0.64	(長) 楕円形	台形状	2	レンズ状			縄文土器、石器	
27・32	45	Vlc	3次	SK	453	2D-1C18・23		古墳	N-65°-E	1.37	(0.99)	0.27	-0.85	(楕円形)	半円状	2	レンズ状				
27・32		Vlc	3次	P	436	1D-9A25、 1D-9B21	SK407 <P436	古墳	N-35°-W	(0.56)	(0.52)	0.42	-0.16	(円形)	U字状	1	単層			土師器 (墳)	
27・32		Vlc	3次	P	441	1D-10A4	SK440 <P441	古墳	N-36°-E	0.57	0.49	0.29	-0.20	略円形	半円状	1	単層				
27・33	46	Vlc	3次	SK	455	2D-1C18・19		古墳	N-59°-W	(1.19)	0.95	0.30	-0.92	(楕円形)	(箱状)	3	レンズ状				
27・33	46	Vlc	3次	SK	456	2D-1C12		古墳	N-56°-E	(1.55)	0.96	0.24	-0.87	(楕円形)	弧状	2	レンズ状				
27・33	46	Vlc	3次	SK	457	2D-1C8・13		古墳	N-42°-W	(1.53)	0.82	0.17	-0.84	(楕円形)	弧状	2	レンズ状				
27・33	46	Vlc	3次	SK	458	2D-1C7・12		古墳	N-67°-E	(0.72)	0.75	0.14	-0.79	(楕円形)	弧状	1	単層				
27・33	45	Vlc	3次	SK	459	2D-1C6・11	SD451 <SK459	古墳	N-58°-E	1.09	0.71	0.28	-0.89	楕円形	半円状	2	レンズ状				
27・33	45	Vlc	3次	SK	460	2D-1C6・7・ 11・12		古墳	N-80°-E	2.10	(1.04)	0.26	-0.89	楕円形	半円状	2	レンズ状				
27・33	47	Vlc	3次	SK	463	2D-1A9・10		古墳	N-55°-W	0.57	0.50	0.18	-0.63	円形	弧状	1	単層				
27・33	47	Vlc	3次	SK	464	2D-1A10・15		古墳	N-50°-W	(0.50)	0.68	0.11	-0.55	(円形)	台形状	1	単層				
27・33	45	VIIa	3次	SD	451	2D-1B15、 2D-1C1・2・6・ 7	SD451 <SK459・ P446	古墳	-	7.13	1.36	0.27	-1.12	L字状	半円状	2	レンズ状	119	114	縄文土器、石製品 (154)	
27・33		Vlc	3次	P	446	2D-1B10	SD451 <P446	古墳	N-28°-E	0.50	0.47	0.19	-0.79	円形	半円状	2	斜位			縄文土器	
27・34	47	Vlc	3次	SK	466	2D-1B6・7・ 11・12	SK466 <SK467	古墳	N-62°-E	1.50	1.28	0.16	-0.64	(円形)	弧状	1	単層			土師器 (墳)	
27・34	47	Vlc	3次	SK	467	2D-1B6・7・ 11・12	SK467 <SK466	古墳	N-32°-W	(1.78)	1.58	0.21	-0.65	(楕円形)	弧状	2	レンズ状	68	84	縄文土器、土師器 (墳 (152・ 153))	
27・34	47・ 48	Vlc	3次	SK	469	2D-1B16・ 17・21・22		古墳	N-89°-W	1.69	1.20	0.25	-0.86	楕円形	弧状	2	レンズ状				
26・34	48	VIIa	3次	SK	471	1D-10A16・ 17・21・22		古墳	N-67°-W	1.71	0.86	0.17	-0.36	(長) 楕円形	弧状	1	単層				
27・34	48	Vlc	4次	SK	532	2D-2C1・2		古墳	N-13°-E	1.78	1.44	0.18	-0.50	楕円形	弧状	2	レンズ状			土師器 (墳)	
27・34	48	Vlc	4次	SK	533	2D-1C21、 2D-2C1		古墳	N-50°-W	1.58	1.36	0.42	-0.66	円形	台形状	2	レンズ状			土師器 (墳)	
27・34	48・ 49	Vlc	4次	SK	535	2D-1B23、 2D-2B2・3	SD545 <SK535	古墳	N-89°-E	1.26	0.96	0.34	-0.66	楕円形	半円状	1	単層	68	84	土師器 (墳 (155 ~158))	P553との 新旧不明
27・34	49	Vlc	4次	SK	536	2D-1B21・22、 2D-2B1・2	SD545 <SK536	古墳	N-23°-W	1.80	1.42	0.25	-0.62	楕円形	台形状	1	単層			縄文土器、土師器 (墳)	
28・34	49	VIIa	4次	SK	539	2D-1D20	SK539 <SK378	古墳	N-38°-E	0.94	0.78	0.20	-1.36	楕円形	台形状	1	単層			土師器 (墳)	
26・34	49	VIIa	4次	SK	544	2C-2I10	SK544 <P509	古墳	N-77°-E	(1.58)	0.82	0.23	-0.86	(長) 楕円形	半円状	1	単層			縄文土器	
27・35	49	VIIa	4次	SK	546	2D-2B7・8		古墳	N-89°-E	(1.11)	(0.76)	0.18	-0.76	-	弧状	1	単層	68	84	土師器 (墳 (159))	
27・35	50	VIIa	4次	SK	554	2D-2C2・3・7・ 8		古墳	N-71°-E	(1.58)	(1.03)	0.48	-1.09	-	半円状	2	レンズ状	89	97	縄文土器 (13)、 土師器 (墳)	
28・35	50	Vlc	3次	SD	234	1D-10E		古墳	N-30°-W	(7.36)	(1.60)	0.41	-0.97	-	V字状、 弧状	3	レンズ状	69	84	土師器 (墳 (162 ~168))	
28・35	50・ 51	Vlc	3次	SD	248	1D-10E、 2D-1E		古墳	N-20°-E	(9.00)	(1.17)	0.19	-0.86	-	半円状	2	水平	69	84	土師器 (墳 (169 ~174))	
26・36	51	VIIa	3次	SD	350	2C-1J19・20・ 25	SD350 <SK312	古墳	N-61°-W	(3.08)	(1.14)	0.27	-0.62	-	弧状	2	斜位			縄文土器、土師器 (墳)	
26・36	51	Vlc	4次	SD	531	2C-2H10・15	SD542 <SD531	古墳	N-86°-E	(1.65)	(0.43)	0.17	-0.78	-	半円状	1	単層			縄文土器、土師器 (墳)	
26・36	51	VIIa	4次	SD	542	2C-2H5・10・ 15	SD542 <SD531	古墳	N-32°-W	(2.35)	0.70	0.20	-0.95	-	弧状	1	単層			縄文土器、土師器 (墳)	
26・36	51	VIIa	4次	SD	543	2C-2I・2H	SD543 <SD503・ 504 SD543 <P506・ 525	古墳	-	(8.90)	1.53	0.27	-0.95	弧状	弧状	1	単層	70・ 98・ 99	85・ 102・ 103	縄文土器 (159・ 176)、土師器 (墳 (186~190))、 アスファルト	
27・36	51	VIIa	4次	SD	545	2D-1A25、 2D-1B21、 2D-2B1~3	SD545 <SK535・ 536・P553	古墳	-	(4.45)	0.98	0.16	-0.75	弧状	弧状	2	レンズ状			土師器 (墳)	
28・36	53	Vlc	3次	SX	239	1D-10D4・5・9・ 10		古墳	-	1.22	1.16	-	-	-	-	-	-	75	88	土師器 (墳 (235))	遺物集中出 土地点
28・36	52	Vlc	4次	SX	537	2D-1D24・25、 2D-2D4・5		古墳	N-9°-E	(2.69)	(2.04)	0.71	-1.15	不整形	半円状	3	レンズ状	75・ 106	88・ 108	縄文土器、土師器 (墳 (236~ 241))、石器 (14)	
26・37	52	Vlc	3次	SX	233	1C-10I・10J		古墳	-	4.50	1.85	-	-	-	-	-	-	72~ 75・ 96・ 99	85~ 88・ 96・ 103	縄文土器 (180)、 土師器 (墳 (199 ~234))、石器	土器集中分 布範囲

下層

図版No.	写真図版No.	確認層位	調査年次	遺構名 種別 No.	グリッド	重複関係 (旧<新)	時期	主軸方向	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		覆土 分層	堆積状況	遺物図版No.		出土遺物 種別	備考
									長軸	短軸	深さ		平面	断面			図版	写真		
39・42	53	VIIa	3次	SK 392	2C-2H2・3		縄文	N-47°-E	1.02	0.97	0.16	-0.30	円形	弧状	1	単層				
40・42	53	VIIa	3次	SK 404	1D-9B23・24	SK404 <SK409	縄文	N-68°-W	1.96	1.41	0.26	-0.06	(楕円形)	弧状	2	レンズ状	109	109	縄文土器、石器 (49)	
39・42	53	VIIa	3次	SK 405	1C-10J6・7・11・12		縄文	N-39°-W	2.59	1.28	0.53	-0.98	(長)楕円形	弧状	2	レンズ状			縄文土器、石器	
40・42	53・54	VIIc	3次	SK 406	1D-9B21・22	SK406 <SK407	縄文	N-76°-W	(1.94)	1.18	0.50	0.00	(長)楕円形	弧状	2	レンズ状			縄文土器	
39・42	54	VIIa	3次	SK 408	1C-10I24・25,2C-1I4・5		縄文	N-16°-W	1.15	0.88	0.39	-1.76	楕円形	不整形	1	単層				
40・42	53	VIIa	3次	SK 409	1D-9B24	SK404 <SK409	縄文	N-75°-E	(0.57)	(0.48)	0.38	-0.32	(円形)	半円状	2	レンズ状			骨片	骨片多量に出土
41・42	54	VIIa	3次	SK 412	1D-10E2・3・7・8		縄文?	N-68°-E	0.71	0.66	0.27	-1.46	円形	半円状	1	単層				
41・42	54	VIIa	3次	SK 417	2D-1E11・12		縄文	N-79°-E	0.90	0.80	0.24	-1.40	円形	弧状	1	単層				
41・42	54・55	VIIa	3次	SK 420	2D-1E13・18		縄文	N-80°-E	1.58	1.32	0.33	-1.62	円形	弧状	1	単層				
39・42	55	VIIa	3次	SK 477	1C-10I12・17		縄文	N-23°-W	2.20	0.92	0.23	-1.77	(長)楕円形	弧状	2	斜位				
39・43	55	VIIa	3次	SJ 242	2C-1H18		縄文	-	0.44	0.40	0.29	-1.09	-	-	1	単層	89	97	縄文土器 (1)	A類
39・43	55	VIIa	3次	SJ 243	2C-1H13		縄文	-	0.41	0.31	0.23	-1.48	-	-	1	単層	89	97	縄文土器 (2)	A類
39・43	55・56	VIIa	3次	SJ 264	2C-1H13・14・18・19		縄文	-	-	-	0.15	-	-	-	-	-	89	97	縄文土器 (3)、 石器 (103)	B類
39・43	56	VIIa	3次	SJ 265	2C-1I14		縄文	-	-	-	0.16	-	-	-	-	-	89	97	縄文土器 (4)	B類
41・43	56	VIIa	3次	SJ 414	1D-10F12		縄文	-	(0.37)	(0.23)	(0.19)	-1.75	-	-	1	単層	89	97	縄文土器 (5)	A類

その他のピット

8		VI	2次	P	10	2C-1H24		平安	N-33°-E	0.28	0.25	0.08	-0.41	円形	弧状	1	単層			土師器 (平)	
8		VI	2次	P	11	2C-1H18		平安	N-3°-E	0.22	0.19	0.13	-0.53	楕円形	V字状	1	単層				
9		VI	2次	P	13	2C-1H6・11		平安	N-6°-E	0.25	0.24	0.07	-0.59	円形	弧状	1	単層			土師器 (墳・平)	
8		VI	2次	P	16	2C-1H24		平安	N-85°-W	0.20	0.17	0.15	-0.48	円形	U字状	1	単層				
9		VI	2次	P	17	2C-1H18		平安	N-59°-E	0.36	0.33	0.06	-0.18	円形	弧状	1	単層			土師器 (平)	
9		VI	2次	P	20	2C-1H22		平安	N-68°-W	0.37	(0.24)	0.08	-0.18	(楕円形)	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	21	2C-1H15・20		平安	N-85°-E	0.16	0.14	0.05	-0.16	円形	台形状	1	単層				
9		VI	2次	P	22	2C-1H15・20		平安	N-83°-E	0.15	0.12	0.07	-0.22	楕円形	台形状	1	単層				
9		VI	2次	P	23	2C-1H20		平安	N-36°-W	0.10	0.09	0.10	-0.18	円形	U字状	1	単層				
9		VI	2次	P	25	2C-1J16		平安	N-84°-W	0.24	0.19	0.05	-0.12	楕円形	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	26	2C-1J17		平安	N-84°-W	0.17	0.16	0.07	-0.15	円形	半円状	1	単層				
9		VI	2次	P	27	2C-1J11		平安	N-9°-W	0.20	0.17	0.05	-0.08	円形	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	29	2C-1J12		平安	N-53°-E	0.13	0.11	0.05	-0.10	楕円形	半円状	1	単層				
9		VI	2次	P	31	2C-1J12		平安	N-8°-W	0.15	0.12	0.10	-0.15	楕円形	V字状	1	単層				
9		VI	2次	P	32	2C-1J12・13		平安	N-9°-E	0.21	0.19	0.06	-0.11	円形	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	33	2C-1J12		平安	N-35°-W	0.23	0.20	0.03	-0.09	円形	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	34	2C-1J18		平安	N-50°-E	0.16	0.11	0.09	-0.17	楕円形	U字状	1	単層				
9		VI	2次	P	36	2C-1H25、 2C-1J21		平安	N-82°-E	(0.54)	(0.19)	0.18	-0.24	(楕円形)	半円状	1	単層			土師器 (平)、須 臈器	
9		VI	2次	P	38	2C-1J8		平安	N-39°-E	0.19	0.15	0.05	-0.04	楕円形	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	39	2C-1J8		平安	N-9°-W	0.21	0.17	0.19	-0.19	楕円形	U字状	1	単層			土師器 (平)	
9		VI	2次	P	43	2C-1J8		平安	N-71°-E	0.14	0.11	0.07	-0.10	長方形	半円状	1	単層				
9		VI	2次	P	44	2C-1J8		平安	N-48°-W	0.19	0.17	0.04	-0.09	円形	台形状	1	単層				
9		VI	2次	P	46	2C-1J9		平安	N-21°-E	0.33	0.21	0.10	-0.08	楕円形	不整形	2	ブロック状				
9		VI	2次	P	47	2C-1J9・14		平安	N-18°-W	0.19	0.10	0.07	-0.10	楕円形	U字状	1	単層			土師器 (平)	
9		VI	2次	P	48	2C-1J9・14		平安	N-67°-W	0.19	0.17	0.06	-0.06	円形	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	49	2C-1J14		平安	N-37°-E	0.15	0.12	0.11	-0.18	楕円形	台形状	1	単層				
9		VI	2次	P	50	2C-1J14		平安	N-30°-W	0.18	0.13	0.09	0.14	楕円形	V字状	1	単層				
9		VI	2次	P	51	2C-1J14		平安	N-14°-E	0.20	0.19	0.09	-0.12	円形	箱状	1	単層			土師器 (平)	
9		VI	2次	P	52	2C-1J19		平安	N-46°-W	0.26	0.22	0.07	-0.12	円形	V字状	1	単層				
9		VI	2次	P	53	2C-1J19		平安	N-90°	0.21	0.20	0.06	-0.12	円形	半円状	1	単層				
9		VI	2次	P	56	2C-1J20		平安	N-67°-W	0.20	0.18	0.16	-0.21	円形	U字状	1	単層			土師器 (平)	
9		VI	2次	P	57	2C-1J20		平安	N-53°-W	0.26	0.20	0.11	-0.15	台形	V字状	1	単層			土師器 (平)	
9		VI	2次	P	60	2C-1J10		平安	N-1°-W	0.16	0.13	0.17	-0.16	楕円形	U字状	1	単層				
9		VI	2次	P	61	2C-1J20		平安	N-81°-W	0.23	0.14	0.10	-0.10	楕円形	箱状	1	単層				
9		VI	2次	P	62	2C-1J20、 2D-1A16		平安	N-59°-E	0.20	0.19	0.08	-0.13	円形	半円状	1	単層				
9		VI	2次	P	63	2D-1A11		平安	N-2°-E	0.33	0.26	0.07	-0.05	楕円形	V字状	1	単層			土師器 (平)	
9		VI	2次	P	64	2D-1A16		平安	N-86°-W	0.19	0.11	0.07	-0.09	楕円形	半円状	1	単層				
9		VI	2次	P	65	2D-1A16・17		平安	N-85°-E	(0.25)	0.15	0.14	-0.13	(円形)	V字状	1	単層				
10		VI	2次	P	68	2D-1A12		平安	N-8°-E	0.15	0.14	0.05	-0.06	円形	弧状	1	単層				
10		VI	2次	P	69	2D-1A17		平安	N-89°-E	0.16	0.12	0.06	-0.07	楕円形	半円状	1	単層				
10		VI	2次	P	71	2D-1A18		平安	N-37°-W	0.16	0.15	0.11	-0.11	円形	U字状	1	単層				
10		VI	2次	P	72	2D-1A8		平安	N-46°-W	0.21	0.18	0.10	0.09	楕円形	半円状	1	単層			土師器 (平)	
10		VI	2次	P	74	2D-1A19		平安	N-16°-E	0.12	0.12	0.03	-0.05	円形	弧状	1	単層				
10		VI	2次	P	76	2D-1A14		平安	N-53°-E	0.18	0.16	0.03	-0.09	楕円形	台形状	1	単層			土師器 (平)	
10		VI	2次	P	77	2D-1A14		平安	N-48°-E	0.19	0.18	0.03	-0.10	円形	弧状	1	単層			土師器 (平)	
10		VI	2次	P	79	2D-1B16		平安	N-52°-W	0.33	0.22	0.04	-0.17	長方形	弧状	1	単層			土師器 (墳・平)	
10		VI	2次	P	80	2D-1B11・16		平安	N-6°-W	0.34	0.27	0.20	-0.26	楕円形	U字状	2	レンズ状			土師器 (平)	
10		VI	2次	P	86	2D-1C7		平安	N-71°-W	0.30	0.22	0.11	0.08	楕円形	半円状	1	単層			土師器 (墳)	
9		VI	2次	P	93	1C-10J6		平安	N-82°-E	0.20	0.15	0.16	0.07	(円形)	漏斗状	1	単層				
9		VI	2次	P	95	1C-10J7・12		平安	N-84°-E	0.26	0.21	0.03	0.06	楕円形	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	96	1C-10J12		平安	N-58°-E	0.26	0.22	0.05	0.05	楕円形	弧状	1	単層				
9		VI	2次	P	97	1C-10J12		平安	N-81°-E	0.13	0.11	0.10	-0.02	円形	U字状	1	単層				
9		VI	2次	P	98	1C-10J7		平安	N-81°-E	0.16	0.13	0.07	0.01	楕円形	半円状	1	単層				
9		VI	2次	P	101	1C-10J9		平安	N-85°-E	0.25	0.18	0.05	0.27	楕円形	弧状	1	単層			土師器 (平)	
10		VI	2次	P	104	1D-10A3・8		平安	N-40°-W	0.18	0.15	0.07	0.52	楕円形	半円状	1	単層				
10		VI	2次	P	105	1D-10A4		平安	N-8°-W	0.41	0.30	0.09	0.49	楕円形	弧状	1	単層				
10		VI	2次	P	106	1D-10A25		平安	N-50°-W	0.28	0.23	0.07	0.32	楕円形	弧状	1	単層			土師器 (平)	

別 表

図版No.	写真 図版 No.	確認 層位	調査 年次	遺構名 種別 No.	グリッド	重複関係 (旧<新)	時期	主軸方向	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		覆土 分層	堆積状況	遺物図版No.		出土遺物 種別	備考
									長軸	短軸	深さ		平面	断面			図版	写真		
10		VI	2次	P 108	1D-10A20		平安	N-37°-E	0.25	0.23	0.10	0.45	円形	台形状	1	単層			土師器(平)、土製品、鉄滓	
10		VI	2次	P 109	1D-10A20		平安	N-78°-E	0.34	0.30	0.08	0.52	楕円形	台形状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 110	1D-10A10・15		平安	N-6°-W	0.42	0.36	0.03	0.60	楕円形	弧状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 112	1D-10A20、1D-10B16		平安	N-1°-W	0.21	0.20	0.07	0.46	円形	半円状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 113	1D-10A15		平安	N-41°-W	0.26	0.24	0.08	0.54	円形	弧状	1	単層			縄文土器、土師器(平)	
10		VI	2次	P 114	1D-10A10・15		平安	N-36°-E	0.30	0.20	0.08	0.56	楕円形	弧状	1	単層			土師器(墳・平)	
10		VI	2次	P 116	1D-10B21		平安	N-36°-E	0.39	0.35	0.10	0.30	円形	V字状	1	単層				
10		VI	2次	P 118	1D-10B11		平安	N-30°-W	0.36	0.32	0.10	0.51	円形	半円状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 120	1D-10B16		平安	N-83°-E	0.16	0.15	0.03	0.44	円形	弧状	1	単層				
10		VI	2次	P 121	1D-10B16		平安	N-43°-W	0.21	0.17	0.11	0.37	円形	台形状	1	単層				
10		VI	2次	P 122	1D-10B11・16		平安	N-5°-W	0.17	0.16	0.08	0.42	円形	半円状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 123	1D-10B22		平安	N-30°-W	0.24	0.21	0.04	0.31	円形	弧状	1	単層				
10		VI	2次	P 124	1D-10B22		平安	N-7°-W	0.35	0.29	0.08	0.30	台形	弧状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 125	1D-10B22		平安	N-27°-W	0.34	0.30	0.08	0.31	楕円形	弧状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 126	1D-10B22		平安	N-58°-E	0.20	0.18	0.06	0.32	円形	弧状	1	単層				
10		VI	2次	P 127	1D-10B7・12		平安	N-53°-E	0.38	0.28	0.08	0.47	楕円形	弧状	1	単層			土師器(墳・平)	
10		VI	2次	P 129	1D-10B8		平安	N-11°-W	0.20	0.17	0.05	0.52	円形	弧状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 130	1D-10B13		平安	N-55°-W	0.26	0.20	0.06	0.39	楕円形	半円状	1	単層			土師器(平)	
10		VI	2次	P 132	1D-10B24		平安	N-15°-W	0.25	0.19	0.06	0.19	楕円形	弧状	1	単層				
10		VI	2次	P 133	2D-1B5		平安	N-44°-E	0.23	0.17	0.07	0.14	楕円形	半円状	1	単層				
10		VI	2次	P 134	1D-10B15		平安	N-13°-E	0.28	0.24	0.10	0.15	台形	半円状	1	単層				
10		VII	2次	P 135	1D-10C6		平安	N-46°-E	0.38	0.32	0.17	0.18	楕円形	台形状	1	単層			土師器(平)	
10		VII	2次	P 137	1D-10B5		平安	N-20°-E	0.18	0.15	0.06	0.32	楕円形	弧状	1	単層			縄文土器	
10		VII	2次	P 139	1D-10C6		平安	N-9°-W	0.33	0.24	0.23	0.05	台形	台形状	2	レンズ状				
11		VI	2次	P 144	1D-9D22		平安	0°	0.19	0.17	0.11	-0.10	円形	半円状	2	ブロック状				
11		VI	2次	P 145	1D-9D22、1D-10D2		平安	N-45°-W	0.12	0.11	0.16	-0.21	円形	U字状	1	単層			土師器(平)、石器	
11		VI	2次	P 146	1D-10D2		平安	N-55°-E	0.16	0.16	0.16	-0.14	円形	台形状	1	単層			土師器(平)	
11		VI	2次	P 147	1D-10D2		平安	N-44°-W	0.16	0.10	0.15	-0.18	楕円形	U字状	1	単層				
11		VI	2次	P 148	1D-10D2		平安	N-64°-W (0.16)	0.15	0.04	0.02		(円形)	弧状	1	単層				
11		VI	2次	P 149	1D-10D7		平安	N-59°-E	0.18	0.15	0.05	-0.02	円形	V字状	1	単層				
11		VI	2次	P 151	1D-10D18		平安	N-27°-W	0.21	0.16	0.09	-0.14	楕円形	漏斗状	1	単層			土師器(平)	
11		VI	2次	P 152	2D-1D8		平安	N-66°-E	0.18	0.13	0.04	-0.16	楕円形	弧状	1	単層				
11		VI	2次	P 153	1D-10D2		平安	N-66°-E	0.15	0.09	0.09	-0.11	楕円形	半円状	1	単層				
11		VI	2次	P 154	1D-10D8		平安	N-46°-E	0.16	0.11	0.10	-0.13	楕円形	U字状	1	単層			土師器(平)	
11		VI	2次	P 155	1D-10D3	P155 <P183	平安	N-19°-W	0.16 (0.13)	0.08	-0.17		方形	半円状	1	単層				
11		VI	2次	P 156	1D-10D3・4		平安	N-75°-W	0.18	0.15	0.08	-0.19	楕円形	半円状	1	単層				
11		VI	2次	P 157	1D-9D24		平安	N-51°-W	0.37	0.21	0.12	-0.24	楕円形	V字状	1	単層			土師器(平)	
11		VI	2次	P 158	1D-10D4		平安	N-51°-W	0.15	0.14	0.14	-0.31	円形	U字状	1	単層				
11		VI	2次	P 159	1D-10D4		平安	N-85°-E	0.08	0.07	0.09	-0.23	円形	U字状	1	単層				
11		VI	2次	P 160	1D-10D9		平安	N-46°-E	0.15	0.13	0.03	-0.18	楕円形	箱状	1	単層				
11		VI	2次	P 161	1D-10D8		平安	N-60°-E	0.28	0.24	0.09	-0.14	楕円形	V字状	1	単層			土師器(平)	
11		VI	2次	P 164	1D-10E1		平安	N-14°-E	0.20	0.16	0.03	-0.31	楕円形	弧状	1	単層				
11		VI	2次	P 165	1D-10D10		平安	N-21°-E	0.13	0.11	0.04	-0.24	楕円形	弧状	1	単層				
11		VI	2次	P 166	1D-10D15		平安	N-81°-E	0.19	0.18	0.03	-0.23	円形	弧状	1	単層				
11		VI	2次	P 167	1D-10D15		平安	N-17°-W	0.42	0.35	0.06	-0.24	円形	弧状	1	単層				
11		VI	2次	P 168	1D-10D15		平安	N-57°-W	0.13	0.09	0.04	-0.25	楕円形	弧状	1	単層				
11		VI	2次	P 169	2D-1D5		平安	N-39°-W	0.12	0.12	0.04	-0.28	円形	弧状	1	単層				
11		VI	2次	P 170	2D-1D5		平安	N-75°-E	0.18	0.17	0.04	-0.28	楕円形	台形状	1	単層				
11		VI	2次	P 171	2D-1E11		平安	N-47°-E	0.37	0.23	0.10	-0.42	不整形	半円状	1	単層				
11		VI	2次	P 172	2D-1E13		平安	N-83°-W	0.35	0.22	0.08	-0.46	不整形	台形状	1	単層				
11		VI	2次	P 173	1D-10E22		平安	0°	0.19	0.15	0.07	-0.38	楕円形	V字状	1	単層				
11		VI	2次	P 175	2D-1E9		平安	N-57°-W	0.17	0.16	0.12	-0.52	円形	U字状	1	単層				
11		VI	2次	P 177	2D-1E5		平安	N-65°-E	0.22	0.19	0.10	-0.53	楕円形	V字状	1	単層				
11		VI	2次	P 179	2D-1D13・14		平安	N-86°-E (0.19)	(0.12)	0.14	-0.25		(円形)	U字状	2	-				
11		VI	2次	P 180	2D-1D7		平安	N-2°-W	0.16	0.15	0.05	-0.17	円形	半円状	1	単層				
11		VI	2次	P 181	1D-9D22		平安	0°	0.14	0.14	0.08	-0.10	円形	V字状	1	単層				
11		VI	2次	P 182	1D-9D17		平安	N-44°-E	0.14	0.12	0.12	-0.15	円形	U字状	1	単層				
11		VI	2次	P 183	1D-10D3	P155 <P183	平安	N-20°-W	0.07	0.05	0.12	-0.18	楕円形	V字状	1	単層				
9		VIa	3次	P 192	2C-1J1		平安	N-77°-E (0.28)	0.22	0.37	-0.44		(楕円形)	漏斗状	2	水平				
9		VIa	3次	P 193	2C-1J1		平安	N-13°-W (0.28)	0.25	0.18	-0.22		(楕円形)	不整形	1	単層				
9		VIa	3次	P 195	1C-10I3・8		平安	N-23°-W	0.30	0.23	0.14	-0.34	楕円形	台形状	1	単層			土師器(墳)	
9		VIa	3次	P 196	1C-10I2		平安	N-58°-E	0.31	0.25	0.16	-0.40	円形	箱状	1	単層			土師器(平)、須恵器	
9		VIa	3次	P 213	2C-1J2		平安	N-53°-E	0.33	0.22	0.13	-0.19	楕円形	弧状	1	単層			土師器(墳)	
9		VIa	3次	P 214	2C-1J6		平安	N-8°-W	0.19	0.19	0.17	-0.20	円形	U字状	1	単層				
9		VIa	3次	P 215	2C-1I14・15		平安	N-24°-E	0.21	0.18	0.12	-0.26	円形	V字状	1	単層				
9		VIa	3次	P 216	2C-1I14		平安	N-23°-E	0.21	0.15	0.10	-0.28	楕円形	弧状	1	単層				
9		VIa	3次	P 217	2C-1I10		平安	N-82°-E	0.19	0.12	0.08	-0.21	楕円形	V字状	1	単層				
9		VIa	3次	P 218	1C-10I20		平安	N-47°-W	0.27	0.21	0.11	-0.25	楕円形	台形状	1	単層			土師器(平)	
9		VIa	3次	P 226	1C-9J24		平安	N-44°-W	0.28	0.27	0.23	-0.01	円形	U字状	2	レンズ状				
9		VIa	3次	P 227	1C-10J22		平安	0°	0.32	0.32	0.16	-0.21	円形	半円状	1	単層			土師器(平)、須恵器	
9		VIa	3次	P 228	1C-10J22		平安	N-55°-W	0.24	0.22	0.12	-0.16	円形	半円状	1	単層			土師器(墳)	
9		VIa	3次	P 229	1C-10J21・22		平安	N-82°-E	0.19	0.18	0.12	-0.19	楕円形	U字状	1	単層				
9		VIa	3次	P 230	1C-10J21、2C-1J1		平安	N-7°-E	0.22	0.20	0.10	-0.16	円形	弧状	1	単層				
9		VIa	3次	P 235	1C-10J21		平安	N-51°-W	0.30	0.25	0.09	-0.21	円形	弧状	1	単層			土師器(平)	
26		VIc	3次	P 301	2C-1I8		古墳	N-59°-E	0.37	0.36	0.24	-1.02	円形	台形状	1	単層				
9		VIa	3次	P 321	2D-1A6・11		平安	N-10°-W	0.54	0.45	0.15	-0.49	円形	台形状	3	柱状有			土師器(墳)	
10		VIa	3次	P 331	1D-9A18		平安	N-42°-E	0.25	0.22	0.06	0.31	円形	弧状	1	単層				
10		VIa	3次	P 332	1D-9A19・24		平安	N-27°-W	0.48	0.41										

図版No.	写真 図版 No.	確認 層位	調査 年次	遺構名 種別 No.	グリッド	重複関係 (旧<新)	時期	主軸方向	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		覆土 分層	堆積状況	遺物図版No.		出土遺物 種別	備考
									長軸	短軸	深さ		平面	断面			図版	写真		
10		Via	3次	P 333	1D-9A23		平安	N-27°-W	0.50	0.45	0.42	-0.01	円形	U字状	2	レンズ状				
10		Via	3次	P 334	1D-9A23		平安	N-32°-E	0.33	0.31	0.11	0.26	円形	台形状	1	単層				
10		Via	3次	P 335	1D-9A24		平安	N-12°-W	0.50	0.42	0.32	0.12	楕円形	U字状	1	単層				
10		Via	3次	P 336	1D-9A24		平安	N-45°-W	0.50	0.42	0.26	-0.17	楕円形	V字状	1	単層				土師器 (墳)
10		Via	3次	P 337	1C-9A23・24、 1D-10A3・4		平安	N-57°-W	0.53	0.41	0.42	-0.12	楕円形	台形状	1	単層				土師器 (墳)
10		Via	3次	P 338	1D-10A4		平安	N-63°-W	0.30	0.25	0.22	0.23	円形	U字状	1	単層				
10		Via	3次	P 339	1D-10A3		平安	N-85°-E	0.57	0.45	0.33	0.09	楕円形	U字状	1	単層	48	66		須恵器 (34)
10		Via	3次	P 340	1D-10A4・9		平安	N-66°-E	0.23	0.22	0.26	0.03	円形	U字状	1	単層				土師器 (平)
10		Via	3次	P 358	1D-10A24		平安	N-34°-W	(0.40)	(0.39)	0.38	-0.26	(円形)	台形状	1	単層				
10・23		Via	3次	P 376	2D-1A25、 2D-1B21	P376>P377	平安	N-43°-E	0.28	0.25	0.16	-0.52	円形	V字状	2	レンズ状				土師器 (墳)
10・23		Via	3次	P 377	2D-1A25	P377 <P376	平安	N-8°-W	0.40	0.28	0.26	-0.42	楕円形	U字状	3	レンズ状				
9		Via	3次	P 383	2C-2I3		平安	N-61°-E	0.25	0.19	0.06	-0.42	円形	弧状	1	単層				
9		Via	3次	P 384	2C-2I3		平安	N-59°-W	0.28	0.23	0.15	-0.54	円形	台形状	1	単層				
9		Via	3次	P 385	2C-2I3		平安	N-14°-W	0.26	0.20	0.10	-0.45	楕円形	U字状	1	単層				
10		Via	3次	P 401	2D-1B23・24		平安	N-39°-E	0.52	0.49	0.35	0.00	方形	V字状	3	柱痕有				土師器 (墳)、石器
27		Vic	3次	P 410	2D-1B6		古墳	N-83°-E	0.27	0.25	0.08	-0.46	円形	半円状	1	単層				
27		Vic	3次	P 411	2D-1B6・11		古墳	N-80°-E	0.20	0.18	0.12	-0.51	円形	V字状	1	単層				
27		Vic	3次	P 416	2D-1C17・22		古墳	N-42°-E	0.62	0.51	0.30	-0.88	円形	漏斗状	2	柱痕有				
26		Vic	3次	P 418	1C-10J10		古墳	N-4°-W	0.37	0.32	0.15	-0.24	円形	V字状	-	-				
26		Vic	3次	P 419	2D-1A16		古墳	N-85°-W	0.56	0.42	0.28	-1.03	楕円形	U字状	1	単層				
26		Vic	3次	P 421	2D-1A6・11		古墳	N-49°-E	0.52	0.48	0.23	-0.68	円形	漏斗状	1	単層				
26		Vic	3次	P 423	2D-1A1・6		古墳	N-78°-E	0.43	0.40	0.42	-0.93	円形	箱状	1	単層				土師器 (墳)
26		Vic	3次	P 424	2D-1A1		古墳	N-28°-W	0.43	0.38	0.23	-0.60	円形	半円状	1	単層				
27		Vic	3次	P 425	2D-1A17		古墳	N-21°-W	0.48	0.46	0.26	-0.86	円形	台形状	1	単層				
27		Vic	3次	P 426	2D-1A6・7・ 11・12		古墳	N-88°-E	0.47	0.42	0.19	-0.76	円形	半円状	1	単層				土師器 (墳)
27		Vic	3次	P 428	2D-1A3		古墳	N-14°-W	0.40	0.34	0.34	-0.54	円形	箱状	1	単層				土師器 (墳)
27		Vic	3次	P 429	2D-1A13		古墳	N-70°-E	0.50	0.48	0.31	-0.93	円形	U字状	2	柱痕有				土師器 (墳)
27		Vic	3次	P 431	2D-1A3・8		古墳	N-4°-W	0.31	0.30	0.27	-0.67	円形	V字状	1	単層				
27		Vic	3次	P 432	2D-1A8		古墳	N-24°-E	0.23	0.22	0.26	-0.71	円形	V字状	1	単層				
27		Vic	3次	P 433	2D-1A7・12		古墳	N-20°-E	0.28	0.25	0.14	-0.67	円形	台形状	1	単層				
27		Vic	3次	P 434	1D-10A17		古墳	N-2°-E	0.53	0.50	0.25	-0.32	円形	半円状	1	単層				
26		Vic	3次	P 437	1C-9J25		古墳	N-55°-E	0.46	0.38	0.43	-0.51	円形	台形状	1	単層				
27		Vic	3次	P 438	1D-9A20		古墳	N-63°-W	0.29	0.28	0.19	0.07	円形	箱状	1	単層				
27		Vic	3次	P 439	1D-9A20		古墳	N-73°-E	0.40	0.37	0.37	-0.09	円形	箱状	1	単層				
27		Vic	3次	P 442	2D-1C13・14		古墳	N-38°-E	0.53	0.49	0.41	-1.10	(円形)	U字状	2	柱痕有				
27		Vic	3次	P 443	2D-1C16・17		古墳	N-31°-E	(0.76)	(0.63)	0.44	-1.08	(楕円形)	U字状	2	レンズ状				縄文土器
27		Vic	3次	P 445	2D-1C11・12		古墳	N-63°-E	0.47	0.45	0.46	-1.05	円形	U字状	2	レンズ状				
27		Vic	3次	P 447	1D-10A8・9		古墳	N-23°-E	0.39	0.37	0.25	-0.15	円形	箱状	1	単層				
26		Vic	3次	P 448	2C-1I8・9・ 13・14		古墳	N-58°-W	0.47	0.45	0.22	-0.90	円形	半円状	1	単層				
26		Vic	3次	P 449	2C-1J9・14		古墳	N-60°-W	0.60	0.55	0.36	-1.02	円形	漏斗状	2	柱痕有				
26		Vic	3次	P 450	2D-1A6		古墳	N-18°-W	0.39	0.35	0.11	-0.61	円形	弧状	1	単層				
27		Vic	3次	P 454	2D-1C8		古墳	N-45°-E	0.48	0.42	0.25	-0.87	円形	半円状	1	単層				
27		Vic	3次	P 462	2D-1C7		古墳	N-67°-W	0.45	0.42	0.30	-0.95	円形	U字状	-	-				
27		Vic	3次	P 465	2D-1A9		古墳	N-21°-W	0.29	0.28	0.20	-0.70	円形	半円状	-	-				
27		Vic	3次	P 472	1D-10A3		古墳	N-42°-W	0.48	0.41	0.21	-0.07	円形	半円状	1	単層				土師器 (墳)
9		Via	4次	P 501	2C-2H15		平安	N-84°-W	0.43	0.38	0.24	-0.65	楕円形	不整形	1	単層				縄文土器
11		Via	4次	P 522	2D-1D21		平安	N-13°-E	0.36	0.30	0.18	-0.58	円形	U字状	1	単層				土師器 (墳)
9		Via	4次	P 523	2D-2A6・11		平安	N-16°-W	(0.43)	0.21	0.15	-0.40	-	弧状	1	単層				溝の可能性あり
9		Via	4次	P 527	2C-2I7・8		平安	N-87°-W	0.24	0.23	0.24	-0.64	円形	半円状	1	単層				
26		Vic	4次	P 530	2C-2I15		古墳	-	0.37	0.36	0.35	-0.75	(円形)	半円状	1	単層				土師器 (墳)
27		Vic	4次	P 538	2D-2A4		古墳	N-15°-W	0.48	0.50	0.20	-0.62	円形	台形状	1	単層	71	86		土師器 (墳(198))
27		Via	4次	P 547	2D-2B3・4		古墳	N-7°-W	0.43	0.36	0.15	-0.78	楕円形	半円状	1	単層				
27		Via	4次	P 548	2D-2B4・9		古墳	N-27°-W	0.50	0.39	0.19	-0.82	楕円形	半円状	1	単層				土師器 (墳)
27・36		Via	4次	P 553	2D-2B2・3		古墳	N-78°-W	0.38	0.33	0.13	-0.92	円形	半円状	1	単層				SK535との 新旧不明

別表2 道正遺跡掘立柱建物 (SB) 計測表

SB330

図版No.	写真図版No.	7・13	グリッド	2C-11・1J・2J		桁行(m)	3間7.26	梁行(m)	2間4.75	床面積(m <sup>2</sup> )	34.67	時代	平安	構造	総柱	主軸方位	N-29°-W	備考
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No. 図面 写真	出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)					
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形								側面	背面			
P279	(0.45)	(0.13)	0.18	-0.48	—	不整形	1	単層	P279<P280<SK281		土師器(墳)	P279-P371	1.87	本柱?				
P280	0.40	(0.26)	0.15	-0.55	—	(U字状)	1	単層	P279<P280<SK281			P280-P371 P280-P294	2.11 2.85	本柱				
P290	0.61	0.52	0.17	-0.58	楕円形	弧状	2	柱根有		120	115	柱根(3)	P290-P291	2.28	側柱			
P291	0.45	0.40	0.30	-0.55	方形	U字状	2	柱根有				土師器(墳)	P291-P292	2.47	側柱			
P292	0.51	0.49	0.27	-0.54	円形	台形状	3	柱根有		120	115	縄文土器、土師器(墳)、 柱根(8)	P292-P293	2.43	側柱			
P293	0.47	0.43	0.33	-0.63	方形	漏斗状	2	柱根有		120	115	土師器(墳)、柱根(4)	P293-P294	2.65	側柱			
P294	0.43	0.42	0.25	-0.55	方形	箱状	3	柱根有		120	115	土師器(墳)、柱根(6)	P294-P291	2.36	本柱			
P295	0.52	0.49	0.23	-0.56	方形	漏斗状	2	柱根有		120	115	土師器(平)、柱根(5)	P295-P290 P295-P294	2.33 2.09	側柱			
P296	0.52	0.42	0.32	-0.47	円形	漏斗状	3	柱根有		120	115	縄文土器、土師器(墳)、 柱根(7)	P296-P295 P296-P280	2.59 2.34	側柱			
P298	0.22	0.20	0.10	-0.45	円形	弧状	1	単層							床東			
P299	0.29	0.25	0.12	-0.44	楕円形	台形状	1	単層				土師器(墳)			床東			
P300	0.22	0.20	0.12	-0.42	円形	U字状	1	単層							床東?			
P326	0.22	0.20	0.17	-0.66	円形	U字状	1	単層	P326<SK284						床東?			
P342	(0.52)	0.45	0.45	-0.56	円形	漏斗状	3	柱根有		120	115	土師器(墳・平)柱根(9)	P342-P371	2.51	側柱			
P371	0.59	0.47	0.36	-0.74	不整形	V字状	3	レンズ状				土師器(平)、板	P371-P373	2.17	側柱			
P373	(0.48)	(0.47)	0.34	-0.66	(方形)	漏斗状	3	柱根有				土師器(墳・平)柱根	P373-P296	2.44	側柱			
P387	(0.64)	(0.24)	(0.16)	-0.50	楕円形	弧状	3	斜位	SK281<P387			土師器(墳・平)			床東?			
P389	0.24	0.20	0.14	-0.48	楕円形	U字状	1	単層	P388<P389	71	86	縄文土器、土師器(墳 (193)・平)			床東			
P488	0.24	0.14	0.14	-0.64	楕円形	弧状	1	単層	P488<SK284						床東			

SB366

図版No.	写真図版No.	14	グリッド	1D-10A、2D-1A・1B		桁行(m)	3間7.35	梁行(m)	2間4.48	床面積(m <sup>2</sup> )	29.81	時代	平安	構造	総柱	主軸方位	N-36°-W	備考
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No. 図面 写真	出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)					
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形								側面	背面			
P286	0.25	0.22	0.16	-0.01	円形	台形状	1	単層							P286-P365	1.26	側柱	
P287	0.39	0.32	0.27	-0.30	楕円形	U字状	1	単層				土師器(墳)	P287-P305 P287-P286	2.00 1.21	側柱			
P289	0.47	0.30	0.37	-0.30	楕円形	漏斗状	1	単層				土師器(墳)	P289-P286 P289-P287	0.75 0.45	側柱?			
P305	0.69	0.52	0.59	-0.41	楕円形	U字状	4	ブロック状	P305<SD304			土師器(墳)	P305-P309	2.21	本柱			
P307	0.77	0.62	0.28	-0.48	楕円形	V字状	1	単層				土師器(墳)	P307-P308 P307-P309	1.50 2.05	側柱			
P308	0.47	0.33	0.19	-0.27	楕円形	弧状	2	レンズ状				土師器(墳)	P308-P309	1.25	側柱			
P309	0.46	0.35	0.53	-0.58	楕円形	U字状	3	柱根有				土師器(墳)	P309-P310	1.56	側柱			
P310	0.45	0.37	0.35	-0.16	楕円形	U字状	3	レンズ状				土師器(墳)	P310-P317	2.23	側柱			
P311	0.41	0.34	0.14	-0.23	楕円形	台形状	1	単層				土師器(墳)	P311-P310	1.02	桁行柱筋の延長上にあり			
P317	0.40	0.30	0.24	-0.28	楕円形	U字状	2	水平					P317-P363 P317-P305	2.26 1.88	側柱			
P318	0.48	0.37	0.22	-0.20	不整形	台形状	1	単層										
P319	0.46	0.32	0.31	-0.22	楕円形	U字状	3	柱根有						P319-P287	1.07	側柱		
P320	0.25	0.24	0.26	-0.16	円形	U字状	1	単層								側柱?		
P328	0.55	0.34	0.37	-0.23	楕円形	U字状	—	—										
P329	(0.34)	(0.28)	0.37	-0.55	(楕円形)	U字状	1	単層				土師器(墳)	P329-P375	2.00	側柱			
P363	0.47	0.42	0.40	-0.31	円形	U字状	2	柱根有				土師器(墳)	P363-P319 P363-P287	1.13 2.18	側柱			
P364	0.74	0.42	0.35	-0.56	楕円形	漏斗状	—	—					P364-P329 P365-P287	2.15 2.45	側柱			
P365	0.44	0.43	0.27	-0.37	円形	U字状	—	—					P365-P364	2.75	側柱			
P375	0.35	0.27	0.25	-0.54	楕円形	U字状	2	柱根有				縄文土器、土師器(墳)	P375-P307	2.59	側柱			

SB367

図版No.	写真図版No.	16	グリッド	2D-1B・1C		桁行(m)	3間5.84	梁行(m)	2間3.16	床面積(m <sup>2</sup> )	16.93	時代	平安	構造	総柱	主軸方位	N-51°-W	備考
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No. 図面 写真	出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)					
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形								側面	背面			
P273	0.68	0.57	0.23	-0.19	(楕円形)	V字状	1	単層				土師器(墳)	P273-P276	1.28	側柱			
P274	0.34	0.31	0.74	-0.60	(円形)	U字状	2	レンズ状				縄文土器、土師器(墳)	P274-P362	0.54	側柱?	打ち込み柱		
P276	0.46	0.40	0.39	-0.29	円形	U字状	4	ブロック状	SD271<P276			土師器(墳)	P276-P390	1.73	側柱?			
P277	0.56	0.45	0.50	-0.75	楕円形	不整形	2	水平		70	86	縄文土器、土師器(墳 (192))	P277-P347 P277-P393	1.97 2.29	本柱			
P278	0.50	0.44	0.42	-0.44	円形	不整形	2	レンズ状				縄文土器、土師器(墳)	P278-P348	1.62	側柱			
P344	0.36	0.27	0.26	-0.37	楕円形	U字状	1	単層				土師器(墳)	P344-P277 P344-P278	1.42 1.43	側柱			
P345	0.30	0.25	0.27	-0.28	楕円形	U字状	1	単層				縄文土器、土師器(墳)			床東?			
P346	0.32	0.27	0.20	-0.39	円形	箱状	1	単層				縄文土器、土師器(墳)	P346-P393 P346-P273	1.35 1.93	側柱			
P347	0.28	0.25	0.32	-0.40	円形	U字状	1	単層					P347-P360	1.30	側柱			
P348	0.41	0.34	0.34	-0.35	楕円形	台形状	1	単層				縄文土器、土師器(墳)	P348-P277 P348-P346	1.41 1.91	側柱			
P360	0.41	0.40	0.26	-0.33	円形	U字状	1	単層				縄文土器、土師器(墳)	P360-P344	1.66	側柱			
P361	0.31	0.28	0.12	-0.23	円形	半円状	2	柱根有				縄文土器、土師器(墳)	P361-P347	1.32	側柱			
P362	0.34	0.32	0.25	-0.33	円形	U字状	1	単層					P362-P361 P362-P347	1.33 2.62	側柱			
P390	0.50	0.41	0.26	-0.52	円形	U字状	2	レンズ状	SK400<P390			土師器(墳)	P390-P274 P390-P362	1.68 2.16	側柱			
P393	0.18	0.18	0.05	-0.53	円形	弧状	1	単層					P393-P276 P393-P362	1.42 1.72	本柱			



## SB482

図版No.	9・15	写真図版No.	10・18	グリッド	1C-10I・10J		桁行(m)	3間 6.50	架行(m)	2間 5.00	床面積(m <sup>2</sup> )	30.41	時代	平安	構造	柱	主軸方位	N-52°-W	備考	
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No.		出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)						
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形				図面	写真									
P209	0.46	0.43	0.25	-0.35	円形	V字状	2	柱痕有										P209-P210	1.95	側柱
P210	0.50	0.45	0.33	-0.23	円形	U字状	3	レンズ状						土師器(墳・平)				P210-P257 P210-P322	2.48 2.32	側柱
P219	0.29	0.25	0.13	-0.05	円形	弧状	1	単層												桁行柱筋の延長上にあり
P220	0.47	0.37	0.48	-0.48	楕円形	台形状	4	ブロック状						縄文土器				P220-P209 P220-P257	2.45 2.12	側柱
P249	0.39	0.35	0.12	-0.42	楕円形	台形状	1	単層						石器				P249-P254	2.20	側柱
P250	0.42	0.39	0.28	-0.41	円形	V字状	2	柱痕有						土師器(墳)				P250-P249 P250-P260	1.06 1.19	側柱?
P254	0.36	0.35	0.13	-0.39	円形	弧状	1	単層										P254-P220	2.55	
P256	0.41	0.35	0.42	-0.54	楕円形	弧状	2	レンズ状										P256-P249 P256-P257	1.67 0.83	床東?
P257	0.45	0.43	0.32	-0.38	円形	箱状	2	水平										P257-P249 P257-P323	2.42 2.94	本柱
P258	(0.46)	(0.35)	0.35	-0.35	(楕円形)	V字状	1	柱根有						土師器(墳)、柱根				P258-P210 P258-P257	1.18 1.35	床東?
P260	0.35	0.31	0.26	-0.39	円形	U字状	2	水平										P260-P249	2.08	側柱
P261	0.49	0.40	0.25	-0.36	楕円形	半円状	4	ブロック状	SK222<P261					土師器(墳・平)、須恵器				P261-P260	2.20	側柱
P263	0.45	0.45	0.30	-0.36	円形	U字状	2	水平						土師器(墳)				P263-P261 P263-P323	2.27 1.43	側柱
P269	(0.62)	0.52	0.21	-0.21	(楕円形)	半円状	2	斜位	P269<P270					土師器(墳)				P269-P263	2.55	側柱
P270	0.37	0.29	0.17	0.15	楕円形	台形状	2	斜位	P269<P270											
P322	0.42	0.38	0.24	-0.22	円形	V字状	2	水平										P322-P270	1.88	側柱
P323	0.42	0.33	0.29	-0.40	楕円形	U字状	2	水平						土師器(墳)				P323-P260 P323-P322	2.16 2.73	本柱
P324	0.33	0.29	0.11	-0.18	円形	弧状	1	単層												床東?
P325	0.37	0.36	0.09	0.00	円形	弧状	1	単層												

## SB483

図版No.	9・16	写真図版No.	10・20	グリッド	1C-9I・9J・10I・10J		桁行(m)	(3間) 7.43	架行(m)	2間 4.47	床面積(m <sup>2</sup> )	(28.61)	時代	平安	構造	柱	主軸方位	N-37°-W	備考		
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No.		出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)						北側の調査区外に延びるが、3×2間の建物と推定される。	
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形				図面	写真										
P197	0.33	0.29	0.12	-0.25	円形	弧状	1	単層													床東
P199	0.44	0.29	0.39	-0.52	楕円形	U字状	3	斜位						縄文土器				P199-P201 P199-P204	1.85 2.13	本柱	
P201	0.50	0.44	0.62	-0.65	円形	U字状	3	レンズ状						縄文土器、土師器(墳)				P201-P206 P201-P255	2.30 2.93	本柱	
P202	0.31	0.28	0.14	-0.34	円形	弧状	1	単層						土師器(平)							床東
P204	0.44	0.44	0.44	-0.65	円形	U字状	4	柱痕有						土師器(平)、柱根				P204-P206	1.87	側柱	
P206	0.57	0.42	0.47	-0.64	楕円形	台形状	4	柱痕有										P206-P259	2.45	側柱	
P237	0.24	0.20	0.12	-0.29	楕円形	半円状	1	単層													
P244	0.45	0.37	0.44	-0.68	円形	V字状	3	柱痕有				70	86	土師器(墳(191)・平)							床東?
P245	0.40	0.32	0.19	-0.42	楕円形	台形状	1	単層						土師器(墳)				P245-P246	0.65	側柱? 桁行柱筋にあり	
P246	0.52	0.52	0.49	-0.74	方形	U字状	3	ブロック状						縄文土器、土師器(墳)				P246-P199	2.25	側柱	
P251	0.42	0.34	0.41	-0.72	楕円形	V字状	3	柱痕有										P251-P262 P251-P252	2.52 1.28	側柱	
P252	0.37	0.24	0.18	-0.49	楕円形	U字状	1	単層										P252-P262	1.35	側柱? 桁行柱筋近くにあり	
P255	0.53	0.49	0.34	-0.47	方形	台形状	4	ブロック状						土師器(墳)				P255-P251	2.14	側柱	
P259	0.43	0.41	0.52	-0.58	円形	U字状	2	レンズ状						土師器(墳・平)				P259-P255	2.14	側柱	
P262	0.49	0.47	0.44	-0.70	円形	U字状	2	水平						縄文土器				P262-P201 P262-P246	2.14 2.34	側柱	
P313	0.32	0.31	0.18	-0.22	円形	V字状	1	単層						土師器(平)							床東
P314	0.32	0.29	0.18	-0.25	円形	V字状	1	単層													床東
P315	0.44	0.30	0.14	-0.28	楕円形	半円状	1	単層						土師器(平)							床東
P316	0.43	(0.30)	0.15	-0.47	楕円形	半円状	1	単層						土師器(平)							床東
P351	0.27	0.25	0.21	-0.35	楕円形	-	-	-													床東?

## SB484

図版No.	9・17	写真図版No.	10・22	グリッド	1C-9I・9J・10I・10J		桁行(m)	(3間) 5.13	架行(m)	2間 4.38	床面積(m <sup>2</sup> )	(14.98)	時代	平安	構造	柱	主軸方位	N-43°-W	備考		
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No.		出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)						北側の調査区外に延びるが、3×2間の建物と推定される。	
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形				図面	写真										
P198	0.77	0.66	0.53	-0.71	不整形	漏斗状	4	柱痕有						縄文土器、土師器(平)、須恵器							側柱
P200	0.49	0.46	0.59	-0.74	円形	U字状	3	柱痕有						縄文土器、土師器(平)、須恵器、石器				P200-P198	2.07	側柱	
P207	0.70	0.59	0.68	-0.67	楕円形	漏斗状	4	柱痕有						土師器(墳)、須恵器				P207-P221	2.21	側柱	
P208	0.42	0.41	0.39	-0.31	円形	台形状	4	ブロック状				45	63	土師器(平)、須恵器(1)				P208-P207	2.13	側柱	
P221	0.56	0.52	0.55	-0.58	円形	U字状	4	ブロック状						土師器(平)				P221-P200	2.32	側柱	
P231	(0.67)	(0.14)	0.25	-0.36	-	台形状	1	単層										P231-P208	(2.08)	側柱 北側調査区外に広がる	

別 表

SB485

図版No.	9・17	写真図版No.	10・23	グリッド	1C-91・9J・10I・10J		桁行(m)	3間(4.50)	梁行(m)	2間4.12	床面積(m <sup>2</sup> )	(22.77)	時代	平安	構造	側柱	主軸方位	N-43°-W	備考
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No.		出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)	北側の調査区外に延びるが、3×2間の建物と推定される。				
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形				図面	写真								
P203	(0.86)	(0.27)	0.60	-0.52	楕円形	V字状	3	ブロック状				土師器(埴)			側柱				
P205	0.29	0.29	0.22	-0.26	円形	U字状	3	ブロック状					P205-P203	2.21	側柱				
P211	0.57	0.45	0.43	-0.36	楕円形	V字状	4	柱痕有				土師器(平)	P211-P223	2.10	側柱				
P212	0.27	0.25	0.07	-0.09	円形	弧状	1	単層											
P223	0.46	0.45	0.45	-0.41	円形	U字状	3	レンズ状				土師器(埴)	P223-P205	2.32	側柱				
P224	0.42	0.32	0.22	-0.13	楕円形	V字状	2	柱痕有				縄文土器	P224-P225	0.45	側柱?				
P225	0.40	0.34	0.28	-0.25	楕円形	台形状	2	レンズ状				土師器(平)	P225-P211	2.05	側柱				
P232	(0.51)	(0.18)	0.32	-0.26	-	V字状	2	水平					P232-P225	1.18	側柱				

SB521

図版No.	9・18	写真図版No.	24	グリッド	2C-11・2I・2J		桁行(m)	3間6.94	梁行(m)	2間4.82	床面積(m <sup>2</sup> )	(23.90)	時代	平安	構造	総柱	主軸方位	N-38°-W	備考
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No.		出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)	南側調査区外に延びるが、3×2間と推定される。				
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形				図面	写真								
P374	0.69	0.48	0.41	-0.82	楕円形	漏斗状	4	柱根有				縄文土器、土師器(平)、須恵器、柱根	P374-P510	2.90	側柱				
P380	0.23	0.19	0.22	-0.53	円形	U字状	1	単層					P380-P381 P380-P510	1.05 1.32	側柱?				
P382	0.24	0.23	0.16	-0.47	円形	V字状	1	単層					P382-P374 P382-P509	2.22 2.84	側柱				
P506	0.71	0.54	0.72	-0.75	楕円形	V字状	2	柱根有	SD543<P506		71・86 120・115	縄文土器、土師器(埴(194)・平)、柱根(11)	P506-P525	2.80	側柱				
P509	0.80	0.47	0.32	-0.68	楕円形	U字状	2	レンズ状	SK544<P509		120・115	縄文土器、土師器(埴・平)、須恵器、木製品(10)	P509-P506	2.45	本柱				
P510	0.38	0.37	0.56	-0.74	円形	U字状	1	柱根有			45・63	土師器(埴・平(2))、須恵器、柱根	P510-P509 P510-P514	2.57 1.85	側柱				
P513	(0.70)	(0.54)	0.30	-0.73	楕円形	V字状	2	柱根有			45 121	縄文土器、土師器(埴・平(3))、須恵器、石器、柱根(12)	P513-P514	2.23	側柱				
P514	0.50	0.42	0.49	-0.70	楕円形	漏斗状	2	柱痕有			71・85	土師器(埴(195)・平)須恵器	P514-P526	2.98	側柱				
P525	0.37	0.34	0.30	-0.77	円形	漏斗状	2	柱根有			71 121	縄文土器、土師器(埴(196-197))、柱根(13)	P525-P382	2.23	側柱				
P526	0.29	0.27	0.38	-0.57	(円形)	U字状	1	単層				土師器(埴)、須恵器	P526-P509	1.50	本柱				
P528	0.40	0.29	0.28	-0.48	楕円形	U字状	1	単層											

SB558

図版No.	9・19	写真図版No.	26	グリッド	2C-11・1J・2J		桁行(m)	3間4.80	梁行(m)	2間4.02	床面積(m <sup>2</sup> )	19.24	時代	平安	構造	総柱	主軸方位	N-38°-W	備考
Pit番号	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	重複関係	遺物図版No.		出土遺物	柱間長計測Pit名	計測値(m)					
	長軸	短軸	深さ		平面形	断面形				図面	写真								
P297	0.35	0.34	0.28	-0.56	円形	台形状	3	柱痕有				土師器(埴)	P297-P341	1.93	側柱				
P341	0.40	0.30	0.16	-0.52	楕円形	台形状	2	柱痕有	P388<P341			縄文土器、土師器(埴)	P341-P372 P341-P379	1.50 1.97	側柱				
P343	0.28	0.27	0.15	-0.51	円形	U字状	2	柱痕有					P343-P297 P343-P379	2.12 1.59	側柱				
P372	0.36	0.35	0.39	-0.75	円形	漏斗状	2	柱根有				土師器(埴・平)、柱根	P372-P386 P372-P520	2.34 1.38	側柱				
P379	0.64	0.41	0.34	-0.65	楕円形	階段状	3	レンズ状				土師器(埴)	P379-P386	1.07	本柱				
P381	0.27	0.24	0.18	-0.28	円形	V字状	2	レンズ状					P381-P343	1.98	側柱				
P386	0.30	0.27	0.18	-0.41	円形	U字状	1	単層				土師器(埴)	P386-P561	2.28	本柱				
P388	(0.59)	(0.25)	(0.23)	-0.38	楕円形	弧状	2	斜位	SK281<P388 P388<P341 P388<P389			土師器(平)							
P520	(0.38)	(0.15)	0.46	-0.73	(円形)	漏斗状	2	レンズ状				土師器(埴)	P520-P561	1.92	側柱				
P534	0.26	0.25	0.44	-0.74	円形	U字状	-	柱根有			121・116	柱根(14)	P534-P541	1.21	側柱				
P541	0.40	0.34	0.44	-0.60	円形	U字状	-	柱根有			121・116	柱根(15)	P541-P560	1.40	側柱				
P559	(0.29)	0.27	0.28	-0.51	-	台形状	-	-					P559-P381 P559-P379	1.84 2.35	側柱				
P560	0.42	0.29	0.29	-0.50	不整形	台形状	-	-				P560-P386 P560-P559	2.26 1.44	側柱					
P561	0.63	0.39	0.30	-0.50	楕円形	半円状	1	単層					P561-P541 P561-P534	2.07 0.87	側柱				

別表 3-1 道正遺跡古土器観察表

凡例  
 1 出土位置 グリッド欄に( )のあるものは詳細を別表3-2に記載している。「+」記号は同一層で接合していることを示す。  
 2 層位 「+」記号は同グリッドで接合していることを示す。  
 3 接合記号 同じ文字が記されている場合は直接接合していることを示す。  
 4 法 重 ( ) 付きの数値は遺存率が低く復元の信頼性が低いことを示す。  
 5 底高指数 器高/口径×100  
 6 底存指数 器高/口径×100  
 7 含有物 胎土中に含まれる動物・小礫等について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「堅」は金雲母あるいは黒雲母、「赤」は赤ヤマト、「焼」は焼土粒、「白」は白色凝灰岩、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。  
 8 産 地 須臾淵土分類を記載した。  
 9 焼 成 須臾淵土に還元されているもの(青灰色・灰色・白色を呈するもの)を還元とした。  
 10 回転方向 回転方向を示す。  
 11 遺存率 分数表示で遺存率を示した。

図版 No.	報告 図版 No.	出土位置		接合 記号	時代	種別	器種	法量 (cm)		底存 指数	底高 指数	胎土 状態	含有物	色調		焼成	調整・手法		回転 方向	遺存率		付着物		備考	
		グリッド	層位					口径	底径					外径	内径		外面	内面		外面	内面	口縁部	底部		内面
45	60	1	Pr6208	1C-9J22 (*)	1	平安	須臾器	甕	26.4	-	-	普通	石・長・ 焼・白	C	暗灰 (N3/0)	灰 (5Y5/1)	還元	口頸部: ロクロナデ 体部上半: 当具真(同 心円文様目状木目) 体部下半: 当具真(格 子文)		4/36				内外面に自然釉	
45	60	2	Pr6510	2C-2J7	1	平安	土師器	長甕	(21.9)	-	-	普通	石・長・ 焼・白		におい糖 (7.5YR7/4)	におい糖 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ		5/36				器面磨滅	
45	60	3	Pr6513	2C-2J12	1	平安	土師器	長甕	(23.1)	-	-	普通	石・長・ 焼・白		におい糖 (7.5YR7/4)	におい糖 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ		4/36				スス	
45	60	4	SK194	2C-1J5 1C-10J1+2C-1J8 1C-10J25	1 a a	平安	須臾器	有台杯	-	高台 8.2	-	精	白	B	灰 (N5/0)	灰 (N4/0)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ		7/36					
45	60	5	SK194	2C-1J5 2C-1H5	1+2 a	平安	土師器	長甕	(24.0)	-	-	普通	石・長・ 焼・角		浅黄緑 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ カキメ		5/36					器面磨滅 (外面)
45	60	6	SK222	1C-10J22	1	平安	須臾器	無台杯	11.9	7.7	2.5	21.0	精	B	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ		7/36	13/36			取上No.43 底外縁状圧痕あり	
45	60	7	SK222	1C-10J22	1	平安	須臾器	無台杯	12.6	6.8	2.9	23.0	精	B	灰 (7.5Y5/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ		17/36	36/36			取上No.52 底外縁状圧痕あり	
45	60	8	SK222	1C-10J22 (*)	1	平安	須臾器	燗瓶	(10.4)	-	-	-	精	B	灰白 (N7/0)	灰白 (N7/0)	還元	ロクロナデ 当具真(同心円文) 右目 指環状痕		2/36				両面閉塞 外面自然釉	
45	61	9	SK222	1C-10J22	1	平安	土師器	無台燗	12.6	5.2	4.1	32.5	精	石・長・ 雲・焼・ 白		浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ		15/36	36/36	スス		取上No.50 線熱による変色
46	61	10	SK222	1C-10J22	1	平安	土師器	小甕	-	7.5	-	-	粗	石・長・ 焼・白		浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ		32/36	スス			取上No.37・46 線熱により変色 器面閉塞
46	61	12	SK222	1C-10J22 (*)	1	平安	須臾器	長頸瓶	-	10.1	-	-	精	B	灰白 (N7/0)	灰 (N6/0)	還元	カキメ		19/36				取上No.40・39	
46	61	13	SK281	2C-1J23 2C-1J23 2C-1J8	1 a a	平安	須臾器	無台杯	13.0	8.4	3.3	25.4	精	B	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ			17/36				取上No.34・35・38・ 47・49・51・53 内外面磨灰 頸部に絞リ痕
46	61	14	SK281	2C-1J23+1J13 2C-1J18	1 a	平安	須臾器	無台杯	11.7	6.5	2.9	24.8	精	長・白	B	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	還元	ロクロナデ		4/36	25/36	スス		外面面に墨書「一」
46	61	15	SK281	2C-1J18 (*)	2	平安	須臾器	甕	-	-	-	-	普通	B	灰白 (7.5Y7/1)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ カキメ 当具真(上: 同心円 文 下: 平行線文)			12/36	36/36			SK281取上No.10 左高心 右外面自然釉 焼成部磨滅
46	62	16	SK281	2C-1J23 (*)	1	平安	須臾器	甕	-	-	-	-	精	B	灰白 (10Y7/1)	灰白 (10Y7/1)	還元	ロクロナデ カキメ 当具真(上: 同心円 文 下: 平行線文)						外面磨灰	
46	61	17	SK284 SK370	2C-1J13+1J18 2C-1J25 2C-1J19	1 a a	平安	須臾器	有台杯	13.6	7.6	5.9	43.4	精	長・白	B	灰 (N5/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ		11/36	24/36			
46	61	18	SK284	2C-1J18 2C-1J18	2+3 a	平安	須臾器	無台杯	(13.2)	8.6	3.0	22.7	精	B	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ		6/36	8/36				外面に墨書「口(木 か)」

別 表

図版 No.	No.	報告 No.	図版 No.	出土位置		接合記号	時代	種別	器種	法量 (cm)		底存指数	状態	胎土		色調		焼成	調整・手法		断面方向	遺存率	付着物		備考	
				道構名	グリッド					層位	口径			底径	器高	含有物	産地		外面	内面			外面 (格子)	外面		内面
46	62	19	SK284	2C-1J13	( <sup>○</sup> )	1	平安	須臾器	長頸瓶	-	高台 9.6	-	-	普通白	B	灰白 (N7/0)	灰 (N6/0)	還元	タタキメ (格子) ロクロナデ	ナデ	左か	36/36	スス?		内外自然釉 内底部あはれたの別落	
47	62	20	SK284	2C-1J13	( <sup>○</sup> )	1	平安	須臾器	甕	20.0	-	-	精白	B	暗赤灰 (2.5YR3/1)	灰 (N4/0)	還元	頸細カキメ 当具裏 (上: 向心円 文木目内周方向 下: 平行線文)	ロクロナデ						内面自然釉	
47	62	21	SK284	2C-1J13		1	平安	土師器	無台椀	(16.0)	5.1	31.9	43.1	精石・長・ 石・長・ 子・焼		にふい黄橙 (10YR7/3)	にふい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	糸切り	左	3/36	16/36	スス		
47	62	22	SK284	2C-1J13		1	平安	土師器	無台椀	15.2	5.5	30.9	36.2	精石・長・ 焼・白		にふい黄橙 (7.5YR7/4)	にふい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	糸切り	左	24/36	36/36	スス		紫色 (液熱?)
47	63	23	SK284	2C-1J13		1+2	平安	土師器	無台椀	13.0	6.0	34.6	46.2	精焼・白		にふい黄橙 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	酸化	ロクロナデ	糸切り	右か	13/36	7/36			取上No.13を含む
47	63	24	SK284	2C-1J13+1J18		1	平安	土師器	長甕	24.8	-	-	-	普通焼		にふい黄橙 (7.5YR7/4)	にふい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ			8/36		スス		器面磨滅
47	63	25	SK284	2C-1J13		1	平安	土師器	長甕	(25.8)	-	-	-	普通石・角		にふい黄橙 (7.5YR7/6)	にふい黄橙 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ			5/36		スス		
47	63	26	SK284	2C-1J13		1	平安	土師器	長甕	27.9	-	-	-	精雲		にふい黄橙 (7.5YR7/4)	にふい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ			6/36		スス		
47	63	27	SK284	2C-1J12+1J13		1	平安	土師器	長甕	22.1	-	-	-	普通石・長・ 焼・白		にふい黄橙 (7.5YR7/6)	にふい黄橙 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ			8/36		スス		器面磨滅
47	63	28	SK284	2C-1J13		2	平安	土師器	小甕	-	5.6	-	-	粗焼		にふい黄橙 (7.5YR7/6)	にふい黄橙 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ		右	36/36		スス		取上No.21
47	63	29	SK284	2C-1J18		1	平安	土師器	鍋	(44.8)	-	-	-	普通焼		にふい黄橙 (10YR7/3)	にふい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ			2/36		コゲ		
47	63	30	SK284	2C-1J13+1J18		1	平安	土師器	甕	(29.9)	-	-	-	精・長・白・ 普通角		洗黄橙 (10YR8/3)	洗黄橙 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ			5/36		スス		佐渡型甕
47	63	31	SK284	2C-1J12		1	平安	土師器	甕	(16.2)	-	-	-	精石・白		にふい黄橙 (10YR7/3)	にふい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ			4/36		スス		小形の佐渡型甕 内面に黒灰? 線熱により変色・器 面剥落
47	63	32	SK284	2C-1J13		1	平安	土師器	甕	(28.0)	-	-	-	普通石・白・ 角		洗黄橙 (7.5YR6/6)	洗黄橙 (7.5YR6/6)	酸化	ロクロナデ			3/36		スス		佐渡型甕 線熱による変色・器 面剥落
47	63	33	SD503	2C-2I8		1	平安	土師器	小甕	-	7.1	-	-	普通石・雲・ 白		洗黄橙 (7.5YR8/4)	洗黄橙 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ		右	36/36	ターナル ターナル ターナル			底面内面黒唐「刀」 部還元不良
48	63	34	Pr339	1D-10A3		1	平安	須臾器	無台杯	13.4	7.1	3.9	53.0	精白	B	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ		右	25/36	36/36	スス		内面に磨面 転用破か
48	63	35		1C-10I6		V~VI	平安	須臾器	杯蓋	-	天井部 6.8	-	-	精長・白	B	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		右か	天井部 36/36				へら切りの渡差丸 椀状に痕あり
48	63	36		試掘59T 2C-1J3+1J13		IXb~XIa V	平安	須臾器	杯蓋	-	天井部 7.8	-	-	精長・白	B	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		左	天井部 36/36				口縁内面に磨面 黒化 (重ね 焼き痕)
48	63	37		2C-1I7+1I8+1I12		V	平安	須臾器	杯蓋	13.1	天井部 2.7	60.3	-	精長・白	B	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		右か	7/36	36/36			口縁内面に磨面 黒化 (重ね 焼き痕)
48	63	38		2C-2I1~5+2I2		V	平安	須臾器	杯蓋	(13.6)	天井部 (7.2)	3.1	52.9	普通白	B	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		右か	5/36	6/36			内面黒化 (重ね 焼)
48	63	39		2C-2I7 2C-2I6		V VIa	平安	須臾器	杯蓋	14.6	天井部 8.4	2.5	57.5	精白	B	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		右か	11/36	36/36			口縁外端黒化 (重ね 焼)
48	63	40		2C-1I23		VIa	平安	須臾器	杯蓋	-	-	-	-	精長・白	B	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	還元	ロクロナデ			7/36	7/36			内面に磨面 転用破か
48	63	41		1C-10I11		V	平安	須臾器	杯蓋	14.2	天井部 8.0	-	56.3	精長・白	B	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		左か	天井部へ ラ切り				
48	63	42		1C-10I12		V	平安	須臾器	杯蓋	(14.8)	天井部 (8.8)	-	59.5	精石・白	C	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ			5/36	7/36			内面に磨面 転用破か
48	63	43		1C-10I23 2C-1I9		V V	平安	須臾器	杯蓋	14.2	天井部 9.5	-	66.9	精白	B	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		右か	7/36	7/36			外面端部~内面口縁 部黒化 (重ね焼)
48	63	44		2C-2I1~2I7		V	平安	須臾器	杯蓋	(13.6)	天井部 7.3	-	53.7	普通白	B	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ			4/36	12/36			外面端部黒化 (重ね 焼)
48	63	45		1C-10I22		V	平安	須臾器	杯蓋	13.2	-	-	-	精白	B	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			11/36				外面端部黒化 (重ね 焼)
48	64	46		2C-2I8		VIa	平安	須臾器	有台杯	15.2	-	-	-	普通白	B	灰 (10Y6/1)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			12/36				内面に黒灰 外面磨く跡灰
48	64	47		2C-2I8+2I9 2C-2I7		V V	平安	須臾器	有台杯	13.0	高台 7.2	5.8	44.6	普通白	B	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			12/36	17/36			磨き上げ痕

図版 No.	図版 No.	No.	No.	No.	No.	No.	出土位置		接続記号	時代	種別	器種	法量 (cm)		径高指数	底存指数	胎土		色調		焼成	調整・手法		回転方向	遺存率	付着物		備考
							遺構名	グリッド					口径	底径			器高	胎土	含有物	表面		内面	外面			内面	外面	
48	64	48	48	48	48	48	48	V	平安	須臾器	有台杯	13.8	-	-	-	精白	B 灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		5/36					
48	64	49	49	49	49	49	49	V+Via	平安	須臾器	有台杯	13.4	-	-	精白	B 灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		7/36						
48	64	50	50	50	50	50	50	Via	平安	須臾器	有台杯	13.0	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		4/36						
48	64	51	51	51	51	51	51	V	平安	須臾器	有台杯	-	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ			36/36					
48	64	52	52	52	52	52	52	V+Vic+Vlla Vla	平安	須臾器	有台杯	6.3	-	-	普通長・白	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	還元	ロクロナデ			36/36				自然釉 底部外面に工具痕と 思われる溝あり	
48	64	53	53	53	53	53	53	V+Via Vla	平安	須臾器	有台杯	9.1	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	還元	ロクロナデ			10/36					
48	64	54	54	54	54	54	54	V	平安	須臾器	有台杯	8.2	-	-	精白	B 灰 (N4/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			11/36					
48	64	55	55	55	55	55	55	V	平安	須臾器	有台杯	7.1	-	-	精白	B 灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			10/36					
48	64	56	56	56	56	56	56	V	平安	須臾器	有台杯	-	-	-	精長・白	B 灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	灰 (N4/0)	還元	ロクロナデ			14/36					
48	64	57	57	57	57	57	57	Via	平安	須臾器	有台杯	7.2	-	-	精長・白	B 灰 (N5/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			11/36					
49	64	58	58	58	58	58	58	Via	平安	須臾器	有台杯	7.2	-	-	精長・白	B 灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			36/36					
49	64	59	59	59	59	59	59	V	平安	須臾器	有台杯	7.2	-	-	精長・白	B 灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			36/36					
49	64	60	60	60	60	60	60	Via	平安	須臾器	有台杯	6.7	-	-	精白	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ			36/36					
49	64	61	61	61	61	61	61	Via	平安	須臾器	有台杯	7.0	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ			36/36					
49	64	62	62	62	62	62	62	Via+Via	平安	須臾器	有台杯	11.0	-	-	普通長・白	B 灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ			5/36					
49	64	63	63	63	63	63	63	V	平安	須臾器	有台杯	-	-	-	精白	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ			11/36					
49	64	64	64	64	64	64	64	Vl	平安	須臾器	有台杯	6.2	-	-	精白	B 灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			11/36					
49	64	65	65	65	65	65	65	V	平安	須臾器	有台杯	6.2	-	-	精長・白	B 灰 (N4/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ			20/36					
49	64	66	66	66	66	66	66	V	平安	須臾器	有台杯	8.4	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			9/36					
49	64	67	67	67	67	67	67	Vla	平安	須臾器	有台杯	-	-	-	普通長・白	B 灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ			36/36					
49	64	68	68	68	68	68	68	V	平安	須臾器	有台杯	-	-	-	精石・白	B 灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ			36/36					
49	64	69	69	69	69	69	69	Via	平安	須臾器	無台杯	13.8	7.8	3.9	28.3	56.5	精長・白	B 灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ		16/36	24/36			
49	64	70	70	70	70	70	70	V	平安	須臾器	無台杯	13.0	7.4	3.2	24.6	56.9	精白	B 灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ		15/36	22/36			
49	65	71	71	71	71	71	71	Via	平安	須臾器	無台杯	12.7	8.2	3.2	25.2	64.6	精白	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ		22/36	36/36			外面口縁端重ね焼痕
49	65	72	72	72	72	72	72	Via	平安	須臾器	無台杯	12.8	8.5	3.1	24.2	66.4	精白	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ		1/36	9/36			外面口縁端重ね焼痕
49	65	73	73	73	73	73	73	V	平安	須臾器	無台杯	12.7	8.4	3.3	26.0	66.1	精白	B 灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	ロクロナデ		22/36	36/36			外面口縁端重ね焼痕
49	65	74	74	74	74	74	74	V	平安	須臾器	無台杯	12.8	8.0	3.2	25.0	62.5	精白	B 灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	還元	ロクロナデ		10/36	10/36			外面口縁端重ね焼痕
49	65	75	75	75	75	75	75	V	平安	須臾器	無台杯	12.5	7.5	2.8	22.4	60.0	精焼・白	B 灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	還元	ロクロナデ		9/36	17/36			
49	65	76	76	76	76	76	76	V	平安	須臾器	無台杯	12.6	8.0	3.0	23.8	63.5	精白	B 灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ		8/36	12/36			
49	65	77	77	77	77	77	77	Via	平安	須臾器	無台杯	12.5	7.4	3.0	24.0	59.2	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		3/36	15/36			
49	65	78	78	78	78	78	78	V	平安	須臾器	無台杯	12.7	7.7	3.0	23.6	60.6	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		7/36	6/36			外面口縁端重ね焼痕
49	65	79	79	79	79	79	79	V	平安	須臾器	無台杯	12.4	7.6	2.9	23.4	61.3	普通石・白	A 灰 (N6/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		6/36	13/36			外面口縁端重ね焼痕
49	65	80	80	80	80	80	80	V	平安	須臾器	無台杯	12.8	7.7	3.0	23.4	60.2	精白	B 灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	ロクロナデ		7/36	9/36			外面口縁端重ね焼痕
50	65	81	81	81	81	81	81	V	平安	須臾器	無台杯	12.6	7.4	2.9	23.0	58.7	精白	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ		13/36	18/36			
50	65	82	82	82	82	82	82	V	平安	須臾器	無台杯	12.2	7.3	2.7	22.1	59.8	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		12/36	36/36			内・外面 黒色吹出し
50	65	83	83	83	83	83	83	V	平安	須臾器	無台杯	12.5	7.2	3.0	24.0	57.6	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		8/36	16/36			
50	65	84	84	84	84	84	84	V	平安	須臾器	無台杯	12.3	7.1	3.1	25.2	57.7	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		21/36	31/36			重ね焼痕 内面口縁部に灯芯痕
50	65	85	85	85	85	85	85	V	平安	須臾器	無台杯	12.6	7.3	3.1	24.6	57.9	精長・白	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ		28/36	36/36			外底部墨書「目」
50	65	86	86	86	86	86	86	V	平安	須臾器	無台杯	12.5	7.4	2.9	23.2	59.2	精白	B 灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		17/36	21/36			外面墨書「十」(底外) 「十一」(体外)
50	65	87	87	87	87	87	87	V	平安	須臾器	無台杯	12.6	7.1	2.8	22.2	56.3	精白	B 灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ		18/36	18/36			重ね焼痕
50	65	87	87	87	87	87	87	Vla	平安	須臾器	無台杯	12.5	6.7	2.8	22.4	53.6	普通白	B 灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		24/36	36/36			

別 表

図版 No.	図版 No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	種別	器種	法量 (cm)		底高 指数	底径 指数	胎土 状態	色調		焼成	調整・手法		回転 方向	遺存率 口縁部	付着物		備考
			道橋名	グリッド					口径	底径				外面	内面		外面	内面			外面	内面	
50	65	88		IC-1019+1020 IC-1019+1015 IC-1014 IC-1010	a a a a	平安	須臾器	無台杯	7.2	3.1	24.8	57.6	精長・白	B 灰 (N5/5/1)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左か	13/36	17/36		外面口縁端重ね焼痕
50	65	89		IC-1011	V VI Via Via+Vic	平安	須臾器	無台杯	7.4	2.9	23.4	59.7	精白	B 灰 (N5/5/1)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左か	9/36	10/36		外面口縁端重ね焼痕
50	66	90		2C-219	V	平安	須臾器	無台杯	8.1	3.2	26.7	67.5	精・白	B 灰 (N5/6/1)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り		15/36	14/36		底部外面黒書「口」
50	66	91		試掘59T 2C-1113	IXb Via	平安	須臾器	無台杯	6.8	2.9	24.6	57.6	精白	B 灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左	2/36	19/36		焼成不良 一部還元不十分
50	66	92		IC-10117+1022	V	平安	須臾器	無台杯	7.0	3.3	27.5	58.3	精白	B 灰 (N5/6/1)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左	3/36	24/36		
50	66	93		IC-10121	V	平安	須臾器	無台杯	7.1	2.5	19.5	55.5	精白	B 灰 (N5/6/1)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左	6/36	18/36		
50	66	94		2C-217	V	平安	須臾器	無台杯	7.0	2.5	20.5	57.4	普通白	B 灰 (N4/0)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左か	11/36	36/36		
50	66	95		2C-210	V	平安	須臾器	無台杯	6.8	2.9	24.2	56.7	精白	B 灰 (N5/5/1)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左か	18/36	18/36		
50	66	96		IC-10120 IC-10116	V VI	平安	須臾器	無台杯	7.0	2.9	24.2	58.3	精白	B 灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り		11/36	9/36		
50	66	97		IC-1011	V	平安	須臾器	無台杯	7.9	-	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左	36/36			
50	66	98		IC-1012	Via	平安	須臾器	無台杯	7.8	-	-	-	精白	B 灰 (N5/6/1)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り	左か	9/36			底部外面黒書「口」
50	66	99		2C-216	Via	平安	須臾器	無台杯	8.0	-	-	-	精白	B 灰 (N5/6/1)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り		9/36			底部外面黒書「口」
50	66	100		1D-10A16	Via	平安	須臾器	無台杯	-	-	-	-	精白	B 灰 (N5/6/1)	還元	ロクロナデ				2/36			底部外面黒書「木」
50	66	101		1D-10B12	V+Via	平安	灰軸陶器	有台椀	高台 7.1	4.2	30.7	-	精白	灰白 (2.5Y7/1)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ		ロクロケ ズリ	右	5/36	36/36		灰軸ハケ塗り 黒帯90号窯 高台端面と高台内に 黒痕あり
51	66	102		2C-117 2C-112 2C-117	V V VI	平安	須臾器	U帯石鉢	高台 9.7	-	-	-	普通白	B 灰 (N5/5/1)	還元	ロクロナデ		ナデ		36/36			見込み器面磨減
51	66	103		IC-10H14+1014 +2C-117	V	平安	須臾器	長頸瓶	高台 10.4	-	-	-	普通白	B 灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ		指頭ナデ ?	右か	23/36			内外自然釉
51	66	104		IC-10I9+10J14	Via	平安	須臾器	長頸瓶	-	-	-	-	精白	B 灰 (N4/0)	還元	ロクロナデ				8/36			内面黒灰
51	66	105		IC-10I23 2C-212+2I3+2I8 2C-217	V V V	平安	須臾器	長頸瓶	-	-	-	-	精長・白	B 灰 (N6/)	還元	ロクロナデ ケズリ タタキス (格子文)							内面に当具痕なし
51	66	106		IC-10I5 IC-10I9 IC-10I14 IC-10I15	V~VI V V V d	平安	須臾器	長頸瓶	高台 9.8	-	-	-	精白	B 灰 (N6/0)	還元	ロクロケズリ		ナデ		36/36			内外に自然釉 体部内面立ち上がり 際に指頭痕
51	66	107		2C-215+2I6+2I1~5 2C-211 2C-214	V V V bc	平安	須臾器	長頸瓶	-	-	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ							
51	67	108		1D-10A22 1D-10A11+10A12 IC-10I10+2C-1J10	VI a a Via	平安	須臾器	長頸瓶	-	-	-	-	普通長・白	B 灰 (N5/6/1)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ		ヘラ切り ナデ	左				高台初端面に底部外 面に沿って条線が通 る
51	67	109		IC-10I7	V~VI	平安	須臾器	長頸瓶	6.2	-	-	-	精白	B 灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ				13/36			口縁部に自然釉少 し
51	67	110		2C-11I7+2I5+2I13+2I1 +2I7 2C-1I25 2C-1I18+2I6	V a VI a Via	平安	須臾器	(長頸)瓶	高台 7.5	-	-	-	普通 石・長・ チ・薄	A 灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ		糸切り	右か	23/36		スス	
51	67	111		IC-9I21+10I9	V~VI	平安	須臾器	双耳瓶 (三耳型)	-	-	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ							
51	67	112		IC-10I7	V~VI	平安	須臾器	壺・瓶頸	高台 (1.4.4)	-	-	-	精白	B 灰 (N5/0)	還元	ロクロナデ		ヘラ切り か					
52	67	113		2C-21I0+2I+2I6	V	平安	須臾器	樽瓶	-	-	-	-	普通白	B 灰 (N6/0)	還元	ロクロナデ				6/36			外面自然釉 全体的に磨減
52	67	114		IC-10I17	V	平安	須臾器	甕	18.4	-	-	-	普通白	B 灰 (N4/0)	還元	ロクロナデ				3/36			
52	67	115		1D-10A12	V	平安	須臾器	甕	-	-	-	-	普通白	B 灰 (N5/0)	還元	タタキス (格子文)							
52	67	116		2C-1I4 (*)	Via	平安	須臾器	甕	28.5	-	-	-	普通長・白	B 灰 (N5/5/1)	還元	ロクロナデ タタキス (格子文) カキメ 種類				8/36			外面磨減 内面自然釉
52	68	117		1D-10A1 (*)	Via	平安	須臾器	甕	-	-	-	-	普通長・白	B 灰 (N4/0)	還元	タタキス (格子文)							外面自然釉 内面磨減
52	68	118		IC-10I7+10I8 2D-2C3 2D-2C4	V~VI V 不明	平安	須臾器	甕	-	-	-	-	普通白	B 灰 (N6/0)	還元	タタキス (平行線文)							内外自然釉 外面自然釉 内面磨減
52	68	119		1D-10D11	Vd+Via	平安	土間器	無台椀	7.3	5.5	30.7	40.8	精・長・ 雲・焼・ 白	浅黄緑 (10YR8/3)	還元	ロクロナデ		糸切り	右	27/36	36/36		器面磨減

図版 No.	No.	報告 No.	図版 No.	出土位置		接合記号	時代	種別	器種	法量 (cm)		径高指数	底径指数	状態	胎土		色調		焼成	調整・手法		断面・手法		付着物		備考
				遺構名	グリッド					口径	底径				器高	器底	口径	含有物		産地	外面	内面	外面	内面	底面	
52	69	120			2C-217	V	平安	土師器	無台椀	-	7.1	-	-	精	石・長・ 焼	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	19/36			器面磨減
52	69	121			2D-2A6	V	平安	土師器	無台椀	15.2	6.0	5.2	34.2	普通	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	左	糸切り	11/36	15/36		器面磨減 内面被熱によるか赤 変あり
52	69	122			2C-1I3+1I8	V	平安	土師器	無台椀	15.7	5.8	5.3	33.8	精	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	21/36	36/36	ス ター	器面磨減
52	69	123			2C-2I5+2I10+2I+2I5	V	平安	土師器	無台椀	-	6.2	-	-	普通	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	19/36			
52	69	124			2C-217	V	平安	土師器	無台椀	15.2	5.7	5.0	32.9	精	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	13/36	20/36		
53	69	125			試掘58T	Ka	平安	土師器	無台椀	14.8	6.0	5.1	34.5	精	石・長・ 焼	灰褐 (7.5YR6/6)	灰褐 (7.5YR6/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	28/36	36/36	漆	内面は全体に漆かみ られ刷毛の跡もあ り漆が赤か
53	69	126			1C-10I17	VI	平安	土師器	無台椀	15.6	-	-	-	精	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		7/36		ター	ター	
53	69	127			1C-10I22	V	平安	土師器	無台椀b	16.0	-	-	-	精	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		9/36		ター	ター	
53	69	128			1C-10I10	V	平安	土師器	無台椀	16.0	-	-	-	普通	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		7/36				器面磨減
53	69	129			2C-213	V	平安	土師器	無台椀	13.2	6.2	4.2	31.8	精	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	6/36	21/36		
53	69	130			1D-9A20	Via	平安	土師器	無台椀	12.8	6.0	4.6	35.9	精	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	10/36	36/36		
53	69	131			2C-1I25	Vic	平安	土師器	無台椀	12.8	5.1	4.1	32.0	普通	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	21/36	36/36		器面磨減
53	69	132			試掘58T	Ka+Ixb	平安	土師器	無台椀	14.0	4.8	3.8	27.1	精	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	9/36	10/36		
53	69	133			1C-10I7	V~VI	平安	土師器	無台椀	13.0	4.6	3.9	30.0	精	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	17/36	36/36		
53	69	134			2D-1B1+1B4	Via	平安	土師器	無台椀	12.6	4.0	3.6	28.6	精	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	8/36	36/36		
53	70	135			2C-218	V	平安	土師器	無台椀	(11.9)	-	-	-	精	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/3)	浅黄緑 (7.5YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		5/36				体部外面黒書「真」
53	70	136			2C-1I15	V	平安	土師器	無台椀	-	5.4	-	-	精	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	17/36			体部外面黒書「上」 見込み一部剥離
53	70	137			1D-10A7+10A12	Via	平安	土師器	無台椀	12.2	4.9	3.9	32.0	粗	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	左	糸切り	22/36	27/36		
53	70	138			1C-10I24	Via	平安	土師器	無台椀	(12.0)	5.5	3.6	30.0	精	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/3)	浅黄緑 (7.5YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	左	糸切り	3/36	17/36		器面磨減
53	70	139			2D-2A5+2C3	V	平安	土師器	有台皿	(14.6)	6.0	2.4	16.4	-	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/3)	浅黄緑 (7.5YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	2/36	31/36		器面磨減
53	70	140			2C-1I6+1I7+1I12	V	平安	土師器	皿	14.0	-	-	-	精	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		12/36				
53	70	141			1D-10A21	Via	平安	土師器	有台皿	14.2	6.4	3.5	24.6	-	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	17/36	14/36		器面磨減
53	70	142			1D-9A22	Via+Vic	平安	土師器	皿	13.0	-	-	-	粗	石・長・ 焼	浅黄緑 (7.5YR8/6)	浅黄緑 (7.5YR8/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		12/36				
53	70	143			2C-1I5+1I10	V	平安	土師器	皿	16.5	-	-	-	粗	石・長・ 焼	ロクロナデ	ロクロナデ	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		8/36			器面磨減	
53	70	144			2C-217	V	平安	土師器	椀	15.6	-	-	-	普通	石・長・ 焼	黒 (2.5Y3/1)	黒 (2.5Y3/1)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		9/36			器面磨減 被熱による変色 内面黒色処理	
53	70	146			1D-9A20	Via	平安	土師器	無台椀	-	6.8	-	-	精	石・長・ 焼	黒 (10YR1.7/1)	黒 (10YR1.7/1)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	22/36			内面黒色処理 外面に黒斑
53	70	146			2C-1I14	V	平安	土師器	無台椀	12.6	5.5	4.6	36.5	精	石・長・ 焼	黒 (7.5YR2/1)	黒 (7.5YR2/1)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	糸切り	19/36	36/36		内面黒色処理
53	70	147			1C-10I15	V	平安	土師器	有台椀	-	-	-	-	普通	石・長・ 焼	黒 (10Y2/1)	黒 (10Y2/1)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		12/36		ス	内面黒色処理 器面磨減	

図版 No.	No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	種別	器種	法量 (cm)		底存 指数	底高 指数	胎土		色調		焼成	調整・手法		回転 方向	遺存率	付着物		備考
			通構名	グリッド					口径	底径			器高	口径	底径	状態		含有物	産地			内面	外面	
53	70	148			V	奈良	土師器	無台杯分	-	-	-	-	精	白	にふい (7.5YR7/4)	にふい (10YR7/3)	酸化	ミカキ						内面に藍灰状跡文
54	70	149			VI	平安	土師器	鉢	8.6	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	にふい (7.5YR7/4)	浅黄 (10YR8/3)	酸化	カキメ			16/36			
54	70	150			V	平安	土師器	鉢	-	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	にふい (7.5YR7/4)	にふい (7.5YR7/4)	酸化	カキメ					ス	
54	70	151			Via	平安	土師器	長羹	(20.2)	-	-	-	普通	石・焼・ 白	にふい (7.5YR7/4)	にふい (7.5YR7/4)	酸化	カキメ			5/36			
54	70	152			Via	平安	土師器	長羹	(20.1)	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	浅黄 (10YR8/3)	浅黄 (10YR8/3)	酸化	カキメ			6/36			器面磨滅
54	70	153			V	平安	土師器	長羹	22.7	-	-	-	精	石・焼・ 白	浅黄 (7.5YR8/4)	浅黄 (10YR8/4)	酸化	カキメ			12/36			
54	71	154			Via	平安	土師器	長羹	20.1	-	-	-	普通	石・子・ 焼・白	浅黄 (7.5YR8/4)	にふい (10YR8/3)	酸化	カキメ			8/36		ス	器面磨滅
54	71	155			V	平安	土師器	長羹	22.7	-	-	-	精	石・焼・ 白	浅黄 (10YR8/3)	灰白 (10YR8/2)	酸化	カキメ			8/36		タール	
54	70	156			V	平安	土師器	長羹	19.8	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	浅黄 (7.5YR8/4)	浅黄 (7.5YR8/4)	酸化	カキメ			22/36			
54	71	157			V	平安	土師器	長羹	(23.9)	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	浅黄 (7.5YR8/4)	浅黄 (7.5YR8/4)	酸化	カキメ			5/36			器面磨滅
54	70	158			V	平安	土師器	長羹	22.9	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	浅黄 (7.5YR8/3)	浅黄 (7.5YR8/3)	酸化	カキメ			15/36		ス	
54	71	159			V	平安	土師器	長羹	(21.2)	-	-	-	粗	石・長・ 焼・白	浅黄 (10YR8/3)	浅黄 (10YR8/3)	酸化	カキメ			4/36		ス タール	器面磨滅
55	71	160			V	平安	土師器	長羹	(25.1)	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	橙 (5YR7.6)	橙 (5YR6/6)	酸化	カキメ			3/36		ス タール	
55	71	161			VI	平安	土師器	長羹	23.0	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	にふい (7.5YR7/4)	にふい (7.5YR7/4)	酸化	カキメ			7/36			
55	71	162			V	平安	土師器	長羹	23.1	-	-	-	粗	石・長・ 焼・白	浅黄 (10YR8/3)	浅黄 (10YR8/3)	酸化	カキメ			10/36			
55	71	163			V	平安	土師器	長羹	21.4	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	漆 (5YR8/4)	橙 (5YR7/6)	酸化	カキメ			16/36			被熱による変色
55	71	164			V	平安	土師器	長羹	(23.4)	-	-	-	精	石・長・ 焼・白	橙 (7.5YR7/6)	浅黄 (10YR8/3)	酸化	カキメ			4/36			
55	71	165			V	平安	土師器	長羹	(22.4)	-	-	-	精	石・焼・ 白	橙 (7.5YR7/6)	にふい (7.5YR7/4)	酸化	カキメ			5/36			
55	72	166			V	平安	土師器	長羹	(21.0)	-	-	-	精	石・長・ 焼・白	浅黄 (10YR8/3)	浅黄 (10YR8/3)	酸化	カキメ			4/36		ス タール	
55	72	167			V	平安	土師器	長羹	(19.8)	-	-	-	粗	石・長・ 焼・白	にふい (7.5YR7/4)	にふい (10YR7/3)	酸化	カキメ			5/36			被熱による変色(外 面) 器面剥落
55	72	168			V	平安	土師器	長羹	(31.1)	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	にふい (7.5YR7/3)	にふい (7.5YR6/3)	酸化	カキメ			3/36			
56	71	169			V	平安	土師器	長羹	(22.6)	-	-	-	粗	石・長・ 焼・白	にふい (7.5YR7/3)	にふい (7.5YR7/3)	酸化	カキメ			11/36		ス	
56	72	170			V	平安	土師器	長羹	(20.0)	-	-	-	普通	石・白	橙 (5YR7/6)	灰白 (10YR8/2)	酸化	カキメ			4/36			器面磨滅
56	72	171			V+Via	平安	土師器	長羹	(20.8)	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	浅黄 (7.5YR8/4)	浅黄 (7.5YR8/4)	酸化	カキメ			7/36			
56	72	172			V-VI	平安	土師器	長羹	(24.8)	-	-	-	粗	石・長・ 焼・白	灰白 (10YR8/2)	浅黄 (10YR8/3)	酸化	カキメ			5/36			
56	72	173			VI	平安	土師器	長羹	22.0	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	浅黄 (7.5YR8/4)	浅黄 (7.5YR8/4)	酸化	カキメ			8/36		ス	



図版 No.	No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	種別	器種	法量 (cm)		底存 指数	径高 指数	胎土 状態	胎土 含有物	色調		焼成	調整・手法		回転 方向	遺存率	付着物		備考	
			通構名	グリッド					口径	底径					器高	外面		内面	外面			内面	内面		外面
56	72	174			VIIa	平安	土師器	長襲	(22.5)	-	-	-	粗	石・長	浅黄緑 (7.5YR8/3)	浅黄緑 (7.5YR8/3)	酸化	ロクロナデ カキメ	ロクロナデ		1/36				
56	70	175			V V V V	平安	土師器	長襲	-	-	-	-	粗	石・長・ 焼・白	浅黄緑 (7.5YR7/3)	におい黄緑 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	当具裏 (格子文)			コゲ	タール	器面剥落	
56	72	176			V V V V	平安	土師器	長襲	-	-	-	-	普通	石・長・ 雲・焼	におい黄緑 (7.5YR7/4)	黄 (5YR7/6)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ 当具裏 (放射状格子 文)				スス		
57	73	177			V VIa	平安	土師器	小襲	13.6	6.0	12.8	-	普通	石・長・ 雲・焼・ 白・角	浅黄緑 (10YR8/4)	におい黄緑 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ	右	12/36	20/36	スス		被熱による変色
57	73	178			V	平安	土師器	小襲	13.5	-	-	-	粗	石・長・ 白・角	浅黄緑 (7.5YR8/4)	黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		26/36	スス (口縁)	スス タール	器面剥落 被熱による変色	
57	73	179			VIa	平安	土師器	小襲	14.0	-	-	-	普通	石・長・ 焼・角	におい黄緑 (10YR7/3)	黄緑 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	左か	11/36		スス タール	器面剥落 被熱による変色	
57	73	180			V	平安	土師器	小襲	13.9	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	黄緑 (5YR7/4)	黄 (5YR7/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		13/36		スス	被熱による変色	
57	73	181			V	平安	土師器	小襲	13.8	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白	浅黄緑 (7.5YR7/4)	黄緑 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		13/36		コゲ	器面剥落 断面にススが附着 被熱後の二次焼成に よるものか	
57	73	182			V	平安	土師器	小襲	14.8	-	-	-	粗	石・雲・ 子・焼・ 白	明陶灰 (7.5YR7/2)	におい黄緑 (7.5YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右か	17/36		スス タール		
57	73	183			V	平安	土師器	小襲	13.3	-	-	-	精	石・長	黄緑 (10YR8/4)	黄緑 (10YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		12/36		スス タール	器面剥落	
57	73	184			V	平安	土師器	小襲	13.8	-	-	-	精	石・長・ 焼・白・ 角	浅黄緑 (7.5YR8/3)	黄緑 (7.5YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		10/36		コゲ	器面剥落	
57	73	185			V	平安	土師器	小襲	(15.1)	-	-	-	普通	石・長	浅黄緑 (7.5YR8/3)	黄緑 (7.5YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		4/36		コゲ		
57	73	186			V	平安	土師器	小襲	-	6.4	-	-	普通	長・子・ 焼・白	黄 (5YR7/6)	におい黄緑 (5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ	右	36/36	36/36	コゲ	器面剥落 被熱による変色	
57	73	187			Vic VI-VII	平安	土師器	小襲	-	5.9	-	-	普通	石・白	におい黄緑 (7.5YR7/4)	黄緑 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ	右	35/36	36/36	コゲ	器面剥落 被熱による変色	
57	73	188			V	平安	土師器	小襲	-	6.9	-	-	普通	石・長・ 子・焼・ 角	浅黄緑 (10YR8/3)	黄緑 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	36/36		スス	被熱による変色 (外 面)	
57	73	189			V	平安	土師器	小襲	-	6.8	-	-	普通	石・長・ 焼	浅黄緑 (10YR8/3)	黄緑 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右	19/36		スス		
57	73	190			V	平安	土師器	小襲	-	6.0	-	-	普通	石・長・ 子・焼・ 白	浅黄緑 (7.5YR8/4)	黄緑 (7.5YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	右か	36/36	スス		器面剥落	
57	73	191			V	平安	土師器	鉢	(43.3)	-	-	-	普通	石・長・ 焼・白・ 角	浅黄緑 (10YR8/4)	黄緑 (10YR8/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		4/36			器面剥落	
57	73	192			V	平安	土師器	鉢	(35.6)	-	-	-	普通	石・焼・ 白	におい黄緑 (7.5YR7/4)	黄緑 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ カキメ 木直交		4/36		スス タール		
58	74	183			V V V V	平安	土師器	鉢	(41.0)	-	-	-	粗	石・長・ 雲・焼・ 白	におい黄緑 (10YR7/3)	黄緑 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ カキメ 木直交		3/36		スス タール		
58	74	194			V+VIa V V	平安	土師器	鉢	(39.0)	-	-	-	普通	石・長・ 焼・角	浅黄緑 (7.5YR8/4)	黄 (5YR7/6)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ カキメ 木直交		6/36		スス		
58	74	195			VI	平安	土師器	鉢	(43.5)	-	-	-	普通	白・石・ 長・子・ 焼	黄緑 (7.5YR7/6)	黄 (5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ カキメ 木直交		10+7 /36		スス タール		
58	74	196			V	平安	土師器	鉢	(36.6)	-	-	-	普通	石・長・ 雲・白	におい黄緑 (7.5YR7/4)	黄 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ カキメ 木直交		6/36		スス		
58	74	197			V-VI V	平安	土師器	鉢	-	-	-	-	普通	石・長・ 焼・角・ 白	黄 (7.5YR7/6)	黄 (5YR7/6)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ カキメ 木直交				スス		
58	74	198			V	古墳 ~ 古代	黒色土器	高杯	-	-	-	-	普通	石・長	におい黄緑 (7.5YR7/4)	黄 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ カキメ 木直交	ロクロナデ カキメ 木直交				スス	杯部内黒色処理 器面剥落	





別表4 道正遺跡古墳時代土器観察表

凡例 1 器種・分類 第IV章(第4節B)の分類による。  
 2 胎土 胎土内に含まれる鉱物・小礫等について記した。観察はルーペによる肉眼観察である。「石」は石炭質、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「子」はチャート、「白」は白色凝灰岩、「赤」は赤色粘土、「焼」は焼土粒、「海」は海綿質、「角」は角閃石を表す。  
 3 色 調 『新版 標準五色帖』(小山・竹原1967)の記号を記した。  
 4 遺 存 率 分數表示で遺存割合を示した。

図版 No.	写真 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (/36)	底径 遺存率 (/36)	内面 付着	外面 付着	備考
60	79	1	SI266 2D-1D2・7 2D-1D14	3 V	古墳	土師器	高杯	A	17.6			石・長・雲	黄褐色(2.5Y5/3) におい濁 (7.5YR5/4)	黄褐色(2.5Y5/3) におい濁 (7.5YR5/4)	ハラミガキ, ハケム	ハラミガキ		2/36				
60	79	2	SI266 2D-1D6	3	古墳	土師器	高杯	C	17.8			石・赤	におい濁 (7.5YR7/3)	におい濁 (7.5YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ		6/36				
60	79	3	SI266 2D-1D7	1	古墳	土師器	高杯	C	19.9			石・赤・白・赤	明赤褐色(2.5YR5/6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		12/36				
60	79	4	SI266 2D-1D7 SX537 2D-1D25	1	古墳	土師器	高杯	C1	(20.0)			石・長	赤褐色(10R6/6)	赤褐色(10R6/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		1/36				
60	79	5	SI266 2D-1D23 2D-1D25	2 VIc1	古墳	土師器	高杯		-			石・白	におい濁 (10YR7/3)	におい濁 (10YR7/3)	杯底:ハラミガキ, 赤彩	杯底:ハラミガキ, 赤彩		-				
60	79	6	SI266 2D-1D23	1	古墳	土師器	高杯		-			石・長	灰白(10YR8/1)	におい濁 (10YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ		-				透かし孔 (3孔)
60	79	7	SI266 2D-1D17 2D-1D16	3 7	古墳	土師器	器台	D	8.8			石	明赤褐色(2.5YR5/6)	におい濁 (2.5YR5/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		8/36				
60	79	8	SI266 2D-1D7	1	古墳	土師器	器台	C	9.8			石	におい濁 (7.5YR6/4)	におい濁 (7.5YR6/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		2/36				
60	79	9	SI266 2D-1D12	1	古墳	土師器	器台	B1	-			石・白	明赤褐色(10R4/4)	赤褐色(10R4/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				三角形の透かし孔 (3孔以上)
60	79	10	SI266 2D-1D6・11	3	古墳	土師器	器台	A	-			石・長	明赤褐色(7.5YR7/2)	赤褐色(2.5YR4/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
60	79	11	SI266 2D-1D12	2	古墳	土師器	器台	A	-			石・長・焼	におい濁 (7.5YR5/3)	黒褐色(10YR3/1)	ハラミガキ	ハラミガキ		-				
60	79	12	SI266 2D-1D18	7	古墳	土師器	器台		-			石・長	赤褐色(10R6/6)	褐色(10YR5/1)	ハラミガキ, 赤彩	愛:ハラミガキ, 赤彩		-				
60	79	13	SI266 2D-1D2・7	3	古墳	土師器	器台		-			石・焼	赤(10R4/6)	におい濁 (10YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ		-				
60	79	14	SI266 2D-2D3	1	古墳	土師器	鉢	A1	11.0			石・長・赤	浅黄褐色(10YR8/3)	浅黄褐色(10YR8/3)	体:ハラミガキ	体:ハラミガキ		7/36				
60	79	15	SI266 2D-1D18 2D-1D13	3 2	古墳	土師器	鉢	A1	11.9			石・長・白	浅黄褐色(7.5YR8/4)	におい濁 (7.5YR7/4)	体:ハケム	体:ハケム		9/36				
60	79	16	SI266 2D-1D22	床直	古墳	土師器	鉢	B3	(12.0)			石・赤	におい濁 (10YR6/4)	におい濁 (10YR6/4)	体:ハケム	体:ハケム		2/36				
60	79	17	SI266 2D-1D17	3	古墳	土師器	鉢	B1	(11.8)			石	におい濁 (7.5YR5/4)	におい濁 (7.5YR6/4)	口:ハラミガキ 体:ハラミガキ	口:ハラミガキ 体:ハラミガキ		2/36				
60	79	18	SI266 2D-1D18	3	古墳	土師器	鉢	B2	15.6			石・長・雲・赤・白・赤・海	褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	ハラミガキ	ハラミガキ		6/36				
60	79	19	SI266 2D-1D18	3	古墳	土師器	鉢	B1	12.9			石・赤	褐色(10YR4/1)	におい濁 (5YR7/4)	体:ハケム	体:ハケム		5/36				
60	79	20	SI266 2D-1D2・7	3	古墳	土師器	壺	A1	-			石・海	明赤褐色(5YR5/8)	明赤褐色(5YR5/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ		-				
60	79	21	SI266 2D-1D22	1	古墳	土師器	壺	I	-			石・赤	浅黄褐色(10YR8/3)	浅黄褐色(10YR8/3)	ナデ	ナデ		-				
60	79	22	SI266 2D-1D18	4	古墳	土師器	壺	K	16.0			石・長	灰白(10YR8/2)	灰白(10YR8/2)	ハケム	ハケム		2/36				
60	79	23	SI266 2D-1D22	1	古墳	土師器	壺	F1	(13.0)			石・赤	におい濁 (10YR7/2)	におい濁 (10YR7/2)								
60	79	24	SI266 2D-1D23 2D-2D2	1 VIa	古墳	土師器	壺	F1	12.1			石・赤	におい濁 (7.5YR7/4)	におい濁 (7.5YR7/4)	ハケム	ハケム		9/36				
60	79	25	SI266 2D-1D7	1	古墳	土師器	壺	K	16.0			石・長・海	におい濁 (7.5YR6/3)	におい濁 (7.5YR6/3)	口端:刻み目	ハケム		9/36				
60	79	26	SI266 2D-1D7・18	3	古墳	土師器	壺	K	17.0			石	におい濁 (10YR6/3)	におい濁 (10YR6/3)	口:ハケム 体:ハケム	口:ハケム 体:ハケム		6/36				
60	79	27	SI266 2D-1D17	3	古墳	土師器	壺	K	-			石・赤	褐色(2.5YR6/6)	褐色(2.5YR6/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
60	79	28	SI266 2D-1D2・7	3	古墳	土師器	壺	K	-			石・角	明赤褐色(5YR7/1)	明赤褐色(5YR7/1)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
61	79	29	SI266 2D-1D2・7・11 2D-1D2・7	3 Vd	古墳	土師器	壺			8.0		石	におい濁 (10YR7/4)	褐色(10YR6/1)	ハケム	ハケム		18/36				繊維状片痕
61	79	30	SI266 2D-1D23 2D-2D3	3 2・3	古墳	土師器	壺			7.0		石・赤・赤・海	浅黄褐色(7.5YR8/3)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	ハケム	ハケム		36/36				
61	79	31	SI266 2D-1D6	3	古墳	土師器	甕	A2a	13.9			石・長・赤	におい濁 (5YR7/4)	におい濁 (5YR7/4)	体:ハケム	体:指ナデ		7/36				

図版 No.	写真 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口縁 遺存率 (3/36)	底縁 遺存率 (3/36)	内面 付着	外面 付着	備考
61	79	SI266	2D-1D23	1	古墳 土師器	甕	A3	(13.8)			石	明赤褐 (5YR5/6)	褐 (7.5YR4/3)		ハケメ			2/36				
61	79	SI266	2D-2D1	1	古墳 土師器	甕	E2	(15.0)			長・海	にぶい黄橙 (10YR6/3)	掘出線					—				
61	79	SI266	2D-2D3	1	古墳 土師器	甕	A1	(14.9)			石・チ	にぶい黄 (5YR7/4)	にぶい黄 (5YR7/4)		体：ハケメ			1/36				
61	79	SI266	2D-2D2	2	古墳 土師器	甕	B	(14.2)			石・チ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい褐 (7.5YR6/4)		体：ハケメ	体：ハケメ		2/36			スス	
61	79	SI266	2D-1D12	7	古墳 土師器	甕	A1	20.0			石・チ・赤	にぶい黄 (7.5YR6/4)	にぶい黄 (7.5YR6/4)		ハケメ	ハケメ		4/36				
61	79	SI266	2D-1D22	1	古墳 土師器	甕	A2a	18.2			石・チ	にぶい黄 (10YR5/3)	にぶい黄 (10YR5/3)		ハケメ	ハケメ		13/36			スス	
61	79	SI266	2D-2D2	1	古墳 土師器	甕	A2a	(17.0)			石・白・海	にぶい黄 (7.5YR7/4)	にぶい黄 (7.5YR7/4)		ハケメ	ハケメ		2/36				
61	79	SI266	2D-1D12	2	古墳 土師器	甕	A2a	17.9			石・長・赤	黒褐 (10YR3/2)	灰黄褐 (10YR4/2)		ハケメ	ハケメ		10/36			スス	
61	79	SI266	2D-1D23	2	古墳 土師器	甕	A2a	16.2			石・雲	にぶい黄 (7.5YR7/4)	にぶい黄 (7.5YR7/4)		ハケメ	ハケメ		3/36			スス	
61	79	SI266	2D-1D18	3	古墳 土師器	甕	A2a	18.0			石・長	明赤褐 (5YR5/6)	灰褐 (5YR5/2)		ハケメ	口：ハケメ 体：ハラナ		6/36				
61	79	SI266	2D-1D13	3	古墳 土師器	甕	A2a	(18.0)			石・チ	にぶい黄 (10YR4/3)	にぶい黄 (10YR5/4)		ハケメ	ハケメ		2/36			スス	
61	79	SI266	2D-1D7	3・2 Vic. Vic3	古墳 土師器	甕	A2a	17.0			石・チ・白・赤	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)		ハケメ	ハケメ		16/36				
61	79	SI266	2D-1D23	1	古墳 土師器	甕	A2a	(19.8)			石・チ	黄 (5YR6/6)	明褐灰 (7.5YR7/2)		ハケメ	ハケメ		3/36				
61	79	SI266	2D-1D6	3	古墳 土師器	甕	A3	18.0			石・チ・海	にぶい黄 (10YR7/4)	にぶい黄 (10YR7/3)		ハケメ	口：ハケメ 体：ハラナ		20/36				
61	79	SI266	2D-1D6	3	古墳 土師器	甕	A2a	19.0			石・チ・赤	にぶい黄 (7.5YR6/4)	にぶい黄 (7.5YR7/4)		ハケメ	ハケメ		3/36			スス	
61	79	SI266	2D-1D7	3	古墳 土師器	甕	A2a	16.9			石・赤	にぶい黄 (10YR7/2)	にぶい黄 (10YR6/4)		ハケメ	ハケメ、指頭圧痕		6/36			スス	
61	79	SI266	2D-1D23	2	古墳 土師器	甕	A2a	19.2			石・長・チ	にぶい黄 (10YR6/3)	にぶい黄 (10YR6/3)		ハケメ	体：ハラナ		3/36			スス	
62	79	SI266	2D-1D7	1	古墳 土師器	甕	A2a	19.1			石・白・赤	にぶい黄 (10YR7/3)	にぶい黄 (10YR7/3)		ハケメ	口：ハケメ 頸：縦線状 圧痕 体：ハラナ		7/36				縦線状圧痕
62	79	SI266	2D-1D18	3	古墳 土師器	甕		5.0			石・チ	にぶい黄 (10YR5/3)	黒褐 (10YR3/2)		ハラナ	ハラナ		36/36			炭化物	スス
62	79	SI266	2D-1D17	1・2	古墳 土師器	甕					石・長	にぶい黄 (7.5YR6/4)	黒褐 (10YR3/1)		ハラナ	ハラナ		36/36			スス	
62	79	SI266	2D-1D22	1	古墳 土師器	甕		2.3			石・長	にぶい黄 (7.5YR6/4)	明赤褐 (5YR5/6)		ハラナ	ハラナ		12/36				
62	79	SD238	2D-1D9・14・19	1	古墳 土師器	高杯	B	17.0			石・長・チ	赤 (10R5/8)	赤 (10R5/8)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		2/36				
62	79	SD238	2D-1D7	1	古墳 土師器	高杯	C	(17.9)			石	赤 (10R5/8)	赤 (10R5/8)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		—				
62	79	SD238	2D-2D4	2	古墳 土師器	高杯	D1a	—			石	赤 (10R5/8)	赤 (10R5/8)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		—				
62	79	SD238	2D-2D3	2	古墳 土師器	器台	E	(8.8)			石・長・チ	赤 (10R5/8)	赤 (10R5/8)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		2/36				
62	79	SD238	2D-2D2	1	古墳 土師器	器台		—			石・チ	赤 (10R5/8)	赤 (10R5/8)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		—				透かし孔 (4孔)
62	79	SD238	2D-1D10	1	古墳 土師器	器台		11.3			石・長・雲	赤 (10YR4/6)	赤 (10YR4/6)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		14/36				透かし孔 (3孔)
62	80	SD238	2D-2D3	1	古墳 土師器	高杯or器台		—			石・長・チ・角	赤 (10YR4/6)	赤 (10YR4/6)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		—				
62	80	SD238	2D-1D15	1	古墳 土師器	高杯or器台		9.0			石・長・チ・白	赤 (10YR6/3)	赤 (10YR6/3)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		14/36				
62	80	SD238	2D-2D3	1・2	古墳 土師器	高杯or器台		12.1			石・チ・白	赤 (10YR7/4)	赤 (10YR7/4)		指頭圧痕	指頭圧痕		6/36				
62	80	SD238	2D-1D24	1	古墳 土師器	高杯or器台		12.6			石・長	赤 (10YR6/4)	赤 (10YR6/4)		ハラミガキ	ハラミガキ		13/36				
62	80	SD238	2D-2D4	1	古墳 土師器	高杯or器台		15.8			石・チ	赤 (10YR7/2)	赤 (10YR7/2)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		—				
62	80	SD238	2D-1D19・14	1	古墳 土師器	鉢	F	(7.6)			石・チ	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)		ハラミガキ、赤彩	ハラミガキ、赤彩		7/36				
62	80	SD238	2D-2D3	1・2	古墳 土師器	鉢	B3	9.7			石・チ	灰 (7.5YR7/6)	灰 (7.5YR7/6)		ハラミガキ	ハラミガキ		—				
62	80	SD238	1D-1D9	1	古墳 土師器	鉢	G1	(36.3)			石・雲	にぶい黄 (10YR7/3)	にぶい黄 (10YR7/3)		ハラミガキ	ハラミガキ		2/36				
62	80	SD238	2D-1B23	Vic	古墳 土師器	鉢					石・雲	にぶい黄 (10YR7/3)	にぶい黄 (10YR7/3)		ハラミガキ	ハラミガキ		2/36				

図版 No.	写真 図版 No.	報告 図版 No.	出土 地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/6)	底径 遺存率 (3/6)	内面 付着	外面 付着	備考
62	80	SD238	2D-2D2	1	古墳 土師器	鉢	F	(13.0)				石・長・チ	にぶい青 (7.5YR6/4)	にぶい青 (7.5YR6/4)	ハケム後ヘラミガキ	ヘラミガキ		1/36				
62	80	SD238	2D-2D3	1	古墳 土師器	鉢	B1	(18.0)				石	にぶい黄緑 (10YR8/2)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	指頭正張	ヘラナデ		1/36				
62	80	SD238	2D-1D14	1	古墳 土師器	壺	F1	(16.0)				石・チ	赤 (10R4/8)	赤 (10R4/8)	ハケム、赤彩	ハケム、赤彩		1/36				
62	80	SD238	2D-1D19	2	古墳 土師器	壺				5.5		石・長・チ・海	赤黒 (2.5YR2/1)	赤黒 (2.5YR2/1)	ヘラミガキ、赤彩	ハケム、ヘラナデ	赤彩		36/36			
62	80	SD238	2D-1D15	1	古墳 土師器	壺	A	9.6				石・チ・赤	浅黄緑 (10YR8/2)	浅黄緑 (10YR8/3)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		5/36				
62	80	SD238	2D-2D3	1	古墳 土師器	壺	A1	—				石・海	橙 (5YR6/6)	にぶい青 (5YR6/4)	ヘラミガキ、赤彩	ハケム		—				
62	80	SD238	2D-2D3	1	古墳 土師器	壺	A	0.6				石	にぶい濁 (7.5YR6/3)	にぶい濁 (7.5YR6/3)	ヘラミガキ、赤彩	ハケム後ヘラミガキ、指頭正張		36/36				
63	80	SD238	2D-1D9	1	古墳 土師器	壺	F1	13.9				石・長・チ	にぶい濁 (7.5YR5/3)	にぶい濁 (7.5YR5/3)	ハケム	ハケム		13/36				
63	80	SD238	2D-1D14	1	古墳 土師器	壺	F1	(14.5)				石・チ	明濁灰 (2.5YR7/2)	明濁灰 (2.5YR7/2)	ハケム	体：指頭正張		3/36				
63	80	SD238	2D-1D14・9	1	古墳 土師器	壺	F1	14.9				石・長・雲・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハケム後ヘラミガキ	ハケム		1/36				
63	80	SD238	2D-1D19・20	1	古墳 土師器	壺	F1	14.0				石・長・チ・白・海	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	ハケム後ヘラミガキ	口：ハケム 体：ヘラナデ		31/36				
63	80	SD238	2D-1D19	1	古墳 土師器	壺	F1	14.0				石・長・チ・赤	黒濁 (7.5YR6/2)	黒濁 (7.5YR6/2)	ハケム	口：ハケム 体：ヘラナデ		18/36			スス	
63	80	SD238	2D-1D9・14	1	古墳 土師器	壺	G	14.0				石・チ	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	口：刺突 体：ハケム	口：ハケム 体：ヘラナデ		1/36				
63	80	SD238	2D-2D2	1	古墳 土師器	壺	F1	—				チ	にぶい黄緑 (10YR7/4)	黒濁 (10YR3/1)	ハケム	体：ハケム		—				
63	80	SD238	2D-1D14・9	1	古墳 土師器	壺	G	—				石・長・チ	にぶい黄濁 (10YR5/3)	にぶい黄濁 (10YR4/3)	ハケム	口：ハケム 体：ヘラナデ		—			スス	カゴス儀
63	80	SD238	2D-1D14・9	1	古墳 土師器	壺	F1	16.8				長	にぶい黄濁 (10YR6/4)	にぶい黄濁 (10YR5/3)	ハケム、ヘラミガキ	ヘラミガキ、ハケム		6/36				スス
63	80	SD238	2D-1D9・10・14・15・19	1	古墳 土師器	壺	J2	17.7				石・長・チ	にぶい黄濁 (10YR6/3)	にぶい黄濁 (10YR6/4)	体：ハケム後ヘラミガキ	口：ハケム		14/36				
63	80	SD238	2D-1D14・9	1	古墳 土師器	壺	J2	19.0				長・チ	濁灰 (10YR6/1)	灰白 (10YR7/1)	口：ハケム、刻目 頸～体：ヘラミガキ、ハケム	ヘラミガキ		15/36				
63	80	SD238	2D-1D14・19	1	古墳 土師器	壺	J2	18.0				石・長・チ	にぶい黄濁 (10YR7/3)	にぶい黄濁 (10YR7/3)	ハケム	ハケム		19/36				
64	81	SD238	2D-1D19・9・14・15	1	古墳 土師器	壺	J1	21.0				石・長	にぶい黄濁 (10YR6/4)	明赤濁 (2.5YR5/6)	口：ヘラミガキ、赤彩 頸：ヘラミガキ、ハケム	口：ヘラミガキ、赤彩 頸：ヘラミガキ、ハケム		31/36				
64	81	SD238	2D-1D24	1	古墳 土師器	壺	J2	21.9				石・チ	灰白 (10YR7/1)	にぶい黄濁 (10YR7/3)	ヘラミガキ	頸：ハケム		12/36				
64	81	SD238	2D-1D9・14・15	1	古墳 土師器	壺	J2	15.3				石・チ	明濁灰 (7.5YR7/2)	灰濁 (10YR6/2)	頸：ハケム	頸：ハケム		—				
64	81	SD238	2D-2D4・3	1	古墳 土師器	壺	K	—				石	明赤濁 (2.5YR5/6)	灰白 (7.5YR8/2)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ		—				
64	81	SD238	2D-1D14	1	古墳 土師器	壺				7.5		石・長・チ	にぶい黄濁 (10YR6/3)	黒濁 (10YR3/2)	ハケム	ハケム	木炭痕		18/36	炭化物	スス	木炭痕
64	81	SD238	2D-1D10・15	1	古墳 土師器	壺	V					石・長・チ	濁灰 (10YR4/1)	にぶい黄濁 (10YR7/2)	ハケム	ハケム						スス
64	81	SD238	2D-1D14・9・19・24	1	古墳 土師器	壺				7.2		石・長・チ	濁灰 (10YR4/1)	にぶい黄濁 (10YR7/2)	ハケム	ハケム						スス
64	81	SD238	2D-1D9	1	古墳 土師器	壺	V1c					石・チ・角	にぶい黄濁 (10YR7/3)	橙 (7.5YR6/6)	ハケム	ヘラナデ		36/36				
64	81	SD238	2D-1D14・25	1	古墳 土師器	壺	V1c1					石・チ・白	にぶい黄濁 (10YR6/4)	にぶい黄濁 (10YR6/4)	ハケム後ヘラミガキ	ハケム	ヘラケズリ		36/36			
64	81	SD238	2D-1D14・25	1	古墳 土師器	壺	V1c2					石・長・チ・海	にぶい黄濁 (10YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	ハケム	ハケム		13/36	36/36			スス
64	81	SD238	2D-1D24	1	古墳 土師器	壺	V1c2					石・長・チ	にぶい黄濁 (10YR6/4)	にぶい黄濁 (10YR7/4)	ハケム、ヘラナデ	口：沈線状 体：ヘラナデ		12/36	36/36			スス
64	81	SD238	2D-1D19	1	古墳 土師器	壺	A3	14.5				石・長・チ	にぶい黄濁 (5YR7/4)	にぶい黄濁 (5YR7/4)	ハケム、ヘラナデ	口：沈線状 体：ヘラナデ		12/36	36/36			スス

図版 No.	写真 図版 No.	出土 遺構 No.	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底面調整	口径 遺存率 (%)	底径 遺存率 (%)	内面 附着	外面 附着	備考
64	81	SD238	2D-ID14・9	1 VI	古墳 土師器	甕	A2b	17.0				石・長	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	体：ハケメ	口：ハケメ 体：ハラナ 子		36/36	スス	断面スス附着		
64	81	SD238	2D-ID14	1	古墳 土師器	甕	A2a	16.8				石・赤	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハケメ	口：ハケメ 体：ハラナ 子		5/36	スス			
65	81	SD238	2D-ID14・9	1 VI	古墳 土師器	甕	A3	16.4				石・赤	橙 (2.5YR6/8)	橙 (2.5YR6/6)	ハケメ	口：ハケメ		22/36				
65	81	SD238	2D-ID14	1	古墳 土師器	甕	A3	19.0				石・長・赤	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	口：ハケメ	体：ハケメ		8/36				
65	81	SD238	2D-ID15	1	古墳 土師器	甕	A2a	21.0				石・長・赤	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	口：ハケメ	体：ハケメ		5/36				
65	81	SD238	2D-ID15	1	古墳 土師器	甕	A2a	21.0				石・長・赤	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	口：ハケメ	体：ハケメ		5/36				
65	81	SD238	2D-ID15	1	古墳 土師器	甕	A2a	21.0				石・長・赤	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	口：ハケメ	体：ハケメ		3/36				
65	81	SD238	2D-ID19	1	古墳 土師器	甕	A2a	21.0				石・長・赤	淡赤黄 (2.5YR7/3)	褐灰 (5YR6/1)	ハケメ	体：ハケメ		7/36				
65	81	SD238	2D-ID19	1	古墳 土師器	甕	A3	18.2				石・長・赤	淡赤黄 (2.5YR7/3)	褐灰 (5YR6/1)	ハケメ	体：ハケメ		12/36				
65	81	SD238	2D-ID14・9	1	古墳 土師器	甕	A2a	17.8				石・長・白	黒 (10YR2/1)	褐灰 (10YR4/1)	ハケメ	口：ハケメ 体：ハラナ子、指頭正真		13/36	炭化物	スス		
65	81	SD238	2D-ID9・10	1 VIc	古墳 土師器	甕	A2a	18.2				石・長・赤・ 白・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	灰黄褐 (10YR6/2)	ハケメ	口：ハケメ 体：ハラナ子、指頭正真		16/36				
65	81	SD238	2D-ID10	1	古墳 土師器	甕	A2a	18.2				石・長・赤・ 白・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	灰黄褐 (10YR6/2)	ハケメ	口：ハケメ 体：ハラナ子、指頭正真		16/36				
65	82	106	2D-ID9・10・14	1 VI VIc VI・VIc	古墳 土師器	甕		4.8				石・長・赤	灰黄褐 (10YR6/3)	灰黄褐 (10YR6/2)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		36/36	炭化物	スス		
65	81	SD238	2D-ID19・24	1	古墳 土師器	甕		7.0				石・長・赤・ 白・海	褐灰 (10YR5/1)	褐灰 (10YR4/1)	ハケメ	ハケメ		24/36	炭化物			
65	82	108	2D-ID14・10	1	古墳 土師器	甕		6.8				石・長	黒褐 (10YR3/1)	黒褐 (10YR3/1)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		36/36	炭化物	スス		
65	82	109	1D-10C21	1 VIc	古墳 土師器	高杯	C2	20.4				長・赤	赤 (7.5R4/8)	赤 (7.5R4/8)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		35/36				
65	82	110	1D-10C11	1	古墳 土師器	高杯	C	(22.2)				石	明赤褐 (2.5YR4/8)	明赤褐 (2.5YR4/8)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		2/36				
65	82	111	1D-10C1	1 VIc	古墳 土師器	鉢	A1	—				赤	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		—				
66	82	112	1D-10C1	1	古墳 土師器	壺	B1	11.8	2.3		8.0	石・長・赤・ 白・赤	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		9/36	36/36			
66	91	113	2D-1B5	1 VIc	古墳 土師器	壺	B1	11.7				長・海	明赤褐 (5YR5/8)	橙 (7.5YR6/6)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		7/36				
66	82	114	1D-10B18	1 VIc	古墳 土師器	壺	A	—				石・長・赤	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		—				
66	82	115	1D-10B17	1	古墳 土師器	甕	A2a	19.5				石・雲・角	灰黄褐 (10YR6/2)	橙 (7.5YR6/6)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		36/36	炭化物	スス		
66	82	116	2D-1B5	1 VIc	古墳 土師器	甕	A2b	20.0				石・長・赤	黄緑 (7.5YR7/8)	橙 (7.5YR6/6)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		10/36	炭化物	スス		
66	82	117	1D-10B14・5	1 VIc	古墳 土師器	甕	A2a	22.0	1.4		24.5	石・長・赤・ 赤	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		1/36	36/36	炭化物		
66	82	118	1D-10C16	1	古墳 土師器	甕	A2a	16.3				石・赤	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/6)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		8/36				
66	82	119	1D-10B17	1	古墳 土師器	甕	A2a	(17.6)				石・長	黒褐 (10YR3/1)	褐灰 (10YR4/1)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		1/36				
66	82	120	1D-10B13	1	古墳 土師器	甕	A2a	18.4				石・雲・白	にぶい黄緑 (10YR3/6)	にぶい黄緑 (10YR3/6)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		36/36	スス			
66	82	121	1D-10C11	1 VIc	古墳 土師器	甕	A2a	20.0				石・長・海	黒褐 (5YR2/1)	にぶい黄緑 (5YR6/4)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		14/36	スス			
66	82	122	2D-1B19	1	古墳 土師器	高杯	C1	17.8				石・長・海	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄緑 (5YR5/4)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		5/36				
66	82	123	2D-1B14	1 VIc VIc1	古墳 土師器	皮袋形 土器						石・長・海	明赤褐 (10YR6/4)	明赤褐 (10YR6/4)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		—				
66	82	124	2C-1J23	2	古墳 土師器	甕	E3	(15.2)				石・長・海	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		2/36				
66	82	125	2D-1B18	1 VIc	古墳 土師器	鉢	I	27.8	11.1		12.9	石・長・赤	橙 (5YR7/6)	明赤褐 (10YR7/6)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		15/36	31/36	スス		
67	82	126	2C-1J13	2	古墳 土師器	高杯	A	—				石・赤・白・ 海	灰黄褐 (10YR7/3)	灰黄褐 (10YR7/3)	ハラナ子、ハケメ	ハラナ子、ハケメ		—				

図版 No.	写真 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/36)	底径 遺存率 (3/36)	内面 付着	外面 付着	備考	
67	82	SK302 2C-117 SK303 2C-119 2C-118	2C-117 2C-119 2C-118	1 1 Via	古墳 土師器	鉢	B1	16.0			石・長・赤	にぶい青 (7.5YR4/7)	にぶい青 (7.5YR4/6)	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ		10/36						
67	83	SK303 2C-119・8 2C-113・7	2C-119 2C-113・7	1 Via	古墳 土師器	甕	A3	23.0			石・長・赤	にぶい青 (5YR7/4)	にぶい青 (2.5YR6/4)	頸：ハケメ 口：ヘラミガキ、ハケメ	頸：ハケメ 口：ヘラミガキ、指頭庄 底：ヘラナデ			4/36						
67	83	SK312 2C-1J19	2C-1J19	1	古墳 土師器	壺	F1	14.6			石・長・赤	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	ハケメ	ハケメ			36/36						
67	83	SK312 2C-1J19	2C-1J19	1	古墳 土師器	甕 A2a	A2a	17.0			石・海	浅黄緑 (10YR7/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	ハケメ	ハケメ	体：ヘラナデ		2/36				スス		
67	83	SK378 2D-1D20	2D-1D20	1	古墳 土師器	高杯		-			石・長・赤	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	ヘラミガキ、赤彩	杯：ヘラミガキ			-						
67	83	SK378 2D-1D20	2D-1D20	1	古墳 土師器	器台 B1	B1	9.8			石・長・赤	赤 (10R4/8)	赤 (10R4/8)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			12/36					三角形の透かし孔 (3孔)	
67	83	SK378 2D-1D20	2D-1D20	1	古墳 土師器	器台		15.2			石・長・赤・海	青 (7.5YR7/6)	青 (7.5YR7/6)	ヘラミガキ	杯：ヘラミガキ 脚：ヘラケズリ、ハケメ			4/36					三角形の透かし孔 (3孔)	
67	83	SK378 2D-1D20 2D-1D10 2D-1D24 2D-2D1	2D-1D20 2D-1D10 2D-1D24 2D-2D1	1 VI Vic2 Via	古墳 土師器	器台 A	A	18.7			石・長・海	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ			3/36					三角形の透かし孔	
67	83	SK378 2D-1D20	2D-1D20	1	古墳 土師器	器台 F	F	11.8	11.0	8.6	石	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			33/36	32/36					
67	83	SK378 2D-1D20	2D-1D20	1	古墳 土師器	器台 E	E	18.0	10.5		石・長・赤・海	赤 (10R5/8)	赤 (10R5/8)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			5/36					透かし孔 (4孔)	
67	83	SK378 2D-1D20 2D-1D5 2D-5・11 2D-1E3・4	2D-1D20 2D-1D5 2D-5・11 2D-1E3・4	1 Vic Vic カクラン	古墳 土師器	鉢					石・長・赤・海	青 (5YR6/6)	青 (5YR6/6)	ヘラミガキ、赤彩	口：刺突 体：ハケメ				29/36					
67	83	SK378 2D-1D20	2D-1D20	1	古墳 土師器	壺 A1	A1	-			長	にぶい青 (7.5YR7/3)	にぶい青 (7.5YR7/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			-						
67	83	SK378 2D-1D14・19	2D-1D14・19	1	古墳 土師器	壺 N	N	15.4			石・長	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			19/36				スス		
67	83	SK378 2D-1D20 2D-1E16	2D-1D20 2D-1E16	1 Vic	古墳 土師器	甕 A2a	A2a	19.6			石・長・赤・海	黒褐 (10YR3/2)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			29/36				スス	工具痕	
67	83	SK378 2D-1D20	2D-1D20	1	古墳 土師器	甕 A2b	A2b	17.2			石・長・赤・海	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			7/36				スス		
67	83	SK400 2D-1C17	2D-1C17	1	古墳 土師器	器台 B1	B1	11.0			石・海	にぶい青 (5YR6/6)	にぶい青 (5YR7/4)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			10/36						
68	83	SK400 2D-1C17	2D-1C17	1	古墳 土師器	壺 F1	F1	15.4	7.7	28.8	石・長・赤・白・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			26/36	36/36					
68	83	SK400 2D-1C11・12	2D-1C11・12	1 Vic	古墳 土師器	甕 A2a	A2a	19.2			石・長・赤・角	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			23/36					スス	
68	83	SK400 2D-1C17	2D-1C17	1 Vic	古墳 土師器	甕 A1	A1	20.2			石	青 (7.5YR7/6)	青 (7.5YR7/6)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			10/36				スス		
68	83	SK430 2D-1A10	2D-1A10	1	古墳 土師器	鉢 E	E	9.8	2.5	4.8	石	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			26/36	36/36					
68	83	SK430 2D-1A10	2D-1A10	1	古墳 土師器	壺 C	C	10.5	-	11.5	石・長	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			34/36	36/36					
68	83	SK430 2D-1A10	2D-1A10	1	古墳 土師器	壺 C	C	9.3	1.0	10.3	石・長・赤・雲	にぶい青 (7.5YR7/4)	にぶい青 (7.5YR7/4)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			11/36	36/36				スス	
68	83	SK440 1D-10A5 1D-9A25	1D-10A5 1D-9A25	1 Vic	古墳 土師器	壺				6.5	石・赤・海	にぶい青 (7.5YR5/4)	にぶい青 (7.5YR7/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			36/36					工具痕	
68	84	SK440 1D-10A5	1D-10A5	1	古墳 土師器	甕 A2a	A2a	17.0			石・長	黒褐 (7.5YR3/2)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			14/36				炭化物	スス	
68	84	SK467 2D-1B7	2D-1B7	1	古墳 土師器	鉢 E	E	(13.1)			長・赤・角	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			1/36						
68	84	SK467 2D-1B7	2D-1B7	1	古墳 土師器	壺 K	K	-			石・長・赤	浅黄緑 (10YR7/3)	浅黄緑 (10YR8/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			-						
68	84	SK516 2D-2A10 2D-2A9	2D-2A10 2D-2A9	1 Vic	古墳 土師器	壺 L	L	-			石・長	灰黄 (2.5Y6/1)	灰黄 (2.5Y6/2)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			-					スス	
68	84	SK535 2D-2B3	2D-2B3	1	古墳 土師器	高杯 C	C	-			石・長	赤褐 (2.5YR6/3)	赤褐 (2.5YR4/6)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩			-						



図版 No.	写真 図版 No.	報告 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/6)	底径 遺存率 (3/6)	内面 附着	外面 附着	備考
68	84	156	SK535	2D-1B23	1	古墳 土師器	鉢	A1	13.6			チ・海	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	体：ハケム	体：ハラナデ		8/36		炭化物	スズ	
68	84	157	SK535	2D-2B3	1	古墳 土師器	壺	A2a	18.0	9.0		石・長・チ	にぶい黄緑 (10YR7/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	ハケム	ハラナデ、ハケム	種子庄痕	6/36				スズ	種子庄痕
68	84	158	SK535	2D-1B23	1	古墳 土師器	甕	A3	15.9			石	にぶい黄緑 (7.5YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/2)	ハケム	頭：ハケム 体：ハラナデ			6/36			スズ	
68	84	159	SK546	2D-2B8 2D-2B7・8	1 Vic2	古墳 土師器	甕	A3	15.9			石・雲	灰濁 (7.5YR4/2)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	体：ハケム	体：ハケム、ハラナデ			7/36			スズ	
69	84	160	SD91	2D-1B14	1	古墳 土師器	高杯	A	—			石・長	にぶい黄緑 (10YR6/3)	灰黄濁 (10YR4/2)	ハラミガキ	杯：ハラミガキ			—				
69	84	161	SD91	2D-1B13 2D-1B13 2D-1B18	1 Vic Via	古墳 土師器	壺	P	27.0			石	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	頭一体：ハケム	口へ頭：ハラミガキ 体：ハケム、ハラケズリ、ハラナデ			6/36			スズ	
69	84	162	SD234	1D-10E19・20	1	古墳 土師器	器台		—			石・長	にぶい黄緑 (7.5YR6/4)	にぶい黄緑 (7.5YR6/4)	ハラミガキ	脚：ハケム			—				
69	84	163	SD234	1D-10E14	1	古墳 土師器	鉢		4.1		4.1	石・チ・海	黄 (5YR6/6)	にぶい黄緑 (7.5YR6/6)	ハケム、ハラケズリ	ナデ	種子庄痕	36/36					底部有孔、種子庄痕
69	84	164	SD234	1D-10E19 1D-10E14	1 1	古墳 土師器	壺		9.3		9.3	石・長・チ・赤	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラケズリ後ハラミガキ	ハケム、指頭庄痕	種子庄痕	20/36					種子庄痕
69	84	165	SD234	1D-10E14	1	古墳 土師器	甕		4.7		4.7	石・長・チ・赤・角	黄 (5YR7/6)	にぶい黄緑 (7.5YR6/3)	ハラケズリ、ハケム	ハケム		36/36			炭化物	スズ	
69	84	166	SD234	1D-10E14	1	古墳 土師器	甕		2.9		2.9	石・角・海	黄濁 (7.5YR6/6)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ハラケズリ、ハケム	ハラナデ、ハケム	ハラケズリ	36/36				スズ	
69	84	167	SD234	1D-10E20	1	古墳 土師器	甕	A1	19.8			石・赤・角	にぶい黄緑 (7.5YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハケム				22/36			スズ	
69	84	168	SD234	1D-10E14 1D-10E14	1 VI	古墳 土師器	甕	A2a	19.8			石・長	明黄濁 (10YR7/6)	にぶい黄緑 (10YR7/6)	体：ハケム				20/36			スズ	
69	84	169	SD248	2D-1E7	1	古墳 土師器	高杯	D1a	(13.8)			石・長	黄 (5YR7/6)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ			1/36				
69	84	170	SD248	2D-1E2	1	古墳 土師器	器台		—			長・白	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラミガキ	脚：ハケム			—				
69	84	171	SD248	2D-1E2	1	古墳 土師器	鉢	D	2.8		2.8	石・長・チ・赤	浅黄濁 (10YR8/3)	浅黄濁 (10YR8/3)	ハラケズリ	指ナデ			36/36				底部有孔
69	84	172	SD248	1D-10E23	1	古墳 土師器	壺	F2	(17.6)			長・チ・角	黄濁 (2.5Y5/4)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	口：ハケム、指頭庄痕 体：ハケム	指頭庄痕 指頭庄痕、ハラナデ、ハラケズリ			3/36			スズ	
69	84	173	SD248	2D-1E2	1	古墳 土師器	壺	A3	5.5		5.5	石・チ	にぶい黄緑 (10YR6/4)	黄 (7.5YR6/6)	ハラケズリ、ハラミガキ	ハラケズリ、ハラミガキ			36/36				
69	84	174	SD248	1D-10E23	1	古墳 土師器	甕		—			石・赤	黄 (7.5YR7/6)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	ハケム、刺突	ハラケズリ、ハラナデ			—			スズ	
70	84	175	SD271	2D-1B10 2D-1B10 2D-1B20・25 2D-1C6	1 V Vic Vic	古墳 土師器	器台	A	—			長	赤 (10R5/8)	黄 (5YR6/6)	ハラミガキ、赤影	脚：ハラミガキ、赤影			—				受・脚：透かし孔
70	84	176	SD271	2D-1C12	1	古墳 土師器	鉢	A1	12.0			石・チ・赤	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	体：ハケム				7/36				
70	84	177	SD271	2D-1C12 2D-1C11	1 Via・Vic	古墳 土師器	壺	A1	9.9			長	赤 (10R5/8)	赤 (10R5/8)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、ハケム、口縁上半：赤影			4/36				
70	85	178	SD271	2D-1C18・12 2D-1C11・12	1 Vic	古墳 土師器	壺	J2	25.6			石・長・白	にぶい黄緑 (10YR3/7)	にぶい黄緑 (10YR3/7)	ハケム	口：ハケム			6/36				
70	85	179	SD271	2D-1C12 2D-1C12・17	1 Vic	古墳 土師器	甕	E4	16.2			石・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	体：ハケム	体：ハラケズリ			8/36				
70	85	180	SD275	2D-1C16 2C-1B10	1 Vic	古墳 土師器	高杯	C1	—			石・海	明濁 (7YR5/6)	にぶい濁 (7YR5/4)	ハラミガキ	ハラミガキ			—				
70	85	181	SD306	2D-1A13	1	古墳 土師器	器台	B1	—			長	赤 (10R4/8)	赤 (10R4/8)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影			—				
70	85	182	SD396	2D-1B24 2D-1B19	1 VI	古墳 土師器	壺	J2	(26.8)			石	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/3)	ハケム	ハラケズリ			2/36				
70	85	183	SD396	2D-1B24	1	古墳 土師器	甕	E1	(20.0)			石	浅黄濁 (10YR8/4)	にぶい黄緑 (10YR7/3)					2/36				
70	85	184	SD507	2D-2B5	1	古墳 土師器	壺	F1	14.0			石・白	黄 (7.5YR7/6)	黄 (5YR7/6)	ハラケズリ	ハラケズリ			8/36				
70	85	185	SD507	2D-2B5	1	古墳 土師器	甕	A2a	20.0			石・赤・海	浅黄濁 (10YR8/3)	浅黄濁 (10YR8/3)	体：ハケム	体：ハラナデ			4/36				
70	85	186	SD543	2C-216 2C-216	1 Vic2	古墳 土師器	器台	E	8.9			石	明赤濁 (2.5YR5/6)	明赤濁 (2.5YR5/6)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影			6/36				
70	85	187	SD543	2C-2114	1	古墳 土師器	鉢	B1	10.4	2.4	9.5	石	にぶい黄濁 (10YR5/4)	明黄濁 (10YR6/6)	ハラケズリ後ハラミガキ	ハラミガキ			2/36				
70	85	188	SD543	2C-212	1	古墳 土師器	壺	A	9.0			石	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ			5/36				

図版 No.	写真 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	外面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/36)	底径 遺存率 (3/36)	内面 付着	外面 付着	備考
70	85	SD543	2C-218・9	1	古墳 土師器	壺	A3	25.0	6.5		石	石・赤	黄 (7.5YR6/6) にぶい黄 (10YR5/3)	黄 (7.5YR6/6) にぶい黄 (7.5YR7/4)	ハケメ	ハケメ	ハケメ後ハラナデ、ハラナデ	7/36	33/36		スス	
70	103	SD543	2C-213	1	古墳 土師器	甕	A3				石・赤	黒 (10YR3/2)	黒 (10YR2/1)	ハケメ	ハケメ	ハラナデ		32/36				
70	104	PH244 PH246 IC-1016 IC-1016 IC-1016 IC-1013・4	IC-1013 IC-1013 IC-1016 IC-1016 IC-1016 IC-1013・4	2・1 2 1 1 1 VI	古墳 土師器	鉢	B3	8.8			石・赤	黄 (5YR6/8)	黄 (7.5YR7/6)	ハケメ後ハラミガキ	ハケメ	ハラミガキ	口：ハラミガキ 体：ハラミガキ	1/36				
71	104	PH389	2C-122	1	古墳 土師器	器台	E	9.9			長・雲	赤 (10R4/6)	赤 (10R4/8)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	体：ハラミガキ、赤影	6/36				
71	104	PH506	2C-214	1	古墳 土師器	高杯	C1	16.8	13.8	11.5	石・長・海	明赤黄 (2.5YR5/6)	明赤黄 (2.5YR5/6)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	体：ハラミガキ、赤影	17/36	8/36			透かし孔 (3孔)
71	104	PH514	2C-217	1	古墳 土師器	甕	E1	(13.8)			石・角・海	にぶい黄 (7.5YR6/4)	にぶい黄 (7.5YR7/4)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	体：ハラミガキ、赤影	2/36			スス	
71	104	PH525	2C-213	2	古墳 土師器	甕	A2a	18.8	7.0	(24.0)	石	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	7/36	36/36			
71	104	PH525	2C-213 2C-218	1 Vic1	古墳 土師器	甕	A2a	16.5	3.5	20.5	石・赤・海	黄 (5YR6/6)	黄 (5YR6/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	36/36	36/36	炭化物	スス	
71	104	PH538	2D-2A4 2D-2A3・4 2D-2A4 2A-2A9	1 V Vic1 Via	古墳 土師器	甕	A3	29.6	6.8	40.0	石・白	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR7/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	34/36	18/36	炭化物	スス	
72	104	SX233	1C-10110	1	古墳 土師器	高杯	C1	-			石・長	にぶい黄緑 (10YR7/2)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	体：ハラミガキ、赤影	-				
72	104	SX233	1C-10115	1	古墳 土師器	器台	C	7.2	12.4	8.7	石・長・赤・海	黄 (5YR6/6)	黄 (5YR7/6)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	体：ハラミガキ、赤影	3/36	2/36			透かし孔
72	104	SX233	1C-10120	1	古墳 土師器	鉢	A2	-			長・赤	にぶい黄 (2.5Y6/4)	にぶい黄 (2.5Y6/4)	横凹線、赤影	横凹線、赤影	横凹線、赤影	体：横凹線、赤影	-				
72	104	SX233	1C-10125	1	古墳 土師器	蓋			4.6		石・長・雲・赤	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	指頭庄痕	指頭庄痕	指頭庄痕	体：指頭庄痕		36/36			
72	104	SX233	1C-10120	1	古墳 土師器	壺	F1	9.5			石・長	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	30/36		スス	スス	
72	104	SX233	1C-10116	1	古墳 土師器	壺	K	14.8			石・白	黄 (5YR7/6)	黄 (7.5YR7/4)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	3/36				
72	104	SX233	1C-10116	1	古墳 土師器	壺	H	-			石・長・焼・白	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/3)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	-				
72	104	SX233	1C-10120	1	古墳 土師器	壺	K	16.4			石	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/4)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	5/36				
72	104	SX233	1C-10120・15	1	古墳 土師器	壺	K	17.3			石	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	17/36				
72	104	SX233	1C-10116	1	古墳 土師器	壺	K	23.0			石・長・白	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	1/36			スス	
72	104	SX233	1C-10119	1	古墳 土師器	壺	J2	21.8			石・長	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	5/36				
72	104	SX233	1C-10116	1	古墳 土師器	壺	K	16.6			石・赤	浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	14/36		スス		
72	104	SX233	1C-1014 1C-1019・15	1 Vic	古墳 土師器	壺	K	18.9			石・長・白・海	黄 (5YR6/8)	黄 (5YR6/6)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	7/36				
72	104	SX233	1C-10119・14	1	古墳 土師器	壺	K	16.0			石	にぶい黄緑 (10YR7/2)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラミガキ、沈線	ハラミガキ、沈線	ハラミガキ、沈線	体：ハラミガキ、沈線	2/36				
72	104	SX233	1C-10116 1C-10120	1 1	古墳 土師器	壺	J2	17.2			石・海	黄緑 (7.5YR7/8)	黄緑 (7.5YR7/8)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	1/36				
72	85	SX233	1C-10120	1	古墳 土師器	壺	K	21.0			石・長・白	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	8/36				
73	87・96	SX233	1C-10120・14・15・19 1C-10115・16 1C-1013・17	1 1 Via	古墳 土師器	壺	K	21.6			石・長・赤	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ、赤影	体：ハラミガキ、赤影	13/36		口～頸：スス		縁割土器 カゴメ痕
73	87	SX233	1C-10120	1	古墳 土師器	壺			7.8		石・長・白	黒 (10YR1.7/1)	黒 (10YR1.7/1)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ		24/36		スス	
73	87	SX233	1C-10111・16 IC-10120 59T	1 Vic IB・Xla・Xlb	古墳 土師器	壺		-			石・白	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	体：ハラミガキ	-				縁割土器

図版 No.	写真 図版 No.	報告 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/36)	底径 遺存率 (3/36)	外面 付着	内面 付着	備考
73	87	218	SX233	IC-10120 IC-10115	1 Vic	古墳 土師器	壺	壺		8.2			石・長	灰白 (N5/0) 10YR7/4	灰白 (N5/0)	ハケメ	ヘラナデ, ハケメ		19/36		スス		
74	87	219	SX233	IC-10316	1	古墳 土師器	壺	壺		7.4			石・長・白	10YR7/1 7.5YR7/1	10YR6/3	ヘラミガキ			36/36		スス		
74	87	220	SX233	IC-10119	1	古墳 土師器	壺	壺		7.5			石・長・白	10YR7/2	10YR7/2	ヘラミガキ			36/36		スス		
74	87	221	SX233	IC-10120・15	1	古墳 土師器	壺	壺		8.3			石・チ・海	7.5YR5/6	7.5YR4/4	ヘラミガキ, ヘラナデ	ヘラミガキ, ヘラナデ		36/36		スス		炭化物
74	87	222	SX233	IC-10120	1	古墳 土師器	甕 A1	甕 A1	15.8				石・海	10YR6/4	10YR6/3	ハケメ	体:ヘラナデ		8/36				
74	87	223	SX233	IC-10115・20	1	古墳 土師器	甕 A1	甕 A1	16.8				石・長・海	10YR6/3	10YR4/2	ハケメ	ハケメ, ヘラナデ		9/36				
74	87	224	SX233	IC-10316	1	古墳 土師器	甕 A2a	甕 A2a	17.0				石・チ	2.5YR6/6	5YR6/6	体:ハケメ	頸:ハケメ 体:ヘラナデ		11/36				
74	87	225	SX233	IC-10120	1	古墳 土師器	甕 A1	甕 A1	17.0				石・チ・海	2.5YR6/6	5YR6/6	ハケメ	口:ハケメ 体:ヘラナデ, ハケメ		5/36				
74	87	226	SX233	IC-10111	1	古墳 土師器	甕 A2a	甕 A2a	17.0				石・長・赤・角	10YR7/3	10YR7/3	体:ハケメ	ハケメ		11/36		スス		
74	87	227	SX233	IC-1021・16	1	古墳 土師器	甕 A1	甕 A1	17.9				石・海	10YR7/3	10YR7/3	ハケメ	口:ハケメ		5/36				
74	88	228	SX233	IC-10120・15	1	古墳 土師器	甕 A3	甕 A3	17.1				長・雲	10YR7/4	10YR6/3	ハケメ	ハケメ		9/36				スス
74	88	229	SX233	IC-10316	1	古墳 土師器	甕 A1	甕 A1	17.3				石・海	10YR5/4	10YR6/3	ハケメ	体:ハケメ		1/36				
74	88	230	SX233	IC-10316	1	古墳 土師器	甕 A2a	甕 A2a	22.0				石・チ	2.5YR6/6	5YR7/4	体:ハケメ	頸:ハケメ 体:ヘラナデ		4/36				
74	88	231	SX233	IC-10110	1	古墳 土師器	甕 A1	甕 A1	19.9				石・海	10YR7/4	10YR6/4	ハケメ	体:ハケメ		2/36				
75	88	232	SX233	IC-10115・20	1	古墳 土師器	甕 A2a	甕 A2a	27.1				石・長・海	7.5YR6/4	7.5YR6/3	頸:ハケメ	ヘラミガキ		4/36				
75	88	233	SX233	IC-10120	1	古墳 土師器	甕 A3	甕 A3	25.0				石・チ・海	10YR7/2	10YR7/2	ハケメ	口:ヘラミガキ		11/36		スス		
75	88	234	SX233	IC-10316	1	古墳 土師器	ミナモトノ器	ミナモトノ器	3.3	4.4			石・長・白	7.5YR6/4	7.5YR4/1	ハケメ	口:ヘラミガキ		36/36				穿孔 (2孔)
75	88	235	SX239	1D-10D10・5	1	古墳 土師器	甕 B	甕 B	20.2				石・長	10YR7/4	10YR7/4	体:ハケメ	体:ハケメ		24/36		スス		
75	88	236	SX637	2D-2D5	2	古墳 土師器	器台 B1	器台 B1	8.3				長・チ・海	明赤濁 5YR5/6	明赤濁 5YR5/6	ヘラミガキ, 赤影	変:ヘラミガキ, 赤影 脚:ハケメ		19/36				
75	88	237	SX637	2D-2D5	2	古墳 土師器	鉢 A1	鉢 A1	10.2	3.0	7.3		石・長	浅黄濁 10YR8/3	灰白 (10YR8/2)	体:ヘラミガキ			8/36		36/36		
75	88	238	SX637	2D-1D24 2D-2D3	1	古墳 土師器	鉢	鉢		1.2			石・長	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	ハケメ	ヘラナデ				36/36		
75	88	239	SX637	2D-1D25 2D-2D5	1	古墳 土師器	壺	壺		6.2			石・チ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	ハケメ	ハケメ				36/36		
75	88	240	SX637	2D-2D5	1	古墳 土師器	甕 A2a	甕 A2a	16.5				石・赤	7.5YR6/6	7.5YR6/6	ハケメ	ハケメ		5/36				
75	88	241	SX637	2D-2D5	2・1 Via	古墳 土師器	甕 A2a	甕 A2a	18.9				石・長・チ	10YR3/1	10YR6/3	体:ハケメ	口:ハケメ 体:ヘラナデ		9/36				炭化物
75	88	242	SX637	2C-2J8	Vic1	古墳 土師器	高杯 D1a	高杯 D1a	10.5				石	10YR6/4	10YR6/3	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ, 赤影		8/36				
75	88	243	SX637	2C-1117・16	Vib	古墳 土師器	高杯 D2	高杯 D2	12.0				石・海	10YR6/3	10YR7/3	ヘラミガキ	ヘラミガキ		13/36				
75	88	244	SX637	1D-10C21	Vic	古墳 土師器	高杯 D2	高杯 D2	13.8				石・長・雲・海	10R4/8	10R4/8	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ, 赤影		5/36				
75	88	245	SX637	2D-2D5	Vic1	古墳 土師器	高杯 D2	高杯 D2	13.4				石・長	10R5/8	10YR7/3	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ		1/36				
75	88	246	SX637	2C-2J9	Vic1	古墳 土師器	高杯 D1a	高杯 D1a	12.7				石・長・海	10R4/6	10R4/6	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ, 赤影		36/36				
75	88	247	SX637	2D-1C7・12	Vic	古墳 土師器	高杯 D1a	高杯 D1a	13.0				石・長・海	10R4/8	10YR7/4	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ, 赤影		12/36				
75	88	248	SX637	2C-1J17	Via	古墳 土師器	高杯 D1b	高杯 D1b	—				石・長	明赤濁 5YR5/6	明赤濁 5YR5/6	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ, 赤影		—				
75	88	249	SX637	2C-1H19	Vic	古墳 土師器	高杯 D1b	高杯 D1b	—				石・長・白	10R5/8	10R5/8	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ, 赤影		—				
75	88	250	SX637	1C-10I3	Vic・V	古墳 土師器	高杯 B	高杯 B	13.7				石・長・チ	5YR6/6	2.5YR5/6	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ, 赤影		1/36				
75	88	251	SX637	1C-10I16	VI	古墳 土師器	高杯 B	高杯 B	15.0				石・長・チ	10R5/6	10R6/6	ヘラミガキ, 赤影	ヘラミガキ, 赤影		2/36				

図版 No.	写真 図版 No.	報告 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/36)	底径 遺存率 (3/36)	外面 付着	内面 付着	備考
75	88	252		1D-10C13	Vic	古墳	土師器	高杯	B	-			長・雲	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
75	88	253		2C-119	Vic	古墳	土師器	高杯	C1	-			石・長・赤・海	縹 (7.5YR7/6)	縹 (2.5YR6/8)	ハラミガキ	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
75	88	254		2D-2E1	V・Vic	古墳	土師器	高杯	C1	-			石・長	にぶい黄褐色 (7.5YR7/3)	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	赤彩	赤彩	赤彩		-				
75	88	255		2D-1C12	Vic	古墳	土師器	高杯	B	-			石・長	赤 (10R5/6)	赤 (10R5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
76	88	256		1D-9B16	VI・VII	古墳	土師器	高杯	A	-			石・海	にぶい黄褐色 (2.5YR6/4)	にぶい黄褐色 (2.5YR6/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
76	88	257		2C-211	Vic	古墳	土師器	高杯	D1a	13.0			石	明赤褐 (2.5YR5/6)	灰褐 (7.5YR6/2)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ	ハラミガキ		2/36				
76	88	258		2D-1E6	VI	古墳	土師器	高杯	D1a	-			石・長・赤・角	赤 (10R8/6)	灰白 (10YR7/1)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
76	88	259		1D-9E20	VI	古墳	土師器	高杯	D2	12.0			石・長	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (10YR7/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ	ハラミガキ		6/36				
76	88	260		1D-10D23・21	Vic	古墳	土師器	高杯	A	-			石・長	にぶい黄褐色 (5YR5/6)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
76	88	261		1C-10E23	Via	古墳	土師器	高杯	A	19.9			石・長	明赤褐 (2.5YR5/6)	赤 (10R5/6)	ハラミガキ	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ		1/36				
76	88	262		2D-1C6 2D-1C12	Vic Vic	古墳	土師器	高杯	C2	17.0			石・長	にぶい黄褐色 (5YR7/3)	赤 (2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		3/36				
76	88	263		2D-1B23	Vic	古墳	土師器	高杯	C1	17.7	11.9	12.3	石・海	にぶい黄褐色 (5YR7/3)	にぶい黄褐色 (5YR7/3)	ハラミガキ, 指頭正痕	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		5/36	4/36			
76	88	264		2C-1J21 2C-1J17・22	Via V	古墳	土師器	高杯	C1	21.0			石・長・海	赤 (10R5/6)	にぶい黄褐色 (5YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		1/36				
76	88	265		2C-219	Vic1	古墳	土師器	高杯	C	18.6			石・海	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		7/36				
76	89	266		2D-1C12・7 2D-1C11・17	Vic Vic	古墳	土師器	高杯	C1	-			石・長・赤	赤 (10R5/6)	赤 (10R5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
76	89	267		2D-1C17	V	古墳	土師器	高杯	C1	-			石・長	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	赤 (10R4/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
76	89	268		2D-1B5	Vic	古墳	土師器	高杯	D1a	-			石・長	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	黒褐 (10YR3/1)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ		-				
76	89	269		1C-10J7	V	古墳	土師器	高杯	D1a	-			石・長	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ		-				
76	89	270		2D-1D4	Vic	古墳	土師器	高杯		-			石・長・雲	灰 (5Y4/1)	浅黄 (2.5Y7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ		-				透かし孔
76	89	271		2C-1J17	V	古墳	土師器	高杯		12.8			石・海	縹 (5YR6/6)	縹 (5YR6/6)	ハケメ	ハケメ	ハケメ		3/36				
76	89	272		1D-10A20 1D-10B23	V Vic	古墳	土師器	高杯		-			石・海	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ		-				
76	89	273		2D-2A8	Vic1	古墳	土師器	高杯		-			石・長・白・海	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
76	89	274		2D-1B18・12	Vic	古墳	土師器	高杯	F	8.7			石・白・海	灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ		27/36				
76	89	275		1D-10A2	Vic	古墳	土師器	高杯		13.0			石・長・海	赤 (10R5/8)	縹 (5YR6/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		28/36				透かし孔 (4孔)
76	89	276		2D-1B9	Vic	古墳	土師器	高杯		14.3			長・赤	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		32/36				
76	89	277		1D-10T7・8	VI	古墳	土師器	高杯	E	9.8			石・白	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	脚：ハケメ	脚：指頭正痕	脚：指頭正痕		2/36				
76	89	278		2D-1B9 2D-2C1	Vic Vic1	古墳	土師器	器台	E	10.0	12.4	9.2	石・長・赤・海	赤 (10R5/8)	明黄褐 (10YR7/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		25/36	22/36			透かし孔 (3孔)
76	89	279		1D-10A22	Vic	古墳	土師器	器台	E	10.0			石・長	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		13/36				
76	89	280		2D-1C3	Vic	古墳	土師器	器台	E	10.0			石・長	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		7/36				
76	89	281		2D-2D3	Via	古墳	土師器	器台	E	9.8			石・長・白	にぶい赤褐 (2.5YR5/8)	にぶい赤褐 (2.5YR5/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		5/36				
76	89	282		2D-2E8	Vic2	古墳	土師器	器台	E	11.4			長・赤・白・海	縹 (7.5YR4/3)	縹 (7.5YR4/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		4/36				
76	89	283		1D-10A2	Vic	古墳	土師器	器台	D	8.1	12.0	8.1	石・赤	縹 (5YR6/6)	縹 (7.5YR7/6)	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ		36/36	17/36			透かし孔
77	89	284		2C-2J9	Via	古墳	土師器	器台	C	8.8			石・海	縹 (5YR6/6)	縹 (7.5YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		5/36				
77	89	285		2C-1C11 2D-1C12・17	VI	古墳	土師器	器台	C	9.1			石・長	赤 (7.5R4/6)	赤 (7.5R4/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		11/36				

図版 No.	写真 図版 No.	報告 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/6)	底径 遺存率 (3/6)	内面 付着	外面 付着	備考
77 89	286	287	1D-10B14	Vic	古墳 土師器	器台	C	10.1		石・長			赤褐色 (10R4/4)	赤褐色 (10R4/4)	赤褐色 (10R4/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		11/36				
77 89	287	288	2C-143・4	Via	古墳 土師器	器台	C	11.0		石・長・海			赤褐色 (10R4/4)	赤褐色 (10R4/4)	赤褐色 (10R4/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		4/36				
77 89	288	289	1C-1011.2	Vib	古墳 土師器	器台	C	11.9		石・白			黒褐色 (10YR3/1)	黒褐色 (10YR3/1)	黒褐色 (10YR3/1)	ハラミガキ	ハラミガキ		9/36				
77 89	289	290	2D-1B19 2D-1B22	Vic Via	古墳 土師器	器台	D	13.0		石・長			赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (10YR7/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		12/36				
77 89	290	291	2C-2J13	Vic1	古墳 土師器	器台	B1	9.9		石・赤・海			赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (10YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		4/36				
77 89	291	292	2D-1C6	Vic	古墳 土師器	器台	B1	9.8		石・赤			赤褐色 (10YR5/6)	赤褐色 (10YR5/6)	赤褐色 (10YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		9/36				
77 89	292	293	2D-1C2	Vic	古墳 土師器	器台	D	11.0		石・赤			赤褐色 (5YR6/6)	赤褐色 (5YR6/6)	赤褐色 (5YR6/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		6/36				透かし孔
77 89	293	294	1D-10B3	Vic	古墳 土師器	器台	D	10.0		長・赤			赤褐色 (10YR5/6)	赤褐色 (10YR5/6)	赤褐色 (10YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		8/36				透かし孔
77 89	294	295	1D-10F16	Vi	古墳 土師器	器台	E	10.3		石・赤・白			赤褐色 (5YR7/6)	赤褐色 (5YR7/6)	赤褐色 (5YR7/6)	ハラミガキ	ハラミガキ		24/36				
77 89	295	296	2D-2B4	Via Vic1	古墳 土師器	器台	B1	11.3		石・雲			赤褐色 (2.5YR5/6)	赤褐色 (2.5YR5/6)	赤褐色 (2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		5/36				
77 89	296	297	2C-1J9	Via	古墳 土師器	器台	D	10.4		石・長・雲			赤褐色 (10YR7/3)	赤褐色 (10YR7/3)	赤褐色 (10YR7/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		3/36				
77 89	297	298	1D-9A25	Vic	古墳 土師器	器台	B1	14.0		石			赤褐色 (2.5YR5/6)	赤褐色 (2.5YR5/6)	赤褐色 (2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		1/36				
77 89	298	299	2D-1A16・18・24 2D-1A21	Vic Via	古墳 土師器	器台	B1	10.4		石・長			赤褐色 (10YR8/3)	赤褐色 (10YR8/3)	赤褐色 (10YR8/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		13/36				
77 89	299	300	2D-2A4・9	Via	古墳 土師器	器台	B1	11.5		長・赤・白			赤褐色 (2.5YR6/8)	赤褐色 (2.5YR6/8)	赤褐色 (2.5YR6/8)	ハラミガキ	ハラミガキ		23/36				
77 89	300	301	2C-1H16	Vib	古墳 土師器	器台	G	-		石・長・白			赤褐色 (10YR5/2)	赤褐色 (10YR5/2)	赤褐色 (10YR5/2)	ハラミガキ	ハラミガキ		-				
77 89	301	302	1D-10D10	Vi	古墳 土師器	器台	B2	-		石・赤			赤褐色 (7.5YR7/4)	赤褐色 (7.5YR7/4)	赤褐色 (7.5YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				
77 89	302	303	2D-1A14 2D-1B20	Vic Vic	古墳 土師器	器台	A	(21.2)		石・長・雲・白			赤褐色 (2.5YR8/3)	赤褐色 (2.5YR8/3)	赤褐色 (2.5YR8/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		2/36				透かし孔
77 89	303	304	2D-1B9	Vic	古墳 土師器	器台	A	18.6		石・長・白			赤褐色 (2.5YR4/6)	赤褐色 (2.5YR4/6)	赤褐色 (2.5YR4/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		36/36				透かし孔 (4孔)
77 89	304	305	2D-2A2 2D-2A3	Via Vic1	古墳 土師器	器台	A	17.0		石・赤・白・海			赤褐色 (2.5YR6/6)	赤褐色 (2.5YR6/6)	赤褐色 (2.5YR6/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		4/36				透かし孔
77 89	305	306	2C-1J20 2C-1J19 2C-1115	Via Via Via	古墳 土師器	器台	A	-		石			赤褐色 (10YR8/2)	赤褐色 (10YR8/2)	赤褐色 (10YR8/2)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				透かし孔
77 89	306	307	2D-1C17	V	古墳 土師器	器台	A	21.3		石・長			赤褐色 (2.5YR6/6)	赤褐色 (2.5YR6/6)	赤褐色 (2.5YR6/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		3/36				透かし孔
77 89	307	308	2D-1C17	V	古墳 土師器	器台	A	-		石・白			赤褐色 (10R4/8)	赤褐色 (10R4/8)	赤褐色 (10R4/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				透かし孔
77 89	308	309	2D-2A4	Via	古墳 土師器	器台	A	-		石・長			赤褐色 (10YR8/2)	赤褐色 (10YR8/2)	赤褐色 (10YR8/2)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				透かし孔
77 89	309	310	1D-10B19	Vic	古墳 土師器	器台	A	-		石・長			赤褐色 (2.5Y7/3)	赤褐色 (2.5Y7/3)	赤褐色 (2.5Y7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ		-				透かし孔
77 89	310	311	1D-10B11	Vic	古墳 土師器	器台		10.4		石・長			赤褐色 (10R5/8)	赤褐色 (10R5/8)	赤褐色 (10R5/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		1/36				
77 89	311	312	1D-10E8	Vi	古墳 土師器	器台		-		石・長・赤・白			赤褐色 (2.5YR7/3)	赤褐色 (2.5YR7/3)	赤褐色 (2.5YR7/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				透かし孔
77 89	312	313	1D-9D22・17 1D-9D22	Vic Via	古墳 土師器	器台		-		石・長			赤褐色 (2.5YR7/3)	赤褐色 (2.5YR7/3)	赤褐色 (2.5YR7/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				透かし孔
77 89	313	314	2C-2A8・9	Vic1	古墳 土師器	器台		12.8		石・長・白			赤褐色 (10YR7/2)	赤褐色 (10YR7/2)	赤褐色 (10YR7/2)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		34/36				透かし孔 (4孔)
77 89	314	315	2C-1I7	Vic	古墳 土師器	器台		12.3		石・白			赤褐色 (10YR8/2)	赤褐色 (10YR8/2)	赤褐色 (10YR8/2)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		12/36				透かし孔 (3孔)
77 89	315	316	2D-1C17	Vic	古墳 土師器	器台		-		石・長・角			赤褐色 (10R5/8)	赤褐色 (10R5/8)	赤褐色 (10R5/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				透かし孔
77 89	316	317	2D-2A8	Vic1	古墳 土師器	器台		-		石			赤褐色 (10YR8/4)	赤褐色 (10YR8/4)	赤褐色 (10YR8/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		-				透かし孔 (3孔)
77 89	317	318	2D-2A5 2D-1C6	Via Via	古墳 土師器	器台		13.0		石・長・赤			赤褐色 (10YR7/1)	赤褐色 (10YR7/1)	赤褐色 (10YR7/1)	ハラミガキ	ハラミガキ		26/36				透かし孔
78 89	318	319	2D-1B5・10 2D-2B7	Vic Via	古墳 土師器	器台		11.4		石・長・海			赤褐色 (10R4/8)	赤褐色 (10R4/8)	赤褐色 (10R4/8)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		24/36				透かし孔
78 90	319	320	2D-2B7	Vic2	古墳 土師器	器台		11.9		石・長			赤褐色 (7.5YR5/8)	赤褐色 (7.5YR5/8)	赤褐色 (7.5YR5/8)	ハラミガキ	ハラミガキ		7/36				透かし孔
78 90	320	321	2D-2D3	Via	古墳 土師器	器台		13.2		石・海			赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (10YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		16/36				透かし孔 (4孔)
78 90	321	322	2D-2A8	Via	古墳 土師器	器台		-		石・海			赤褐色 (10YR6/3)	赤褐色 (10YR6/3)	赤褐色 (10YR6/3)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		-				透かし孔

別 表

図版 No.	写真 図版 No.	報告 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 通存率 (3/36)	底径 通存率 (3/36)	外面 付着	内面 付着	備考
78 90 322		78 90 322		2D-1C12・17	Vic	古墳 土師器	鉢	A1	11.8				石・長・海	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ハラミガキ, 赤彩	口：ハラミガキ, 赤彩 体：指ナデ		9/36				
78 90 323		78 90 323		2D-1A12・18	Vic	古墳 土師器	鉢	F	9.9				石・長・白	浅黄緑 (7.5YR8/3)	浅黄緑 (7.5YR8/3)	ハラミガキ	口：ハラミガキ		5/36				
78 90 324		78 90 324		2D-1B9	Vic	古墳 土師器	鉢	A1	13.4				石・長・赤・雲	明褐色 (7.5YR7/2)	明褐色 (7.5YR7/2)	ハラミガキ, 赤彩	口：ハラミガキ, 赤彩 頭：ハラミガキ 体：ハラナデ		6/36				
78 90 325		78 90 325		2D-2B2	Vic2	古墳 土師器	鉢	A1	15.0				石・長・海	にぶい黄緑 (10YR6/2)	にぶい黄緑 (10YR6/2)	体：ハラナデ	口：ハラミガキ, 赤彩		5/36				
78 90 326		78 90 326		2D-2D3	Via	古墳 土師器	鉢	A1	11.0				石・赤・白	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	ハラミガキ, 赤彩	口：ハラミガキ, 赤彩		1/36				
78 90 327		78 90 327		2D-1C3	Vic	古墳 土師器	鉢	A1	12.0				石・海	にぶい黄 (7.5YR5/3)	にぶい黄 (7.5YR5/3)	ハラミガキ, 赤彩	口：ハラミガキ, 赤彩 頭：ハラケム		3/36				
78 90 328		78 90 328		2D-1B14	Vic	古墳 土師器	鉢	A1	11.1				石・赤	黒褐 (5YR3/1)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		12/36				
78 90 329		78 90 329		2D-1C3	Vic	古墳 土師器	鉢	A1	9.9				石・雲・海	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ 口：赤彩		1/36				
78 90 330		78 90 330		2D-1C3	Vic	古墳 土師器	鉢	F	12.0				石・長・白	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩		3/36				
78 90 331		78 90 331		2C-2J1	Vic2	古墳 土師器	鉢	A1	11.8				石・長	明褐色 (7.5YR7/2)	明褐色 (7.5YR7/2)	ハラミガキ	ハラミガキ		1/36				
78 90 332		78 90 332		2D-1B17	Vic	古墳 土師器	鉢	B2	14.0				石・長・赤	浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/3)	体：ハラナデ	体：ハラナデ		4/36				
78 90 333		78 90 333		2D-1D24	V	古墳 土師器	鉢	B2	12.0				石・白	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)		体：ハラナデ		3/36				
78 90 334		78 90 334		2D-1A3	Via	古墳 土師器	鉢	B3	11.3				石・長・赤	浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/3)	ハラミガキ 口：刻み目	口：ハラミガキ		3/36				
78 90 335		78 90 335		2D-1B11	V	古墳 土師器	鉢	B1	13.0				石・雲・赤・海	にぶい黄 (7.5YR6/4)	にぶい黄 (7.5YR6/4)	ハラケム	口：指頭丘痕 体：ハラケム		9/36				
78 90 336		78 90 336		2D-1D5	Vic・VI	古墳 土師器	鉢	B1	9.1	1.8	6.0		石・長	浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/3)	ハラケム	指ナデ		15/36	36/36			
78 90 337		78 90 337		2D-1B10	Vic	古墳 土師器	鉢	B1	9.0				石・長・赤・海	黄 (7.5YR7/6)	黄 (7.5YR7/6)	ハラミガキ	ハラミガキ		9/36				
78 90 338		78 90 338		1D-10A12	Via	古墳 土師器	鉢	B1	10.0				石・赤	にぶい黄 (7.5YR7/4)	にぶい黄 (7.5YR7/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		4/36				
78 90 339		78 90 339		2C-1J12	Via	古墳 土師器	鉢	B1	14.0				石・長・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	体：ハラケム	体：ハラケム		3/36				
78 90 340		78 90 340		2D-1F3	VI	古墳 土師器	鉢	B1	11.4				石・赤	淡黄 (2.5YR8/3)	淡黄 (2.5YR8/3)		口：指頭丘痕 体：ハラケム		1/36				
78 90 341		78 90 341		2D-1C13	Via	古墳 土師器	鉢	B2	15.8				石	褐色 (5YR4/1)	褐色 (5YR4/1)	ハラケム	口：指頭丘痕 体：ハラケム		1/36				
78 90 342		78 90 342		2C-1J9	Via	古墳 土師器	鉢	E	12.0	5.0	7.5		石・長・海	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハラナデ	ハラナデ		6/36	26/36			
78 90 343		78 90 343		2C-2A6	Vic1	古墳 土師器	鉢	E	8.9				石・長	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ		3/36				
78 90 344		78 90 344		2D-1B3	Via	古墳 土師器	鉢	E	9.9				石・赤・海	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		5/36				
78 90 345		78 90 345		2D-1C18	Vic	古墳 土師器	鉢	A1	11.0	4.0	5.8		長	浅黄緑 (7.5YR8/3)	浅黄緑 (7.5YR8/3)	ハラケム後ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩 ハラケム後ハラミガキ, 赤彩		1/36	23/36			
78 90 346		78 90 346		1D-10A6	Via	古墳 土師器	鉢	A1	11.0				石・赤	にぶい黄 (7.5YR7/4)	にぶい黄 (7.5YR7/4)	ハラミガキ	体：ハラミガキ		5/36				
79 90 347		79 90 347		2D-1A4 2D-1A2	Via 排土	古墳 土師器	鉢	A1	12.5				石・長・赤・海	にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ハラミガキ	口：ハラケム後ハラミガキ 体：ハラミガキ		5/36				
79 90 348		79 90 348		2C-1I20	Via	古墳 土師器	鉢	A1	13.0				石・長・白	浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/3)	体：ハラケム	体：ハラケム		2/36				
79 90 349		79 90 349		2C-1H15	Via	古墳 土師器	鉢	A1	12.0				石・長・白	褐色 (10YR4/1)	褐色 (10YR4/1)	体：ハラケム	口：ハラケム 体：ハラナデ		3/36				
79 90 350		79 90 350		1D-10C21	Vic	古墳 土師器	鉢	B3	9.5				石・長	黄褐 (10YR5/6)	黄褐 (10YR5/6)	体：ハラケム	体：ハラナデ		3/36				
79 90 351		79 90 351		1D-10B7	Vic	古墳 土師器	鉢	B3	10.0				石・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ		3/36				
79 90 352		79 90 352		2D-1C13	Via	古墳 土師器	鉢	A1	11.0				石	にぶい黄 (7.5YR7/4)	にぶい黄 (7.5YR7/4)	体：ハラケム	体：ハラケム		3/36				
79 90 353		79 90 353		2C-1J22	Vic	古墳 土師器	鉢	B3	10.0				赤	浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/3)	ハラミガキ	体：ハラミガキ		3/36				
79 90 354		79 90 354		2D-2C2・3	Vic2	古墳 土師器	鉢	F	11.0				石・雲・赤	にぶい黄 (7.5YR7/3)	にぶい黄 (7.5YR7/3)	ハラミガキ 口：ハラミガキ 体：ハラケム後ハラミガキ	ハラミガキ ハラミガキ ハラミガキ		4/36				
79 90 355		79 90 355		2D-2D4	Vic2	古墳 土師器	鉢	F	12.0				赤・白	黄 (5YR6/6)	黄 (5YR6/6)	ハラミガキ	ハラミガキ		3/36				

図版 No.	写真 図版 No.	報告 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/36)	底径 遺存率 (3/36)	外面 付着	内面 付着	備考
79 90	356			2C-1J14・15・20 2C-1J14・15	Via Vic	古墳 土師器	鉢	C	14.2	2.6	14.0	石・チ	にぶい黄緑 (2.5YR6/4)	にぶい黄緑 (2.5YR6/4)	ハラミガキ, 赤彩	口：赤彩			5/36	36/36			
79 90	357			2C-2I13・14 2C-2I9	Vic1 Vic2	古墳 土師器	鉢	A2	—			石・長・チ・白・海	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	口：黄緑, ハラミガキ	ハラミガキ			—				スズ
79 90	358			2D-1B19	Vic	古墳 土師器	鉢	A2	12.0			石・長	灰黄緑 (7.5YR5/4)	灰黄緑 (7.5YR5/4)	口：黄緑, ハラミガキ	体：ハラミガキ			8/36				
79 90	359			2D-1C3	Vic	古墳 土師器	鉢	A1	10.0			石・長・海	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハラミガキ, 刻み目	ハラミガキ			3/36				
79 90	360			1C-104	Vic	古墳 土師器	鉢	A1	10.0			石・長・チ・赤	赤褐 (5YR4/6)	赤褐 (5YR4/6)	体：ハケメ	体：ハラミガキ			3/36				
79 90	361			2D-2C3	Vic2	古墳 土師器	鉢	B2	10.0			石・長・チ	黄 (7.5YR6/6)	黄 (7.5YR6/6)	体：ハケメ, ハラケズリ	口：ハラミガキ			2/36				
79 90	362			2D-2C1	Vic2	古墳 土師器	鉢			3.2		石・長	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	ハラミガキ	ハラナデ			36/36				
79 90	363			2D-1D25	Vic2	古墳 土師器	鉢	E	16.0			石・長・白・海	黄 (5YR6/6)	黄 (5YR6/6)	指頭圧痕, ハケメ	ハラナデ			2/36				
79 90	364			2C-2J4	Via	古墳 土師器	鉢	E	21.0			石・長・白	黄 (7.5YR6/6)	黄 (7.5YR6/6)	ハラミガキ	ハラミガキ			1/36				
79 90	365			1D-9B17	Via	古墳 土師器	鉢	E	19.2	5.5	8.0	石・雲	赤 (10YR5/6)	赤褐 (10YR4/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩			3/36	18/36			
79 90	366			2C-1J6	Via	古墳 土師器	鉢	E	20.0			石・長・角	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハケメ	ハケメ			4/36				
79 90	367			2D-1A11	Vic	古墳 土師器	鉢	F	16.0			石・雲	にぶい黄緑 (7.5YR6/3)	にぶい黄緑 (7.5YR6/3)	ハラミガキ	ハラミガキ			2/36				
79 90	368			2C-2I12	Via	古墳 土師器	鉢	E	16.4			石・長・白	黄 (5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	ハケメ	ハラメ後ハラミガキ, ハラナデ			16/36				
79 90	369			1D-10A2	Vic	古墳 土師器	鉢	E	15.0			石	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハケメ	指ナデ			3/36				
79 90	370			2C-1I11	Vib	古墳 土師器	鉢	E	18.0			石・長・海	黒 (7.5YR2/1)	黒 (7.5YR2/1)	ハラミガキ	ハラミガキ			9/36				
79 90	371			2C-2J7	Vic1	古墳 土師器	鉢	H	14.0	6.0	13.0	石・白・角	黄 (5YR6/6)	黄 (5YR6/6)	ハラメ後ハラミガキ	ハラメ			36/36	36/36			片口土器
80 91	372			1C-10H19	Vib Vic	古墳 土師器	鉢	G2	35.0			石・チ・白・海	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	口：ハケメ	口：ハラミガキ			5/36				
80 91	373			2D-1B9	Vic	古墳 土師器	鉢	C2	—			石・長・白・赤	浅黄緑 (7.5YR8/4)	にぶい黄緑 (7.5YR8/4)	ハケメ	ハラメ後ハラミガキ, ハラナデ			—				
80 91	374			2D-1A19	Via	古墳 土師器	鉢	I	10.2			石・雲・白・海	にぶい黄緑 (7.5YR7/3)	にぶい黄緑 (7.5YR7/3)	指ナデ	ハケメ			—	13/36			
80 91	375			2D-2A8	Vic1 Via	古墳 土師器	鉢	I	10.0			石・チ・海	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	体：ハケメ	体：ハラメ後ハラミガキ			—	28/36			
80 91	376			1C-10I14	VI	古墳 土師器	鉢	G2	—			石・チ	黄 (7.5YR7/6)	黄 (7.5YR7/6)	ハラメ	ハラメ			—				
80 91	377			1D-9E16	VI	古墳 土師器	鉢		4.1			雲・チ・赤	浅黄緑 (7.5YR8/6)	浅黄緑 (7.5YR8/6)	ハラミガキ	ハラミガキ			—	12/36			
80 91	378			1D-10A8・2	Vic	古墳 土師器	鉢		7.0			石・雲・角	にぶい黄緑 (10YR6/3)	浅黄緑 (10YR6/3)	指頭圧痕, 指ナデ	指頭圧痕, 指ナデ			32/36				
80 91	379			1C-10H21	VI	古墳 土師器	鉢		6.9			石・長	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	指頭圧痕, 指ナデ	指頭圧痕, 指ナデ			36/36				
80 91	380			1D-10B8	Vic	古墳 土師器	鉢		6.9			石・雲・海	灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	ハラミガキ	ハラミガキ			18/36				
80 91	381			2C-2J7	Vic1	古墳 土師器	鉢		6.4			長・雲・角	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/4)	ハケメ, 指頭圧痕	ハラナデ			—	15/36			
80 91	382			2D-1D12	VI	古墳 土師器	鉢	D	0.9			石・長・チ	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハケメ	ハケメ			—	36/36			底部有孔
80 91	383			2D-2B4	Vic2	古墳 土師器	蓋	C	3.3	4.0	2.5	石	明赤 (10R3/6)	明赤 (10R3/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ			2/36	36/36			天井部2孔
80 91	384			2D-2E2・1	Via	古墳 土師器	蓋	B	8.4	2.4	2.9	石・白・海	明褐 (7.5YR7/2)	明褐 (7.5YR7/2)	ハラミガキ, 赤彩	ナデ			2/36	36/36			
80 91	385			2C-1J2	Via	古墳 土師器	蓋	B	7.7	1.9	2.7	石・白	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩			6/36	36/36			
80 91	386			1D-10A2	Vic	古墳 土師器	蓋	A	21.6	5.5	10.9	石・長・チ	黄 (7.5YR6/6)	黄 (7.5YR6/6)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ, 赤彩			5/36	36/36			
80 91	387			2C-2I14	Vic1	古墳 土師器	蓋		2.0			石・白・海	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	ハラミガキ, 赤彩	ハラミガキ			36/36				
80 91	388			2C-1J8	Via	古墳 土師器	蓋		2.5			石・長	にぶい黄緑 (7.5YR7/3)	にぶい黄緑 (7.5YR7/3)	赤彩	赤彩			23/36				
80 91	389			1D-9C12	Vic	古墳 土師器	蓋		4.0			石・長	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	ハラミガキ	ハラミガキ			—	9/36			

図版 No.	互照図版 No.	報告図版 No.	出土遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 通存率 (3/36)	底径 通存率 (3/36)	内面 付着	外面 付着	備考	
80	91	390	2D-1B17		Vic	古墳 土師器	蓋	蓋		2.0			石・長・チ	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		36/36					
80	91	391	1D-9E21		Vic	古墳 土師器	蓋	蓋		4.2			石・チ・白	にぶい黄緑 (10YR7/2)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラミガキ	ハラミガキ		36/36				種子圧痕 (天井部)	
80	91	392	2C-2J8		Via	古墳 土師器	蓋	蓋		3.1			石・海	にぶい黄緑 (7.5YR7/6)	にぶい黄緑 (7.5YR7/6)	ハラミガキ	ハラミガキ		36/36					
80	91	393	2D-1D25		Vic	古墳 土師器	蓋	蓋		4.1			石・海	にぶい黄緑 (7.5YR7/6)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		36/36					
80	91	394	2D-1A10		Vic	古墳 土師器	壺	壺	B2	8.6	1.0	6.9	石・長・雲・赤	にぶい黄緑 (7.5YR7/6)	にぶい黄緑 (7.5YR7/6)	ハラミガキ	口：ハラミガキ		21/36	36/36				
80	91	395	2C-2A3		Vic1	古墳 土師器	壺	壺	B2	2.0			石	にぶい黄緑 (10YR7/2)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラミガキ	口：ハラミガキ 体：指ナテ、指頭圧痕		36/36					
80	91	396	2D-1B17		Vic	古墳 土師器	壺	壺	A1	9.0			石・海	にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	ハラミガキ	ハラミガキ		21/36					
80	91	397	2D-1C17・11・12		Vic	古墳 土師器	壺	壺	A1	8.7			石・長・チ	赤 (10R4/8)	赤 (10R4/8)	ハラミガキ、赤影	口：ハラミガキ、赤影 体：ハラミガキ		2/36					
80	91	398	2D-1D8 2D-1D19 1D-10E23		Vic Via Via	古墳 土師器	壺	壺	A1	9.8			石・長・チ・海	にぶい黄緑 (7.5YR7/6)	にぶい黄緑 (5YR7/6)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ		3/36					
80	91	399	1D-9D16		Vd	古墳 土師器	壺	壺	A1	7.7			石・チ・海	赤 (10Y4/6)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ		1/36					
80	91	400	2D-2D3		V	古墳 土師器	壺	壺	A1	—			石・チ・海	赤影 (2.5YR4/8)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ、赤影	ハラミガキ		—					
81	91	401	1D-10D23 2D-1D3・4 2D-1D4		Vic Vic V・VI	古墳 土師器	壺	壺	A1	—			石・海	褐色 (10YR5/1)	褐色 (10YR5/1)	ハラミガキ、赤影	体：ハラミガキ後ハラミガキ		36/36					
81	91	402	1C-10I16		Vib	古墳 土師器	壺	壺	A1	13.2			石・長・海	灰 (5Y4/1)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		1/36					
81	91	403	2D-2C6		Vic1	古墳 土師器	壺	壺	I	12.9			石・長・チ	明赤 (2.5YR6/4)	明赤 (2.5YR6/4)	ハラミガキ、赤影	口～頭：ハラミガキ、赤影		1/36					
81	91	404	2D-1A3		Via	古墳 土師器	壺	壺	I	9.7			石・チ・白	浅黄緑 (7.5YR6/6)	浅黄緑 (10YR8/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		1/36					
81	91	405	2D-1B3 2D-1B8		Via Vic	古墳 土師器	壺	壺	C	9.4	1.8	13.7	石・チ	浅黄緑 (7.5YR8/4)	浅黄緑 (7.5YR8/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		5/36	36/36				
81	91	406	2D-1A16		Vic	古墳 土師器	壺	壺	C	3.0			石・雲	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	ハラミガキ	口：ハラミガキ 体：ハラミガキ		18/36					
81	91	407	1D-10A2 1D-10A7		Vic Via	古墳 土師器	壺	壺	E	8.0			長・雲	にぶい黄緑 (7.5YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハラミガキ	頭：ハラミガキ		5/36					
81	91	408	2D-2A8		Vic1	古墳 土師器	壺	壺	O	10.7			石・長・白・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	ハラミガキ	ハラミガキ		2/36					
81	91	409	2D-1A15		Vic	古墳 土師器	壺	壺	D	9.1	—	11.0	石・雲・白	にぶい黄緑 (10YR7/2)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラミガキ	体：ハラミガキ		17/36					
81	91	410	2C-1I13		Vic	古墳 土師器	壺	壺	F2	15.5			長・チ	にぶい黄緑 (10YR7/2)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラミガキ	ハラミガキ		3/36					
81	91	411	2C-1I16 2C-1H20		Vic V	古墳 土師器	壺	壺	M	15.2			石・雲・海	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		22/36					
81	91	412	1C-10I17・23		Via	古墳 土師器	壺	壺	J2	19.0			チ・赤	にぶい黄緑 (10YR6/6)	にぶい黄緑 (10YR6/6)	ハラミガキ	頭：ハラミガキ		1/36					
81	91	413	2C-2I7 2C-2I11		Vic2 Vic1	古墳 土師器	壺	壺	Q	18.4			石・雲・海	明黄緑 (10YR6/6)	明黄緑 (10YR6/6)	ハラミガキ、洗線	ハラミガキ		2/36				片口土器	
81	92	414	1C-10I25		VI・Via	古墳 土師器	壺	壺	F3	11.2	2.8 (23.0)		石・長	にぶい黄緑 (7.5YR6/6)	にぶい黄緑 (7.5YR6/6)	ハラミガキ	ハラミガキ		1/36	36/36			スズ	
81	92	415	2D-2C1 2D-1C24		Vic2 Vic1・Vic2	古墳 土師器	壺	壺	F1	14.6			石・長・チ・白	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	ハラミガキ	口：ハラミガキ 体：ハラミガキ		6/36		スズ			
81	92	416	2D-1B24・16・17 2D-1B17 2D-1B16		Vic Vic Via	古墳 土師器	壺	壺	F1	13.0			石・チ・海	にぶい黄緑 (7.5YR7/6)	にぶい黄緑 (5YR6/6)	ハラミガキ	頭：ハラミガキ 体：ハラミガキ		23/36					
81	92	417	2D-1C17・6		Vic	古墳 土師器	壺	壺	F1	15.8			石・チ・赤	洗黄緑 (10YR8/4)	洗黄緑 (10YR8/4)	ハラミガキ	頭：ハラミガキ		15/36				口：スズ	
82	92	418	1D-10A14		VI Via	古墳 土師器	壺	壺	F1	15.9			石・長	にぶい黄緑 (10YR7/2)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	ハラミガキ	口：ハラミガキ、洗線状		13/36					
82	92	419	1C-10I17		Vic	古墳 土師器	壺	壺	H	22.9			石・赤	洗黄緑 (10YR8/3)	洗黄緑 (10YR8/3)	ハラミガキ	口：ハラミガキ後ハラミガキ 体：ハラミガキ		4/36					
82	92	420	2D-1B8・3・2・6 2D-1B3・4・6		Vic Via	古墳 土師器	壺	壺	F3	13.0			石・白・海	洗黄緑 (10YR8/4)	洗黄緑 (10YR8/4)	ハラミガキ	口：ハラミガキ後ハラミガキ 体：ハラミガキ		31/36					スズ



図版 No.	写真 図版 No.	報告 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底面調整 (底部外面)	口径 遺存率 (3/36)	底径 遺存率 (3/36)	内面 付着	外面 付着	備考	
82	92	421		2C-1113	Via	古墳 土師器	壺	H	26.4				石・白・海	褐色(10YR6/1)	褐色(10YR6/1)	ハケメ	口：ヘラミガキ、ヘラミガキ 体：ヘラミガキ、ヘラミガキ		25/36					
82	92	422		2C-1112・17 2C-1111・16・17	Via Vic	古墳 土師器	壺	K	16.5				石・白・海	にぶい黄褐色(7.5YR7/3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	口：ヘラミガキ、赤彩 ヘラミガキ		17/36						
82	92	423		2D-2D3	Via	古墳 土師器	壺	K	16.5				石・長・雲 石・刻み目	灰黄褐色(10YR5/2)	灰黄褐色(10YR5/2)	ヘラミガキ		4/36						
82	92	424		1D-10A21	Via	古墳 土師器	壺	J1	17.1				石・長・白・海	にぶい褐色(7.5YR5/1)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	口：ヘラミガキ 頸：ハケメ後ヘラミガキ		14/36						
82	92	425		1D-9E18・19 1D-9E18	Vi Via	古墳 土師器	壺	J1	21.0				石・赤・白	赤(5YR6/6)	赤(10R5/8)	ヘラミガキ、赤彩	口：ヘラミガキ、赤彩 頸：ハケメ、赤彩		3/36					
82	92	426		2C-1120 2C-1125	Via Vi	古墳 土師器	壺	J2	18.5				石・白・海	褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/4)	頸：ハケメ	口：ヘラミガキ、ハケメ		17/36					
82	92	427		2C-118	Vic	古墳 土師器	壺	K	19.0				石・赤	浅黄褐色(10YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	ハケメ	口：ハケメ後ヘラミガキ 体：指頭正痕		5/36					
82	92	428		2D-1B23 2D-1B18	Vic Vic	古墳 土師器	壺	K	16.8				石	褐色(5YR6/6)	褐色(10YR6/3)	体：ハケメ	頸：ハケメ		20/36				スズ カゴメ痕	
82	92	429		2D-2B10	Vic2	古墳 土師器	壺	K	19.8				石・赤	にぶい黄褐色(7.5YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	ハケメ	ハケメ		3/36				線刻土器	
83	93	430		2D-1C21 2D-2B5 2D-2B5 2D-1B15 Via	Via・Vic1・Vic2 Vic1 Via	古墳 土師器	壺	J2	15.2				石・雲・白	褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	頸：ヘラミガキ 体：ハケメ後ヘラミガキ	口：ハケメ、ヘラミガキ 体：ハケメ、ヘラミガキ		32/36				スズ	
83	93	431		2D-1B20 2D-1B18	Vic Vic	古墳 土師器	壺	K	19.6				石・白	黒褐色(10YR3/2)	黒褐色(10YR3/2)	口：指頭 頸：ハケメ	頸：ヘラミガキ		11/36				口：スズ	
83	93	432		2D-1C6・7・12	Vic	古墳 土師器	壺	J2	22.7				石・長・赤	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(7.5YR6/6)	頸：ヘラミガキ	口：ヘラミガキ 頸：ハケメ		4/36					
83	93	433		2C-2113	Vic1	古墳 土師器	壺	K	24.8				雲・赤・白・赤	浅黄褐色(10YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	口：ヘラミガキ 頸：ハケメ、ヘラミガキ	口：ヘラミガキ 体：ヘラミガキ		10/36					
83	93	434		2C-2J11・7・8・13 2C-2J4 1C-10112 2D-2A5	Vic1 Vic1 Via	古墳 土師器	壺	J2	21.0				石・長・赤	にぶい褐色(7.5YR7/4)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	口：ヘラミガキ 体：ヘラミガキ	口：ヘラミガキ 体：ヘラミガキ		9/36					
83	93	435		2C-212	Vic2	古墳 土師器	壺	P	15.8				長・赤・白	にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	ヘラミガキ、赤彩	口：ヘラミガキ、赤彩 体：ヘラミガキ、赤彩		7/36					
83	93	436		1D-10E18 1D-10E11	Via Vi	古墳 土師器	壺	P	(27.9)				石・白・海	にぶい黄褐色(10YR7/3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	口：ハケメ 頸：ヘラミガキ	口：ハケメ後ヘラミガキ 頸：ヘラミガキ		5/36				スズ	
83	93	437		2D-2A10	Via Vic1	古墳 土師器	壺	I	-				長	にぶい黄褐色(10YR6/3)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	ヘラミガキ、赤彩	口：ヘラミガキ、赤彩 体：ヘラミガキ、赤彩		-					
83	93	438		2C-116・15	Vib	古墳 土師器	壺	K	-				石・赤・海	明黄褐色(10YR7/6)	明黄褐色(10YR7/6)	口：刻み目 頸：ハケメ	ハケメ、ヘラミガキ		-					
83	93	439		1D-9A21	Vic	古墳 土師器	壺	K	5.0				石・長・雲・白	にぶい黄褐色(5YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩		36/36				線刻土器	
83	93	440		2C-1111	Vic	古墳 土師器	壺	-	-				長・白	にぶい黄褐色(10YR7/3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩		-					
83	93	441		2D-1B10	Vic	古墳 土師器	壺	K	8.6				石・長	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩		28/36					
83	93	442		2D-1D3	Vic	古墳 土師器	壺	K	9.8				石・白	浅黄褐色(10YR3/1)	浅黄褐色(10YR3/1)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		8/36					
83	93	443		1D-10E17・16	Via	古墳 土師器	壺	K	6.5				石・長・赤	にぶい黄褐色(10YR6/3)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩		27/36					
83	93	444		2D-1A1	Vic	古墳 土師器	壺	K	6.6				石・長	にぶい黄褐色(10YR2/1)	にぶい黄褐色(10YR2/1)	ヘラミガキ	指頭正痕		21/36					
83	93	445		2D-1B1	Via	古墳 土師器	壺	K	4.0				石・長・雲	褐色(10YR6/1)	褐色(10YR6/1)	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩		16/36					
84	93	446		2D-1B18・19	Vic	古墳 土師器	甕	A2a	13.0				石・赤・白	浅黄褐色(10YR8/3)	浅黄褐色(10YR8/3)	体：ハケメ	体～底：ヘラミガキ		1/36	36/36				
84	93	447		2C-2J1 2C-2J2	Vic1 Via	古墳 土師器	甕	A2a	20.0				石・雲・赤・白	にぶい褐色(7.5YR6/3)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	体：ハケメ、ヘラミガキ	頸：ヘラミガキ、ヘラミガキ		2/36	33/36				
84	93	448		1C-1016	Vib	古墳 土師器	甕	A2a	16.9				石・長	にぶい褐色(5YR6/4)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	ヘラミガキ、赤彩	頸：ヘラミガキ、ヘラミガキ		15/36	36/36				
84	93	449		2D-2C3 2D-2C3 2D-1C23	Vic2 Vic1 Vic2	古墳 土師器	甕	A3	18.0				石・長・赤	黒褐色(10YR3/1)	黒褐色(10YR6/4)	ハケメ	頸：ヘラミガキ、ヘラミガキ		18/36	36/36			炭化物	
84	94	450		2D-1A2 2D-1A7	Vic Vic	古墳 土師器	甕	A2a	18.0				石・雲・白	褐色(5YR6/6)	褐色(5YR6/6)	頸：真直痕 体上部：ヘラミガキ	頸：ヘラミガキ、ヘラミガキ 体：ヘラミガキ、ヘラミガキ	頸：ヘラミガキ、ヘラミガキ 体：ヘラミガキ、ヘラミガキ	18/36	22/36			炭化物	

図版 No.	互照図版 No.	報告図版 No.	出土遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口縁遺存率 (3/36)	底縁遺存率 (3/36)	内面付着	外面付着	備考
84	94	451		2D-1B17・18	Via	古墳 土師器	甕	A2a	16.0			石・長・赤・白	明褐色 (7.5YR7/2)	におい糖 (7.5YR7/4)	体：ハケメ	体：ヘラナデ 体下部ヘラナズリ			12/36		炭化物	スス		
84	94	452		1D-10E23	VI	古墳 土師器	甕	A2a	18.2	6.1	27.1	石・長・赤・白	灰黄褐色 (10YR4/2)	におい黄褐色 (10YR7/2)	ハケメ、ヘラケズリ	体：ヘラナデ			36/36	36/36		スス		
85	94	453		2C-2J9	Via Vic1 V	古墳 土師器	甕	A2a	15.7			石・白・赤	黒褐色 (7.5YR3/1)	におい糖 (7.5YR7/3)	体：ハケメ	体：ヘラナデ				25/36			スス	
85	94	454		2D-2A8	Vic1	古墳 土師器	甕	A3	16.1			石・雲・赤・海	におい糖 (7.5YR7/4)	におい糖 (7.5YR7/3)	ハケメ	ハケメ				11/36			スス	
85	94	455		2D-1B9	Vic	古墳 土師器	甕	A2a	18.0			石・白	におい糖 (10YR7/4)	灰黄褐色 (10YR6/2)	ハケメ	体：ヘラナデ				10/36			スス	
85	94	456		2D-1A1	Vic	古墳 土師器	甕	A1	17.4			石・長・白・海	におい糖 (7.5YR6/4)	糖 (5YR6/6)	体：ハケメ	頸：ハケメ 体：ヘラナデ				13/36			スス	
85	94	457		1C-10I5 1C-10I10	Via・Vic Via	古墳 土師器	甕	A2a	19.0			石・長・海	糖 (7.5YR7/6)	糖 (5YR6/6)	ハケメ	体：ハケメ 体：ヘラナデ				9/36			スス	
85	94	458		2D-1C23	V	古墳 土師器	甕	A2a	19.4			石・雲	灰黄褐色 (10YR6/6)	灰黄褐色 (10YR6/2)	体：ハケメ	口：ハケメ 体：ヘラナデ				21/36			スス	
85	94	459		2C-2J6	Via	古墳 土師器	甕	A2a	(12.1)			石・白・赤	明赤褐色 (5Y6/6)	明赤褐色 (5Y6/6)	ハケメ	口：ハケメ 体：ヘラナデ				3/36			スス	
85	94	460		2C-1I19	Via	古墳 土師器	甕	B	15.0			石・長・海	におい黄褐色 (10YR7/2)	明黄褐色 (10YR6/6)	体：ヘラケズリ	頸：指頭正真				4/36			スス	
85	94	461		1C-10I18	Via	古墳 土師器	甕	A2a	14.7			長・雲	黒褐色 (2.5Y3/1)	におい黄褐色 (10YR7/3)	体：ハケメ	体：ヘラナデ、指ナデ				2/36			スス	
85	94	462		2C-2I9	Vic2	古墳 土師器	甕	A2a	13.8			石・長・赤	におい糖 (7.5YR6/3)	におい糖 (7.5YR6/4)	ハケメ	頸：ハケメ 体：ヘラナデ				12/36			スス	
85	94	463		1D-9E20	VI	古墳 土師器	甕	A2a	14.0			石・白	黒褐色 (2.5Y3/1)	灰黄褐色 (10YR6/2)	体：ハケメ	体：ヘラナデ				9/36			スス	
85	94	464		1D-9A24	Via	古墳 土師器	甕	A2a	16.5			石・雲	灰黄褐色 (10YR6/2)	褐灰 (10YR4/1)	体：ハケメ	体：ヘラナデ				13/36			スス	
85	94	465		2C-1I5	Via	古墳 土師器	甕	A2a	15.0			石・赤	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/3)	体：ハケメ	頸：ハケメ、ナデ				9/36			スス	
85	94	466		2D-1D9	Vic	古墳 土師器	甕	E4	14.2			石・長・赤	漆黄 (2.5Y8/3)	漆黄 (2.5Y8/3)	体：ハケメ	体：ヘラナデ				9/36			炭化物	スス
85	94	467		2C-1I11	Vic	古墳 土師器	甕	E1	14.8			石・海	灰黄褐色 (10YR6/2)	におい黄褐色 (10YR6/3)						1/36			スス	
86	94	468		2C-1J12	Via	古墳 土師器	甕	A2a	(15.3)			石・白	におい黄褐色 (10YR6/3)	におい黄褐色 (10YR7/2)						3/36			スス	
86	95	469		1C-10H25	Vib	古墳 土師器	甕	A1	16.0			石・長・赤	灰黄褐色 (10YR5/2)	灰黄褐色 (10YR5/2)	体：ハケメ	体：ヘラナデ				2/36		口：スス		
86	95	470		1D-9E20	VI	古墳 土師器	甕	A2a	16.0			石・長	におい黄褐色 (10YR7/2)	におい黄褐色 (10YR7/2)	体：ハケメ	体：ヘラナデ				14/36			スス	
86	95	471		2C-1J14	Via	古墳 土師器	甕	A2a	16.0			石・赤・白	におい黄褐色 (10YR7/2)	におい黄褐色 (10YR7/2)	体：ハケメ	体：ヘラナデ				5/36			スス	
86	95	472		2D-1B4	Via・Vic	古墳 土師器	甕	A2a	18.0			石・赤・赤	糖 (7.5YR7/6)	糖 (5YR7/6)	体：ハケメ	体：ハケメ後ヘラナデ				13/36			スス	
86	95	473		2D-1C1	Vic	古墳 土師器	甕	A3	15.9			石・長	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	体：ハケメ					12/36			スス	
86	95	474		1D-9E20	VI	古墳 土師器	甕	A2a	15.9			石・海	糖 (7.5YR6/6)	糖 (7.5YR6/6)	体：ハケメ	口：ハケメ 体：ハケメ、ヘラナデ				8/36			スス	
86	95	475		1D-10B11	Vic	古墳 土師器	甕	E2	17.5			長	糖 (5YR7/6)	糖 (2.5YR6/6)	振回線				4/36			スス		
86	95	476		2D-1B10	Vic	古墳 土師器	甕	A2a	17.2			長・雲	におい黄褐色 (10YR6/4)	におい黄褐色 (10YR6/4)	口端：洗線					5/36			スス	
86	95	477		2C-1J5	Vic	古墳 土師器	甕	A2a	16.0			石・赤・白・赤	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/3)	体：ハケメ	頸：ハケメ				7/36			スス	
86	95	478		2D-2B7	Vic2	古墳 土師器	甕	A2c	(18.2)			石・長	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/3)	ハケメ					1/36			スス	
86	95	479		2C-1J22	Via	古墳 土師器	甕	A1	16.9			石・赤	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)						14/36			スス	
86	95	480		2D-1B5 2D-1C6	Vic Vic	古墳 土師器	甕	A2a	19.0			石・雲・白	におい糖 (7.5YR7/4)	におい糖 (7.5YR7/4)	体：ハケメ	口：ハケメ 体：ヘラナデ				13/36			スス	
86	95	481		2D-2A8 2D-2A9	Vic1 Via	古墳 土師器	甕	A1	18.0			石・赤・白・海	糖 (5YR7/6)	糖 (5YR7/6)						18/36			スス	
86	95	482		2C-1I3	Vic	古墳 土師器	甕	A2a	19.0			石・長・海	におい糖 (10YR7/4)	におい糖 (10YR7/3)						2/36			スス	
86	95	483		2D-2A5	Vic1	古墳 土師器	甕	A2a	22.2			石・赤・白	におい糖 (7.5YR7/3)	におい糖 (7.5YR7/3)	体：ハケメ	ハケメ				6/36			スス	
86	95	484		2D-1B2	Via	古墳 土師器	甕	B	(24.3)			石・長	におい黄褐色 (10YR6/3)	におい黄褐色 (10YR6/3)	体：ハケメ	ハケメ				2/36			スス	

図版 No.	写真 図版 No.	報告 図版 No.	出土 遺構	出土地点	層位	時代	種別	器種	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	底部 (底部外面)	口径 遺存率 (3/6)	底径 遺存率 (3/6)	内面 附着	外面 附着	備考	
86	95	485		2D-1A18 2D-1A13・19	Vic Vic1 Vic2	古墳 土師器	甕	D	18.8				石・長・雲・ 赤・赤	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/3)	体：ハケメ	体：ハラケズリ、ハラナデ		12/36		炭化物	スス		
87	95	486		2D-2B2	Vic1・ Vic2	古墳 土師器	甕	D	(15.4)				石・長・白	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	体：ハケメ	体：ハラケズリ		2/36			スス		
87	95	487		2D-1B9	Vic	古墳 土師器	甕	D	16.3				石・長・雲・ 赤・赤	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)				4/36			スス		
87	95	488		2D-2B1	Vic2	古墳 土師器	甕	D	(17.2)				石・長	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/4)				1/36			スス		
87	95	489		2D-1A19	Via	古墳 土師器	甕	D	(18.0)				石・長・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)				1/36					
87	95	490		2D-2B1	Vic2	古墳 土師器	甕	D	(17.0)				石・長・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)				3/36					
87	95	491		1C-10J22	VI	古墳 土師器	甕	C	13.9				石・長・赤	にぶい黄 (7.5YR6/3)	にぶい黄 (7.5YR6/3)	体：ハケメ	口：ハケメ 体：ハラナデ		6/36			スス		
87	95	492		2C-1J7	Via	古墳 土師器	甕	C	15.0				石・長・白	黄緑 (7.5YR6/6)	黄緑 (7.5YR6/6)	体：ハケメ	体：ハケメ		1/36		炭化物	スス		
87	95	493		2C-1J17	Via	古墳 土師器	甕	C	17.8				石・白・赤	黄 (7.5YR7/6)	黄 (7.5YR7/6)	ハケメ	口：ハケメ 体：ハラケズリ、ハラナデ		7/36		炭化物	スス		
87	95	494		1D-10E20 1D-10F16・17	VI・Via・Vic Vic	古墳 土師器	甕	C	19.0				石・長・雲・ 白	灰黄 (10YR4/2)	黒褐 (10YR3/2)	口：指頭凹痕 体：ハケメ、ハラナデ	ハラケズリ、ハラナデ		7/36		炭化物	スス		
87	95	495		2D-1A1	Vic	古墳 土師器	甕			3.0			石・長・海	にぶい黄 (7.5YR6/4)	黄 (5YR6/6)	ハラケズリ、ハラケメ	ハラケメ			33/36	炭化物	スス		
87	95	496		2C-1J13	Via	古墳 土師器	甕			—			石・長・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	浅黄緑 (10YR6/3)	ハラケズリ	ハラケメ			—	炭化物	スス		
87	95	497		2C-1J20	Vic	古墳 土師器	甕			3.0			石・長・白・ 海	浅黄緑 (10YR8/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハラケメ	ハラケメ		36/36		炭化物	スス		
87	95	498		2C-1H1	Vic	古墳 土師器	甕			(7.8)			長・白	にぶい黄 (7.5YR6/4)	にぶい黄 (7.5YR6/4)				1/36			織組土器		
87	95	499		2D-2A2	Vic2	古墳 土師器 ア土器	ア土器		4.7	4.0	3.5		石・海	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	口端：刻み目、指ナデ	指ナデ		36/36	36/36				
87	95	500		2C-1J7	Via	古墳 土師器 ア土器	ア土器		7.2	3.7	4.9		石・赤	にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	ハラミガキ、ハラケメ	ハラミガキ 体：指ナデ		14/36	27/36				
87	95	501		59T	XIb	古墳 土師器	壺	A2	5.8				石・赤・白	黄 (7.5YR7/6)	黄緑 (10YR8/4)	ハラミガキ	ハラケメ		4/36					
87	95	502		59T	XIb	古墳 土師器	壺	K	15.9				石・長	浅黄緑 (10YR8/4)	浅黄緑 (10YR8/3)	刻み目	ハラケメ		6/36					
87	95	503		59T	XIb IXb	古墳 土師器	壺	J2	21.5				石・長・赤・ 白	灰白 (10YR8/2)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	口：ハケメ	口：ハケメ 体：ハラミガキ		14/36					
87	95	504		59T	XIb IXb	古墳 土師器	甕	A2a	21.1				石・赤	にぶい黄 (5YR6/4)	にぶい黄 (7.5YR7/4)	体：ハケメ	口：ハケメ 体：ハラミガキ 指頭凹痕		4/36			スス		
87	95	505		61T	XIa	古墳 土師器	鉢	A2	12.1				雲・白	黄 (7.5YR6/6)	にぶい黄 (7.5YR5/4)	ハラミガキ	ハラミガキ		7/36					
—	96	SI461		1D-10B13	I	古墳 土師器	甕		—				石・長・赤	浅黄 (10YR6/4)	浅黄 (2.5Y7/3)	ハラケメ	ハラナデ				炭化物 (数珠)	スス	写真のみ掲載	

別表5 道正遺跡縄文土器観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		層位	時期	分類	法量 (cm)		胎土	色調		施文・調整	遺存率		備考
			グリット	No.				口径	底径		器高	器底		口径	底径	
89	97	60	1	2C-IIH13	覆土	VI	深鉢	C	30.5	白	外 白 内 黄褐色	縹緋文LR 縹緋文LR	20/36 31/36	あり	あり	
89	97	60	2	2C-IIH13	覆土	VI	深鉢	C	29.7	石・白	外 黄褐色 内 黄褐色		ナデ	あり	あり	
89	97	60	3	2C-IIH18	覆土	VI	鉢	C	5.5	雲・雉・白	外 黄褐色 内 黄褐色		ナデ	あり	あり	
89	97	60	4	2C-IIH4, 17	覆土	VI	鉢	C	9.0	白・海	外 黄褐色 内 黄褐色	網文LR 網文LR	29/36	あり	あり	
89	97	60	5	1C-I0F13	覆土	VI	深鉢	C	7.5	白	外 黄褐色 内 黄褐色	網文LR 網文LR	30/36	あり	あり	
89	97	60	6	1C-I0I6	瓦	I	深鉢	C		石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	7	2D-1B16	Vic	I	深鉢	C		白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	8	1D-10B14	Vic	I	深鉢	C		白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	9	2C-2I2	Vic	I	深鉢	C		白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	10	1C-I0I9	I層	I	深鉢	C		白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	11	2D-1C17	I層	II	深鉢	C		白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	12	2C-1I22	Vic	II	不明			白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	13	2D-2C7	I層	II	鉢			白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	14	1C-I0I19	Vla	III	深鉢			白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	15	2C-II18	Vic	III	鉢			白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	16	2D-1B15	Vic	III	鉢		16.6	白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	17	1C-I0I2	Vic	III	鉢			白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	18	2C-1I24	Vic	III	鉢			雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	19	1C-I0H25	Vla	IV	深鉢	A		白・海	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	20	1C-I0I17	Vla	IV	深鉢	A		白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	21	1C-I0I12	Vla	IV	深鉢	A		白	外 黄褐色 内 黄褐色					
89	97	60	22	1C-I0I18	Vla	IV	深鉢	A		白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	97	60	23	2C-IH2	VI, VII	IV	深鉢	A		雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	97	60	24	1D-9D18	Vic	IV	深鉢	A		雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	97	60	25	1D-9D17	Vic	IV	深鉢	A		雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	97	60	26	1D-10B21	Vla	IV	深鉢	A		雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	97	60	27	2C-I15 (58T)	(XVIIb)	IV	深鉢	A		白・海	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	97	60	28	1D-9D18	Vla	IV	深鉢	A		雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	97	60	29	1C-I0H25	Vla	IV	深鉢	A		雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	97	60	30	2D-1B20	Vla	IV	深鉢	A		雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	31	1D-9B20, 24	Vic	Vic	IV	深鉢	B	23.7	雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	32	2C-1I7, 11, 12, 17	Vic	Vic	IV	深鉢	B	40.0	雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	33	2C-2I6, 11	Vic	Vic	IV	深鉢	B		石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	34	1C-I0I11	Vla	Vla	IV	深鉢	B		石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	35	2C-2I2	Vla	Vla	IV	深鉢	B		石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	36	2D-1C3	Vla	Vla	IV	深鉢	B	19.4	白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	37	2C-IH4	Vic	Vic	IV	深鉢	B	18.3	石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	38	2C-IH24, 2C-1I21	Vic, Vla	Vic	IV	深鉢	B	26.8	雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	39	2C-II13	Vic	Vic	IV	深鉢	B	3.7	焼・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
90	98	40	2C-II17, 18, 19, 22, 23, 2C-2I3	Vic, Vla	Vic	IV	深鉢	B	40.5	石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	41	2C-1I22	Vic	Vic	IV	深鉢	B	23.0	石・雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	42	2C-IH25, 2C-2H5, 2C-2I6	Vic	Vic	IV	深鉢	B	17.8	焼・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	43	2C-II12	Vic	Vic	IV	深鉢	B	14.6	雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	44	2C-1I21	Vic	Vic	IV	深鉢	B	5.5	白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	45	2C-II11, 12, 17	Vic	Vic	IV	深鉢	B	21.3	石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	46	2C-II12, 17	Vic	Vic	IV	深鉢	B	6.0	石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	47	2C-II12, 13	Vla	Vla	IV	深鉢	C	20.8	雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	48	2C-2I6	Vic	Vic	IV	深鉢	C	20.4	白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	49	2C-IH25	Vla, Vic	Vla, Vic	IV	深鉢	C	32.0	石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	50	2C-IH8, 2C-1I11	Vic, Vla	Vic, Vla	IV	深鉢	C	22.0	石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
91	98	51	2C-IH22	VI, VII	VI, VII	IV	深鉢	C	20.6	石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	98	52	2C-II17	Vla	Vla	IV	深鉢	C	23.0	石・白・角	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	98	53	2C-1I24	Vic	Vic	IV	深鉢	C	20.0	石・雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	98	54	2C-II17	Vic	Vic	IV	深鉢	C	17.5	石・白・角	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	99	55	2C-II19, 24	Vic	Vic	IV	深鉢	C	25.0	4.0 雲・白・海	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	99	56	2C-II17	Vla	Vla	IV	深鉢	D	19.0	4.0 雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	99	57	2C-II17	Vla	Vla	IV	深鉢	D	20.4	8.6 雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	99	58	2C-II13, 22, 23	Vic, Vla	Vic, Vla	IV	深鉢	D	13.6	11.0 石・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	99	59	2C-IH14, 20, 2C-1I16	Vic	Vic	IV	深鉢	D	16.7	雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					
92	99	60	2C-IH7	VI, VII	VI, VII	IV	深鉢	D		3.0 5.9 雲・白	外 黄褐色 内 黄褐色					





国版 No.	複製版 No.	報告 No.	出土地点		層位	時期	分類 器種	細別	法量 (cm)		胎土	色調		彫文・調整		通存條		備考
			グリップ	選構名					口径	底径		器高	外面	内面	外面	内面	口径	
99	103	184	2C-1121		Vic	VI	鉢	C	7.3	4.0	7.6	雲・白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	10/36	36/36	あり	
99	103	185	2C-1122		Vic	VI	鉢	C	12.8	4.0	8.3	白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	13/36	36/36	あり	
99	103	186	2C-1113, 22		Vic	VI	鉢	C	13.5			白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	24/36	36/36	あり	
99	103	187	2C-1121, 22		Vic	VI	鉢	C	10.0			右・白	刻目文、縄文LR・RL	刻目文、縄文LR・RL	10/36		あり	
99	103	188	2D-1E16		Vic	VI	鉢	C				白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR			あり	
99	103	189	2C-2H1		Vic	VI	鉢	C	12.9			白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	9/36	33/36	あり	
99	104	190	1C-10H14		Vic	VI	鉢	C	16.1	6.0	13.0	白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	8/36	36/36	あり	
99	104	191	1C-10H19		Vic	VI	鉢	C	23.7	8.7	18.9	白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	5/36	27/36	あり	
100	104	192	2C-1I24		Vic	VI	鉢	C	15.5	5.5	13.2	石・白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	7/36	35/36	あり	
100	104	193	2C-1H20, 2C-1H11, 16		Vic	VI	鉢	C	18.5			白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	11/36		あり	
100	104	194	2C-1H16		Vic	VI	台付鉢	D		7.8		白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR		6/36		
100	104	195	1D-10B2		Vic	VI	台付鉢	D		6.8		白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR		6/36		
100	104	196	1D-10B7		Vic	VI	台付鉢	D		6.2		白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR		3/36		
100	104	197	2C-1H16		Vic	VI	台付鉢	D		7.2	24.4	白	刻目文、縄文LR	刻目文、縄文LR	29/36	21/36	あり	
100	104	60	198	1C-10I13, 18, 19	Vic	VI	漆鉢	A	22.5			黒	平行沈線文、縄文LR	平行沈線文、縄文LR	11/36		あり	
100	104	60	199	2D-1B10	Vic	VI	漆鉢	A	15.3			黒	平行沈線文、羽状縄文LR・RL	平行沈線文、羽状縄文LR・RL	7/36		あり	
100	104	60	200	2C-1I25	Vic	VI	漆鉢	A				黒	平行沈線文、縄文LR	平行沈線文、縄文LR	6/36		あり	
100	104	60	201	2D-1C2	Vic	VI	漆鉢	A	19.9			黒	平行沈線文、縄文LR	平行沈線文、縄文LR	6/36		あり	
100	104	60	202	2C-1H11, 16	Vic	VI	漆鉢	A	13.5			石・白	刻目文、平行沈線文、縄文LR	刻目文、平行沈線文、縄文LR	11/36		あり	
100	104	60	203	1D-9B14	Vic	VI	漆鉢	A	20.5			石・白	刻目文、平行沈線文、縄文LR	刻目文、平行沈線文、縄文LR	15/36		あり	
100	104	60	204	2C-1H5, 2C-1I6, 11, 18	Vic, Vic, Vic	VI	漆鉢	A	13.8			白・海	刻目文、平行沈線文、縄文LR	刻目文、平行沈線文、縄文LR	30/36		あり	
100	104	60	205	2D-1C17	Vic	VI	漆鉢	A	10.2			白	刻目文、平行沈線文、縄文LR	刻目文、平行沈線文、縄文LR	8/36		あり	
100	104	60	206	2D-2A10	1層	VI	漆鉢	A	10.8			白	刻目文、平行沈線文、縄文LR	刻目文、平行沈線文、縄文LR	18/36		あり	
100	104	60	207	2C-2B7	Vic	VI	漆鉢	A	20.5			白・海	平行沈線文、燃系文LR	平行沈線文、燃系文LR	4/36		あり	
100	104	60	208	2C-1I25	Vic	VI	漆鉢	A				黒	平行沈線文、燃系文LR	平行沈線文、燃系文LR		14/36	あり	
100	104	60	209	2D-1C17	Vic	VI	漆鉢	A	4.8			灰白	沈線文、結節縄文LR	沈線文、結節縄文LR		36/36	あり	
100	104	60	210	2C-1I21	Vic	VI	漆鉢	B	6.0			石・焼・白	沈線文	沈線文				
100	104	60	211	2D-1B5	Vic	VI	漆鉢	B				白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	104	60	212	2C-1H5	Vic	VI	漆鉢	A				石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	104	60	213	2C-2H5	Vic	VI	漆鉢	C				雲・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	104	60	214	2C-1H13	Vic	VI	漆鉢	C	35.8			雲・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	104	60	215	2C-1H9	Vic	VI	漆鉢	C	22.0			石・白・海	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	104	60	216	2C-2I3, 8	Vic	VI	漆鉢	C	32.9			石・白・海	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	105	217	2C-1I12, 13, 17, 18, 22, 23		Vic, Vic, Vic	VI	漆鉢	C	29.0			石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	105	218	2C-1H8		Vic, Vic	VI	漆鉢	C	27.5			灰黄褐	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	105	219	2C-1I21, 22		Vic, Vic	VI	漆鉢	C	31.8	8.7	32.5	石・雲・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	105	220	2C-1H3, 8		Vic	VI	漆鉢	C				灰白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	105	221	2C-1H13		Vic	VI	漆鉢	C	5.5			石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	105	222	2C-1H9, 14		Vic	VI	漆鉢	C	8.6			石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
101	105	223	1C-10I19		Vic	VI	漆鉢	C	16.2	7.3	15.6	石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	224	1C-10I19		Vic	VI	漆鉢	C	22.9			雲・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	225	2C-1I20		Vic	VI	漆鉢	C	13.7			白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	226	2D-1B9		Vic	VI	漆鉢	C				灰黄褐	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	226	1C-10H25		Vic	VI	漆鉢	C				黒	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	227	1C-10I2		Vic	VI	漆鉢	C				雲・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	228	1C-10H10, 1C-10I11		Vic, Vic, Vic	VI	漆鉢	C				白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	229	2D-1A25, 2D-2A4		Vic, Vic	VI	漆鉢	C	13.8			白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	230	1C-10I8		Vic	VI	漆鉢	C	17.0			灰黄褐	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	231	1D-10C13		Vic	VI	漆鉢	C				灰黄褐	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	232	2C-1H20		Vic, Vic	VI	漆鉢	C				白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	233	2C-1H10		Vic, Vic	VI	漆鉢	C				雲・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	234	2C-1H16		Vic	VI	漆鉢	C	6.0			白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	235	2C-1H12		Vic	VI	漆鉢	C	8.8			灰白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	236	2D-1B10		Vic	VI	漆鉢	C	6.3			石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	105	237	2C-1H11, 16		Vic	VI	漆鉢	C	5.5			雲・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	106	238	1C-10I18, 19		Vic	VI	漆鉢	C				黒	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	106	239	2C-1H2		Vic	VI	漆鉢	A	5.5			白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	106	240	2C-2H5		Vic	VI	漆鉢	A	9.6			石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	106	241	2C-1H16		Vic	VI	漆鉢	A	7.2	4.5	9.3	石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	106	242	2C-1H22, 25, 2C-1I21, 22, 2C-2I1		Vic, Vic	VI	漆鉢	A	8.2	5.0	11.1	白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	106	243	1D-10A10		Vic	VI	漆鉢	A	8.0	5.2	14.5	石・白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				
102	106	244	2C-1H13		Vic	VI	漆鉢	A	8.0			灰白	刻目文、結節縄文LR	刻目文、結節縄文LR				

国版 No.	写真国版 No.	報告 No.	出上地点		層位	分類	法量 (cm)			胎土	色調		彫文・調整	通存率		備考
			グリップ	グリップ			口径	底径	器高		外面	内面		口径	底径	
103106	245	2C-1112	Vic	壺	A	8.9	5.8	白	灰黄褐	灰黄褐	平行沈線文、ミガキ	外面	内面	8/36		
103106	246	2C-1H20、2C-1116	Vic	壺	A	19.1	5.8	雲・白	にぶい黄褐	にぶい黄褐	平行沈線文、細目沈線系文	外面	内面	6/36		
103106	247	1C-10113、17、18、19	Vic	壺	B	14.5	5.8	石・白	明黄褐	明黄褐	平行沈線文、細文LR	外面	内面	10/36		あり
103106	248	2C-215	Vic	壺	B	14.5	5.8	白	桐灰	桐灰	山形突起、沈線文、ミガキ	外面	内面	10/36		あり
103106	249	1D-9B21	Vic	壺	C	12.6	5.8	白	灰褐	灰黄褐	沈線文、ミガキ	外面	内面	31/36		あり
103106	250	1D-9B23、1D-10B3、4	Vic	壺	D	13.2	5.8	白	灰褐	灰黄褐	羽状線文LR・RL、ミガキ	外面	内面	7/36		
103106	251	2C-1122	Vic	壺	D	13.9	5.8	石・雲・白	にぶい黄褐	にぶい黄褐	口縁部沈線文、ミガキ	外面	内面	13/36		
103106	252	2C-1H25、2C-2H4、2C-216	Vic	壺	D	13.9	5.8	石・白	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細文LR	外面	内面	11/36		
103106	253	2D-2B1	Vic	壺	D	13.9	5.8	石・白	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細文LR	外面	内面	11/36		あり
103106	254	1D-9B23、24、1D-9C21	Vic	壺	D	13.9	5.8	石・白	にぶい黄褐	にぶい黄褐	羽状線文LR・RL	外面	内面	11/36		
103106	255	2C-111、3	Vic, Via	注口土器	D			石・白	灰白	灰白	ナデ	外面	内面			
103106	256	2D-1B20	Vic	注口土器				石・白	灰白	灰白	ナデ	外面	内面			
103106	257	2C-1H4	Vic	注口土器				石・白	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	外面	内面			
103106	258	2C-1123	Vic	胎底形土器		9.2~15.2	5.5~12	8 石・鹿・白	にぶい黄褐	にぶい黄褐	階帯、細文LR	外面	内面	11/36	28/36	

別表 6 道正遺跡土製品観察表

国版 No.	写真国版 No.	報告 No.	遺構名	層位	器種	分類	法量 (mm)			胎土	重量 (g)	色調	調整等	
							口径	口径	口径				長×幅	調整等
104107	1	SK281	2C-1J23	V	管状土鉢	細型A2	28.9	8.3	3.0	3.5	1.4	細砂粒含む	にぶい黄 (7.5YR6/4)	
104107	2	SK284	2C-1J13	V	管状土鉢	細型A1	41.4	6.5	2.5~3.0	6.4	1.4	砂粒多く含む	灰黄 (2.5Y6/2)	
104107	3	SK284	2C-1J13	V	管状土鉢	細型A1	47.3	8.3	3.0	5.7	2.6	砂粒多く含む	灰黄褐 (10YR6/2)	
104107	4	SK284	2C-1J18	V	管状土鉢	細型A1	31.8	7.0	2.5~3.0	4.5	1.1	砂粒含む	灰黄 (2.5Y6/1)	
104107	5	—	2C-114	V	管状土鉢	細型A1	41.5	7.8	2.8	5.3	1.8	大粒の砂粒も含む	灰白 (2.5Y8/2)	
104107	6	—	2C-119	V	管状土鉢	細型A1	48.0	8.3	2.8	5.8	2.3	砂粒含む	灰白 (10YR7/3)	
104107	7	—	2C-113	V	管状土鉢	細型A1	40.2	8.5	3.0	4.7	2.0	大粒の砂粒も含む	灰白 (10YR8/2)	
104107	8	—	2C-1H10	V	管状土鉢	細型A1	41.3	8.4	2.8	4.9	2.2	精良	灰黄 (2.5Y7/2)	
104107	9	—	2C-1H10	V	管状土鉢	細型A1	42.9	9.4	3.5	4.6	2.6	精良	にぶい黄褐 (10YR7/2)	
104107	10	—	1D-10A12	Via	管状土鉢	細型A1	44.0	8.8	2.9	5.0	2.2	砂粒多く含む	にぶい黄褐 (10YR7/3)	
104107	11	—	2C-217	V	管状土鉢	細型A1	45.6	9.2	3.0	5.0	2.6	砂粒多く含む	浅黄褐 (10YR8/2)	
104107	12	—	2C-1J18	Via	管状土鉢	細型A1	48.5	9.3	4.0	5.2	2.9	精良	灰白 (10YR8/2)	
104107	13	—	1D-10A17	Via	管状土鉢	細型A1	50.9	9.9	3.0	5.1	3.6	砂粒含む	にぶい黄褐 (10YR6/3)	
104107	14	—	2C-118	Via	管状土鉢	細型A1	37.0	8.2	3.5	4.5	1.8	砂粒含む	にぶい黄褐 (10YR7/3)	
104107	15	—	2C-113	V	管状土鉢	細型A1	38.3	9.0	2.5	4.3	2.0	精良	にぶい黄褐 (10YR7/2)	
104107	16	—	1D-10A12	Via	管状土鉢	細型A1	39.5	9.0	3.0	4.4	2.4	砂粒含む	灰白 (10YR8/2)	
104107	17	—	2C-216	V	管状土鉢	細型A2	31.2	8.1	3.0~3.5	3.9	1.5	精良	灰白 (10YR8/1)	
104107	18	—	1C-10114	Via	管状土鉢	細型A2	32.5	8.6	2.8	3.8	1.8	砂粒含む	灰白 (10YR8/2)	
104107	19	—	2C-117	V	管状土鉢	細型A2	34.4	8.9	3.5	3.9	2.9	精良	灰黄 (2.5Y7/2)	
104107	20	—	2C-117	V	管状土鉢	細型A2	35.6	9.6	3.4	3.7	2.8	砂粒含む	灰白 (10YR8/2)	
104107	21	—	2C-219	V	管状土鉢	細型A2	36.1	9.6	4.0	3.8	2.2	精良	灰白 (10YR8/2)	
104107	22	—	2C-117	V	管状土鉢	細型A2	37.7	9.4	2.9	4.0	2.5	砂粒含む	灰黄 (2.5Y7/2)	
104107	23	—	2D-2A1	V	管状土鉢	細型A2	38.6	9.7	3.4	4.0	2.6	砂粒含む	にぶい黄 (5YR6/4)	
104107	24	—	2C-117	V	管状土鉢	細型A2	40.0	10.5	3.1	3.8	3.5	砂粒含む	灰黄 (2.5Y7/2)	
104107	25	—	2C-117	V	管状土鉢	細型A2	28.9	8.5	3.0	3.4	1.8	砂粒含む	灰黄 (2.5Y7/2)	
104107	26	—	2C-214	V	管状土鉢	細型A2	29.1	8.7	3.1	3.3	2.0	精良	にぶい黄褐 (10YR7/2)	
104107	27	—	2C-215	V	管状土鉢	細型A2	29.7	9.5	3.6	3.1	1.8	砂粒含む	灰白 (10YR8/1)	
104107	28	—	2C-210	V	管状土鉢	細型A2	32.4	10.0	4.0	3.2	2.3	砂粒含む	灰白 (10YR8/2)	
104107	29	—	2C-2110	V	管状土鉢	細型A2	34.4	10.3	3.5	3.3	2.7	砂粒含む	にぶい黄褐 (10YR7/2)	
104107	30	—	2C-1E19	Via	管状土鉢	細型B	41.0	13.2	4.4	3.1	5.4	砂粒多く含む	にぶい黄褐 (7.5YR7/3)	
104107	31	—	2D-1E14	V	管状土鉢	細型B	47.2	14.2	4.2	3.3	7.1	砂粒多く含む	灰黄 (8.5Y7/2)	
104107	32	—	1D-10B10	Via	管状土鉢	細型B	44.0	14.4	4.4~5.0	3.1	7.9	砂粒含む	灰白 (10YR8/2)	焼成硬質 孔の断面が多角形 下側欠損か
104107	33	—	2D-2A9	Vic1	管状土鉢		45.1	36.1	6.5~9.0	1.2	45.9	精良	にぶい黄褐 (10YR6/3)	
104107	34	—	1C-10111	V	管状土鉢		82.2	38.0	14.1	2.2	108.3	精良	灰白 (2.5Y7/1)	
104107	35	—	2C-113	V	管状土鉢		72.0	53.8	13.5	1.3	148.0	精良	灰白 (2.5Y8/2)	
104107	36	—	2C-1H4	Via	土鉢か		77.2	76.3	5.0	1.0	206.0	砂粒を多く含む	にぶい黄褐 (10YR7/3)	
104107	37	—	1C-10H10	V	出簡形土製品		114.0	131.0	62.0~93.0	—	282.5	砂粒を多く含む	灰白 (10YR8/2)	
104107	38	—	1D-9B23	Via	曼脚状土製品		24.5	49.6	17.9	—	13.3	精良	灰黄 (2.5Y6/1)	一部に赤形残存 炭化物付着
104107	39	—	2D-2A6	V	不明		23.0	40.2	—	—	14.3	精良	にぶい黄褐 (10YR7/2)	



別表7 道正遺跡石器・石製品観察表

## 石鏃

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	遺存状態	側縁形態 (正面観)	備考
			グリッド	遺構名	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
106	61・108	1	2D-1C17	SK400	1	A	(22.4)	12.5	4.45	(1.0)	珪質頁岩	先端・中茎欠	直線	アスファルト付着
106	108	2	2D-1B20		VIIa	B	(37.0)	14.3	6.0	(2.7)	珪質頁岩	中茎欠	直線・外湾	アスファルト付着、片側は凸基
106	108	3	2C-1I12		Vlc	B	(39.8)	14.0	10.0	(2.6)	鉄石英(黄)	中茎欠	直線・外湾	
106	61・108	4	2C-1I22		Vlc	B	35.0	19.6	6.7	3.0	珪質頁岩	完形	内湾	側縁部の凹凸顕著
106	108	5	2C-1I13		Vlc	B	22.0	14.6	10.0	1.5	半透明頁岩	完形	外湾	
106	61・108	6	2D-1A20		VIIa	C1	34.6	11.2	5.4	1.4	半透明頁岩	完形	直線	
106	108	7	2C-2I7		Vlc1	C1	25.5	10.9	4.5	0.8	メノウ	完形	直線	
106	108	8	2C-1I19		VIIa	C1	23.7	13.1	4.7	0.8	緑色凝灰岩	完形	直線・内湾	
106	108	9	2C-1I20		Vlc	C1	23.4	14.2	4.5	0.9	半透明頁岩	完形	直線	アスファルト付着、尖頭部短い
106	108	10	2C-1I23		Vlc	C1	18.7	11.7	3.1	0.4	珪質頁岩	完形	内湾	アスファルト付着、尖頭部短い
106	108	11	1D-10F1		VI	C2	(41.7)	20.7	8.5	(5.8)	半透明頁岩	先端欠	直線	アスファルト付着
106	61・108	12	1C-10I18		Vlc	C2	(52.9)	17.1	7.7	(5.1)	珪質頁岩	先端欠	直線	先端衝撃剥離あり
106	108	13	2C-1I23		Vlc	C2	32.6	12.2	8.6	2.5	鉄石英(赤)	完形	直線・内湾	作りは粗雑、未成品の可能性あり
106	108	14	2D-1D25	SX537	1	C2	(22.7)	12.3	5.3	(1.2)	メノウ	中茎欠	外湾	
106	108	15	2C-1I12		Vlc	C2	20.3	8.4	4.0	0.6	半透明頁岩	完形	直線	裏面は反り気味
106	61・108	16	1D-10E22		Vlc	D	44.1	14.3	10.1	4.7	頁岩	完形	外湾	裏面は反り気味
106	108	17	2D-1C16		Vlc	D	28.5	8.6	3.9	0.8	メノウ	完形	外湾	正面反り気味
106	108	18	2D-1D24		VIIa	D	20.9	8.4	6.2	0.7	鉄石英(赤)	完形	外湾	作りは粗雑、アスファルト付着

## 石鏃未成品

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	素材	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)		幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
106	108	19	2C-1I16	VIIa	A	34.5	21.3	9.7	7.0	半透明頁岩	横長	片側縁切断あり	
106	108	20	2C-1H25	VIIa	A	36.3	23.3	7.4	4.5	珪質頁岩	横長	片側縁切断あり	
106	108	21	2C-1I16	Vlc	A	20.5	20.2	5.3	1.8	頁岩	横長	小型品か	
106	108	22	2C-1I17	VIIa	B	40.7	23.9	11.6	10.6	流紋岩	横長	両側縁切断あり	
106	108	23	2C-1H25	Vlc	B	32.8	21.8	10.0	5.1	半透明頁岩	横長	有茎鏃	
106	108	24	2C-1I22	Vlc	B	31.0	22.2	10.8	5.1	メノウ	—	有茎鏃	

## 尖頭器

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			大きさ				石材	素材	遺存状態	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
107	108	25	2C-1I23	Vlc	(49.6)	36.7	15.4	24.5	頁岩	—	尖頭部・基部欠	丁寧な押圧剥離、多時期の所産か	

## 石鏃

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	素材	遺存状態	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)		幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
107	61・108	26	2C-2I10	Vlc2	A	55.0	26.4	9.4	7.0	珪質頁岩	—	ほぼ完形	アスファルト多く付着、被熱	
107	61・108	27	2C-1I23	Vlc	A	54.8	18.2	7.6	3.9	珪質頁岩	—	完形	鏃部摩耗	
107	108	28	1D-10E23	Vlc	A	(32.7)	18.3	8.1	(2.9)	メノウ	—	略完形	鏃部先端欠、鏃部摩耗	
107	61・108	29	2C-1I13	Vlc	B1	48.0	27.6	12.3	12.4	流紋岩	横長	完形	鏃部摩耗	
107	61・108	30	2D-1A14	Vlc	B2	31.2	10.8	4.9	1.3	頁岩	縦長	完形	鏃部摩耗、アスファルト付着	
107	61・108	31	1C-10I7	VIIa	B2	29.2	9.2	6.0	1.6	珪質頁岩	—	完形	鏃部摩耗、アスファルト付着	

## 石鏃未成品

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			大きさ				石材	素材	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
107	108	32	1D-9D18	VIIa	45.0	25.7	10.9	11.9	頁岩	横長	A類の未成品か	

## 削器

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	素材	二次調整部位	遺存状態	備考
			グリッド	遺構名	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
107	109	33	1C-10I19	VIIa	A	27.7	41.0	12.9	11.4	流紋岩	横長	正面底縁	完形		
107	109	34	2C-1H25	Vlc2	A	64.9	38.5	18.5	39.8	流紋岩	縦長	裏面底縁	完形		
107	109	35	2C-1I17	Vlc	B	17.4	29.0	12.5	12.3	半透明頁岩	縦長	正面底縁	完形		
108	109	36	1D-10E4	VI・VII	C	45.0	30.9	10.5	14.8	頁岩	縦長	裏面右側縁	完形	切断あり	
108	109	37	2C-1I22	VIIa	C	52.0	29.5	9.0	14.0	珪質頁岩	横長	裏面右側縁	完形	切断あり	
108	109	38	2C-2H10	Vlc2	D	61.8	35.9	18.2	27.0	珪質頁岩	横長	底縁	完形		
108	109	39	2C-1I22	VIIa	D	40.5	29.0	14.5	17.9	鉄石英(赤)	—	全周	完形		
108	109	40	2C-1I23	Vlc	E1	37.6	54.1	10.1	14.0	頁岩	横長	—	完形	底縁に微細剥離	
108	109	41	2C-1H25	VIIa	E1	28.4	39.4	8.5	9.0	半透明頁岩	横長	—	完形	底縁に微細剥離	
108	109	42	2C-1I13	VIIa	E2	83.6	63.0	26.8	105.6	花崗岩	横長	—	完形	底縁に摩耗	
108	109	43	1C-10I18	Vlc	E3	64.5	35.0	15.0	22.7	凝灰岩	横長	—	完形	先端部に衝撃剥離あり	

## 両極剥離痕のある石器

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	素材	状態	自然面	備考
			グリッド	遺構名	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
109	109	44	2C-1I13		VIIa	A	46.5	28.5	10.3	18.0	頁岩	板状礫	石核状	有	
109	109	45	2D-1D25		VIIa	A	60.1	18.3	10.6	12.4	半透明頁岩	棒状礫	剥片状	有	
109	109	46	1D-10B7		Vlc	A	23.3	44.4	14.4	12.1	頁岩	石核	石核状	無	
109	109	47	2C-1I13		Vlc	A	32.0	23.8	9.5	5.9	半透明頁岩	円礫	剥片状	有	
109	109	48	2C-1H5		VIIa	A	34.4	22.4	9.2	6.4	流紋岩	剥片?	剥片状	無	
109	109	49	1D-9B23	SK404	1	B	28.0	24.1	12.4	5.7	珪質頁岩	剥片?	剥片状	有	アスファルト付着
109	109	50	2C-1J21		Vlc	B	43.3	42.9	16.7	33.2	珪質頁岩	石核	石核状	無	
109	109	51	2D-1D23		V	B	45.0	38.4	22.1	47.5	硬砂岩	扁平礫	石核状	有	

別 表

打製石斧

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		大きさ				石材	素材	刃部平面形	刃部断面形	遺存状態	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)						
109	110	52	1D-10A7	Vlc	(55.6)	(46.0)	(28.6)	(69.2)	頁岩	-	円刃	片刃	基部欠	中期以前の所産か

磨製石斧

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		大きさ				石材	刃部平面形	刃部断面形	遺存状態	基部敲打	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)						
109	61・110	53	2C-1I23	VIIa	(95.1)	(55.0)	32.4	(230.0)	輝緑岩	-	-	刃部欠	-	基部は剥離で一部欠く
109	61・110	54	2D-1C13	Vlc	(39.9)	(32.0)	(27.5)	(41.2)	輝緑岩	-	-	刃部欠	無	
109	110	55	2D-1C6	Vd	(73.5)	(52.9)	30.6	(185.0)	輝緑岩	-	-	刃部・基部欠	-	
109	61・110	56	2C-1I18	VIIa	(56.4)	57.9	(57.6)	(142.3)	輝緑岩	円刃	両刃	基部欠	-	刃こぼれあり
109	61・110	57	1D-9E25	VII	(65.5)	59.4	(30.5)	(175.0)	輝緑岩	円刃	両刃	基部欠	-	刃こぼれあり
110	110	58	1D-10B7	Vlc	(91.0)	(76.8)	(27.6)	(273.0)	輝緑岩	円刃	両刃	一部刃部・基部欠	-	刃こぼれあり、風化著しい

磨製石斧未成品

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		大きさ				石材	刃部平面形	刃部断面形	遺存状態	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
110	61・110	59	1C-1O14	VIIa	131.0	46.0	37.0	342.0	輝緑岩	-	-	刃部側欠	敲打最終段階の欠損品か、風化著しい
110	61・110	60	1C-1O115	Vlc	116.0	46.9	31.9	265.0	輝緑岩	-	-	刃部側欠	敲打最終段階の欠損品か、風化著しい
110	110	61	2C-1H9	Vlc	129.6	70.3	28.0	398.0	輝緑岩	-	-	刃部側欠	敲打最終段階の欠損品か、風化著しい

石錘

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		大きさ				石材	素材	遺存状態	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
110	110	62	2C-1H23	VIIa	99.8	73.6	29.1	335.0	石英閃緑岩	扁平楕円盤	完形	縦長石錘
110	110	63	2C-1I22	Vlc	72.8	38.7	20.2	67.6	砂岩	扁平盤	1/3欠	紐掛け部は長軸短軸の4か所か
110	110	64	2D-1C1	Vlc	78.7	63.2	20.7	160.2	デイスайト	扁平楕円盤	完形	横長石錘

多面体敲石 (ハンマー)

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		大きさ				石材	素材	敲打部位	遺存状態	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
110	61・110	65	1D-10A8	VIIa	(63.2)	(38.7)	(32.2)	(98.3)	鉄石(黄)	垂角礫?	ほぼ全面	3/4欠	敲打時に破損か
110	61・110	66	1C-1O114	Vlc	(63.1)	(51.8)	(32.1)	(143.3)	輝緑岩	垂角礫?	ほぼ全面	1/2欠	敲打時に破損か
110	110	67	2C-1H15	V	47.8	37.7	34.4	81.8	輝緑岩	垂角礫?	ほぼ全面	完形	被熱

磨石類

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	素材	磨痕部位	敲打部位	遺存状態	備考
			グリッド	遺構名	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)						
110	110	68	2C-1I11		VIIb	A1	111.8	96.7	59.7	994.0	輝緑岩	扁平円盤	正裏面		完形	
111	110	69	2C-1I12		Vlc	A1	111.7	87.4	57.0	772.0	デイスайト	扁平楕円盤	正裏面		完形	
111	62・110	70	2D-1D22	SI266	2	A1	87.5	67.7	46.7	419.7	輝緑岩	扁平楕円盤	正裏面		完形	
111	110	71	2D-1C1		Vlc	A2	96.8	80.0	65.7	700.0	安山岩	楕円盤	全面		完形	
111	62・110	72	2C-1H25		Vlc	B1	111.6	78.7	63.0	594.0	安山岩	扁平楕円盤	正裏面	正裏面	完形	
111	111	73	2C-1I13		VIIa	B1	126.0	103.8	58.8	1159.0	花崗閃緑岩	扁平楕円盤	正裏面	正裏面	完形	
111	62・111	74	2C-1I17		Vlc	B2	110.3	81.0	59.8	885.0	安山岩	扁平楕円盤	正裏面	周縁	完形	平面石鏝状
111	111	75	2C-1J21		Vlc	B2	93.6	76.7	44.8	508.0	安山岩	扁平楕円盤	正裏面	両側面・両端	完形	平面石鏝状
111	62・111	76	1D-9C17		VIIa	B3	83.1	61.8	55.0	400.0	花崗岩	楕円盤	正裏面	両端	完形	
112	111	77	2C-1I16		VIIa	B4	100.2	92.9	49.9	672.0	安山岩	扁平楕円盤	正裏面	正面・両側面・両端	完形	
112	62・111	78	2C-1J16		VIIa	B4	98.2	75.4	40.4	410.0	安山岩	扁平楕円盤	正裏面	正裏面・両側面	完形	被熱
112	111	79	2C-1H4		Vlc	B4	73.7	68.8	37.4	262.0	安山岩	扁平楕円盤	正裏面	正裏面・両側面	完形	
112	62・111	80	2C-1I22		Vlc	B5	115.0	70.3	58.5	775.0	デイスайト	長楕円盤	正裏面	正面・両端	完形	
112	111	81	2D-2D4		Vlc2	C2	163.8	79.3	40.0	823.0	輝緑岩	扁平長楕円盤		片側面	完形	風化著しい
112	111	82	2C-2J6		V	C3	127.4	69.6	48.4	591.5	デイスайト	長楕円盤		両端	完形	
112	111	83	2C-1H13		VI・VII	C3	143.3	57.5	49.9	588.0	流紋岩	長楕円盤		両端	完形	被熱
112	111	84	1D-10B4		Vlc	C4	111.1	73.5	42.3	478.0	輝緑岩	扁平楕円盤		両側面・両端	完形	
112	111	85	1C-10H19		VIIa	D	78.5	50.4	27.8	203.0	輝緑岩	磨製石斧破損品		片端	完形	転用品

砥石

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	砥石部位	砥石作出	砥石状態	遺存状態	備考
			グリッド	遺構名	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)						
113	111	86	2C-1I22		Vlc	A	259.2	238.6	101.0	8400.0	凝灰岩	正裏面	無	中砥	完形	裏面に剥離あり
113	111	87	2C-2I12		Vlc1	A	(71.1)	(59.0)	(28.9)	(174.0)	凝灰岩	正裏面	有	荒砥	破片	石質は粗い・粒子
113	111	88	2D-1F11		VIIa	A	(84.6)	60.7	55.4	(569.0)	凝灰岩	正裏・両側面	有	荒砥	両端欠	
113	111	89	2C-1H18		VI・VII	B1	(115.7)	86.4	45.8	(553.0)	花崗岩	正裏・片側面	無	荒砥	完形	
113	111	90	2D-1D19	SI266周堤	1	B2	96.3	35.9	38.9	164.0	凝灰岩	正裏・両側・両端	有	細砥	接合ほぼ完形	2分割、砥石作出の痕跡良く残る
113	111	91	1D-10A22		VIIa	B2	86.3	45.5	30.2	126.0	泥岩	正裏・両側・片端	有	細砥	完形	
113	112	92	1D-10B20		VI	B2	(31.9)	(22.1)	(20.0)	(13.7)	凝灰岩	正裏・両側・片端	有	細砥	破片	端部は刃物状の擦痕あり
114	112	93	1C-10I25・10J21ほか	59トレンチ	IXb~XIa	B2	58.5	42.4	31.7	112.5	凝灰岩	正裏・両側・両端	有	細砥	完形	IXb~XIaはVd~VIIa層に相当する
114	112	94	2C-1J10		Vlc	B3	(86.2)	40.6	(23.6)	(52.9)	凝灰岩	正裏・片側面	有	細砥	両端欠	溝幅6.5~9.0mmで断面半円状を呈す、玉作砥石
114	112	95	2C-1I23		Vlc	B3	(90.6)	57.0	33.5	(249.0)	凝灰岩	正裏・片縁	有	細砥	1/3欠	片縁辺部は両面から剥離を加え砥面を形成、内磨砥石

## 台石類

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	素材	使用部位	側面成形	遺存状態	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)						
114	112	96	2D-1B4	Vlc	A	130.3	135.5	36.2	800.0	砂岩	扁平楕円礫	正面	有	1/2欠	
114	112	97	2C-1I23	Vlc	A	(152.7)	(115.4)	78.7	(1585)	安山岩	扁平礫	正裏面	有	破片	被熱
114	112	98	2C-1I17	Vlc	A	(196.1)	(176.5)	69.9	(2600)	安山岩	扁平礫	正裏面	有	3/4欠	
114	112	99	2C-1H20	Vlc	A	(229.0)	(148.6)	77.7	(3600)	花崗岩	扁平礫	正面	有	1/2欠	被熱
114	112	100	2C-1I22	Vlc	B	226.0	176.7	55.0	2900	デイスайト	扁平楕円礫	正面	無	完形	
114	62・112	101	2C-1I22	Vlc	B	247.0	206.3	104.1	7900	デイスайト	扁平円礫	正面	無	完形	敲打痕もわずかにあり
115	112	102	2C-1I24	Vlc	B	258.0	223.8	93.5	9000	花崗岩	扁平円礫	正面	無	略完形	風化著しい
115	112	103	2C-1I13	Vlc	B	203.7	157.6	86.2	5200	花崗岩	扁平楕円礫	正面	無	完形	SI264直上にあり
115	112	104	2C-2I2	Vla	C	139.0	127.2	24.5	692	安山岩	扁平円礫	正裏面	無	完形	被熱によるハジケあり
115	112	105	2C-1H20	Vlc	C	165.9	139.5	41.7	1572	花崗岩	扁平円礫	正裏面・側縁	無	完形	側縁に敲打痕及び伴う剥離あり、被熱
115	112	106	2C-1H20	Vlc	C	170.7	141.2	50.0	1778	安山岩	扁平楕円礫	正裏面	無	完形	正裏面に磨痕・敲打痕あり

## 剥片類

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	打面幅 (mm)	備考
			グリッド	遺構名	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
115	113	107	2C-1I7		Vlc	A1	39.4	50.2	24.8	36.8	メノウ	35.4	
115	113	108	1D-10A24		Vlc	A2	36.9	58.0	10.8	17.4	頁岩	28.3	
115	113	109	1C-10J12		Vla	B2	46.1	36.2	13.5	19.3	半透明頁岩	12.3	アスファルト付着
115	113	110	2C-1H11		VI・VII	B2	32.2	28.6	11.5	9.6	半透明頁岩	16.6	
115	113	111	2C-1I19		Vla	B3	33.9	70.0	16.5	15.0	頁岩	48.1	
115	113	112	2C-2I18		Vlc	C1	44.8	29.2	14.1	17.3	鉄石英(黄)	6.8	
116	113	113	2D-1C13		Vlc	C2	43.7	21.3	8.1	6.2	鉄石英(黄)	14.0	
116	113	114	2C-1I7		Vlc	C2	31.7	41.6	12.6	11.8	鉄石英(赤)	32.9	
116	113	115	2C-2I6		Vlc2	C3	30.0	42.4	18.0	10.7	頁岩	14.8	
116	113	116	1D-10D14		Vlc	C3	33.0	31.9	9.6	7.8	球質頁岩	26.4	
116	113	117	2D-1B15		Vlc	-	33.6	35.9	15.9	10.3	頁岩	-	アスファルト付着、打面不明、切断あり
116	113	118	1D-10C22ほか	61トレンチ	XVla	-	27.7	18.5	16	7.2	デイスайト	-	ベンガラ付着、打面不明、Vlc層相当出土

## 石核

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	素材	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
116	113	119	2C-1I18	Vlc	A	75.7	35.9	16.5	39.3	鉄石英(黄)	縦長剥片	
116	113	120	1C-10I17	Vlb	A	47.8	25.9	11.5	20.4	鉄石英(赤)	縦長剥片	
116	113	121	1D-10A10	Vlc	B	75.8	24.9	41.5	135.8	流紋岩	垂角礫	
116	113	122	1D-10D20	Vlc	B	28.4	21.0	16.2	12.3	半透明頁岩	円礫	
116	113	123	2C-1H25	Vlc2	D	64.7	57.3	31.7	102.9	鉄石英(黄)	礫	
116	113	124	地点不明	排土	F	54.3	46.9	65.7	153.2	頁岩	垂角礫	
116	113	125	1D-10F6	VI	G	61.3	33.4	25.0	60.7	鉄石英(赤)	-	

## 鏡面状の光沢を有する石器

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		大きさ				石材	遺存状態	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
117	113	126	2C-2I9	V	103.5	67.4	29.2	209.4	デイスайト	完形	
117	62・113	127	2D-1B10	Vlc	71.0	51.3	20.7	112.7	ホルンフェルス	完形	
117	113	128	1C-10I16	Vlc	53.1	37.6	36.2	97.2	石英閃緑岩	完形	
117	113	129	1D-10D20	Vla	41.7	33.8	28.0	52.6	安山岩	略完形	被熱のハジケあり

## 軽石製品

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点			分類	大きさ				石材	遺存状態	備考	
			グリッド	遺構名	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
117	114	130	2C-2I7		Vlc1	A	90	67.7	57.3	137.9	軽石	略完形	正面使用により平面状、右側面・下端に使用による滑らか	
117	114	131	2C-1H14		Vlc	A	72.0	56.3	35.7	52.9	軽石	1/2欠	正裏面・両側面の使用により断面長方形状を呈す	
117	114	132	2C-2I10		Vlc2	A	48.0	69.0	17.0	24.6	軽石	2/3欠	正裏面の使用により板状を呈す	
117	114	133	2D-1C8		Vlc	A	65.1	41.0	18.8	21.9	軽石	完形	正面使用により平面状を呈す	
117	114	134	2C-2I9		V	A	41.5	38.8	25.2	11.1	軽石	完形	正面穿孔痕、右側面筋状の刻みあり	
117	114	135	2D-2A7		V	A	38.9	35.2	15.8	11.1	軽石	一部欠	正裏面使用により滑らかな曲面、裏面ガジリあり	
117	114	136	2C-1I4		Vla	A	34.4	27.7	20.7	5.8	軽石	一部欠	正面湾状のくぼみあり、下端ガジリあり	
118	114	137	2D-2B1		Vla	A	33.8	31.1	20.2	4.9	軽石	完形	正面・両側面に加工あり	
118	114	138	2D-1A9		SD304	I	41.2	28.3	7.7	3.7	軽石	完形	正裏面平面状を呈す	
118	114	139	地点不明		排土	B	49.8	43.5	36.3	32.5	軽石	完形	円球状を呈す	
118	114	140	1D-10E23・24・25		62トレンチ	排土	B	69.4	47.5	45.8	61.1	軽石	完形	楕円球状を呈す
118	114	141	1D-10E23・24・25			排土	B	62.1	43.7	40.0	41.1	軽石	完形	楕円球状を呈す
118	114	142	1D-10E23・24・25			排土	B	39.1	26.0	19.0	7.8	軽石	完形	楕円球状を呈す
118	114	143	1D-10E24			排土	B	27.5	20.6	15.9	4.4	軽石	完形	楕円球状を呈す
118	114	144	2D-1C17			Vlc	B	24.9	22.3	6.9	1.7	軽石	完形	扁平円形を呈す

## 玉作資料

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	器種名	出土地点		大きさ				石材	素材	玉作工程	備考
				グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
118	114	145	石核	1D-10E16	Vlc	64.7	45.7	43.2	134.8	緑色凝灰岩	角礫	第1工程	石材は佐渡からの搬入品か

## 石棒・石剣類

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		大きさ				石材	遺存状態	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
118	114	146	2C-1I22	Vlc	(153.7)	(33.3)	(18.9)	(125.2)	粘板岩	破片	中央部やや黒変
118	114	147	2C-1I13	Vlc	(76.4)	29.2	25.6	(98.1)	粘板岩	破片	頸部破片、熊登型石剣
118	114	148	1D-10C8	Vlc	(65.9)	(28.4)	(10.5)	(25.4)	粘板岩	破片	
118	114	149	2C-2H10	Vlc2	(49.7)	(19.0)	(3.8)	(4.5)	粘板岩	破片	正面右に稜あり、石剣
118	114	150	2C-1I18	Vla	(37.2)	(23.3)	(7.8)	(6.0)	粘板岩	破片	
118	114	151	2C-1I19	Vla	(78.1)	28.0	11.5	(40.3)	粘板岩	破片	身部破片、横断面形から石刀と推定

別 表

その他の石製品

図版No.	写真図版No.	報告No.	器種名	出土地点		大きさ				石材	素材	遺存状態	備考
				グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
119	114	152	石冠	2C-1H3	V1c	(100.4)	57.6	47.2	(361.1)	ホルンフェルス	棒状礫	1/3欠	未成品、基底部・側面は敲打、頭部は剥離痕あり
119	114	153	独鈷石	1D-9B19	V7a	90.2	84.5	60.5	505.2	ホルンフェルス	-	1/2欠	被熱によるハジケあり

玉類 (縄文時代)

図版No.	写真図版No.	報告No.	器種	出土地点			大きさ				石材	遺存状態	所属時期	備考
				グリッド	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
119	60・62・114	154	勾玉	2D-1C6	SD451	1	48.0	27.0	18.9	38.9	ヒスイ	完形	縄文晩期中葉	両側穿孔、素材の形状が残る
119	60・114	155	勾玉	1D-10A24		V7a	16.6	10.5	5.6	1.6	ヒスイ	完形	縄文晩期中葉	片側穿孔
119	60・114	156	垂玉	2D-1C17	SK400	1	27.4	19.0	9.6	7.2	ヒスイ	完形	縄文晩期中葉	片側穿孔、刻みのある不定形な垂玉
119	60・114	157	丸玉	2C-1H20		V1c	16.8	16.0	11.2	4.1	ヒスイ	完形	縄文晩期中葉	両側穿孔、風化著しく、剥落見られる
119	60・114	158	瘡玉	2D-1C17	SK400	1	21.5	10.3	7.3	3.1	ヒスイ	略完形	縄文晩期中葉	両側穿孔、横断面は隅丸長方形
119	62・114	159	垂玉	1D-10D22・23		V1c	30.8	25.4	13.3	8.7	滑石	一部欠	縄文晩期中葉	根付状の垂玉

管玉 (古墳時代)

図版No.	写真図版No.	報告No.	器種	出土地点			大きさ				石材	遺存状態	所属時期	備考
				グリッド	遺構名	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
119	62・114	160	管玉	2C-219		V1a	15.7	5.9	5.9	0.9	緑色凝灰岩	完形	古墳前期	片側穿孔
119	62・114	161	管玉	2D-1D23	SI266	2	14.1	5.7	5.7	0.8	緑色凝灰岩	完形	古墳前期	片側穿孔

別表 8 道正遺跡木製品観察表 (試料 No. は樹種同定、年代測定の分析試料 No. と一致する)

図版No.	写真図版No.	報告No.	試料No.	出土地点			ビットの性格	器種	大きさ			木取	底面状態	樹皮有無	樹種	備考	遺構確認面
				グリッド	遺構名	出土層位			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)						
120	115	1	14	2D-1D12	SI266-P399	1	主柱	柱根	26.0	16.7	13.2	芯持丸木	平坦	無	ケヤキ	年代測定	床面 (VII)
120	115	2	15	2D-1D22	SI266-P550	3	主柱	柱根	23.0	18.0	16.3	芯持丸木	平坦	有	ケヤキ		床面 (VII)
120	115	3	4	2C-1110	SB330-P290	1	側柱	柱根	28.0	18.5	13.5	芯持丸木	平坦	有	トネリコ属	年代測定	V1c
120	115	4	6	2C-1J8	SB330-P293	1	側柱	柱根	20.6	12.9	12.4	芯持丸木	段差	無	トネリコ属		V1c
120	115	5	8	2C-1J16	SB330-P295	1	側柱	柱根	19.7	13.7	16.0	芯持丸木	平坦	無	ケヤキ	底面浅い段差あり	V1c
120	115	6	7	2C-1J12	SB330-P294	1	本柱	柱根	21.0	16.8	16.3	芯持丸木	段差	無	-	正裏面面取り	V1c
120	115	7	9	2C-1J22	SB330-P296	3	側柱	柱根	19.4	16.4	14.3	芯持丸木	尖底	無	トネリコ属	底面両刃状に尖る	V1c
120	115	8	5	2C-1J2	SB330-P292	1	側柱	柱根	20.7	16.3	17.5	芯持丸木	尖底	無	トネリコ属	両側面面取り 底面両刃状に尖る	V1c
120	115	9	10	2C-1J24	SB330-P342	2	側柱	柱根	8.7	7.5	6.4	芯持丸木	斜め	無	コナラ属コナラ節		V1c
120	25・115	10	-	2C-2110	SB521-P509	底面	本柱	不明	13.0	2.3	2.0	柂目	-	無	-	全体形は舟形状を呈すが、中の削り抜きがない	V1c1
120	115	11	16	2C-2114	SB521-P506	2	側柱	柱根	33.0	9.5	8.2	芯持丸木	尖底	有	クリ	底面両刃状に尖る	V1c1
121	116	12	19	2C-2J12	SB521-P513	2	側柱	柱根	46.4	15.6	12.5	芯持丸木	尖底	有	ニレ属	底面両刃状に尖る、年代測定	V1c1
121	116	13	18	2C-2J3	SB521-P525	2	側柱	柱根	35.0	16.0	13.3	芯持丸木	尖底	有	トネリコ属	右側面面取り	V1c1
121	116	14	-	2C-2J7	SB558-P534	2	側柱	柱根	21.8	10.0	8.0	芯持丸木	尖底	有	-	底面両刃状に尖る	V1c1
121	116	15	20	2C-2J7	SB558-P541	2	側柱	柱根	15.2	8.0	7.5	芯持丸木	平坦	有	ヤナギ属		V1c1
121	116	16	13	1C-10J3	SE268	6	-	水溜	16.0	43.0	6.5	芯去丸木	-	無	コナラ属コナラ節	長径43.0×短径40.0×深さ16.0cmの削り抜き材の水溜 年代測定	V1c
121	116	17	26	2D-2C2	SX517-①	2	-	板材	31.0	6.8	2.2	板目	-	無	スギ	図面図版24-①に同じ、仕切り板 (土留め)	V1c1
121	116	18	21	2D-2C2	SX517-②	2	-	板材	63.3	7.0	15.0	板目	-	無	スギ	図面図版24-②に同じ、仕切り板 (土留め)	V1c1
121	116	19	22	2D-2C7	SX517-③	2	-	板材	60.0	9.0	16.0	板目	-	無	スギ	図面図版24-③に同じ、仕切り板 (土留め)	V1c1
121	116	20	23	2D-2C2	SX517-④	2	-	板材	29.2	2.7	1.0	板目	-	無	スギ	図面図版24-④に同じ、仕切り板 (土留め)	V1c1
121	116	21	24	2D-2C7	SX517-⑤	2	-	板材	43.0	3.0	2.5	板目	-	無	スギ	図面図版24-⑤に同じ、仕切り板 (土留め)	V1c1
121	116	22	25	2D-2C7	SX517-⑥	2	-	板材	45.5	4.5	2.3	板目	-	無	スギ	図面図版24-⑥に同じ、仕切り板	V1c1
			1	1C-9I25	SB483-P204	3	側柱	柱根	14.0	7.7	3.2	-	-	-	クマシデ属イヌシデ節	腐植激しく小破片	V1c
			-	1C-10J7	SB482-P258	1	床束柱?	柱根	9.2	3.1	3.2	-	-	-	-	腐植激しく小破片	V1c
			11	2C-1J23	SB330-P371	3	側柱	板材	16.7	4.0	0.1	板目	-	-	サワラ	腐植激しい	V1c
			3	2C-1J23	SB558-P372	2	側柱	柱根	4.3	3.7	2.1	-	-	-	ハンノキ属ハンノキ節	腐植激しく、小破片	V1c
			12	2C-2J2	SB330-P373	1	側柱	柱根	7.3	12.7	11.0	-	-	-	トネリコ属	腐植激しく、小破片に分裂	V1c
			2	2C-1I25	SB521-P374	2	側柱	柱根	-	-	-	-	-	-	-	腐植激しく、残存せず	V1c
			17	2C-2J1	SB521-P510	1	側柱	柱根	14.8	4.8	3.0	芯持丸木?	平坦?	無	トネリコ属	腐植激しく、小破片	V1c1
			-	2D-2C7	SX517-⑦	2	-	板材	-	-	-	-	-	-	-	腐植が激しく、原形をとどめず	V1c1

別表 9 道正遺跡鍛冶関連遺物観察表

写真図版No.	報告No.	種別	出土地点		大きさ				マグネット式吸着器反応	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
116	1	鉄滓	2D-1B21	V1a	55.4	30.5	28.3	22.8	無	
116	2	鉄滓	2D-1B14	V7a	49.8	28.2	24.4	13.1	無	
116	3	鉄滓	2C-2J6	V	40.4	30.1	25.7	15.6	有	楕円形滓
116	4	鉄滓	2D-1B21	V1a	35.0	28.0	20.1	9.9	無	
116	5	鉄滓	2C-2J6	V	30.9	28.3	17.4	17.2	有	楕円形滓

別表 10 道正遺跡アスファルト観察表

写真図版No.	報告No.	出土地点			形状	大きさ				備考
		グリッド	遺構名	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	
116	1	2C-2H5	-	V1c2	扁平不整形形状	59.7	44.2	15.4	22.6	外面に付着物なし
116	2	2C-2I14	-	V1c2	不整棒状	51.7	27.2	18.6	15.2	砂多く混入か、外面に付着物なし
116	3	2C-2I6	-	V1c1	扁平不整形形状	36.6	38.5	12.5	8.9	砂混入か、外面に付着物なし
116	4	2C-2H10	-	V1a	扁平三角形形状	38.0	32.8	16.4	11.7	外面に付着物なし

別表 11 20 岡崎遺跡遺構計測表

図版No.	写真図版No.	確認層位	遺構名種別	遺構No.	グリッド	重複関係(旧<新)	時期	主軸方向	規模(m)			底面標高(m)	形態		覆土分層	堆積状況	遺物図版No.		遺物	備考
									長軸	短軸	深さ		平面	断面			図面	写真		
130	123	Via	SK	11	2A-2J20	P9重複、 新旧不明	平安	N-6°-W	(0.99)	0.64	0.14	-0.43	長方形	箱状	1	単層				
130	123	Via	SK	28	2B-2A14		平安	N-62°-E	0.54	0.42	0.06	-0.22	不整形	皿状	3	レンズ状				鍛冶炉の可能性あり
130	123・124	VII	SK	45	2A-3J8・9・10・14・15		平安	N-69°-E	(5.40)	1.85	0.15	-0.12	長楕円形	弧状	6	レンズ状	140・141	131・134・135	須恵器(1・2)、土師器(3~13)、土製品、石器、石製品	
130	124	Via	SK	48	2B-2A24		平安	-	1.09	1.00	0.26	0.23	円形	半円状	1	単層			土師器	下層調査で検出
130	124	Via	SD	23	2A-3I13・17・18		平安	N-67°-E	4.20	0.28	0.12	-0.43~-0.61	直線的	弧状	1	単層			土師器	
130	124	Via	SD	24	2A-2J22・23・24・2A3J3		平安	N-59°-E	(4.50)	0.31	0.14	-0.45~-0.49	直線的	弧状	1	単層				
131		Via	P	1	2A-4H4		平安	N-14°-E	0.36	0.32	0.24	-0.36	楕円形	半円状	3	レンズ状				
131		Via	P	2	2A-4H4		平安	-	0.40	0.40	0.30	-0.42	円形	U字状	3	レンズ状				
131	124・125	Via	P	4	2B-2A12・17		平安	N-38°-W	0.32	0.26	0.22	-0.37	隅丸長方形	U字状	1	単層	141	135	須恵器(15)	SA51
131		Via	P	5	2B-3J4		平安	N-37°-W	0.32	0.22	0.07	-0.17	隅丸長方形	弧状	1	単層				
131	125	Via	P	6	2A-3J3・4		平安	-	0.22	0.21	0.26	-0.48	円形	漏斗状	2	レンズ状				SA51
131	125	Via	P	7	2A-2J25		平安	N-89°-W	0.20	0.18	0.22	-0.48	方形	U字状	2	レンズ状				SA51
131		Via	P	8	2A-2J24・25		平安	-	0.22	0.20	0.22	-0.38	円形	U字状	2	レンズ状				
131		Via	P	9	2A-2J20	SK11重複、 新旧不明	平安	-	0.23	0.21	0.29	-0.62	円形	U字状	2	レンズ状				SA51
131		Via	P	10	2A-2J25		平安	N-83°-E	0.23	0.16	0.17	-0.37	楕円形	U字状	1	単層				
131	125	Via	P	12	2B-2A16		平安	N-65°-W	0.28	0.26	0.30	-0.61	隅丸方形	漏斗状	1	単層				SA51
131		Via	P	13	2A-2J25		平安	-	0.27	0.24	0.30	-0.40	円形	U字状	2	レンズ状				
131		Via	P	14	2B-2A18		平安	-	0.46	-	0.26	-0.51	楕円形	台形状	2	レンズ状				石器
131	126	Via	P	15	2B-2A12・13		平安	N-25°-W	0.26	0.25	0.34	-0.57	隅丸方形	U字状	2	レンズ状				SA51
131	126	Via	P	16	2B-2A10		平安	N-46°-E	0.24	0.20	0.10	-0.45	方形	弧状	1	単層				SA51
131		Via	P	17	2B-2A5		平安	N-48°-W	0.24	0.17	0.18	-0.66	楕円形	U字状	1	単層				
131	126	Via	P	18	2B-2A10		平安	N-15°-W	0.22	0.20	0.18	-0.58	隅丸方形	U字状	1	単層	141	134	須恵器(14)	SA51
131	126	Via	P	19	2B-2A10 2B-2B6		平安	N-12°-W	0.48	0.39	0.42	-0.60	隅丸長方形	台形状	3	レンズ状			土師器	
131	127	Via	P	20	2B-2A14		平安	N-3°-E	0.58	0.46	0.50	-0.57	楕円形	漏斗状	4	レンズ状				
132		Via	P	21	2A-3I19		平安	N-27°-E	0.24	0.19	0.10	-0.34	楕円形	弧状	1	単層				
132		Via	P	22	2A-3I19		平安	-	0.25	0.24	0.14	-0.40	円形	弧状	2	ブロック状	141	135	須恵器(16)	
132	127	Via	P	25	2B-2A9		平安	N-15°-E	0.19	0.15	0.22	-0.58	隅丸長方形	U字状	1	単層			須恵器	SA51
132		Via	P	26	2B-2A14・15		平安	N-76°-E	0.26	0.22	0.18	-0.42	楕円形	U字状	1	単層			土師器	
132		Via	P	27	2B-2A13		平安	-	0.49	0.49	0.16	-0.26	不整形	台形状	1	単層				
132		Via	P	29	2B-2A9		平安	N-37°-W	0.30	(0.25)	0.18	-0.75	楕円形	U字状	1	ブロック状				下層調査で検出
132	127	Via	P	30	2B-2A9		平安	N-81°-W	0.32	(0.28)	0.48	-0.68	隅丸方形	台形状	6	ブロック状				下層調査で検出
132	127	Via	P	31	2B-2A14		平安	N-22°-W	(0.35)	0.33	0.43	-0.55	隅丸方形	漏斗状	2	ブロック状				下層調査で検出
132		Via	P	32	2A-3I18		平安	-	0.20	(0.19)	0.31	-0.44	円形	U字状	1	単層				SA51 下層調査で検出
132		Via	P	33	2A-3I23		平安	N-32°-W	0.18	0.12	0.09	-0.39	楕円形	U字状	1	単層				SA51 下層調査で検出
132		Via	P	34	2A-3I23		平安	N-46°-E	0.26	0.16	0.14	-0.32	楕円形	U字状	1	単層				下層調査で検出
132		Via	P	35	2A-3I22	SK41<P35	平安	N-19°-E	0.24	0.19	0.33	-0.48	楕円形	U字状	1	単層				SA51 下層調査で検出
132	128	Via	P	36	2B-2B6		平安	N-80°-E	0.29	0.20	0.10	-0.38	方形	台形状	1	単層				下層調査で検出
132		Via	P	38	2B-2A12		平安	N-23°-W	0.16	0.14	0.02	-0.94	楕円形	弧状	1	単層				下層調査で検出
132		Via	P	42	2B-2A18		平安	-	0.16	0.14	0.07	-0.29	円形	台形状	1	単層				下層調査で検出
132		Via	P	44	2A-2J25 2B-2A21		平安	-	0.19	0.16	0.18	-0.52	円形	U字状	1	単層				下層調査で検出
132	128	Via	P	46	2B-2A18		平安	N-72°-E	0.22	0.20	0.12	-0.70	隅丸方形	半円形	1	単層				下層調査で検出
132		Via	P	49	2A-3J4		平安	N-23°-W	0.18	0.14	0.22	-0.48	楕円形	U字状	1	単層				下層調査で検出
134		Via	P	50	2B-2A13		平安	-	0.13	0.12	0.18	-0.52	円形	U字状		単層				SX3B-B'の断面で確認
134	128・129	Via	SX	3	2B-2A3・7・9・11・12・13・14		平安	N-64°-E	6.58	0.58~1.08	0.03~0.16	-0.20~0.70	不整形				141	135	須恵器(17)、土師器、石器	盛土状の高まり
137	130	VII	P	47	2B-2A19		不明	-	0.36	0.34	0.71	-1.10	円形	漏斗状	2	レンズ状				
138	130	VII	SK	39	2A-3I17		縄文	N-87°-W	1.01	0.92	0.42	-1.25	楕円形	台形状	2	レンズ状	158	153	縄文土器(23~25)	
138	130	VII	SK	40	2A-3H16・21		縄文	N-14°-W	1.68	1.40	0.88	-1.84	楕円形	台形状	2	レンズ状			縄文土器	
138	130	VII	SK	41	2A-3I21・22	SK41<P35	縄文	N-15°-E	1.20	0.88	0.40	-0.78	楕円形	半円状	2	レンズ状				
126~128・133・134	128	Via	SA	51	2A-2J・3I・3J・4H・4L・2B-2A・2B		平安	N-58°-E	(36.45)	-	-	-0.37~-0.62	-	-	-	-	141	134・135	須恵器(14・15)	遺物はP4・18から出土

別表 12 20 岡崎遺跡古代土器観察表

- 凡例
- 1 出土位置 「+」記号は同一層で検出していることを示す。
  - 2 図版 No. 「+」記号は同一グリッドで検出していることを示す。
  - 3 報告 No. 「+」記号は同一グリッドで検出していることを示す。
  - 4 図版 No. 同じ文字が足まわりの場合は直線検出していることを示す。
  - 5 法高指数 ( ) 付きの数値は遺存率が低く復元の信頼性が低いことを示す。
  - 6 底径指数 器高(口径×100)
  - 7 口径指数 底径(口径×100)
  - 8 含有物 胎土中に含まれる鉱物・小礫等について記した。「石」は石英類、「長」は長石類、「灰」は灰雲母あるいは黒雲母、「赤」は赤雲母、「白」は白色凝灰岩、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。
  - 9 産地 須磨製土分製を記載した。
  - 10 焼成 焼成時に還元されたもの(青灰色・灰色・白色を呈する)を還元とした。
  - 11 回転方向 回転時の回転方向を表す。
  - 12 遺存率 分數表示で遺存割合を示した。

図版 No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底径 指数	底径 指数	胎土 状態	含有物	産地	色調		焼成	調整・手法			回転 方向	遺存率		付着物		備考
		層位	グリッド					口径	底径						器高	外 面		内 面	外 面	内 面		底 部	内 面	外 面	内 面	
19 18 1	SK45	2A-3113 2A-3113 2A-319 2B-2A (6+16)	Vc2 Vc1 Vc2	a	平安	須臾器	無台杯	11.4	7.6	2.9	254	66.7	精雲	B	灰 (10Y5/1)	還元 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ	へろ切り 板圧痕	不明	20/36	29/36			体部中位凹凸大 底部厚い
19 18 2	SK45	2A-318 2A-2123+3J (4+5) 2A-3113 2A-3114+2B-2A7 2B-2B6	Vc1 Vc2 Vc2 Vc2	a a a b c	平安	須臾器	製						精石・長・白	B	灰黄 (2.5Y6/2)	還元 (2.5Y6/2)	還元	ロクロナデ タタキメ (正格 子文)	ロクロナデ 当具裏 (向心 凹文Ds・平 行線文Ha)						取 ENo.114	
19 18 3	SK45	2A-319 2A-31 (9+10) 2B-2A (3+6+8+11+13+16) 2B-2A (6+12+16) 2B-2A12 2B-2A14	3 1 Vc2 Vc1 Vc Vc2	a a a a b	平安	土師器	無台碗	15.5	6.1	5.6	361	39.4	普石・長・雲・ 赤・白		浅黄橙 (10YR8/4)	酸化 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	13/36	36/36			取 ENo.82
19 18 4	SK45	2A-338 2A-339 2B-2A6 2A-210 2A-2115	Vc2 Vc2 Vc2 Vc2	a a b bc	平安	土師器	無台碗	14.3					普石・長・雲・ 白		にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	ロクロナデ	ロクロナデ			12/36		スス	体部外面墨書「口」	
19 18 5	SK45	2A-338 2A-339	1 1	a b	平安	土師器 土器	無台碗 無台碗	12.4					普石・長・雲・ 赤・白・赤		浅黄橙 (10YR8/4)	酸化 (10YR8/4)	酸化	ロクロナデ 口縁ミガキ	ロクロナデ ミガキ			12/36				内面黒色処理
19 18 6	SK45	2A-338 2A-339	1	a	平安	土器	無台碗	14.6	6.6	4.9	336	45.2	普石・長・赤・ 白		浅黄橙 (10YR7/3)	酸化 (10YR2/1)	酸化	ロクロナデ ロクロナズリ	ロクロナデ ミガキ			4/36	6/36			取 ENo.264・263 体部外面に焼成面へ タタキあり。内面～ 外面口縁黒色処理
19 18 7	SK45	2A-339	1+3	a	平安	土器	無台碗	16.2					普石・長・赤・ 白		にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化 (10YR2/1)	酸化	ロクロナデ ロクロナズリ	ロクロナデ ミガキ			11/36				
19 18 8	SK45	2A-338 2A-2114 2A-21 (10+15+19+23+24)+3J9 2B-2A (3+6+7+8+9+11+13+14 +19+21) 2A-2120+2B-2A (3+7+9+12+13) +2B21	1 Vc+Vc2 Vc2 Vc2 Vc2	a a a a	平安	土師器	長羹	21.8					普石・長・雲・ 赤		橙 (7.5YR7/6)	酸化 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ ロクロナズリ 線文Ha)	ロクロナデ 当具裏 (平行 線文)			7/36		コゲ		取 ENo.46
19 18 9	SK45	2A-310 試掘49T 2A-219	1 X Vc	a b	平安	土師器	小羹	14.2					粗石・長・赤・ 白		にぶい橙 (7.5YR6/4)	酸化 (10YR5/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			6/36				
19 18 10	SK45	2A-319 2A-2123+2J (15+19+23+24) 2A-318+2J (10+15+19+23+24) 2B-2A (4+5+6+7+8+11+12+17) 試掘49T	1 Vc1 Vc2 Vc2 Ika+X	a a a a	平安	土師器	鍋	39.8	15.8				普長・赤		にぶい橙 (7.5YR7/4)	酸化 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ ハケメ タタキメ (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ ハケメ 当具裏 (平行 線文)			22/36	36/36	スス		取 ENo.148・76・ 78・44 215・221・222
19 18 11	SK45	2A-339 2A-31 (8+13) 2A-2123	1 1 Vc2	ab a b	平安	土師器	鍋	37.8					普石・長・雲・ 赤・白		浅黄橙 (10YR8/3)	酸化 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ カキメ タタキメ (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ			4/36		スス		取 ENo.258・261
20 18 12	SK45	2A-31 (9+13) 2A-3113 2A-4H5 2A-339 2A-310	1 Vc1 Vc1+Vc2 Vc2	1 a c a b	平安	土師器	鍋	49.0					普石・長・赤・ 6ミリの織合 む		浅黄橙 (10YR8/4)	酸化 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ カキメ タタキメ (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ タタキメ (平行 線文)			3/36				取 ENo.269・ 260・257

図版 No.	図版 No.	報告 No.	出土位置		接合記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底存指数	底存状態	胎土		色調		焼成	調整・手法		回転		遺存率	附着物		備考		
			通稱名	グリッド					口径	底径			器高	口径	底径	含有物		外	内	口径部	底		底	内		内	外
20	18	13	SK45 SK45 2A-313 2A-313 2A-314		a ab c d	平安	土師器	鍋	(40.0)			普	長・雲・角	浅黄緑 (10YR8/3)	浅黄緑 (10YR8/4)	酸化	クロコナデ カキメ タタキメ (平行 線文Ha)	クロコナデ カキメ			5/36						
20	18	14	Pr18 2B-2A10 2B-2A5 2B-2A9 2B-2B11		a b c	平安	土師器	鍋	(44.0)		普	石・長・チ・ 焼・白	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	酸化	クロコナデ カキメ タタキメ (平行 線文)	クロコナデ カキメ 当具裏 (同心 内文)			3/36				スス			
20	19	15	Pr14 2B-2A12 2A-2E20+2B-2A7		a	平安	須恵器	無台杯	12.2	7.4	60.7	精	長・白・海	灰 (N6/)	灰 (N6/)	還元	クロコナデ	クロコナデ		ヘラ削り	右	32/36	36/36			取上No.226・160 底部外面墨書「例」	
20	19	16	Pr22 2A-319 2A-4H2 2A-31 (12+13+18)+2B-2A18 2A-314		a a a a	平安	須恵器	有台杯	13.9	6.6	47.5	精	長・白	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ		ヘラ削り	左	11/36	31/36			底部外面墨書「□」	
20	19	17	SX3 2B-2A8 2B-2A3		a	平安	須恵器	杯蓋	14.8	3.1	20.9	普	長・チ・白	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	還元	クロコナデ クロコナズリ	クロコナデ			左	11/36	36/36			取上No.236 外面 墨書「与」 転用	
20	19	18	SX2 試掘50T 2B-2A5 2B-2B11		a a a	平安	須恵器	杯蓋	13.6	2.8	20.6	精	長・白・海	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	還元	クロコナデ クロコナズリ?	クロコナデ		天井部 ヘラ削り		4/36	36/36			転用 内外面墨書	
20	19	19	SX2 試掘50T 2B-2A15 2B-2A20		a a a	平安	須恵器	無台杯	12.8	7.3	22.7	精	雲	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ		ヘラ削り 板圧痕	左	7/36	28/36				
20	18	20	SX2 試掘50T		a	平安	土師器	無台碗	13.9	5.8	3.6	26.0	41.9	精	石・チ・焼 海	におい黄緑 (10YR7/4)	におい黄緑 (10YR7/4)	酸化	クロコナデ	クロコナデ		糸削り		3/36	18/36		
20	19	21	SX2 試掘50T 2B-2A (4+19)		a	平安	土師器	羹	18.2			粗	石・長・チ・ 海	におい黄 (7.5YR6/3)	におい黄 (7.5YR6/3)	酸化	ハケメ	口縁ハケメ 体部ナデ			8/36			コゲ	スス		
21	19	22	2A-312 2A-317		a a	平安	須恵器	杯蓋	13.4	2.3		普	石・長	灰 (N5/)	灰 (N5/)	還元	クロコナデ	クロコナデ			4/36	28/36				取上No.130 外面自然釉	
21	19	23	2B-2A (4+9)		a	平安	須恵器	杯蓋	12.8	2.8	21.9	精	長・チ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	還元	クロコナデ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り		27/36	36/36			取上No.36・53 転用 内外面墨書	
21	19	24	2B-2A9		a	平安	須恵器	杯蓋	15.6	3.1	17.3	精	長・チ・白	黄灰 (2.5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	還元	クロコナデ クロコナズリ	クロコナデ			左	1/36	36/36			取上No.58 転用 内外面墨書	
21	19	25	2B-2A (6+8) 2B-2A11 2B-2A16		a a a	平安	須恵器	杯蓋	15.0	3.2	1.7	11.3	普	長・白	灰 (10Y5/1)	灰 (7.5Y5/)	還元	クロコナデ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り	不明	18/36	36/36			取上No.35
21	20	26	2B-2A11 2A-319		a a	平安	須恵器	杯蓋	15.2	3.4	2.6	17.1	普	長・白	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	クロコナデ クロコナズリ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り	左	12/36	24/36			取上No.250 転用 内面墨書
21	20	27	2A-2I18+2B-2A8 試掘49T		a a	平安	須恵器	杯蓋	14.0	2.7	3.0	21.4	精	長・白	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り		7/36	27/36			取上No.241 転用 内面墨書
21	20	28	2A-3H25+3I (8+13+17+19+22) 2A-3H19+3I (8+12+13)		a a	平安	須恵器	杯蓋	17.0	4.4	3.0	17.6	精	長・チ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	クロコナデ クロコナズリ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り	左	17/36	23/36			
21	20	29	2B-2A4		a	平安	須恵器	杯蓋	16.0	3.4	2.9	18.1	精	長・白	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	クロコナデ クロコナズリ	クロコナデ			左	13/36	36/36			
21	20	30	2B-2A (5+6+11+12)		a	平安	須恵器	杯蓋	15.1	3.7	2.8	18.5	精	長・白	灰 (10Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り	右	13/36	36/36			取上No.210 外面墨書「□」 内 面墨書 転用
21	20	31	2B-2A (6+7+11) 2B-2A (7+12+13)		a a	平安	須恵器	杯蓋	15.0	4.5	2.8	18.7	精	長・チ・白	灰白 (10YR8/1)	灰白 (10YR8/1)	還元	クロコナデ クロコナズリ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り	左	31/36	36/36			取上No.211 転用 内外面墨書
21	20	32	2A-2I (14+19) 2B-2A (6+11) 2B-2A11		a a a	平安	須恵器	杯蓋	14.6	3.8	2.4	16.4	普	長・白	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り		22/36	36/36			
21	20	33	2B-2A9 2B-2A (9+18)		a a	平安	須恵器	杯蓋	13.7	4.5	2.4	17.5	普	長・白	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ		天井部 ヘラ削り	左	17/36	31/36			重ね焼き痕
21	20	34	2A-2I15 2B-2A11		a a	平安	須恵器	杯蓋	14.8	4.5	2.4	16.2	精	石・雲・白	灰白 (4/)	灰白 (4/)	還元	クロコナデ クロコナズリ	クロコナデ			右	14/36				重ね焼き痕
21	20	35	2B-2A16 2B-2B21		a b	平安	須恵器	杯蓋	15.9			精	長・白	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ				4/36				外面細沈線3条以上	
21	20	36	2A-3I10+2B-2A9		a	平安	須恵器	有台杯	13.6	7.7	7.0	51.5	精	長・チ・白	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ			8/36	15/36			外面全面に降灰	
21	20	37	2B-2A7 2B-2A13		a a	平安	須恵器	有台杯	13.4			精	石・長・白	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ				9/36				油煙カ	
21	20	38	2A-3H19		a	平安	須恵器	有台杯	11.2	7.0	5.4	48.2	精	長・白・海	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	クロコナデ	クロコナデ		ヘラ削り ケズリ	右カ	13/36	18/36			取上No.110

別表

図版 No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底径 指数	底径 指数	底径 状態	胎土		色調		焼成	調整・手法		回転 方向		遺存率 口縁部	附着物		備考		
		遺構名	グリッド					口径	底径				器高	底径	口径	含有物		外面	内面	外面	内面		底面	外面		内面	底面
21	20	39			平安	須臾器	有台杯	11.7	5.1	436		精長・白	D	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ					10/36					
21	20	40		a	平安	須臾器	有台杯	12.2				普長・白	B	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	還元	ロクロナデ					29/36				外面全面に降灰	
21	20	41		a	平安	須臾器	有台杯		高台 6.0			精長・白	B	灰 (7.5X5/1)	灰 (7.5X5/1)	還元	ロクロナデ										
21	20	42		a	平安	須臾器	有台杯	10.0	5.5	553		精長・白	B	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ					24/36				取上No.57 底部外面墨書「□」	
21	20	43		a	平安	須臾器	有台杯		高台 7.4			普石・長・白	B <sup>カ</sup> C	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ									転用視力 外面墨痕	
21	20	44			平安	須臾器	有台杯		高台 7.2			精長	B	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	還元	ロクロナデ									取上No.251-1	
21	20	45			平安	須臾器	有台杯		高台 6.8			精長・白	B	灰 (7.5X6/1)	灰 (7.5X6/1)	還元	ロクロナデ										
21	20	46			平安	須臾器	有台杯		高台 6.0			精長・白・海	B	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	還元	ロクロナデ									取上No.9	
22	20	47		a	平安	須臾器	無台杯	13.1	3.3	248	59.5	粗長・雲・白	A	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)	還元	ロクロナデ					10/36					
22	20	48		a	平安	須臾器	無台杯	12.7	3.2	252	59.1	精雲・白	B	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	還元	ロクロナデ					14/36					
22	20	49		a	平安	須臾器	無台杯	12.8	3.4	266	56.3	精長・雲・白	B <sup>カ</sup> C	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	還元	ロクロナデ					26/36					
22	20	50		a	平安	須臾器	無台杯	12.5	3.2	256	56.0	精長・雲	B	灰 (NS6/)	灰 (NS6/)	還元	ロクロナデ					7/36					
22	21	51			平安	須臾器	無台杯	12.5	3.3	264	57.6	精長・雲・白	B	灰 (7.5X6/1)	灰 (7.5X6/1)	還元	ロクロナデ					9/36					
22	21	52		a	平安	須臾器	無台杯	11.7	6.8	3.1	265	58.1	精雲	C	灰 (NS6/)	灰 (NS6/)	還元	ロクロナデ					20/36				
22	21	53		a	平安	須臾器	無台杯	13.0	7.6	3.6	277	58.5	精長・白	B	灰白 (5Y8/1)	灰白 (5Y8/1)	還元	ロクロナデ					5/36				底部外面墨書「□」
22	21	54			平安	須臾器	無台杯	13.4	8.0	3.4	254	59.7	精長・白・海	B	灰 (NS6/)	灰 (NS6/)	還元	ロクロナデ					21/36				取上No.197 底部外面墨書「□」
22	21	55		a	平安	須臾器	無台杯	13.3	7.5	3.5	263	56.4	精長・白	B	灰 (NS6/)	灰 (NS6/)	還元	ロクロナデ					34/36				取上No.89・29 底部外面墨書「十」
22	21	56		a	平安	須臾器	無台杯	12.5	7.4	3.3	264	59.2	精石・長・白	B	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ					8/36				取上No.94 底部外面墨書「此」
22	21	57		a	平安	須臾器	無台杯	12.4	7.3	3.1	250	58.9	精石・長・雲・ 白・海	B	灰 (7.5X5/1)	灰 (7.5X5/1)	還元	ロクロナデ					34/36				取上No.139・140 底部外面墨書「□」
22	21	58			平安	須臾器	無台杯	11.9	7.0	3.2	269	58.8	精長・白	B	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ					22/36				底部外面墨書「十」
22	21	59			平安	須臾器	無台杯	12.5	8.7	3.4	272	69.6	精白	B	灰 (NS6/)	灰 (NS6/)	還元	ロクロナデ					6/36				取上No.227 口縁内外工具痕か 底部外面に細 底部外面墨痕
22	21	60			平安	須臾器	無台杯	11.4	7.5	2.8	241	65.8	精長・白	B	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ					31/36				5ミリ台の燻灰
22	21	61		a	平安	須臾器	無台杯	13.1	7.4	3.1	237	56.5	精長・白	B	灰 (7.5X6/1)	灰 (7.5X6/1)	還元	ロクロナデ					6/36				底部外面墨書「□」
22	21	62		a	平安	須臾器	無台杯	13.2	7.5	3.2	242	56.8	精石・白	B	灰 (NS6/)	灰 (NS6/)	還元	ロクロナデ					31/36				取上No.208 体→底部外面墨書 (多文字・判読不明)
22	21	63		a	平安	須臾器	無台杯	12.5	6.5	3.0	240	55.0	精長・白	B	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	ロクロナデ					11/36				取上No.28 底部外面墨書「木」
22	21	64			平安	須臾器	無台杯	12.6	7.8	2.9	230	61.9	精長・白	B	灰 (7.5X6/1)	灰 (7.5X6/1)	還元	ロクロナデ					5/36				底部外面墨書「□」
22	21	65		a	平安	須臾器	無台杯	12.4	7.6	3.2	258	61.3	精石・長・白	B	灰 (7.5X5/1)	灰 (7.5X5/1)	還元	ロクロナデ					12/36				底部外面墨書「月」
23	21	66		a	平安	須臾器	無台杯	12.2	7.0	3.0	247	57.6	精長・白	B	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ					21/36				口縁灯志痕 底部外面墨書「□」
23	21	67			平安	須臾器	無台杯	12.3	7.5	2.9	236	61.0	普長・白	B	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ					32/36				取上No.38 底部外面墨書「θ」 (即天文字の「日」)



図版 No.	複製 No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底径 指数	底径 指数	底径 指数	胎土		色調		焼成	調整・手法			回転 方向		遺存率		附着物		備考
			遺構名	グリッド					口径	底径				器高	器高	底径	底径		底径	底径	底径	底径	底径	底径	底径	底径	底径	
23	22	68		2B-2A (5+10)	Vc2	平安	須臾器	無台杯	12.0	6.4	3.0	250.0	53.3	精雲	B	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	右	36/36	36/36			取LNo.64・65 黒色吹出し多	
23	21	69		2B-2A12	Vc2	平安	須臾器	無台杯	11.7	7.1	2.8	240.0	60.9	精雲	B	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左	23/36	36/36			取LNo.212・220 体部外面に左上がりの 工具痕	
23	22	70	a	2A-3H (19+22) 2A-3H (14+19+25)	Vc2 Vc1	平安	須臾器	無台杯	13.3	7.9	2.9	214.0	59.4	精石・長・白	B	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	右	21/36	36/36			取LNo.24 底面外面墨書「十」 体部外面墨書「」	
23	22	71		2A-2I23	Vc2	平安	須臾器	無台杯	12.9	7.6	2.9	221.0	58.9	精石・白・海	B	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	右	20/36	36/36			取LNo.270 底面外面墨書「羽」	
23	22	72	a	試掘49T 2A-2I (14+19) +2B-2A (6+7+11)	X Vc2	平安	須臾器	無台杯	12.9	7.6	2.7	209.0	58.1	精石・長・白	B	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左	15/36	29/36			底面外面墨書「見」	
23	22	73		2A-2I23	Vc2	平安	須臾器	無台杯	12.8	7.5	2.7	207.0	58.6	精雲	B	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左	21/36	36/36			取LNo.239	
23	22	74	a	2B-1A23+2A5 2B-1B21	Vc2 Vc1	平安	須臾器	無台杯	12.7	8.0	2.6	201.0	63.0	精石・長・白	B	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	不明	8/36	14/36			底面内面墨痕	
23	22	75		試掘49T	X	平安	須臾器	無台杯	12.6	7.6	2.8	219.0	60.6	精長・白	B	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	不明	11/36	12/36			底面外面墨書「口」 (林カ)	
23	22	76		2B-2A12	Vc1	平安	須臾器	無台杯		7.0				精海	B	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左		36/36			体部外面墨書「口」	
23	22	77	a	2B-2A (13+18) 2B-2A6	Vc2 Vc1	平安	須臾器	無台杯	12.4	6.8	2.8	226.0	54.8	精雲	B	灰 (7.5Y5/0)	灰 (7.5Y5/0)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左	7/36	25/36				
23	22	78		2B-2A (11+17) 2B-2A12	Vc2 Vc1	平安	須臾器	無台杯	12.2	7.0	2.8	230.0	57.4	精長・白	B	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左	24/36	18/36			取LNo.137 底面外面墨書「口」	
23	22	79	a	2A-2I (14+15) +2B-2A (6+11) 2A-2H15+2B-2A11	Vc2 Vc1	平安	須臾器	無台杯	12.0	7.1	2.8	229.0	59.2	精長・雲	B	灰 (N5/)	灰 (N5/)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左	29/36	36/36			内外面黒色吹出し多 い	
23	22	80		2B-2A8	Vc2	平安	須臾器	無台杯	12.0	7.0	2.7	221.0	58.3	精雲	B	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左	27/36	36/36			取LNo.40	
23	22	81		2A-3I8	Vc2	平安	須臾器	盤	15.0	11.4	2.3	153.0	76.0	精長・チ・白	A	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	右	22/36	36/36			取LNo.121 かなり歪んでいる	
23	22	82		2B-2E7	Vc1	平安	須臾器	無台碗		6.0				精長・白・海	C	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	右カ		9/36			口縁部一部ハネ 状の面取り	
23	22	83	a	2B-2A (2+6+11+17) 2B-2A17	Vc2 Vc	平安	須臾器	鉢	10.2	6.1	4.0			精長・白	B	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部		34/36	34/36				
24	23	84	a	2A-3I12 2A-3H19+3I17	Vc2 Vc1	平安	須臾器	長頸瓶	10.5					精石・長・白・ 海	B	灰 (N6/1)	灰 (N6/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部		9/36				内外面自然釉	
24	23	85		2B-2A3	Vc2	平安	須臾器	長頸瓶	9.9					精石・長	B	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部		17/36					
24	23	86		2A-3H21	Vc2	平安	須臾器	長頸瓶	8.9					普長・チ・白	A	灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部		21/36				取LNo.7 外面自然釉	
24	23	87		2B-2A2	Vc2+Vc1	平安	須臾器	長頸瓶		9.8				普長・白・海	B	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部			36/36	ター		取LNo.34	
24	23	88		2A-4C9	Vc2	平安	須臾器	(長頸) 瓶						精長・チ・白	B	灰 (N6/)	灰 (N6/)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	左						
24	23	89	a	2B-2I5 2B-2A (3+10+22)	Vc2 Vc1	平安	須臾器	長頸瓶		10.7				普長・チ・白・ 海	B	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部			15/36			高台端部打ちあかれ ている	
24	23	90		2A-4G2	Vc2	平安	須臾器	(長頸) 瓶 (脚)		10.9				普長・白	A	灰 (N6/)	灰 (N6/)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部			12/36			取LNo.10	
24	23	91	a	2A-2I15+2B-2A11 2A-2I14+2B-2A12	Vc2 Vc1	平安	須臾器	長頸瓶	13.4					精長・白・海	B	灰 (N6/)	灰 (N6/)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部		13/36					
24	23	92		2A-2I (16+21) +2B-2A11	Vc2	平安	須臾器	広口瓶	16.4					普長・チ・白・ 海	B	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部		36/36				取LNo.207・ 162・228・255 体部上面に焼成面へ テ書き	
24	23	93		2A-3I18	Vc2	平安	須臾器	長頸瓶		10.2				精長・チ・白	B	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部	口縁部 口縁部			5/36			内面自然釉	

図版 No.	No.	報告 No.	図版 No.	出土位置		接合記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底径	底径指数	底径指数	状態	胎土		色調		焼成	調整・手法		付着物		備考	
				遺構名	グリッド					口径	器高					産地	含有物	外面	内面		外面	内面	口縁部	底径部		内面
24	23	94		試掘44T		Ra	平安 須臾器	短頸壺							精	石・雲	B 灰 (N5/)	灰 (N5/)	還元	ロクロナデ				外面露灰		
24	23	95		2B-2A2	12.0	Vc2	平安 須臾器	短頸壺							精	石・雲・角	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ		3/36			外面に露灰	
24	23	96		2A-2I (23+24)	6.8	Vc2	平安 須臾器	広口壺							普	長・赤・白・海	A 灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)	還元	ロクロナデ 底掘工具片痕		9/36			取上No.21	
24	23	97	a	2A-3H (13+19)		Vc2	平安 須臾器	長頸壺							精	長・白	B 灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ					取上No.91・23	
24	24	98	a	2A-2I25	10.3	Vc2	平安 須臾器	長頸壺							精	長・雲・白・海	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ ロクロケズリ		5/36				
24	24	99		2A-2I25		Vc2	平安 須臾器	壺(脚部)	脚部 20.0						精	長・雲・赤	B 灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ		2/36			線形短頸壺か発帯付壺	
25	24	100		2A-3H20		Vc2	平安 須臾器	横瓶							普	石・長・白	D 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (平行線文Hb)					内外面自然釉	
25	23	101		2A-3H (15+20+22) 2A-3H (19+20)	体部径 20.8~21.3	Vc2 Vc1	平安 須臾器	横瓶							普	石・長	B 灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (平行線文Ha)					取上No.26・103・105・106 外面自然釉	
25	24	102		2A-3H15	22.8	Vc2	平安 須臾器	壺							精	長・雲・白・海	B 灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (平行線文Ha)		8/36			取上No.27 頸部外面に即ち具端部片痕	
25	24	103	a	2A-3I13		Vc2	平安 須臾器	壺							粗	石・長・赤・白	A 灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (平行線文Ha)		3/36			取上No.123・117 ・132 外面自然釉	
25	24	104		2A-3I4		Vc2	平安 須臾器	壺							精	石・長・白	C 灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (平行線文Ha・Hb)						
25	24	105		2B-2A3		Vc2	平安 須臾器	壺							普	石・長・赤・白	B 黄灰 (2.5Y6/1)	灰白 (2.5Y7/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (長方形格子文Ka)						
25	24	106		2A-3I7		Vc1	平安 須臾器	壺							普	長・白	B 灰 (N6/)	灰 (N6/)	還元	ロクロナデ カタキメ (長方形格子文Ka)						
25	24	107		2A-2I8		Vc2	平安 須臾器	壺							普	石・長・白	C 灰 (10Y6/1)	灰 (10Y6/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (平行線文Hc)						
25	24	108	a	2A-4G12		Vc2	平安 須臾器	壺							普	長・白	B 灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (長方形格子文Ka)						
25	24	109	a	2B-2A5		Vc1	平安 須臾器	壺							精	石・長・赤・白	C 灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	還元	ロクロナデ カタキメ (斜格子文Kb)					取上No.14・15・16・167	
25	24	110	a	2B-1A17		Vc2	平安 須臾器	壺							普	長・赤・雲・赤・白・海 8ミリの磨合		還元	ロクロナデ カタキメ (平行線文Ha)						取上No.25・100・102	
26	25	111		2A-3H20	17.3	Vc2	平安 土師器	無台碗							普	石・長・雲・赤・白・海	B 黄 (7.5YR7/6)	還元	ロクロナデ		32/36	36/36			取上No.25・100・102	
26	25	112	a	2A-3H23	16.6	Vc2	平安 土師器	無台碗							精	石・長・雲	にぶい黄緑 (10YR7/3)	還元	ロクロナデ		16/36	36/36			取上No.5 体部外面露書「大」	
26	25	113		2A-3I (12+13)	16.0	Vc2	平安 土師器	無台碗							精	石・長・雲	灰白 (10YR8/2)	還元	ロクロナデ		34/36	35/36				
26	25	114		2A-2I23	16.3	Vc2	平安 土師器	無台碗							精	長・雲・赤・白・海	にぶい黄緑 (10YR7/3)	還元	ロクロナデ		8/36	35/36			取上No.238	
26	25	115	a	2A-2I23		Vc2	平安 土師器	無台碗							精	石・長・雲・赤・白・海	灰白 (2.5Y8/2)	還元	ロクロナデ			11/36			体部外面露書「口」	
26	25	116	a	2B-2A3		Vc2	平安 土師器	無台碗							精	石・長・白	淡黄 (2.5Y8/3)	還元	ロクロナデ						取上No.48	

図版 No.	No.	報告 No.	運轉名	出土位置		接合記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底径	底径指数	底径指数	状態	胎土含有物	色調		焼成	調整・手法		回転		遺存率	附着物		備考	
				口徑	器高					口徑	底面						口縁部	底面		底面	内面	内面	内面		内面	内面		内面
26	25	117		2A-21 (10+14+15+19) 2B-2A (7+11+13) 2B-2A7 2A-219		a a a	平安 土師器	無台碗		6.2	4.8	300	38.8		石・長・雲・ 子・白	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	27/36	23/36				
26	25	118		2B-2A (4+8)		Vc2	平安 土師器	無台碗		5.5	4.9	31.4	35.3	精	石・長・子・ 白	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	11/36	36/36			取LNo.77	
26	25	119		共編49T 2A-2114+2B-2A (7+11)		a X	平安 土師器	無台碗		5.5	4.5	30.4	37.2	普	石・長・白	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	24/36	36/36				
26	25	120		2A-21 (14+15) 2A-2114 2A-2115		a a c	平安 土師器	無台碗		5.9	4.5	31.0	40.7	普	石・長・雲・ 子・白	橙(2.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	10/36	19/36			取LNo.189・206 ・188	
26	25	121		2A-219		Vc2	平安 土師器	無台碗		5.6	4.5	32.6	40.6	精	石・長・子・ 白・薄	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	8/36	36/36				
26	25	122		2A-31 (1+2) 2A-317 2A-311 2A-316		a a b c	平安 土師器	無台碗		6.0	4.2	31.3	44.8	精	長・雲・白	灰黄橙 (10YR6/2)	灰黄橙 (10YR6/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	4/36	28/36			底部外面へラによる 若干な平行線状の刻線 あり	
26	25	123		2A-31 (13+18) 2A-318		Vc2 Vc2	平安 土師器	無台碗		6.0	4.1	30.4	44.4	普	石・長・雲	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	10/36	28/36				
26	25	124		2B-2A (4+5) 2B-2A5 2B-2A3 Vc		a a a	平安 土師器	無台碗		5.5	3.9	28.3	39.9	精	石・長・純・ 白	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	20/36	23/36			スス	
26	25	125		2A-2115 2B-2A16		Vc2 Vc2	平安 土師器	無台碗		13.6				精	石・長	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ			9/36				灯明として使用か	
26	25	126		2A-2115+2B-2A (6+7+11+16) 2B-2A (6+16) 2B-2A7 2B-2A11		a a b c	平安 土師器	無台碗		6.1	3.6	26.9	45.5	精	石・長・子・ 純・白・薄	にぶい黄橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	9/36	31/36			スス	
26	25	127		2A-2115+2B-2A (6+11)		Vc2	平安 土師器	無台碗		5.8	3.9	30.0	44.6	精	石・長・白	にぶい黄橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	24/36	36/36				
26	25	128		2B-2A (8+13+14) 2B-2A10 2A-2123		a a b	平安 土師器	無台碗		5.4	3.8	29.0	41.2	普	石・長・白	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	11/36	36/36				
26	25	129		2A-3H18 2A-3H19		Vc2 Vc1	平安 土師器	無台碗		5.1	3.8	30.4	40.8	精	長・雲・純・ 白	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	左	31/36	36/36			取LNo.22	
26	25	130		2A-3A+2B-2A (8+13)		Vc2	平安 土師器	無台碗		6.0	3.8	29.1	46.5	精	石・長・雲・ 子・白	にぶい黄橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	12/36	34/36			取LNo.50	
26	25	131		2B-2A7		Vc2	平安 土師器	無台碗		4.7	3.7	28.7	36.4	精	石・長・雲・ 子・白	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	14/36	18/36				
26	25	132		2A-2115		Vc2	平安 土師器	無台碗		5.4	3.7	29.0	42.4	普	石・長・子・ 純・白	橙(2.5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	左	22/36	36/36			取LNo.152	
26	25	133		2A-21 (10+15)+2B-2A11		Vc2	平安 土師器	無台碗		6.0	3.4	26.8	47.2	普	石・長・雲・ 子・白 5ミリ台の塵 含む	にぶい黄橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (7.5YR6/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	28/36	36/36			取LNo.136	
26	25	134		2A-2120		Vc2	平安 土師器	無台碗		5.7	4.0	30.4	43.3	粗	石・長・雲・ 子・白	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	36/36	36/36			取LNo.138 体外部面墨書「H」	
26	25	135		2B-2A5		V+Vc1	平安 土師器	無台碗		6.0	3.6	27.9	46.5	粗	石・長・子・ 純・白	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	13/36	13/36			スス	
26	25	136		2A-3H8		Vc2	平安 土師器	無台碗		6.8	3.2	24.5	52.1	普	石・長・雲・ 子・白	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	不明	1/36	28/36			取LNo.224	
27	26	137		2B-2A8 2B-2A19		Vc2+Vc1 Vc1	平安 土師器	無台碗		12.7	4.9	35.6	38.7	精	石・長・子・ 白	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	不明	17/36	16/36			体外部面墨書「□」	
27	26	138		2A-21 (14+15)		Vc2	平安 土師器	無台碗		4.9	4.3	34.3	39.5	普	石・長・雲・ 子・白	橙(2.5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	25/36	33/36			取LNo.158	
27	26	139		2B-2A14 2B-2A (2+3+4+8) 2B-2A9		a a a	平安 土師器	無台碗		4.5	4.6	37.7	36.9	精	長	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	3/36	32/36				
27	26	140		2B-2A4		Vc2+Vc1	平安 土師器	無台碗		12.1	5.5	4.6	38.0	45.5	精	長・雲・子・ 白	にぶい黄橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	30/36	34/36			取LNo.80
27	26	141		2B-2A16		Vc2	平安 土師器	無台碗		5.2	4.5	37.5	43.3	精	石・長・雲・ 子・薄	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	6/36	22/36			体外部面墨書「□」	
27	26	142		2B-2A (7+8) 2B-2B11		a b	平安 土師器	無台碗		12.4	5.0	4.2	34.0	40.5	精	長・子・白・ 薄	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	6/36	30/36			スス

別 表

図版 No.	No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底径 指数	底径 指数	底径 状態	胎土		色調		焼成	調整・手法			回転		遺存率		附着物		備考
			連綿名	グリッド					口径	底径				口径	底径	口径	底径		含有物	産地	外面	内面	外面	内面	外面	内面	口径部	
27	26	143		2B-2A3 2B-2A2 2B-2A3 2B-2A7	a b c d	平安 土師器	無台碗	11.7	4.5	368	38.5	粗	石・長・雲・ 角・海		にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	25/36	36/36			全体に粗製		
20	26	144		2B-2A8 2B-2A4 2B-2A14	a	平安 土師器	無台碗	11.5	4.5	374	39.1	精	石・雲・チ・ 白		にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	3/36	17/36			取上No.74・75 底部外面黒書「羽咋」		
27	26	145		2B-2A11 2A-21 2A-210	ab c	平安 土師器	無台碗	12.5	5.5	320	44.0	精	石・長・雲・ チ・白		にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	25/36	36/36					
27	26	146		2B-2A 2B-2A11	a	平安 土師器	無台碗	12.1	5.6	314	46.3	普	石・長・雲・ チ・海		にぶい黄緑 (5YR6/4)	にぶい黄緑 (5YR6/4)	酸化	ロクロナデ ケスリ	ロクロナデ	糸切り	右	8/36	17/36					
27	26	147		2B-2A (3+6+11)	a	平安 土師器	無台碗	12.2	6.0	311	49.2	精	石・チ		灰白 (2.5Y8/2)	灰白 (2.5Y8/2)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	13/36	21/36			取上No.81・83		
27	26	148		2B-2A (4+13+14) 2B-2A (13+16) +2A-2119 2B-2A11	a a	平安 土師器	無台碗	12.1	4.6	322	38.0	普	石・長・雲・ 白・ミ・台の隅 含む		黄緑 (2.5YR6/6)	黄緑 (2.5YR6/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	23/36	27/36					
27	26	149		2A-2123+2B-2A17	a	平安 土師器	無台碗	12.0	5.4	325	45.0	普	石・長・雲・ チ・海		にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	17/36	36/36			灯明かとして使用か 内外面剥落多		
27	26	150		2B-2A (11+15)	a	平安 土師器	無台碗	11.8	6.0	331	50.8	精	石・長・雲・ チ・海		にぶい黄緑 (10YR7/4)	にぶい黄緑 (10YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	14/36	34/36			外面剥落多		
27	26	151		2B-2A4 2B-1A25+2A5	a	平安 土師器	無台碗	11.3	5.4	329	48.0	精	石・長・雲・ チ・白		にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	11/36	18/36			灯明かとして使用か		
27	26	152		2A-3H18+4H4 2A-3H20 2A-4H6	a a	平安 土師器	無台碗	5.0				精	石・長・雲・ 焼		にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	にぶい黄緑 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	30/36				底部外面へラ描き 「×」		
27	26	153		2A-311 2A-312 2A-316 2A-317 2A-317	a ab acd ac bc	平安 土師器	無台碗	19.0	8.0	6.1	321	42.1	精	長・雲・焼		にぶい黄緑 (10YR7/2)	にぶい黄緑 (10YR7/2)	酸化	ロクロナデ ロクロケスリ	ロクロナデ	ケスリ	右	12/36	14/36				
27	26	154		2B-1A17	a	平安 土師器	無台碗	17.5	6.4	6.3	360	36.6	普	石・長・雲・ チ・白・海		にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	16/36	36/36			取上No.30 底部外面黒書「-」 (墨点)	
27	26	155		2A-215	a	平安 土師器	無台碗	16.6	6.4	5.0	301	38.6	精	石・長・雲・ チ・白		にぶい黄緑 (7.5YR6/4)	にぶい黄緑 (7.5YR6/4)	酸化	ロクロナデ 下半ロクロケスリ →ロクロミガキ	ロクロナデ	ロクロミ ガキ	不明	2/6/36	36/36			取上No.135 底部外面黒書「羽咋」	
27	26	156		2B-2A10	a	平安 土師器	無台碗	17.7	6.2	5.7	322	35.0	精	長・チ・白・ 海		黄緑 (7.5YR7/6)	黄緑 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ ロクロケスリ ロクロミガキ	ロクロナデ	ロクロミ ガキ	右	4/36	7/36				
27	26	157		2A-3H19 2A-3H20 2A-3H24 2A-3116	ad c abe a	平安 土師器	無台碗	16.0	6.0	5.7	35.6	37.5	精	長・雲・焼		黄 (7.5YR4/6)	黄 (7.5YR4/6)	酸化	ロクロナデ 下半ロクロケスリ 全体黒縁に ロクロミガキ	ロクロナデ	ケスリ後 ロクロミ ガキ	不明	14/36	16/36				
27	26	158		2A-21 (15+20)	a	平安 土師器	無台碗	12.2	5.7	4.3	35.2	46.7	普	石・長・チ・ 白・海		黄緑 (2.5YR6/6)	黄緑 (2.5YR6/6)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	不明	3/36	36/36			内面剥落多	
27	26	159		試掘49T 2A-2119	a	平安 土師器	無台碗	16.4	6.4	4.9	29.9	39.0	普	石・長・白		にぶい黄緑 (10YR7/3)	にぶい黄緑 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	不明	8/36	36/36			取上No.20	
27	26	160		2A-3H19+31 (12+13)	a	平安 土師器	無台碗	15.4	6.4	5.3	34.4	41.6	普	石・長・チ・ 白		にぶい黄緑 (7.5YR6/4)	にぶい黄緑 (7.5YR6/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	18/36	36/36			取上No.122 内面黒色処理	
27	26	161		2A-312 2A-313 2A-313	a ab a	平安 土師器	無台碗	(15.4)	6.0	(5.4)	35.1	精	石・長・雲・ 白		にぶい黄緑 (10YR6/4)	にぶい黄緑 (10YR6/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	2/36	8/36			内面黒色処理 (一部 外面に及ぶ)		
27	26	162		2B-2A (6+7)	a	平安 土師器	無台碗	(14.0)	5.8	5.2	37.1	精	石・長・白・ 海		灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	不明	1/36	15/36			内面黒色処理 (一部 外面に及ぶ)		
27	26	163		2A-319	a	平安 土師器	無台碗	(16.5)				普	石・長・白		灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		2/36				内面黒色処理		
27	26	164		試掘49T 2B-2A11	a a	平安 土師器	無台碗	6.0				普	長・雲・チ・ 白・海		にぶい黄緑 (10YR6/3)	にぶい黄緑 (10YR6/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り後 ロクロミ ガキ	右		36/36			底部外面黒書「伊口 [継カ]」		

図版 No.	No.	報告 No.	運轉名	出土位置		接合 記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底径 指数	口径 指数	底径 指数	状態	胎土		産地	色調		焼成	調整・手法		回転 方向	遺存率 底部	附着物		備考
				連轉名	グリッド					口径	底径					器高	外		内	外		内	外			内	内面	
28	27	165		2A-4H (1+2+6)+3H (14+18+21+23)	Vc2	a	平安 土師器	長襲	20.2	31.3				普	石・長・雲・ 焼白		浅黄槽 (10YR8/3)	浅黄槽 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ カキメ タタキメ (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文)		26/36	18/36	スス	スス	取上No.12・13	
28	27	166		2A-4H (2+3+6)+3H19 2A-4H (2+6)+3H (21+22) 2A-4H2+3H (19+22+23) 2A-3H22	Vc1 Vc2 Vc1 Vc1~c2	a b c	平安 土師器	長襲	23.0	36.5				普	石・長・チ・ 白		にぶい槽 (7.5YR7/4)	にぶい槽 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文)		13/36		スス	スス	取上No.165・ 166・167・168・ 180・191・194・ 198・202・214	
28	27	167		2A-21 (10+23) 2A-21 (10+23) 2A-21 (10+23) 2B-2A (1+2+6+7+11)+3A1 2B-2A1	Vc2 Vc1 Vc2 Vc2	a a a b	平安 土師器	長襲	21.2					精	石・長・雲・ チ・白		にぶい黄槽 (10YR7/3)	にぶい黄槽 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ カキメ	ロクロナデ カキメ		19/36		スス	スス	168と同一個体か	
28	28	168		2A-2124 2A-21 (10+14+15+19)+3J4 2A-21 (19+23) 2B-2A (6+11)	Vc Vc2 Vc1 Vc2	a a a a	平安 土師器	長襲	20.8	33.1				精	長・チ・白		浅黄槽 (10YR8/3)	浅黄槽 (10YR8/3)	酸化	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文)		26/36	32/36	スス	スス	取上No.96・98・ 118・127	
29	28	170		2A-3H (19+20) 2A-3H (14+15+18+19)+3J4 2A-21 (14+24+25)+3H19 2B-2A (8+22)+3A2 2B-2A8 2A-21 (15+23) 2A-334 2A-2124	Vc2 Vc2 Vc1 Vc2 Vc1 Vc2 Vc2	a a a a b c	平安 土師器	長襲	20.0	(34.0)				普	長・チ・白		にぶい槽 (7.5YR7/4)	にぶい槽 (7.5YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ 当具裏 (無文) ハケメ		19/36		スス	スス	取上No.109・ 187・192・ 204・240	
29	29	171		試掘49T 2A-1J24+2J (10+14+15+25) 2A-21 (19+24) 2A-219 2B-2A (1+3+4+6+7+8+10+11+13 +16+17) 2B-2A (6+7+10+16) 2A-313 2A-318	X Vc2 Vc1 Vc Vc2 Vc1 Vc Vc	a a a a a b c	平安 土師器	長襲	20.0	34.5				普	長・雲・チ・ 焼白 4ミリ離れ心		にぶい黄槽 (10YR7/3)	にぶい黄槽 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文)		19/36	24/36	スス	スス	取上No.42・84・ 216	
29	30	172		2B-2A (7+11) 2B-2A11	Vc2 Vc1	a a	平安 土師器	長襲	18.6					普	石・長・雲・ 焼		にぶい黄槽 (10YR7/3)	にぶい黄槽 (7.5YR6/6)	酸化	ロクロナデ カキメ	ロクロナデ カキメ		9/36					
29	30	173		2A-3H11+2J (19+23) 2A-3H11+2J (19+23) 2A-219+2B-2A17 2B-2A (3+5+6+7+8+11+12+16 +17+18+25) 2B-2A (12+17+22)	Vc2 Vc1 Vc Vc2 Vc1	a a a a a	平安 土師器	長襲	21.0					普	石・長・チ・ 白		にぶい黄槽 (10YR7/4)	にぶい黄槽 (10YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ	ロクロナデ カキメ		23/36		スス	スス	取上No.70	
29	29	174		2A-21 (14+15+19+20) 2A-3H20+2J (15+19+20+24+25) 2B-2A (6+7+11) 2B-2A (7+11)	Vc2 Vc1 Vc2 Vc1	a a a a	平安 土師器	長襲	21.8					普	石・長・雲・ チ・白		にぶい黄槽 (10YR7/4)	にぶい黄槽 (10YR7/4)	酸化	ロクロナデ カキメ 当具裏 (正格 子交Ka) ケズリ ハケメ	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文)		26/36		スス	スス	取上No.203・ 150・157・149・ 144・142・143・ 145	
30	30	175		2B-1A24 2B-2A (3+4+5+9+10) 2B-2A (3+5) 2B-2A (9+10) 2B-2A8	Vc2 Vc1 Vc1 Vc2	a b c	平安 土師器	長襲	21.9					普	石・長・雲・ 焼白		浅黄槽 (10YR8/4)	浅黄槽 (7.5YR7/6)	酸化	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文)	ロクロナデ カキメ		10/36					
30	29	176		2A-31 (8+9) 2A-2119+2B-2A (5+12) 2A-339 2B-2A (5+7+9+12+13) 2B-2A (18+19) 2B-2A5 2B-2A12	Vc2 Vc1 Vc Vc1 V Vc1	a a a b c	平安 土師器	長襲	21.0					普	石・長・雲		にぶい黄槽 (10YR7/3)	にぶい黄槽 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ カキメ 当具裏 (平行 線文Hb)	ロクロナデ カキメ 当具裏 (成射 状文)		7/36		スス	スス		

図版 No.	報告 No.	通称名	出土位置		接合 記号	時代	類別	器種	法量 (cm)		底存 指数	底存 指数	胎土 含有物	産地	色調		焼成	調整・手法		回転 方向	遺存率 口縁部	附着物		備考	
			連綿名	グリッド					口径	底径					口径	底径		内面	外面			内面	外面		内面
30	30	177			a	平安 土師器	長襲						石・長・雲・ 子・焼・白 5ミリの礫含 心		にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	酸化 酸化	ロクロナデ カキメ カタキメ (平行 線文Ha)	ロクロナデ カキメ カタキメ (放射 状文) ハケメ			スス	スス		
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
30	30	178			a	平安 土師器	長襲						石・長・雲	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	酸化 酸化	カキメ カタキメ (長方 形格子文Ka)	ナデ 当真紙 (同心 内文)			スス	スス		取上No.217	
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
					g																				
					a																				
					b																				
					c																				
30	31	179			a	平安 土師器	小襲		13.3	7.0	12.5		長・雲・子・ 焼・白 5ミリの礫含 心	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	31/36	コゲ	スス	体部下端~底部に 有目あり	
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
30	31	180			a	平安 土師器	小襲		14.4	6.8	12.7		石・長・子・ 焼・白 5ミリの礫含 心	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	16/36	コゲ	スス	取上No.62 全体に表面剥落	
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
30	31	181			a	平安 土師器	小襲		14.0				石・長・雲・ 子・焼	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		10/36	コゲ	スス			
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
30	31	182			a	平安 土師器	小襲		12.2				石・長・雲・ 子・焼	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		10/36	コゲ	スス			
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	183			a	平安 土師器	小襲		14.1	5.0	11.6		石・長・雲	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	30/36	コゲ	スス		
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	184			a	平安 土師器	小襲		13.4	2.9	13.4		石・長・雲・ 焼・角	黄 (7.5YR7/6)	黄 (7.5YR7/6)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	15/36	コゲ	スス	取上No.30・213・ ②	
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	185			a	平安 土師器	小襲		11.2				石・長・雲・ 焼	淡黄 (7.5YR8/3)	淡黄 (7.5YR8/3)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		11/36	コゲ	スス			
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	186			a	平安 土師器	小襲		12.4				石・長・雲・ 焼	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		10/36	コゲ	スス			
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	187			a	平安 土師器	小襲		11.8	6.6	12.3		石・長・雲・ 焼・角	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	左	9/36	36/36	スス		
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	188			a	平安 土師器	小襲		14.5				石・長・雲・ 角	灰黄橙 (10YR6/2)	灰黄橙 (10YR6/2)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		22/36	コゲ	スス	取上No.216・②		
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	189			a	平安 土師器	小襲		13.3	7.0	12.4		石・長・子・ 焼・白 5ミリの礫含 心	浅黄橙 (5YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右カ	23/36	18/36	コゲ	スス	
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	190			a	平安 土師器	小襲		10.2				石・長・子・ 焼・白	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		11/36	コゲ	スス			
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	31	191			a	平安 土師器	小襲		9.1				石・雲・子・ 白	浅黄橙 (10YR7/3)	浅黄橙 (10YR7/3)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		6/36	コゲ	スス			
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	32	192			a	平安 土師器	小襲		13.6	7.0	13.5		石・長・雲・ 角	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	32/36	36/36	コゲ	取上No.218・219	
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				
31	32	193			a	平安 土師器	小襲		13.6	6.7	13.0		石・長・雲・ 子	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化 酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	26/36	24/36	コゲ	外表面剥落多	
					b																				
					c																				
					d																				
					e																				
					f																				



写真 図版 No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	器種	法量 (cm)			底存 指数	胎土 状態	色調		焼成	調整・手法		遺存率		付着物		備考
		遺構名	グリッド				口径	底径	器高			外面	内面		外面	内面	口縁部	底部	内面	外面	
34	34	214	2B-2A (6+7+11+16+18) 2A-2115+2B-2A11 2B-2A (7+11) 2B-2A (11+16) 2A-2124	a Vc2 b Vc2 c Vc1	平安 土師器	甕	25.5			粗	石・長・雲・ チ	にぶい・黄 (5YR7/4)	にぶい・黄 (5YR7/4)	口縁ヨコナデ 体部ハケム (タ テ)	口縁ハケム (ヨコ) 体部ナデ・指 頭庄痕	24/36				佐渡型甕	
34	34	215	2A-3H19 2A-3H (15+19)	a Vc2 b Vc1	平安 土師器	甕	22.8			粗	石・長・白・ 角	にぶい・黄褐 (10YR5/3)	にぶい・黄褐 (10YR5/3)	口縁ヨコナデ 体部ハケム (タ テ)	口縁ハケム (ヨコ) 体部ナデ・指 頭庄痕	4/36				佐渡型甕	
34	34	216	2A-2115 2B-2A11	ab Vc2 Vc1	平安 土師器	甕	16.2			粗	石・長・チ・ 白・角	にぶい・黄褐 (10YR7/2)	にぶい・黄褐 (10YR7/2)	口縁ヨコナデ 体部ハケム (タ テ)	口縁ハケム (ヨコ) 体部ナデ	4/36			コゲ	スス	佐渡型甕
34	34	217	2B-2A (6+7+11) 2A-21 (10+15)+2A (7+11+16) 2A-2120	a Vc2 b Vc2 c Vc1	平安 土師器	甕	20.0			普	石・長・練・ 白	にぶい・黄 (7.5YR6/4)	にぶい・黄 (7.5YR6/4)	口縁ハケム・ヨ コナデ 体部ハケム (タ テ)	口縁ハケム (ヨコ) 体部ナデ 体部ナデ	13/36			コゲ	スス	佐渡型甕
34	34	218	2B-2A (1+7)	Vc2	平安 土師器	甕	14.8			粗	石・長・白	にぶい・黄褐 (10YR5/3)	にぶい・黄褐 (10YR5/3)	口縁ヨコナデ 体部ハケム (タ テ)	口縁ハケム (ヨコ) 体部ナデ	3/36			コゲ	スス	佐渡型甕
34	34	219	2A-2123	Vc2	平安 土師器	甕	15.4			粗	石・長・白	にぶい・黄 (7.5YR6/6)	にぶい・黄 (7.5YR6/6)	口縁ヨコナデ・ 指頭庄痕 体部ハケム (タ テ)	口縁ハケム (ヨコ) 体部ナデ	8/36			コゲ	スス	佐渡型甕

別表 13 20 岡崎遺跡奈良時代以前土器観察表

凡例 1 出土位置 グリッド・層位欄の「+」記号は直接接合していることを示す。  
 2 接合記号 同じ記号が入っている場合は直接接合していることを示す。  
 3 法 量 ( ) 内の数字は底径が低く復元の信頼性が低いことを示す。  
 4 含 有 物 胎土中に含まれる鉱物・小礫等について記した。「石」は長石類、「長」は長石類、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「チ」はチャート、「練」は練土、「白」は白色炭灰岩、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。  
 5 色 色 調 「新版標準土色図」(小山・竹原1967)の記号を記した。  
 6 遺 存 率 分數表示で遺存割合を示した。

写真 図版 No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	器種	法量 (cm)			胎土 状態	色調		調整・手法		遺存率		付着物		備考			
		遺構名	グリッド				口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面	口縁部	底部	内面	外面				
157	152	1	2B-2A11	V1b	飛鳥 土師器	甕	15.0			粗	石・長・雲・海	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	ヨコナデ ハケム	ヨコナデ ハケム	7/36				取上No.253		
157	152	2	2B-2A11	V1b	飛鳥 土師器	甕	14.6	4.6	17.7	粗	石・長・雲・海	浅黄褐 (10YR8/3)	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	ヨコナデ ハケム	ヨコナデ ハケム	11/36	36/36		コゲ		取上No.253	
157	152	3	2B-2B11	Vc	古墳 黒色土器	杯か高杯	19.0			普	石・長・チ・白・海	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	ヨコナデ	ヨコナデ						赤彩	
157	152	4	2A-3H18 2A-3H1 2A-3H2 2A-3I2 2A-3I6	Vc2 a Vc1 b Vc2 c Vc1	古墳 土師器	器台	11.8			精	石・雲	にぶい・黄褐 (5YR5/3)	にぶい・黄褐 (10YR5/3)	ミガキ	ミガキ	7/36						
157	152	5	2B-2B6	Vc2	古墳 土師器	甕				普	石・雲・角	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	ハケム ナデ	ハケム ナデ							
157	152	6	2B-2A (4+11) 2B-2A23 2A-213	Vc2 a Vc1 b Vc2 c	古墳 土師器	甕	21.0			普	石・長・雲・角	にぶい・黄褐 (10YR7/4)	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	ミガキ ハケム	ミガキ	6/36					類に焼成前穿孔2か 所以上	
157	152	7	2A-2125	V1b	古墳 土師器	甕		2.5		普	石・長・雲・白	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	灰白 (10YR7/1)	ナデ	ナデ	36/36					取上No.237	
157	152	8	2A-4G12	V1b	古墳 土師器	甕	19.0			普	石・長・白・角	灰黄褐 (10YR5/2)	褐灰 (10YR6/1)	ハケム ヨコナデ	ハケム ヨコナデ	10/36		コゲ	スス		取上No.243	
157	152	9	2A-2110 2A-2110 2B-2A9 2B-2A9 2B-2A10 2B-2A14 2B-2A15 2A-2120 2B-2A14 2A-2110	V1c ac Vc b Vc d Vc e Vc f Vc g h	古墳 土師器	甕	19.4			普	石・長・雲・角	にぶい・黄褐 (10YR7/3)	にぶい・黄褐 (10YR7/2)	ナデ ハケム	ナデ ハケム	6/36			コゲ			



図版 No.	写真 No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	種別	器種	法量 (cm)		胎土 状態	色調		調整・手法		遺存率		付着物		備考	
			連綿名	グリッド					口径	底径		器高	含有物	外面	内面	外面	内面	口縁部	底部		外面
157	152	10		2B-2A9	Vc	古墳?	土師器	甕	5.2		普	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	ナデ ハケム	36/36	コゲ						
157	152	11		2A-3I19	Vc1	古墳?	土師器	台付甕	6.0		普	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ナデ ハケム ナデ ハケム 指頭瓦葺	25/36	コゲ						
157	152	12		2A-2I10 2B-2A11	Vb Vc2	弥生	弥生土器	甕	17.3		普	にぶい黄褐色 (10YR5/2)	ハケム ナデ	21/36	コゲ					取上No.251・252	
157	153	13		2B-2A (3+8+9) 2B-2A10	Vb Vc	弥生	弥生土器	甕	16.1		普	浅黄褐色 (10YR8/3)	ナデ ハケム ナデ ハケム 平行沈線文	30/36	コゲ						
158	153	14		2B-2A10	Vc	弥生	弥生土器	甕	17.0		普	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	ナデ ハケム ナデ ハケム ヨコナデ ヨコナデ ハケム	3/36							
158	153	15		2B-2A (3+8+20) 2B-2A14	Vb Vc	弥生	弥生土器	甕	20.0		普	灰白 (10YR8/2)	ヨコナデ ヨコナデ ハケム	5/36						取上No.253 口縁部：クロスする刻みあり	
158	153	16		2B-2A17 2B-2A11	Vb Vc	弥生	弥生土器	甕	18.0		普	灰黄褐色 (10YR6/2)	ヨコナデ ナデ タテハケ	4/36							
158	153	17		2B-2A9	Vc	弥生	弥生土器	甕	(19.0)		普	明褐 (7.5YR5/4)	ナデ	2/36						口縁内面：クロスする刻みあり	
158	153	18		2A-2I20	Vc1	弥生	弥生土器	甕			粗	灰白 (10YR8/2)	ナデ	2/36						小松式弥生中期後半	
158	153	19		2B-2A3 2B-2A8 2B-2A9 2B-2A14 2B-2A9 2B-2A12	Vb Vc Vc Vc Vc Vc	弥生	弥生土器	甕			普	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	細線文 (波状・平行・列点) 平行線 三角形細突 ハケム								
158	153	20		2B-1A23 2B-2A10 2B-2A12 2B-2A8	Vb Vc Vc Vc	弥生	弥生土器	甕			粗	暗灰黄 (2.5Y5/2)	細線文 (波状・平行・列点) ハケム								
158	153	21		2B-2A8	Vc	弥生	弥生土器	甕			普	灰白 (10YR8/2)	細線文 (波状・平行・列点) ナデ								
158	153	22		2B-2A (3+9)	Vc	弥生	弥生土器	甕	19.0		普	灰白 (10YR8/2)	ヨコナデ ヨコナデ ハケム	4/36						炭化物(少量)	
158	153	23	SK39	2A-3I17	I	縄文	縄文土器	鉢			白	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	細文LR								
158	153	24	SK39	2A-3I17 2A-3I16	I Vc	縄文	縄文土器	深鉢			白	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	細文LR								
159	153	25	SK39	2A-3I16 2A-3I17 2A-3I19	I 1+2 Vc	縄文	縄文土器	深鉢	17.7	10.0	石・白	灰褐 (5YR5/2)	半跡起線文 細文RL	12/36	9/36	炭化物				中期前葉か	
158	153	26		2B-2A (9+10)	Vc	弥生	弥生土器	深鉢	23.0		石・白	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	変形工字文	2/36							弥生前期
158	153	27		2B-2A11	Vb	弥生	弥生土器	深鉢			白	黒褐 (10YR3/1)	変形工字文 細文LR								弥生前期か
158	153	28		2A-3G23	Vc	縄文	縄文土器	鉢	11.8		白・角	灰黄褐色 (10YR4/2)	羊歯状文 細文LR	3/36							炭化物あり
158	153	29		2A-4H2	Vc	縄文	縄文土器	鉢			白	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	羊歯状文 細文LR								炭化物あり
158	153	30		2A-4H7	Vc	縄文	縄文土器	鉢			石・白	灰白 (10YR8/2)	羊歯状文								
158	153	31		2A-4H7	Vc	縄文	縄文土器	鉢			石・白	灰白 (10YR8/2)	羊歯状文								
158	153	32		2A-4G3	Vc	縄文	縄文土器	甕	8.7		白	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	細文LR								炭化物あり
158	153	33		2A-4H2	Vc	縄文	縄文土器 (筒型土器)	深鉢			石・白	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	細文LR								炭化物あり
158	153	34		2A-4G10	Vc	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	橙 (5YR7/6)	結節細文 懸糸文R								
158	153	35		2A-4G9	Vc	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	結節細文LR								炭化物あり
158	153	36		2A-3H12	Vc	縄文	縄文土器	深鉢			白	黒褐 (10YR3/1)	結節細文LR?								炭化物あり
158	153	37		2A-3H24	Vc+Vc	縄文	縄文土器	深鉢	31.8		雲・白	にぶい橙 (7.5YR6/4)	細目状懸糸文R	5/36							炭化物あり
158	153	38		2A-3I6	Vc	縄文	縄文土器	深鉢	36.0		石・白	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	細目状懸糸文R	3/36							炭化物あり
158	153	39		2A-3H24	Vc	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	細文LR 沈線文								後期後葉
158	153	40		2A-3H19	Vc	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	橙 (5YR6/6)	沈線文 刺突文								後期前葉
158	153	41		2A-4H2	Vc2	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	灰白 (7.5YR8/2)	結節								後期前葉 (三十稲場)
159	153	42		2A-4G9	Vc	縄文	縄文土器	深鉢			石・角	灰白 (10YR8/2)	細文LR 沈線文								中期
159	153	43		2A-3H16	Vc	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	赤褐 (5YR4/6)	沈線文 沈線文								中期
159	153	44		2A-4H6	Vc	縄文	縄文土器	深鉢	8.4		白	明褐 (7.5YR5/6)	沈線文 細文LR								中期後葉
159	153	45		2B-2A9 2B-2A9 2B-2A8	Vc Vc1 Vc2	縄文	縄文土器	深鉢			白	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	細文LR 沈線文								中期中葉 (大木8b)

写真 No.	図版 No.	報告 No.	出土位置		接合 記号	時代	種別	器種	量測 (cm)		胎土		色測			調整・手法			遺存率		付着物		備考
			連綿名	グリッド					層位	口径	底径	器高	状態	含有物	外面	内面	外面	内面	外面	内面	口径部	底部	
159 153	46		2B-2A16		VII	縄文	縄文土器	鉢	30.0		白・海	胎(5YR6/6)	半磨起線 磨起線 縄文LR			2/36							中期前葉
159 154	47		2B-2A17		VII	縄文	縄文土器	深鉢			石・雲・白	にぶい黄 (7.5YR6/4)	半磨起線										中期前葉
159 154	48		2A-4G8		Vic	縄文	縄文土器	深鉢			雲・白	にぶい黄 (5YR5/6)	半磨起線										中期前葉
159 154	49		2A-4G13		VII	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	にぶい黄 (10YR6/3)	磨起線										中期前葉
159 154	50		2A-4G13		VII	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	にぶい黄 (10YR7/3)	磨起線										中期前葉
159 154	51		2A-3H23		Vic	縄文	縄文土器	深鉢			石・白	胎(5YR6/6)	磨起線										中期前葉
159 154	52		2A-4G9		Vic	縄文	縄文土器	深鉢	(15.0)		石・白	到灰 (10YR4/1)	磨起線								4/36		炭化物

別表 14 20 岡崎遺跡土製品観察表

写真 No.	図版 No.	報告 No.	出土位置		層位	器種	分類	量測 (mm)			胎土	重量 (g)	長×幅	色測	調整等
			連綿名	グリッド				口径/長	底径/幅	器高/厚					
159 154	1		2A-3H15		Vc1	管状土鉢	細型A1	41.2	6.4	3.0	6.4	1.3	砂粒多	灰白 (2.5Y8/2)	
159 154	2		2A-2I15		Vc2	管状土鉢	細型A1	42.6	7.1	1.8	6.0	2.2	精良	灰白 (2.5Y8/2)	
159 154	3		2A-3H15		Vc1	管状土鉢	細型A1	47.8	9.0	3.3	5.3	2.9	精良	灰黄 (2.5Y7/2)	
159 154	4		2A-3H20		Vc2	管状土鉢	細型A1	52.0	9.0	2.8	5.8	3.2	精良	にぶい黄 (10YR7/2)	
159 154	5		2A-3H20		Vc2	管状土鉢	細型A1	52.1	9.2	4.0	5.7	3.3	精良	灰黄 (2.5Y7/2)	
159 154	6		2A-4H4		Vc1	管状土鉢	細型A1	(38.7)	8.4	3.1	(4.6)	2.0	赤色を含む	にぶい黄 (10YR7/2)	上部部欠損
159 154	7		2A-2I15		Vc2	管状土鉢	細型A1	42.0	8.9	3.0	4.7	2.1	精良	にぶい黄 (10YR7/3)	
159 154	8		2B-2A9		Vc2	管状土鉢	細型A1	43.8	9.1	3.0	4.8	2.7	精良	灰黄 (2.5Y7/2)	指紋残る
159 154	9		2B-2A7		Vc2	管状土鉢	細型A1	44.6	8.6	3.0	5.2	2.5	精良	灰黄 (2.5Y7/2)	
159 154	10		2B-2A6		Vc2	管状土鉢	細型A1	47.9	10.0	2.8~3.4	4.8	3.6	大粒の砂粒も含む	淡黄 (2.5Y8/3)	
159 154	11		2A-2I15		Vc2	管状土鉢	細型A1	48.1	9.7	2.9	5.0	3.2	微細砂粒含む	黄 (5YR6/6)	
159 154	12		2A-3H23		Vc2	管状土鉢	細型A1	48.9	9.3	2.7	5.3	3.2	精良	灰黄 (2.5Y7/2)	
159 154	13		2A-2I20		Vc1	管状土鉢	細型A1	49.1	10.1	2.5	4.9	3.5	砂粒多く含む	明赤褐 (2.5YR5/6)	
159 154	14		2B-2A7		Vc2	管状土鉢	細型A1	34.8	8.4	2.8	4.1	1.7	大粒の砂粒も含む	にぶい黄 (10YR7/3)	
159 154	15		2A-2I20		Vc2	管状土鉢	細型A1	35.9	8.8	3.0	4.1	1.8	赤色を含む	灰白 (2.5Y8/2)	
159 154	16		2A-2I10		Vc2	管状土鉢	細型A2	38.7	10.0	2.4~3.0	3.9	2.7	精良	にぶい黄 (10YR6/3)	
159 154	17		2B-2A6		Vc2	管状土鉢	細型A1	41.9	9.8	2.9	4.3	3.3	白色微細砂粒含む	にぶい黄 (10YR7/2)	両端つぶれ
159 154	18		2B-2A6		Vc2	管状土鉢	細型A2	29.4	8.3	2.4~3.0	4.2	3.0	砂粒多く含む	灰黄 (2.5Y7/2)	
159 154	19		2A-3H22		Vc2	管状土鉢	細型A2	29.4	8.3	2.7	3.5	1.5	精良	黄 (2.5YR6/6)	
159 154	20		2A-2I23		Vc2	管状土鉢	細型A2	32.2	8.5	3.1	3.8	1.9	砂粒多く含む	灰黄 (2.5Y7/2)	
159 154	21		2B-2A11		Vc2	管状土鉢	細型A2	34.5	9.3	3.5	3.7	2.1	精良	灰黄褐 (10YR6/2)	指紋残る
159 154	22		2A-2I15		Vc2	管状土鉢	細型A2	35.6	9.5	2.5~3.1	3.7	2.0	精良	灰黄 (2.5Y6/2)	
159 154	23		2B-2A6		Vc2	管状土鉢	細型A2	40.2	10.9	2.6~3.2	3.7	3.2	砂粒多く含む	黄灰 (2.5Y6/1)	上端つぶれ 粘上の継ぎ目残る
159 154	24		2B-2A5		Vc2	管状土鉢	細型A2	46.7	11.9	4.0	3.9	4.8	灰黄 (2.5Y8/2)	両端つぶれ	
159 154	25		2B-2A11		Vc2	管状土鉢	細型A2	30.4	9.8	(2.9)	3.1	2.1	微細砂粒含む	暗灰黄 (2.5Y5/2)	
159 154	26		2B-2A7		Vc2	管状土鉢	細型A2	38.7	11.3	3.2~3.9	3.4	3.1	微細砂粒含む	灰黄 (2.5Y7/2)	
159 154	27		2A-3I7		Vc2	管状土鉢	細型A2	39.7	12.1	2.7	3.3	5.0	砂粒多く含む	灰白 (2.5Y8/2)	
159 154	28		2B-2A18		Vc2	管状土鉢	細型B	47.7	14.4	4.3	3.3	7.5	砂粒多く含む	灰白 (2.5Y8/2)	正円でなく一部くぼむ植物に巻き付け
159 154	29		2B-2A7		Vc2	管状土鉢	細型B	35.6	14.4	4.0	2.5	5.7	大粒の砂粒も含む	にぶい黄 (7.5YR6/4)	
159 154	30		2A-3H5		V	管状土鉢		67.3	52.5	15.9~17.1	1.3	165.2	砂粒多く含む	にぶい黄 (10YR7/2)	端部以外の表面は多面体を呈す
159 154	31		2B-2A8・13		Vc1	可撤式カマド		290.0					白色を主体とする砂粒を多く含む	外：灰黄 (10YR6/2) 内：口縁ハケメ 灰黄 (10YR6/3)	指面旺盛 体部内面に粘土細継ぎ目顕著

別表 15 20 岡崎遺跡石器・石製品観察表

## 石鏃

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	遺存状態	側縁形態 (正面観)	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
161	133・154	1	2B-2A8	VII	B	50.8	13.9	7.7	3.6	流紋岩	完形	直線	
161	133・154	2	2A-3I18	Vc2	C2	28.5	13.5	6.6	1.6	半透明頁岩	完形	直線・外湾	

## 石鏃未成品

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	素材	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
161	133・154	3	2B-2A14	Vtc	A	36.3	17.9	10.4	5.8	流紋岩	横長	中茎部厚く製作断念か
161	133・154	4	2B-2A10	Vc2	A	22.6	31.0	7.6	4.3	流紋岩	横長	片側縁厚く製作断念か

## 削器

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	素材	二次調整部位	遺存状態	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
161	154	5	2A-4G9	Vtc	A	38.5	27.0	15.7	12.5	珪質頁岩	縦長	正面右側縁	完形	切断あり
161	154	6	2B-1A22	Vc2	D	75.8	58.7	18.5	80.2	頁岩	横長	正裏面両側縁	完形	上下に切断あり
161	154	7	2B-2A10	VII	E1	63.0	39.7	14.3	25.4	流紋岩	縦長	—	完形	正面右側縁に微細剥離あり

## 両極剥離痕のある石器

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	自然面	素材	状態	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
161	154	8	2B-2A13	Vc2	A	26.5	31.7	10.9	6.3	頁岩	無	剥片	剥片状	
161	154	9	2A-4G8	Vtc	B	34.4	27.4	9.6	8.7	メノウ	有	礫	剥片状	

## 磨製石斧

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	刃部平面形	刃部断面形	遺存状態	基端敲打	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)						
161	154	10	2A-4G9	Vtc	(44.9)	(38.5)	(19.5)	(33.5)	透閃石岩	—	—	基部破片	有	基端敲打著しい	

## 砥石

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	砥面部位	砥面の作	遺存状態	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)					
161	155	11	2B-2A15	Vc2	A	258.5	125.9	52.1	1612.0	砂岩	正・片側面	有	略完形	敲打・成形による剥離著しい、古代の所産
161	155	12	2A-2J15	Vc2	B2	(68.1)	40.3	22.9	(61.3)	凝灰岩	正裏・両側面	—	1/2欠	溝は刃物縁に鋭く狭い
162	155	13	2B-2A9	Vc2	B2	85.6	45.2	38.3	173.9	凝灰岩	正裏・両側・下面	—	完形	刃物縁に鋭く狭く短い擦痕あり
162	155	14	2B-2A15	Vc2	B2	(71.7)	(45.5)	(35.6)	(112.4)	凝灰岩	正面	—	破片	
162	155	15	2A-3J4	Vc2	B2	(53.3)	32.9	26.1	(36.5)	凝灰岩	正裏・片側・下面	—	破片	裏面・下面は破損後に使用
162	155	16	2A-3I14	Ib	B2	34.5	31.5	32.2	67.7	凝灰岩	正裏・両側・上面	有	破片	上面に線状の擦痕あり

## 石核

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	素材	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
162	155	17	2A-2J10	Vc1	A	66.3	38.9	24.2	37.2	頁岩	剥片	
162	155	18	2B-2A5	Vc2	C	80.4	71.8	30.9	128.2	流紋岩	剥片	
162	155	19	2B-2B7	Vc1	D	94.4	62.9	43.0	191.1	流紋岩	垂角礫	

## 軽石製品

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	遺存状態	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
162	155	20	2A-3J4	Vc2	A	109.2	77.6	54.2	(120.3)	軽石	一部欠	正裏面が使用により平面状
162	155	21	2B-2A10	Vc	A	(54.5)	35.4	12.5	(9.9)	軽石	一部欠	正裏面が使用または加工により平面状
163	155	22	2A-4G25	Vtc	B	214.2	136.5	71.8	973.9	軽石	完形	扁平気味の楕円球状を呈す

## 権状錘

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	遺存状態	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
163	133・156	23	2B-2A2	Vc1	(62.0)	45.4	(25.9)	(42.7)	凝灰岩	裏面一部欠	全体形は巾着形	
163	133・156	24	2B-2B6	Vc2	(52.9)	37.2	20.8	(36.2)	凝灰岩	頂部一部欠	全体形は截頭錘形	

## 鉈尾

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		分類	大きさ				石材	遺存状態	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
163	133・156	25	2A-2J19	Vc1	51.2	34.3	5.9	22.8	粘板岩	完形	全面研磨、裏面を除き光沢を帯びている、側面と裏面の境は幅1~1.5mmほどの面取り、裏面に3か所の潜り孔あり	

## 玉作資料

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	器種名	出土地点		分類	大きさ				石材	玉作工程	備考
				グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
163	133・156	26	勾玉	2A-3I14	II	22.1	19.8	16.4	12.1	ヒスイ	第2工程		
163	133・156	27	勾玉	2A-3I12	Vc2	22.4	11.4	11.5	3.8	ヒスイ	第3工程		
163	133・156	28	勾玉	2B-2A9	VII	27.4	21.4	12.0	11.8	ヒスイ	第3工程		
163	133・156	29	勾玉	2B-2A8	Vc2	29.7	19.3	12.1	6.7	ヒスイ	第3工程		
163	133・156	30	勾玉	2B-2A12	Vc2	24.3	17.0	13.6	6.0	ヒスイ	第3工程		
163	133・156	31	勾玉	2B-2A24	Vtc	19.5	11.9	7.6	2.3	ヒスイ	第5工程		
164	133・156	32	管玉	2A-3I13	Vc2	46.6	30.5	20.8	25.6	緑色凝灰岩	第2工程		
164	133・156	33	管玉	2B-2A14	VIIb	35.3	25.9	19.1	12.4	緑色凝灰岩	第2工程		
164	133・156	34	管玉	2B-2A11	Vc2	25.7	15.6	7.6	2.2	緑色凝灰岩	第3工程		
164	133・156	35	管玉	2A-2J15	Vc2	26.4	13.8	11.2	4.2	緑色凝灰岩	第4工程		
164	133・156	36	管玉	2A-3H14	Vc1	24.5	16.9	12.2	4.1	緑色凝灰岩	第4工程		
164	133・156	37	石鏃	2B-2A19	Vc1	23.3	42.8	6.0	4.7	流紋岩	—	刃部の一部摩耗	
164	133・156	38	石鏃	2B-2A18	Vc1	22.4	16.4	3.6	1.5	流紋岩	—	刃部の一部摩耗	

別表 16 20 岡崎遺跡鍛冶関連遺物観察表

写真図版 No.	報告 No.	種別	出土地点		大きさ				マグネット式吸着器反応	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
156	1	鉄滓	2B-2A8	Ve2	66.8	39.8	27.0	50.1	有	楕形滓
156	2	鉄滓	2B-2A7	Vc1	33.7	25.5	20.0	13.5	有	楕形滓
156	3	鉄滓	2B-2A7	Vc1	34.1	19.6	16.3	13.9	有	楕形滓
156	4	鉄滓	2B-2A11	Ve2	33.0	25.6	18.4	11.8	無	
156	5	鉄滓	2A-2J20	Vc2	37.2	20.0	18.9	4.8	無	
156	6	鉄滓	2A-2J20	Vc2	20.2	15.7	11.2	2.7	無	

別表 17 21 岡崎遺跡遺構計測表

図版 No.	写真図版 No.	確認層位	遺構名	グリッド	時期	主軸方向	規模 (m)			底面標高 (m)	形態		覆土分層	堆積状況	遺物図版No.		遺物	備考
							長軸	短軸	深さ		平面	断面			図面	写真		
165	158	VII	SK 2	2B-2D14	不明	N-30°-W	1.48	(0.66)	0.48	(0.84)	楕円形	皿状	1	単層				
165	158	Via	P 3	2D-1D17・22	平安	N-30°-W	0.48	0.36	0.12	(1.14)	楕円形	半円状	1	単層			土師器	
165	158	Via	SX 1	2B-1D22・23、2D2・3	平安	N-30°-W	1.80	(1.44)	0.47	(0.95)	不整形	皿状	2	レンス状	166	159	土師器 (2)、須恵器 (1)	
165		IV	NR 4	1B-10C、2B-1C	-	(N-47°-W)	(13.08)	(3.00)	0.46	(0.80)	(帯状)	皿状	2	斜位			IV・V層を切るかたちで検出、規模は現存値長軸・短軸、深さは確認面から	

別表 18 21 岡崎遺跡土器観察表

- 凡例
- 1 接合記号 同じ文字が記されている場合は直接接合していることを示す。
  - 2 法 量 ( ) 付きの数値は遺存率が低く復元の信頼性が低いことを示す。
  - 3 含有物 胎土中に含まれる鉱物・小礫等について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、「雲」は金雲母あるいは黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「白」は白色凝灰岩、「角」は角閃石、「海」は海綿骨針を表す。
  - 4 色 調 『新版標準土色帳』(小山・竹原1967)の記号を記した。
  - 5 産 地 須恵器胎土分類を記載した。
  - 6 焼 成 古代土器で最終的に還元されているもの(青灰色・灰色・白色を呈する)を還元とした。
  - 7 遺 存 率 分数表示で遺存割合を示した。

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	遺構名	グリッド	層位	接合記号	時代	種別	器種	法量 (cm)				胎土		色調		焼成	調整・手法			遺存率		付着物		備考
										口径	底径	器高	状態	含有物	産地	外面	内面		外面	内面	底部	口縁部	底部	内面	外面	
166	159	1	SX1	2B-2D2	I		平安	須恵器	無台杯	12.7			精		B	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ		6/36				
166	159	2	SX1	2B-1D22	2		平安	土師器	鍋	(43.4)			精	石・雲・チ・白・角		にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ	ハケメ	2/36		コゲ		
166	159	3		2B-2D3	VI		平安	須恵器	杯蓋	14.0			精		B	灰 (N51)	灰 (N51)	還元	ロクロナデ	ロクロナデ		5/36				
166	159	4		2B-1D23	Vc		平安	土師器	無台碗	17.1			普	石・長・雲・白・角		浅黄 (2.5Y7/3)	にぶい橙 (2.5YR6/4)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		4/36				
166	159	5		2B-1D22	VI	a	平安	土師器	長囊	19.6			粗	石・長・角・海		黒褐 (2.5Y3/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	酸化	ロクロナデ	ロクロナデ		9/36	コゲ	スス		
166	159	6		2B-2E21	Vc		弥生	弥生土器	甕?	(20.0)				石・長・白		にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)				ハケメ	2/36	コゲ			
166	159	7		2B-2D3	VI		弥生?	弥生土器?	壺?		5.5			石・白		灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)				条痕文		36/36			
166	159	8		2B-2D3	VII		縄文	縄文土器	壺					石・白		灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)				縄文RL			スス		
166	159	9		2B-2D8	VII		縄文	縄文土器	浅鉢					白		にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)				磨消縄文LR			樹脂?	スス	

別表 19 21 岡崎遺跡石器・石製品観察表

石鏃

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		形状	大きさ				石材	遺存状態	側縁形状 (正面観)	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
166	159	1	不明	Vc	凹基有茎鏃	(21.6)	(15.1)	4.8	(1.2)	流紋岩	先端・中茎欠	内湾	

両極剥離痕のある石器

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		形状	大きさ				石材	自然面	素材	備考
			グリッド	層位		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
166	159	2	2D-1D23	-	2個1対の刃部	26.2	18.1	7.4	4.5	黒色頁岩	有	礫	小型剥片石器の素材か

剥片

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土地点		大きさ				石材	備考
			グリッド	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
166	159	3	2B-2D	VII	16.2	21.2	6.4	1.9	珪質頁岩	
166	159	4	2B-2D	VII	18.2	21.0	4.0	1.4	半透明頁岩	関川村獅子舞岩産と推定される

# 報告書抄録

ふりがな	どうしょういせき だいに・さん・よじちようさ おかざきいせき だいよん・ごじちようさ							
書名	道正遺跡 第2・3・4次調査 岡崎遺跡 第4・5次調査							
副書名	－ 主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う道正遺跡第2・3・4次、岡崎遺跡第3・4次発掘調査報告書－							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	奈良佳子・相田泰臣・八藤後智人・山崎一貴・遠藤恭雄・植田尚子・高橋保雄（新潟市文化財センター）、金内 元・櫻井和哉（株式会社ノガミ）、相澤 央（帝京大学文学部）、筑前滉太（新潟脳外科病院）、矢吹周平（大宮中央総合病院）、澤田純明・佐伯史子・奈良貴史（新潟医療福祉大学）、株式会社加速器分析研究所、株式会社古環境研究所							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟県新潟市西区木場 2748 番地 1 TEL 025-378-0480							
発行年月日	西暦 2024 年 3 月 19 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうしょう 道正遺跡	にいがたけん新潟市 江南区割野字道正 2868 番地ほか	15104	795	37° 50' 55" (第3次)	139° 05' 19" (第3次)	20190601～ 20200325 (第2次) 20200407～ 20201211 (第3次) 20210401～ 20210625 (第4次)	2,757 (第2次) 4,313 (第3次) 750 (第4次)	主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う本発掘調査
おかざき 岡崎遺跡	にいがたけん新潟市 江南区割野字岡崎 3875 番地ほか	15104	794	37° 50' 54" (第4次)	139° 05' 10" (第4次)	20200602～ 20201211 (第4次) 20211206～ 20211228 (第5次)	1,776 (第4次) 165 (第5次)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
道正遺跡	集落	縄文時代 晩期	土坑 10 基、土器埋設遺構 5 基		縄文土器、石器・石製品（剥片石器・礫石器・礫核石器・玉類）		県内最大級のヒスイ製勾玉、根付状垂玉	
	集落	古墳時代 前期	竪穴建物 2 棟、土坑 38 基、溝 13 条、柱穴・ピット 59 基、その他の遺構 3 基		土師器、木製品（柱根）		準構造船の線刻土器、大型竪穴建物 2 棟	
	集落	平安時代	掘立柱建物 9 棟、井戸 1 基、土坑 18 基、溝 12 条、柵 2 列、柱穴・ピット 298 基、その他の遺構 1 基		須恵器、土師器、灰釉陶器、石器・石製品（砥石）、木製品（柱根・板材）		床束を伴う総柱建物 6 棟	
岡崎遺跡	散布地	縄文時代	土坑 3 基、ピット 1 基		縄文土器、石器			
	散布地	弥生時代、 古墳時代	なし		弥生土器、土師器、玉類製作工程品		小規模な玉類製作	
	集落	平安時代	土坑 2 基、溝 2 条、柵 1 列、ピット 39 基、その他の遺構 2 基		須恵器、土師器、石製品（権状錘・鉈尾）、可搬式カマド		「羽咋」の墨書土器、佐渡小泊産須恵器多数	
要約	<p>道正遺跡・岡崎遺跡は間に河川または潟湖による低地を介在するものの、東西に約 100m の近さで存在する。亀田砂丘前列の新砂丘 1-2 の砂丘上に立地し、遺構検出面は 0.5～1.5m 前後で越後平野の沈降により、埋没した遺跡である。調査は主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴い、道正遺跡は令和元（2019）～3 年、岡崎遺跡は令和 2・3 年に実施した。調査面積は道正遺跡が 7,820m<sup>2</sup> で、岡崎遺跡が 1,941m<sup>2</sup> である。調査の結果、道正遺跡では縄文時代晩期、古墳時代前期、平安時代の遺構・遺物を、岡崎遺跡では縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺構・遺物を検出した。平安時代は両遺跡の一体性が見られた。須恵器は佐渡小泊産で占められ、土師器の佐渡型甕が多く出土している。道正遺跡では高床と推定される総柱建物が多数検出され、岡崎遺跡では権状錘や石製腰帯具の鉈尾、能登との関連を示す「羽咋」の墨書がまとまって出土した。遺構・遺物から物流・交易の拠点・中継地と推定される。道正遺跡の古墳時代前期では時期の連続する大型竪穴建物を検出した。また、大量の土器の中には準構造船が 2 艘描かれた壺や多様な外来系土器が多数認められ、日本海側の古墳時代前期の古墳分布圏の北限域での準構造船による海上交通が明らかとなった。遺構・遺物からラグーン（潟湖）で営まれた港湾性集落と推定され、活発な経済活動が行われたと考えられる。縄文時代の道正遺跡の遺構は少ないものの、晩期中葉の土器のまとまり、搬入石材の多さ、ヒスイ製玉類や石棒・石剣類から交流・交易を行っていた晩期中葉の集落の存在が想定される。</p>							

道正遺跡 第2・3・4次調査  
岡崎遺跡 第4・5次調査

－ 主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事業に伴う  
道正遺跡第2・3・4次、岡崎遺跡第3・4次発掘調査報告書 －

本文編

2024年3月18日印刷  
2024年3月19日発行

編集 新潟市文化財センター  
〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1  
TEL 025(378)0480

発行 新潟市教育委員会  
〒951-8554 新潟市中央区古町通7番町1010番地  
古町ルフル4階  
TEL 025(228)1000

印刷・製本 富士印刷株式会社  
〒950-1233 新潟市南区保坂字岡下353番地1  
TEL 025(372)3115